收容書目

日本經濟叢書

卷十七

日本經濟叢書刊行會

日本經濟叢書卷十七目次

目次終

解題

爲貧說

本書は士君子たる者は、平生志を高尚にし、貧富を以て、其の心を動す可からざることを論じ、山田靜齋の序文に曰へる如く、「以爲天立心、爲民立道、講學修德、成己成物爲務、俛焉日有孳々、斃而後已、至若貧富窮達、則其視之蔑如」と云ふの主意を漢の董仲舒以下諸大儒の所說を引證して、詳に說明したるものにして、其の說、固より經濟の學理に背馳するの甚しきものなれども、斯くの如き思想は、偏狹なる朱子學派中に、一般に行はれたる最も有力の學說にして、本書は實に此の學說を鼓吹する代表的の著作なり、依つて參考の爲め、茲に之を收載せり

著者天木時中は、通稱善六と云ふ、尾張の人なり、(一說には唐津の人)幼にし

て讀書を好み、夙に闇齋學派三傑の一人なる三宅重固の門（崎門學派系譜に據る、然れども他書には佐藤直方門とせり）に入つて儒學を修め、後ち勢州增山侯に仕へ、居ること五年、遂に辭して京師に至り、帷を下して生徒に教授し、元文元年、年四十（崎門學派系譜には四十一とす）にして歿す、時中人と爲り、朴實にして浮華を嫌ひ、剛直にして節義を重んじ、其の人に接する、親切溫厚にして誠を盡し、其の學に於ける、精勤倦まず、殆ど寢食を忘るゝに至れりといふ、著者の學問に忠實なるは、本書を一讀する者の必首肯する所ならん

本書は享保十三年に成れるものなれども、其の後五十餘年を經、天明三年に至り、始めて山田靜齋の序文を附して、之を出板したるものなり、亦頗る珍とするに足る、刊本寫本ともに、流布極めて稀なり

（注意）諸家著述目錄には、三宅重固の著述中にも、同名の書を記しあり、是恐らくは誤なるべし

今書

本書は蒲生君平の著す所なり、君平名は秀實。字は君藏、通稱は伊三郎、修靜庵と號す、下野の人なり、もと福田氏なりしも、其の祖蒲生氏郷の後裔なるを以て、自ら改めて蒲生とせり。君平少くして學を好み、江戸に出でゝ山本北山の門に入り、刻苦書を讀むと雖も、而かも章句の末に齷齪たらず、常に慨然として、經世の志を抱き。壯年四方に周游し、足跡殆ど天下に遍しと云ふ、明和五年生れ、文化十年七月五日、江戸の寓居に歿す。年四十六、君平は平生忠孝の志に厚く。高山彦九郎・林子平等と並び稱せられて、奇行多きは世人の知る所なり。然れども其の學殖、頗る該博切實を極め。徒らに慷慨自ら任じて、大言壯語する者にあらざる事は、本書を始め職官志・山陵志及不恤緯等の著書を閲讀すれば、自ら瞭然たらん。君平江戸に在る日、貧甚しくして、按摩を業とす、一夜笛を鳴らして、舊知宮本某の門前を過ぐ。某之を

招き見れば、何ぞ圖らん君平なり、乃ち大に驚きて、其の故を問へば、唯々曰く、生計に窮するのみと、於此兩人臂を把て舊を話し、遂に談笑夜を徹して去る、又嘗て一僧あり、君平を訪ふ、君平柱に倚て愁然たり、僧之を問へば曰く、朝來一粒の米なし、終日未だ食せずと、僧之を聞き、直ちに出で丶、米菜を購ひ歸て君平に與ふ、君平之を炊ぎつ丶、談外患の事に及び、議論風發、遂に飯の焦るを知らざりきと云ふ、蓋君平の如きは、實に前記爲貧說中の人物なる歟、爲貧說、程子の言を引き、待飢餓不能出門時、當別相度と君平柱に依つて愁然たるの時、此の僥倖なかりせば、果して何の妙計ありしぞ、爲貧說を辯護する者、思はざる可からざるなり

本書は賈誼の新書に擬して作りたるものならん、全篇を革幣・賦役・金穀・姓族・名勢・祀政及政教の七篇に分け、一々國史に據つて、如上の題目を痛論し、就中初めの三篇に於ては、王朝の官制・制度の頽廢し、租庸調三法の紊れたるを說き、其れより遂に群雄割據して、衆は寡を暴し、强は弱を凌ぎ、亂虐無道

到らざる所なきに至りしを痛嘆し、(革弊)又天下の諸侯が奢侈に長じ、浮華に流れて、倉廩皆空乏を免れざるは、其の原因、江戸參勤の弊に外ならざることを斷言し、(同上)續きて經界正しからず、租税平ならず、賦益厚く、役益重くして、百姓之に堪へざるの狀を述べ、(賦役)且北條五代記の誤を指摘して、豐臣氏の政は、百姓の爲めに、却て大に寛仁なりし事實を舉げて、暗に大に當代を非議し、(同上)又守護地頭の驕戾横暴を論じて、後三條及後醍醐兩帝の壯圖の行はれざりしを憤慨し、(同上)又物品交換の利を說きて、財貨(金銀貨を指す)の多き、商賈の盛なるは、必しも喜ぶべきことにあらざることを詳述したるが如きは、(金穀)殊に一讀の價値あるものなり。其の他所々注目すべき警句あり、例へば「毎軍興爲辭而增賦者、及兵休遂不爲除去」と云つて、戰時税の繼續を罵るなどは、恰も百年前に於て今日の事を豫言せるが如し、但本書賦役の篇中「六年班田之遺制、今猶在陸奧白河郡村落間」云々とあるも、陸奧の白河に班田の遺制ありとは、編者の聞き及はざる所なり、或は飛驒の

白川郷に類似の遺制の存することを聞き、著者誤つて陸奥の白河と思ひ違ひたるにはあらざるか、姑く記して博識の是正を待つ

柳子新論

本書は正名・得一・人文・大體・文武・天民・編民・勸士・安民・守業・通貨・利害・富強の十三篇を、前記今書の如く、漢文にて最も痛切に論述したるものなり、正名は字のごとく、名を正くして、大義名分の紊る可からざるを論じ、得一は「天無二日、民無二王、忠臣不事二君、烈女不更二夫」等の義を明にして、一を得るの要を述べ、人文は禮制の正さゞる可からざるを云ひ、大體は爲政の要は、大本に着眼するに在ることを論じ、文武は双び立つて、偏廢すべからざる事を說き、天民は士農工商を云ひ、此の四ツの者は、各其の天職を奉じて、天下の用を濟さゞる可からざるを論じ、編民は戸籍を明にし、編伍の法を設けて、流浪の取締を爲さゞる可からざるを說き、勸士は士風を振作して、忠信廉恥

の俗を興すの必要を述べ、安民は法令常なく、賞罰中らざるの弊を除き、四民をして各其の業に安ぜしめざれば、富强の期圖し難きことを明にし、守。業。は人々各其の父祖の遺業を守り、末を逐ひ利に走るの不可なることを詳にし、通貨は農事を勸めて食を足し、物價を平かにして貨を通ずるの策を講じ、利害は天下の利を興し、その害を除くの要を述べ、富强は「食足謂之富、兵足謂之强、富且强者、天下之利也」と云ふ事を、詳論したるものなれども、其の分類、往々明晰ならずして、彼此混同を免かれざる所あり、然れども著者は兵學者にして、慷慨氣節を尊び、議論動もすれば常軌を逸して、人の意表に出づる所なきにあらず、是等著者の本色を暴露するものと云ふべし

山縣昌貞は通稱大貳、字は士明、柳莊と號す、甲斐の人なり、少時加々美櫻塢〔三宅重固の門人にて名は光章、別に霞沼と號す、甲府の人なり〕に從つて、儒學を修む、天資穎敏にして博識該通、和漢諸子百家の學、概涉獵せざるなし、常に王室の式微を嘆じ、慨然として復古の志を抱き、嘗て竊に本書を著

し、之を我家土中の石函中に獲たりと稱して、畧其の懷抱を洩らす、寶曆十二年、江戸八丁堀に卜居し、帷を下して兵書を講ず、諸侯其の名を聞き、幣を厚くして之を徵せんとする者多し、時に京師の人藤井直明・竹內式部等、呂貞の門に出入して、相與に兵學を講じ、時事を論ず、談偶幕府の嫌疑に觸る所あり、遂に羅織せられて、死刑に處せらる、時に年四十三、明和四年八月二十一日なり

（注意）本書の本文中にある「評曰」の細注は、松宮觀山（名は俊仍）の評語なり、此の評語は原本には觀山の跋文に云へる如く、頭書となしあるも、印刷の便宜の爲め、止むことを得ず、本文中へ挿入して、原本の眞面目を改めたるは、編者の遺憾とする所なり

本書の校正は總て宮崎幸麿氏收藏の原本に據る

栗山上書

本書は著者が幕府へ上りたる意見書にして、初めに政道の要は、恩威並び行はれざる可からざることを論じて、民に仁政を施すの必要を述べ、是迄下情上に達せず、儘惡弊の行はれたる事實を擧げて之を警戒し、且農民の實に憐むべき狀態を詳述して「農人と申す物は、殊の外せつなき物にて、人のいやがり申候物にて御座候故、上より隨分緩く御あしらひ被成、農人安樂に御座候樣、御政道無御座候ては、萬民農を樂み不申」云々と曰つて、當局の慈悲心に訴へ、其れより譜代大名と、旗本の貧乏を說き及ぼして、斯くては萬一有事の際に於ては、何等の用にも立たざるべきを痛論し、次ぎに又大名の貧乏は(第一)彼等が甚しき奢侈に流るゝ事(第二)米直段の下直なる事(第三)國替の屢なる事(第四)賄賂受授の盛なる事(第五)大勢の供を召連れる事の五個條に原因するものなりと斷言し、一々面白き事實を例證して、大に當局の注意を促したるなど、就中最も見るべきの要點なり、但し本書は何時の頃、奉呈したるものなるや、詳ならざれども、多分寬政年間頃の事なるべしと云へり

著者柴野邦彥、通稱は彥輔、栗山又古愚軒と號す、讃州高松の人なり、初め後藤芝山に從て學び、後ち東遊して昌平校に入り、業を中村蘭林に受く、學成りて數年、阿波侯の儒員となる、天明八年、幕府學政を改革し、百度維れ新なるも、學官其の人を得ず、風教頹敗し、儒學亦振はざりしかば、乃ち栗山を召して、奉朝請儒員となし、岡田寒泉等と與に大に改新の實を擧げしめ、都下の學風此に於てか大に振ふ、蓋し栗山の學造詣頗る深しと雖も、專朱子學に心醉し、加ふるに人と爲り狹隘にして、博く異說を容るゝの度量なくして、一時學界の物議を招きたるも、儒學復興の業與りて大に力ありと云ふべし、當時幕府の執政等、皆栗山を尊重して、時々政事上の問題に付きても、諮詢する所あり、栗山亦其の言の容れらるゝを喜び、常に謂て曰く、「四十年來讀書の功、此の時に施さゞれば、更に何れの時を待んや」と、依て屢、書疏を上りて、時事を論陳せりと云ふ、想ふに本書は其の時に上りしものゝ一なるべし、栗山は元文元年、高松に生れ、文化四年、江戸駿臺の自邸に歿す、年七十二、

著す所甚多からず、本書の外には、國策二十卷・雜字類編七卷・栗山堂文集三卷・同詩集四卷、其の他二三部あるのみ

十事解

本書は程子の十事略に倣ひ、師傅・六官・經界・鄕黨・貢士・兵役・民食・四民・山澤・分數の十目に就きて、當世の事務を論述したるものにて、中には今日の所謂經濟には、何等の關係を有せざるが如き事柄あるも、貧農には漸次に田地を持たすの必要を說き、貯蓄を勸め、奢侈を戒め、山林の濫伐を非とし、新田の開發の不利なる事を說き、最後に分數と稱する項目には、四民それ〴〵皆其の地位に相當の差格を定め、其の格を目當として、嚴重に節儉を行はざる可からざる事を論じたるなどは、兎に角著者が經濟說の一斑を見るに足るものなり

著者古賀樸、字は淳風、精里と號す、佐賀藩の人なり、壯歲京師に出で、

福井小車(朱學派)の門に入り、後ち西依成齋に師事して、崎門學派の流を汲み、又去つて大坂に赴き、當時の大儒、尾藤二洲・頼春水等と交を訂し、相與に切磋講究して、大に得る所あり、遂に全く舊學を舍て丶、專朱學に歸し、名聲頗る揚る、藩侯之を聞き、召して國に還へし、俄に拔擢して、機務に參與せしめ、事大小となく、悉く之に諮らざるなし、精里其の知遇に感じ、胸襟を披き、誠信を竭して參劃し、歳儉にして民饑ゑんとすれば、則ち直に上言して、之を賑恤するの策を施すが如き事あり、上下共に信任尊重したりと云ふ、寛政三年、幕府の召に應じて、昌平校の儒員となり、栗山・二洲二人と力を戮せて、學政を振飭し、朱學鼓吹の三大家を以て稱せらる丶に至る、文化十四年、六十八(諸家著述目錄は六十一とせり)にして歿す、遺著少からざるも、世上に板行するものは、精里初・二・三集十卷、其の他經書の注釋本數卷あるのみ、精里全書二十卷、其の他多くは皆寫本にて傳はる

本書は藤森弘庵の出板せる、如不及齋叢書本を以て底本とせり、故に弘庵の

跋文は其の儘此に附載せり

極論時事封事

本書も亦前記十事解の如く、時事に關する論策を十項目に分けて、極論したるものにて、其の内容は專北虜、即ち露西亞の侵略に備ふるの必要を述べたるなり、而して中には當時の意見としては、大に聞くべきの卓說あり、例へば從來我國の武士は、主として刀槍弓馬を重んじ、火器即ち大小銃砲の如きは、之を度外視し、皆步吏下士の職として、顧みざるの弊あることを慨嘆し、今後進士を取るには、宜しく火術の精粗を以てすべしと云ふが如き、又造船の術を勵まして、大船艦を製造するの急務を說き、其れには蘭人を誘致して、其の製法を取るべしと論じたるが如きは、先見の明ありと云ふべし、但し本書は直接經濟說に觸るゝ點は、（第六）「省㆓冗員㆒以贍㆓國用㆒」と、（第七）「愛㆓百姓㆒以絕㆓怨崩㆒」の二項に過ぎざるも、其の記事中一二甚面白き事實あり、一時北警

の到るや、奥羽の某地方などは、羽書往來、驛傳旁午、織るが如くにして、甚しきは一夕に使者五十回の多きに及び、之が爲め沿道の下民は、其の都度、驅使に疲れて、力を本業に專にすること能はず、田疇荒蕪、滿目蒼然たるの慘狀を呈したる事を記するが如きは、經濟史上の好資料なり

本書は何年代の作なるや、詳ならざれども、按ふに文化年間、露人北邊に來寇したる頃に執筆したるものならん。而して本書は、題して封事とあるも、果して當時幕府へ呈じたるものなるや明ならず、又或る解題書には、本書を古賀煜（侗庵と云ふ。精里の子なり）の著作とせり。恐らくは誤りならん

經濟文錄 附軟莎偶語

本書は經濟文錄と、軟莎偶語との二編を合したるものにして、末文に著者の嗣子煜（侗庵）の附記ありて、本書の由來を述べたり、文錄は其の名稱經濟の二字を冠するも、矢張今の經濟說として見るべきものなし、唯〻處々に小民救

濟の事、市の事等、少しづゝ散見するのみ、偶語に間〻大に取るべきの文字あり、經濟之本在於立志、志未立則事物擾奪、而事不成矣、志者何。一實而已矣　　崇節儉、去奢華、生於心、發於政者、皆欲無一毫之不實、云々と云ふが如きは、實に經濟の大本と云ふべし

本書は內閣文庫に藏めある寫本全書中より借寫したるものなり

詢芻邇言

著者古屋昔陽は肥後熊本の人なり、通稱は十二郎、公款と字し。昔陽又紫溟と號す、腊愛日齋と號する人の弟なり。江戸に住して。儒學を修め、學術言行、並び大に稱せられしも、俗儒の浮華を惡みて、濫に著述を公にして。其の名を衒はざりし故。世上之を知る者鮮し。文化三年歿す、年七十一、著書は本書の外に。古今學變考六卷・[illegible]通考一卷・樓價儀略一卷・答問錄一卷・紫陽漫筆數卷、其他詩文稿數卷あり

本書は岡崎侯へ上りたるものゝ由なるが、大體の主意は、正德・利用・厚生の三事を說き、周禮・禮記・尙書などを引きて、國君の天職等を說明したるものなり、終りに漢文にて、己を知り人を知るは、治國の要道たる事を附記せり

經濟隨筆

本書の主意は、精里の說と同じく、經濟の成否は、君主が其の志を立つと、立てざるとに在ることより說き起して、經濟上種々の心得べきことを、談片的に書き集めたるものにて、中には往々注意すべき點なきにあらず、曰く、財は天下公共の物なり、富む者一人私せんと欲するも得べきにあらず、曰く、財を通ずるの大道は、人を倒すことを嗜まずとの一言なり、曰く、新田開發に心付く人は、其の地が田に成るか、成らぬかと云ふ事ばかり謀て、他の害に心付く事淺き也、爰に欲する事あれば、心片寄て他の事は見え難し、鹿を逐ふ獵師は山を見ずと云へる諺の如しなど、皆尋常平凡の語なれども、亦

常に忘る可からざるの言なり
本書の著者は詳ならず、諸家著述目錄には、山田樵齋の著作となしあるも、本書原本の奥書には、樵齋校字と附記しあつて、（此の附記の文字は本叢書印刷の際之を誤脫せり）此の人の著作にもあらざるが如く見えたり、且その原書の表題は、樵齋叢書とあり、如何にも他人の著作を樵齋が校正して、己れの叢書に、收載出板したらしく思はるれども、或は又自己の著作なるを、忌み憚る所あつて、故らに斯く曖昧にしたるもるなるやも知る可からず、山田樵齋、名は聯、字は思叔、通稱は綱三郎と云ひ、京都の儒者にして、（爲貧說の序文を撰みたる靜齋の子なり）文化頃に生存し居たる人にて、其の著書には、經世叢論など云へるものもあり、當時所謂經濟有用の學に志したる者なれば、或は此人の自著にあらずとも、斷言すること能はざるなり、姑く記して後證を待つ

富強六略

本書は節儉・開荒・禁遊・省役・育子・愼終の六項目に就きて、著者の意見を述べたるものなり、茲に略と云ふは、簡略省略の略にあらず、通志二十略の如く、策略政略等の意義に於ける略にして、取も直さず、著者の論策を記したるものに外ならず、而して其の論議する所、頗る痛切にして、吾人の參考に資すべきもの甚尠しと爲さず、元來德川時代に於ては、例の檢見法の通弊として、豐饒なる上等の田地は、其の負擔過重なるが爲めに、斯る上田の所有者は、之を辛苦耕作しても、一向の利得なく、隨て其の所有者は、皆爭つて之を貧民に讓與し、甚しきは只遣ると云つても、更に貰ひ手なく、遂に止むを得ず、若干の金子を添へて、强ひて貧民に受取つて貰ふと云ふの奇觀を呈すること、各地往々目擊する所なりしが、著者の在所、水戶地方に在りては、此の弊殊に最も甚しくして、之が爲め可惜上田は盡く荒地となり、啻だ百姓の難儀の

みならず、國君の藏入も、亦隨て減少することを免かれざるに至る、今著者は之を患ひ、此等の惡弊を矯正するの一手段として、斷然從來の檢見法を改めて、定免にせんことを主張したるが如きは、就中最も見るべきの說なり、其の他遊民の增殖を悪み、商人の數の尠からん事を望み、僧侶・禰宜・山伏・博徒の類を退治し、勸農の實を擧げんことを企圖し、又郡奉行の手代過多にして、種々の弊害を生ずることを述べ、彼等が都下に居住して、村方に役所をも搆へず、隨て庄屋・組頭共の往來に、無用の失費を要するのみならず、之が爲め事務の澁滯を來すの患あることを痛論したるが如きは、又一讀の價値あるものなり

著者高野昌碩、一の名は世龍、通稱は文助(一に丈助とあり)水戶の人にして吏務に通じ、詩を善くす、小宮山楓軒・立原翠軒等と交りて、頗る令聞あれども、其の傳詳ならず、(牧民の職にありし事は、下記籠田の水の自序に見ゆ)翠軒の編輯せる諸子雜稿なるものに、其の詩數首を載す、中に農事忙あり、

曰く「桔槹咿軋稻梁新、日々江村曝レ背人、羸レ得清時徭役少、莫レ將二農事一談中酸辛上」
翠軒此の詩を評して、「勸農之吏宜下書二此詩數百篇一貼中民間屋壁上」と、以て著者の
腐儒にあらざるを知るべし
文體に依れば、本書は藩侯へ上りたる建言なるが如し

籠田の水

本書も亦藩主へ上りたる意見書なり、主意は藩政の局に當る者が、財政の匱乏を救はんとて、頻に商人に依頼するの不可なることを論じ、商人は融通をきかし、帳面の上には立派にヤッテのける様に見ゆるも、上の御勝手向は、一向に直らず、下は年々益々困窮に陷るは、節儉を守り、長久の制度を立てざるに歸因するものにして、斯くては限ある國用を以て、限なき人欲に徇ふの類にて、金山・銅山・水運の利、いかほど成就すとも、所謂籠田に水を入るゝが如く、上下の困窮は、決して直らずと云ふことを、痛切に苦諫したるもの

なり、片々たる短篇に過ぎざるも、其の說く所、概ね切實にして、前記富强六略と併せ見て、著者の誠心のある所を洞察するに足らん

徹法考

本書は主として周の田法及兵賦の說を考證したるものなれども、夏・殷の田法、即ち貢・助の二法をも併せ研究して、餘蘊を遺さず、此の種の著作中、最も詳細なるもの丶一なり、夏后氏の田法を貢法と云ひ、殷人の田法を助法と云ひ、周室の田法を徹法といふ、徹とは通徹の意にて、周の世には、國中を都鄙鄉遂に分けて、都鄙の都に遠き所には、殷の助法を用ゐ、鄉遂の都に近き所には、夏の貢法を用ゐ、二代の法を通用したる故に、之を徹法と稱す、本書は則ち此の徹法を「王畿幷九服」以下總て三十三項に分ちて、最も詳に論述し、殊に附圖一卷を添へて、本文と一々對照する事を得せしめたるは、此の複雜なる問題を研究するに於て、非常に便利なりと云ふべし、只恨むらくは著者

は其の自序に於て、曾て自ら和漢の兵制を取調べたる事あり、其の折に取調の要領を、備忘の爲め片紙に記し置きたるものを材料として、本書を著作したるが如く云へるも、本書中には、殆ど全く日本の事實を引證說明したる形跡なく、僅に「六鄉每家人數幷賦役」と題する項下の細注に「皇國近世戰國以來の兵賦、此に本けり、別に詳に論」之」の數言を付しありて、本書に於ては、全然日本の事實に論及せず、儒者の井田論の通弊を襲蹈して、單に一編の空談議に過ぎざるが如し

著者平榮實は、何處の人なるや詳ならず、本書の自序中、「命侍臣」云々の語あるを見れば、其の貴人たること固より明白なりとす、而して當時貴人中に斯る學識ある者は、其の數甚だ多からざるべければ、其の何人なるや、直に判明すべき筈なるに、編者の淺學なる、未だ之を判明すること能はざるは、甚遺憾とする所なり

本書の原本は、嘗て文學士遠藤左々喜氏が、編者に寄贈せられし所なり、此

に附記して、其の好意を謝す

井田附言

本書は德川時代に有りふれたる漢儒の井田論とは、大に其の撰を異にし、頗る奇怪の說多くして、一々信ずるに足らざるべしと雖も、亦全く一概に排斥すべきにあらず、廣く諸說の異同を參考し、周く事實の有無を搜索せんとする者は、固より一讀せざる可からざるものなり、著者は先づ初めに、自ら東漢の僞作とせる王制を引き、日本に傳來すると云へる夏尺・漢尺等を以て、尺寸畝步の異同を述べて、漢儒の說の悉く附會にして、取るに足らざる事を說破し、結局三代の田法を知りたる者は、孟子の外に之れなしと斷じ、大體は孟子の說を紹述するものゝ如し、而して著者は唯だ漢儒の說を排擊するのみならず、近くは淸人王士禎が、漢の銅尺と、司馬文正の布帛尺とを得て、發明したりと云ふ、得意の說を罵倒して、右の二尺を贋物ならんと推斷し、又

日本の中井竹山・履軒兄弟を評して、盲蛇物を怖れざるの徒なりと嘲笑し、遂に賀茂眞淵・本居宣長などを引き出して、古を知らず、今を解せず、徒らに附會の說を唱へて、世人の耳目を迷はし、其の餘殃千歳の後に及ぶと痛斥せり、然れども著者の論ずる所、果して其の正鵠を得たるや否、編者は大に之を疑はざるを得ず、著者が日本の井田法は、神武天皇の經劃せられし所にして、其の遺制、今猶大和に現存すと云ひ、又其の時に天皇の用ゐ給へるは、夏尺なりしと云ひ、又弘仁中に至り、李唐に倣つて、遂に天皇の古法を失へるなりと云ふが如きは、其の事實、果して如何なるべきか、吾人の固より知る能はざる所なりと雖も、此等の史實を證するが爲め、日本紀の本文を引き、之を隱語なりとて、宂長に其の解釋を試み（本書にあり）眞淵・宣長の輩、國學を唱へながら、之を知らずと云ふに至りては、著者の說も、亦却て甚しき附會にあらざる歟、所謂國學なるもの丶素養に乏しき編者は、本書を讀んで、殆んど絶倒に禁へざるの感なきにあらざるも、是れ又一の奇說として、熟讀

の價値なしと云ふ可からず、乃ち此に收めて參考に資す
著者三木量平、名は廣隆、甲斐の人なり、吉田門下の神道學者にして、文化文政年間に生存し、日本の田制に通曉するを以て知らるゝ者なり、今其傳詳ならずと雖も、大略の行狀は、本書の末文に掲げある事歴に依て、自ら明なるべし

〔注意〕本書の題名「井田附言」とあるを見れば、本書は別に他に何等かの著作ありて、之に添付せるものなるが如し、現に本書三百四十一頁阡陌溝洫を述べたる所に「精は傳と圖解とに明也」とあり、又末文に大和葛下郡大田村に於て「遂田圖」を作れることを述べあるが如き事實に徵すれば、本書は、全く單行の著作にあらずして、他の傳とか圖とか云へるものゝ附言なる事は、自ら明白ならん、然れども本書の最終に於ては、「其の傳たるや三代聖王之秘法、本朝天皇之神秘成を以て故に附言に載せず」と云つて、此の附言より、所謂傳(秘傳の意か)なるものを、除外したりとせば、更に外に完書として、存在するも

のあらざるが如し、且く記して識者の示教を仰ぐ

經國本義

本書は前記井田附言の著者、三木廣隆、之を口授して、門人山田勝理なる者に筆記せしめたるものなり、先づ最初に「撿見法」の根本的主意を明にして、其の定免に勝る所以を述べ、例の如く牽强附會の故實を說明して、結局百姓は活さず殺さずと云ふ古諺を引證して、租稅の輕重、其の宜しきに適せざる可からざる事を論じ、次ぎには「畠畑・椚畑・萩畑等の租法」を記して、終りに江戶町方には、七分金なる上納金あるも、京・大坂・奈良・堺・伏見其の外諸國城下の町人は、夫の明智光秀が京・大津の地子を免除せし以來の政策を踏襲して、無地子なる事を非なりとし、相當の課稅を爲すべしと述べ、其れより「諸夫役割合之法」を論じ、「最後に「移民勸農之法」と稱する項目の下に於て、各地人口の配當の均平ならざる可からざる事を論じ、且關東諸國に於て往々墮胎、若

くは赤子壓殺の惡弊あることを痛嘆し、其の結果、人口衰退して、古田畑の日に益〻荒廢することを述べて、此等の惡弊を一掃するの急務を說きたるものなり、文中大和に於ける三封疆の說、及淺艸眞乳山の解、并に民を貯と稱する說明の如きは、著者得意の發見說なるべきも、殆ど滑稽に類するの感なきにあらず

田制沿革考 及國郡管轄考

本書は上古田制之事・上古田租の事・上古租庸調の差ありし事・公田私田の差ありし事・良家奴婢の差ありし事・鄕里庄園の事・町錢石の差別の事・近代田制租賦の事・當代田制租賦の事・田制沿革總論の事の十項に分けて、本朝の田制を、支那の其れに對照して、最も詳に論述したるものなり、著者星野葛山は、學問該博にして、和漢の史書・軍法・律令等、悉く通曉せざるなく、就中經濟に長じ、田制租賦の事に至りては、著者の最も得意とする所にして、尋常儒者の遠く

及ばざる所なり、本書田制沿革總論中に、武家專横にして、租庸調の舊制を破壞し、隨て王室の式微を來し、上下の困窮を招きたる慘狀を述ぶるが如きは、實に志士仁人をして、再讀に堪へざらしむるものなきにあらず

國郡管轄考は、本朝中古以後の國郡管轄の沿革を述べ、朝權武門に移りたる來歷を論じ、守護地頭職の職務を說き、其れより地頭・總地頭・探題・代官・莊司・大名小名・家ノ子・若黨・中間等に至る諸職に付き、各細かに其の性質を解釋したるものにして、大に初學の參考に資するに足るべし、本書は著者の鄕人中村中倧の問に應じて、執筆したるものにして、文化九年の作に係る

著者名は常富、字は伯有、葛山は其の號、信州高遠藩の人にして、藩主內藤侯の爲めに大に重用せられ、郡代等諸職を經て、遂に側用人兼侍讀となる、文化九年、江戶の藩邸に歿す、年僅に四十

農喩

本書は目次の如く、總て十項に分類して、饑饉の恐るべき事、及び之に對する平生の心掛け等を。親切に記述して、大に警戒したるものなり、中に天明の饑饉の後に、高山彦九郎が、奥州へ赴き、或る山間の人家に入つて、餓死者慘狀を目撃したる實話を掲げ、又伊豫松山の正山と云ふ老僧が、享保年度の饑饉の折、或る處に、衣類其の他腰の物に至るまで、善美を盡したる一人の紳士が、餓死して居たるを發見し、能く〳〵見屆くれば、其の人は大枚百兩の大金を、首に掛けたるまゝ、數日一飯を求め得ずして悲慘の最後を遂げたる顚末を、彼の老僧が親しく實見し來りたりとて、著者に話したる昔物語などを記したるは、中々面白き事實なり、著者鈴木武助の小傳は本書の序文に就て見るべし

本書は文政八年に、水戸の人、秋山盛恭なる人が、曩に文化八年に、長坂某氏が出板したる原本に依り、再板したるものを、底本としたるなり、又本書には「農民懲誡篇」と題する疑似本あり、著者は小宮次郎右衛門と署名しあつて、

全く別本の如くにして、現に農務局纂訂の農事參考書及解題などには「農喩」と合考して、大に感情ありと記しあれども、此の「農民懲誡篇」なるものは、編者の收藏本(寫本)に就て見れば、全く本書即ち「農喩」を其の儘竊み取つて、此所彼所少しづゝ、文字を改作し、而かも極めて惡文に改作したるものに過ぎざるが如し、知らず編者の收藏本と異なりたる「農民懲誡篇」なるものが、尙他に存在するものなるや

治國大本

本書は著者が出雲藩の執政たりし實驗に徴して、治國の大本は、金銀米穀を府庫に充實するに在つて存することを證明し、不貸不借の政策を取り、以て府庫の財を守らざる可からざるの要を述べたるものなり、片々たる短篇なれども、下記の治國譜及同考證と併せ見て、大に參考に資するに足るものあらん

著者朝日丹波、名は郷保、雲州の人なり、家世々藩主に仕へ、上大夫となる、郷保幼にして父の後を嗣ぎ、食邑千石を受け、長じて頻に累進して忽執政となる、其の國事に參盡するや、屢藩主の旨に適ひ、幾何もなく食邑五百石を加増せられて、大に厚遇せらる、天明二年、年七十九にして松江の自邸に歿す、郷保夙に經濟の術に長じ、其の藩政の局に當るに及び、主として財政の窮乏を充實し、士大夫の貧困を救濟せんことを勉め、之が爲めに拮据經營すること一二に止らざりしが、就中最も著明なるものは、大坂に於ける藩の債主に對して、債務辨償の道を立てたるが如き、又藩の祿制に於て、百石の實收四十五石なりしもの、段々減殺して、實際僅三十石に過ぎさりしを、改めて舊制に復し、闔藩之が爲めに、愁眉を開くに至りたるが如きは、皆其の重もなるものなり

本書は舊出雲藩主松平伯爵家の所藏本を、特に借寫して此に收錄せり

治國譜及治國譜考證

本書治國譜は、前記治國大本の著者朝日丹波の著す所にして、其の主意は、著者が自ら雲藩の執政たりし時に、施設したる政績の要概を記して、其の子孫に貽したるものにて、大體は治國大本に云へる意見を實行したる顚末を、略述したるものなり、之を題して治國譜としたるは、同藩の儒者桃源藏にして、其の理由及本書の性質は、同人の序文を見れば自ら明かなるべし、又考證は、同藩の郡奉行兼御勝手方なりし森文四郎なる者の著す所にして、其の主意は著者の自序に云へる如く、「時移り世變り、相公（朝日丹波を指す）の政績傳らざらん事」を恐れて、治國譜の本文に詳細なる考證を付したるものなり、本書の治國譜及其の考證の自序には、共に安永四年二月の日付あるを見れば、此の兩書は正に同時の著作なるが如し

考證の著者森文四郎は、其の傳詳ならず

世營錄

本書の題名は、何くに基きたるものなるや知らざれども、內容は主として、歷代我國に於ける天災饑飢の慘狀を述べ、同時に金銀幣制の沿革を論じ、米價の高低等を考へたるものにして、最後には重に奢侈の害等を論じ、其の論旨頗る雜駁、行文亦甚拙劣にして、往々難解の廉なきにあらざるも、事實は多少參考とするに足るべきを以て、此に之を收錄せり、著者の自序は、天明七年と記しあり、固より同年の作なるべきも、著者藤井直次郞の傳は之を知るに由なし

獨愼俗話　一名白木屋管店書

本書は何人の著作なるや、判明せざれども、或る大商店の首席番頭らしき者か、其の部下の奉公人一同に對し、店勤めの心得方を諭示したるものなり、

先づ第一に自分が不肖の身を以て、段々と主家の御恩顧に預り、遂に現在結構なる重役に擧げられたる難有き顚末を述べ、それより諄々と說き起して、奉公人一同の心得方に及ぼし、內は相互に親睦して、主家の爲めに忠勤を盡し、外は顧客に對して、粗忽無禮の言動なく、商人は商人だけの分際を守つて、只管お店大事に勤めざる可からざる事を、親切丁寧に說き諭し、或は和漢歷史上の事蹟を引き、或は聖經の言語を揭出して、聊も忠孝仁義の道に違背するなからん事を訓戒するなど、誠に能く其の旨を得たるものと云ふべし、殊に商人の心得として、最も注目すべきは、左の一言なり

商內之儀は多少を撰ざる事に候得ども、餘分の商內は自然と精も入、會釋方も氣を付候に付、取はづしも無ㇾ之ものに候へども、兎角少分之商內をば麁略にいたし、身にしみ申さざるものにて候得ば、商人の第一は少分の商ひを大切にいたし候儀肝要と被ㇾ存候、兎角人は差當り候所のみに目を付候ものゆへ、第一商內の少分なるを侮り、第二には御使の女中衆子供衆とのみ

見下し候儀在之物に付、思はずして會釋方も麁抹に相成候事も是あるべきやに候、萬事之儀我身に引請ず候ては相知れざるものに候、先銘々調物いたし候節、外方へ參り候ても餘分の買もの致候時は、鼻の程うごめかし候氣味合にて、かさだかにて無理成直切等もいたし候へ共、少分の調物いたし候節は自ら卑下致候心持にて、先方の仕向まかせに相成申物に候、然れども會釋方挨拶の善悪は歸宅之上にて批判いたす事に候、其のごとく他所より御買物に御出被下候御方迚も、御心持に何れ御替り是なきもの候へば、是非此方の取扱方とても、善悪につけ御風聽に預り申ものに候ゆへ、兎角世間之御評判宜やうに仕向差上度事に候云々

(注意) 本書は遺憾ながら、前記の如く、著者不明なれども、編者が嘗て大坂天滿菅廟文庫に就て、經濟書類の搜索を爲したる際、同文庫中に、白木屋管店書と題する一寫本あるを發見し、一見頗る注目に價ひするものあるが如く思ひたれば、直に社司滋岡氏に請ひ、借寫し來りて、之を熟讀すれば、豈圖ら

んや、本書獨愼俗話と、全く其の內容を同くし、唯字句の間に、多少の相違あるも、大體は同一書なることを發見したり、即ち試に其の白木屋管店書の冒頭の一節を掲ぐれば

拙者儀自二幼年之節一不思議の御緣を以、御店へ御目見得に罷越、誠に東西も辨ざる愚なる者を、御召遣ひ被レ下候に付、累代の支配役衆中を始頭役中に至迄、只々御奉公大切に相勤候樣仰下されたればこそ、少々づゝ耳にとゞまり、數年來の御厚恩を蒙り奉り候へ共、己一人の働を以成人いたし候樣に存じ、又は我賢して御役儀等も結構に被二仰付一候とのみ相心得、天道の御罸を恐れずして、今更耻入奉る所なり云々

とあるが如く、少しづゝ文字の增減等は之れあるも、全文略此の如くにして、全然同一書たることは、固より疑ひを容るゝの餘地なきなり、而して菅廟文庫本の白木屋管店書には、安政四年三月に、伊藤節なる人が、識したる序文あり、又其の次ぎに何人が添へ書きしたるものか、水戸藩の半公文書の

如きものありて、それには慥に白木屋番頭の著作なることを記しありたり、卽ち其の文は左の如し

天保九年戌七月十九日、水府にて御町奉行樣へ、御直書御下げ被遊候御書の內、白木屋番頭にて認め候書、町人の心得は勿論、諸士にて見候ても不惡程の書に候故、上下町（編者案ずるに水戶の上町及下町を指すならん）相應の町人共へ、爲心得遣はし、寫させ可申、御尊慮被爲在候

右の書寫（編者案ずるに、此の書寫と云ふは本書の事ならん）是は水府町人の寫置き候を、其の儘に爲寫候者也

而して此の本卽菅廟文庫本の舊藏書は、安政四丁巳四月求之、積小館主と、奧書に附記しありて、此の積小館主なる者は、如何なる人か詳かならざれども、兎に角前記水府公の添へ書は、此の人が臆斷にて、出鱈目に記したるものにあらざるは明白なり、然らば本書は、全く白木屋の番頭が、其の部下の奉公人に訓示したるものなるが如し

右に付き本書の底本とせる、不分卷四册本の外に、編者が別に收藏せる、他の一本（二册本）を取て對照すれば、其れには本書五百頁九行目に、「深く敬ひ奉られべき事に候」と云ふ迄を第一册とし、其の終りに「寛政四壬子歲初秋」とあり、又其の以下を更に三篇に分ちて、各、寛政六年・七年及八年の記入あり、全く本書を四篇に分けて、此の四年度（寛政五年は脫す）に涉りて、訓示したるものゝ如く思はるゝなり、元來本書は比較的立派の意見にして、水戶侯の云はる如く、啻だ町人のみならず、士分の人々之を見るも、決して惡しからざる程のものにて、白木屋の番頭の手に成れるものとしては、如何あらんと疑ふ者あるべきも、其は編者の見る所にては、少しも怪しむべき廉なしと信ず、其の故は白木屋は、恰も此頃は、有名なる儒者三輪執齋先生の第二子及嫡孫が、引續き養子となりて、家名を嗣ぎ居たる時代なれば、其の番頭に斯の如き文事の嗜みありし立派の人物が居たる事は、强ち想像せられざるにあらざるべし又本書は水戶侯の注意を引きたる位にて、一時は餘程世上に持て囃されたる

ものと見え、編者が數種の異本に依て推察するに、江戸は勿論京・大阪地方に於ても、少しく大なる商店を有し、多數の奉公人等を使用し居る所にては、何れも之を重寶として、廣く傳寫したるものなるべし、現に編者が一見した・る異本には、呉服物に關する文字は、總て之を改作して、他の多くの職工を使用しつゝある製作工場の奉公人を、訓戒する手本としたるかと思はれたるものあり、何れにしても、當時水戸の例に倣つて、之を借り用ゐたるものは、少からざりしならん、故に編者は本書の他の異本中には、往々白木屋とは、商賣違の如き文字あるに拘らず、本書の著作者は、矢張白木屋の管店(番頭)にて、原本は白木屋より出でたるものと推定して、差支なしと思惟す、因に記す、本書中に現在白木屋の本業たる呉服の事のみならず、袋物を始め、紙類・多葉粉、其外云々等の言語あるを見れば、同店が「九尺店の小間物問屋にて、煙管など多く仕込み居たり」と云へる、曳尾庵の記事時代より、漸次呉服專門の大商店と發達したる狀況を推察するに足るべし

大正四年十月　瀧本誠一

解題終

爲貧説

天木時中著

靜齋山田先生

爲貧說序

天木子豪傑哉、能憂道不憂貧、慨然以聖學爲己任、嘗悼寒士操術、或失其正、欲述往事覺來者、論著秦漢以降、君子尙志爲貧之說、以成一篇、題號爲貧說、予竊讀此、嘆稱久之、敢不自量、聊嘗論之、夫道者、以中庸爲至、而士君子之所與適從也、然此篇獨取爲貧者、亦所以爲士謀、示其中行也、是故凡士法此、則能不以貧富動心、而可以養身有爲矣、蓋此篇之所由述也、又尙論古之人、以視貴寒何如、其規爲亦有如此者、高尙其事、関天越民、不憚劬勞、而欲大有爲也、故以爲天立心、爲民立道、講學脩德、成己成物爲務、俛焉日有孳孳、斃而后已、至若貧富窮達、則其視之蔑如、雖然、其於爲貧、則躬執鄙事、不以爲辱者、乃君子時措之宜爲然、如孟子所論是也、而今如此篇所載、則又皆學之者也、其人雖或有未必中繩墨、然能淸介自守、而不爲利回、則亦爲一世高士矣、而況至于程朱、則其能時中者、復猶古之人也、故今並稱述之、以立寒士之火候焉、此其所以示中行也、若過之者、傷於迫切而不洪、或有感慨殺身、如齊餓者是也、不及之者、淪於汙賤而不恥、或有曲學阿世、如公孫子是也、此皆不知古人之法、而妄爲之、雖有大過不及、然失其正一也、然則此篇之功、不亦盛乎、

有レ志之士、宜ニ矜式一焉、且其所レ期大而遠矣、將レ有下以始ニ乎爲一士、終ニ乎爲ニ聖人一、窮則獨善ニ其身一、達則推善ニ天下一上是非下實有ニ朝聞レ道夕死可矣之志一、咬ニ得菜根一以養レ身有レ爲者上弗レ能矣、如夫貧富窮達命也、君子行レ法以俟レ命、其他非レ所ニ復計一也、又讀レ此者、所レ宜レ察也、因並書ニ諸篇端一、以示ニ同志一云爾

天明三年癸卯孟夏

正三位　藤原定福書

爲貧說

天木時中 著

天下之學者夥矣、但觀之之法、視其精神之所在、義利如何耳、今志於道、而不絕意富貴、其胸中交戰、而處己不明、有主醫術而雜儒業者、有講雜書而兼經學者、是皆假名聖賢、以濟私意、同跡伊呂、以藏利心、其心術回互、固可惡矣、設使其心術無少回互、然無故因循其間、不能棄賤役濯舊習、而專意於學、則其精神之所在、局於生業、而終不免小人懷士之譏焉、董仲舒去位歸居、不問家產業、以脩學著書爲事、郭林宗家貧、不從縣庭之役、遂就屈彥宗學、程子家貧不仕、闔門遑遑、不知所以爲生、又答人勸祿仕云、待飢餓不能出門時、當別相度、朱子云、衣食至微末事不得、未必死、又譏友仁服非法之服、享非禮之祀、以爲資身之策、古人專意於學、而不顧於外者可見、然延平李子有詩云、耕桑本是吾儒事、不免飢寒知者非、由是觀之、唯生業之務、苟患失之者、固鄙夫也、若曰區區形骸之計、不若餓死之爲潔、又一時矯激之言、不可遽爲格論矣、死生亦係學之成否、而非甚細事、教授仰食、固衰世寒儒之所當爲也、而萬一有迫飢死、則祿仕耕稼、醫卜賣買、以接其衣食、亦無害於義、雖是躬執賤役、而其精神全在於學、則其志之高自若也、夫聖賢以爲有大人小人之事者、特以士任公卿大夫之責、而不當留意於

賤業是其常分故耳、若爲貧乏作鄙賤之事又一說、而無妨於守其常分也、范氏曰、古之聖賢未遇之時、鄙賤之事、不恥爲之、如百里奚爲人養牛、無足怪也、此可謂左驗明白矣、若醫卜、則韓伯休隱於賣藥、而其志終不在乎醫藥也、胡籍溪亦然嚴君平隱於賣卜、而其志終不在乎卜筮也、然賣藥亦不二價、其賣卜亦語忠孝、古人作小生事、亦存心於守己利人、而不苟之微意可見、耕稼則張子議古人安分、後人動心之異、黃勉齋發孔子以樊遲爲小人之意、賣買則李退溪於人買田、以舜跖之分論之、朱子於陸家作鋪、以門限內外譬喩義利之辨、身自印賣論孟精義、張南軒雖以是爲未安、勸別營生計、然朱子不肯云、別營生計、顧恐益猥下耳、至於祿仕則於學者事尚當、然昧於時義、則有後日之悔者、李退溪答奇明彥書詳說之、是亦學者所當慮也、唯講雜書者、害其學術、而壞人才也甚矣、雖至餓死、而莫之爲可也、或問、古人之乞食請祠者、無害於義否、曰、乞食者如伍子胥・孫明復・尹和靖、不自食其力、而求助於人、似甚害理、而有大志者、不必拘小節、況其人不爲終身之事、而一時經歷險阻之間姑爲之、猶孔子微服過宋也、陶淵明得一食、冥報以相貽之言、比之三子則陋矣、司馬溫公議韓退之與于襄陽書求朝夕芻米僕賃之資是也、又不聽劉賢良求錢五十萬者、惡其不義也、其求於人之不可爲常法亦如此、請祠則宮觀多奉老氏、君子以衛正拒邪爲任者、似不當請之、當時事體、想是與今日所論別、王安石更新法、創爲祠祿、以待異義之人、自是士大夫有退閑之志者、請以爲常、

必莫嫌於類老氏以爲生也、然朱子以爲無事之祿、本非義理所安、又以爲非必欲祠祿、又以爲祠祿爲再請、不補入意、則亦足以見其意矣、或又問、貧乏受朋友貲給如何、曰、據孟子在其土地、則其君雖不從吾言、而周之則受、不如列禦寇之爲也、況朋友有通財之義、而交游之情亦切、豈有不受其惠者乎、但其辭受之際、不可不審者、朱子丁寧諭之、夫杜工部浣花谿草堂、資裴冕之力也、邵康節天津橋宅、受王拱辰富鄭公之惠也、范堯夫以麥舟付石曼卿、張子與諸生共業、皆救之也仁、得之也義、可謂兩得矣、程子不受韓持國黃金藥楪者、以負來訪之意也、辭呂汲公百縑者、警戒之也、朱子不納趙如愚分與俸祿者、以其可支吾也、亦足以見不傷廉之意矣、抑人將惠、而先請之、則固辭謝之可也、此不請於病者、而後禱之意也、予近有意於爲貧、因竊書鄙見、將傳之四方學者相與講焉

享保丁未十一月十三日　　天木時中識

右所引諸說、多摘其要、而不舉全文、恐讀者或有不便、因條列本說如左

膠西王聞董仲舒大儒善待之、仲舒恐久獲罪病免、及去位歸居、不問家產業、以修學著書爲事（前漢書）

○郭泰字林宗、太原界休人也、家世貧賤、早孤、母欲使給事縣庭、林宗曰、大丈夫焉能處斗筲之役乎、遂辭、就成皐屈伯彥學、三年業畢（後漢書）

○程子曰、先公以二年七十一乞二致仕一、家貧口衆、仰レ祿以生、據レ禮引レ年、略不下以二生事一爲上レ慮、人皆服二公勇決一、顧時未レ仕、闔門皇皇、不レ知レ所下以爲上レ生、公不下以爲上レ憂（文集）

○問、聖人有下爲レ貧而仕者上否、曰、孔子爲二乘田委吏一是也、因言近悉有レ人以レ此相勉、某答云、待下飢餓不レ能レ出二門戶一時上、當二別相度一（遺書）

○朱子曰、學者當下常以二志士不レ忘レ在二溝壑一爲上レ念、則道義重而計二較死生一之心輕矣、況衣食至微末事、不レ得未二必死一、亦何用下犯レ義犯レ分、役レ心役レ志、營營以求上レ之耶、某觀二今人一、因レ不レ能レ咬二菜根一、而至二於違一二其本心一者衆矣、可レ不レ戒哉（語類下同）

○友仁問二邦畿千里惟民所一レ止、曰、此是大率言二物各有一レ所レ止之處一、且如レ公其心雖レ止レ得是一、其迹則未レ在、心迹須レ令レ爲二一方可一、豈有下學二聖人之道一、服二非法之服一、享二非禮之祀一者上、程先生謂下文中子言二心迹之判一、便是亂說上者此也、友仁曰、舍レ此則無二資レ身之策一、曰、君子謀レ道、不レ謀レ食、豈有下爲レ人而憂レ此者上

○李延平柘軒詩曰、耕桑本是吾儒事、不レ免二饑寒一智者非、出處自然皆有レ據、不レ應二感念泣一二牛衣一（理學風雅）

○韓康字伯林、霸陵人、采二藥名山一、賣二於長安市一、不レ二レ價三十餘年、時有二女子一、從レ康買レ藥、康守レ價不レ移、女子怒曰、公是韓伯休、那乃不レ二レ價乎、康歎曰、我本欲レ避レ名、今小女子皆知レ我、何用レ藥爲、遁二入山中一（後漢書）

〇朱子狀胡籍溪行曰、先生學易於涪陵處士譙公天授、久未有得、天授曰、是固當然、蓋心爲物潰、故不能有見、唯學乃可明耳、先生於是喟然歎曰、所謂學者非克己功夫也耶、自是一意下學、不求人知、一旦揖諸生、歸隱于故山、非其道義、一毫不取於人、力田賣藥、以奉其親、文定公稱其有隱君子之操、而鄉人士子慕從之遊、日以益衆（文集）〇朱子語類曰、籍溪舊開藥店、胡居士熟藥正鋪、並諸藥牌猶存

〇嚴君平卜筮於成都市、以爲卜筮賤業、而可以惠衆人、有邪惡非正之問、則依蓍龜爲言、與人子言依於孝、與人弟言依於順、與人臣言依於忠、各因勢導之以善、從吾言者已過半矣、日閱數人、得百錢、足自養、則閉肆下簾、而授老子（前漢書）

〇張子曰、古人耕且學則能之、後人耕且學則爲奔迫、反動其心、何者古人安分、至一簞食一豆羹易衣而出、只如此其分也、後人多欲、故難能、然此事均是人情之難、故以爲貴（經學理窟）

〇黄勉齋曰、貧而爲農圃之事、亦未爲過者、樊遲之志、豈亦有許行之說者、而慕之歟、故夫子以大人之事告之（論語大全）

〇李退溪答鄭子中書曰、窮而買田、本非甚害理、計直高下之際、約濫從平、亦理所不免、但一有利己廻人之心、便是舜跖所由分處、於此須緊著精采、以義利二字剖判、才免爲小人、即是爲君子不必以不買爲高也（自省錄）

〇問、吾輩之貧者、令不學子弟經營、莫不妨否、朱子曰、止經營衣食亦無甚害、陸家亦作舖買

賣、因指其門閫云、但此等事如在門限裏、一動著脚便在此門限外矣、緣先以利存心、做時雖本爲衣食不足、後見利入稍優、便多方求餘、遂生萬般計較、做出礙理事來、須思量止爲衣食爲仰事俯育耳、此計稍足、便須收斂、莫令出元所思、則粗可救過語類

○答呂伯恭書曰、婺人番開精義事、不知如何、此近傳聞、稍的云、是義烏人、說者以爲、移書禁止、亦有故事、鄙意甚不欲爲之、又以爲此費用稍廣、出於衆力、今粗流行、而遽有此患、非獨熹不便也、試煩早爲問故、以一言止之、渠必相聽、如其不然即有一狀煩、封至沈丈處、唯速爲佳、蓋及其費用未多之時止之、則彼此無所傷耳、熹亦欲作沈丈書、又以頃辭免未獲、不欲數通都下書、只煩書中爲道此意、此舉殊覺可笑、然爲貧謀食、不免至此、意亦可諒文集

○張欽夫答朱子書曰、比聞刊小書板以自助、得來諭及敢信、想是用度大段逼迫、某初聞之、覺亦不妨、已而思之、則恐有未安者、來問之及、不敢以隱、今日此道孤立、信向者鮮、若刊此等文字、取其贏以自助、切恐見聞者別作思惟、愈無靈驗矣、雖是自家心安、不恤他說、要是於事理終有未順耳、爲貧乏故、寧別作小生事不妨、此事某心殊未穩、不識如何南軒集

○朱子與林擇之書曰、欽夫頗以刊書爲不然、却云別爲小小生計却無害、此殊不可曉、別營生計、顧恐益猥下耳別集

○李退溪答奇明彥書曰、滉少嘗有志於學、而無師友之導、未少有得、而身病已深矣、當是時、

正宜下決ニ山林終老之計一、結ニ茅靜處一、讀レ書養レ志、以徐求中其所レ未レ至、加ニ之三數十年之功一、則病未ニ必不一レ痊、學未ニ必無一レ成、天下萬物、如ニ吾所レ樂何哉、顧不レ出レ此、而從ニ事應一レ擧覓下官、以爲我姑試レ之、如或不レ可、欲レ退則退、誰復絆レ我、初不レ知今時與ニ古時一大異、我朝與ニ中朝一不レ同、士忘ニ去就一、禮廢ニ致仕一、虛名之累、愈久愈甚、求レ退之路、轉行轉險、至ニ於今日一、進退兩難、謗議如レ山、危慮極矣〔自省錄〕

○伍子胥橐載而出ニ昭關一、夜行晝伏、至ニ於陵水一、無ニ以餬ニ其口一、膝行蒲伏、稽首肉袒、鼓レ腹吹レ篪、乞ニ食於吳市一、卒與ニ吳國一、闔閭爲レ伯〔史記〕

○范文正公在ニ睢陽一掌レ學、有ニ孫秀才者一、索遊上謁、文正賜ニ錢一千一、明年孫生復道ニ睢陽一謁ニ文正一、又賜ニ一千一、因問何爲汲ニ汲於道路一、孫生戚然動レ色曰、母老無ニ以養一、若日得ニ百錢一、則甘旨足矣、文正曰、吾觀ニ子辭氣一、非ニ乞客一也、二年僕僕、所レ得幾何、而廢レ學多矣、吾今補ニ子學職一、月可下得ニ三千一以供上レ養、子能安ニ於學一乎、孫生大喜、於レ是授以ニ春秋一、而孫生篤學、不レ舍ニ晝夜一、明年文正去ニ睢陽一、孫亦辭歸、後十年聞下泰山下、有ニ孫明復先生一、以ニ春秋一教ニ授學者一、道德高邁、朝廷召至上、乃昔日索遊孫秀才也〔名臣言行錄〕

○和靜處士尹焞、緣ニ叛臣劉豫父子一、迫以ニ僞命一、焞經ニ涉大河一、投ニ身山谷一、自ニ長安一徒步適レ蜀、崎嶇千餘里、乞レ食問レ路、僅得ニ生全一〔伊洛淵源錄〕

○陶淵明乞レ食詩曰、饑來驅レ我去、不レ去竟何之、行行至ニ斯里一、叩レ門拙ニ言辭一、主人解ニ余意一、遺贈豈

虛來、談話終日夕、觴至輙傾盃、情欣新知歡、言詠遂賦詩、感子漂母惠、愧我非韓才、銜戢知何謝、冥報以相貽、淵明集

○司馬溫公顏樂亭頌自敘曰、子瞻論韓子以在隱約而平寬、爲哲人之細事、以爲君子之於人、必於其小焉觀之、光謂韓子以三書抵宰相求官、與于襄陽書、謂先達後進之士、互爲前後、以相推援、如市賈然、以求朝夕芻米僕賃之資、(韓退之與于襄陽書曰、士之能享大名顯當世者、莫不有先達之士、負天下之望者爲之前焉、士之能垂休光照後世者、莫不有後進之士、負天下之望者爲之後焉、莫爲之前、雖美而不彰、莫爲之後、雖盛而不傳、是二人者未始不相須也、然而千百載、乃一相遇焉、豈上之人無可援、下之人無可推歟、何其相須之殷、而相遇之疎也、以故在下之人負其能、不肯諂其上、上之人負其位、不肯顧其下、故高材多戚戚之窮、盛位無赫赫之光、是二人者之所爲皆過也、未嘗干之、不可謂上無其人、未嘗求之、不可謂下無其人、愈之誦此言久矣、未嘗敢以聞於人、側聞閣下抱不出世之才、特立而獨行、道方而事實、卷舒不隨乎時、文武惟其所用、豈愈所謂其人哉、未聞後進之士、有遇知於左右、獲禮於門下者、豈求之而未得邪、何其宜聞而久不聞也、愈雖不才、其自處不敢後於恒人、閣下將求之而未得歟、古人有言、請自隗始、愈今者惟朝夕芻米僕賃之資是急、不過廢閣下一朝之享而足也、如曰吾志存乎立功、而事專乎報主、雖遇其人、未暇禮焉、則非愈之所敢知也、世

之闒茸者、既不足以語之、磊落奇偉之人、又不能聽焉、則信乎命之窮也、)又好悅人以銘誌而受其金、觀其文知其智、其汲汲於富貴、戚戚於貧賤如此、彼又烏知顏子之所爲哉、夫歲寒然後知松柏之後凋、士貧賤然後見其志、此固哲人之所難、故孔子稱之、而韓子以爲細事、韓子能之乎(溫公傳家集下同)

答劉賢良書曰、今者足下、忽以親之無以養、見之無以葬、弟妹嫂姪之無以恤、策馬裁書、千里渡河、指光以爲歸、且曰、以鬻一下婢之資五十萬、畀之足以周事、何足下見期待之厚、而不相知之深也、光得不駭且疑乎、方今豪傑之士、內則充朝廷、外則布郡縣、力有餘而仁可仰者、爲不少矣、足下莫之取、乃獨左顧、而抵於不肖、豈非見期待之厚哉、光雖竊託迹於侍從之臣、月俸不過數萬、爨桂炊玉、晦朔不相續、居京師已十年、囊褚舊物皆竭、安所取五十萬以佐從者之護鬻乎、夫君子樂施予、亦必已有餘、然後能及人、就其有餘、亦當先親而後疎先舊而後新、光得侍足下、纔周歲、得見不過四五、而遽以五十萬奉之、其餘親戚故舊、不可勝數、將何以待之乎、光家居、食不敢常有肉、衣不敢純衣帛、何敢以五十萬市一婢乎、而足下忽以此責之、豈非不相知之深哉、光視地然後敢行、頓足然後敢立、足下一旦待以爲陳孟公●杜季良之徒、光能無駭乎、足下服儒衣、談孔顏之道、啜菽飮水、足以盡歡於親、簞食瓢飮、足以致樂於身、而遑遑焉以貧之有求於人、光能無疑乎、光自結髮以來、雖行能無所長、然實不敢錙銖妄取於人、此衆人所知也、取之也廉、則施之人也靳、亦其理宜也、若既求其取之廉、又

責二其施一之厚一、是二行者、誠難二得而兼一矣、足下又欲レ使三光取二之於他人一、是尤不可之大者、微生高乞二醯於隣人一以應レ求、孔子以爲二不直一、況己不レ能レ施、而歛二之於人一、以爲二己惠一、豈不レ害二於恕一乎、足下之命、既不レ克レ承、又費レ辭以釋レ之、其爲レ罪尤甚深、足下亮レ之而已

○朱子曰、自二王介甫更二新法一、慮二天下士大夫議論不一レ合、欲三一切彈二擊罷黜一、又恐レ駭二物論一、於レ是創二爲宮觀祠祿一、以待二新法異議之人一、然亦難レ得、惟監司郡守以上、眷禮優渥者方得レ之、自二郡守一以下、則盡送二部中一、與二監當差遣一、後來漸輕、今則又輕、皆可二以得一レ之矣語類

○答二詹元善一書曰、若夫祠官無事之祿、本非二義理所一レ安、前輩蓋非三辭レ尊辭二富則莫二之肯爲一、熹之不肖、固不レ足レ言、然居二此官一最久、前後三請、亦皆有レ故、非三辭レ難就レ逸而爲二之也文集下同

○答二汪尚書一書曰、熹亦非三必欲二祠祿一、若荒僻無二士人一處教官、少二公事一處縣令之屬、似二亦可一以藏レ拙養レ親、但恐レ無二見闕一耳、窮空已甚、若有二數月之闕一、即不レ可レ待、又不レ若下且作二祠官一之爲上便也

○與二劉子澄一書曰、熹又三四日、祠祿便滿、前日因レ便、已託二尤延之一爲二再請一、勢必得レ之、食貧不レ得レ已、復爲二此擧一、甚不レ滿二人意一

○子列子窮、容貌有二飢色一、客有下言二之鄭子陽一者上曰、列禦寇蓋有道之士也、居二君之國一而窮、君無二乃爲レ不レ好レ士乎、鄭子陽即令二官遺一之粟一、子列子出見二使者一、再拜而辭、使者去、子列子入、其妻望レ之而拊レ心曰、妾聞爲二有道者之妻子一、皆得二佚樂一、今有二飢色一、君過而遺二先生食一、先生不レ受、豈不レ命也哉、

子列子笑謂之曰、君非自知我也、以人之言而遺我粟、至其罪我也、又且以人之言、此吾所以不受也（列子）

○朱子因說貧曰、朋友若以錢相惠、不害道理者可受、分明說其交也以道、接也以禮、斯孔子受之、若以不法事相委却、以錢相惠、此則斷然不可（語類）

○杜甫在成都、劍南節度使裴冕、爲卜西郭浣花谿、作草堂居焉（杜詩）

○康節先生未嘗有求於人、或饋之以禮者、亦不苟辭、洛人爲買宅、丞相富公爲買園以居之（伊洛淵源錄 [illegible] 洛人 [illegible] 也）

○范文正公在睢陽、遣堯夫到姑蘇、取麥五百斛、堯夫時尚少、既還、舟次丹陽、見石曼卿、問寄之久何如、曼卿曰、兩月矣、三喪在淺土、欲葬之而北歸、無可與謀者、堯夫以所載麥舟付之、單騎自長蘆捷徑而去、到家拜起、侍立良久、公曰、東吳見故舊乎、曰、曼卿爲三喪未舉、方留滯丹陽、時無郭元振、莫可告者、公曰、何不以麥舟與之、堯夫曰、已付之矣（名臣言行錄）

○張子以爲、教之必能養之、然後信、故雖貧不能自給、苟門人之無貲者、雖糲蔬亦共之（伊洛淵源錄）

○伊川與韓持國善、嘗約候韓年八十一往見之、閏正月一日、因弟子賀正、乃曰、某今年有一債未還、春中須當暫往潁昌見韓持國、蓋韓八十也、春中往造焉、久留潁昌、韓早晚伴食、體貌加敬、一日韓密語子彬叔曰、先生遠來、無以爲意、我有黃金藥楪一重二十兩、似可爲先生壽、

然未二敢遽言一、我當下以二他事一使中汝侍上ㇾ食、因從容道二吾意一、彬叔侍ㇾ食、如ㇾ所ㇾ戒試啓ㇾ之、先生曰、某與二乃翁一道義交、故不ㇾ遠而來、奚以ㇾ是爲、詰朝遂歸、韓謂二彬叔一曰、我不三敢而言一、政謂ㇾ此爾、再三謝ㇾ過而別（外書）

○呂汲公以二百縑一遺ㇾ子、子辭ㇾ之、時子族兄公孫在ㇾ旁、謂ㇾ子曰、勿ㇾ爲二已甚一、姑受ㇾ之、子曰、公之所三以遺二頤者一、以二頤貧一也、公位二宰相一、能進二天下之賢一、隨ㇾ才而任ㇾ之、則天下受二其賜一也、何獨頤貧也、天下貧者亦衆、公帛固多、恐二公不下能ㇾ周也（遺書）

○朱子與二趙帥一書曰、熹衰病之餘、災患踵至、殊不二自堪一、伏二蒙問恤一、良以爲ㇾ感、又蒙下軫二其乏絶一割二清俸一以周上ㇾ之、仰二認眷存一、尤切二愧荷一、但窮巷書生、蔬食菜羹、自其常分、不ㇾ知後生輩以爲二創見一、便爾傳說、致下誤二台慈一以爲二深憂一、亟加二救接一、至中於如ㇾ此、在二熹之義一、豈當三復有二辭避一、實以二近日偶復粗可二支吾一、未三敢虛二辱厚意一、謹已復授二來使一、且以歸納、萬一他日窘急、有ㇾ甚二於今一、當三別稟請以卒二承嘉惠一也、人參附子、則已敬拜ㇾ賜矣（文集）

或曰、學者之爲ㇾ貧、吾子以三教ㇾ學與ㇾ作ㇾ官爲二當然一、與二許衡之論一相反、（魯齋全書曰、爲ㇾ學者、治ㇾ生最爲二先務一、苟生理不ㇾ足、則於ㇾ爲ㇾ學之道一有ㇾ所ㇾ妨、彼旁求妄進、及作ㇾ官嗜ㇾ利者、殆亦窘二於生理一所ㇾ致也、士君子當下以ㇾ務ㇾ農爲上ㇾ生、商賈雖ㇾ爲ㇾ逐ㇾ末、亦有二可ㇾ爲者一、果處ㇾ之不ㇾ失二義理一、或以姑濟二一時一、亦無ㇾ不ㇾ可、若以二教ㇾ學與ㇾ作ㇾ官、規二圖生計一、恐非二古人之意一也）請子辨ㇾ之、曰、自二

三代教法不行於上、而一世之士慨然傳、相授受之於下、尃心一力、非面講則書疏、往復切磋不已、欲其闢異端辨俗學、而守三代教法之舊也、故後生之於先輩、貴富者厚幣帛、而邀致之、貧賤者執束脩、而往學之、則先輩者得不必別營衣食、而納之以自資、專意於教學、常以扶植斯道爲己任也（白虎通義曰、私相見有贄何、所以相尊敬長和睦也、朋友之際、五常之道、有通財之義、賑窮救急之意、中心好之、欲飲食之、故財幣者所以副至意）抑業稼圃商賈等之可慮者、非特賤耳、學者於其事、預無講習、臨急欲遽創其業者、固非力所任也、其力所任者、唯教學而已、其他無如作官、孟子既曰爲貧而仕、而楊龜山又爲陳子安言之切矣（文集答陳子安書曰、向恃朋友之愛、不量可否、妄以書勉公爲祿仕、重承錄示高文、開諭丁寧、徒用慚悚、所謂君子之爲貧、蓋多術矣、誠如所論也、然某竊謂、古之爲貧者、豈特耕稼陶漁而已乎、膠鬲起於魚鹽、百里奚起於市、苟不失義、雖賈儈可爲也、然君子亦任其力之所能堪、不強其力之所不能任、今使吾徒耕稼能之乎、不能也、使之陶漁能之乎、不能也、使與市人交易、逐什一於錐刀之末能之乎、不能也、使是數者不能、則是將坐待爲溝中瘠耳、而可乎、不然則未免求於人、如墦間之爲也、與其屈己以求人、孰若以義受祿於吾君爲安乎、前書招爲祿仕者、殆爲此也、子安之學、究極聖賢之蘊、其所以自謀必審矣、苟能任其力之所能堪、而不失理義之歸、亦何必仕哉、然君子之仕、有時而爲貧、古人有之、簡兮之詩

是也、孟子豈虛語哉、若曰爲貧而仕、古人無有、則予亦未敢聞命也）朱子亦以教學與作官爲學者生計（文集答任行甫書曰、官卑祿薄、雖不快意、然比之一介寒士、區區教學、仰食於人者、則已爲泰矣）而近世三宅尚齋先生又推其說、深抑賤業、懇懇爲諸生講之（愼術說曰、出處之義、君子守身之大端、利害得喪、固所不計也、而死生亦大、君子不遭値于時、不可無生業、然其術豈可不知所擇哉、因謂古昔聖王之立法、人生八歲、自天子至庶人之子弟、皆入於小學、教之以人家日用彝倫之規、農工商賈者、營産之暇、往來於左右塾、而受教於里中長老矣、十五而入於大學者、庶人則俊秀而已、既入於大學、則其志在修己治人之術也爾、受食於公、而其生亦無可慮者、豈用心於稼圃百工之賤哉、若或察於稼圃者、其亦農庶焉耳、非大人之事矣、朱子所謂、士又不當爲農工商賈之業、當字可見、後世道衰法亡、孰任分智愚辨大小之職、惟有父與師而已、其子弟之智也、教之以志大人之學、爲去聖繼絕學、爲萬世開太平、其愚也、教之以爲小子之學、守庶民之職而已、不志大人之學則已矣、既志於此也、當尚其志、豈拘拘屑屑於耕穫糞灌之微、參茸補瀉之細哉、古之聖賢、所以其貧至于空匱、不肯爲貨殖也、後世憂貧、踰於憂道之徒、不知於此、誘以不營生則餓死、而未至於含糗編草之急、既計百年後、八九分役心於生計、纔用一二分之力於滅裂之學、以是欲得聖賢大學之道、其亦可哀哉、若夫餓死、則似可慮然祿仕抱關、教學仰食、何死之有、人但深懼寒餓、是以生業藉口、所謂多方求餘、遂生萬般

計較一、豈有ニ爲ㇾ士之心一也、爲ニ庶人之學一者、或農或賈、生業之勤、暇日讀ニ小學書一、修ニ其孝弟一而足矣）然許衡之意、不ㇾ論ニ其業之賤不賤、其力之堪不堪一、直以ニ學者食足一爲ㇾ主、故於ニ生計多端之中一、受ニ其豐者一、惜ニ其約者一、縱令人或曰ㇾ許衡不ㇾ留ニ情於豐約之間一、而予强ㇾ之、亦予謂許衡未ㇾ嘗知ニ敎學與ㇾ作ㇾ官、所ニ以爲一古人之意一者、如ニ前所ㇾ云、則其言何能免ニ無稽之譏一乎、嗚呼許衡素信ニ程朱一之人、而其意見之偏大率如ㇾ此、我人所ㇾ宜ㇾ戒也

享保戊申歲暮日　　天木時中識

爲貧說 終

今書

蒲生秀實著

刻今書序

余一日讀漢書矣、筒井西司來曰、子豈記賈生傳乎、生反覆周詳、極陳當時之弊矣、天下至今稱之、今世又有賈生其人、而不得少試以沒、予畏其湮滅也、故欲刻其書以見用於世、子盍序之、因示一書予、受視之、乃我蒲生氏所著今書者也、其篇七、曰革弊、曰賦役、曰金穀、曰姓族、曰名勢、曰祀政、曰政教、皎皎乎古是求、議論精切、慷慨激昂、眞賈生其人、宜矣、西司之刻之也、雖然、人而無疾、藥石雖良、不可施之也、國而無患、議論雖切、不可施之也、方今之世、予未知此書之可用也、諸侯奢矣、藩屏於是乎衰焉、救之之術、在於儉使用、而今則非不儉歟、庶民窮矣、國基於是乎毀焉、救之之術、在於節用度、而今則非不節歟、農商濫矣、金穀不可以無制、詐冒甚矣、姓族不可以不正、而今則非無制歟、非不正歟、順逆之不辨、使命之所以起、趨向之不定、民心之所以惑、風習之不善、民俗之所以惡、而今則名勢非不重歟、祀政非不崇歟、政教非不治歟、此數者予未見一其可義矣、然則當今固不待蒲生氏之言也、而予不寒、又上之梓予不取也、舍而不序數日、既而久以爲、當漢文之時也、使用非不儉、賦役非不節、金穀制焉、姓族正焉、而名勢也、祀政也、政教也、未有可患者矣、而誼則曰、可

レ爲二痛哭流涕長大息一也、予特怪焉、讀至二於景帝一、則始服二其先見一矣、今也、治蹟休明、過二漢文一遠矣、雖レ然、蒲生氏而視レ之、則亦有二不レ然者一歟、而西司之見、抑賢レ予者歟、嗚呼予又安知二此書之終無レ可レ用哉、乃序レ之

安政五年戊午春二月

備中　原　田　業　廣　識

刻今書序

嗚呼大矣、天祖之德乎、嗚呼烈矣、天祖之威乎、有二衣食一、以救二其飢寒一、有二彝倫一、以別二其華夷一、德不二亦大一乎、有レ兵、以除二其害一、威不二亦烈一乎、而更有レ甚焉、其祝詞曰、神明之所二照臨一、窮天極地、狹者俾レ廣、險者俾レ平、遠者如下以二八十綱一牽上之、蓋天意以所レ布二於我一、亦將レ施二萬方一、豈不レ甚哉、宜矣、自三任那一貢二於我一、諸番至レ今綿延、而未三嘗爲二其所下侵也、誠宜三四夷八蠻無下有レ遺、而方今醜虜、敢妄欲レ侵レ我、其意蓋以、治平日久、爲二間之可下乘耶、余知レ不レ爲二其所下侵矣、若威若德以レ之、雖レ然、及レ今無レ備レ之、安保三其無二後患一、夫覘レ人者、常無レ間、見レ覦二於人一者、間或有、今也、守禦雖レ不

忘、我見譏也、習矣、其無間、且夫、自古治平之久、弊必有、今也、變革雖不惰、治平三百年、難矣、其無弊、無弊或間、無間或弊、不一免其無有、難哉、其無後患、豈不備而可哉、方今兵士、豈不可嚴守禦、惜未也、夫不可懲、不足以守、不可撫、不足以懲、則欲雖守禦、其實不可聞、威德即是矣、然變革不是務、必將不勝其弊、自古治平之弊多矣、然概之國貧兵弱、不過此二端也、夫苟國貧兵弱、威乃不能烈、德乃不能大、而唯守禦是嚴、蓋雖天祖、不保其無間、況下此者、區々之虛名亦奚勝、故雖古先務之、備之道、豈嘗嚴守禦、是務之而已、則雖今亦轉貧爲富、弱爲強、不可不先務、欲轉貧乎、田可均也、欲轉弱乎、祀可崇也、夫祀崇矣、民無不誠、田均矣、民無不給、給、以此用足、誠、以此知義、知義則兵強、用足則國富、二者得矣、威於是乎烈、德於是乎大、而嚴守禦、則雖欲有間得乎、雖欲有弊得乎、雖欲有患可得乎、夫如此、假令醜虜狡猾多智、無得而施其技焉、況有吝者乎、嗚呼是天祖養之教之保之之法、而東照宮所以致三百年之治、亦是而已、無事固不可不務、況今乎、而爲之不特絕其侵凌、又不特懲撫其桀忘、四夷八蠻自是陸續矣、然則威德益光、天祖之意乃終、豈不一大快事哉、蒲生氏蓋有見于此、故其所著、概出此而今書其魁、分篇七、曰革弊、曰賦役、曰金穀、是養也、曰姓族、曰名勢、曰祀政、曰政教、是教也、保之則寓其中、而賦役祀政、於均田崇祀、魁之尤者、苟欲務懲撫之實、以絕其侵凌、以光其威德、以終其天意者、安得不讀此書、余有此志也、

然無此才無此位而尚不已、故欲刻此書以普示天下、使其所務詳審、上總土豪江澤述明篤學之士也、聞余此言乃曰、善子其行之、吾其助費、乃上之梓、亦豈得已哉、雖然、萬缺其人、余與蒲生氏概矣

安政五年歲次戊午春二月　　筒井明俊識

余聞、蒲生氏著此書未經考訂而沒、以此乎、往々不能無疑於章句間、然所內充而外發、讀之數、覺主意極徹底、無害於其議論、故校異本增減一二字而已、不敢及一章一句、纔存舊之意、學者其勿以章句視蒲生氏也

筒井明俊再識

今書目次

今書

下野　蒲生秀實著

革弊

天下之治、何無弊也、其弊之所由起、必在乎其所嘗爲利、惟其利未盡、而革之、使其害不萠者、可以長久其治也、而治之與時變遷、循々焉、猶裘葛之於冬夏、不得不易也、而苟不易、非寒則暑、幾何其不中於疾哉、昔者封建之制、胙土分彊、號爲國造、小大相維、以蕃王畿、奉其方職者、一百四十有四焉、而後世皆絶滅、其故何在也、蓋先王之本神道、其能事天地、所以敎敬也、事宗廟、所以敎孝也、故曰祀之與政、其致維一、然其弊之極、舉天下皆不知其所以爲敎、惟鬼神之說是惑、而齋盟是遺、乃若彼國造、亦惟爲其巫風所居、狎神誣民、自卑其封爵、遂微弱不能復振、當孝德朝、乃以爲、天下之患也、是以變舊制廢國造、而選之守宰、置治府、而施其政敎

按、推古帝時、上宮太子著十七憲法、其中既有國司國造並稱、則國司國造自別可見、而職原抄所

レ謂、國造者國司也云者、猶二唐時所レ謂今之太守古諸侯一、但言二其臨レ國治レ民之職相似一耳、豈敢爲レ一哉、先儒以爲、廢二國造一置二國司一、如下秦滅二諸侯一、郡中縣天下上者、昉二於孝德之朝一、此豈不レ觀二於憲法一、而妄說レ之、蓋有レ所レ見也、當時帝之用二心於治一也、周問二於大臣及諸大夫一、然後任二東方國司一、在二大化元年一、維新之秋也、然則其任二東方國司一者、蓋始置二國司一、選レ才任レ職也、但西方近畿、王風之所レ易レ化、其國司既已置久矣、其置猶未三悉々變二舊制一者、即以爲、此時也已、又二年詔曰、拙弱臣連伴造國造、自下冒二人之姓一、而其先之所二自出一、神名王號以爲上賄、庶民賤種、從亂レ族、因知、當時衰弊之所レ致、華胄名族、盡忝二其所レ生一、不二惟國造爲一レ然也、國造後世皆絕滅、而載籍多缺、其故無二得而傳一焉、獨其後之存者、僅々如二將レ晨之星一、僻二在西陬出雲國一、然其家所レ習、先世遺敎餘俗、亦惟巫覡卜祝之事耳、蓋其昔時所三以失二國政一者歟、乃後而推レ之、其餘國造亦或然、若レ然者、不レ可三與共二天下一也、宜哉、其罷レ之

然後天下皆會二於一一、海內晏然、莫レ不二嚮化一、卒能致二勝レ殘去レ殺之治一、五百餘年矣、然延喜天曆之後、其習二於無事一之久、不レ得レ不レ弊也、乃其弊在下乎任レ官牽二制於清濁之選一、而爲レ政姑中息於仁柔之治上、夫牽二制於清濁之選一、則官不レ能レ舉二其才一、姑二息於仁柔之治一、則爲レ政無レ威、苟爲レ政無レ威、則民必輕二其令一、犯二其禁一、而官不レ能レ舉二其才一、則其刑賞與奪、皆不レ得二其當一也、然其所三以令下然者、亦無レ他、當時公卿巨室、皆世二其祿一、竊レ位私レ官、所二獎用一、多出二於子弟親黨一、而其立二於本朝一、蒞二國郡一者、率皆講二辭

翫絲竹之伎、治苟且記問之學、衣靑紫、佩印綬、縱橫馳奕、誇其榮花、恬然無復憂天下之志也、故其於布衣韋帶之士、未嘗齒之於人數、其中雖有超羣之才、亦未嘗薦而任其能、則終不得出身而求貴也、貴不可得而至矣、則將惟富之求、夫如是、則國郡豪民、孰不安肆於兼并之欲、皆爭占田園、（所謂田莊）蓄奴婢、習其黨於兵馬、欲以窺變故建奇功、所在多私將帥之家、豈復畏天子之法、而顧天子之存哉、此其勢然、（正暦以後、鳥羽帝之時、山陽南海諸道兵士私屬源平二氏、遂不能止之）古之制、其差兵充衞士防人、皆撰於農夫之中、惟其有功、授之勳階、以顯其名於朝、蠲役、計其役年、以免其課於國軍防令、軍團大毅小毅、通取部內散位勳位、及庶人武藝可稱者充、其校尉以下、取庶人便於弓馬者爲之、所謂庶人是農夫、簡點爲軍士、使以團練者可見矣、又曰、兵士上番者、向京一年、向防三年、向京者名衞士、向防者名防人、其遠鄕、並免國內上番、義解謂、假如經一年者、免一年徭役、經二年者、免二年徭役之類也、又曰、大將出征、克捷以後、若軍未散之前、即須對案詳定勳位、今有勳階、自一等至十二等、所謂武散官者、是也

是以三年上番非不久、然民以爲便、莫敢爲憂也、而今此豪民者、不復襲時常之農、乃其平居自處甚僭、宮室壯麗、衣食豐溢、殆素封之富也、及其赴役於京師、必曜行色、櫜財用、固已無論、而人情慕都雅、習繁華、居之三年、即不驕奢、亦能無破產哉

承久以後、鎌倉平夫人聞天子將擧兵討己、乃會將士於簾下、親勵之、使以抗王師、其言略曰、

卿等不知乎、昔者兵人、以三年大番適京師、必其從者之衆、行裝之觀、自以爲、一世大盛事者、竟爲之費許多財用、及役休、則所餘笠簑僅被、徒步歸國、夫三年大番、所以能破人產、費旣已若是、誠可憫也、我故殿爲之約其役、以六月交代、由是省用費、忘憂苦、以蒙恩澤、夫人苟有人心、可不思之報乎、將士聞之、皆感泣、遂西伐王師而敗之、按、三年大番、即衞士、自中世、邊海無所虞、而防人之役自息、惟其衞士、加役爲三年、以名大番也

此兵人所可憂、而舉朝曾無之恤、泰然使之負弓矢陪鹵簿之列、而以頤指輿卒之側、奴視門牆之隅、嗟夫孰肯甘心、即非慷慨不屈之士、亦可無有惋憤鬱結、以傲睨時政哉、此朝廷所可憂、而猶不憂、因循維持、惟其陳跡之踐、弊已至此、莫敢革者、而陵遲降於保元平治、則頹然紀綱盡弛、天下擾亂、亦不可如之何、此天下之大勢、所以一變於源賴朝而不復也、賴朝挹英傑之姿、唱敵愾之義、以驅一時勇武、則夫異時習其黨於兵馬、欲以覘變故建奇功、而有惋憤鬱結、以傲睨時政者、孰不爭出於其麾下而自効哉、而賴朝因以成霸業、其視朝廷之不足治天下、猶昔時朝廷之視國造之不足治其國也、於是國衙莊園、補守護與地頭、大舉其才、而任其能、以專天下之權於己、三年番役之勞、約以半歲、省其用費、而便于衆、以攬天下之心於己、然後天下蕩然、無天子之民矣、弊而不革、固其所也、嗚呼亦誰之尤、方今海內治安、內無執政之變、外無諸侯之虞、然則其果無所弊邪、曰否、上之諸侯盡弱、下之百姓咸窮、上下嗷々、唯財用之不給、是憂是號、殆無所

爲然、其俗獨狃於太平、習於浮華、兵革無不朽鈍、倉廩無不空匱、其爲弊也、可謂極矣、一旦因之以水旱、加之以盜賊、則天下之安危何如哉、今臣竊以爲、其弊之所由起、蓋在乎畢諸侯妻其國用、以家于江戸焉、夫江戸自東照之開師府鎭海內、致治安業、已二百年、於是天下清靜、無所梗、來遠近之賦、致山海之珍、蟻群已爲大都會之地、使其方四里之間、所在成劇市極富庶、莫不人肩摩車轂擊、奇巧末技、商販浮食之徒、俳優娼妓之類、囂囂然交錯於其間、固亦能蕩人心志、能蠹人金穀、此諸侯及天下兵士、所以家貧而人弱也、天下兵士、臣隷於麾下者、自秩不滿萬石以下、至百石數十石、不問食采邑與仰廩、稍不問有職事與否、總其衆號之八萬、夫八萬之衆、各皆世其祿俸、畜其妻孥臣僕、與諸侯鉅麗之第宅、比其屋、對其門、以觸其耳目、則勢莫不侈靡相競矣、是以往々富者多破其貲蓄、而貧者恥於不若、以爭於錙利、而不暇在家熟中而在官汚名矣、尚何顧平生所養、欲以備緩急報萬一、而修甲兵審堅利、習身體於騎射擊刺哉、即所習騎射擊刺、亦惟華法兒戲、而其人心志浮薄、筋力疲憊、恂恂然不知其所用、況其於旗鼓之令、陣營之制乎、巧若彼者、固亦不足道也、其提封萬石以上、若數十萬石、小大凡三百諸侯、各皆營築其數區第宅、自其君及夫人、以至吏胥僕卒之賤夫婦、汎々然寄居於其中、則大抵其衆、居其藩之十一、而金穀之費、居其藩之十七、此在邸之所用、幾九倍于其藩人矣、何者其所賦於民、自三法之壞、（所謂租庸調之法也、）賦法紛紜、而不復知庸調之制、惟其田租之斂、率已苛、而浮費彌廣、所在海陸、

輓重漕遠、固多脚錢、或時破船以致費者、不知其幾何也、尺布寸帛、固不取於其民、即欲求之、必先易其穀於金、其價之貴賤、惟市人之所占、遇其射利、其餘薪芻朝夕之用、不采于野、而擇于市、爨桂炊玉、自不可已、以致費者、不知其幾何也、工賈之肆惟務、雕鏤纖巧、品物粲然、眩人目眡、則婦人女子、冶游少年、無貴賤、輒以時樣相競高、不問其苦窳、朝成夕毀、務以相新、以致費者、不知其幾何也、嗟夫若此將何以堪、苟自非巧言乞哀於富商人賈、而有所稱貸、則不得不橫斂於其下民也、下民其有何罪、而遇如此之殃也、其墳墓廬舍、桑麻菜蔬、士馬耒耜、皆爲子孫百年之計者苟顧之、寧不重遷哉、而尚猶捨之、以離去於四方者、歲不知其幾人、此豈其人之情、不獲已也、由是田園荒蕪、戶口減少、鹿猪入市、而人不能制也、幸其不失農業者、亦雖有豐年、而猶無蓄積、即不幸有方百里之水旱、則天下何以相救矣、弱者轉於溝壑、而強者聚爲盜賊、剽掠攻擊者、四面並起、而邊境乘之、有遠國郡尋陷、則安危之機不可測也、天下兵士、臣隷於麾下者、既已若彼、烏在其爲干城、諸侯之家、既已若此、烏在其爲藩屏、古人有言、曰、天下有治平之名、而無治平之實、有可憂之勢、而無可憂之形、嗚呼當今之時、不亦然乎、可以長大息矣、昔者、國造弱、而朝廷以爲天下之患、方今諸侯之貧、師府獨無此之省、而自憂者耶、抑狃於苟安、而不欲有所搖撼者也、此亦大惑矣、今夫欲長久之治、宜先使諸侯及麾下之有邑者、就其藩歸其土、更制述職之禮、選擧之法、使以時奉朝請、補官吏焉、俗必復朴、財

額少費、江戸福詐之市、奚不緣而衰矣、驕奢之風、奚不從而止矣、百姓必賤末而貴本、工賈之蠹轉入農業、則天下之田園、當期日而治矣、倉廩當期月而盈矣、廉恥當期時而行矣、兵陣當期歲而練矣、諸侯日富、百姓終安、舉天下皆戴其更生之德者、不惟賴朝約三年番役之勞而已、由是得人心一致富強、水旱有儲、武事有備、盜賊不起、而外寇無所乘、是其所以為長久之治也、然而其舉諸侯、靡其國用、以家于江戸者、是其所嘗為利、而利在乎使兵強於內、而無所虞於外、今也兵不強於內、而非無所虞於外、則其利將不盡耶、害將不萌耶、然猶不能若臣所言者、往有懲於戰國之難制也已、昔者、方足利將軍之末塗也、令不行於天下、所在群雄割據、遂為戰國、衆寡、強凌弱、其亂虐無道、亦可勝嘆哉、當此時、兵尚出於農、武將戰卒、所在悉土著、故其伐之、暫破而復孼、芟之末盡而更蔓、滅者乃易興、服者不難叛、構兵報讐、爭亂無時得息、迄於豐太閤之時、深懲其如是、欲盡拔其根鋤其柢、而不復萌焉、讐敵居其城、降兵易其地、封其功臣、質其室人、舉諸侯而家於浪華、攝四海而運於掌握之內、其遠志雄圖、可謂能杜爭亂之源、而得時措之宜、東照之克浪華、平定天下、亦既因其法制、以便一時之安、豈敢為數世之可長用也、若夫苟恃以為牢固不拔乎、浪華獨何以亡滅、況其治之靡弊如今日者、不革安可以長久哉、臣竊譬之、刀劍之錆者、不礪不可以利也、衣服之汚者、不浣不可以衣也、竊謂朝廷所以衰弱者、弊而不革、固其所也、嗚呼此豈惟衰弱、朝廷之謂而已哉

賦役

自王道之衰、班田廢、制民不均、惟其有田者有賦、有賦者有役、而今也其賦徒責於人、而不知其田之幾何也、役徒課於賦、而不知其人堪否也、是故田有荊棘荒穢、而不堪耕、就其人賦之、人有孤寡老疾、而不可用、因其賦役之、而又其輕重厚薄、所在不一定、假如其所役、彼終歲閑暇、而此常驅使於府、奔走於驛、無息也、然太抵民之所咨嗟怨望而私語、賦能索農產、役能奪農時、未有如今日之極者也、然而天下城府多冗兵、坐費其許多祿俸、而市多游惰文作之民、以其固無事乎田、終身不復知尺寸之賦役也、然則天下之所以困苦者、獨集於農也已矣、夫人苟視之、孰不肯捨其所勞而趨其所逸、以爲、與其區々守耒耜、以窮死於田畝也、寧陷乎博奕無職之徒猶可矣、夫今而如是、數十年之後、將不勝其弊、昔者戰國爭亂之際、所在營城堡、收兵糧、則其農之困苦何如哉、然當是之時、兵尚出於農、其無事故、則力耕而積穀、不惟以自贍養、而又有以儲蓄廩變、豈城府多冗兵、坐費其許多祿俸、如今日者哉

按、鎌倉以降、兵農已分久矣、然其迄於戰國、所居猶不異、所業亦混焉、惟其名姓之爲主人者、不躬揎耒耜、至於如所謂家子郎黨、則所食田祿微少、安得不躬力耕哉、據當時小說所載、出於農而兵、則甲斐高虎坂綱、相摸岩井兵庫之類也、兵而尙兼農、則三川近藤某輩是也、其仕德川家、雖有田祿、家貧窮耕、其耕也、植棒於田畔、繩繫其兩刀、被之以笠簑、而從農夫同

力作云衛、且帰波長年間、天子蒙塵于其地、乃率宗兵奉迎之、遂據舟上山、募士民使撥儲蓄、其儲火之、其焦粒遺粟、今猶存焉、此事雖在於戰國百餘年前、大抵兵士之有儲蓄、亦從可知也、而其農不爲兵、亦必以死傷戰鬪之患、一能勉身於稼穡、致力於溝洫、習性於寠苦、不外莫敢徙而易業也、豈市多游惰女作之民、以其固無事乎田、而終身不復知尺寸之賦役、如今日者哉、且其每軍興、爲辭而增賦者、及兵休、遂不爲除去、則其爲賦、當益厚、而漕運營築之事、時或驅使焉、則役亦已重矣、猶比之今日、則必亦有所緩矣、何者當時四隣、結讐搆兵、固無朝聘之奉供、方物之貢獻、則不復如今日郡縣之屬人馬、而貪吏之恃治世、愚小民而無不爲也、自鎌倉以降、天下無文治久矣、所在守護地頭之臨民、一切以武斷、徒知收斂其租稅、斬捕其奸盜而已、即民間流離死喪、已缺其人、不敢除其賦、舉總當其責焉、而山獸之所至、河之所浸食、或損其田、猶仍舊、而不寬貸之、則其民之悒々者、此獨無以異於今日矣、夫世態既已如是、而海内擾々、版圖不歸一、孰能救之哉、惟及于豐臣氏之勃興、關白天子之大政、始發令出使、巡邦國、正經界、平租稅、爲先務也、古者、段三百六十歩、即裁以爲三百歩、積其餘、以補其田之所損、又不賦於其無人、夫若是、雖姑可慰其民之悒々者、而方今帥府、因其法制、致二百年之治平、率所以賦益厚役益重、而天下惟病農者、蓋當時未得均民之術故也

北條五代記、論豐太閤云、秀吉厚萬民之賦、肆一身之欲、而大量天下田畝、長使病斯農、顧

方北條氏康之有關東也、宗族家老、相聚於治廳、議大量田畝、氏康曰、不可、老子曰、治國如烹小鮮也、是以其善爲政者、不敢擾百姓、夫用兵之道、所以禁暴靖亂也、苟肆其私欲、事攻伐、貪土地、非天之所祐、早雲之定賦法、大率十而取五者、除其一、令納其四、而此外役一切不課、今夫天下之賦、皆如此、則民生必裕、國家必寧、故常禱之鬼神、以求加護也、但恨其願之不早、夫氏康之心術如此、故至於今、民每思其治蹟、傷時苛政、猶不怨其地頭、而反辱於秀吉、爲太閤變替古制、短段畝、而所取於民、不減于舊、則固非無罪於天下後世也、然豈悉如彼之所議哉、太閤記有之、太閤之封佐々成政於肥後、其敎書以不厲百姓爲治要、三年內不得大量田畝、此類可見矣、且秀次初班其家士田祿也、其地善惡相混、故爭訟交起、而僚友不和、於是將遣使巡檢封地、乃選吏之淸廉堪事務、及工書算者充之、一郡各三人、且建五箇條令、曰、凡鄕里隣界、應依舊貫、曰、所往毋擾動百姓、曰、薪芻外一切用費、皆自給、而不貪於民、曰、家士田祿班給、宜當其分、曰、舊雖曰田畝已所水損、毋入稅額、時以天正十七年八月、截自西三川、以大量田畝、比及尾張智多郡、其稅額頗有減于舊、吏之到此者、皆不安、相議以聞之、秀次曰、增減惟當以其實、何嫌哉、已而吏錄其減數、則有一萬石、以其減數之多、更相議、因近臣吉田某、以私白其狀、秀次但言、莫多說之、所班給田祿、苟無憾於衆可也、某以書告之、群吏皆愧曰、不意、君之爲君也、臣等妄以小人心度之、於是事已畢、則

稅額所減、尾張及西三川、北伊勢之際、都合八九萬石、然秀次不毫介其意、秀次且如此、故知當時憂士臣、恤民物、非今日姑息之所能及、太閤以其翌年之秋、克小田原、平關東、遂北巡遊陸奥出羽、而凱旋京師、是歲陸奥諸郡田地先大量、而文祿之際、相尋及諸道、蓋制田、隨地寬狹、有三程、三百歩爲大歩、百五十歩爲中歩、百歩爲下歩、見其不能百歩、捨而不稅、謂之見捨、且其定田界、林木叢植處、則北起其所不露滴、南至於所不庇蔭、而所賦取十四、謂之四公六民、及至今時、貪官汚吏、務以壞制、所謂見捨之田、且不肯貸、林蔭露滴、皆入田籍、其誅求巧貪、歲以苛急、大率皆五公五民、而甚者六公四民、七公三民、民之所養能幾耶

臣聞、知古之聖人致仁政、必先在均民也、是故較賦役、取於民有制、如所謂租調庸之法者、觀於大化之中興、大寶之新令、可見矣、故令不傳、故擧新令言之夫租者、田之所當出、度地以居民、計口以班田、田不過二段、而租不過二十一、以六年一班、使奸民不得私占田也

孝德帝大化二年春正月、改新之詔曰、初造戸籍計帳、班田收授之法、凡五十戸爲里、里置長一人、掌按檢戸口、課殖農桑、禁察非違、催駈賦役、凡田長三十歩、廣十二歩爲段、十段爲町、段租稻二束二把、町租稻二十二束、田令並同焉、義解曰、段地獲稻五十束、束稻舂得米五升、然則於段者、須得二石五斗、而租纔一斗一升、是二十一而弱、可謂至薄矣、獨怪於是者、雖以今之一段三百歩得一石爲率、而二石五斗、是如太多然、豈非以量之小大、古今不同乎、按、今

之升法、不知其所從來也、僧家相傳、鉢所容受、用唐量、弘安時、以當時升法計之、唐一升當六合五勺、古王制倣唐、即令所載、度量權衡、與六典全同、弘安時、當是古制、而其言如此、因疑、其時升法、當是粟法、以六五歸唐升、則弘安一升、又當今六合四勺有奇、以此觀之、米粟法度轉相仍、量遂致轉大者審矣、田令又曰、凡給口分田者、男二段、女減三分之一、五年以下不給、其地有寬狹者、從鄉土法、易田倍給、給訖、具錄町段及四至、凡田六年一班、若以身死應退田者、每至班年、即從收授、夫如是、則人生五年以上、尚給其口分之田、嬰兒固不能躬力耕、必其父母之所因以爲利、多子者田亦多給、而不挑其力、則須借人收賃租、以俟其子成長也、烏患家累、而墮胎溺子哉、身死即退田、則必不賦於無人、易田者、其地薄脊、隔歲耕種也、應給二段者、即給四段、然則田有善惡、而人無利不利、可見矣、六年班田之遺制、今猶在陸奧白河郡村落間、其村正掌收授之法、十年一繩正經界、交易田地、謂之繩易也民爲便

調者、戶之所當輸、任其土之宜、據戶使以調布帛（調絹絁絲綿布、並隨鄉土所出、正丁一人、絹絁八尺五寸、六丁成匹、長五丈一尺、廣二尺二寸、絲八兩、綿一斤、布二丈六尺、二丁成約屯端、端長五丈二尺、廣二尺四寸、又其他鹽鐵魚藻等、雜物並調）庸者、丁之所當役、男子年自二十一至六十爲丁、丁歲役十日、而不役者、出其力之所直、以爲役之庸

賦役令、凡正丁歲役十日、若須收庸者、布二丈六尺、一日二尺六寸、須留役者、滿三十日、租調俱免、役日少者、計見役日折免、通正役、並不得過四十日、次丁二人、同一正丁、每年八月

三十日以前、計帳至付民部、主計計庸多少、充衞士仕丁采女女丁等食、以外皆支配役民雇直及食、義解調、其收庸者、須隨鄕土所出、不可以布爲一例也、戶令、凡男女三歲以下爲黃、十六以下爲少、二十以下爲中、其男二十一爲丁、六十一爲老、六十六爲耆、無夫者、爲寡妻妾、蓋其當正役者、惟丁而已、餘皆不課役、不收庸、所養老恤幼、力憐無所告者也、天平寶字元年夏四月、詔曰、天下之百姓、成童之歲、則入輕徭、既冠之年、使當正役、愍其勞苦、用矜於懷、昔日先皇亦嘗有之、猶未施行、自今以後、宜以十八爲中男、二十二以上爲正丁於是天下無鰥寡之族、無僥倖之民、所在無不均與乎賦役、夫賦如此、其均且薄、役如此、其均且輕、然後官之所斂、無不廣、民之所養、無不給、國富人安、令行禁止、風俗淳美、隣里和輯、猶懼其陷乎邪僻、設學校之官、以敷之敎化

學令、凡博士助敎、皆取明經堪爲師者、大學生取五位以上子孫、及東西史部子爲之、若八位以上子、情願者聽、國學生取郡司子弟爲之、大學生式部補、國學生國司補、國郡司有解經義者、即令兼加敎授、若訓導有成、即宜進者、職員令、大國五十人、小國二十人、如此先育人才、然後試之朝、以任官敍侍、苟不然、安得化民成俗哉

猶懼其艱乎水旱、有義倉之蓄、以爲之賑救

賦役令、凡一位以下、及百姓雜色人等、皆取戶粟以爲義倉、上々戶二石、上中戶一石六斗、上下

之升法、不知其所從來也、僧家相傳、鉢所容受、用唐量、弘安時、以當時升法計之、唐一升當六合五勺、古王制倣唐、即令所載、度量權衡、與六典全同、弘安時、當是古制、而其言如此、因疑、其時升法、當是粟法、以六五歸唐升、則弘安一升、又當今六合四勺有奇、以此觀之、米粟法度轉相仍、量遂致轉大者審矣、田令又曰、凡給口分田者、男二段、女減三分之一、五年以下不給、其地有寬狹者、從鄉土法、易田倍給、給訖、具錄町段及四至、凡田六年一班、若以身死應退田者、每至班年、即從收授、夫如是、則人生五年以上、尙給其口分之田、嬰兒固不能躬力耕、必其父母之所因以爲利、多子者田亦多給、而不堪其力、則須借人收積租、以俟其子成長也、爲患家累、而墮胎溺子哉、身死即退田、則必不賦於無人、易田者、其地薄脊、隔歲耕種也、應給二段者、即給四段、然則田有善惡、而人無利不利、可見矣、六年班田之遺制、今猶在陸奧白河郡村落間、其村正掌收授之法、十年一繩正經界、交易田地、謂之繩易也民爲便

調者、戶之所當輸、任其土之宜、據戶使以調布帛（調絹絁絲綿布、並隨鄉土所出、正丁一人、絹絁八尺五寸、六丁成匹、長五丈一尺、廣二尺二寸、絲八兩、綿一斤、布二丈六尺、二丁成約屯端、端長五丈二尺、廣二尺四寸、又其他鹽鐵魚藻等、雜物並調）庸者、丁之所當役、男子年自二十一至六十爲丁、丁歲役十日、而不役者、出其力之所直、以爲役之庸

賦役令、凡正丁歲役十日、若須收庸者、布二丈六尺、一日二尺六寸、須留役者、滿三十日、租調俱免、役日少者、計見役日折免、通正役、並不得過四十日、次丁二人、同一正丁、每年八月

三十日以前、計帳至付民部、主計計庸多少、充衞士仕丁采女女丁等食、以外皆支配役民雇直及食、養府調、其收庸者、須隨鄕土所出、不可以布爲一例也、戶令、凡男女三歲以下爲黃、十六以下爲少、二十以下爲中、其男二十一爲丁、六十一爲老、六十六爲耆、無夫者、爲寡妻妾、蓋其當正役者、惟丁而已、曾皆不課役、不收庸、所養老恤幼、力憐無所告者也、天平寶字元年夏四月、詔曰、天下之百姓、成童之歲、則入輕徭、既冠之年、使當正役、愍其勞苦、用軫於懷、昔日先皇亦嘗有之、猶未施行、自今以後、宜以十八爲中男、二十二以上爲正丁、於是天下無兼并之族、無傭僕之民、所在無不均與乎賦役、夫賦如此、其均且薄、役如此、其均且輕、然後官之所歛、無不廣、民之所養、無不給、國富人安、令行禁止、風俗淳美、隣里和輯、猶懼其陷乎邪僻、設學校之官、以敷之教化

學令、凡博士助教、皆取明經堪爲師者、大學生取五位以上子孫、及東西史部子爲之、若八位以上子、情願者聽、國學生取郡司子弟爲之、大學生式部補、國學生國司補、國郡司有解經義者、即令兼加教授、若訓導有成、即宜進者、職員令、大國五十人、小國二十人、如此先育人才、然後試之朝、以任官叙爵、苟不然、安得化民成俗哉

猶懼其艱乎水旱、有義倉之蓄、以爲之賑救

賦役令、凡一位以下、及百姓雜色人等、皆取戶粟以爲義倉、上々戶二石、上中戶一石六斗、上下

戸一石二斗、中上戸一石、中々戸八斗、中下戸六斗、下上戸四斗、下中戸二斗、下々戸一斗、若稻二斗、大麥一斗五升、小麥二斗、大豆二斗、小豆一斗、各當二粟一斗一、皆與二田租一同時收畢、義解謂、分レ富賑レ貧、其情合レ義、故曰二義倉一、慶雲三年詔曰、准レ令下一位以下、及百姓雜色等、皆取二戸粟一以爲中義倉上、是義倉爲レ養二貧民一也、今取二貧戸之物一、還給二之富家之人一、於レ理爲レ不レ安、自今以後、取二中中戸以上粟一、以爲二義倉一、必給レ貧之用、不レ得二他用一

夫如レ是、則其平二治天下一之本、固已立矣、此仁政之所三以能致二乎天下一、而奈何獨無三復行二於後世一、不レ知、其何以靡弊、而至二於壞一耶、蓋延喜天曆以降、天下安二於無事一之久也、恬々然、而其勢皆有二荒怠之心一、夫天子養二余一人之尊一、以怠二乎德一也、公卿大夫士、各恃二其世家之富一、以怠二乎職一也、庶民趨二乎多幸之地一、以怠二乎手足一也、相將橫二於上一、無二諫者一、鰥寡窮二於下一、無二恤者一、上下之情不レ達、貧富之勢懸隔、政綱日弛解、遂靡々而無レ振也、於レ是班田最先廢、而兼幷遊惰之奸尋起、上自二朝廷之大臣一、既已占二田園一、營二私門一、況乎下焉者、誰不三肯效二其尤一哉、源平將帥之家、固無レ論、乃守宰以レ此據レ國、秩滿而不レ歸、國郡豪民、以レ此持二隣里之利柄一、吞二貧弱之生產一、貧者無二立レ錐之地一、而富者連二阡陌一、以レ勢相役、收二其貨租一、猶以二其二十一一納二於官一、而蓄二其餘貨一、則可二以豪二橫於鄕黨一、而小民非レ附レ之不レ能レ耕、畏レ之甚三於望二官府一、競惟從二指揮一之不レ暇、又何及二於調庸一哉

田令、凡位田五位以上、職分田大納言以上、及在外諸司、目史生郡領主政主帳以上、各有レ差、又功

田大功世々不絶、上功傳三世、中功傳二世、下功傳子、子別勅賜人田者、名賜田也、諸國公田、皆國司隨鄕土估價賃租、其價送太政官、以充雜用、凡賃租田者、各限一年、園任賃租及賣、皆須經所部官司申牒然後聽、公私田荒廢三年以上、有能借佃者、經官司判借之、雖隔越亦聽、私田三年還主、公田六年還官、官人於所部界內、有空閑地、願佃者、任聽營種、替解之日還官、義解謂、位田賜田、及口分田墾田等類、是爲私田、自餘者、皆爲公田剩田也、賃租者、凡剩田限一年賣、春時取直者爲賃也、與人令佃、至秋輸稻者爲租、即今所謂地子者是也、今以此觀之、奸之所生、豈無故乎、夫賃租借賣之事、於令已有之、及朝政之衰、乃不能奉由舊章、是以上之人、不以其位田職田爲足、已私占田、以供無饜之欲、而國郡豪民効其尤、又何顧王制乎哉、此班田之所以廢、而兼并之所由起也、據延曆三年詔、而觀之、其憂已有之、曰比日國司、其政多僻、不愧無道乖方、惟恐侵漁未巧、廣占林野、奪蒼生之便要、多營田園、妨黔首之產業、百姓彫弊、職是之由、宜加制禁懲革貪濁、夫勵治雖固如此、弊亦日甚矣、是故天長中、藤原衞上表陳四條、其一曰、交替已畢、未得解由、五位之徒、寄言格旨、留任營內、常妨農商、使漁獵、百姓巧爲奸利之謀、未觀塡納之物、望請交替已畢、早從入京、延喜中三善淸行上異見十二事、其一曰、諸大帳所載百姓、大半以上此無身者也、國司偏隨計帳、給口分田、乃令有其身者、總耕件田、頗進租調、而無其身者、私沽件田、曾不躬耕、至于租稅庸調、遂無輸

納之心、夫公家所以給口分田者、爲收調庸擧正税也、而今已奸其田、終闕其貢、收宰懷無用之田籍、豪富彌收兼幷之地利、非惟公損之深、亦成吏治之妨

其始蓋於區々之莊、樹數畝之園、終以假其名、雖有千百之町段、猶謂之莊園、謂其宰之者爲莊司

野宮藤納言定基之說是也、其言莊園者、非先王之制、今所謂知行所之所由起也、其初蓋非人所讓、卽其所私占、既非賜田、又非位職封地之邑、假如后妃湯沐之料、讓諸外家、功田至子孫、施入於寺之類、猶可依舊稱者乎、惟其不可名、故强號曰莊園也、莊園素以其所私有、所在不限之、以郡里鄕村舊名爲之變、其主人已滅或替、而其莊號獨存

莊司之所宰已廣、而國司之所治無幾存、所以委任於目代、而不肯就府也、目代一作眼代、代國司爲其眼目之謂也、非守介掾目之目 此時學校廢、禮制壞、而天下無政、臻於此極、其勢無可奈之何、既而源平將帥之家遞强盛、其爵位雖未高於朝廷、而威名已能震天下矣、而所在豪强兼幷之族、亦莫不以兵爲之麾下部曲、智者効其謀、勇者効其死、其心在武功、不復知順逆之理、將之所爲、雖有大奸不義、而無所違拒假如源氏、自賴義義家陸奥之役、而諸國兵士多屬焉、朝廷下詔禁止之、不得、卒及義朝之弑父危社稷、而其麾下無有一人怪之者 夫其勢如是、則眼中固已輕視朝廷、故至平氏、緣亂離、建奇功、極人臣之位、專天下之權、雖其所自封、在天下之大半、而朝廷悵々然、誰與制之、及源賴朝起、欲其誅專權之賊、而復之於舊、而其所請無不許、然賴朝遂由此成霸業、海內爲其

有、當此時、屬世之澆季、叛亂不殄、雖身鎭關東、而諸道非以豪民有兵者爲戍、則不能制之、故以此因衛置守護、莊園置地頭、（東鑑、文治初、賴朝欲捕其叔父行家弟義經、而不得、因大江廣元之議、乃令諸國所在置守護地頭、使以擒獲之也）然賦者、惟其有田者、納於官、而役者惟其有田者、對於軍也已、且時以軍興爲辭、而常賦之外、兵粮毎段課五升、遂因以爲例、其每軍興、爲請而增賦、則多取於爲役之民、而不足、尙何納於官、官之用是以不給、而捨御賞旌逐徙、而彫悴矣、（東鑑、賴朝令加徵及山陰山陽南海西海二十六國段別課兵粮五升、以充兵食、此當一時之宜耳、豈知其弊終至於此哉）國司徒充員、而軍政專於守護、莊園掠於地頭、其主莫之能制也、（承久已後、鳥羽上皇[illegible]莊園、而其地頭以[illegible]人之所有、[illegible]上皇之命、上皇怒、乃令[illegible]北條義時、[illegible]其地頭[illegible]大[illegible]也）嗚乎大化中興之澤何在哉、所謂租庸調之法、於是皆廢然而無存也、而豪强兼幷之族、所在盤據其邑土、宰握其兵權、雖無一命之封爵、而其門地儼然、諸侯自處、其家子郎黨爲臣僕、供給於左右、而佃客編戶、作之下民、有田者、與其兼幷之族、又相尋起于其間、其所以供上之命者、從便爲兩税、皆有田者有賦、有賦者有役、而其弊之極、終有如今日者矣

兩税者、因地之廣狹脊腴、而制賦、因賦之多少、而制役、是以戶無常賦、視地以爲賦、人無常役、視賦以爲役、如此則其自富貴之、如太便宜然、然其所由起、必出不獲已、則不可謂善法也、通鑑德宗紀、玄宗之末、版籍浸廢、多非其實、及至德宗兵起、所在賦斂迫趣、取辦無常準、吏因緣蠶食、旬輸月送、不勝困弊、至是楊炎建議作兩税、其制雖不悉皆如今法、大抵亦一揆也已

昔者後三條方王道之將熄、實憂懷永圖、恤民隱、親聽政於記錄所、所先在乎罷莊園、抑兼幷之奸、愚管抄 正統記 而其後朝廷、與其卿相之家、且不自爲便、雖名爲奉行、實與之相背、是以其令不復行、中右記 長承中、知足院關白將賞莊園于山道、云云、此去後三條延久之世、纔凡六十年、而朝廷大臣所爲猶如此、又諸書所載、如王臣所依莊園之輩、悉以院御領指上之人自營其所令也、而後醍醐於中興之初、慨然有志於復古、其將營大內、行朝憲、徵諸國之租、以二十一、然諸國之租、闕然其不納於官久矣、遽而其令下、則守護地頭、固驕戾橫恣難制、卒以此怨望、天下復大亂、太平記 二帝者誠中世英特之人主也、不能遂其所欲、則王道其終不可行歟、意蓋亦未得術也、不惟其術之未得、即其時亦未也、夫苟能得其術乎、惟今時爲然、今夫城府多冗兵、靡費其許多祿俸、而國君城主、與其家老從政之臣、已不堪其費、不能優給其祿俸、又不能復指麾其人、如義時、是以其於農、賦不得不厚、役不得不重、祿俸不優給、而兵士懷怒私罵、彼一旦有急、安肯死其長上哉、必爭先而潰、賦不得不厚、役不得不重、則是驅農夫、使其棄田畝、而趣於工賈之利也、夫田產人之所宜欲、而義時父祖之所兼幷、今其子孫、或還爲其賦役所困也、蓋方農事之可樂、雖破產之氓遷徙之客、猶不肯還耒耜、莫不求贖其典田、得其所耕也、雖以其妻子質錢、爲人奴婢者、亦莫不隸農家、莫不俟其限年而復農民也、今其賦役之厚重、兼幷之族且苦、小民尙何堪、等爲廁役者、歸於富商大賈之家矣、故兼幷之族、不能多使人、不得不躬力耕也、即躬力耕也、地有餘而人力不足、傭作者輒貴其直、客耕者相謀、乃復其田、以要省其賃租、俯仰誠其不可堪、惟

其不可堪、欲售其田不得、欲與於人不得、卒逃其鄉、而商販於其所、苟安、故市多游惰文作之民、以其固無事乎田、而終身不復知尺寸之賦役、然今市鷄鳴而起、孳々爭絲毛、莫不相競、求龍斷、罔市利、而欲其易售、極奇巧、務詐欺、已以其類之衆多、所往皆無曰易爲生也、由此而觀之、豈惟獨農之病哉、即勞苦嗟歎之聲、亦常在乎市、一旦不幸遇水旱、則其徒激于飢寒、陷于盜賊、固勢也、嗚呼君而不之憂、不仁也、臣而不之謀、不忠也、然則爲君者爲臣者、將何以圖治安之計哉、夫物極則反、數窮則變、此理之常也、今之時可謂窮極矣、乘其機而有爲、可以反而變之、不難也、故臣欲驅冗兵與閑民、而入之於田、無游手、無曠土、增益其所獲、以緩農之賦役也、蓋富人之子、其平居所養太過、怕寒暑、避風日、是其身所以不健、而口之所甘、無不輭飽、惟其口之所甘、而輭飽、是其身所以致疾、有人告之、以其所以不健而致疾、使少減所養、必不爲其子所喜、今兵亦如此、其生于治世、未嘗觀干戈之事、身養於世祿、未嘗知稼穡之艱難也、故其懦弱、若婦人孺子然、然則緩急豈可爲用哉、而今遽驅之、使入於田、不惟不從之、必有離叛之心、然十室之邑、不必無忠信之人、況今兵身養於世祿、長於士卿、遊君子禮義之域、固非如市井小人之徒、誠能喩之、以農病田廢、使思其君所以爲憂、則其必有慷慨奮勵、將其子弟而力耕於田者、不惟自富其家、亦使人羨而從焉、雖其百石之微祿、可以修甲兵、可以畜馬乘、雖無事之日、於其爲不爲、可以觀忠不忠矣、此一之術也、群兒嬉戲、惟其氣之所獨、

猿緣于木、鼈游于池、若危之、而禁其遊、不背止、則當先示之他玩弄之可慰、今欲勸力田而抑末業、狃於利之人、豈敢從其令、忍去市井之樂哉、亦當先綏農之賦役、使之有所歸焉、而禁其奇巧、制其詐欺、責其無職事者之身、效周法夫家之征而收稅、不得以僥倖自免、則一時之間、怨謗之言滿市、猶知耕稼之可業、必相率而從事於本、其可以開墾田疇矣、此二之術也、然其威力者、多財貨者、勢必能占良田、役小民、此兼并之所由起、而君子爲民父母、亦當思之也、今將禦其患、莫善於限民名田、此用漢董仲舒之法也、雖未有行者、先儒有識之士、皆以爲至言也、夫名田、廣者無過若干町、奉限之、以其口之多寡、雖富強之家、不得盡地多墾開、而貧弱之民、猶可以將其妻子、而耕其段畝、宜先正經界、平租稅、嚴其法禁、毋以有犯、犯者沒入官、臣以謂、是非如班田之煩且易壞、此三之術也、三術者、所以均民也、而以智加焉、漸々以安民制之、數十年之際、其事應成也、苟如是、可罷兩稅而復租庸調之法、其致仁政者、奚惟古之大化哉、若不然、坐視農之病、會亂世之不若也、今夫以二百年之治平、而莫之能救、臣竊深惜之、臣竊深耻之

金穀

年不凶荒、地非石田、農桑之功、穀帛必得、夫穀帛人耕而飽、家蠶而給、民俗淳朴、而侈靡之風不萌、則商賈之富無所羨、而財貨之利無所爭也、古之聖人思天下之治、察天下之心、知其惑於所羨、而亂於所爭、是以多商賈、不以爲邦國之富、多財貨、不以爲天下之利、古顯宗之世、年穀

荐熟、粟斛銀錢一、民以殷富、蓋貨有二五品一、金爲二最貴一、而銀次レ之、銅及鉛鐵、皆以其賤也、古幣不レ用、鐵有二銀錢一以レ此常行、則金錢蓋毋レ作レ之耳、今夫粟斛銀錢一、如二其斗升一、何以貿易哉、有二絲麻布帛一可二以易一レ粟、有二陶冶一可二以易一レ粟、有二斧斤之功一可二以易一レ粟、苟有レ可二以易一レ粟、則雖レ少二財貨一民用無レ匱、雖レ寡二商賈一物可レ通焉、以レ此觀レ之、可レ無レ金、寧可レ無レ穀乎、後世天下之俗薄、而人心日渝、官非レ利、無レ能レ御二其世一、民非レ富、無二能樂一其樂、於レ是天生二寶貨一資二國用一、使下其治成二於所一レ務、俗安中於所上レ尚、寶貨之生、錢幣之鑄、古史莫レ紀、不レ可二得而詳一焉、貢二銀對州一、載二于白鳳一、當二是時一也、新羅所レ貢、有二金銀及銅鐵一、始鑄二銅錢一、銅錢自レ是行二於世一、而貢二銅武州一、載二于和同一、貢二金奧州一、載二于天平感寶一、則天生二寶貨一、資二國用一、於レ是爲レ盛、既而銀錢以當二銅錢十一、金錢以當二銀錢十一、使下其治成二於所上レ務、俗安中於所上レ尚、自レ奠二皇都于平安一、而延曆弘仁承和嘉祥貞觀寬平之間、其鑄レ錢也、不レ爲レ不レ多、延及二天德一、尋而行レ此、自レ茲以降、皇運將二日衰一、世道將二日汚一矣、名山不レ出レ金、外國無二來貢一、古錢已耗、而新錢不レ能レ鑄、公私匱乏、世莫レ聊レ生、建武之初、初用二楮幣一、及レ鑄二銅錢一、楮幣不レ久而廢、四百五十年來、不レ能レ鑄レ錢、至レ此所レ鑄、蓋亦無レ幾、會二朱明國鑄一レ錢、仍僞二年號一曰二永樂通寶一、所レ謂永錢者是也、迄二于足利將軍之時一、貴レ彼適レ好也、其行李來往相續、而永錢通來、充二國用一多年矣、天文永祿之間、永錢一即當二古錢四一、夫錢幣荒耗、纔以通用、遂衰運靡靡推移、將三天有二醜當世一耶、何其寶貨之不レ生、國用之不レ資也、終不レ使二其治成一於所レ務、俗安中於所上レ尚、以レ此觀レ之、無二

金穀一、皆無二天眷一、有德邦國將レ治、慶長六年自二石見一、十一年自二伊豆一、十三年自二奥之南部一、其生二金銀及銅鐵之類一、如レ覆二蟻壤一也、其他名山、逐レ年競レ時、而生貨來貢、不レ可レ勝レ量也、就レ中、如二佐渡金山一、其二百年間、不レ知二歲生二幾千萬斤一也、自二豐家聚二斂天下之金一、創二大判小判一、方今政府因二其制一、所二改鑄一大判小判、其類之多也、既利二於官一、而富二於民一矣、其初鑄レ金鑄レ銀、而銅猶莫レ鑄、其鑄レ銅造レ錢、蓋自二天正中一、而文祿慶長元和寬永、相尋不レ息、元祿十三年、廢二永錢當一レ四之法一、蓋以二鑄レ錢多且輕一也、自二寬永錢大流布一、而後其餘所レ鑄、尙仍二其文一、乃若二明和鑄二當四錢一、亦復因レ之、莫二敢改一矣、有二當四錢一、而後錢益多且輕、嗚呼古幣不レ用レ錢、但有二金銀一、自二銅錢一爲レ幣、靡々而皆從レ薄爲レ便、如二今日一、雖二鉛鐵砂土一、淆雜爲レ錢、猶以爲レ幣、莫二敢怪且賤一、是以其錢益多且輕、凡百物由レ是增二益其價一、而價猶賤、賤價之不レ利二於民一、殆使レ不レ安二其生一也、夫當今賦厚役重、病農已多矣、斯錢又泣二農夫一曰、錢之所レ爲レ賦、曩時四貫當二一兩一、今之六貫七貫雖二遽爲一レ當、雖レ辟二園圃之產、蠶織之物一、斯錢不レ足レ充二其賦一也、雖二其賦無レ有レ增二減於舊一、猶病農至二此極一矣、乃窮二小民一、苦二工商一、使二天下嘵二其不利一、何限、近歲幸而不レ有二大水旱一、故閭里雖二已窮凋一、米粟太賤矣、足二以昫濡一矣、以レ此觀レ之、穀不レ可レ少、惟金不レ可二多且輕一也、且聞レ之、古者田祿號二町段一、自二鎌倉氏之季一、終二足利將軍十餘世一、更因二地子之名一、曰二幾貫幾百一、蓋田有二腴瘠一、所レ穫不レ一、故定二稅額一、不レ可レ以二町段一也、然錢者官之所レ布、而非二地之所一レ生也、田之科率、不レ主二米粟一、而錢爲二定額一、此可二以稱二私租之花利一、而不レ可レ復二施公上之正供一、且物有二

貴賤一、其低昂無レ常、而收斂惟錢是準、則雖三其賦無二有レ増二減於舊一也、民之所レ輸、多寡懸隔、其爲レ弊也古今一焉、及三皇家制二錢、其給二田業一、始使二生穀之數一改二幾貫幾百一、爲二幾百千萬石一、要在二乎欲一レ使其民免二於税錢一、而忘三遊二市肆一、因二土之利一、而知二樂三農圃一、大抵舊所レ謂一貫、乃當二今十石一、十石之田、十而税レ四、税乃四石、以二今價一言レ之、率當二銀五兩一、五兩之銀、從一貫之入也、昔時以二錢貫一如レ此也、自二永錢之入一、以二其稍多且輕一、蓋一貫定當二一兩一、及二今錢已鑄而多且輕一、雖二永錢已廢一、尚假二其名一、當一當レ四、而乃今以二其六七一當レ之、苟以レ錢爲レ賦、雖三其賦無二有レ増二減於舊一、終得レ無レ弊哉、爲レ政者、其宜レ覗レ弊治レ之而已矣、凡田税今猶以レ永稱レ之、則永錢爲レ賦、其來久矣、嗚呼以レ錢爲レ賦者、非二王政一也、欲レ勸二力田一抑中末業上、安二其可レ得乎、世俗之人不レ之思、頑然羨二商賈之富一、爭二財貨之利一、乃謂、金銀不二甚多一、錢幣難レ得、謂、豪民財利藏而無レ泄、謂、官家務斂積而不レ恤、不レ病レ所レ病也、不レ知レ所レ治也

姓族

父母在、宗族多、而子孫相繼無レ絶、天子之樂也、夫王者之道、在レ使下天下人々樂二其樂一、然後其祭祀合族、而死喪相恤、燕享同飽上也、人々樂二其樂一、命也、不レ可二必得一、然有レ禮能置二天下於此一、則於二得之爲一、可レ無レ憾矣、古之時、草木榛々、鹿豕狉々、民之初生、亦無レ異二於物一、知二其有一レ母、不レ知二其有一レ父、尚何辨二宗族一哉、宗族之辨、始レ自レ有レ姓、古者天皇受レ命建レ極、然後文武官司、供二其職業一、所

レ謂臣連宿禰伴造國造、凡此名族、皆以三官有二世功一、而賜レ姓命レ氏、蓋自二垂仁一始、其姓有二登降一、以レ此爲二氏之寵號一、乃從二天武一始、夫自レ官而姓、自レ姓而氏、氏之寵號凡三變、然以レ官姓レ之、又以爲二氏之寵號一、使下有功之後、能念二先祖一續中舊服上、於レ是乎宗族之禮成矣、臣竊謂、夫姓生也、父子相生、以二皮毛骨肉一、故謂二之皮骨一、夫吾與二吾族一、其皮骨同二吾祖宗皮骨一也、君子者、欲三其族姓之不二相亂一、是以能以レ禮親レ親、立二宗子一、號爲二氏上一、使下其族人相率而尊上レ之、以得中其祭祀合族、而死喪相恤、燕享同飽上也、人之不幸无レ子者、必繼レ之以二其同宗之子一、則其爲レ後者、亦莫レ不レ同二吾祖宗皮骨一也、夫如レ是、然後其繼其繼也、其絕其絕也、繼絕之間、能處二其命一、不二敢欺一レ天、不二敢誣一レ祖、昔時士君子家、莫レ不二皆然一、故其世家譜牒、無レ或二差忒一、意者惟細人不レ得二其然一、夫細人或父二他人一子二他人一、以二其族之不一レ多、姓之不一レ知、而不二苟若一レ是、懼二老而不レ養、死而不一レ埋也、懼二老而不レ養、死而不一レ埋、而苟亂二族姓一、不二敢顧憚一、固細人之事也、後世風俗日以壞、恩愛日以薄、雖二士君子家一、乃其父吝レ分二其子室一、而兄難レ與二其弟財一、習二見於細人所一レ爲、而使二其苟一レ之、乃亂二族姓一、不二敢顧憚一、爭問二人後一、莫三復愧二於其心一、故天下餘子、率多以男嫁レ人、冒二姓其婦家一、而世之無レ子、將下養二人子一爲上レ後者、必先議二其嬖多少一、雖二其同宗有一レ子、嬖財不レ多、不三敢成二其議一、取二其他族而其嬖財、自供二於養老一、是其繼非二其繼一也、絕非二其絕一也、非二其繼一爲レ繼、非二其絕一爲レ絕、夫既逆レ命欺レ天誣レ祖、人鬼之紀幾二乎滅一矣、且天下餘子、率多以レ男嫁レ人、冒二姓其婦家一、則自レ幼而養二其身態一、脂韋游滑、取レ容二於世俗一、不三昔之志、止二于爲二人後一、而

還一人富貴一、終不レ知二文行輿下家、而無二復慷慨功名之心一、嗚呼今士君子家、不三必皆無二俊傑之生一、而人材若レ此、其不レ振者、是非二盡才罪一、即其風習之使レ然也、取三其後他族而其幣財自供二於養老一、則其爲二父子一、以レ貌相持、其情不レ得二相親愛慈孝一、而其弊終使四天下冒二姓之在二他族一、反違二其天性之親一不レ顧、或有レ親、尚爲二再從一、而不二相往來一、未三嘗識二其面一、夫又安得三其祭祀合族、而死喪相恤、燕享同飽一哉、其所三以終使二天下之族如レ此無一レ賴者、無二他故一、坐二其不下能以レ禮親レ親、立二宗子一號爲二氏上一、使中其族人相率而尊上レ之、嗟此道終不レ能レ復、則使三人人樂二其樂一、安能得レ之哉、王道之闕、孰其甚焉、夫王道之闕、自レ古能以レ時補レ之、不二一而足一、允恭之世、天下之族姓、紛々乎散亂、而不二相屬一、是以家誣二其祖一、人僞二其氏一、詐冒相欺、而親疏不レ辨、人鬼之紀无レ定、乃詔正二氏族一、令下妄亂之族、於二祖之鬼神一、以探中其曲直於湯上、孝德之朝、亦其詔云、掛弱臣連伴造國造、苟冒二人之姓一、而妄二其先所一レ自出一、於レ是神名王號以爲レ賄、庶民賤種從レ亂レ族、嗚呼當時旣已治レ之矣、然自二蘇我氏之亂一天下一、圖籍委二灰燼一、而姓氏失レ譜、嫡庶爭レ長、雖下能辨二宗族一、以尊中世繫上、自レ非二宗子爲一レ之糾率一、則不レ得二久保一、故以二天智之聖朝至仁一也、爲レ制二定氏上一、而天武因レ之、令下諸氏上之未レ定者、盡皆定上レ之、使三其告二於理官一、若其族多者、分レ宗立レ之也、凡應レ在下乎存二閥閱一、欲上レ令三有功子孫有二復興一焉、所レ謂臣連宿禰伴造國造、凡此名族、以二其世官而職有レ弊、不レ可二復用一、別制二新官一、建二冠位一、則名族之姓、分爲二八品一、且有二登降一、使レ若二爵命一、故謂二之氏之寵號一也、自二氏之寵號定一、而弘仁姓氏錄、尚載二舊姓一、有二千百餘氏一焉、自二諸藩專レ朝蔓二本

枝、竊位私官、不擧他人、而物蘇伴奏舊姓之家、陵遲失序、降爲皂隷、不能復居貴仕寵祿、其存於後世者、僅僅數十氏、亦惟已微弱、而譜落牒闕、至此欲奉所謂氏上、不可復得、雖然、源平將帥之家迭興、枝葉之蔓、分宗立長、割據國郡、其長者猶古之氏上、而爲之族人者、稱曰家子郎黨、常致之股肱、或爲之死生、籍如和田氏之亂、擧族殲焉、新田氏之義擧、亦擧族赴之、保平以還、天下雖亂、宗族相保、如此其盛、是以滅者興、讐者報、艱難之間、常賴其力、信義不渝、可謂古之遺風、今夫一旦有事、欲宗族相保如此、而浮薄之極、擧世皆以財賄、取其後他族、不知顧親戚、自滅人鬼之紀、無悔焉、又何得相保如此乎哉、吁作斯俑、在何時、而屬何人、蓋奸雄取人國之術歟、乃如織田氏之於北畠、此其顯然者、自是而後、習以成風、蓋懼堅氷、自履霜、然萬一因循所致、不覺將易天子姓、革天子之命、而其大臣左右以財賄、取其後他族、自處若彼、又何怪焉、然而天下之廣、人卒之衆、有公議焉、有忠憤焉、即其一時苟且之圖、惡知非激亂於他日、而貽患於後世哉、今君子者、有志王道、則當先設教明倫、正宗族立氏上、正宗族、立氏上、必非行而有難焉、獨其族之不多、姓之不知、是不可係屬、又不可附籍者也、然族之不多、遠推其系譜、得其所由出、則雖親疏相遠數十世、亦可以係屬、而姓之不知、近求其骨肉、冒姓者復本、變姓者復舊、則莫不可附籍矣、係屬附籍已定矣、又從之以禮、而絕天下之非望、上不絕帝統、下不疏宗族、可使人人樂其樂、而無憾焉、王道之始也

名勢

人心背畔、但何在哉、名之與勢、實能使之而已、夫名一正、而言必信、君臣之體不越、上下之分不違、昔應神在腹、朝廷委裘、而天下不亂、蓋其所皆使然、在大初、有神人、受天命、王天下、創鴻業、垂皇統、而使可以傳子孫帝王萬世無窮、於是乎先有如此之盛德先烈、而爲之勢也、及勢已去、乃名亦虛、以天神寶之重、宗廟之尊、而受制於私門、至於無可奈何、是亦時哉、然猶有可言焉、古者神功以未亡之寡、奉遺腹之孤、二韓作難、竊望天位、然武內爲大臣、有謀於內、兵士無貳於外、不日能誅僞凌之賊、定眞主之位、

史、仲哀帝八年、與神功皇后征熊襲、明年帝崩于筑紫行宮、皇后與大臣武內謀、秘不發喪、潛使之奉梓宮、葬于穴門、以軍國多務而不果、乃殯于豐浦宮、遂從皇后、西征服三韓、還至筑紫、而皇后方生遺腹子、而立之、是爲應神帝、將從海路歸京師、會麛坂皇子謀攻、與弟忍熊王曰、今皇后生子、群臣必皆從而奉之、吾何顏敢以兄臣其幼沖之弟乎、遂作亂、名託營先帝山陵、往播磨、多造舟艘、稱營陵在、以絕海路赤石淡路之間、既而麛坂皇子死于兵、忍熊心懼、其黨引兵而退、皇后遣武內及武振熊、追敗之京師而殲

然後君不以其孤寡而侮於臣、臣不以其功績而驕於君、自非名制之體、易如此乎、武烈無道、民之所棄、崩而無嗣、將誰適從、然大伴金村位大連、躬握朝權、不敢覬覦、求皇胤於草莽、奉而君

史、金村者建議奉群臣、迎耶本發彥於丹波、則見其儀衞兵仗、懼而逃、故更迎彥大於近江三國、是爲繼體帝、是應神五世孫、彥主人之子也

終守臣職、長安社稷、自非名定其分、曷如此乎、前之崇峻遇弒、賊蘇據朝、威福由己、革命將在朝夕、然猶豫傳三世、不敢篡立、終斃天誅、無暇於悔

史、崇峻帝嫉大臣蘇我馬子之專、一日出怨言、馬子聞之懼、遂行弒、立其甥制之女子、是爲推古帝、是敏達皇后、自是蘇我氏愈橫肆、馬子生蝦夷、蝦夷生入鹿、藉世家之富、其驕僭無所不至、第宅視宮闕、儀衞擬乘輿、跋扈跳梁、桀覦神器、當此時、歷推古帝舒明帝、立舒明皇后、是爲皇極、其所生天智帝時葛城皇子、天資英明睿武、常慨然有意於討賊、然職居子弟、而奉女主九五、慮樞機易泄、不得已、乃擇賢智之人、得大中臣鎌子於下位、協心合謀、手刃入鹿于黼座之側、而蝦夷亦伏誅、母帝將傳位、則先讓之其兄孝德、身乃居儲宮、輔朝政、竟能就中興之業、後世號曰中宗者以此也

後之王室微弱、政刑不行、承久之三皇播越、然鎌倉之弱鎭、日帶朝爵、遂玩國命、廢立在手、尙不自取、至其子孫、族于王師

史、自後白河法皇、任鎌倉源賴朝天下總追捕使、而朝權遂爲之所奪、後鳥羽帝是法皇之孫、而高倉帝之子、安德帝之庶弟也、以幼沖爲法皇所擁立、踐祚於安德西幸、源平戰爭之際、及長常見

王室衰弱、則慨然有恢復之志、既頼朝卒、其二子代立、皆爲其宰臣北條義時所弑、於是源氏三世而絶、藉源氏之業、據鎌倉之强自若也、義時以藤原攝政之家、有[illegible]之親於源氏、乃請之、奉攝關之兒、以爲鎌倉帥、欲藉其威也、然其權由己、横肆無忌、則帝之切齒於鎌倉可知矣、帝既傳位於子土御門帝、及之其弟順德帝、而其子八條帝方受禪、寔改元曰承久、於是有三上皇、以本中新、各稱其所居院、本院將舉兵討鎌倉、中院諫以時未可、而不聽、新院贊成之、故及王師敗績、義時命其子泰時、遷本院於隱岐、新院於佐渡、而中院亦尋遷之阿波、與謀者文武之官悉死刑、廢八條帝、立高倉帝之孫、是爲後堀河帝、即本院後鳥羽帝之兄弟也、後堀河帝崩、子四條帝立、幼而崩無嗣、泰時以順德帝之有深怨於己、恐其子入立後爲不利焉、排朝廷衆議、專立土御門帝之子、是爲後嵯峨帝、帝亦當嫉北條氏之專、而勢未可討、既傳位於子後深草、以其柔不堪於討賊、使及之其弟龜山帝、且專屬意於龜山、欲其世有國鎮、而後深草之胤、不復可立者、於是乎分定、不可以移動者也、此時泰時之孫時賴、實奉其遺詔矣、而時賴之子時宗乃違之、遂岐皇統、有二流、遞天位於十年、蓋其意以爲、使朝廷紛々乎爭內訌、勢不得不必藉己爲重也、尙何暇能報承久之讎乎、其奸謀自固之術、益可惡、是其孫高時一旦遭後醍醐帝之逆讎、所以赤族也、後醍醐帝是龜山帝之孫、而後宇多帝之子也、時宗强以後深草之子伏見帝、爲後宇多之嗣、使傳位於其子後伏見帝、然後承其統者、後宇多皇子、後二條又承其統者、後伏見皇弟花園、又承

其統者、即後醍醐也、又爲之儲者、是後伏見皇子、皆爲北條氏所制、而皇統如此紛紜、宜哉、其終及爭亂、後醍醐帝初即位、與其二三搢紳所親信、陰謀討承久之賊、以恢復王室、元弘初事洩、爲高時所栖於笠置、及行宮不守、遂遷隱岐、然有河內人楠正成、據金剛之孤塘、挫鎌倉之賊鋒、因徒爲之膽落魄消、而四方勤王豪傑蜂起、千種源中將忠顯、奉天子潛出隱岐、伯耆人名和長年迎之、保船上、既而忠顯爲元帥、與足利尊氏・赤松圓心・結城親光・兒島高德等諸將、同收復京師、克北條氏所置六波羅鎮、上野人新田義貞起兵伐鎌倉、國郡響應、兵數十萬、不日而高時擧族爲焦土、於是乎中興之業就

元弘帝業中途不遂、降至戰國、塗炭方極、然天下之豪傑、欲以起義兵禁暴亂、莫不必名綸旨、欲以安邦國收衆心、莫不必承官爵、欲以行朝賀授民時、莫不必奉正朔、（大內義興、毛利元就、織田信長以下、比々皆然）自非名守其器、曷如此乎、雖然、一旦有源賴朝者出、以其英俊之器、震主之烈、名假忠義、欺罔朝廷、擧天下之兵馬、與其衆心、皆以爲私有矣、則王室之失勢、自是而始、區區虛名亦奚勝焉

史、大江廣元勸賴朝、奏請於後白河法皇、國司置守護、莊園補地頭、以時屬澆季、世多奸賊、治莊公所不能治、然後兵馬之權東矣、按、賴朝滅平氏也、其弟義經之功居多、其材武謀略、諸將皆籍籍、稱譽不置、既留衞京師、則賴朝有猜心、將欲竊朝柄、而擧朝固無人、所忌非義經而誰、故使其奔亡、然後廣元貴國之言得行矣、世徒譏兄弟不協、嗚呼豈徒兄弟之不協、不知其

所由、安得而知之

若然者、今姑置之、固非一言之所悉也、惟其以平氏之富强、不守京師、天子之尊自竄西陲、天子雖貴、又誰屬望、是以賂不納於筑紫、見陷於播磨、而其所恃據于阿波、暴滅沒海、化爲海魚、元弘帝之英武、一誤廟謨、奉神璽之劍鏡、蒙塵南山、神璽雖重、何足飯糗、是利反賊、簒擅皇統、以稱帝於京師、則衆惟仰魏闕、無辨眞僞、而何問順逆哉、南風不競、職是之由、徒使天下後世爲歎惜焉、嗚呼是皆失其勢於地、不可以復也、若能使平氏以其萬死守京師、以其精鋭之士、兵甲之衆、備賴朝于石橋、閑義仲于北叡、則義仲所據、比叡僧徒雖富豪、非有豫蓄之糧、安得支數月、所率戰卒雖精强、多是烏合耳、彼其勇壯氣鋭不必居、待其糧盡其師老、則勵將士、電走而下、叱咤血戰、靡麾、則平氏之上下亦快乎、坐廟堂能定謀略、觀時勢之安危、察衆心之背嚮、有若知盛、當以爲相、雄志慷慨、尤工騎射、臨敵奮戰、所在制勝、有若敦經、當以爲將、乃爲兵督軍、奮西土南海之衆、而其先士卒奮死戰、知有平氏、不知有其弱者、有若兼康・盛闘・忠光・貞能之屬、制之兵、決之機、固智必不敗績、鬪力可交死傷、夫若是雖義仲之勇、豈莫獲乎、北陸之兵或可潰、又雖賴朝英武弘度、豈得安乎、關東不悉皆附焉、當此時、平氏之守金堅固、則其於東北二源之僨、未可孰成敗也、況復阿波筑紫、雖敢乘弊而反側其附哉、元弘帝之畢不真、聽楠正成、正成不以兵之所忌、死於賊鋒、新田義貞不以師之所弊、敗于勁敵、敵入京師、則乘

與先北宰、可以據比叡之險、藉僧徒之强、千種氏名和氏之勇、供警衛、北畠氏結城氏之衆爲聲援、菊池氏兒島氏土居氏得能氏之兵遣賊尾、於是正成自南擧義旗、義貞以東軍遮忠策、以包賊於京師、賊衆數十萬、素不齎糧京師、米粟不日而竭、當飢而降、何待善戰、足利是季豺狼之性、縱其忍也、竊既如此、命亦極矣、必憂死於蓐內、不暇授首、嗚呼雄圖勝算、一不聽於楠氏、由是所在狼狽、機會皆失、終致京北之幽辱、畿南之偏安、適足以爲千載之戒矣、悲夫、然則其勢之去、惟名不可恃以守耶、曰不然、自古好義者寡、好利者衆、苟好義、莫不必順名、苟好利、莫不必就勢、名之重者勢奚名哉、乃其不能勝者、惟在乎所好之衆寡、雖然、以利易義、非君子之道也、忠憤慷慨之士、何時無之、苟有其人、寡可敵衆、身在貧賤、義重公侯、所謂三軍之帥可奪、匹夫志不可奪者是也、夫名之重於勢、勢所以時勝於名者、可以見也

祀政

臣聞、祀之與政、其致維一（正統記、按、魯語節政之所成也、夫祀國之大節也、故愼制祀以爲國典、蓋亦謂此也、）是以先王、以郊社之禮、能致其敬、以宗廟之禮、能致其孝、孝敬之誠、感鬼神、化人民、而綱紀邦國、夫然後天下可南面垂拱而治矣、故先王與其大臣大連、所以燮理陰陽、而經緯天地、固無論、苟務民之義、將有爲于天下者、必先告於廟、請於上下神祇、莫不以致其誠焉、夫惟誠、是以盡力乎溝洫、不以爲厲民、爲民紀農也、講武乎農隙、不以爲好田、爲田除害也、卑宮室、惡衣食、租稅於是乎不厚、而用無不豐、設

屯倉、備荒歉、年穀於是乎不熟、而生無不養、以時少長貨、工賈非穀、無以通器用、耕稼於是乎不勸而勤、游民盜賊於是乎無所資也、國家艾安、民樂其業、故先王之民、舉天下仰望其祀、無不咸獻其力、以供給其禮、於是乎以順長幼之序、班男女之調、男以其財〔此曰弓端〕、所以常習之弓矢、馳逐而收之、毛羽皮角、備之重寶物乘也、調女以其手〔此曰手末〕、所以常敎之絲麻、絍織而篚之、布帛玄黃、供之禮幣恩賚也

崇峻帝之時、校人民、序長幼、甚男女之功、而調其餘、曰弓端、曰手末、是既能敎禮神祇、而柔服荒俗、因祀徵其調、故古語拾遺云、今神祇之祀、用熊皮甲及布帛等、即此之緣也、又云、卷向之朝、始用刀及弓矢、祭神祇、蓋亦調物也、御鎭座本紀、以弓端調、爲大刀・小刀・弓矢・矛盾・猪鹿皮角・忌鐵・忌鍬之類、手末調爲麻楠・綿柱・荒衣・利衣之類、此可以徵已、神祇令、須大祓者、每郡出刀一口・皮一張・鐵一口・及雜物等、戶別麻一條、明是其遺事也、且今此文所言、是不惟崇神之世爲然、自神武郊祀于鵄山、以至仁德之致治、其間世々躬仁儉、能勤國而所成、因以爲、菲飲食而致孝乎鬼神、卑宮室而盡力乎溝洫、皆參考之史書、而得之則知、其不獨專美於夏禹、又別有參、故此不一一說

夫如是則能有威于征、而有財於守、有信於民矣、蓋古之爲政而寓諸祀、莫不如此、其理也、則其下之人、其誰敢不戰々兢々以事神明、又各奉承其先祀、糾合其宗族、莫不相親睦、凡國土山川

以其能興雲致雨、以利此民、及古之聖神、以其有功烈於世、所在爲之社、社之人祭祀因習、死喪同恤、禍災共之、人與人相時、家與家相時、古昔先祀者、各合其氏姓之親而享焉、故謂之氏上、而其中有宗子、宗子者、其宗所同長、故謂之氏長、且國社亦必多用其神子孫爲之祭主、假如大和三輪社、即以大神氏、河內經津主之祠即以中矢作氏、攝津姬氏等、二氏各其所祀之後也、武藏有出雲社焉、蓋亦同其國造之先所由出、其餘率是類也其男女效績、敢淫其心、而各盡其力哉、故古之有天下者、必能得其壽、必能久其祚神武帝在位七十年、百三十七歲、其後王禮二十餘世、亦以上年終于其祚者多有之、不可一一枚舉也、是人命之所循然此臣之所以區々好古、敢望於當今者也、夫當今之時、非不祀、非無政、然觀其所爲、一能若前所云哉、郊祀且不行、而宗廟陵寢、已多就荒、其祀以爲社哉、往往巫覡浮屠氏之所衣食、而其說神奇妖亂、民之所熒惑、首之者、國有常刑、當殺無赦也、然世俗之所爲政、其務惟在刀筆筐々而治之、大體皆莫之祭、是以家日財匱矣、然不知糈之費於淫祀、鄉曰人滅矣、然不知黨之聚於左道、可謂擧男女之調而養士之、中國之民而夷狄之、誠如此則祀之與政、安在其致維一哉、故其誠不至、誠不至、故其爲不篤、爲不篤、是以雖有祀、而非所以爲孝敬、雖有政、而非所以成敎化、民益愚且惑、而鬼神之祟時至、世益降且澆、而禮樂之文末流、莫之憂則已、苟憂則悲憤慷慨、夜以忘其寢、且以忘其起、飲食之時、以忘其正味、何者是禍之根柢、妖人奸民之所爲亂階、自古其然也、所謂祀常世之蟲、何世而無之、天常世之蟲者、常產於橘樹、而其貌蠶爾、如蠶綠、且有黑點、固非有靈異、昔皇極之世、有妖人、曰大生部多々、實能寵神、是蟲而誑其里人、曰常世之神也、能致福、始起於不盡河邊、既而巫覡交黨相唱和、競欺罔百世、所在迎是神、設几筵、羅供帳、

以男女爲群、各享歌舞於其中、則問有神語、曰必授福禱、能使貧者富老者壯、衆由是愈益求媚、不知其紀極、所奉幣帛酒肉及庶羞、縱橫陳於路、或相叫呼曰、福至矣、於是施及都鄙、莫不染汙、索其家、廢其業、將供給於其所惑、乃至鬻田園、飢妻子、尚何念其祖、問神祇禮典之爲、是而不禁也、幾何其不貫於祀、而害於政哉、幸當時有忠智之臣、曰秦造河勝、河勝能察其禍端、而殲多一人、以懲其餘黨、故能止於其未亂、然天下之妖、不必常世之蠱、匿其情、而易其名、愚人莫知也、乃降於中古、若山法師與奈良法師、據幾何、互爲猖狂、不亦然乎、既能以三寶之尊、藉歷朝之寵、其誕妄足以得衆、其傲藍足以爲城、其橫暴威虐、足以傾天下之形勢、當此時、而世之靡弊貧弱、亦職是之由、然其所由來、蓋非一朝也、初佛法之行、當時見其教、能授戒、勸人善、說幽怪、談因果報應、痛懲其不善之心、以爲可資治濟世、以故施之于中國、然其弊惟浸々、求福無厭也、乃王公以下、閭閻之小民、其欲供養於佛、誰敢憚其勞、而惜其身與貨、好度子女爲僧尼、傾家產財用、以造浮屠、而田宅奴婢、盡施入於寺、家不爲此、則不齒於鄉、妖人奸民以妄言、僥倖其間、以享利欲、逞淫欲、不織而暖衣、不稼而飽食、不德而名勢、誣天下欺後世、而其徒循於海內、當倍官吏而半農夫也、在奈良朝廷最甚、爲之屈天子之尊、以奴自居、聖武帝自稱三寶奴 傾州郡之調庸正稅、所在創寺塔、土木荐興作、而天下之費、既已倍於古、延喜中三善清行上言見其序云、欽明天皇之時、佛法初傳本朝、推古天皇以後此教盛行、上自群公卿士、下至普天黎民、無建寺塔者、不列人數、故傾盡資產、興造浮圖、競捨田園、以爲佛地、多買良民、以爲寺奴、以降及天平、彌以尊重、遂傾田園、多建大寺、其堂宇之崇、佛像之大、工巧之妙、莊嚴之奇、有如鬼神之製、似非人力之

爲、分二七道諸國、建二國分二寺一、造作之費、各用二其國正稅一、於レ是天下之費、十分而五、而北遷以還、其費彌廣、加レ之以二帝都新造一、其極二宮室之華麗莊嚴一、固所レ無レ論也、又閨閣房寢之盛飾、遊宴歌舞之玩好、靡々與二時樣一相移、其無レ所レ窮極一、同上至二于桓武天皇一、遷二都長岡一、製作既畢、更營二上都一、再作二太極殿一、新搆二豐樂院一、又其宮殿樓閣、百官曹司、視王公主婿御之宮館、皆究二土木之巧一、盡二雕刻備之用一、於レ是天下之費、五分而三、仁明天皇即位、尤好二奢靡一、彫文刻鏤、錦繡綺組、傷二農事一、害二女工一者、朝制夕改、月異日長、後房內寢之飾、飫宴歌樂之儲、麗靡煥爛冠二絕古今一、府帑由レ是空虛、賦斂爲レ之滋起、於レ是天下之費、二分而一、而梵宇之彫鏤文章、以招二耀湖山一寺、延曆、亦莫レ不レ與レ之相競高一也、則其費當レ十二倍於古一矣、府帑竭、賦斂增、其病レ民蠹レ國不レ少、現及二乎貞觀一、以二頻遇二災厄一、又其費惟古之二十倍哉、同上貞觀年中、應天門及太極殿、頻有二災火一、倖依二太政大臣昭宣公因射之威一、且其之力一、庶民子來、萬邦慶至、修二復此宇一、期レ而成、然而天下之費、亦一分之半、然則當今之時、會非二往世十分之三一、世俗於レ今論レ治道一、必曰二延喜之政一、至二其末年一、飢饉窮困、勢正難レ支、乃天子爽胥惻怛、脫二其御衣一、以慰二天下凍餒之民一、亦已不レ及矣、而陵遲卒令二政綱不二復振一、天地宗廟陵寢、無二能祭一、但若レ由法師一、奉二神輿一、以レ兵入レ京、往々穢二青史一、嗚呼彼雖二名奉レ佛、又何異二於當世之蟲一也、不幸當時以レ無二一河勝能絕二其亂根一、故邪徒蔓延、致二其然一、數百年而皇天震怒、假二手於織田氏一、使三以殘滅幾盡二也、天下之妖、不二必由法師一、匿二其情一、而易二其名一、愚人莫レ知也、近世天草之盜起、亦不二惟其苛政之不一レ堪也、即其地群不逞逋逃之巢窟、其徒一旦觀二時釁一、因二俗之尙レ鬼、唱二邪蘇一、以迷二惑其衆一者、是亦當世之蟲復生也、幸當時復有二河勝之智、織田氏之武一、而亂以遄止、邪蘇自レ此爲二天下嚴禁一、至二於今一不レ弭、然天下之妖、不二必邪蘇一、匿二其情一、而易二其名一、愚人不レ知也、蓋衆人之爲レ性多レ怯、故幼時畏レ鬼則怖、闇則如レ見レ鬼、雖下其壯而常習二於不善一、無二畏慕一者上、至レ有レ所レ病二於其心一、則畏二慕於鬼一、尙可レ安二慰之一、雖二厖巫跛覡庸妄之

言、莫不必信聽、此衆人之性、自古莫不皆然也、古人太質、而太尙鬼、太質者固陋、而不可以諭、又太尙鬼者、於是無畏慕也、夫不可以諭、則聖人莫奈之何、而無復畏慕、何以能制其不善之心、雖聖人盡其至誠、以誘民乎善、苟不至不善、亦莫不因其俗而爲治、則其跡蕩蕩、民不知其所然、故其說神奇妖亂、民之所熒惑、有時乎作矣、雖史官所錄、至其採於衆人之口碑、則有所可怪、（神代卷無論、神武崇神神功紀亦然也）而怪也惟衆人之所畏慕、是以邪徒傅會之妄說、無不市、苟妄說之市、乃邪蘇與山法師、與常世之蟲、凡所以欺罔百姓、今果而無有之邪、果其有之也、夫淫聲美色、固能惑人、然其所以能惑人、孰不知之、左道之惑人也、世俗皆一心、敬信以祈福祥、不憚其勞也、雖其鄙吝無耻之人、不惜其財也、夫群盜蜂起、所在嘯聚山林、侵掠州郡、固爲國家患、不淺々也、然嘯聚山林、恃其險阻、則可闘而持久、必窘於飢矣、侵掠州郡、雖其桀如虎狼、出奇謀、設機阱、而要其不虞、亦莫不顧死就虜、而左道之惑人也、人不惜其財、則猶足以食衆保久、人不憚其勞、則勢可以死戰、其甚者曰、爲法而死無悔、背君又何有、嗟是已雖以飢窘、亦必不肯顧死就虜矣、其爲惑也、浮於淫聲美色、而爲其患也、群盜不啻也、臣考之往時、即若參河一向宗、此即其驗也、山法師之類、彼恃爲國家世讎、不懲于此、亦何以爲然、其所以治之者、固非鹵莽因循苟且之所能去也、夫然則何如、曰宜反其本矣、法先王、考舊章、修郊社之禮、可以昭敬矣、修宗廟之禮、可以昭孝矣、而號令刑賞正出於誠、使天下能知祀之與政、其致維一也、則

人服其義、仰望其祀也、咸獻其力、以供給其禮、所在祀其社、祀其祖、旅于山川、不敢違其望也、還顧墳墓、不忍去父母之邦也、不諂非其鬼、鬼神非其族類、不歆其祀、彼淫祠無福、孰能與其黨、而費其財、妖人奸民卒無所爲矣、所謂知其說者之於天下、其如示諸掌者、於是乎有焉（管氏順民之經、在下明鬼神、祇山川、敬宗廟、恭祖舊、不明鬼神、則陋民不悟、不祇山川、則不威、不敬宗廟、則民乃上棱、不恭祖舊、則孝弟不備、即亦此意也）蓋宗廟惟以其有盛德丕烈、而所置（若伊勢賀茂是也）置不世々也、故其祭之就山陵、古曰山陵猶宗廟也、苟無有之、則臣子何所仰、臣義者遊於京畿、而尋問於累聖山陵之所在、數百年喪亂之餘、莫不咸就荒穢也、臣愚不堪憤、要認其眞、乃數月奔走、卒有所考、不敢顧固陋、竊草其書、命曰山陵志、冀以少補闕典也、萬一有見采、死亦何朽也

政教

士不仕則已、仕而居其位、欲以其君爲堯舜之君、其民爲堯舜之民、夫欲以其君爲堯舜之君者、必先格君心之非、補其闕、勉其所不能、遊宴田獵、爲之有堯所荒、則是有憂於民、如己勸而誘之於淫樂也、而與之行其道於朝、布其德於天下、使一民無不得其所、而一民猶有不得其所者、如己推而陷之於溝壑也、是欲以其民爲堯舜之民者也、今夫有其志者、可無其術哉、所謂術者無他故、必先自修己身而已矣、苟不自修己身、則不能進賢才、退奸邪、以聽君之聽、而明君之視、然後正君之政也、尚何能化民、使知孝弟忠信之義哉、能化民使知孝忠信之義

者、莫不必由庠序之教也、夫庠序之教、豈必人誦詩書、家論道德、若邊鄙之有善行、人之所尊信者、立爲三老五更、制之誥、定之訓、暇之日厰在庠序、長幼使衆坐而聽、日能述前言往行、諄諄然以勸孝弟忠信之義、使民自然化於其所教、是古之所謂、民可使由者、詩書之言、道德之蘊、固非其不使知、必人誦而家論、雖堯舜不猶病之乎、雖然、人子皆孝、人弟皆弟、而人各皆忠信、樂其可樂、憂其可憂、不苟其養、不苟就利、農桑工商、能務其業、鰥寡孤獨、得免飢寒、豐年不敢驕奢、水旱有蓄藏、不虞盜、路無饑莩貧窮、耻奸爲不如死、皐聲少聞、如撻於市、夫若是可以爲堯舜之民者耶、所謂庠序之制、不必壯麗其堂宇、山藻其節梲、苟堂上容數十人、可以揖讓升降則足矣、乃若此制、已無土木之勞、金穀之費、自國都以及於閭巷村落、可以無不行矣、嗟夫世之從政者、多是因循苟且以曠日、動輒藉口於祖宗之法、終無所建明焉、況於庠序之教、孝弟忠信之義、但言雖好、非不可行於今也者、間或有其志如將有爲者、亦惟不過於考之古制、欲以壯麗其堂宇、山藻其節梲、嗚呼其不行也宜哉

今書終

蒲生君平著述

筒井西司校合并藏板

文久三癸亥年八月

江戸書物問屋

日本橋通北十軒店
播磨屋勝五郎發行

柳子新論

山縣昌貞著

柳子新論編目

編目終

柳子新論

峽中　山縣昌貞著

正名第一

柳子曰、物無形而有名者有矣、有形而無名者未之有也、名之不可以已也、聖人由之以寓教其中焉、昔者周公、正名百官、而萬國服其仁、仲尼正名禮樂、而天下稱其德、老聃乃謂有名萬物之母、莊周亦曰、名實之賓、儒家之所修、法家之所習、不一而足焉、我東方之爲國也、神皇肇基、緝熙穆々、力作利用厚生之道、明明其德、光被于四表者、一千有餘年、立衣冠之制、設禮樂之敎、有若周召、有若伊傅、民到于今、無不被其化矣、自此厥後、昭宣忠仁諸公、繼武于聽王之制、從事于大寶之令、綿々洪祉、日盛月降、郁々文物、幾乎不讓於三代之時、至于保平之後、朝政漸衰、壽治之亂、遂移東夷、萬機之事、一切武斷、陪臣專權、廢立出其私、當此時也、先王之禮樂、蔑焉掃地矣、室町氏繼興、武威益盛、名稱將相、實僭南面之位、雖然先王之明德、深浹洽乎民心、則强梁之臣、尙不能無忌憚、是以神器不移、皇統綫存、（評曰、神器不移者是國之所繫、非儒者所知也、君臣之分如天地、尊位正朔、海內不之、

何謂皇統綿存耶）逮乎數世之後、豪傑交起、各據一方、龍驤虎奔、相奪相害、無有窮已、姦賊謀事、戎蠻是寞、首無巾幘、衣無領袖、驕傲稱德、暴逆伐功、當此之時也、一二或憂其民者、亦惟承戰國之弊、苟且之政、荏苒送日、奚知名教所由乎哉、即民之蚩々者、將焉守其士、又將焉安其身、今且舉其大者、官制爲特甚焉、夫文以守常、武以處變者、古今通途、而天下達道也、如今官無文武之別、則以處變者守常、固非其所也、（評曰、文武殊職者、非古制也、出將入相、不易其人、當人何如、處變者守常、當否乎哉、皮相之妄議、豈度得在子哉之意也）且夫諸侯者、國君也、各受方士、世襲其爵、有社稷焉、有民人焉、尚且以將校自處、專出無文之令、乃至如計吏宰官之類、終身不與武事者、亦皆以兵士自任、一致苛刻之政、其害乎治道者一也、且今之諸侯與士大夫、凡居五品以上者、咸受國守之號、若任八省諸官、亦皆有名無實、（評曰、國守之號、有名而無實、蓋以不經、然而亦是小國皇朝故、以患制國吏之權道、不可以常理論者有矣、守時王之良策也）至六品以下、則罔乎無之或聞、吾不知其何故也、況承制於彼、從事於此、則雖欲無武、其可得乎、是其無義無制者二也、將相爲君、納言爲臣、五品之屬、有四品之貴、非尾大不掉、則冠履倒置、唯權凌之、唯威乘之、是其失尊卑之序者三也、且也古之人相呼必以名字、或稱兄弟之行、輓近以來、卿大夫士稱其官、不問其名、乃至士庶人無職者、亦皆妄犯內外官號、兵衛・衛門・助・丞之類、自農工商賈奚奴輿隸之卑、及戲子雜戶丐兒非人之賤、每々必於是、夫律之有法也、私官犯官者、皆罪無赦、若今以法糾之、天下幾乎無遺民矣、是其淆亂、不可如之何者四也、凡如此之類、成俗成風、固非一朝一夕之故也、殿・樣・御・侯・

仕・致等之言語別成一家、文字別生一義、乃搢紳諸士之間、日用通意、亦未知其何義、事々皆爾、物々皆爾、豈非可笑可歎之甚耶、(評曰、萬國以本語爲正、儒者唯以西土爲本、故斥本語爲顛倒、假忘其身爲和人也、聖人正名亦豈欲言語名物、爲萬國同一流乎、夫子說見此邦、則必有不改舊習而行道略也)雖然今之人生長其間、慣以爲常、則相唱相和、似無不行者、若夫施之實事、則罣礙窒塞不相通、於是更立一家之法、亦且顛倒侏離之習、黄貓無別、精粗無分、簡髮而櫛、數米而炊、椎魯無文者、動靜云爲、唯口是命、勦說雷同、復何條理之有、今夫草木之有區別也、以物以名、無不有條理者、人事而如此、嗚呼曾謂不如草木乎、孔夫子嘗謂、名不正則言不順、言不順則事不成、事不成則禮樂不興、禮樂不興、則刑罰不中、刑罰不中、則民無所措手足、彼其衛國如此其甚矣哉、設使夫子寓目於此間乎、未知其謂之何也、政之未墮于地、蓋二千有餘年、可謂久矣、是以其化之被及于海內、可謂廣矣、其德之浹洽于民心、可謂深矣、及其衰也、自龍失水、受制小魚、跋涉千里、暴露冒雨、亦可謂難矣、當此之時也、獲一二忠臣之力、或能復其位、亦且富不若小國之君也、雖然如此尚能保其宗廟、百世不廢、到今四百有餘年矣、權乎雖下移矣、道其不在于斯乎、先王之大經大法、自有律令可見焉、若能有憂民之心、名其不可正乎、禮樂其不可興乎、刑罰其不可措乎、哀哉天下無有其人也、既不能盡復其古、亦不能盡變其舊、其有所不盡者何也、豈爲其知尚物而不知尚名、知爲己而不知爲天下乎、抑亦學政不行、而術智有所不及也(評曰、爲己者利也、爲天下者仁義也、覇者假之、王者體之、治道之盡善矣、盡美矣、在於位而不在于智術也、論之其極歸於智術者末也)

得一第二

柳子曰、夫天得一以淸、地得一以寧、王侯得一以爲天下之貞、豈特天地之與王侯爲然哉、大夫非得一、則不可以治其家、士非得一、則不可以養其妻孥、庶人非得一、則不可以安其身、父不可以敎其子、子不可以事其父、故天無二日、民無二王、忠臣不事二君、烈女不更二夫、弟子請曰、願聞其詳、曰今夫衰亂之國、君臣二其志、祿位二其本、故好名者從彼、好利者從是、名利不相屬、而情欲分矣、即我徒將安依、須富者不貴、貴者不富、富貴不相得、而威權別矣、即我徒亦將安依、於此則爲君、於彼則爲臣、故出謀者、依違不能定其是非、臨事者、首鼠不能決其進退、茫乎如在中野、洋乎如在中流、仁何由乎施、忠何由乎致、公侯皆然、士庶皆然、即我徒亦將安依、苟且之議定、姑息之令出、一以爲是、一以爲非、民之言曰、令行一日、禁止三日、朝暮相變、旦夕相戾、即我徒亦將安依、夫獸有比肩、鳥有比翼、兩々相依、飛走始得、若其相離則病矣、是其爲性也、奚若夫燕雀與犬羊哉、且人見此二物、則必怪曰、支離矣、人而如此、將謂之何哉、今如夫二物、支離則凋矣、然彼自有相依之性、飛走得其處、以食其身、而上無可事之君長、下無可使之臣民、是以自足遂其生則已、人之有道、奚其能然乎、貳於事上、則不義、先王有常刑焉、貳於使下、則不仁、兆民不得從焉、且也今之人、聞婦有二心、則必曰淫矣、臣而有二心、其如之何、夫誠如此耶、婦而貞者則多矣、士而忠者、吾知其必無有也、況夫人情無不有

義、無不有欲、君子徇其義、小人徇其欲、故當衰亂之時、飄然高擧、避世於巖穴之中、縱意於山林之外者君子也、依然自安、屈志於臺閣之上、終身於市朝之間者小人也、昔者黃憲之齊、見隱於漁者、携手論當世之事、乃曰、君子在野、齊其不久乎、彼唯見一君子之不得志、猶且知其政之衰也、若使其望此境乎、必將振衣而去、又奚得踏其地哉、方此時也、雖聖人復起、無若之何耳、爲國計者、亦惟不如復官制以正其名、興禮樂以示其實、君臣無貳、權勢歸一、令行禁止、而後君子在位、小人有所歸也、是之謂得一之道(評曰、北天得一之言是矣、而未知東西兩都爲二一貴、夜其間論、指不當理矣、古知南北兩朝其國有二二王焉、乃論所以向背而可矣、今也無君此臣、何向背之論、夫三分天下、保其二、而服事於殷者、文王之至德也、非吾海內而稱臣者、我國風之美、實宇宙無比而、非儒風所知、異學之徒勿妄鼓口舌、失言之罪、只一字哉、君子慎言也)(又曰、禮者君子之所好、富者小人之所貪、今也天朝獨守其官名而不守其財利、有君子所好之禮而無小人所貪之利焉、其所以世守聖王教其臣之道也、富而好禮者之所歸、不亦其然乎)

人文第三

柳子曰、人生而裸者、天之性也、無貴無賤、蠢々唯食之求、唯欲之遂、與禽獸無以異焉、惟鳥之與獸、飛走以異其能、羽毛以殊其文、大小以分其類、乃至鱗介諸蟲、亦各有其分、譬如草木之區以別焉、人則不然、無飛走之異、無羽毛之殊、鼻口同其體、手足同其形、言語同其文、聲色同其欲、夫然、則無等無差、貴賤何別、故强凌弱、剛侮柔、相害相傷、相虐相殺、攘奪劫掠、罔親疎之不論、亦何少長之問、是以穴居草處、與禽獸共死、與草木並朽者、鴻荒之時乃爾、惟人萬物之靈、靈則神、群聚之中、必有傑然者、能自遂其生、以及人生、能自養其身、以及人身、作食食之、作衣

衣之、敎之桑麻、敎之紡織、利用厚生、無所不至焉、則人之歸之、如衆星之拱北辰矣、亦猶蚩々唯衣食之是、唯利之貪、則何以知其貴賤與親疎哉、故名以分之、爲君臣、爲父子、爲夫婦、爲長幼、才以分之、爲智愚、爲賢不肖、業以分之、爲農工商賈、而後强不凌弱、剛不侮柔、而相害相傷、相虐相殺、攘奪劫掠之俗已矣、因制其禮、而差等分矣、因命其職、而官制立矣、因作其服、而衣冠成矣、作之者謂之聖、述之者謂之賢、奉之者謂之君、從之者、謂之公卿大夫、由之者謂之士、化之者謂之民、故上自天子、下至庶人、無不有冠、無不有衣、而不與鳥獸爲群、是其天性無有所分、而有待夫制者也、故服者身之章也、冠者首之飾也、身無章、首無飾、謂之蠻夷之俗、以別聖人之民、今夫日月之所照、舟車之所通、無不有斯人、而唯其風化之所及、同斯文、同斯章、而後能承其制、能被其德也、故衣冠者、非特拒其寒、爲恥乎裸且跣、與禽獸無別也、制冠以掩其首、制衣以掩其身、裳以掩其膝、屨以掩其足、禮有之曰、不冠不揭、非敬事不敢袒裼、君子死不免冠、豈皆非爲恥乎其體耶、且夫衣冠者、豈特爲恥乎其體哉、亦豈特文其身首哉、位官職事、由此分焉、禮樂刑罰、由此行焉、風俗由此移焉、政令由此布焉、國家由此治焉、四夷由此服焉、而後謂之仁、而後謂之道、聖王之陶鑄天下、實如此耳、故曰堯舜垂衣裳、而天下治、不其然乎、若夫無道之君、則不然、以衣冠爲桎梏、以禮樂爲虛文、是以其爲政也、唯刑與法之任、遂結搆亂階、豈不亦異乎、或承喪亂之後、不及稽古、則雖服之存乎、制非其

制一、文非二其文一、貴賤無レ等、尊卑無レ分、唯其有無之由耳、故當三其在二道路一也、鹵簿之美、車徒之衆、人見而知二其爲レ富爲上レ貴矣、及二其入レ廷升下レ堂也、其衣其裳、裁制無レ異、文采隨レ意、何以能知二其爲レ公・爲レ侯・爲レ伯、爲レ卿・爲二大夫一哉、若乃士庶人所レ服、亦唯有無之由、則富者以レ帛、貧者以レ布、富者常美、貧者常惡、貴賤於レ是乎亂矣、衣二敝緼袍一、與下衣二狐貉一者上、立而不レ恥、後世無レ有也爾、恥レ之之至求レ之、求レ之不レ止、則祿不レ足、而俸不レ給、士民於レ是乎貧矣、富固不レ屬二皮毛一、即人之辨レ之、唯衣是察、服美則敬レ之、服惡則侮レ之、禦侮之意、競求二其美一、驕奢於レ是乎長矣、豈徒爲レ然哉、貴賤失二其等一、而禮俗壞矣、士民患二其貧一、而德義廢矣、驕奢縱二其欲一、而禍亂興矣、凡如レ此之類、其害不レ可二勝計一、是皆衣冠無レ制、而文物不レ足故爾、且也今之卿大夫、當 祭祀典禮之時一、或尙能冠二其冠一、服二其服一、而騶從輿隸之屬、褰レ裳揭レ衣、臀腰不レ掩、大掉二其手一、高踏二其足一、疾走示レ威、狂呼裝レ行、慣爲レ風、忸爲レ俗、我見二其如レ此也、夏畦不レ足レ愧也、於乎足利氏之於二天下一也、末世已有二斷髮之俗一、亦猶二武人戰士之徒僅々隨レ便耳、至二其一變一、則官任二公卿一、職補二將相一、亦皆斬レ髮露レ頂、方髻月額、加レ之以二無制之服一、則所レ謂衣冠之風、化二成戎蠻之俗一矣、醜不二亦甚一乎、昔者漢高平二治天下一、登二庸賢良一、命作二朝儀一、始用二之事一、天子乃知二其尊一矣、夫人之欲二其富一者、以レ有二其財一也、人之欲二其貴一者、以三其有二威儀一也、若其財之不レ存、何以爲レ富哉、即威儀之無レ有、亦何以爲レ貴哉、以二今之人一、着二今之服一、立二今之朝一、行二今之政一、其無二威儀一者固也、亦奚知下夫陶二鑄天下一之道上哉、夫如レ此也、寧以爲二治平之術一

乎、將以爲衰亂之俗乎、寧以爲中國之敎乎、將以爲夷狄之風乎、吾未知其何以處之也、且金元之人寇趙宋也、以漸而天下爲蒙古之有、然猶能不易其俗、而衣冠有法、官職有制、先王之道、未掃地矣、明帝勃興、何賊伏誅、則一洗盡復其舊矣、兆民到今無左袵被髮者也、即知吾邦之俗、縱令有聖賢之君、行古禮、奏古樂、官政率舊、衣冠再舉、亦惟斷髮之俗、裸跣之習、非朝致之久、奚能似中土之人哉、士必不勝枉借、而民心不勝鬱[illegible]矣、是其不可如之何者、澆季之弊、一至于此哉、雖欲無長歎、不可得也

大體第四

柳子曰、治天下國家者、先治其大者、小者從之、故大利不可不興也、大害不可不除也、何謂大利、何謂大害、君仁臣賢、而善人爲政、天下之大利也、君暴臣愚、而小人用事、天下之大害也、大利興、則大害止、善人舉、則小人伏、古語有之曰、權衡誠懸、不可欺以輕重、繩墨誠陳不可誣以曲直、規矩誠設、不可罔以方圓、夫聖人之道、權衡也、繩墨也、規矩也、懸之以正輕重、陳之以正曲直、設之以正方圓、何利不興、何害不除、故舜選諸衆、而舉皐陶、則不仁者遠矣、湯選諸衆、而舉伊尹、則不仁者遠矣、是之謂能治其大者、是之謂能興其利、是之謂能除其害、乃是之謂治國之道也、若夫衰世則不然、見其在位、孰能有其德者、見其在職、孰能有其才者、或叢脞敗事、或倉卒失舉、道將何所從、法將何所由、乃國之不及亡者幸已、夫既然則今之從政者、不能自出

其謀、不能自發其慮、牽因循先世之事、無問可與不可、輙曰、故事爾、故事爾、無如事之不可
窮何也、夫故事可因者、先王之所立、賢者之所定、而歷世無害於政教、行有益於事者、而後
爲可矣、不可則觀其意、察其情、考之古而無悖、試之今而無戾、方可以施有政、何必拘々唯
故之由哉、假令先世有如桀紂者、猶能不亡其國、而其子其孫相嗣王于天下也、亦皆一切因循
其事、刑必炮烙、樂必靡嫚、酒池肉林、以開長夜之宴、而後爲能爲政乎、苟有憂民之心者、雖五
尺童子、必不爲也、是其害之大其可見故也、以其害之小不可見、而依然居之、豈不闇乎、且事
有可行諸古、而不可行諸今者、有可施諸前、而不可施諸後者、故仲尼之言曰、殷因夏禮、
所損益可知也、周因殷禮、所損益可知也、禹湯古之聖人也、夏殷古之聖世也、猶且一切因之、
則有所不行也、損益存其可、然後制作、有可由觀焉者、況今之世、承戰亂之後、距制作之時、
千有餘年、世非其世也、國非其國也、無禮可因、無法可襲者乎、然則其所謂故事者、唯是
割據之遺俗、戎蠻之餘風、以此御天下之民、非其敗事害物者幾希矣、偶有知其不可而改之、
亦唯苟且之措、見一事之利、而不圖後害、則朝之是、而夕之非、昨則得、而今則失、翻覆如波瀾、變
態若風雨、群聚議事、雜駁立論、曾一事之不能決、依違從之、荏苒過時、取譏群小者、滔々
皆然、是以從其事者、見利而進、見害而退、唯欲免其罪、而不欲致其身、讒諛窺其間、便嬖
乘其虛、出財成事、齎貨求私、賄賂之俗、公行于朝野矣、故貧者之萬善、不能勝富人之一非、

而人不勝其謗罔矣、且士之志於靑雲也、亡論才不才、善賂者得之、不善賄者失之、得失之際、愛憎交至、是以日走權貴之門、屑々乎唯幸之求、甚者至於破其產、傾其家、俸祿不給、而鬻妻拏、雖直自買其爵者、何其不智耶、如是之輩、固不知經業之一端、奚足以擧治安之策哉、縱使其得居一官、所志不過財利、以財利之人、執財利之權、財利財利何時已、是皆其害大且可見者、而無一人知其非也、豈非愚之甚耶、董仲舒曰、爲政之用、譬之琴瑟不調、甚必解絃、而更張之、乃可鼓也、今也天下之琴瑟不調亦甚矣、是宜更張之秋也、機且不可失也、擢士爲相、拔卒爲將、固無不可也、不若以義與禮、以禮制人、擧賢良之士、誅諂諛之徒、塞賄賂之途、開廉恥之端、而後始可謂治也、而後始可語道也、是之謂天下之大政

文武第五

柳子曰、政之移于關東也、鄙人奪其威、陪臣專其權、爾來五百有餘年矣、人唯知尚武、不知尚文、不尚文之弊、禮樂並壞、士不勝其鄙俗、尚武之弊、刑罰孤行、民不勝其苛刻、俗吏乃謂、用文之迂、不如任武之急、爲書之難、不如爲刑之易、古何足以稽、道何足以學也、是特鄙夷之言耳、殊不知有文備者、必有武備、禮樂之敎、强禦無當、奉古之爾、而由道之易也、且夫文武猶權衡也、一昂一低、治亂乃知、一重一輕、盛衰乃見、奚可以偏廢哉、是故文武之於天下也、一張一弛、剛柔迭擧、一動一靜、强弱並行、而後能平均四海、民樂其樂、利其利、人到于今、無

不稱德也、詩云、濟々多士、文王以寧、文王所以爲文也、糾々武夫、公侯干城、武王所以爲武也、若夫有武王之武、而無文王之文、則何以見夫郁々乎哉、有文王之文、而無武王之武、則何以見夫赫々乎哉、文武之不可以偏廢、豈不昭々乎、即今之人、生不執一經者、寤思寐思、焉知其然哉、不知而言之、非妄則狂、固不足掛齒牙也、雖然、天下之民、僭々不勝其鄙、惝々不勝其刻者、吾奚忍坐而視之哉、殺身成仁、君子之所不辭也、今夫文之昭々者、禮樂無斯爲盛、而輓近鄙陋之俗、乃謂不近人情也、冠昏喪祭、或不知其目、琴瑟竽笙、或不見其器、國無養老之禮、鄉無飲酒之法、綴旒舞佾、且不知其爲何物、則先王之衣冠文物、亦曷知其爲何設哉、蒙昧至此、再復弊葬、唯人不可無別、亦不可無儀也、則私智妄作、不能不以此易彼、而吏禮於是乎起矣、横臂脅肩、驕敖之容、以跛屣乎朝廷之間、婬娃殺伐靡嫚之伎、以踊躍乎廟堂之上、彼所謂婬樂瀆禮、不容於先王之朝者、公然爲天下之經矣、即小民生其間、而目不知一丁者、以此爲美觀、固不足怪已、若夫稍知事情、而與國家之議者、宛然見其如此乎、爲恥莫甚焉、不尚文之弊、寧至于此哉、且其爲尚武者、吾又未爲然也、夫官之分文武、以其不可相兼也、譬如牛與馬也、馬能致遠、牛能任重、性蓋爲爾、若使馬也任重、牛也致遠乎、皆其所不堪也、今夫任文者、所學詩書禮樂、故其爲人也、溫柔敦厚、慣以爲德、大之則卿相、小之則府吏、蓋其能也、假令其被堅執鋭、在師旅之間、亦焉見賁育之功哉、若其任武者、所執矛

擐貴鉞、故爲其人也、或極精烈、習以爲性、大之則將帥、小之則騎卒、蓋其當也、假令其結纓垂
紳、行俎豆之事、亦焉見游夏之容哉、是其不可相攝也、可以見已、今也天下之爲士者、列位
已廣、冗員倍多、亦唯便宜執事、非文非武、彼將以何爲任乎、籩豆之事、則不知也、軍旅之事、
能出其謀者、蓋鮮矣、甚者終身不執一兵、而手如柔荑、顔如蕣花、俟駕而後行、俟茵而後坐、假
使其騎驍執良、任折衝之事、則股已不勝鞍、而指亦不勝弦矣、若其兵士、則或能取長短之兵、
數經險阻之地者、間亦有之、然其爲長爲正者、素不聞韜鈐之教、而管轄無制、訓練無法、則
其不進、令不退、旗幟之不辨、號令之不聽、以此當敵乎、吾知其適取敗之道也、余見夫所
謂節制者乎哉、勝國以降、其能不然者、僅々可指數已、昔者將門割據于關東、純友救應于南海、
強僭竊號、暴逆傾數州、秀鄕貞盛奉師、則兇賊遁逃、叛臣授首、惡路稱王、劫略東夷、寬黨及神
器、坂君提兵、邅然向東海、則群盜伏竄、頑寇失魄、夫此二人者、生在山野海島之間、日養其勇、
月長其智、完聚得其道、指麾由其法、故能制大敵、功無比於海內、千載稱威猛、百世稱驍勇、是古
之能任武者也、況當此二人之時、尙武之俗未起、如軍團諸將、上奉兵部之制、下承部國之令、尙
且勇悍精銳、有紀律、有節制、使之赴征伐之事、則一舉而如振枯矣、豈非以其有文事者、必有
武備、詩樂之教、强禦無當耶、由是觀之、今之所謂尙武者、亦特虛語妄說耳、文武之不可以相
無也、不其然乎、不其然乎、仲尼之言曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥、而今之於天

下、豈特民爲然乎、乃至卿大夫士、亦惟免之求、而曲從阿諛、一爲海内之俗、廉恥之心蕩然、又安胥之君子之朝、嗟夫如此乎、要之皆尙武不尙文之弊爾

天民第六

柳子曰、古昔所謂天民者、其數四焉、曰士、曰農、曰工、曰商、士善服官政、以勸天下之義、農善務稼穡、以足天下之食、工善制器物、以濟天下之用、商善爲貿易、以通天下之財、此四者、上奉天職、下濟人事、相憂相養、相輔相成、不可以一日相無者也、先王視民、如視其子、民視先王、如視其父母、父母善教子、子善養父母、而道存其中焉、是以上下和睦、無有怨惡、國以治、人以安、猶且有所憂慮、立官命職、禮樂以導之、號令以敎之、秩祿以富之、爵位以貴之、衣冠以文之、干戈以威之、量之以才、命之以事、率之以義、使之以時、賞罰有信、黜陟有典、而後兆民懷之、四國化之、是故士者、長四民、共天職者也、士者奉君命、令天下者也、士者行仁義、輔庶政者也、士者體忠信、布德教者也、當今之時、士氣大衰、内無廉恥之心、外無匡救之功、上廢天職、下誤人事、蚩々與商賈爭利、妨農傷工、殘害以稱威、飽食・煖衣・逸居以稱德、日食其粟、日用其器、不知所以報之、驕奢成俗、身貧家乏、秩祿不贍、而取給商賈、假而不還、爭論並起、賈豎之黠於利、少成如故、習慣如自然、先爲不可勝、而待敵之可勝、彈唇鼓舌、智巧百出、鳥獲爲之怯、莫邪爲之鈍、況彼固是、而此固非、雖欲勝其可得乎、且大商之於富也、居貨萬

計、奴婢千數、居處器用、錦繡珠玉、皆我所不足、而彼則有餘、是以封君俛首、敬如父兄、先王之所命、爵位安在哉、德義之教撥矣、是無它、官無其制也、夫農者能播百穀、春耕秋穫、草處露宿、手足胼胝、作役以奉上、餘力以養父母及妻子、孜々不怠者、農夫之事也、夫人無食、則不生、貴爲王公、富有四海、而爲司命者非農乎、故先王命司農之職、勸男稼穡、教女紡績、薄稅斂以富之、省力役以安之、視之愛之、鰥寡咸被其德、後世則不然、磽确之地、斥鹵之田、日竭其力、月加其功、才得儋石、則姦吏爭其利、所稅什六七、與調庸併收、不盡不已、偶有肥壤、所入可以當食者、則盡而計之、稜而正之、與課役並賦、不竭不措、窮乏至死、曾無回顧、夫如此則士無肥瘠、歲無豐儉、凍餒相依、遂廢其業、計盡術窮、則有販鬻逐末者、有奔走乞食者、有散轉溝壑者、有亡命爲盜者、有劫略相殺者、人愈少、而地愈荒矣、負郭二頃之田、所收不過斗筲、加以水旱之災、則有束手而俟斃者矣、故民之在閭巷、善鬻者富、善耕者饑、視之先王之典、豈不異乎、且其爲吏者、不學無術、唯知錢貨可貴、而見利廢義、則商賈之權、上侮王公、下凌朝士、使工如奴隷、視農如臧獲、厚生之道亡矣、是無它、官無其制也、若夫工者、能製器物、以利天下之用者也、而亦皆與商賈爭利、錐刀是競、則材皆麁惡、器皆窪窳、不日而成、不時而毀、唯欲其易售、不欲其堅緻也、要非不能爲也、爲此則富、爲彼則貧故也、況在官局者、多養奴隷、稱爲弟子、彫琢刻鏤、一出他人之手、而已不能正一規矩、服美食旨、亢顏自稱大匠、實是

一賈竪媒レ財者已、是亦有レ實者無レ名、有レ名者無レ實、而利逐レ名而入、背レ實而出、夫誠如レ此乎、刺二猴瓊葉一、亦何益三於養二其身一哉、故今之百工、即商賈之庸奴耳、何足三以論二工拙一也、利用之道壞矣、是無レ它、官無二其制一也、故今之民、身日勞、財日空、是以斷然乃謂耕無レ益二於食一、織無レ益二於衣一、士亦曰、學無レ益二於身一、業無レ益二於家一、乃廢二其事一、而奇邪之從、譸張之務、於乎世之逐レ末者、何其多、而務レ本者何其寡耶、古者有レ言曰、上之所レ好、下有二甚レ焉者一、先王察二其如一レ此、故貴レ德賤レ財、以禁二民邪慝一、所下以敎令明二於上一、而風俗美中於下上也、今且須下置レ官立レ職、抑レ末復レ本、奪二商賈之權一、與中農工之業上、而後士氣漸復、各樂下其所二爲レ生、則四民得二其處一、而天下居レ安矣

編民第七

柳子曰、古者治レ民之法、有二編伍一、編伍無レ法、則民不レ安レ土、民不レ安レ土、則國多二亡命一、國多二亡命一、則盜賊並起、治レ民之害、莫レ大二於盜賊一、近世承二衰亂之後一、編伍失レ法、戶籍不レ明、十室之邑、尙有下不二相識一者上、況通邑大都、無賴之民、亡命破レ家者、歲以レ千數、然去レ此居レ彼、則不レ知也、故潛匿在二都下一者、或終身免二追捕一、還爲二安逸之人一、僥倖起業、能致二千金一者、亦不レ爲レ不レ多、而一旦編二列其籍一、則與二鄕豪土著之民一、終無二相別一焉、若乃窮民不レ能レ爲レ生者、奔走乞二食道路一、至三於轉二死于溝瀆一者、曾不下爲二隣里一所上レ憐、或薙レ髮爲二僧尼一、糊二口四方一、或竊盜傷レ人、受二刑佗邦一、患難不レ救、疾苦不レ問、無二貴賤一、無二親疎一、唯其冷煖之察、則名同二門井一、而實不レ啻二仇視一、囂々乎家二交於里巷之間一、吠々乎狗二爭於閭

閭之中者、豈不亦悲乎、雖然、如僻邑寒鄕之俗、猶或存古質之風、怖官吏法、則尚未爲甚矣、至于都下群萃之民、則輕蔑王公、威侮士人、視之如嬰兒、以竊其貨財、以掠其妻孥、詐謀以稱智、剽略以爲勇、爲徒爲黨、以至于自樹名號焉、官所不能制、法所不能罰、遂假之力、追捕他盜賊、用之諜、制他暴逆、則彼自恃其爲官、含益使侮天下之民者、奚知其非借賊兵齎盜糧之比乎、可歎之甚矣、又有名稱處士、僑居乎市井之間、以技爲生、以財自售、而榮其身者、又有名稱浮屠、假開場、貸房設席、誘導鳩募、以治其生者、又有名稱巫覡、搆屋爲祠、設壇代神、咒咀禍祥、賣卜求符、以成其家者、此數者、治世必有之人、而鄕里所崇、小民所尚、固不爲無徭也、然彼自處其身、一以爲士、一以爲僧、爲巫覡、出無受令長之敎、處無列編戶之籍、則僭莫甚焉、亡命無賴之徒、潛吹其間、而挾奇邪之術、欺人誣民、放蕩縱恣、大開賭場、竊匿罪人、誘蕩子弟、眩惑良民者、蓋居其半矣、且也近世之處刑、其罪不至死者、或黥、或髡、或加笞杖、而後官沒其財、放逐其身、則星散無所歸者、不可勝計焉、而其暴惡、固非刑所能懲、則不能或自改其過、以競其業、是以欲寄親戚、則擯而斥之、欲託僚友、則禁而罵之、使之無衣食之計、無容身之地、則窮困莫甚焉、小人窮斯濫矣、況其性之所固有、死灰寧不復燃乎、遂群來結黨閭里之間、竊盜攘奪、以妨人產、剪徑騙局、以害人生、如此者、亦不爲少、是皆盜賊蒼生、禍及國家者、不可見以爲常態也、宜復編伍之制、明戶籍之法、令戴毛含齒之屬、上有

レ所レ管、下有レ所レ由、綱擧目張、不レ容二掛漏之謗一、而後士著之俗成、刑措之化行矣、其於二治國之道一、庶乎可三以爲二一變一也

勸士第八

柳子曰、農工商賈之謂二民之良一、所レ謂良者、利レ用厚レ生、相輔相養、以有レ益二於國家一者也、故先王立レ師以敎レ之、立レ官以治レ之、愛レ之親レ之、視レ之如レ子、編伍有レ制、使役有レ法、推以與レ士相胥、謂二之四民一、所二以爲下良也、若夫倡優戲子、則由二人之利一、受二人之財一、以悅二人耳目一、徒養二其口腹一、不レ能レ爲二人衣食一、存レ之無レ益二於國家一、不レ存無レ害二於國家一、故先王斥レ之、不下與二四民一伍上、戶籍相別、婚姻不レ通、是其視レ民、愛有レ等、親有レ差、類分群聚、使下之各專二其業一、以遂中其生上者、仁之道在焉、後世則不レ然、薫蕕同レ器、淄澠一流、良雜相混、戚族無レ分、編戶之法壞矣、先王之政歇矣、甚焉則倡優或受二士祿一、無レ功而富、無レ德而貴、卒至レ有下變二其業一立二服官政一者上、原二其所下由、無下非二佞幸嬖寵之進一者上、汲々乎求レ之、戚々乎去レ之、故其行也、逞二私智一以欺二王公一、縱二利欲一以虐二庶民一、讒慝諂諛、暴戾誣罔、適賊二夫良家之子一、豈可レ不レ悲乎、且士之輕薄者、毎與二倡伎之徒一居、數入二雜戲之場一、日見二其冶容一、而聞二其婉言一、則謂二人材無二彼若者一、欲羨歎慕、遂失二廉潔之心一、便佞口給、唯優之傚、壯强者爲二比老一、幼弱者爲二燕支一、久而化レ之、則士氣爲レ之萎薾、鄙俚猥雜以釀二成乎宣淫之俗一矣、況優伎之操レ音、非二淫娃一則殺伐、奪二人心志一、盪二人情性一、其傷二中和之德一、不三特鴆與二斧斤一乎、即今之士大夫、亦不下徒聽二其音一、視中

其容動學其使習其曲、甚者至於郊廟朝廷祭祀典禮用之、以易韶舞、王佚舞之、卿相奏之、稱美善盡于此也、觀夫其爲音也、無節無制、聲律不慨、宮商無序、非和非應、相喚相叫、曾鳥啼猿嘯之不若也、舞則不文不武、進退無法、周旋無度、歌則侏離鴃舌、無興無趣、無景無情、託夢託妖、亦何意義之有、若其絲竹可和者、則繁手數節、靡々褻慢、中冓之言、尚可聞也、斯言之鄙、不可聞也、亦唯上之所好、下必有甚焉者、則其移風易俗、疾於置郵傳命、諸如此之類、可恥而不愧、可惡而不惜、士氣之衰竊矣、夫士非忠信、則不可以與政、非廉恥、則不可以處事、此四者、志以固之、氣以達之、若志氣兩衰、則皮之不存、毛將何屬、果如此耶、假令其有才有藝、文以衣冠、而唯是優孟耳、何以爲君子、何以爲士大夫、是豈非編伍無法、而雜于猾良之弊耶、唯如巫醫百工、與藝苑衆技之流、則有異焉者、何則以其爲國家之用也、夫人之於技藝、有好惡、斯有能不、其好而能焉、則妙年或稱奇異、不好而能焉、則童習白粉、奚可以誣乎、故先王之立教、有師有官、選而舉之、登而庸之、而後天下無有遺才矣、叔世則不然、凡名一才一藝者、幸一蒙擢拔、則無問能與不能、子孫奕葉、相嗣爲一家之業、欲已而不能、是以強沿其事、則不以此爲桎梏者、蓋鮮矣、亦奚得能窮其蘊、而成其名者乎哉、後世官家寔々乎無出奇才、而素餐居多者、職此之由、且也技藝之有嗜好、不徒如酒色、則布衣韋帶之士、破產學屠龍之術、殺身習彫蟲之事者、比肩接武于宇宙之間、則其在今日、華門圭竇、寧無假儻豪邁之才哉、而

唯是冀北之群、未三嘗遇二伯樂一顧一、則慷慨悲歌、徒憤二死于巖穴草莽之中一者、亦幾許人也、昔燕王聽二郭隗之言一、而能信三駿骨値二千金一、則天下之賢士無レ不レ應二其徵一矣、可レ見三好レ賢之至驗、疾二於影響一焉、雖二今之時一、苟有下能好レ之如二燕王一者上、士亦豈不レ願レ造二其門一哉、唯夫科擧之無レ法、而使下能者屈而不レ伸、不能者强爲中不レ欲之事上、而責以レ無二其人一者何耶、是特揚下無レ益二于國家一者上、而抑下有レ用二于天下一者上、曷以爲二勸レ士之道一、亦曷以爲二安レ民之道一也

安民第九

柳子曰、魚之在レ池也、無レ不レ思二淵藪一、鳥之在二樊籠一也、無レ不レ思二山林一、無レ它、皆其所二自安一也、卽民之於二天下一、豈不二亦然一乎、先王知二其必然一、視レ之如レ子、愛レ之如二手足一、故爲二其可一レ安、而民安レ之、爲二其可一レ樂、而民樂レ之、其旣安矣、又旣樂矣、是以民之視二先王一、亦猶レ視二其父母一、孰不レ歸二其仁一者也、詩云、愷悌君子、民之父母、今夫浮屠之爲レ敎也、曰、生爲レ善者、死入二樂地一、百福並臻、其爲レ惡者、則墮二地獄一、苦惱無レ窮、苟聽二其說一者、無レ不三駸々乎勸二其善一矣、無レ不三慄々乎懲二其惡一矣、是亦無レ它、欲二其所一レ安也、夫天堂與二地獄一者非三親見處一、而非二必到地一也、尙且聞二其安樂一、則喜レ之、聞二其苦惱一、則懼レ之、徒喜二懼之一已哉、甚焉則棄二妻子一、舍二貨財一、不レ患二饑寒一、不レ怖二斧鑕一、視レ死如レ歸、唯其不レ遑之憂、是亦無レ它、生不レ如レ此、則死不レ安也、以下不二必可一レ得之安上、斷二不レ可レ忍之欲一、比三諸魚鳥之思二淵林一、豈不二亦甚一乎、且人有三不レ可レ免之患、與二不レ可レ雪之恥一、則必曰不レ若レ死也、凶年饑歲、走

若以二彼可一レ安、易二此不一レ安、則必不レ然也、安レ之之道何如、曰、今之爲レ政者、概皆聚斂附益之徒、蒙二其禍一者、獨農爲レ甚、若能用二循廉之吏一、無レ奪二農桑之利一、則天下食足矣、天下食足、而後民安二其業一也、又用二循廉之吏一、無レ縱二商賈之利一、則天下財足矣、天下財足、而後士安二其職一也、士安則國强、民安則國富、國强且富、天下之福也、夫然後禮樂可レ興也、賞罰可レ明也、是之謂二安民之道一、是之謂二長久之策一

守業第十

柳子曰、夫民之居レ業也、父子相承、世々不レ變、各安二其土一、各治二其事一者、先王之治也、是以上古之民、能知二其道一、而力二其業一、食以レ此足、器以レ此堅、財以レ此通、用レ之者無レ損、爲レ之者不レ乏、季世則不レ然、士之祿不レ如二農之利一、農之利、不レ如二工商之富一、工商不レ如二巫醫一、巫醫不レ如二浮屠一、而俳優倡伎、別得二一封彊一、幾何外道、更開二一乾坤一、卽民之汲々乎、孰能脩二其業一、而守二其事一者、逐レ利而走、隨レ欲而變、昨荷二耒耜一、今則販鬻、朝執二鑪鞴一、夕則呪咀、鷸冠之士忽羨二倡優之態一、息心之侶、或奉二耶蘇之敎一、彼其庸夫、固不レ知二是非之辨一、亦奚遑レ問二其邪正一哉、居レ此則危、入レ彼則安、爲レ此則窮、爲レ彼則達、見レ利而進、見レ害而退、衆人之情也、卽今之俗吏、何以能禁焉、且也如二大邑通都一、邸第官舍、連レ甍繞レ城、飛閣接レ天、卿相居焉、侯伯朝焉、結駟連騎、絡繹不レ斷、轂擊肩摩、襟袂爲レ幕、自二俳優雜劇舞伎倀子之屬一、至二使熊狙工支離盲聾之徒一、視者如二堵墻一、巫覡符章、浮屠念誦、乞者接レ踵、求者

累貯、積帑如山、賽錢如土、居之者不貢、賣之者不征、異服之不譏、異言之不察、市縱波斯之觀、府積金帛之美、茶肆酒肆接簷、地無青艸者、方數十里、是以天下之民、去鄉去國、競而歸之者、猶蟻之著羶、日不知其數、則人益多而土益狹、城闉之外、寸步不容一人、是皆逐末作利之徒、至耕織務本之民、則掃然無聞矣、是故都下之給衣食、日盡鉅萬、食今糈玉、猶且以為慊焉、乃關外四野之民、輸運千里、盡力竭財、行役數歲、田蕪野荒、夫廢其功、婦罷其機、唯末之逐、唯利之求、亦何暇恤其妻孥哉、古人有言曰、一夫不耕、則天下有受其饑者、一婦不織、則天下有受其寒者、乃窮民之無聊者、或挾異術、眩惑愚人、或憤怒激發、劫掠正長、甚則有蹈壘登城、通訴其主者、亦皆為之則得、不為則失故耳、如今之俗吏、生在輦轂之下、唯見此富足、而未知彼窮乏、概曰、古今之盛世也、天下之美土也、殊不知陰陽泰否、變易不居、益乎此、則損乎彼、天地之至理、儻一旦有不測之難、旌旗掩目、金鼓駭耳、矛戟當前、矢石接後、騎卒並奮、而水火乘之乎、不知其將出何謀也、拒之者吏士、禦之者卒徒、亦皆群聚苟合之兵、進退唯見厥利、則揮鞭而走、負旗而遁、固可以前知也、況士人之所使、奴隸輿夫之賤者、亡命無賴、無勇無義、或出刀鋸之餘、傭力糊口、寄寓為生者、尚何望其為曲制哉、以此為緩急可使者、不亦愚之甚耶、是皆見一時之小利、不慮後患、人窮民憂、而培養禍根者爾、故古之治天下者、務本其利、務賑其窮、廣及四國、推達四表、而後民安其土、人專其業、是以世長清平、而國日富庶、書曰、無偏無

黨、王道蕩々、無黨無偏、王道平々、治民之謂蕩、治國之謂平、豈非無偏無黨之謂邪、今之爲政者、其爲蕩々乎、其爲平々乎

通貨第十一

柳子曰、足食之道、莫先於勸農事、通貨之計、莫先於平物價、物價不平則農病矣、不縱商利則價平矣、古之時帝王能制其農、故夏五十而貢、殷七十而助、周百畝而徹、名雖異、而實皆什一而已、後世乃有租調之法、率亦什稅一二、賢人君子猶且以不若古道也、其下者、周官有司市質劑賈師泉府之職、鹽鐵茶馬之征、奕世莫不置義矣、爾近以來邦國之中、或什取五六、加以調貢庸、則稼穡之力、卒不能償其費、是以田野日荒、農事日怠、怠斯窮、窮斯濫、濫斯散、散而不復、則年穀不登、而食不足矣、唯夫商賈則不然、價賤則居、價貴則賣、賣居在己、而利如援矣、且夫大商之食人、動至千百、奴隸臧獲、衣帛食肉、徒手居肆、舉止亦何勞之有、況其所用、凡百器玩、鏤金彫玉、無式無度者、實府充庫、娥眉皓齒、有容有姿者、滿座盈庭、其餘金帛藏而不發、納而不出、倉廩如山、委積如丘、買地買宅、一夫或私千戶、賣房賃舍、一人或占千萬、居之者不厭、而置之者無損、故一商廢居、輒傾一國之人、狡猾之才、揣摩之術、無禁無制、唯其所欲、則其富幾與封君相抗、故天下之異樹珍禽、絕世奇怪之物皆歸之、錦繡綺穀、華美輕煖之物皆歸之、珠玉歸之、金鐵歸之、膏粱肥肉歸之、美果旨酒歸之、巫醫工匠歸之、俳優雜伎百爾技藝者亦

其半一矣、且地之肥瘠、如二有レ常者一、亦未三必不下由二人力一、而加以二水旱之災一、則有下古之所レ謂膏腴不上レ若二磽确之地一者上、況民力之所レ加、專二於薄賦之田一、而租稅之所レ增、偏在二豐穰之地一、則今之賣レ田、上者直不レ如二下者一、乃其買レ之者、亦唯擇二其下者一、而不レ求二其上者一、夫田之有二上下一、以分二其所レ入多少一、而今或反レ之、吾未レ知二其何故一也、若今更二正其溝洫一、改二定上下之等一、因計二數歲之入一、以爲二租調之法一、令二計吏不下得レ逞二私智一、則民業必安、而農事必擧矣、是其足レ食通レ財之道爾、然則天下之大利、豈止此而已耶、曰否不レ然、今天下之士大夫、託請得レ官、納レ賂取レ貴、則饕餮之族、盤二桓于廟堂之上一、貪賺之俗、羅二織于輦轂之下一、故士庶人之贄、或破二一家之產一、卿大夫之贈、率傾二一歲之俸一、贈レ之者多、而酬レ之者寡、則貨皆聚二威權之門一矣、乃士大夫之欲レ立二其身一者、十室之邑、儋石之俸、奚足三以養二其妻孥一哉、是以其志二仕進一者、唯欲二其富一、羨二其利一、貪慕之情一萠、而廉恥之心罷矣、其害二乎敎化一者一也、又其居二權貴一者、不三必無下慾、而贈レ之者、不三必無下辭、則不レ得レ已而受レ之、及二數贈數受一、則不レ能三必無二回護而薦下之、擧レ之不三必問二其賢愚一、是名稱レ選レ人、而實爲二賣レ官者一矣、其害二乎政事一者二也、且士大夫之在レ官者、已以レ賂得レ之、則其於レ人亦不レ能三必不下然也、故善賂者好レ之、不二善賂一者惡レ之、官宦宮妾、乘レ之以貪二其利一、以達二其欲一、忠信之士退、而貪戾之俗進矣、其害二乎風俗一者三也、求レ事者唯乘二彼欲一、啖レ之以濟二己事一、則權勢之家、轍跡不レ絕、而罷レ官之門、雀羅可レ設矣、是其害二乎人情一者四也、權勢之家、其臣妾之有レ寵者、固亡レ論已、至二於僮僕奴婢之屬一、亦皆受二其私一、而富二其財一、食レ肉衣レ帛、

過居終レ歲、奢侈過二其分一矣、是其害二乎制令一者五也、五者皆害二乎天下之事一、而財爲レ之不レ通、貨爲レ之不レ足、豈可レ不レ禁乎、敢望立二公侯以下常制一、聘幣有レ數、問遺以レ禮、却二饕餮之族一、移二貪賺之俗一、犯者刑レ之、逃者罰レ之、則高貴者必廉、而卑賤者必直矣、夫然後公侯能守二其社稷一、卿大夫能保二其祿位一、士與二庶人一能安二其身一、以及二其妻子一、是誠天下之大利也、俗吏之計不レ出レ此、一切行二打算費用法一、汚レ朝淹レ士、妄與レ民爭レ利、上附二勢利之人一、下受二制於賈豎一、使二天下之財日不一レ通、食日不レ足、而身自窮者、可レ謂二至愚一矣、客有下議二政事一者上曰、通レ財足レ食之道、既得レ聞レ命矣、敢不二敬從一、唯夫物之有二貴賤一、如レ不三必由二多寡一然、古者米石二一兩、尙且不三以爲二大貴一焉、今也價不レ過二其半一、而饑乏倍レ之、民有二菜色一、野有二餓莩一、敢問其故何也、曰、是亦易レ知已、夫食貨之有二軒輊一、猶二權與一レ衡乎、多則賤、寡則貴、理之所二必然一、而且反レ之者、抑亦有レ說焉、今年穀之不レ登、將レ倍二於古一、是以死者如二亂麻一、而錢貨之不レ通、亦且三二倍於古一、雖二則食之不一レ足、其數實多於貨一、是非二物重而權輕乃使一レ然也、況乎吏之貪戾、力竊二民之脂膏一、強約二國家之用一、貴レ貨賤レ食、口畜二積錢鈔一、歲減二鉅萬一、則紅腐之米、徒爲二富商驕傲之資一、委積之財、曾不レ給二窮民一朝之食一、當二此時一也、雖レ有二常平義倉之良法一、何以得而行レ之哉、居然待二其斃一焉者、可レ歎可レ慨莫二斯爲一レ甚矣、是豈特民爲レ然、士之受二俸祿一者、亦唯糶二於賤一、糴二於貴一、出入枉費、徒爲二商賈之利一、則一歲之入、卒爲二他人之有一矣、是豈天地之自然哉、財貨之不レ通、抑亦人爲之使レ然也、久レ之不レ變、至二於聚斂云盡一、則石不レ直二一錢一、亦猶以爲二饑歲一、是其不レ關二豐儉一者、是

其不係貴賤者、食貨之政、所以不可無也

利害第十二

柳子曰、爲政之要、不過務興其利、務除其害也、利也者、非利己之謂、使天下之人、咸被其德、由其利而食足財富、無所憂患、無所疾苦、中和之教、衆庶可安、仁孝之俗、比屋可封、是之謂大利、其反之則害、害不除則利不興、故古之善治國者、務興之、務除之、而後民由之、興之之道何如、曰、禮樂也、文物也、除之之道如何、曰、政令也、刑罰也、夫此二者、惟君自奉、惟君自戒、而後民從之、不啻君自奉、實奉天之職、昔者禹自奉諸軍、以征有苗曰、非惟小子敢行稱亂、蠢茲有苗、用天之罰、湯既克於桀、有其位、方其天大旱、則曰、萬方有罪、即當朕身、朕身有罪、無及萬方、不憚以身爲犧牲、是皆非以求其富貴、干其福祿、安其心志、樂其耳目也、務興天下之利、務除天下之害耳、古之聖君賢主、孰其不然哉、雖然、務興其利者、非其道則不興也、除其害者、非其道則不除也、可由之謂道、禮以敎中、樂以敎和、中和之至、天地位焉、萬物育焉、豈非興利之道乎、惟民之蠢々、或失所其由、而過亂自取、則從而罪之、除其害之道也、夫然後懲其惡、勸其善、爲善者多、爲惡者寡、則天下之利興矣、禮樂文之具也、刑罰武之事也、文以守常、武以制變、文以致治、武以撥亂、是故文順、而武逆、順而興利、逆而除害、順逆互用、以能陶鑄天下、善任此道者、謂之德、不善任此道者、謂之不德、善知此道者、謂之

可レ封、以永致二天下之福一、詩曰、於戲前王不レ忘、其唯以レ此乎、嗚呼夫如二今之時一、依然承二軍國之制一、滔々乎不レ知レ反者、雖レ欲レ不二歎息一、其可レ得乎、然則如レ之何、曰、是唯在レ得レ人、得レ人非レ難、獲二於人一爲レ難、昔荊靈好二細腰一、民有二約レ食而死者一、越王好二勇力一、一鼓而士不レ避二焚舟一、夫約レ食而死、與下赴二焚舟一者上、天下之至難者也、然上之所レ好、不レ令而爲レ之、無レ它、爲下獲二於人一之難、而欲レ之之甚上也、況其非二至難一者乎、苟能好レ之、重趾而至焉耳、不レ爲レ此而爲レ彼、要無レ心二於興一レ利也夫

富彊第十三

柳子曰、食足謂二之富一、兵足謂二之彊一、富且彊者、天下之大利也、食既足矣、兵既彊矣、而後國可二以無一レ虞也、是以先王不レ貴二珠玉一、而貴二稻粱一、不レ愛二姬妾一、而愛二黎庶一、不下以二無益一害中有益上也、故盤石千里、不レ可レ謂レ富、衆人百萬、不レ可レ謂レ彊、盤石不レ生レ粟、衆人不レ拒レ敵也、地廣而乏レ食、民衆而不レ使、奚以異三盤石與二衆人一哉、是不三特天下爲二レ然、諸侯之於レ國、大夫之於レ家、士之於二妻孥一、無レ不二皆然一也、故聖王不レ怖二其寒一、而能蔽二民之寒一、不レ厭二其饑一、而能救二民之饑一、所下以菲二飲食一、惡二衣服一、而人無中之間然上也、易有レ之、損レ上益レ下、益之象爲レ然、損レ下益レ上、損之象爲レ然、天地之至理、自有二如レ此者一、闇君庸主、務弱二其國一、務貧二其民一、故有二天下一、則天下爲二之怨一、有二一國一、則一國爲二之怨一、怨則叛、叛則濫、如レ此而難レ不レ及者、未二之有一也、古稱國無二九年之蓄一曰レ貧、無二六年之蓄一曰レ窮、無二三年蓄一、曰二國非二其國一、夫其蓄積豈特爲二自養一哉、亦將下以救二其民一、備中其難上也、後世有レ國者、或無二一年之食一、

甚者逆折數歲之入、尚且不足、而取之大夫、大夫不足、而取之士、士不足、而取之妻孥、豈皆國非其國耶、一旦奪之爵、使其盡償其債乎、雖易子折骨、吾知不能給一飯也、夫如此、則何以能藩屏于王室、而固其封疆耶、是以其士日窮、其民日叛、忿怨激發、自不能無陵犯之心、然國固貧、兵固弱、不能屈彊自奮、屏息避之、則天下實似無容慮者矣、闇愚之主、乃以爲彼貧而我富、彼卑而我尊、則以磐石之固、居泰山之安、治平之術莫以尚焉、姦臣賊吏、聚歛附益、以悅其心、阿諛逢迎、以順其旨、甚則比之唐虞三代之治、爲雅爲頌、曾無有箴規之言、而使其自誇其智、自伐其德、無知事情、無知時勢、則闇者益闇、愚者益愚、而亡在旦夕、而不自知之也、夫大木之折、必由通蠹、大堤之壞、必由通隙、而不加之疾風暴雨、則不折不壞、然以無風雨、不危其蠹隙者愚之至也、且夫渴馬而馭之、非眞馭之也、得水草則益逸、饑虎而伏之、非眞伏之也、見肥肉則益猛、是不特馬之與虎也、鳥窮則啄、獸窮則攫、尺蠖之屈、以求伸也、龍蛇之蟄、以存身也、當是之時也、英雄豪傑、或殺身成仁、或率民徇義、忠信智勇之士、誘掖贊導、以扇動天下、則如饑者就食、渴者就飮、奮然而起、靡然而從、勢自有不可禦焉、洗寃雪恥之心、感恩圖報之志、奮勇勵義、則放伐之易、可謂通蠹之木、通隙之堤、加之以疾風暴雨者矣、至此始知曩之所謂泰山之安、不特幕燕之危也、是其所以損益之理、蓋可見、而存亡之機關於此焉、故有國家者、不以無益害有益、則人君之事畢矣、昔衞公愛鶴、有乘軒者、及其有難也、

民皆不從、而曰、君使鶴、今人君之所愛好、亦皆將然、夫如此而不自悟者、何也、聚斂之臣補之欲、貪戾之吏飾之非、使道義之言不得入耳、知力無所徒、德性無所養也、古之人目短於自見、故以鏡觀面、智短於自知、故以道正己、人君之學、不在身脩六藝之文、不在口誦百家之言、苟知道之可信、斯足矣、知道之可信、則知道者至焉、至焉而信之、姦賊將何自而興、國無姦賊、則天下之難已矣

駒嶽之陽、蘭水之曲、吾家居之、六世焉、享保之初、數被水患、修築不及、因移其宅、故地種以菽麥、畝間偶獲一石函、中藏錢刀、皆元明以上所鑄者、函底有一古書、題曰柳子新論、腐爛之餘、不便披閱、先人乃謄寫一本、凡十三篇、當時既有歷校定者云、後廿餘歲、先人歿矣、余得而讀之、其言論政體可否、間有可取者焉、亦多憤勵之語、意者中葉以降之作耶、觀其斥耶蘇幾何之類、蓋亦在織田氏時耶、按之國史傳記、滕國以上姓柳者不一而足、則亦未可定何人所爲也、余且惜衰亂之際、尚能有斯人、亦有斯文、而煙滅至于此也、但以先人手澤存焉、憚示諸外人、於是更繕寫一本爲副、其藏之巾笥、庶幾俟良友論定、以爲永世家藏也

寶曆己卯春二月

峽中山縣昌貞識

柳子新論跋

吾日本上古之世、穆々乎道其至矣哉、以至于寧平之間、治無可復比也、自保平之時而降、覬覦之賊斯起、綱紀漸壞、政教闔廢、乃穆々之道、竟爲烏有焉、及至于勝國之時、則亂不可得而言也、夫治亂天也、雖然當斯之時、若有上奉君下憂民之人、出而施天誅乎、賊忽斃矣、道再興矣、嗚呼三四百年間、奚獨亡其人耶、意者有之、亦不得志於當時、而湮滅終亡聞耶、是未可知也、柳子新論者、柳莊先生之先人、所嘗獲於隴畝中之書、不知撰者之時代、先生蓋以爲在織田氏之時耶、吾請而讀之、其所論專所以纘寧平之治之術、而於彼賊之罔極、深慨激憤發者、毎事在焉、於是乎吾乃曰、其人果有焉、亦唯斯人不得志於當時、特以終立言耳、悲夫、吾於此雖欲無歎、而可得乎、斯書也吾思其不可以一日無焉、因乃贈寫一本、而又題微言於其後者爾

寶暦甲申春三月　武藏　山田　毅　識

柳子新論跋

野人議乎朝政、爲有僭踰之罪、故君子愼焉、官吏晦於治道、不免於尸位謗、故哲人愧焉、是以學者之憂世者、有論政事、則或託言於異人、或爲得諸古塚石棺中、蓋神之以取信於人、奇之以求加價者也、讀焉者有自曉其非之益、而議焉者無被罪於非其任之憂、一不以空錫特智之天眷、一無以失君子守身之慮、可謂一舉兩得之者矣、適讀斯書、深謀遠圖殆似矣、但惜至於兩都向背之論、有大不然者焉、蓋未投著於聖賢肺腑、不察有俗風有時勢、而不可懸一定權衡以推萬方、漢學儒風之偏見爲祟者耳、恭惟方今天朝之尊也、高坐九重雲上、掌人臣官階之權、而不管租稅財貨之利、世々有聖主獲賢臣之德、而逆賊梟帥斷朶頤神器舐糠大寶之念也、寶祚之愈長、益與天壤無窮、猶泰山安、天下有道之士、俱誠歡誠喜、誰不爲頌賀焉乎哉、乃其於所論、不自揣粗加愚評於其上、秘之篋底、以俟識者之斷定云

寶曆十三癸未初秋中澣

下毛野　松宮主鈴菅原俊仍識

柳子新論後序

瑰奇卓異之士、埋沒于世、而人莫識之者、以其被姤賊讒害、而不能發其抱負也、柳子新論者、山縣昌貞之父、獲之於隴畝間石函、其書凡十三篇、論政體可否、罔不盡詳、慷慨激烈、切當時之弊矣、我邦自保元平治之亂、王綱解紐、禮樂壞廢、群雄割據、四分五裂、蔑如王室、擅柄權、臣殺其君、子殺其父者有之、至織田氏之時、醇樸温厚之風、斷乎掃地矣、柳子豪傑、憤其如斯、攘臂於其間、峻辯劇論、欲救當時之弊、故其所議未能無小疵、然其意在尊王室、懲亂賊焉、嗚呼使如斯瑰奇卓異之才、無所施其蘊、埋沒於世、而莫識其姓名者、幸因昌貞之父獲之隴畝間、斯書得永存乎世、豈非千載之知己乎、余喜其志尊王室懲亂賊、而惜議政體之不詳焉

天保九年戊戌冬十有一月冬至日

江戸　芙山々人橘正秀撰

柳子新論附錄

與松主鈴書

久有泰斗之望、而未得一面識、非室之遠、豈相思之未深歟、屬與横國手周旋、愈益得聞高誼、价以修字於左右、勿罪不恭幸甚、僕嘗藏先人所獲新論者、居常謂顧待同志論定、而後爲永世之珍、與横子論文之餘、言偶及此、則其書爲足下所披閲、且見跋其後、而亦以深謀遠圖稱焉、是既與僕所見者似矣、則得而討論者、非足下而誰也、夫是非之論以私則異矣、以公則不焉、僕唯欲以公道論也、不欲以私意矣、如兩都向背之論、足下謂有俗風有時勢、不可懸一定權衡以推萬方、僕則以爲不然也、何則俗風不可改者、蓋在下之言爾、苟陶鑄天下者、何所忌憚而拘拘乎茲哉、古曰移風易俗、又曰舊染汙俗咸與惟新、唯時勢則固不可若之何者也、然聖人亦因此、以爲敎其中、而姑處之以權、漸變之以令至於道也、不則禁何因乎止、令何因乎行哉、然則陶鑄天下之道、並時勢與風俗、共置之術中者也、夫道一而已矣、不得已而後權焉、若不然而諉曰時勢爾風俗爾、則是爲人所化、而不能化人者、將何以能御天下哉、後世敎化之陵夷、風俗之頽敗、職此之由、足下以此爲漢儒偏見者、僕竊不取也、恭惟古者盤余天皇、龕定區宇之

初、神武天皇肇基以降、列聖相承、創業之德、以能維持其風、而大布播其化者、幾乎二千載、景雲擊壤、民莫得而稱焉、可謂一定權衡、能推萬方之外者矣、至於叔世、此道漸衰、保平壽治之難、王綱解紐、鎌倉鬼逃之餘燼、禮樂塗炭、遂釀成陪臣專權之禍根、當此之時、殺身成仁者、獨有楠公之忠耳、下及足利氏爲政、君臣失位、冠履倒置、傑豪梟帥割據四方、而天下之亂極矣、天朝之衰、益且甚所容雖、則徇欲懷利之賊、其孰不復覬覦者耶、嗚呼風俗之敗、一何至於如此也、足下謂之泰山之安、吾未知其何以也、動極而後靜、皇嗣幾存、才復其祀、尊則尊矣、如正秦則曾不若一大夫之賤、吾每聞之、慨至嗚咽吞聲也、且也足下所謂人臣官階之權、省中之事則吾不知也、在外多出武臣私義、而濫授非其人、名實相乖者、莫斯爲甚、若其出公義者、武弁之徒蔑視如徒役、雖不敬之至矣、無之能罪者、權將何乎有哉、若夫不視租稅財貨之利、爲上謀則善矣、抑不復有恤民者乎、而與其事者、亦唯濫授非其人、則凍餒之患、加以苛刻之刑、民業爲之廢、地力爲之盡、苟反身而識者、孰不爲疾首蹙額乎哉、夫如是、而委之風俗與時勢乎、是豈異於所謂執刃殺人、而曰非我也兵也者哉、如之何得謂世有聖王獲賢臣之德耶、及皇威下能合制諸侯、君子重其義、小人賴其利、雖然奉多承軍國之制、而未復冠冕之政、以故名有未正者焉、言有未順者焉、是特有道之士、所爲不慊已、足下誠能投著聖賢之肺腑、則固自知之矣、何必待僕之言哉、唯夫野人議乎朝政、爲有僭踰之罪、則想足下婉曲爲說者歟、僕特欲以公道論此

事上、故敢質二諸左右一、爲レ僕無レ所レ隱幸甚、時下漸涼、千萬自重

八月七日　山縣昌貞頓首上

大知己主鈴菅君足下

復二山大貳一書

謂醫橫地生袖二一小册一來示、曰、是足下昔庫之所レ藏也、僕受而卒レ業、有レ所二感發一、少加二愚評一、卷末繫二一語一、以示二醫生一、不レ料讀二吞賜一、特辱二盛教一、披レ緘懷慙慄々、以レ僕爲レ足レ可二討論一、而見レ質二高見一、病拙何敢當二其望一、第蒙レ不レ見レ鄙、敢不レ拜レ德、因再顧二新論一、作者晦二乎其名一、故愚潛嘆二其不一レ失二君子衛レ身之誠一、而今足下欲下直與レ僕論二當世之事一、戾二前修之用上レ心、而有レ似レ犯下居二是邦一不レ非二大夫一之禮上者、何也、僕嘗聞、昔有二燔レ書坑一レ儒焉、雖下是固出二於秦之苛政、李斯之剛愎一、然儒者誇二己才能一、漫鼓二唇吻一、以議中朝政之所上レ隱也耳、近日京師神學家竹內某、以二失言之罪一被レ逐、亦其類也、是以愚不レ敢二令置對一、假令被二婉曲爲一レ說之請一、亦追下夫子禮二於魯一之蹟上、則所レ不二敢辭一也、但爲レ承レ勿レ所レ隱之懇一故、不

得已二三不與時政者、粗述愚見以應來命、如左、原夫本邦君臣之定分、猶天日之不可易也、
人々奪皇胤之心、各具其性、故其勢雖揚龍飛、得掌握海內者、不敢奪神器、是以開闢以來、
至于今日、大號搢々、炫燿於四夷、何謂皇統如綫乎、如夫西域、雖聖王有德、而子孫不能永世
有其位矣、性具之俗風有所不同也、是漢人之所不知焉耳、但時勢之不齊、聖君不世出、人
材亦難獲、秕政來災、王綱解紐、四分五裂、蜂起鼎沸、王人不知武、不能統一之、威權漸移
武將、自然得之、已而文官大姤土氣之盛、欲賂武威以復舊、而不自知其謀破身死、而致天
子巡狩之變、雖是出於武臣橫逆之甚、然天實不之與也、如無爵譜之虞、是以觀其器誠不堪成
大事矣、其號則似變古、其實則欲成己之私者也、天不之與、亦宜矣哉、當誡文官貪權、反不
及武家之治術、觀平宗之速亡、可見焉、恭惟中世以還、至治之盛莫今日若也、然而比之聖人之政、
以暴來、仝之毀、則何時乎得無所嘆、亦可小容忍也、夫權與利固小人之所爭、天下之權自移
於武家後、爭奪攻伐總在于下、翡翠爲羽所殺、麝香爲臍隕命、戰勝功成、而堪成治之器者、
乃就請封冊、豈非世世獲賢臣之道乎哉、足下所嗚咽吞聲者、獨藤利也耳、抑亦末矣、且也其於
有宮殿營構、及非常大禮、則無不盡天下之力役以調貢焉、有何所不足乎、何過爲之憂耶、
僕所申眉路者、獨名教也耳、方今雖女主之嫥約、亦履天位而不危矣、豈非泰山之安乎哉、僕
嘗潛傳聞、操則天皇、有東照神君鎮下仰上之功勳、永矣不可廢之勳焉、嗚嘻晚時勢之明主

矣哉、君臣如レ此、其合體也、鄙人何容三喙於其間一耶、夫三二分天下一、有二其二分一、以服二事於殷一者、文王之德、儒者所レ稱也、並二呑國一、而守二君臣之禮一者、我國風之美、宇宙載籍之所レ未二嘗見一也、誰可レ不二欣服歌頌一乎哉、昔在如二南北兩朝一、是國有二二主一焉、宜レ論二向背一、當今君委二於臣一而不レ疑、臣奉二於君一而不レ貳、向背何論之有、其他不レ多及一、有二禮經所レ謹守一也、足下請勿二復問一レ統、惟亮察、時景金涼佇運、千萬保衛

九月三日　　松宮俊仍頓首拜

復

大翰大貳山君足下文几

柳子新論　終

栗山上書

柴野邦彦著

栗山上書

柴野邦彦著

一 天下を御治め被レ遊候には、恩威と申二ッに越候儀は無二御座一候、權現樣天下を得られ候も、天の御助とは申ながら、畢竟此二ッ也、御德御備り被レ爲レ遊候故にて御座候、恩と申候は、文德の事にて、天下中の人民御恩德難レ有やと奉レ存候樣に御政道被レ遊候事に御座候、威と申候は、武威の事にて、天下中の人民へ御上の威光を奉レ存、畏候樣に御政道被レ遊候事に御座候、扨恩と申は、知行俸祿を被下置、御年貢納所を被レ遊候事計にては無二御座一候、惟天下中の人民、上は大名高家より下は乞食非人まで、誰彼との指別なく、利口のものも、鈍の者も、只一筋にむごや可愛や、何卒して無事安樂にくらせかしと御思召、御慈悲の御心にて御政道被レ遊候事に御座候、只今天下中の人民大名高家より乞食非人等に至る迄、天とも地とも、父とも母とも奉レ御奉レ願候は、將軍家より外には無二御座一候なれば、御上に此御慈悲の御心無二御座一候ては、誰を賴み何國へ手寄可レ申哉、一日も生活仕事相成不レ申候、夫故御上にむごや可愛やも被レ爲二思召一候御心だに御座候得ば、下のもの其儀骨髓に徹し、難レ有やと奉レ存と

奉ㇾ存候人眞實心より起り申候て、御上の御爲には、如何成火の中水の中にも飛入可ㇾ申候と奉ㇾ存候様なる所存に罷成申候、左様に御座候得ば、天下はいつ迄でも太平なるものに御座候、若萬々一無法もの御座候て、五人や三人御上へ對し、野心を挾み申候ものの御座候とも、少しも御氣遣に相成不ㇾ申候、王者は天下に敵なしと古人の申は此事にて御座候、扨又威と申候は、權高詞高に切突打叩仕候事にては無ㇾ御座ㇾ候、天下御身體御潤澤にて、御譜代大名御旗本の面々器量才覺發明に有ㇾ之、兵學武藝の達人多く、風儀律義に御上へ忠義を奉ㇾ存、只今如何成大變御膝本へ起り候ても、五萬や三萬の精兵は半日の間にも相揃候御手當御座候て、日本國中の大名小名は不ㇾ申及ㇾ、假令唐天竺より事起り候とも、力づくにても、智惠づくにても、將軍家の萬分の一にも御敵對申候事は存も不ㇾ寄儀と、皆人存候様に御武威有ㇾ之事に御座候、左様に御座候得ば、天下に如何程豪强の者大器量の者御座候ても、其威光奉ㇾ見候てはおそれおのゝき候て、相工み申候野心も其儘消に相成、手の前へも出得不ㇾ申候、古人の「折衝千里之外」と申、又「消ㇾ禍未然」と申候は此事にて御座候、惣て天下の武備と申者は、武士の刀を指候と同じ事にて御座候、武士の嗜として腰物不ㇾ見苦ㇾ様に仕候て指候得ば、切剝强盗豪强理不盡の者も自然と恐れ候て近付得不ㇾ申候故、一生人を切申候事は無ㇾ御座ㇾ候、又不嗜にて錆刀の作無と仕候を指申候得ば、得手して豪强理不盡者に見あなどられ、切剝强盗に付られて刃傷に及候事有ㇾ之候ものにて御座候、夫故武士の腰物をみがき申候は、人を切り不ㇾ申爲に御座候、天下の御武威を御みがき被ㇾ遊候は、亂を與

さゝる爲にて御座候、扨又恩威と申二ッの物誠に車の兩輪の如く、一ッもかけ候ては成不ㇾ申候中に、恩の内には自然と威籠り申候、威の内には恩は籠り不ㇾ申物に御座候、夫は如何と申候に、御上より御恩德の御政道に御座候得ば、下萬民貴賤より難ㇾ有や忝や、此御恩には火の中へも飛入可ㇾ申と奉ㇾ存候心起り申候得ば、御威光は自然と强く相成申候、其上右の樣なる心萬民の心によく染入候てだに居申候得ば、假令天下の御武威に少々弱み御座候ても、少々謀叛人御座候ても、天下に少々騷御座候ても、少も御氣遣に成不ㇾ申候、其證據は唐土にては漢の世、日本にては近く鎌倉北條氏を御覽被ㇾ遊候はゞ相知れ申候、漢の高祖と申者寛仁の德御座候故、天下萬民思ひ付候て天下を取たまひ、其後又文帝と申帝猶又仁政を施し、萬民をあはれみたまひ、相續代々民に德を施したまひ候故、十二代目に王莽と申者出候て天下を奪ひ申候得ども、萬民漢の德を忘れず有難く思ひ居申し候故、又光武皇帝と申帝出たまひ、直に天下を取返し、又十二代續き申候に、其後又曹操と申者天下を亂し申候て、漢の勢甚衰へ申候得共、萬民猶も漢の恩德難ㇾ有と思ひ、心放不ㇾ申候故、蜀の昭烈皇帝と申帝又漢の天下を取立、二代迄持ちこたへ申候、前後高祖皇帝より五百年計相續き申候、○北條時政は右大將賴朝公の舅と申候て、御當家の御大老の樣なる者にて御座候所、泰時、時賴など申人出て、代々下へ恩澤を施し候故、天下の萬民北條氏におもひ付、却て將軍家はなき物の樣に相成、後には後鳥羽院を隱岐國へ流し奉り候程の威勢に相成申候、其後相模入道高時と申大惡人出候て、又々天子へ敵對仕、後醍醐帝をも隱岐國へ流し奉り、其外惡逆無道に候得共、猶も天下の人其下知に隨ひ候て、天子へ弓引官軍と合戰仕候、畢竟陪臣の身として九代まで天下の權威をとり、其上大名小名も大惡無道の高時が下知に隨ひ、萬乘の天子へ弓引候樣心得申候事、全く泰時、時賴の恩德萬民の心に染入居申候故に御座候　威と申物は、其威光さめして嚴しく下は思ひ離れ候ものに御座候、加之小賢き豪傑の者其威光の透間をねらひ申ものに御座候、唐土にては楚王項羽、楚王項羽は大勇者の軍法上手にて、漢の高祖を數度苦しめ、三年の間に天下を切從へ申候得共、仁德無ㇾ御坐候故、下の者は思ひ離れ、又八年目に直に亡び申候、苻堅は同じく勇者にて智謀深く、數年の間に天下を切從へ申候、百萬の軍勢を引具し、晉の國へ攻掛り申候所、唯一夜の間に悉く亡び申候、織田信長、太閤秀吉は目前の事にて、誰も存候事に付申上候には及不ㇾ申候、此兩君共に武勇計にて仁德無ㇾ御坐ㇾ候故直に亡び失せ申候事にて御座候秦王苻堅、日本にては織田信長、太閤秀吉などを御覽被ㇾ遊候得ば相知れ申候、　御當家の御政道權現樣以來、御代々御明君樣方

御文德と申、御武威と申、恩威兼備り無二殘處一可二申上一方無二御座一候と申內、私儀方々遍參仕、萬民の存込候所を能く相考見候に、天下の人民御上の御事を難レ有と奉レ存心よりは、奉レ恐候心多候樣に奉レ存候、扨又御威光と申も、唯權高に打叩仕候計にて、正味の所感じ申候樣に、近頃私儀愚痴無智の者の不レ奉二憚上一過言の至に奉レ存候得共、恐ながら減じ申候樣に奉レ存候、有德院樣には此譯よく御合點被レ爲レ在二御座一候故、樣々御仁政をも被レ成下一、御武威も御勵し被レ爲レ遊候得共、日數もたち候へば、下下の者は又々騷立申候樣に成行申候、御代初の御仁政御武威被二仰出一候て、無二殘處一御政道恐入奉レ感候事に奉レ存候得共、什は下の事を御上には不圖御存知不レ被レ爲レ遊候ても可レ有二御座一かと恐なる了簡に奉レ存候間、萬分が一ゟ御政道の御益にも相成可レ申におゐては、太平の御代に生れ逢申候て、御恩澤を蒙り申候御報恩の萬分が一にも相成可レ申やと、承及見及申候事を書付指上候事、左之通りに御座候、左に申上候內には、承違ひ覺違ひ可レ有二御座一候得共、不調法ものにて筆は廻り不レ申、過言無骨も可レ有二御座一候へども、其所は御赦免被レ遊、君の萬々一御用にも相達申事も御座候て、御取上も被レ下候はゞ、如何計難レ有奉レ存候

一　君は舟、民は水、水よく舟をうかべ、又よく舟をくつがへし、民能君をいたゞき、又能君を亡ぼすと申候、民の波風起り申候は、下情が塞り候故に御座候、夫故古より下情を通ずると申候事は、天下を治め申候第一の事に仕候、下情を通ずると申候は、下のうい難儀を御上によく御存被レ爲レ遊候事

にて御座候、下情にだに通じ申候得ば、天下はいつまでも太平なる者に御座候、下情が塞り申候と、天下は今日も相知れ不ㇾ申物に御座候、其例し古にも幾等も有事に御座候、漢の文帝唐の太宗、周の世宗、宋の太宗抔は皆下の事を能御存被成候故、皆天下太平にて御座候、隋の煬帝、唐の玄宗抔は皆下の事を知り不申候故、皆天下を亡し申候、委く事は大學衍義などへ御書被ㇾ遊候得ば相知れ申候夫故右の聖君賢君は色々樣々に致候て、下の事の知れ候樣に致申候、大舜と申聖人下の事らい新儀申聞せ候へば、拜をしたまへりと申、其外唐の太宗抔は、皆下の事を色々にして御問たまひ候忠臣は又色々樣々に仕候て下の事を上へ知らせ候樣に仕候、周公旦と申聖人は、無逸と申民の難儀の事を記し候文を作り、又農業の苦勞の事を七月と申詩に作り、成王と申帝へ進め申候、眞徳秀と申人は、大學衍義と申書を作り、[illegible]と申人は[illegible]と申書を作り、何れも萬民の苦勞の事を書記し候て君へ進め申候、其外忠臣賢者等も君へ民の難儀を申上候事、書物に數有ㇾ之候事に御座候下の事を上へ御聞被ㇾ遊候事は安き事の樣に御座候得共、甚だ難き事にて御座候、惣て賤き者の貴人へものを申候は、假令其事の申損じに付て、罪科に行るゝ旨は無ㇾ御座ㇾ候ても、威光に押れて十の物が五ッ六ッならでは得不ㇾ申物にて御座候、まして下萬民の御上へ御訴訟申上候には、筋により重き御仕置被ㇾ仰付ㇾ候事も御座候得ば、百姓士民共難儀に及候事御座候て、御訴訟申上候とも、名主庄屋の前にては十が五ッも申候得ば、名主庄屋は御代官手代の前にて、十が四ならでは得不ㇾ申候、夫より御代官御勘定奉行御老中と、御役人衆段段と傳へ申候ては、十が一も上へ相達し申候得ば大き成る事に御座候、又其内には少々依怙贔負も出來、又は御機嫌損じも可ㇾ仕と奉ㇾ存候ては指扣不ㇾ申上ㇾ候得ば、百の物一ッも御上へは聞へ不ㇾ申ものにて御座候、扨又御役を相勤め、並御側近く御奉公申上候面々は、生れながら富貴に育ち申候者ゆゑ、下のうい難儀は一向不ㇾ奉ㇾ存、假令其内下の事を存候ものに御座候ても、何卒して今日目前御上の

御機嫌の克樣と奉レ存候へば、たとへ御上へ下の事を思召候て御尋被レ遊候ても、御前の御役目に掛り合候者は不二申及一、其外の者も先は御機嫌の損じ不レ申候樣にと奉レ存候、又は役人にも當り障りを相考へ、誰人も皆下は豐にくらし候て、上の御恩を難レ有がり候とならでは御返答不二申上一候、右樣御座候ては、下のものは御訴訟申上度うい難儀御座候ても、上へは遠く御威光は恐し、御訴訟も不二申上一、上へは下は常々無事安樂にくらすと計被二思召一候て、萬々一御政道の御無理なる事御座候ても、如何成明君も御氣付不レ申物に御座候、下のものは御威光奉レ恐候得ば、一度や二度二年や三年は、假令非道の御政道にも御違背は不二申上一候得共、五度も十度も、十年も二十年も御改不レ被レ成候得ば、後難儀につめられ御下知に違背申候事も出來仕候、左樣御座候節は、御上には御政道に無理はなきに、下として御下知に違背仕候は惡き奴と被二思召一、下の者はケ樣に難儀な仕候に御上に餘りに御情なきは御恐しきと奉レ存候樣に成行申候、是を上下隔斷すと申候て、土崩の勢と申物に罷成、天下一崩れに崩れ候物にて、天下大亂の基此より大きなる事は無二御座一候、其譯を有德院樣には能御存被レ爲レ遊候て、訴訟箱を御出し被レ爲レ遊候より以來、下のうい難儀も上聞に達し、夫々に理非の相立候樣被二仰付一候、如何計難レ有がり、誰人も御仁政を不レ奉レ感者も無二御座一候、勿論只今において天下中に御上を奉レ怨候ものは一人も御座有間敷、御役人衆も皆々力を盡し心を盡し御奉公仕候得共、尚又末々田舍の事は御上に御聞被レ遊候事も可レ有二御座一かと、左に一二條申上候

一　人々難儀と申内、理非の立不レ申候程悲しきものは無二御座一候、身體國天下を治め候と申は、萬民に理非を立遣し候事に御座候、總て人の意地にて理を曲られ候得ば、身體をつぶし一命を捨候ても、理を立度ものに御座候、夫故聖人の御代には、寃民と申て理を曲られ、鬱憤を抱居申候ものゝ御座候事を殊の外耻としたまへ候事に御座候、文王と申聖王は「一夫不レ得二其所一、則思レ於レ己推而納二諸溝壑一」とて、天下中に一人も理を曲られ候て、鬱憤を抱居候者御座候得ば、ぬしの自穀溝川へ推込たまひ候様に思召候と申事にて御座候、唯今に於て勿論御役人衆も才發にて、御捌も明白に、御無理は無二御座一候得共、殊之外御裁許隙取申候故、田舍の者は其間江戸に逗留仕居申候、其上訴訟人一人のみにて無二御座一、名主・五人組・親類・緣者まで證據人に召集られ、御裁許の相濟候まで長逗留仕申候間、入用多分失却仕悪く仕候得ば、一度の訴訟に身上をも潰し申候間、夫をいとひ申候て、大體の事は無理横領に逢候ても堪忍仕、御訴訟不二申出一候樣成故、豪强の者共所を見込、人の金子抔を借り候て拂不レ申、又は人の田地抔を横領仕我儘を申、律義の百姓共も難儀に相成申候もい毎々御座候、去々年中も備中の者とやらんに御座候、近所の者へ金子を貸し置、段々催促仕候得共返し不レ申、其上樣々惡口ども仕候故、腹立の餘御當地へ罷出御奉行所へ奉レ願候て、御理判頂戴仕罷歸、其者へ渡し申候處、其者豪惡の者にて御理判も違背仕、金子を返し不レ申候間、重て又江戸へ罷出、御差紙頂戴仕罷歸り相渡候處、御差紙も違背御役所へ罷出不レ申候間、金主又江戸へ罷出、追差紙を頂戴仕罷歸相渡申候得共、尚又違背仕江戸へも罷

出不レ申候故、金主又々江戸へ罷出、有之譯を御奉行所へ申出候所、御奉行所にてあつかひに仕相濟可レ申段被二仰渡一候由、其金主は備中より江戸へ二百里餘り四度迄往來仕候、入用二百兩計失却仕、身上を潰し申候、其上にて扱に仕候へと被二仰渡一候は、餘り御情なき御捌きなりと申候て、鬱憤の餘涕を流し申候由承り及申候、ヶ樣の事は輕き事の樣に御座候得共、畢竟日本國中の萬民天道より將軍家へ御預け被レ成被二指置一候樣なる物にて御座候、其預りの人民の中に理をまげられ候て、御上を御情なきと奉レ存候樣のもの御座候ては、天道の御心にも御叶被レ遊間敷奉レ存候、其上下萬民御上を奉レ賴候は、外の事にては無二御座一候、唯理非を御立被レ下候樣にと奉レ存候事計にて御座候間、爰の處は明らかに無二御座一候ては、下の思ひはなれ候ものに御座候に、才覺の者は何土民の五人や十人馬鹿理屈を申候事の譯に付不レ申とて、何程の事の可レ有二御座一など可レ申候得共、如何成輕き土民百姓も、人は人替り不レ申、大名高家も士民百姓も、天道より御覽被レ成候ては、御心は夫是との差別は御座有間敷、理を曲られ鬱憤に存候は、百萬石の加賀守も、田地一反持不レ申候土民も同じ事にて、此所の理非を御立被レ下候は、只今日本國中に將軍家をとりのけ、其外に誰可レ有二御座一候哉、然る所ヶ樣の被二仰渡一は、誠に御情なきと申候も理りに奉レ存候、ヶ樣の事は是のみに限り不レ申、御代官御旗本領などには幾等も有レ之事のよし承及申候、下民は天道より將軍家へ御預け被レ成、又將軍家より御役人衆へ御預け被レ成被二指置一候事に御座候得ば、御役人衆は御上の御爲に御上の御心に成替り、萬民の理非を明

らかに立違し可申役に御座候間、随分下の者の申出能樣に可致筈に御座候處、近來威高權高にして少の事も事六ヶ敷取成、長く隙どらせ、下よりは命がけ身體がけにて無御座候ては、物の申出されぬ樣と仕かけ申候、御役人衆の風儀に相成居申候、畢竟左樣に御座候儀、御役人衆共節々に不鍛錬にて公事訴訟も多御座候て事繁く手前共々仕落も出來可申かし、面々身構を仕り御奉公へ踏込み不申故にて御座候、御役人衆の風儀左樣成行き申候も、本は御上の御役割り不宜故にて御座候樣、私體愚痴無智の推參千萬ながら奉存候、先第一只今御代官と申もの、殊の外輕きものに御座候て、十萬石十七萬石の所を、漸五百俵三百俵の御旗本へ被成御預被指置候て、只御年貢の取納計御役目に相成、公事訴訟樣の事は自親裁判仕候事相成不申候故、少々の事も皆江戸へ罷出、御勘定奉行御町奉行へ訴出申候、御勘定奉行御町奉行抔は生れ立より江戸にてそだち、田舍へは足踏も不仕候者故、遠方田舍の事は平生委敷存込居不申、其上役處の願受の訴訟と、方々より持懸られ、殊之外取込申候上に、彼の仕落のなき樣、御申譯の立樣に被存候卑怯心にて、名主。五人組。親類。縁者抔證人大勢相集、一往にて埒明候吟味も、五度も三度も掛り、詮議に隙取裁斷も埒明不申者の如く、民の難儀に相成申候、加之御役人衆も只自分の言譯立候樣にと計存居候得ば、證人の口だに合申候得ば御申譯立候間、大抵にて事濟、詮議の行屆不申事も可有御座と奉存候、何卒此以後御代官はせめて三千石以上の御旗本へ被仰付、其添役に唯今の御代官位の者を三四人ツヽも被仰付、其國へ引越居申候て、公

事訴訟其外盜賊様の輕き事は、皆其所にて裁判仕、毎年十二月に添役の者一兩人江戸へ差出し一々申上候、右又大事にて伺不ㇾ奉候ては相濟申さぬ事は、臨時に添役可ニ指出一奉ㇾ伺候樣被ニ仰付一候はゞ、御代官を相勤め候者も常住其所に居馴申候て、萬民の爲不爲を平生能存込居申、又百姓共の人柄も能始終存居申候て、公事訴訟等の節も理非善惡早くわかり申候て、下の者に欺かれ候事無ニ御座一候、其上一國の人民を打渡し預け置申候て、随分自親踏込相勤、萬事心を碎き、上下の爲に相成可ㇾ申百姓の豪强の者、御役人常住に居申候はゞ、横領非道をも得仕間敷、律義の者は御訴訟御願申上候も、江戸三界遠方罷越候失却も無ニ御座一、如何計萬民の爲と相成、天下長久の基に相成可ㇾ申と奉ㇾ存候（大身御代官被ニ仰付一候得ば、本文に申上候に限り不ㇾ申、盜賊の爲にも甚相成可ㇾ申と奉ㇾ存候、盜賊の事は別條に可ニ申上一候）

一　只今上の御爲に萬民を治め申候は御代官にて御座候、御代官と申物は、随分支配の村里風儀も律義に、盜賊濫者少く、萬民上を不ㇾ奉ㇾ怨樣に仕候御役目の第一にて御座候所、只今の御代官は只御年貢を取納申候計を御役目の樣に覺居申候、其譯は御年貢を一粒も餘慶取立候得ば、働に相成候御役目の樣にて、御役替等も被ニ仰付一、其外の風儀盜賊拆の事は一向御上にも御構無ニ御座一候故にて御座候、夫故御役を相勤候者は、御年貢を一粒も澤山に取立、勤の功に仕候て一日も早く立身可ㇾ仕と奉ㇾ存、前役の御代官千萬石の御藏入の所にて、三四千石も餘慶に取立申、夫が功立申候て御見出に逢ひ、立身も仕候得ば、次の御代官は又其上に一二千石も餘慶取立不ㇾ申候ては、働の手際相見得不ㇾ申、又其

次は千石も五百石もと段々增に增申候へば、御代官の十人も替り候内には、十萬石の御場所より十四五萬石も納め申候樣相成申候、ヶ樣に御藏入の米高年々滋申候へば、天下の御身體の爲には能樣に御座候得共、始終は御上の御爲に相成不ㇾ申事に御座候、先づ百姓の身體を可ㇾ申上ㇾ候、百姓の身體と申ものは、隨分地ふく宜田地五反も所持仕候て（五反と申は三十間に長サ五十間の所を云）夏は著に存をさらし、冬は霜雪に肌を破り候事をもかまひ不ㇾ申、一身の油をしぼり出精仕、水旱の難に逢不ㇾ申候得ば、一年に米七石計、麥も七石計出來申ものに御座候、扨其米を先づ半分は御年貢に取納め、殘の三石餘賣拂一年中雜用に仕候、只今の直段に仕見申候得ば、漸金子三兩餘りに相成申候、其内にて村入用と申物を、田地の一反に付錢三百文程出申候、漸三兩計ならでは殘不ㇾ申、夫にて衣類の、農具の、世帶道具のと申物を拵、法事弔ひ、よめ取、聟入の祝儀共相調申候、扨一年中の飯米は麥を喰申候、麥と申物は、早く腹のすく物にて、其上百姓は骨折の業を仕候間、一日には一人前一升も喰不ㇾ申候ては働相成不ㇾ申に付、家内の七人も有ㇾ之ものは、七石計の麥にては不足仕候間、或は芋頭の、大根のと申物を鹽にて焚き候て喰申候處も御座候、又はきんか粥と申候て、粟もみに（もみと申候は米の皮に御坐候）十分一も米を加へ粉と仕、夫を湯にてかため被ㇾ下候所も御座候、右の如く艱難の身上にて、又其上飢饉水旱に逢候か、又は病煩は、臨時の物入に御座候得ば、一年に錢の百錢も餘慶出し申候は、誠に骨髓の油をしぼられ候よりは悲しき物にて御座候、左樣の百姓の身體を取立、十萬石の御場所にて五萬石も增し候へは、三石の御年貢

は四石五斗にも相成申候、御代官は先づ目前御藏入の一石も石高上り候ては、御見出しに逢可レ申との
み奉レ存、風儀の善惡も、盜賊の詮議も脇に成候故、御代官領は盜賊博奕折々集に相成、溢者と申せば
悉く入込申候故、自然と風儀も惡く罷成、自體律義の百姓共も博奕宿盜賊宿仕候樣に成行申候、土地
より生れ候ものは年々限り御座候なり、御年貢は年々增し申候なり、村里の風儀も次第に惡敷罷成候
なり、後々には律義の百姓共も、難儀の餘りには强盜山入可レ仕候半も難レ計奉レ存候、必竟ヶ樣に成行
候も御代官の心得違と、新田荒地御詮議のつみ不レ申と、御物成定免にて無ニ御座一候との三ッにて御座
候

一　御代官の御心得違と申は、右に申上候事に御座候、何卒此以後御代官被ニ仰付一候節は、上に申上
候通り三千石以上の大身の者へ被ニ仰付一、右の譯をとくと被ニ仰聞一、村里の風儀律義に盜賊博奕打無ニ御
座一、百姓の難儀不レ仕などゝ申類の事、一々ヶ條書にて被ニ仰渡一、其上にて一年に一度程ヅヽも、御番衆
の內にても、御使番の內にても、人物を御撰被レ遊御代官領巡見に被レ遣、若其支配の內盜賊多く風儀惡
く、百姓共難儀仕候事も御座候はゞ、其御代官急度御呵をも蒙り、御役をも被ニ召上一候樣被ニ仰付一候
はゞ、殊の外百姓の潤にも相成、天下御基彌丈夫に相成可レ申と奉レ存候（御巡見被ニ仰遣一候事も、被レ遣候樣惡く御座候へば、却て民の難儀に相成申候、是は其時分に御詮議あられ候て、利害を御考へ被レ遊候樣に仕度奉レ存候）

一　新田開發の事田地も多く罷成、甚だ下の潤に相成可レ申筈に御座候所、却て甚だ下の難儀に罷成申

候と申譯は、只今少々小才覺の山師ども、金子の千兩も手に入申候得ば、其内にて五十兩も百兩も德用に相成候故、古川古沼等の荒地を見立、假令ば千石の場所に御座候得ば、只今二千兩被二下置一候はば、永々相納申候樣に開發可レ仕など御願申上候得ば、御代官其外の御役人衆、何がな相働功に立可レ申と奉レ存候間、早速取持仕、御吟味の上にて被二仰付一候へ共、御吟味詰不レ申候故、當分は宜敷御座候得共、直に砂入水付に相成申候間、如レ元荒地に相成申候、假令砂入水付に相成不レ申候ても、新田と申者は五年や三年は五穀そだち不レ申物にて、十年餘りも耕しこなし申候て、漸々少々作物も有付候ものにて御座候間、百姓共も新田をいやがりて作り不レ申故、大抵の處も直に元の如く荒地に相成申候、扨荒地に相成候ても、最早御公儀の御帳面に乘候て以後は、御役人衆御藏入の石の減じ申候をいやに奉レ存候間、其荒地の御年貢皆一村一郡へ割付候て取立申候故、一萬石の御場所に千石の新田荒地御座候得ば、十石に一石ヅヽも百姓どもの御年貢掛申候、御藏入の石高は御帳面に相違無二御座一候間、御上にはやはり新田も荒不レ申と計被二思召一候得ば、初無作と不吟味にて申上候山師共も、左のみ御詮議も無二御座一、折々不埒相著候て御詮議に逢とも、西へ東へと申ぬけ、御仕置にも逢不レ申候故、又しても邪智を相巧み、御上の御金をかたり出し、百姓共の難儀に罷成申候事を仕出し申候、此以後新田開發をも奉レ願候もの御座候はゞ、土地の善惡水付砂入等の地形の利害に相達し候人に被二仰付一、篤と御吟味を被レ加、宜敷地方に御座候はゞ開發被二仰付一、五年の植付見申候て、地形の惡く田地に相成不レ申事に御

座候はゞ、初奉レ願候ものは急度罪科も被ニ仰付一、若又地形宜敷五穀出來申候はゞ、御役人衆御立合にて、御年貢高も御定め被レ成候はゞ、百姓どもへ御渡し被レ成、開發願候ものへは相應に御褒美も被ニ下置一候樣に被ニ仰付一候はゞ、殊之外百姓どもの潤に相成可レ申と奉レ存候、古田の荒地も右の如くの頓沙入水付不ニ相成一五穀一粒も出來不レ申候ても、やはり御帳面にのり居候間、荒地年貢と申候て一村一郡へ割付に相成申候、是等もとくと御吟味を被レ加御帳面削り候樣被ニ仰付一候はゞ、萬民如何計上を難レ有がり可レ申、御仁政の大なる事に奉レ存候只今御年貢の取立は見取と申物にて御座候間、百姓殊の外不精に相成、五穀も不出來に御座候、是を定免と申物に被ニ仰付一候はゞ、百姓共出精仕、五穀も能出來可レ申と奉レ存候、見取と申候は、年々の出來色を御役人衆御見分被レ成候て、年切〱に此田地は何石何斗、此田地は何程と御極被レ成候事に御座候、夫故愚痴無智の土民の了簡には、出精仕候て能作り申候ても、出來色宜御座候得ば、御上へも澤山御取被レ成候事なれば、畢竟汗水を流し出精仕候得ば、骨折損に相心得、日増無精に罷成候故、出來色も年々惡敷成行申候、御役人衆は去年より御藏入高減じ申候ては、御上の御首尾不レ宜候間、假令少々不出來に御座候ても、少も御用捨は無ニ御座一候故、自然と百姓共困窮仕、引追未進も多く、科人も出來仕候、是を定免と申物に被ニ仰付一候はゞ、可レ然奉レ存候、定免と申は、田地一反に付何程と常住定り居申事に御座候、左樣御座候得ば、御年貢を相納め申候餘りは、皆百姓共の德分に相成申候故、一粒にても澤山出來申候樣にと心掛、随分出精可レ仕候間、御年貢も未進引負不レ仕、下々潤澤に相成相暮し候て、御代官を相勤め候者も無法に百姓共を虐たげ、下を難儀致させ候事も無ニ御座一候、萬民の潤に相成可レ申

と奉レ存候

右の條々只士民百姓の潤候樣にと計申上候得ば、一通りの者は唯今迄の御政道にて、百姓共も相應に相營候事に御座候を、何の角のと手前の職分にも無レ之事を馬鹿理屈申上、御上の御身體の御爲に不二相成一など可二申上一候得共、惣じて天下の身體と申物は、平人とは違ひ、天下中の者が富饒無二御座一候ては參り不レ申候、天下中の者を富饒爲レ致方は、萬民の農を樂み申樣に致候が第一に御座候、農人と申物は殊の外せつなき物にて、人のいやがり申候物にて御座候故、上より隨分緩く御あしらひ被レ成、農人安樂に御座候樣御政道無二御座一候ては、萬民農を樂み不レ申、只今の通りにては、百姓ども次第にくらし惡く相成申候間、農人年々商人に相成申候、漸々の事故當分は目に立不レ申候得共、老人共の物語り承り候得ば、二三十年以前よりは商人殊の外多く相成申候由にて御座候、農人の商人に相成候事は、殊の外天下の衰微に相成候事にて、了簡も御座候人は甚だきらひ申事にて御座候、其上前にも申上候通り、日本國中天道より御預りの人民難儀を御させ被レ成候ては、天道の御心にも叶申間敷奉レ存候、加之萬民の天とも地とも奉レ仰は、又將軍家より外に無二御座一候なれば、御上の御憐み不レ被レ成候ては、誰か憐み可レ申哉、爰の所を能々思召解させられ、御慈悲の御心を以て下萬民を御めぐみ被レ遊候は、無益の坊主神主共へ過分の布施初穗を被レ下、經を讀み祓をさせるよりは却て天道神佛の冥慮にも御叶被レ遊、御代長久御子孫御繁昌の御祈禱に相成可レ申と奉レ存候、

古の聖人も「四海困窮、天祿永終」とて、萬民が困窮仕候得ば、人君の冥加の盡しと申、又「百姓足、則君誰與不足」とて、百姓だに十分にくらし候得ば、君はいつとても富饒にて、十分に自由に足り候と申、兎角匹夫匹婦の土民ども安樂に暮し候得ば、天下はいつも豐にて、御上に御自由足不申と申事は無御座候、萬民の上を難有奉存候も、天道佛神の御加護厚く、御代長久天下太平の基是より上は御座有間敷と、愚痴無智の了簡に奉存候、何卒太平の御恩澤を蒙り申御報恩にと、御歷々の御役人衆の中、推參千萬ながらふつゝかの事ども申上恐入奉存候

一　御代々御當家の天下を御治め被遊候は、御文德よりは御武威をおもと被遊候事に御座候所、近來下の者御威光を奉恐候事は、昔よりは日增に甚敷罷成申候得共、御威光の正味は乍恐日々に虛に相成申候樣に奉存候、御威光の正味と申候は、外の事にては無御座候、御譜代大名と御旗本の面々とにて御座候、萬々一天下に何事か出來候節は、勿論誰人御下知に違背仕候ものは有御座間敷候得ば、第一と身命を抛候て忠義を盡し候は、御譜代大名と御旗本の面々ほど御用に相達し候者は有之間敷と奉存候、然處近來御譜代大名年々貧乏仕、家中の者へ扶持知行遣し候事も相成不申、或は重代の家來に暇を遣し、又は家來の者欠落仕候ても其儘に指置候樣なる仕合故、家中の人數も次第に減じ申樣に成行申候、假令人數も前廉の通りに持候大名も、或は知行半減仕候の、又は當分の扶持計りを遣し置くのと申仕合故、家中の諸士共も貧苦につめられ、馬ものゝ具も相應に所持仕候事も得不申、

漸々一日々々と彼處に質を置、爰にては借金を仕、町人共の顏を守りて暮し候樣なる仕合にて渡世を仕申候、畢竟御譜代大名まさかの時御上の御用にも相達可ㇾ申候と、家中の者をよく扶持仕、人數も大勢召抱置候間、銘々主人へ忠義を存じ候てこそ、何事も上の御用も相達可ㇾ申事に御座候、右の如くに御座候ては、主人にては如何樣上へ忠義を奉ㇾ存候とも、召連召出候人も無ニ御座一、少々殘る人も共主人々々を怨候樣に相成、皆ばら〳〵に相成候て、はか〳〵敷御用にも相達し申間敷と奉ㇾ存候、扨又近來御旗元の面々皆游興に耽り、武藝不ㇾ嗜の衆中段々相見得申候、末々小普請御番衆御徒士抔の類に至り候ては、殊の外風儀惡敷罷成、或は親を追出し、一類の中を追ひ、酒色に耽り博奕を好み、家財を盡く打込み候て、妻子共寒中單物の一ッにて薦の上に寐し、甚敷者は夜分町家へ押領に押込候か、又は人遠き野原にて追落を仕候のと申樣なる風俗に罷成、武藝名節は棚へ上げ、筆ゟ付不ㇾ申族多く相見得申候、世話に旗本八萬騎と申候が、只今の樣成懦弱不埒の風儀にては、萬一の事御座候ても、一角御用に相達可ㇾ申と相見得申候人は、近頃私體愚痴無智の者の過言に御座候得ども、乍ㇾ恐一萬騎とは御座有間敷と奉ㇾ存候、大名は貧乏仕候て、家中の者を扶持仕候事罷成不ㇾ申、御旗本は遊興に耽り、懦弱にて御用に相達不ㇾ申、若萬に一ッも天下御靜謐にて、萬民上の御威光を奉ㇾ恐候時分、私體の無智の輕きものヶ樣の事を無作法に申上候得ば、御歷々の衆中の了簡には、氣違ひの、阿房の、或は口に出放題を申上げ御上を恐し奉るのと可ㇾ申候得共、前にも申上候通り、武備と申物は、武士の刀を指

と同じ事にて、人を切り不レ申候とて刀を指不レ申候ては、若急に入用に御座候節、誠に世話に盜を見て繩をなふと申候如く、間に合不レ申物に御座候、其上日本國中にて御威光は伏し可レ申候得共、大清（只今の唐の事）朝鮮・琉球等の國の者は、如何なる巧を致居候とも相知れ不レ申候（清朝より琉球へ使の參り候毎に、日本の從へ樣や有よと尋る由承及候）太閤秀吉の朝鮮を切從へ申候も、此方の數年稽古の積み申候軍兵にて、朝鮮の無用心の中へ踏込候故、只三十日の内に王都迄攻落し申候、世話にも用心に國亡びずと申候、又油斷大敵と申候、古の人は天下安しといへども、戰をわするれば必亡ぶと申候、若御油斷無ニ御座ー御用心可レ被レ遊思召御座候はゞ、大名の心體と御旗本の風儀とは御心を付させられ、御取直し不レ被レ遊候ては叶ひ不レ申儀に奉レ存候、勿論御歷々御役人衆中も御油斷は御座有間敷候得ども、私體愚痴無智者の存付候事も、萬が一御益にも相成可レ申かと一々申上候

一　大名貧乏仕候事は有德院樣別て御苦勞に被レ爲レ遊候て、鎌倉時代の如く五年に一度も、五十日計の江戶逗留にて參勤仕樣に可レ被ニ仰付ー哉など、室新助へも御尋被レ遊候事ども相見得申候、（五年に一度ヅヽ參勤之事、熊澤次郞八と申者大學或問と申書に記し御座候）是は當分大名身體の爲とは相成可レ申候得共、誠に新助申上候通り、始終天下の御爲に不レ宜筋に御座候樣奉レ存候、扨大名貧乏を直し申候には五ヶ條御座候、先第一近年大名殊の外奢り申候事、第二米直段下直に御座候事、第三御國替被ニ仰付ー候事、第四音信贈答の事、第五江戶地廻り供を大勢召連れ候事、此五ヶ條の事相應に御政道被ニ仰出ー候はゞ、大名身上少々持直し可レ申と奉

ㇾ存候

一　御治世久敷續候得ば、天下一統安樂に餘り、人々懦弱に相成、只珍味を喰美服を着用仕、隙にて罷て居度との工夫計を仕候て、次第に奢長じ申候て、分相應に上の眞似を仕候間、昔は小給の者も相應に暮し申候所、近年は高知の者の分身上不足仕候樣に成行申候、昔は大名も刀拵の大小を指し候所、近來は五十石百石計の小身者も、金拵宇彫などの腰の物を横たへ申候風俗に相成申候有德院樣にも色々御苦勞被ㇾ爲ㇾ遊、惇信院樣御代段々被ㇾ仰出ㇾも有ㇾ之、御老中さんとめ上下にて相勤候樣まで致申候得共、半年も立不ㇾ申内直に元の如く花麗に相成申候、必竟是は等差と申物が立不ㇾ申故にて御座候、等差と申候は、格式の事にて御座候、只今にては金子だに御座候得ば、私體の者にても羽二重の小袖こはくの上下着用仕、金拵の腰物を横たへ、三汁十一菜の振舞を毎日可ㇾ仕と勝手次第に御座候間、負まじと存候人心にては、一日に一事々々と上の眞似を仕候樣に成行申候、まして金銀自由に相成申候大名心にては、自然と衣類諸道具振舞饗應等まで花麗に相成、五萬石の大名十萬石の眞似を仕、十萬石の大名二十萬石の眞似を仕候樣に成行申候間、借金の淵にはまり申候、是等嚴敷格式を御立被ㇾ遊、假令御老中はこはくの上下、御若年寄は茶宇の上下、御奏者番はさんとめの上下、五萬石の大名は是々、十萬石の大名は何々と申樣、婚禮・嫁取・法事・弔ひ・音信・贈答・振舞・饗應等まで、夫々の身體にて相調候樣に急度格式を御立被ㇾ成候へば、人々是より上は相成不ㇾ申物と相心得、夫々の分限相應にてたんのう仕、上の眞似を仕不ㇾ申、自然と奢も相止可ㇾ申と奉ㇾ存候

是は大名計の爲に相成候のみには無㆓御座㆒候、天下の爲に相成可㆑申と奉㆑存候、其上此制度急度相立申候はゞ、殊の外賞罰の爲に相成可㆑申と奉㆑存候

米直段下直に御座候事は、武家の困窮のみに無㆓御座㆒候、是又天下一統の困窮にて御座候、先は米直段下直に御座候得ば、諸色も下直に相成可㆑申筈に御座候所、諸色の直段は前に少しも違不㆑申候、（米直段下直に相成候ても、諸色下り不㆑申筈は、諸職人米直段高直の時分に金子の百疋も儲候得ば、漸一月の飯米代に相成申候所、只今にては金子百疋も儲申候得ば、一月半も二月も喰申候、米代に相成申候故、無智のものども先月前喰物御坐候得ば、先の事は打忘れ、不自由を仕、業に怠り申候、前廉は一月に絹の十反も織出し候者も、只今にては五反ならでは織不㆑申、前廉は一日に一駄ヅヽ切出し申候薪も、只今は二日に一駄ヅヽ切出し候様に罷成、世上諸式代物炭薪等まで如㆑是相成申候故、米高直の時分に少も違不㆑申、品により却て高直に相成候物御坐候）米下直にて諸色高直に御座候得ば、武家農人米を賣候て用を足し申候者は日々に困窮仕候、武家農人困窮仕候得ば、商賣無㆓御座㆒候故、町人も困窮仕候、大工匠人共日過のものは能きかと申候へば、是も諸人困窮仕候へば、やとひ申候者無㆓御座㆒候間同く困窮仕候、左様に御座候得ば、米直段の下直は天下の惣困窮と申者にて御座候、古は斗米三錢と申候て（米一斗は錢三文仕候事に御坐候）天下太平豐年潤澤の褒詞に書記し御座候て、只今は米下直は却て天下のいたみに相成、豐年と申せば人々眉をひそめ申候様に相成申候、惣て米の相場と申ものは、只今の様に米下直に御座候迚、天下に二三年も水旱續き申候共、天下中の人喰候程澤山米の有餘り候と申にても無㆓御座㆒候、又米商賣仕候町人共高利を取可㆑申候とて、下直に相場相立候にも無㆓御座㆒候、世間の勢ひ景氣と申ものにて、夫奥州旱と申せば、やれと申て高く相成、北國豐年と申せば、やれと申て安く相成、時々はづみ景色にて上げ下げ仕候までにて、町人どもの手にて定り申候得共、町人共の自由にも相成不㆑申、又大名の自由にも、御上の自由にも相成不㆑申物に御座候、扨米直段下直に御

座候ては、武家は申に不レ及、天下の困窮に罷成申、又米相場の所は御上の御自由に相成不レ申、然ば下の困窮を如何樣にも爲二思召一候ても、被レ成方も無二御座一と申物に御座候、只今日本國中海を由に可レ被レ遊も御自由の御威勢にて、是式町人共風情の口先にて取り定り候程の事も、御自由に相成不レ申とて、下の難儀を其儘にて被二捨置一候は、何とやら御政道において本なげに奉レ存候、勿論御歷々御役人衆中手拔不評議心を碎き、御上にも御苦勞に被レ爲レ遊候と相見得、去々年中抔は大坂町人共へ御用金被二仰付一諸大名へ御預米被二仰付一候得共、米直段別て相違も無二御座一候所、幸加州不作に御座候由にて、大坂より北國へ積送り申候、依レ之少々米相場相直し、武家も息を繼申候樣に相成申候得ども、兎角米相場御上の御自由に相成不レ申候ては、上下不定にて又元の如く相成可レ申候、只今の事と奉レ存候、私體卑賤の者乍レ恐武家の御爲、萬民の爲に數年相考へ候て存じ付候は、只今雜稅法、常平倉法と申二ッを御行ひ被レ遊候はゞ、三年の内には天下の米相場高直なり共下直なりとも、上の思召まゝに相成可レ申と奉レ存候、先荒增雜稅法と申候は、百姓御年貢を金納米納計不レ被二仰付一、其所に出來候絹・木綿・眞綿・生綿・麻苧・紙・茶・煙草・或は山林は炭薪等を御取立被レ成候事に御座候、常平倉法と申候は、諸所御代官領に御藏を被二立置一、江戶へ御廻し被レ成候御上米を被二入置一、又大坂其外湊々に御藏を被二立置一、米直段下直の時分は御買上被二仰付一、又高直の時分は御拂ひ被二成下一候事に御座候、此二事は初は仕なれ不レ申候故、御役人衆も不得心にて段々指支も出來、御物入も有レ之樣なる事御座候得共、

後は其御公儀の御徳用にも相成、武家の身上の爲にも、飢饉水旱の御手當にも相成可レ申と奉レ存候、乍レ然夫に付樣々の害も出來申物にて御座候、又其害の出來不レ申樣に仕方も御座候、是は一枚半枚の紙の上にて申上げ候て相濟不レ申事に御座候、彌取行も可レ被レ遊思召に御座候はゞ、其致方並利害得失和漢の書に段々相記し御座候、御詮議被二仰付一候はゞ相知れ申候、殊の外古より天下の益に相成申候法に御座候、大名國替と申候物は、手柄功業相立候て大國を被レ下候とか、又は重き御科御座候て、知行高御削り被レ成、惡地へ被レ遣候とか、又は姬路小田原等の番城御場所柄の處は、幼少にては持たれ不レ申候とか、其品によりて可レ被二仰付一筈に奉レ存候處、近來は御役も相勤、御首尾も宜御座候得ば、國を被二下置一御役も上り候と齊く、又直に外へ國替被二仰付一、よしもなきに五年十年の內彼方此方處替被二仰付一候故、大名殊の外難儀仕候、總じて人の身體と申物は、いつも同じ事がよき物に御座候、元一萬石の大名俄に二萬石の所被レ下候得ば、當分はよき樣に御座候得共、直に惡地へ所替被二仰付一候得ば、元の一萬石に相成申候節、一度二萬石に暮し付候手癖直り不レ申候、又元の一萬石の身體相應に暮し候樣には得取直し不レ申物にて、夫より初て貧乏の端に相成申候、夫故當分は御慈悲の樣に御座候得共、却て善地へ被レ遣候は、始終身上の爲には不レ宜物に御座候、其上處替の節家中のもの共の難儀と申候は無二申計一事に御座候、先第一失却と申候は、家々なくて叶不レ申簞笥・長持・鍋・釜の類も、手重き物は道中駄賃に過分失却候間、皆其所にて賣拂申候、又町人とも賣拂不レ申候ては叶不レ申物と申

を見込、其下直に直打仕候故、元調の直段五分一にも相成不レ申候、（假令ば箪笥一ツ買候直段二兩百里に相運し申候駄賃五兩、賣拂申候直段百疋、大抵ケ樣の事に御座候）夫より又先の國へ參り候ては急に入用に御座候を、町人ども見込候て又過分高直に賣付申候間、一通りの家具計も無レ余失墜出入に何程と申計も無二御座一候、其上に又家内のもの引越も物入過分有レ之、又居製不レ申土地へ參り候て、風雪寒暑の氣候に當られ、老人小兒などは或は病死仕候の、又は主人々々發人に相成候のと申て其歎き悲しみ、國替の御座候跡先は目も當られぬ次第に御座候、又は其内身分の高は右の失却手當等も仕遣し申候得ば、假令一萬石の大名侍分の者二百騎も抱置候へば、先づならし引越し料一人前二十兩ヅヽ遣し候ても、物入四五千兩にて御座候、其上に足輕中間手代樣の者は又外に手當も仕遣し、又上々は引越普請等にも六千兩も失却仕候得ば、只一度の引越一萬三千兩計日にも見得不レ申事に失却仕候、一萬石二年の物成打込候ても足り不レ申候、身體貧乏にて何の蓄も無二御座一候大名、臨時の物入一萬の餘りも無二御座一候ては、借金仕より外無二御座一候、ケ樣の事十年の内一度も御座候ては、前度之借金未だ相濟不レ申上、又々借金も出來仕、借金の上の借金、貧乏の上の貧乏、次第に穴へ這入候樣成事に御座候、ケ樣之事を御上の思召にて被二仰付一候事に御座候得ば、御自親に御家來の身上を御けづり被レ成、御武威を御けづり被レ成候樣なるものに御座候、又御役人衆の申上候事も御座候へば、寄合仲間を剝候て御上の御武威を削候樣なる物に奉レ存候、何卒大名家筋をも篤と御吟味被レ遊相應に城地を被二下置一、重き不調法だに不レ仕

候はゞ、度々城地相替不レ申樣被ニ仰付一候はゞ、大名身上も相應に持直し可レ申と奉レ存候、扨又御役をも相勤候者は格別辛勞も仕、其上外の失却も御座候間、是は江戸近所にて御役高一萬石も被レ下候とか、又は御藏前にて四五千石も被レ下候とか被ニ仰付一候はゞ、是も五年十年の内腰掛宜敷、國拜領仕候より却て勝手に相成可レ申と奉レ存候　荻生惣右衛門政談と申書に申候は、太閤秀吉の時より大名に處替させると云事起る、其時代戰國の初てしづまりたる砌りなれば、勢ひを弱むる手立にて、計策の一ッなるべけれども、當時國持大名の所替は無レ之、御譜代大名計に國替被ニ仰付一候事、是又片つりにて不レ宜事なり、所替の物入凡十年の痛となると昔より申傳なり、依レ之昔は所替に定りて御加增なり、中頃は金を被レ下、近年は其沙汰なき事は、上の御不勝手なる故なるべし、國持大名をば痛めずして、御譜代大名を痛むる事何道理も辨へ難し、御老中になれば關八州の地へ所替とするも詮なき事なり、姬路・淀・郡山抔樞要の地なりとて幼少にて替ゆる事も古き方計を守りたる分にて詮なき事なり、幼少にても家老よくしまり武義を忘れずば所替せずともよかるべし、成人なればとて武義の心得薄きは、何の用にも立まじく候

一　只今は勿論御役人衆潔白にて、賄などを取候人は一人も有間敷と奉レ存候得共、賄と申もの程政道の邪魔に相成候ものは無ニ御座一候、是れは和漢共に其例多き事に御座候得ども、近く御當代の物語り可ニ申上一候、松平讃岐守用人を相勤候眞宮武右衛門と申もの、殊の外潔白の者にて賄を少も受不レ申候所、或時人に物語仕候が、拙者に賄を致し時々見舞媚諂ひ候ものは、奸佞なるもの哉と存候へ共、其者は惡きとは不レ存候、又上は忠義を存し身を正しく持候者にて、音信贈答も不レ致、染々と見舞も不レ致者は、扨々殊勝なる正しき男かなとは存候へども、其人がいとをしとは不レ存候、拙者は少しも賄を受不レ申候てさへ左樣に存候得ば、まして賄などを受候者は、上の御掟をまげて其者に贔屓を致候も理りにて候と申候由承及申候、此咄にて私申上候に及不レ申候、御政務の害に相成申候事は相知れ

申候、御序に承及申候御先代の咄を可二申上一候、何の御代の事に御座候哉、何の某と申者御老中を相勤候節、或大名へ重代重寳の印籠を所望致候所、其大名遣し可レ申と申候得共、家老ども申候は、是は御代々御傳來の御寳に御座候得ば御無用に奉レ存候、外に何にても被レ遣可レ然と申候へば、其大名申は、老中は廻り持の事なれば、我等老中被二仰付一候節は、又此方へ返るなれば不レ苦とて遣し候となり、是を見候得ば昔は御老中にて權威に任せ、人の重代の重寳をも無體に所望致候人も御座候と相見得申候、外に、御老中は廻り持、金銀財寳廻り取と申樣に心得居申候風俗にて御座候と相見得申候、甚惡敷風俗に御座候酒井讃岐守忠勝御老中相勤候節、殊の外潔白にて賄を少しも取不レ申候所、何某と申御醫師何がな進物致度存候て樣々工夫仕、讃岐守平生鶉を好み候を存候に付、或時讃岐守へ申候は、私去年中鶉をもらひ候所、扨扨常住鳴たてやかましくこまり申候間、ねぢ殺し汁に仕喰可レ申と奉レ存候と咄し申候得ば、讃岐守承り夫は不風流なる事なり、左樣ならば雁を遣し候て其鶉と取替可レ致と申候得ば、醫師申候には、夫は私においても大に勝手にて御座候とて直に鶉を持せ遣し申候、其後其醫師兼て能く鳴く鶉を撰び、高直に相調遣し候と申事を讃岐守承り、殊の外後悔仕、扨々御役をも勤候者は物好のなきがよきなり、物好があれば夫より取入らるゝと申候て、其後一生鶉の音を承り不レ申候なり、是にて見候得ば、御役人衆へは下より色々致二進物一と相見得申候、又讃岐守は勝れて忠義の者に御座候、其好の鶉も御奉公の爲に一生音をきへ不レ仕とは、誠に古の賢人にも勝れ申さるゝ賢者に御座候、御老中にケ樣の人多く御座有度ものに奉レ存候何の時代の事に御座候哉、何の守と申大名御老中御招請申候節、御公儀御料理人へ賄の仕樣少しに御座候處、御料理人殊の外立腹仕、御料理物見分之節一ツも役に立不レ申とて、皆御料理人の指圖にて買直し申候所、鮒の間に金拾

計一ッに付金子七兩ヅヽに調申候となり、是にて見申候へば、殊の外大名の不爲に相成申候、其上御料理人如きがやりくりにてさへ、ケ様の過分の失墜御座候、まして重き御役人への音信贈答の物人は、思ひやられ候得ば申上るに不ㇾ及候　御先々御代の事、或大名へ何川とか申川の普請御手傳蒙ㇾ仰、川堤二尺通築上可ㇾ申筈に御座候所、殊の外人夫物入多く御座候に付、御役人衆へ賄を仕候所、御役人衆の了簡にて、古堤の上二尺計りの芝を削落し、新規に築上候氣色に取成し、夫にて相濟申候なり　畢竟是等の事は、普請物入一萬兩掛り申候所は御役人衆へ千兩も進物仕候得ば夫にて相濟申候故、大名も其算用づくにて仕候事に御座候、或は御手傳等被ㇾ仰付ㇾ勝手悪敷と存候時分は、御役人衆へ此度の御手傳はぬけ申候様に御取持被ㇾ下候はゞ、千兩進物可ㇾ致候、二千兩贈り可ㇾ申など申候、兼てより直持賄を致者も有ㇾ之様承り申候　御先の御代の御事何某と申御役人　大岡越前守にて御座候由、申ものも御座候　或日菓子折を御評定所へ持參致候て申候は、拙者は去る方より折菓子をもらひ申候所、開きて見申候得ば上一通りは干菓子にて、底には金子一盃敷て御座候、扨々武士を蹈付候進物に御座候、其儘差戻し可ㇾ申と存候得共、若又世上にてはケ様の進物被ㇾ受候人も御座候哉と存、何れもへ御相談のため是へ持參候迚、大勢の中にて振廻し申候得ば、滿座の人々一言も不ㇾ申、其中には顏打赤め申候人も御座候となり、是は同役の人を勵し可ㇾ申との事にて御座候、　松平伊豆守信綱或時大猷院樣御前へ白き德利を持參仕申上候には、私昨日古今無類の名酒を貰申候、上覽に備へべくと奉ㇾ存候故、是へ持參仕候とて御疊の上へ打蒔申候得ば、悉く小粒金にて御座候、大猷院様御覽被ㇾ遊、扨々羨敷事なり、結構の酒をもらひたるものかな、扨其返禮は何をするぞと上意御座候得ば、伊豆守申上候は、此返禮の仕方は御上へ御預け申上候より外無ㇾ御座ㇾ候と申上候得ば、上意におれはしらぬと御座候て御笑被ㇾ遊候へば、伊豆守も打笑ひ、左様に御座候得ば返し可ㇾ申とて、又拾集め持下り申候

となり、是は下々賄の行れ候と申事を上へ御知らせ可ㇾ申上ㇾとの事に御座候、返禮の仕方を上へ御預け申上候とは、賄を受候ては上の御法をまげ、其者を取立申との事に御座候、又是等の事にて伊豆守御上を御大切に奉ㇾ存、其上大猷院様御代君臣の御間親く、上下打とけて睦むつましき事ども相知れ、只今迄仕候ても譬ㇾ有御時節也と奉ㇾ存、感涙仕候事に御座候惣て賄の行はれ申候は名節のすたれ申候と、條目の立不ㇾ申との二ッ故にて御座候、名節と申は、侍片氣男氣の事にて、少々の金銀財寶にめで候て人に肩を持候は、さかしき事と存候心にて御座候、條目と申候は、是は斯様に御仕置可ㇾ有筈、彼は如ㇾ此可ㇾ被ㇾ仰付ㇾ筈と急度御掟御定有ㇾ之事に御座候、名節すたれ申候得ば人々貪欲に相成、世話に申候に、膝取ても勝候は徳じやと申樣なる心に相成、由もなき人より金銀を貰申事を耻とも何とも不ㇾ存候、御條目正しく無ㇾ御座ㇾ候得ば、御政道被ㇾ仰渡ㇾ等の上にて、左を右へくらまし候事に相成申候、潔白の人賄を請不ㇾ申者さへ、賄を致候人を悪しとは不ㇾ存候と申候に、まして貪欲の人賄を受候ては、其人に贔屓に相成申筈の事に御座候、贔屓の心に無作といたし候御條目を左へ右へやり可ㇾ仕候得ば、如何様の事を可ㇾ仕勝手次第に御座候間、川堤を削り申候樣なる事も仕かね不ㇾ申、賄を致候人が贔屓に相成申候得ば、自然と賄を不ㇾ致人は悪敷相成申候間、金拙一ッ七兩に買せ候樣なる事も致かね不ㇾ申、何卒名節を以て下を御勵し被ㇾ遊、名節を以て下を御勵しなさるゝ致かたは、下の御記錄所の外に申上候通りに御座候御條目を正しく御吟味被ㇾ成候て、御老中に讃岐守・伊豆守などの者出來仕、下の御役人には干菓子を打まけ候樣成るもの出來仕、御政道益公に能成、御公儀は堤を削り申候樣なる御損も無ㇾ御座、大名は金拙一ッを七兩にて調候樣なる失墜も無ㇾ御座ㇾ候て、天下太平長久の御基に相成可ㇾ申と奉ㇾ存候

一　大名江戸地廻り供の者大勢召連候事は戰國の餘風にて、御勝元を歩き申候にも、鷲破と申さば直に備へも相立、一軍可レ仕と申様なる風俗にて御座候、太平の御時節には無益の物と奉レ存候、勿論是には少々譯も可レ有レ之事に御座候得共、先は供に召連候家來へは、衣類腰物等も見苦敷無二御座一様に被レ仕候程手當も仕遣し申候間、是に付餘程失却も御座候、是は減少被二仰付一候はゞ、殊の外大名勝手に相成可レ申と奉レ存候、減少被二仰付一候ても、無作と被二仰付一候ては安心仕間敷、高に應じて被二仰付一候はゞ宜敷可レ有二御座一と奉レ存候、只今にては十萬石の大名も、二十萬石の大名も、召連れ人數は大方同じ事に御座候故、小身者致來りの人數を減じ申候は外聞惡敷、又召連れ候家來は無二御座一、或は嫡子罷出候得ば、親は召連れ候人無二御座一、出勤不レ仕など申様なる大名も有レ之とやら承及申候、是は高に應じて一萬石は何程、十萬石は何程幾人と、其身相應に召連られ、其上にて宿々は浮人有レ之様に相成申候程に被二仰付一候はゞ、大名身上のために罷成可レ申と奉レ存候

右五箇條の事相應に御政道被二仰付一、其上にて尚又大名酒色に耽り奢靡を極め、身上持損じ百姓を虐げ、家中の者を扶持はなし候様なる事をも仕候はゞ、急度御呵りをも蒙り、或は官位等を削り被レ成、又は惡地へ國替被二仰付一、又身持質素にて國をもよく治め、百姓を憐み家中の者へも潤澤に手當も遣し候ものへは、御褒美の上意を蒙り、又は家格の官位等も昇進仕、上國と所替など被二仰付一候はゞ、大名殊の外はげみ申候て、身上も持直し、武備をもみがき、將軍家の御藩屛に相成、御代萬々の御

基と相成可レ申と奉レ存候

一　御旗本遊興に耽り、風儀不埒に御座候と申候も、畢竟頃に無二御座一候様に御政道被二仰出一候はゞ、自然と風儀も相直り可レ申と奉レ存候、文の教の事は別條に可二申上一候、武の教の事は御上にも御苦勞に被レ爲二思召一候と相見得、段々騎射等も被二仰付一、又御旗本の二男三男御吟味も被二仰出一候段乍レ恐奉レ感候、思召には御旗本の面々も、此間は格別武藝相勵み申候様に相成申候、然處騎射と申物は、勿論弓馬達者に無二御座一候ては相成不レ申物に御座候得共、畢竟武士の慰にて、軍中にては餘り用に達不レ申物に御座候、武備を御勵み可レ被レ遊思召に御座候はゞ、弓は弓、馬は馬、鎗術・劍術夫々被二仰付一候が宜敷可レ有二御座一と奉レ存候、其上第一の事は備立にて御座候、如何様なる劍術・鎗術・弓馬の達者大勢御座候ても、備しどろに御座候ては、軍は直に破れ申候物に御座候、有德院様には此所をよく御合點被レ爲レ遊候故、鵜勢固と申物を被二仰出一候事相見得候、此事に付二ヶ條私存付の事共可二申上一候

一　只今御番入被二仰付一候は、篤く武藝の御見分も無二御座一、一通りの預りにて、向きだに宜御座候得ば、藝術未熟の若輩者へも被二仰付一、御吟味と申候ても只一通り騎射を被二仰付一候までにて、外鎗術・劍術等の見分も無二御座一候故、御旗本の面々は騎射だに達者に仕候へば、武藝相濟候様に心得、外の武藝は疎末に仕、鎗の振様も不レ存候て、御番相勤候者も御座候様に承及申候、萬一の時分に御本陣の御馬廻りをかため、平生御城の御番は非常をいましめ申候爲の御番衆に御座候所、ヶ様に御不吟味に

被仰付候ては、乍憚餘り御麁末の樣に奉存候、何とぞ此以後御番入を奉願候ものは、年を幾ツと御極め被遊、頭の宅にてなりとも、又外に場所を御立被成候て成とも、御役人衆立合にて鎗術・劍術・弓馬等夫々御吟味被仰付、彌其道に鍛錬仕候はゞ御番入をも被仰付、其上御番入仕候て以後も、一年に二度程ヅヽ、弓は遠矢に的札通し、馬は遠乘・川渡・騎射・笠がけ・犬追物等の物・劍術・鎗術・又其流儀流儀の達人どもへ仕合等の事を被仰付御上覽被遊、格別に達者に仕候者へは御褒美をも被下置、又不鍛錬にて藝術未熟に御座候ものは、急度御叱をも蒙り可申樣に被仰付候はゞ、御旗本の面々騎射計りにては御番相勤なり不申と心付、隨分武道の諸藝等出精可仕と奉存候、只今は備と申物の稽古不被仰付候間、御旗本の面々平生不心懸にて、さらば御陣立と申時分は、御番頭は何方に居申物やら、御番衆は何樣致居候物やら、御目付御使番は前に居申候物やら、後に居申物やら、御弓御旗は左に居申物やら、右に居申物やら不存候、勿論上には御陣立の御手配も隨分急度相窮り居申候得共、帳面に目錄立と紙の上に繪圖とにては不參物にて御座候、其上夫々の御役人面々相備へ候場所を以て、前々平生不存候ては俄の時分皆十方にくれ、御用に相立不申物にて御座候、假令一月や二月教申候ても、是又下の者は急には得呑込不申物にて御座候、是は俄に御陣立稽古被仰付候はゞ、天下の愚人ども肝をつぶし、今にも軍初り可申哉と驚騷ぎ可申も難計、外樣の大名も何とやらそこ氣味惡く可奉存候も相知れ不申候間、有德院樣被仰付候鶉勢固・狐猻・鹿獵樣の事を御慰に被

仰付一、其上御行列御備立等やはり本道の御陣立の通り被ㇾ遊、餘り百姓どもの難儀とも相成不ㇾ申、天下の御失墜も多く掛り不ㇾ申樣手輕に被ㇾ遊、一年に二三度程ヅヽも被二仰付一候はゞ、御鷹野を被ㇾ遊候よりも格別御慰にも相成、御役人衆御番衆下は御同心黒鍬の類に至るまで、自然と御備に相立候場所をも呑込可ㇾ申と奉ㇾ存候、其上にて頭役を相勤候御番頭、又御旗御鐵炮等の頭分の者は、騎射・鎗・太刀打の働のみに無二御座一、人數を引廻し候者に御座候間、折々は御書付を以或は川を前に當ては人數を如何立、沼を左にしては陣を何と張る、如何なる時節横鎗を入てよきぞ、何樣の掛り弓を用ゆるぞなどゝ御尋被ㇾ遊、其道によく鍛錬仕御返答も明白に申上、御獵の時分も御下知のまゝに利口によく人數を引廻し候ものへは御褒美も被二下置一候樣に被二仰付一候はゞ、是又兵學出精仕、一方の大將をも勤申べき程の器量のもの幾人も出來仕候はゞ可ㇾ然と奉ㇾ存候、右二箇條の事に御心を御用ひ被ㇾ遊候はゞ、御旗本の面々小身者は弓馬・鎗・兵法等精を出し、大身の者は兵學・軍術に出精仕、我も〳〵と勇み立候て、其職分々々に心力を盡し、酒宴遊興仕居申候隙も無二御座一候樣に相成、自然と御旗本の風儀も直り、五六年の内には下々は弓馬・鎗・兵法の達人幾等も出來仕、上々は兵學・軍術の智者幾等も出來仕、半時の間には五萬や三萬の精兵相揃候樣に罷成、御威勢益盛に相成り、日本國中は申に不ㇾ及、淸朝々鮮の類迄も承及候はゞ、恐慄き可ㇾ申と奉ㇾ存候、只今天下太平の御時節にヶ樣の事申上候得ば、事を好み候樣なる事に御座候得共、前にも申上候通り、「天下雖ㇾ安、忘ㇾ戰必亡」と申、惣て

天下謀叛野心を挾み申者も御座候は、武備の弱みを見込候て起り申物に御座候間、武備をみがき申候は、左樣の者を未だ起り不ㇾ申内止め申候仕方に御座候間、武備は大切に御座候、其上眞田伊豆守家中の者は毎年馬上組打、並川渡等の事を稽古仕、井伊掃部頭家にては三日に一度ヅヽ着到をつけ、松平阿波守家中の者常々船軍の稽古を仕、其外陸奥・薩摩・長門等の家々に常住武備を忘不ㇾ申、色々武備を勵み申候由承及申候、大名の家にさへ右の如く一日も武備を忘れ不ㇾ申に、增して御公儀に於て只今の樣に御武備を御捨被ㇾ遊候は、私體愚痴無智の者の了簡にさへ、乍ㇾ恐御麁末の樣に奉ㇾ存候

一　人の智惠開申候物は學問程結搆なる者は無ㇾ御座ㇾ候、夫故古より忠臣は何とぞして君の智惠も開け、理非もよく別候て、政道に無理なく、天下も長久にあれかしと奉ㇾ存候て、皆君へ學問を勸め申候、佞臣は君の智惠明かに御座候得ば、手前〳〵の奸邪讒佞を見ぬかれ、君をくらまし候事相成不ㇾ申候故、皆君の學文の邪魔を仕候（唐の武宗皇帝の臣下に仇士良と申佞人、隱居の節其同類どもに申聞せしは、天子へは隨分常住奢を極めたまひて、御遊に御隙のなき樣に御奉公申べし、左樣致す時は我々いつ迄も御首尾よく權威を振ふぞ、必書籍を讀たまふ儒臣を近け給はぬ樣に致すべし、若前代帝王の善惡によりて、天下の亡たり起ざりし事を知りたまひたらば、天下は大事ぞおそろしきと思召御心出來て、我々は直に追出され申と敎へ申、其外佞人ども色々君の學文の邪魔を仕候事、毎々書籍に相見得申候）和漢の聖君賢君は申上るに不ㇾ及、御當代にても先づ權現樣・台德院樣を奉ㇾ始、彼所のせり合爰の合戰と御事多き御陣中にても、矢張林道春を被ㇾ爲ㇾ召、講釋を御聞被ㇾ爲ㇾ遊候事、段々御記錄に相見得申候、夫故御兩君樣共に御文德益々盛に被ㇾ爲ㇾ成、萬民彌難有がり、天下を御開基被ㇾ爲ㇾ遊、於ㇾ今御代長久に御仁德を仰ぎ奉り候事に御座候、其後常憲院樣御學文御好み被ㇾ爲ㇾ遊候得共、乍ㇾ憚只

上向御浮氣にて御好み被レ爲レ遊候のみにて、本道の學文を不レ被レ爲レ遊、其上下に本道の學文筋を可レ申上ニ器量に御當り候人無ニ御座ー候故、左のみ御政道の御爲にも相成不レ申候、其後文照院樣御好被レ爲レ遊、新井筑後守隨分器量も御座候者にて、本道の學文の筋をも申上、御政道も段々御心を御用ひ被レ爲レ遊候所、千萬御殘念に奉レ存候は、御代をしろしめされ候間無ニ御座ー、夫切の思召に相成申候事に御座候、近頃有德院樣天下の御政務に每々と御苦勞被レ爲レ遊、林大内記を被レ爲レ召、古の事ども御尋被レ爲レ遊、其外室新助に被レ仰付ー、貞觀政要と申書の講釋をも御聞被レ爲レ遊、又紀伊殿御内高瀨叔朴と申者へ四書の和解被ニ仰付ー、柳澤甲斐守家來荻生惣右衛門と申者へ大明律と申者の和解を被ニ仰付ー、皆上覽に備り申候處、室新助へ六諭衍義と申書の和解を被ニ仰付ー皆御上覽、御上樣御手習の御手本に相成申候とて、五倫名義と申假名書の物も被ニ仰付ー、其外御政道の事を御側衆を以て御尋被レ爲レ遊候事共段々御座候、新助は其器量に當り候者にて、存念の趣無レ殘申上有德院樣にも御用ひ被レ爲レ遊、御政道正しく御慈悲深く、末々迄御恩澤行屆候て、愚痴無智の士民百姓姥に至るまで、御仁德を不レ奉ニ感心ーは無ニ御座ー候、御上樣にも初め西の丸に被レ爲レ入候時分、鳴嶋道人御側へ罷出御學文被レ爲レ遊候處、御幼少に被レ爲レ入候節、日々唐人の眞似を被レ爲レ遊候に付、御役人衆の御了簡には、左樣の無益の事を御好み被レ爲レ遊候ては、後に天下をしろしめされ候節、却て御政道の御邪魔にも相成可レ申與と奉レ存候て御留め申上候由、虛實の處は不レ奉レ存候得共、下沙汰にはヶ樣申觸候、ヶ樣の事を申上候へば、只今御

法にて誰に承り候や、何方にて問候やと、此事に付て御詮議嚴敷、肝心の處は胸に成申候、惣て上一人の被レ成候事は、下の者へは能知れ候ものにて、誰申候と申事も無二御座一候得共、世上よく存居申候ものにて御座候、誠左樣も御座候はゞ、御役人衆申上候通り、唐人の眞似を被レ遊候の、詩文章を御作り被レ遊候の、御自親御講釋を被レ遊候のと申樣の事は、隱居や樂人の慰に仕候風雅樣の上氣學文と申物にて、一天下をしろしめされし公方大將軍の被レ遊候御學文にて無二御座一候、何の御益にも相達不レ申、惡く仕損じ申候へば、却て御政道の御邪魔に相成申候物に御座候、必竟是は申上手の不器量にて御座候得ば、外に本道の學文筋をよく合點仕候者を吟味仕、御側へも指出し可レ申筈に御座候所、是に依て御學文御無用に申上候、乍レ憚又御役人衆の了簡違の樣に奉レ存候、本道の學文をだに被レ遊候得ば、一卷の書を御讀被レ遊候ても、一言の咄しを御聞被レ遊候ても、如何計天下の御爲に相成可レ申も難レ計事に御座候、人君の本道の御學文と申は、先づ有德院樣・水戶中納言源義公殿・保科肥前守・備前の松平新太郎光政の樣被レ遊候事にて、國天下を御治め申候事を御學び被レ遊候事にて御座候、天下に學者は大勢御座候得共、此筋をよく呑込候ものは餘り多くは無レ之物にて御座候、先は新井筑後守・室新助・熊澤次郎八（備前新太郎家來に御座候）中江與右衞門（近江の浪人にて居申候、熊澤次郎八は師匠にて御座候）山崎嘉右衞門（保科肥後守家來に御座候）伊藤源助・同源藏（兩人共に京都の浪人にて居申候）抔申樣の者に御座候、乍レ憚道人體の者は爰い所は未だ篤と得二合點一仕間敷と奉レ存候、依レ之申上方惡く御座候と相見得、御上樣にも學文無益のものと被二思召一候やらん、近來は御學文の御沙汰は

透と御止に罷成、惇信院様御奥儒者相勤候德力藤八郎をも表へ御出し被遊候て、後は御奥儒者相勤候儀不被仰付候故、下の者は上には御學文氣と申物は御嫌なりと相心得、御儒者共も殊の外に學文無精に罷成、今年にも朝鮮人來聘仕候ても、大學頭父子は格別、其外の者は賄切て相手に罷成、詩文の贈答筆談も應對をも可仕と相見得申候ものは一人も無御座候、何卒御奥儒の御役をも又々被仰付、德力藤八郎事は随分律義ものにて、學文もよく仕候ものにて御座候へば、折々御政務の御隙には貞觀政要（是は唐の太宗皇帝臣下との問答を記し候ものにて御座候、有德院様にも室新助へ被仰付、講釋を御聞被遊候）大學衍義、（是は宋の眞德秀と申もの、編み候書にて、殊の外人君の御覽被遊候て、御益に相成申候書物に御座候）大學衍義補（是は明の丘濬と申者の著申候書にて、衍義の不足の處を補申候書に御座候、此三巻の書は御上に御覽被遊、其御政道の御助に相成申候書にて御座候、私申上度と奉存候事は、皆此書に書記し御座候）等の書籍を講釋被仰付候て、御聞被爲遊、尚又追々本道の學文の筋をも能合點仕候者を御吟味被仰付候て、御側へも罷出候樣に被仰付候はゞ、御上の御德も益明に罷成、其上々を見習ふ下にて御座候得ば、下の者も思ひ立引立候て、又々文照院様、有德院様御代の如く學文流行申、賢人君子も多く出來仕、天下の風俗も律義に罷成、御代長久の基に罷成可申と奉存候

一　諫言を御取上被遊候が人君の御學文の第一に奉存候、如何成明君賢君にても、仕損じの過ちと申物は是非有之物に御座候、其過ち仕損じの處、下より智惠の明なる忠義のもの不申上候ては、御氣の付不申物に御座候、人君と申物は御幼少より例の事を被仰候ても、左樣御尤と計御側よりはやし立候中にて御そだち被成、何事も思召儘に相成申候物に御座候間、下より申上候事は皆愚痴に聞

へ、御耳に逆ひ申物にて御座候得ども、下の者は幼少より艱難にそだち、惨きも甘きも呑込居申候者故、五年も十年も先の事を見抜て申上候事に御座候得ば、當分は廻り遠き馬鹿らしく聞へ候得ども、行末御上の御爲天下の御爲に相成候事多きものに御座候、そこの所は明君にて無二御座一候ては、御聞入無レ之物に御座候間、古より「從レ諫如レ流」とて明君賢主の第一の德業に仕候、扨下の者上へ諫言を申程難きものは無二御座一候、世話にも諫言は一番鎗よりは仕惡しと申候、其譯は一番鎗は敵の中へ踏込、命がけの業にて御座候得ども、無事に仕おふせ申候得ば大に手柄に相成、知行高祿にも相成申候、諫言と申ものは、君主人の氣に逆ひ申候得ば直に手打にも相成、仕おふせ候ても別て褒美に預り候と申事も無二御座一候、假令直に手打罪科に逢不レ申候ても、五度も十度も主人へ向ひ苦口を申候得ば、後々は主人にもいやがられ遠ざけられ候て、殊の外立身出世の爲に邪魔に相成候故、能々君を大切に存、身をわすれ候者にて無二御座一候ては得不レ申物にて御座候、假令上へ十分忠義を存し、一點も身の成行にかまひ不レ申候ものも、前にも申上候通り、卑賤の者の上へ物を申候には威光におされ、十が十ながら得不レ申物に御座候、夫故古の聖君賢主は皆諫言を仕候者へは、褒美を遣し候て諫めたて、又諫言を申者に對面致候には、態と顏色をやはらかに致し、下の者の物の申よき樣に取なし、隨分下より腹一盃物を申させる樣に致候、御上樣にも勝れて御明德にて、殊の外諫言を□□被レ遊、追蹤輕薄は甚だ御嫌ひ被レ遊、水野内膳正々直者にて御上の思召をも不レ顧、何事も存分に申上候によつて、殊に御意に入候由

下沙汰に申觸し、誠に難レ有御明君やと皆人感涙を流し申候所、去々年中内膳正表へ御出し、結構御役も被二仰付一候得ども、御側遠く相成候得ば、下沙汰には兎角上々樣方は昔日は御嫌ひなり、内膳正表へ出るも其筈の事と申觸し候、是は輕き事に御座候得ども、甚上の御明德を損じ申候事にて御座候樣奉レ存候、内膳正事は親山城守仕込にて、殊の外正直者にて、御上を御大切に奉レ存候、其上器量も有レ之、御用にも相達可レ申者にて御座候由承及申候、ケ樣の者は御側近く被二召使一殊の外御上の御爲にも相成申候物に御座候、勿論御側には隨分忠義を奉レ存候もの幾人も可レ有二御座一候、内膳正表へ御出し被レ成候も、御思慮深き思召も有レ之候御事に可レ有二御座一候得ども、古聖君の人を役に付候には、問レ衆とて下萬民に相談致し、大勢の尤と申人に申付候事に御座候、又衆のよしとする處是にしたがふと申候、只今皆人大勢内膳正は御側近く勤させ度と申合せ居申候間、何卒古の問レ衆と申、從レ衆と申本文にも御從ひ被レ遊奥へ被二相返一、御身近く召使はれ候樣に被レ遊候はゞ、下萬民も御明德を奉レ仰、御上の御爲にも相成可レ申と奉レ存候、扨又人君の天職と申者は、人を御見立被レ遊、御役儀を被二仰付一候が第一の事にて御座候、其人を御見立被レ遊候にも、御上の上意等もかまひ不レ申、あしきと存候事は存分申上候ものは忠義の者と思召、御上の御顏の色を見計らひ、左樣御尤と申上候者は不忠の者と思召候はゞ、大抵違ひ無二御座一物に御座候、天下を治め申候には、如何成聖人も一人の智にては參り不レ申物故、古より天下の智をかりて天下を治ると申事に御座候、天下の智を借り申候は、下の者に物をいは

せて、夫を取り撰び政道に用ひ候事にて御座候、虞舜と申帝は大聖人にて御座候得ば、天下の事はしりたまはぬ事は有間敷候得ども、「好レ問察二邇言一」とて、人に物を問ひたまふ事を好たまふて、手近き姥かか愚人の申事も氣を付たまひ、又「樂下取二于人一爲上善」とて、自親の智恵にてよき事をしたまふよりは、人の智恵をかりてよき事をしたまふを面白き事に思ひたまふと申事も、皆此事にて御座候、惣て歴々大名高家と申物は、結構にそだち申物にて、疊ざはり、立居振舞、挨拶向見事に御座候故、無骨なる卑賤の者に見くらべ申候得ば、誠に天地懸隔に違ひ才發と相見得申候へども、實智と申物は必しも歴々の勝れて發明にて、卑賤の者の馬鹿と申にても無二御座一候、其歴々の左樣御尤の中にてそだち申候物は、多くは人情にうとく、萬に氣の付不レ申物、卑賤の者は艱難にそだち、うゐめにも數ヶ度合申候て、身をこなし心を碎き申物故に、古より卑賤の者に智者賢者は多き物に御座候、加之世話にも海の事は舟人に問、山の事は山人に問と申候如く、下の人情は下の者が能存居申候、歴々は隨分人情に達し下の事に氣を付る人にても、一度も出會不レ申候事故、先は人情下の事はうとき物に御座候、其上わき目八目と申候て、其當職の人よりよしあしは脇目より能見得候ものにて御座候間、唐にても日本の古へも上書と申事御座候て、官人にても浪人にても、下の事にても存付候事は、書付を以て上へ申出候事に御座候、且又人には得手不得手と申もの御座候て、不得手の事を致させ候ては、いつも埒明不レ申、得手の事には殊の外智恵才覺働きの出候物にて御座候故、明君の人を使ひ申候事は、人々の得手の事

計を申付候間、役人甚く働き者の天下の事に指扣へ無御座よく治り申候、人の得手を見出し候には、只ならべて座させ置候ては、百年置ても相知れ不申、其者に物申させ候て見申候得ば、馬の得手は馬の事を申、弓の得手は弓の事を申、學文好は學文の咄を仕、面々得手〲の事是非口先に出申候物にて御座候、夫にて得手不得手を見分け候て役目を申付候事に御座候、書經に「敷奏以言、明試以功」と申候も此事にて、人に物を申させ見候て、申候事の理に當り候得ども、其申筋の役目に申付、其申候通りに參り申候哉、又參り不申哉の處にて、人の器量を見立候事に御座候、後世にても言路を開くと申候て、下の者の上へものを申出候道筋を付置候て、下より何事によらずよしあしを申出させ候て聞たまひ、よきに隨ひ悪きを改め申候事を人君の一大事としたまひ候事に御座候、御當代程言路の塞り申候事は無御座候、只今寄合・小普請・御番衆等の者は如何なる大智御座候ても、一向御上へ物を申出候道筋無御座候、訴狀箱は御座候て申上候ても、畢竟是は町人百姓ども手前の難儀を奉訴候爲の道具にて、急度致候侍を御取調被成候道具には無御座候間、人物を嗜申者いかに申上度事御座候とも、訴狀箱へ入候事は恥辱に仕り申候間、是へは不申上候、扨又御役人衆も御役目に懸り合不申候事は、申上候事相成不申、若御役目の外の事を申上候得ば不調法に相成候、手前の職分にても無之事を、御上を不憚不作法に申上候抔御叱を蒙り、又浪人抔は猶以て上は遠く、別て申上候事相成不申候故、器量才覺御座候て御上を大切に奉存、餘り殘念に奉存候者は、折々訴狀箱へも申

上候得ば、勿論御慈悲とは申ながら、氣遣ひの者馬鹿者に相成、御仕置被ニ仰付ー候間、只今天下に例の事目の先へぶらつき候ても、命がけ身體がけ無ニ御座ー候ては、申上候事は相成不レ申候、私相考見申候に、只今此大勢の寄合・小普請・御番衆等の内には、器量才覺有レ之者も可レ有ニ御座ー、又御役人衆の內にも、手前不得手の御役を一生不調法に相勤め、これ〳〵の御役を被ニ仰付ーたらば、一角相勤可レ申者と存居申者も可レ有ニ御座ー、又天下浪人もの世捨人の中には才德兼備り、一筋御用にも相達候賢者も智者も可レ有ニ御座ー候所、ケ樣に皆々に口をつぐませ被ニ指置ー候は、誠に天下の御爲に口惜き事に奉レ存候、何卒此以後大名・旗本・御役人・寄合・小普請・御番衆・御家人・陪臣・浪人の差別なく、御政道の事にても、御上の御身持の事にても、文武にかゝはらずよしあし利害存付候事御座候て申上候者は、存念無レ殘可ニ申上ー旨被ニ仰出ー、御側衆の內にて一人取次と申御役等被ニ仰付ー、存念無レ殘可ニ申上ーと存候者は、皆書附を以て上書取次の人まで申出、上書取次御役人より直に上覽に備へ奉り候樣に被ニ仰付ー、御政務の御隙に御奧儒者になり共、又は文才御座候御小性衆になりとも御讀せ被レ成、御聞被レ遊候はゞ、大勢の申上候內には、馬鹿〳〵敷何の御用にも相達不レ申、御笑ひ種と相成可レ申事も可レ有ニ御座ー、又下の人情も一々上聞に達し可レ申候、申上候筋合にて、其內には御上の御益に相成申候事も多く可レ有ニ御座ー、又申上候筋合、其人の得手・不得手・器量・才覺・善惡・邪正も相知れ可レ申、御上の御智惠をひらき、御德をみがき候事大方ならず、人君御學文の第一の御事に可レ有ニ御座ーと奉レ存

候ケ様被ニ仰付一候得ば、何を可レ申も無レ之、上御學候間、御役人衆は殊の外嫌ひ可レ申事に御座候得共、天下の御為には甚相成申候事に御座候

一　前に申上候通り、御旗本風儀悪敷御座候と申も、畢竟御教と申物は無ニ御座一候故にて御座候、只今は只悪事相著候以後に御仕置被ニ仰付一候のみにて、御教と申物は無ニ御座一候、古の人も「不レ教而殺、謂ニ之網ニ民ニ」と申て、初に教へ不レ申候て、悪事を致候上にて仕置仕候が、民に網を打かけて取様なる物なりと申て御座候、扨教と申は外の事にては無ニ御座一候、御上へ忠義を奉レ存、親へ孝行仕、妻子兄弟睦じく、中間合は親しく、身持律義に為レ致候事に御座候、夫を為レ致候は色々政道の致方に御座候得ども、先學文を致させ候よりよき事は無ニ御座一候、學文を為レ致候とて、悉く書物を讀せ、詩文章を作り得させ候事には無ニ御座一候、只御旗本の面々に學文はよき物、聖人のゝたまへる事は背かれぬと思ひ込候様に仕候事に御座候、扨其學文の通り道に引入候致方は、古へ邑の學校などを立候て、入學を致候様も御座候得共、當時俄に本道の通りには參り申間敷候間、先御役人を初て御番衆・小普請様の者迄も講釋を聞かせ候が、一番手短に可レ有ニ御座一と奉レ存候、講釋を聞せ候と申候ても、只今御城御月次の講釋、大學頭父子罷出相勤候様にて、承候者も畢竟皆勤めの様に相心得、一役一人ヅヽ、罷出列座為レ致候までにて、講釋は何を申やら耳にも入らず、承りながら浮世の事考へ居申候様にては、何の用にも達不レ申候、幸御儒者こそ大勢御座候得ば、是へ講釋を被ニ仰付一候様にと申上度物に御座候得ども、只今申て御儒者の役には御評定所へ罷出、日安を讀候までにて、學文の御用には一日も不レ被ニ

仰付ㇾ候故、御儒者共目安だに讀申候得ば、御用に相達相勤まり候と心得、學文の事は一向無精にて、さらば只今講釋にても仕人を敎へ可ㇾ申、ヶ樣成る器量の者は一人も見當り不ㇾ申、御評定所へ儒者の罷出候は、其昔林道春・春齋など博學にて、和漢の故實佛道神道までに通じ申候者故、公事訴訟御裁判の御相談の爲罷出候所、道春春齋樣の者常住は無㆓御座㆒候間、後には只目安讀の爲計に儒者ども罷出候樣に成行申候と相見得申候、目安如きのものは手代書役樣の者にても相濟申候、儒者を御出し被ㇾ成候には及申間敷と奉ㇾ存候、惣て人は使樣にてよくもあしくも相成申候物にて御座候、儒者に手代書役の仕候事を御勤させ被ㇾ成候ては學文埒明不ㇾ申候、勿論面々不嗜とは申ながら、上の御使被ㇾ遊候樣にもより候事に御座候、學文を以て上にも御奉公申上、人にも敎へ可ㇾ申儒者さへ、右のごとく學文無精にて、染々御用御達候ものは無㆓御座㆒候へば、其外の者は不㆓申及㆒學文と申物は上には御嫌ひなり、必竟學文は長袖の役なり、是を致さずとても武士は相立候と心得、學文と申物すたれ果、仁義忠孝は地に落申候世の中に罷成申候、扨此風儀を引立取直し申候には、先右の儒者の内にても御吟味も被㆓仰付㆒候はゞ、二人に三人は相應によくこそ無㆓御座㆒候とも、講釋計にても仕候樣成もの可ㇾ有㆓御座㆒、其上にて御旗本衆の内を御吟味被㆓仰付㆒候はゞ、是又五人も七人も書物を好み申候て、讀覺候者可ㇾ有㆓御座㆒候、扨右の十人も御座候者、悉く博學多才には、經學明白に無㆓御座㆒候とも大抵に一通り書物もよめ講釋もかなりに出來候者に御座候はゞ召出され、格別に格式も被㆓仰付㆒御城内にて一間も二

間も御擇被ㇾ成、又は昌平坂學堂又御番頭の宅等にて、四書・小學等の講釋被ㇾ仰付、御城内勤の衆は御城内の講釋を承り、御番衆・小普請等の者は頭の宅講釋承り、其外此中にもれ候者は昌平坂學堂へ參り、講釋承り申候樣に被ㇾ仰出ㇾ候はゞ、先一通り御旗本の面々忠孝の有增をも呑込可ㇾ申と奉ㇾ存候、扨又只今頭分の者組子へ殊の外疎遠にて、只威高に顏に苦みをはしらかし候て、下より物の申出惡き樣に仕かけ候計を御役の樣に覺へ居申候、惣じて頭役の者は上より其組子を御預け被ㇾ成、差置かれ候者に御座候得ば、其組子のういもつらいも、善も惡も、よく御組子のそだち候て、上の御用に相立申樣に取扱可ㇾ仕筈に御座候所、右の通りに御座候ては、上の御預け被ㇾ成候思召にも違ひ候と申物にて御座候、此以後は頭分の者へも此わけ篤と被ㇾ仰付、隨分組子へ親しく致し、折々は召集め、輕き料理にても出し、忠孝の道又は武道の故實のと古き物語を咄し致し、咄させも致候て、常に其組子の人柄をも呑込、誰々は親へ孝行、家内睦敷、家をよく治め候者、誰々は親へ不孝、博奕遊興を好み候者、誰々は器量才覺も有ㇾ之者、誰々は律義實方の者、誰々は弓馬達者に仕候者などゝ、常々篤と存居候て、勝れて器量才覺も御座候か、藝能達者に御座候などゝ申は上へは申出置、又人物不埒に御座候もの、相番組頭等寄合異見も加へ、尚又改め不ㇾ申候はゞ、急度上へも申出候樣被ㇾ仰付、右二事を推隱し差置、外より相著候においては、其頭並組頭等平生不吟味と申、御科を蒙り候樣被ㇾ仰付ㇾ候はゞ、頭分の者は、隨分組子を身に引かけそだて候はゞ風儀をも取直し可ㇾ申候、扨又只今御吟味と申候は御

老中の宅にて、一度も見も逢も不ㇾ仕もの五十人も百人も召集められ、只男振・立居・振舞・言語・應對の御見分御座候のみにて、外に何の御吟味も無ㇾ御座ㇾ候、惣て人の器量・才覺・人柄と申物、男振・立居・振舞にても相知れ不ㇾ申物に御座候、近く太閤の勢少さく、赤面にて猿眼に御座候、甲斐信玄の軍師山本勘助は、片目の上跛にて御座候、晋の鄧艾と申大將は吃にて御座候、唐の李克用と申者は片目にて御座候、皆大器量の大將にて御座候、天下蓍敷大功業を立申候、若只今の御時節に生れ逢申候はゞ、御番入も得仕間敷候、何卒此以後御役人・御小性・御小納戸等の御吟味には、一通り對客樣の御見分迄に無ㇾ御座ㇾ候て、兼てより其組々の頭分へも御尋被ㇾ成、其平生の人柄並藝術等篤と御吟味被ㇾ成、又前に申上候頭分の者より書出し申候ものを、尚又御老中・御逢被ㇾ成、御見分の上にて被ㇾ仰付ㇾ候樣相成申候はゞ、御旗本の面々は立身の種は、御列向對客より手前〳〵の身持藝術を嗜申候が早きと合點仕候て、上より不ㇾ被ㇾ仰付ㇾ候ても、我がちに學文等も勵み、人柄相愼み可ㇾ申と奉ㇾ存候、右の如く御政道被ㇾ仰出ㇾ候て、其上にて格別人柄の衆に勝れて忠孝を存じ候者は、又格別御役をも格式をも被ㇾ仰付ㇾ、又矢張人柄不埒にて仲間頭等の異見をも用ひ不ㇾ申者は、急度御仕置をも被ㇾ仰出ㇾ候はゞ、御旗本の面々目をさまし急度心附、人物藝術相はげみ、風儀宜敷相成可ㇾ申と奉ㇾ存候、兼て教と申物は人に目を覺させ候樣に致候が肝要にて御座候、人に目を醒させ候は賞罰の二ッにて無ㇾ御座ㇾ候ては參り不ㇾ申、一人を賞して天下悦び、一人を罰して天下恐と申は、天下に目をさまさせ申候事に御座候

一　御當代に御記録所と申物無二御座一候故、一ツの御損御座候、是第一御政務の古格と申物知れかね申候、第二には御役人中名譽を勵み不レ申、御政務の古格相知れ不レ申候故、何事を被二仰付一候ハ、皆下へ古格を御尋被レ成、下より申出次第被二仰付一候、是は下より御政務に御指圖を仕候も同じ事にて、御上へ御取捌に無レ之と申樣なる物に奉レ存候、其上下より申出候事は身勝手に取成、跡もなき事を古格に引立可レ申も相知れ不レ申候、左樣仕候ても上に體に御記録無二御座一候得ば、御詮議可レ被レ成樣も無二御座一候、先年台德院樣御遠忌の時分、寺社奉行より增上寺へ御規式委細書付可二差出一旨被二仰渡一候所、增上寺にて久數御法事無二御座一候、出家の行者のと申候者共段々かはり、舊記は無二御座一候、御規式も古格も覺存候ものも無二御座一候處、其行者と申候者は妻帶にて御座候者故、少は申傳書傳の物も御座候て、夫々本に仕色々眞僞を付添候て書出し、夫にて御用相調候と申事を、增上寺の內證をよくぞんじ候ものの物語り仕候て笑ひ申候由、荻生總右衞門政談と申書に書記し申候て御座候、ヶ樣の事は輕き事の樣に御座候得共、下の者上を見すかし申候端にて、甚天下の御大事に預り申候事に御座候、惣て上の事は何事も下よりは奧深く計られ不レ申樣無二御座一候ては、天下治り不レ申候、只今は人々只御役人衆の手つりをよく仕、古格をだによき加減に書綴ひ差出申候得ば、いつも其通りに被二仰付一候と相心得、上を手握りに仕居申候、何卒是を急度御記録所を御立被レ成、其懸りく＼を別々に被二仰付一、或は御政務懸り、御規式掛り寺社係り抔申樣に夫々被二仰付一、權現樣以來の御先格をも御詮議被二仰付一、

此以後の御政務被二仰出一等も、一々相記し被二指置一候樣に被二仰付一候はゞ、此以後如何樣の事御座候ても、下へ御尋ね被レ成候にも及不レ申、下より上を欺き申事も相成不レ申、御代々の御先格其掌を指すが如く相知れ、御用も御差支御座有間敷と奉レ存候、扨又人を引上げ勵し申候は、名譽と申物が却て賞罰よりは人の心を勵し候ものにて御座候、武士の命を拋候て引けを取申間敷と切ッ刃を廻し爭ひ申候は、畢竟後代世間への聞得を憚り申候故にて御座候、然らば名譽と申物は一命を替へ可レ申程の大事に存込候人心に御座候、（若林靖亭曰、人貴二名節一、不レ失二廉恥之心一、不レ失二廉恥之心一、苟不レ陷二不義一、所謂君子疾二沒レ世而名不レ稱焉、是也）然處只今御上へ何程の御奉公を相勤め、天下に何程の功業を相立候ても、當日御褒美被レ下候のみにて御記錄無二御座一候故、後代へ美名顯し不レ申、何程の惡事卑怯を仕候ても、當分御仕置被二仰付一候のみにて御記錄無二御座一候故、後代へ惡名顯し不レ申、夫故少々氣先志御座候て、御上へ蹈込御奉公仕、天下に功業手柄を相立、名を後代へ顯し可レ申と奉レ存候者も、先日前御首尾よく樂みくらし候得ばよきは、如何樣の功業相立候とて御記錄はなし、名の後代へ傳る事のなきを存じ、人心寐入不レ申樣に存候が肝要にて御座候、人心寐入申候得ば、何事も先當分どうなり共申て渡と申懦弱の心出來申候て、天下の事次第に崩れ行申候物に御座候、人の心を引立候には、平人は賞罰にて參り申候へ共、少しも志御座候者は、名譽と申物にて無二御座一候ては參り不レ申候、惣て罪を恐れて惡事を不レ仕、賞を悅びて善を仕候と申は平人の事にて、少しも志御座候者は、當分の御賞罰は何共不レ存、只後代への聞得を憚り申候間、當時如何成御褒美に預

り候ても、名譽に疵の付たるは不ㇾ仕、如何成御仕置に被ㇾ仰付ㇾ候ても、名譽の顯れ候事は搆ひ不ㇾ申、夫故軍中にても第一御法度の拔がけを仕、跡にて重き御仕置に被ㇾ仰付ㇾ候をも顧み不ㇾ申候、治世も軍國も御上へ御奉公仕、功業を天下に相立候は同じ事にて御座候、天下を御治め被ㇾ遊候には、此人の名譽を惜み申候心を御そだて被ㇾ成候が第一の事に奉ㇾ存候、人々名をだに惜み申候へば、上へ不忠は不ㇾ仕ものにて御座候、夫故唐土にては史官と申ものを立置、大身の者の傳記をこしらへ、其者の一生の善惡邪正を記し置、後代へ傳へ申候て、名譽を以人を勵し申候間、人心引立候て人々名を惜み申候故、何當分の利祿にひかれ不ㇾ申、天下に大功を立候人大勢御座候日本にても王代は不ㇾ申及、鎌倉時分も記録御座候、只今御上に御座候東鑑、中書等の日記にて御座候、何卒只今も御記錄所を御立被ㇾ遊候て、御老中・御若年寄・其外大身の御役人衆の傳記を書記し、或は何某と申御老中は是々の事を申上、殊の外天下の御爲に相成、何某と申御若年寄には、何の事を仕り萬代の爲に相成候、何某は律義に御役相勤、何某は私欲仕、上へ不忠の御座候抔一々に書記し、後代へ傳へ申候樣被ㇾ仰付ㇾ候はゞ、御役人衆も御先代の御役人衆の善き人の名譽の後代にあらはれ候を羨敷ぞんじ、惡き人の惡名の後代にあらはれ候をうとましく存、人々後代への聞得を憚り、殊の外引立候て御奉公大事に仕、私欲惡事不ㇾ仕候樣に相成可ㇾ申と奉ㇾ存候、孔子作ㇾ春秋、亂臣賊子懼と申候も此事にて、孔子の春秋と申記錄を作りたまひ、亂臣賊子の惡事一々書きたまひしより以後は、亂臣賊子共惡事は後世にあり〳〵と相知れ申候事を恥敷ぞんじ、惡事を不ㇾ仕と申事にて御座候其上是のみに無ㇾ御座ㇾ御代々御明君樣方の御

明德並被レ遊候御恩政、誠に古の聖君賢君にも越へ雖レ有事も數多有レ之、次には阿部豐後守・板倉周防守・酒井讃岐守など申者、殊の外天下の御爲に骨折大功をも相立申候者にて御坐候所、御記錄と申物無二御坐一故、御上の德も下の功業も消失仕り、覺存候人も無二御坐一候樣に成行申候は、傷敗事共に御坐候

一　盜賊の事は段々御吟味も被二仰付一、御仕置も嚴敷御座候得共、兎角惡黨絕不レ申、去年中抔は本町通り筋町人共の戶前をにお明け踏込横領仕、或は日本橋にて侍を踏倒し、鼻紙入を拔取、又は街道中にて御用御狀箱を持候人足を追かけ申候抔申樣の事數ヶ度承及申候、江戶御膝本並大切の御狀箱に向ひ、ヶ樣の事を仕候は誠に上を不レ奉レ憚暴逆無道と申も愚の事に奉レ存候、此風儀を其儘にて被二指置一候はば、後々には下の上を輕しめ申候端になり、大に天下御政道の邪魔に相成可レ申と奉レ存候、只今御威勢かくばかり御盛にて、五十萬石百萬石の大名をもちくとも御働き不レ被レ成候御中にて、少々小盜人御座候て、御政道の御邪魔可レ仕など申候は、近頃おかしき事の樣に御座候得ども、古より天下の亂口を考へ見申候に、多くは强賊より事起り申候、夫故唐土にても、日本の古王代にても、盜賊と申科は十惡の內に入候て、謀叛人と同罪に申付候事に御座候、先達て御仕置被二仰付一候日本左衞門栢之進抔申類の强盜、只今にても田舍には所々に御座候て、平生手下の者へ恩澤を施し、金銀を遣し置候故徒黨大勢有レ之、互に其內にて義理を立合、命を捨て合申候て、一頭には五百人も七百人も御座候由承及申候、ヶ樣の者は面向は一通り百姓町人の樣に仕居申候、手下の者を他所へ働に遣し、其上米を取夫にて渡世仕居申候由、其所の者は其譯を能存居申候へば、其一郡一村の內にては惡事を不レ仕、其上御公

儀へ申出候得ば、殊の外物入御座候故、御上へも訴出不レ申候、惣て百姓は前にも申上候通り、物事御公儀へ訴出申候得ば、過分の失却仕候間、身にかゝり合事にても、大體は堪忍仕居申候事多御座候、上州邊御籏本の知行處にて、百姓の家へ夜分盜賊一人踏込金子を無心申懸候所、折節近所の浪人共參り合せ居申候て直に引縛申候、御公儀へ奉レ訴候得ば、過分物入も御座候故、少々金子を遣し追放レ可レ申候と申評義に仕候所、（盜賊の事にて御坐候間、只追放し金子を遣し候には及申間敷旨に御答候へども、重て其盜賊御公儀へ召取られ候ては、[illegible]に相成候間、何某方にてとらへられ候得ども、內證にて追放され申候旨白狀仕候へば、其追放申付候者は[illegible]儀に相成、御詮議御付被候間、其日をとめ可申たく、則て盜人に金子を遣し、[illegible]を直申事にて御座候）近所のもの最早聞付候て大勢かけ付候間、穩便に內證にて濟し申候事も相成不レ申、是非なく申出候處、其入用七十兩餘り失却仕、夫にて其百姓身體をつぶし申候由、大抵左樣の事御座候ては、其盜人に金子の五六兩遣し申候て追放し申候得ば夫切にて相濟、御公儀へ訴出候よりは却て物入も無二御座一候故、少々の盜賊横領に逢候ても、內證にて相濟し申事多御座候、左して身に懸り合ひ申事は可二申出一樣も無二御座一候、御代官杯は前々申上候通り、只年貢の取立計御役儀の樣に覺居ら申候間、是亦其處にて惡事を致し不レ申候得ば、御吟味も無二御座一候故、右の盜賊頭とも絶て不レ申候、農業も商賣も不レ仕、只人の金銀を掠取、一生無事安樂に送り、何御咎めも無レ之御座候者處々に御座候よし承及申候、此者自親手を下し盜賊火付は不レ仕候へども、其手下の者八方へ打散、人家の財寶をかすめ取、旅人を脅かし、火付を仕、萬民を惱し申候得ば、畢竟自親手を下し惡事を仕候よりは其惡逆百倍增に御座候、其上世上豐にて貨物も澤山御座候節は、又御上の御威光を

も可レ奉レ畏候、若五年に三年水旱續申候て、喰物も無二御座一抔申樣の事も出來申候はゞ、大勢徒黨召集め、或は百姓職人さそひ立候て家出出入仕、御公儀の御役人へ手向可レ仕も相知れ不レ申候、其内にて少々小才覺の有レ之者も御座候はゞ、世上騷敷相成申候端と成行可レ申候も難レ計奉レ存候、目前九鬼長門守・蜂須賀阿波守抔先祖皆盜賊の中にて器量有レ之、如レ是大名にへ上り申候、斯く申上候は餘り御上の御大事と、御代の萬世長かれと奉レ存候心の通り過ぎ、末々迄推し計相考候事にて、早今日にも明日にも左樣相成可レ申と存奉候には無二御座一候、先當分指當り右から左へ追落し押込火付等多く、殊の外萬民の難儀に相成申候事に御座候、勿論嚴敷御仕置被二仰付一候はゞ、是亦相著候以後御仕置被二仰付一候のみにて、初より盜賊無二御座一候樣に御取扱之御政道は無二御座一候、惣じて何事も本を正し不レ申候ては、末よりは直り不レ申物にて御座候、只今盜賊の本レ申候は、世界に紛者多く、人に來歷と申事無二御座一候故にて、只今は江戸にて人を殺し金銀を取、大坂へ共、京都へ共、長崎へ共、其外田舍へ共罷越、町人に相成候共、又は浪人を相立候共、五日十日逗留可レ仕も、一年半年又は一生暮し可レ申も勝手次第にて、何の證文切手も持不レ申者にても、誰咎め申者も無二御座一候故、輕きものゝ惡なる了簡は、江戸にて仕くじり申候はゞ大坂へ參り可レ申、大坂にて惡事著れ申候はゞ田舍へ缺落可レ仕と相心得、貧苦につめられ、惡性にくらまされ、先一日の隱れ處御座候得ば、是にて一生濟と存、石川五右衞門と申盜賊が申候、一度はまゝよ、二度は大事か、三惡逆に落行と申如く、次第〳〵に惡道に落行、後

には火付切剝をも仕候樣に相成行申候て、江戸にて御詮義の嚴敷御座候時分は、彼田舍の盜頭など申者の方へ逃行申候間、當分は盜賊無レ之樣に相見得申候へども、又御詮義のゆるみ鳴りも靜り申候得ば、直に罷出惡事を仕候間、幾等火あぶり被二仰付一候ても火付絕不レ申候、幾等打首被二仰付一候ても盜賊絕不レ申候、此本を御正し被レ遊候には、人別帳と道切手とを急度御正し被レ成、世界の人に來歷を付、自由を偽せ不レ申候樣に被二仰付一候て其上にて十家牌と申物を御行ひ被レ遊候はゞ、盜賊は少く相成可レ申と奉レ存候、（人別帳道切手只今に御座候得ども、只今の有様にては何の用にも相立不レ申候、此段荻生惣右衛門と申者の政談と申書に書記し御坐候、大體惣右衛門申候通りにて宜敷可レ有二御座一と奉レ存候、何分御詮義之上にて可レ被二仰付一候、十家牌の事は、王陽明文集と申書に書記し御座候、御詮議之上被二仰付一候得は相知れ申候間、此所に不二申上一候、）昔は吉野・熊野等の深山幽谷を盜賊の巢と申候が、近來は右人別帳道切手妄に相成申候故、江戸大坂幷所々御代官領が盜賊の巢に相成申候、何卒右の三法を御行へ被レ遊候はゞ、設令盜賊のひしと絕ゆると申事は無二御座一候とも、先御城下幷田舍にても平人に雜り住居仕候事相成不レ申樣に罷成申候て、大形ならず天下の御爲、萬民のために相成可レ申と奉レ存候

抑此一部はある日御膳に侍べりし時、さきつ頃御覽を奉りし山本元七郎が獻策を見たまひしに、議論正大にして權貴の忌諱を恐れず、世間稀有の直諫ぞかし、そのかみ柴野彥輔が上書の類なりと仰有ける、[illegible]古賀彌助の時事を論ぜし封事は家に藏侍れど、上書はいまだ見及侍らずと存奉れば件上御笑ありて、其封事はしらず、いざ交易して見んと仰有て、御傍近き御小性して上書をかし給はり、

やがて謹で淨寫せしむ、備も又封事を奉て乙覽に備へぬ、事の始末を書付て子孫に遺すと云

安政卯のとし皐月の八日

若林備誠

栗山上書終

十事解

古賀樸著

十事解

樸侍蓮池侯、講近思錄、至程子論十事略、及所以施之於今、使令書其說、以備觀省、故有是著、嘗譬諸水、夫程子所論其委也、道學知行其原也、水發於源焉、然後灌注停蓄、遂潤品物、終古不竭、不然則雨集溝澮、涸可立待、世之論者、或舍原而求委、規規於事爲之末、不流於權謀功利之陋者幾希、可不戒哉

寬政紀元臘月　　古賀樸識

十事解

精里　古賀樸著

師傅

凡人師友ナクシテ能成立スル者ナシ、別テ人ノ上ニ立チ、治國安民ノ責アル人、其職重大ナレバ、一己ノ私智ニ任ジテハ、中々一事モ行フコトナルベカラズ、然ルニ近世教學ノ道明ナラズ、下ハ士タル位ノ者ヨリシテ、手習學問ハ幼稚ノ仕事ト覺エ、前髮ヲ取ル頃ヨリハ、道ヲ問惑ヲ解ノ師友ナシ、國君卿大夫ハ猶更也、下賤ノ者ハ今日ノ勢ニ抑レ、我儘ヲ云テハ人ノ合點セヌ故、愼ノ心自然ト少シハアレドモ、國君卿大夫ナド、上ハ上程頭ヲ抑ル者ナク、私意ヲハタラク故、國家ノ事ニ臨デ善狀鮮キハズノコト也、今ノ侍讀侍講ナド師傅ノ類ト見ユレドモ、儒學者大方卑賤ニシテ政事ニ預ラズ、進見モ稀ナレバ、タトヒ有德有志デモ資益アルコト難シ、況ヤ奔走卑屈講釋詩文ノ相手等ニ手數バカリニ勤ル者ヲヤ、大夫ハ國家ヲ荷フ職ナレドモ、多クハ日々受持ノ役ノ分サヘ申遂ルコト難キ樣ニ見ユ、然レバ教訓ニ導キ德義ヲ附益スルコト愈難カルベシ、人主ノ肝要トスルコトハ能人ノ諫爭ヲ受ルニア

リ、人主ノ心持僅ノ善惡ニテ、下ノ爲ニナルコト不爲ニナルコト、莫大ナルコトハ言ニ及バズ、是ヲヨク開導誘進スル人無テハ、志ハ善ナテモ氣付ズシテ惡クナルコトアリ、大事ノコトナラズヤ、日本ハ別シテ諫爭ノ風ハヤラズ、言路常ニ塞リ、下情上通セズ、是學問ノ道明カナラヌ故也、年來ノ弊ヲ去リ、國家ヲ中興スル事ハ、第一ニ衆人ノ智ヲ集ズシテナラズ、然レバ言路ヲ開ヨリ急ナル・ナシ、大夫以下ノ要職侍御ノ人ハ勿論、非其人ヲ用ユベカラズ、是ヲ用ユルカラニハ、皆々存分ヲ殘サズシテ君徳ヲ補ケ、壅蔽ナキ樣ニスベシ、上ニ實ニ善言ヲ好ムノ心有バ、善言自ラ至ルコト疑ナシ、受言ノ道獨其職ニアル者ニ限ラズ、老年又ハ事ニ功者ナル者ヲ閑暇ノ時ニ咄相手ニ召テ、大小ノ事ヲ訪問シ、其善ヲ取コト人主タル人ノ樂ミナルベシ、其言ヲ能考テ、其人ノ邪正才否モ猶又知ラレン、是自ラ師ヲ得ノ道也、別シテ國相ヲ初侍臣ノ長、侍讀ノ者ナドマデ、遠慮ナク事ヲ論ズル樣ニ有タキコト也、其中ニモ自然奸佞ノ人有テ、邪說ヲ進ルノ憂アラバ、能其實ヲ考ヘ取舍ヲナスコト言ニ及バズ、黜斥モアルベシ、夫ヲ恐レテ言路ヲ塞ベカラズ

六官

六官ハ周禮ニアル天地四時ノ官也、歷代官制各異ナレドモ皆六官ノ意也、今祖宗ノ制有テ、時處不同ハ必シモ周禮ノ通ニ備ルニ及バズ、政事モ時勢ニ因テ繁簡アリ、役人モ夫ニ隨ヒ增減セル也、トカク前方ヨリハ事多ク、役人モソレニ隨ヒ增スコト世ノ常勢也、上ニ職員ヲ增セバ、ソレダケ行徒マデ

モ增テ、事益多ク費モ廣シ、互ニ事ヲ推卸スルノ害モアリ、「興二一利一不レ如レ除二一害一、增二一職一不レ如レ省二一事一」トカ云リ、役人ノ增添ハ好マシカラヌコト也、何故ニ以前ヨリ事多クナリタルト能考ヘ、不レ得レ已バ增タル分ニテモ置ベシ、不レ然バ無用ノ事ヲ省キテ、役人ノ多カラヌ樣ニスベキコト也、役人立テアル間ハ、無用ト云ベキコト無キ樣ナレドモ、能大體ヲ考ヘミレバ、除ベキモアル也、然レドモ增ハ易ク、減ハ難シ、或ハ從レ政者人情ナドニ拘リテ、冗員ヲ其儘ニ置モアリ、是ハ懦弱ノ至リ也、然レドモ無理ニ減ジテ事ノ害アルコトアリ、能ク事實ヲ考ベキコトナリ

經界

仁政必自二經界一始」トアレバ、至要ナルコト也、古井田ノ法アリテ、百姓一家百畝ヅヽ受ルノ定アリ、其外限田ノ法モアリ、夫デサヘ經界崩レ易シ、今ハ構ナシナレバ、其害多キハヅノコト也、凡百姓ハ面々田地ヲ持、面々ニ竈ヲ立、丈夫ナルヲ善トス、然ルニ百姓困窮スレバ、年貢モ納ルコトナラズ、田ヲ作ルコト不レ能、故ニ米三斗ニ一斗ヅヽ利ノ付米ヲ借リ、益窮スレバ田地ヲ人ニ賣渡シ、倒レ百姓トナリ、豪富ノ者ニ打カヽリテ露命ヲツナグ、是ヲ傭戸ト云、豪富ノ者ハ村方ニテ錢穀ヲ借シ、重キ利ヲ得、田地ヲ買ヒ集メテ百姓五軒モ十軒モノ前ヲ持、是ヲ下地ニシテ右ノ倒レ百姓ヲ吾奴僕トシテ、年々作徳ヲ呑テ益富ム、是ヲ兼幷ノ家ト云、凶年ナドニ凍餒離散スル者多ハ傭戸ナリ、サテ上ヨリ救米介抱ナド有テモ、兼幷ノ家ニ落テ、傭戸ニハ及ビ難シ、夫故ニ豐凶共ニ傭戸ハ困窮スル也、後ニハ

一家皆非人乞食ニナリテ溝壑ニ轉ズルニ至ル、可↓哀コトナラズヤ、サテ其田地表向キハ佃戸ノ名前ニシテ、汙萊トナルコト多シ、是故何トゾ百姓ノ持ベキ田地ヲ定メテ、兼并家ニ渡サヌ樣ニスルゾ經界ノ法也、然ラバ此兼并家ヲ打潰シ、佃戸ニ作料ヲ與ヘタラバ、其害ヲ免ルベキ樣ニ見ユレトモ、其通ニハ行ハレヌ也、ワケハ如↓右、窮シタル百姓共一人二人ニアラネバ、十分滿チ足ル樣ニハ、上ヨリノ合力モ手ニ及ズ、大概ニ作料ナド與ヘタリトモ、田地家財農具牛馬衣食皆持ヌ者ドモナレバ、自ラ立コト不↓叶、又々兼并家ニ往テ、憐ヲ乞スガリテ世ヲ渡ル外ナシ、此弊ヲ急ニハ改難シ、鄉村ノ吏莊屋村役ナドニ其人ヲ得テ、此弊ヲ改ルノ主意ヲ深ク申含メ、弱ヲ扶ケ强ヲ抑ヘ、漸々ニ佃戸減少スル樣ニ心遣フナラバ、其効アルベキカ、年貢取立ノ時ハ其方バカリ火急ニシテ、自然遲滯スレバ、役人村役莊屋モ罪ヲ得ル故、眼前ノ責ヲ塞グバカリニ心ヲ取レ、潰ル丶民ヲ顧ニ不↓暇、可↓歎コトナラズヤ、是余所↓傳聞ヲ記スノミ、利害猶多カルベシ、有司ニ問ヒ給フベキコト也

鄉黨

鄉黨疾病死喪患難ノ時賴シク相扶ケ、善ヲ勸メ惡ヲ戒ムベシ、世敎衰ヘテヨリ鄉伍ノ間ニ弊病多ク、風俗頹ル、粗吉凶ノ品節ヲナシテ、此風ヲ引直スベキコト也、處ニヨリテ今民間婚嫁ナドノ時節、隣伍ヨリ酒肴ヲ送リ、緣聞キナドスルニ、飲潰シ食潰シ、過分ノコト也、自然馳走セザルナド云トキハ、若キ者共ワヤクヲナシ、或ハ其所ニ居住モ成ヌニ至ル、其大費ヲ恐レテ怨女曠夫アル程ノ儀ニテ、甚

ダシキコト也、死喪ノ時モ數日飲食ヲ貪リ、其外淫祠胡神ニ金穀ヲ抛チ、或ハ參宮彥山詣ナド我モ〳〵ト思ヒ立、錢ヲヌキテ僧巫ニ與フルコト、年貢ヨリモ嚴也、積重リテ家產ヲ破レドモ察セズ、遊惰淫肆ノ媒チトナルコト多シ、今日本ノ大法佛法ヲ用ヒテアレバ、諸侯ノ力ニテ此ヲ禁ズルコトハ難シトイヘドモ、如レ此ノ弊アルコトハ改メ樣アルベシ、鄕黨ニ盜人ノ宿、博奕ノ座親ナドスル者ノ吟味強クバ、奸民容ル所ナカルベキニ、良民ハ弱ク奸民ハ强クシテ、良民却テ凌轢セラル、豈能惡ヲ制スルコトヲ得ンヤ、サテ又目明シナド云モノ鄕村ニアレドモ、多クハ是モ奸民ニテ、上ノ權ヲ借リテ惡事ヲソヽナカシ、ユスリスル類マヽ有リ、是ニテ惡ヲ禁ズルハ、血ヲ以テ血ヲ洗フニ似タルコトアリ、是等良有司ノ心ヲ留ベキコト也

貢士

我邦武將ノ世トナリテヨリ、選擧ノ路塞リ、殊ニ吾藩ノ如キハ、世祿ノ弊アルヲ免レズ、有二祿位一者ハ怠リ、無二祿位一ハ不勤ニ、士氣不レ振、風俗衰ヘ易キハ多クハ此故也、近年列國學校ノ設アレドモ、貢士ノ法立ズ、隣藩ナドニハ少ハ其意ヲ行モアリト聞ユ、今如レ此ナリタル時弊ヲ遽ニ改ルコトハ、中中難キコトニテ、人情ノ大ニ驚ク所ナレドモ、古今ノ法ヲ斟酌シテ、今ヨリ勝ル仕方ハアルベキコト也、人ノ才否勤怠ヲ差別モナク、一概ニ位牌知行ヲ與ヘテ、是ヲ摩勵スル處置ナキハ拙シト云ベシ、極不肖ナル者ニハ休息出米ヲ上サセテ、幕府ノ小普請金ノ樣ナル法アルベシ、一度賜リタル俸祿ハ、

子孫ノ賢否ヲ不レ論シテ傳襲スル故、上ノ倉廩釆邑有レ限バ、存分ニ人ヲ扶助スルコト不レ叶、然レバ新ニ增祿取立ノ者ニハ、是マデノ法ヨリ模樣ヲカヘタキ者也、是モテ大事ノ儀ナレバ、容易ニ下レ手ベカラズ、能人情時勢ヲ考フベシ、タトヒ此事ニハ及バズトモ、家長ナド常ニ心ヲヨセテ、都合ヲ考ヘテ油斷セザル仕方アラバ、彼善ニ於レ此トイフベキカ

兵役

宋時兵役トハ、今ノ使番手男ナドノ如キ諸役所ニ召仕フ者兵士ヲ用ヒタリ、是ニ利害アルコトナリキ、今モ兵農分レタレバ、給人ニ付テ論ズベシ、治世久ク武士皆惰ニナリテ、其職ヲ忘レ易ク、又生計ニ詰リテ、職事ニ及ビ難キ者アリ、自然ノ變アリテモ、今ノ武士饑渇窮著ニ堪ズ、身體弱ニシテ用ニ立者少カラン、列侯ノ下ニモ郷士ナドアル所農兵ニ近シ、今給人小身ニテ耕作商賈ナラヌ故、世ヲ渡ルベキ樣ナク、法ヲ犯スニ至ルモアリ、切米代地釆邑ナド耕シテ、今ノ赤司一黨ノ如クナシタキ者也、然シ郷內ニ居ル給人ハ、必驕慾ニシテ村ノ妨ニナル者也、被官カケタル程ノ者ニテモ百姓ヲ凌グ風アリ、サレバ給人ノ耕作スルニハ、今ノ莊屋ノ如ニ勢輕クテハ手ニ餘ルベシ、乾ト其上ヲ抑ユル人ヲ置ベキ也、俄ニ如レ此スルコトハ難ケレドモ、歸農ノ意ハ有タキ者也

民食

古ハ民有二九年之食一ト云リ、今時ハ其年ノ饑ヲ免ザル體也、如レ此ノ備ナキコト故、近年ノ飢饉ニ流

荒アリテ、其時ニ臨ミ是ヲ憂テモ、タトヒ金銀ハ有リナガラモ、隣國モ津留嚴シキ故、米穀ヲ得ベキ所ナシ、手ヲ拱テ死ルノミ、民ノ父母タル者至痛至切ノ憂トスベキコトアレドモ、翌年ヨリハ諸役人ノ心是ヲ忘タルガ如シ、此體ニテハ凶年緩急共ニ何ヲ以テカ是ニ應ゼンヤ、可レ歎コトドモ也、民食ヲ備ルノ道ハ、今ノ上下ノ妄費ヲ省キテ、籾ニテ少ヅヽナリトモ鄕倉ニ積置、毎年積カヘ積カヘシテ置足シ、或ハ麥出來タル時、麥ニ積カヘテモ善カラン、籾ハ何年置テモ損ゼヌ者也、今一年送リニスリテミレバ、少々減ズルトテ役人ナド費ノコトヽモ思ヘリ、去ナガラ耗ハ僅ノコト也、凶年ハ少々ノ穀ニテモ、草木ノ葉ナド加ヘテ食スレバ、多クノ人命ヲ助クベシ、凶年ナラズトモ、秋ニナリ倒百姓ヲ見繼ギ、其益大ナルコトナレバ、民ヲ憂フル心切ナラバ、少ヅヽノ儲出來ヌコト有ベカラズ、サテ朱子社倉ノ法ハ、今モ何トゾ行ヒタキコト也、此法モヨキ人ニ任ゼザレバ弊ヲ生ズ、志アル才アル者ニ命ジテ、試ニ一二村ニナリトモ、是ヲ手本ニシテ諸村ニ推行フベシ、是ハ萬世ノ良法ナレバ、志アル人ハ立置タキコト也、諸侯逐年困窮シテ、明年ノ作毛ヲ今年ヨリ指シテ金ヲ借リ遣フ位ナレバ、餘計トテハ無レドモ、是ハ格別ノコトナレバ、懸硯ヨリモ出シ、民ノ妄費ヨリツヾメテ是ヲ蓄ヘ、又ハ豪富ナドニ喩シテ本ヲ出サシメ、社倉法ノ如ク數年ノ後ハ其本ヲバ返スベシ、是ヲ外ノ用ニナドスル時ハ、忽此法廢スベシ、慥ナル仕方アルベキ也

兵農分レテヨリ冗食甚ダ多クナリ、今ニテハ民ノ膏腴ヲ竭ス者ハ士也、能其職分ヲ思ヒ驕逸ナラズ、僚ノ三ヲ正ス様ニアルベキコト第一義也、下ノ風俗ノ善悪モ皆上ヨリ出デ、家中ノマネヲスル故、下ノ悪キハ皆上ノ悪キナレバ、餘所ノコトト思フベカラズ、農ハ本業ヲ専ニスベキコト勿論ナルニ、今ノ郷村ニ百姓ト云者少ナク、何某殿ノ組何某殿ノ家来被官ト稱スルモ多シ、被官ナドハ主人ノ用ニモ立ズ、名ヲ假テ村里ニ臂ヲ張ノミ、百姓ノ賤キコトニ思ヒ、如シ此農業ヲ専ニスル者ヲ賞翫アリテ、如レ先ノ風ヲ改メ質樸ノ俗ニ返シタキ者也、工商モ人ノ好ミニツレテ智力ヲ用ユル者也、近世屋作器物等ノ奢ヲ好ム風ニナレバ、夫ニ應ジテ淫巧ヲ務メテ利ヲ得ントス、商人ノ貨物モ風俗ニツレテ行ハルレドモ、商人ヨリ奢ヲ誘フコトモアリ、是ラハ上ヨリ心ヲ付ラレタキコト也、近頃ハ都ノハヤリナド云テ、器物・衣服・椀・家具・模様・織物・履物・女ノ櫛・笄ノ類ニ至ルマデ、無用ノ飾ヲナシテ取アツカフコトヲ禁ナキ故、人々是ヲ珍シガリ格別奢靡ニナリタリ、干菓子ナドマデモ近頃工緻ニナル、價モ夫ダ高ケ貴シ、古ハ不レ售熟食ト云リ、本藩ノ人ヲバ諸國ヨリハクヒタハシト云、誠ニ町々肆々ニ煮賣・餅・酒・肴・饅頭ナド續キ渡リテアルハ、諸國ニ類ヒナキコトゾ、是ヲ以テ饑ヲ凌グニテモナシ、思ニ是ヲ食フ、其費幾バクト云コトヲ知ズ、如レ此ノ習俗改メタキコト也、是ハ四民ノ中ノ弊也、此外ニ大ナル遊民ハ出家也、其類山伏虚無僧ナド云様々ノ者アリ、無頼ノ者多ク集レリ、皆民ヲ惑ハシ米錢ヲ取、今ハ佛法ヲ海内ノ政ニ取用ヒラレタル故、諸侯ノ力ニテハ禁絶センコト難ケレドモ、民ノ惑ヲ解

クコトハ肝要ノコト也、諸役人モ佛ニ惑ハス者百ニ一二モナケレバ、浮屠ノ言必用ラル、堂塔ノ建立物ヲ寄附ン、祠堂銀ヲ付、祈禱ヲ頼ミ、佛事作善ヲスル類家產ヲ傾ケテ是ヲナシ、家國ヲ有ツ者是ニ惑ヘバ、浮屠ヲ奉ズル所ノ費行々ハ暴歛苛政ヲナシ、民ヲ疚シムルニ至ルヲモカマハズ、可レ憂コト也、今開國以來ノ例ニナリタルヿハ、力ニ不レ及コトナレドモ、中比ヨリ新規ノ寺社ノ心遣ヒナド初リタルハ、斟酌シテ省キタシ、彼等ノ財用民力ヲ費ス願ヒスヂナド、一切ニ裁割シテ是ヲ不レ聽バ、其益モ少ナカラザルヿトミヘタリ

山澤

山澤ハ天地ノ寶藏ナレバ、取レ之ニ品節ヲシテ伐リ荒サヌ樣ニ有タキ也、山ヲ開キ新地ヲ作リ、薪炭ノ所ヲ新ニ許ス類、其爲ニ妄ニ山ヲ禿ニスレバ、土砂下リテ川淺クナリ、山ニ水ヲ貯ヘザル故夕立ノ雨ナク、其害莫大也ト古人モ論ゼリ、世俗ノ吏遠キ慮ナク、眼前ノ功ヲ貪ル故、色々ノコトヲ御益ト稱シテ言タテ山澤ヲ開キ、山師ナドニ詿カサルヽ類マヽアリ、新田ナドハ得ルヿ不レ償レ失者ト見ヘタリ、如レ此ノコトニカヽリテ後悔アルコト多シ、國家貧困ノ時其虛ニ乘ジテ利益ノコトヲ建言スル者必アリ、其所言ハ俗諺ニ濡手ニ粟ヲツカムト云如ク、人ノ飛カヽル程ノ利ヲ言ヒ立ル者也、如レ此ノ輩ニ不レ惑樣ニ爲政者尤心得有ベキコト也、サテ又山澤ノ稅多ハ懸硯銀トナル、是寶藏ヲ私ニスルニテ道理ニ叶ズ、然レドモ今向々國家ノ儲蓄ト云者ナケレバ、是ヲ引分テ置モ可也、是ヲ國家ノ爲ト思ヒテ、

自分ノコトニ取迫ハズ、其中ヨリ社倉ノ粟ナドニシテ置タラバ、イカバカリカ民ノ為緩急ノ為ニナル
ベキニ、其事ニ及バズ奢欲ノ為ナドニ費スハ、大ナル誤リナリ

分數

分數ハ冠昏喪祭等ノ差格ニテ定レルヲ云、今時此分數ナク、面々勝手ニ事ヲナスハ上下ノカマチ無キコト也、夫故世ノ中ノ奢増長スレドモ、何ヲ目當ニ制スベキ様モナシ、此品節ヲ立テ守ルベキコト也、近年諸色高直ニシテ諸侯ノ物入昔ニ倍ス、依レ之困窮尤甚シ、中々前方ノ心得ニテハ決シテ行ヌコト也、有米過ノ法ヲ屹ト立ベキコト也、有米スギトハ、卽量レ入而為レ出也、經濟ノ大法此一言ヨリ外アルベカラズ、世ニ有米ニテハ決定アラズ、地ヨリ湧出ル物ニモ非ズ、有米ノ外ニ何ニテ足ス道アルヤ、是ハ眼前ノ凌ギ方ニ子金家ヲタノミトスルノミ、今年不足故ニ金ヲ借ル、明年モ又今年ノ如ク、不足ノ上ニ去年ノ金ヲ拂ハネバナラズ、縦令金分拂ハズトモ、利分マデモ返スベキ當ハナキ也、故ニ不足ニ不足重ナリ、本利倍増シテ借ルベキ道ナク、是ヲ横ニナリ返サスト云テモ、有米ニテスマネバ、又別ノ子金家ニ頼ネバナラズ、銀主モ横ニナランコトヲ恐テ、何ゾ要害アル無レ已誓約ヲ定メ、質ヲ取テ高部ノ金ヲ借ス、如レ此ナレバ潰レ金益多ク、困窮年ト共ニ甚シク、危亡ヲ待ノミニテ、經濟ノ直ル手段更ニ見ヘズ、サシカヽリタル入用ハ、當分借銀ニテモ塞ガネハナラヌコトナレドモ、是ニ付テモ夜ヲ日ニ繼デ永久ノ計ヲ思フベキニ、左ハ無テ虚言八百デ金ヲ借リ出シテ、眼前ヲスマスノ此外ナシト

思フハ愚ナルニ非ズヤ、然レバ一刻モ早ク量レ入爲レ出計ヲナスベキ也、去ナガラ此計ヲ定ルニハ、借大夫ト能々丈夫ノ志ヲスユベシ、中々懦弱ノコトニテハ屆カヌ也、諸侯ノ經費モ公邊ノ勤向キハスクナカラズ、其外家中ノ介抱、借錢ノナシ入用、居付鄕普請ノ入方等差詰タル所何程ト定メ、サテ其殘ハ前日五分ノ一アラバ、五分一ニテ家ヲ立、前日十分ノ一アラバ、十分一ノ暮シヲスルハ地盤ヲ極ムベキ也、夫ニ應ジテ是マデ仕來リヲ止ムルモアリ、滅ズルモアリテ、堪ガタキ所ヲ堪ベキ也、萬石ノ家ヲ千石ニテ暮スハ甚難儀ナレドモ、百石ノ者ヨリ見レバ甚優ナリ、今日危亡ヲ待テ居ヨリハ、難儀ニテモ明リニ付クコトナレバ、不レ勉バアルベカラズ、然レバ公邊勤ノ分ハセン方ナシ、其外ハ皆內分ナレバ、イカ樣ニモ取締ムベシ、公邊勤ト云テモ能吟味スレバ、幕下ニ不敬ニナラヌ樣ニシテ、餘ハ省略ニツカヘヌ筋アルベキ也、有米過ノ出來ヌ間ハ家ノ滿ルヲコラヘ、二度ノ膳ヲ進ルコト不レ叶バ、一度バカリニテモコラヘ、帷子出來ズハ、夏モ單物ニテ凌グト云息ゴミニテ、身ヲ以テ是ヲナシテ卒下ヲ率キバ、行ヒ難キコトアルベシトモ覺ヘズ、譬バ守ラネバナラヌ城ニ楯籠テ、兵糧將レ盡時最早タマラヌト云テ逃去ルベキ樣ナシ、主將ノ心一ツニテ人心ヲ持カタメ、死ニ至テ不レ去シムベシ、張巡・許遠ガ睢陽ニ籠リテ兵糧盡キタル時、紙ニ茶ヲマゼテ食ヒ、鎧ノ皮ノ所ヲ煮テ食ヒ、馬ヲ殺シ愛妾ヲ殺シテ食フニ至テモ降ラズ、人心離レヌハ何故ゾヤ、主將ノ心衆心ニ徹シタル故也、今ノ困窮ト云ハ金銀ニツカヘタルマデニテ、張許ノ行懸リトハ懸隔易キコトナルベキニ、君大夫ノ部理手ヌルキ故、眞實ノ心

下ニ徹セズ、今一ツ有米過ノ法ヲ立ントシテモ、面々ヨリ初トシテ權々ノ支所起リ來リテ其志ヲ立ズ、夫ニ應ジテ畫筋ヨリモ左支右吾シテ崩レ行ハ是非ナキコトドモ也、如此ニテ年ヲ送レバ、終ニハ公邊ノ不敬、或ハ民ノ弊害ニヨリテ、眞ノ危亡ニ及ブベキコト明白也、夫ヲ只今危亡ニ臨ミタル心ニナリテ、君臣合體シテ仕來リヲ取ホソメテ國家ヲ中興センコト、明君良相ノ大業遺ノ志願ヲ發シテ思ヒ求ムベキコトナリ

右十條、明道先生十事ノ目ニヨルトイヘドモ、必シモ其意ヲ皆用ルニ非ズ、今ノ時處ニヨリテ當務ヲ急ニスル也、明道先生モ徒知泥古不能施之於今、姑欲徇名、而遂廢其實、則陋儒之見、何足以論治道哉トイヘリ、然レバ鄙說如此トイヘドモ、先生ノ意ト背馳スルニハ至ラザラン

精里先生學宗伊洛、道具經綸、於經世之術、引經酌古、隨事折中、其著於文章者、炳炳烺烺、傳誦士林、殘膏剩馥、沽丐海內、非一日矣、若大雅末學淺識、豈敢妄事表章、以招僭越之罪哉、第此編先生嘗爲蓮池侯撰之、因程子十事之目、發明當世之務者、雖以解名、不屑屑於字句間、直揭其大旨、示以經濟之要、平易簡切、雖淺學可通曉、有志于治者、能取法乎斯、則豈徒南車津筏

而已哉、愚編二叢書一、於二經濟實用之義一、實有二本志一、故首錄二此篇一、不三止表二欽服一、亦藉以自明レ所レ志云

藤森大雅識

十事解終

極論時事封事

古賀樸著

極論時事封事

精里　古賀　樸　著

謹按、神祖而來、賢子育孫、繼々承々、以迄殿下十有一世、黔黎乂安、夷蠻帖服、歷祀二百、而未嘗有風塵之虞、金甌之安、豈啻泰山、而四維之張、實振古之所未有、西土之所絕無、可謂盛矣、殿下承緒之重既如彼、守成之烈又如此、一夫不獲其所、尺地非其有、臣庶將爲殿下恥之、況甚焉者乎、乃者醜虜猖獗、因逞其蛇豕之心、丙寅之秋、入寇唐狄、焚絕積聚、鹵略戍人、前年夏、再破蝦夷諸島、守吏望風而遁、軍資器械、委棄如山、悉爲彼所竊有、去年秋、又以計捲襄崎陽、出我不意、不勞寸兵、不費一鏃、劫蘭邸質人、多抄略畜獸而歸、以至長崎鎮撫使以瀆事自殺、肥前侯以大國之君、杜門禁錮如俘囚、曾不能搴敵之一旗、馘敵之一卒以雪怨、祖宗之深恥、社稷之大羞、何以加焉、臣私心竊以爲、天下之事、既已至此、意朝廷之上、必應有請纓之士、封疆之臣、必應存喪元之志、如之何、外之諸侯鎮撫使、不能率勵士馬、以敵王所愾、內之公卿貴臣、不能有所建明措置、以洞天下之勢、下逮百司庶職之賤、皆存偸惰苟安、容身保家之計、無一人

爲國家、露忠赤展報効者、置宗社之孔恥國家之鉅纏於度外而不問、賴殿下獨英武特出、懷大有
爲之資、亦不能有所更張改正、以幸天下苟嗇晏安、以趨過日前、臣不知天下之禍、終何所應止
也、臣嘗歷覽史籍、古來大亂之作、未始有不出於至盛大安之時者也、蓋承平日久、綱維紊亂、
譬諸强健之人、生平間房失度、脆美過嗜、傷精戕脾、然後發爲癰疽之屬、肢體四潰、不可救藥、
故梁武帝雄據江南、國家全盛五十年、卒招侯景之禍、唐明皇在位四十年、開元之治、比蹤貞觀、而終
致安史之亂、建中宣和、亦爲趙宋郅隆之日、而女眞飮馬于汴河矣、今國家治平之久、踰宋越唐、
而未始數梁、臣尤所以寒心惕懼也、其所謂安史女眞者、特邊鄙一將、塞外小夷、制之宜易々、尚
猶如此、今鄂羅斯土地之廣莫、三十倍於我、人衆之夥多、三倍於我、此其備禦豈不戛々乎難哉、
夫賈生事孝文之君、丁盛漢之隆、讀其所上治安策、有云、今天下之勢方病瘇、又若炙盬、又云、
措火於積薪之下、火未乃燃、因謂之安、天下之勢奚以異此、卒之、果有七國之亂、賈生之言、未
爲過甚、智士慮事不當如此乎、今强虜陸梁、大邦爲讐、火已然矣、群下尸素、百姓離心、病已
深矣、使賈生々于今之時、臣恐其不止於痛哭流涕長大息也、臣誠憤懣之至、內切于心、不自揆
其疏賤、敢以策十事爲言、此皆書生常談、未必適于用、惟殿下不以人廢言、且有所去取於其
間、而施于行事、則幸甚幸甚、臣不任激切屛營戰惶待罪之至

一曰、開言路以防壅蔽

書曰、稽于衆、捨己從人、帝堯也、詩曰、先民有言、詢于芻蕘、文王也、若是乎人言之有益于國也、故召康公有言、防民之口、甚於防川、川壅而潰、傷人必多、民亦如此、秦二世承始皇虐政、天下十室九怨、盜賊蝟毛而起、二世恬然自以爲、居泰山之安、群臣或言盜、或言反、輒行罰黜、言盜竊狗盜、不足置齒牙間者、亦蒙賞擢、卒之望夷之禍、頭足異處、隋煬帝棄遺賢臣、親昵邪佞、正言必誅、直諫者必戮、四海鼎沸、豪傑相繼起、天下無一寸乾淨土、猶自矜誇功業、謂必無足憂、終釀成江都之變、社稷剿絕、是以聖王之法、史爲書、瞽爲詩、工誦箴、諫大夫規誨、士傳言、庶人謗、又且懸招諫之鼓、設誹謗之木、垂戒愼之詔、立司過之士、皆所以自防、其煬帝也二世之敵也、臣爲敢以暴秦亂隋爲比、但數十年來、忌諱之風太甚、光明正大之氣漸滅、都盡切言聞邊之非策、而罹戮者有之、著書論夷狄爲邊患、而被囚者有之、以及北陲之亂作、斯弊殊甚、街談巷議、顧涉邊事、則捕下獄、因而得罪者、累々相踵、差除之失、措畫之謬、群臣明知其非、而不敢言、上下相蒙、苟圖便己、上有災患、下之人泛然若不聞、曰、非吾所與知也、下有疾苦、上之人漠焉若不知、曰、彼奚足恤哉、上下之勢、壅隔如此、一旦變起、渙然瓦解而已、紛然鳥散而已、孰肯効死授命、以報其上者耶、蓋承平日久、其弊自然至此、殿下奚與知焉、特其挽回之責、則不在他人、而在殿下耳、殿下何不下書曰、鄂羅斯之難、不獨吾宗社之鉅恥、凡汝生斯邦、而食斯土之毛者、孰可不視以爲茹肘飲血之仇、予假令不能聞昌言則拜、吐哺握髮、以下白屋之賢、尚思

并羣材之長、集衆思之大、以廓中興之基、公卿百司而下、苟有籌策、內可以扞吾邦、外可以制强
虜者、幸明白陳告、勿少顧忌、吾將揀擇而見于行、數年來忌諱過甚、實由久安之弊、尤非吾意、當
洒然與海內更始、因班下斯書于郡國、于邊國、則人皆軒眉拭目、知殿下有高世之志、而崇論讜
議、紛然滿天下矣、然後擇而取之、可者用之、不可者否、未始少有損於我、而天下欣服、何苦
而久亦不爲此也、程叔子曰、人主一日之間、接賢士之時多、接宦官宮妾之時少、則可以涵養
氣質、而薰陶德性、殿下之明哲、臣固知其決不以便嬖妃妾自蔽、然深拱居中、自非般見昔廷對
群臣、下情安得洞察、上澤何由遞布、殿下何不逐日燕見大臣、問閭閻之疾苦、察規制之是非、又且數
數廷致儒臣、稱古今論經籍、軍政邊防之失得、一々窮究、未必無補於盛德之萬一也、向者丙寅
丁卯之警、虜以數十人橫行海上、舉蝦夷之大、無一人敢攖其鋒者、倉廩焚、邑落殘、卒徒禽、米粟
之積、先代之重器、皆爲彼所竊有、曾有以此一々告殿下者乎、自寬政中闢蝦夷之地、戍卒
往々遭瘴而死、去歲仙臺會津兵、往戍其土、未及五月、死者且百人、父之哭子、妻之哭夫者、比
比而在、曾有以此一々告殿下者乎、夫北陲之亂、苟得聞其詳、疲懦之夫、尙將腐心切齒、不
能自抑止、今以殿下之剛明英斷、乃晏然偸安、了不能大有所爲、比跡古英雄之主、顧反與叔世
中材之君、無大相遠者、惟其言路壅塞故也、然則開言路、實爲百事之本、故臣敢首以爲言、惟殿下少
留意焉

二曰、講武事以振士氣

夫我日域之爲邦、其俗尚威武、其人猛烈勇、上古而來、以兵力雄王於海內、神后嘗以之克平三韓、豐臣王嘗合朝鮮域、而挫明虜、如之何今日爲北狄所侵侮、恇遑忽忙、不能措手、屬國之邑、鎭衞之地、恣其出入而不問、何古之勇、而今之怯、今之弱、而古之强也、無他、時沐太平至治之澤日久、頹廢委靡而致然耳、今果欲振鼓弊俗而復于古、豈患無其術乎哉、孟子曰、仁言不若仁聲之入民深也、孔子曰、不能正其身、如正人何、方今北虜橫行、實社稷之危殆、此正武夫投袂衝冠之秋、而怠慢之氣、頹然自若者、吾無訓督之術也、幾者、殿下道命諸侯、淬礪其兵、訓練士衆、以繕海防、而沿海諸侯、兵備敗壞、滔々如故者、未有所觀感而興起也、殿下盍欲大鼓舞人心、而作之氣、則在反諸其躬而行、所謂反諸其躬而行者何、射獵之娛、離宮之游、不可不節也、後庭之佳麗、不可不減、殿下心曰、予宮闈未嘗踰閑、游獵不至廢事、汝何關上之切也、臣竊有說、夫特循守成規、而無所踰軼、民亦以爲固也、未必誹謗、而亦未必信心悅服也、當今日之多事、殿下以爲民苟不誹謗而足耶、自非然者、恐不得不成規之外更有省損也、然臣非敢欲使殿下棄遠妃色、廢絕遊獵、寂々度日、惟願以晏安之餘、校技藝、遊獵之間、講戰陣耳、今殿下視臨、試群臣劍槍騎射、明有故事、然一歲中、僅々不過兩三日、何足爲有以重、奮於講戰、則終年未嘗一開、夫部下之士、天下所取則者、苟及有事之秋、方將使之衞社稷鎭邊疆、而

平素調練之蹟如此、尙何望其緩急足倚哉、尙何責天下之人、都不以武事爲意哉、欲乞殿下逐月、會衆士于上溜及吹上、凡刀槍弓馬、大小銃之屬、皆隨其所能而較之、其有高下工拙、從而陞黜之、賞罰貴得其當、不容絲毫私意于其間、如此則人々知自勵技、不期精而自精矣、又且間一月、親統率三軍、習戰于小金原、命閣老番頭、分掌隊伍、識別營陣、旗幟精明、干戈森列、殿下援金鼓、以節進退、魚麗雁翼、風雲鸛鵝之變、無一所遺、勿視以爲講習之事、儼如對勍敵、失伍者戮、犯師律者刑、至而後期者誅、如此則人々熟於馳驟進退、無所用而不可矣、蓋方今太平之處、人皆沈淪於財貨酒食之間、古來猛鷙之氣、剗盡無餘、驟而責之、以對勍敵、赴鏖戰、猶以罷癃篤疾之人、負千鈞之重、其不敢顚覆敗績者有幾、然則當今之計、孰先於振起士氣、士氣苟不振、則雖有奇策名畫、將何所施、然欲振起士氣、而不本於躬行、勢有所不行、惟殿下嘗膽席蓼、痛自激勵、以率先天下、則夫勇鷙之氣、得於天性者、自當存感奮發強之心、其轉而復古之俗、無難矣、果復古之俗、將威懷萬國、力制四夷而有餘、奚鄂羅斯之足畏哉

三曰、脩火器以禦虜長

夫時有古今、勢有先後、聖人因時以制宜、智士不逆勢以熟、我邦古者只有射騎擊刺四技、以此迭相勝敗、蓋彼惟有此四者、我亦惟有此四者、是以器鈞勢敵、而高才多智、得制勝于其間、今四方萬國、務以火器爲事、則彼四者、業已爲芻狗糟粕、然且執而不知變、亦已固矣、且今之刀槍弓

馬、果何益于勝敗之數哉、惟以容儀脩飾、坐起可觀、務悦人目爲事、馬惟步武周正、頭頂端直、如竹馬之狀爲務、刀槍弓馬之用、豈端使然也、臣聞、鄂羅斯專用鳥銃、其工巧倍萬他國、大者能射數里之外、能一發殲數十百人、以今之刀槍弓馬、適鄂羅斯之銃、不校明矣、火箭之屬、無一所欠闕、時其廢置弗脩、以致取侮于外夷、不亦惜哉、且吾邦之賤火器甚矣、上不以取士、不以進身、雖尊稍優者、即卑視而不肯爲、曰、此步吏下士之所職、吾不屑也、是其失非源於上而何也、然則爲之如何、曰莫如以火器舉士、夫今之刀槍弓馬、雖未必中三軍之用、士專以爲務、抛擲百事、而勉々屹々乎此者何也、以上以此取士也、今誠創制以火器取士、或且使仕進之路、此捷于後、則利之所在、孰肯不競趨而爭勸也、臣獨恐其或以虛舉冒取顯位、而不適於實用、殿下何不命閣老、月中再三、聚會群士、親試之、其卑職冷秩、不得自達于上者、各使其長試之、第其高下、定其優劣、然後從而賞之、上者超授顯職、次者增祿進級、下者賜金帛而罷、如有怠惰因循、都不以火器爲意者、輙痛懲責之、彼所勸在前、而所懲在後、求其不專力於此、不可得也、然此止可以勸都下之士、未足及天下、臣請遍下令諸侯、務練閑火器、其有脩明火術、精究火器之國、特錫金賚以褒諭之、若諸侯之臣、及處士庶人、有洞曉火攻之術者、命所在以禮敦遣、待以不次之位、以供異日之用、則夫人有自奮之氣、爭以不如人爲恥矣、至如佛郎機震天雷之屬、未易妄發而輕試也、請命群臣、月習之于袖浦及洲崎、定期悉停入港之舟踏、效每歲

六月、佃島習ニ熖火故事一、使ニ萬國視レ効以爲下法、如レ此則火術之精且熟、可レ蹻レ足而待一也、夫吾邦兵刃之銛利、甲ニ于萬國一、獨火器破壞不レ脩、以至下與ニ北虜一大相懸絕上、殿下誠信ニ用臣計一、火術之精、可ニ立而致一、火術已精則彼有ニ一長一、我有ニ二長一、二以當レ一、何不レ可レ克之有

四曰、習ニ水戰一以補ニ武備一

夫漁父蜑人、視レ舟如レ車、視レ海如レ地、是以不レ畏ニ百尺之淵一、樵採之夫、騰ニ林木一頭ニ猿狙一、凌ニ崖嶮一侔ニ虎豹一、是以不レ悼ニ千仞之阻一、皆隨ニ其處一、而防レ患之具、遠レ害之資存、所ニ以能免一於危殆一也、今我邦環以ニ鉅海一、地形如レ帶、無ニ適而非下海、而船艦不レ大、人不レ熟ニ於水一、見レ海則惴慄恂懼、無レ備甚也、今亦自ニ赤關一及ニ周防播磨之海一、介ニ居兩岸之間一、特一衣帶之水耳、而舟行過レ此者、覆沒相繼、況鄂羅斯之船艦、高凌ニ雲日一、堅踰ニ金石一、四而以ニ火礮一自衞、糧食械器、充然完具、以ニ我至大之舟一、迫而攻レ之、高不レ及者一丈許、砮礮無レ所レ施、劍戟不レ可レ入、不ニ淪沒一則破摧、不下待ニ智者一而後知上也、孔子曰、工欲レ善ニ其事一、必先利ニ其器一、今也欲レ講ニ習水戰一、船艦不レ可レ不ニ先更造一也、寬永中、耶蘇賊起ニ於天草一、已平、猷廟因命逐下受ニ妖教一者上、且下レ令狹ニ小舟船一、使下其不レ勝レ凌ニ絕海一、蓋慮下其或伺レ間、而往ニ西洋一習中邪教上也、今之舟船、皆其遺制、今率然創ニ更造之說一、人將レ謂下臣主ニ張臆見一、不レ顧ニ先公之命一、殊不レ知ニ政貴ニ隨レ時制下宜、猷廟狹陋船制、所ニ以絕ニ邪教之萠一、用慮至深遠也、今妖教剪薙無レ遺、而僅々執ニ守成法一、不ニ亦拘一乎、且猷廟而有レ知、臣不レ知下其喜ニ墨ニ守成法一、以取中笑於外夷上乎、將レ喜下脩ニ舟艦一習ニ水

戰、以威制海內乎、況臣非敢盡更造天下之舟船、其於今所習用者、因遵而弗改、特簡別製大艦、以供決戰之用耳、臣欲乞於浪華・新潟及自他在々津港、大作戰艦、更當擇良而任之、不良則殘蠹多、而費莫大、工當選巧而用之、不巧則規制疎、而敗壞隨之、若夫船艦之制、則有蘭船在、請得取以爲法、猶有未詳晰、莫如利誘蘭人而問其法、彼戎狄惟利之視、誠能賂以財貨、誘以子女、其法可坐等而有也、舟楫既繕完、當就試之于海上、勸督之任、請命各地守吏掌之、若夫都下、則四方所聚觀而取法、不當漫然委之下吏、當命貴重臣、時々觀察、殿下亦當四時一往海上臨視、所以使天下知殿下不頃刻忘戰備、而各自競勸也、又聞、北虜尤善用皮船、平日措置轡底、有事則出而用之、進退輕快、甚便于事、臣謂、彼有而我無、實屬欠闕、故皮船亦不可不造也、前年壬戌在松前者、嘗試以海馬皮爲之、殊不減虜所用、請通下其制于諸州、今多製造可也、數已至、習已熟矣、臣猶謂十年之內、決不可水戰、十年之外、未可輕水戰、蓋邦人未嘗習水戰、今忽乘大艦駕長風、既已傲然有蔑視勍敵之心、殊不思鄂羅斯以舟爲家、進退如意、彼此之勢、工拙懸殊、敗形固已在我、故臣願水戰、必出於不得已、或有萬全之策而後用之、則亦可以就功矣、殿下必云、自非十年、雖以可用、何計之疎且濶也、臣之云々豈得已乎、以今之人、狃以水戰、勸督訓勵、纔可用於十年之外、倘厭其迂濶而不爲、則永無制勝之時、其而敗等以沒世也、殿下將孰取焉

五曰、嚴二軍法一以作二蕃氣一

臣聞、國容不レ入レ軍、々容不レ入レ國、自レ古有道之君論レ治、毎貴二德施一、而卑二刑罰一、良臣察レ相計レ事、必先レ惠而後レ法、主二寬大優裕一、而惡二苛刻嚴急一、蓋在二晏然無事之日一、而論二政之經一云爾、若夫莅二三軍一對二勍敵一、自レ非二峻法嚴令一、何以一二士志一而成二大功一、此人之所二開知一也、故兵法曰、畏レ我者不レ畏レ敵、畏レ敵者不レ畏レ我、今國家太平二百年、人氣懈惰、勇往直前之氣、澌滅無レ餘、殿下猶且承二襲祖宗之德政一、未二甞妄戮二一人一、未二嘗輕刑二一臣一、足三以視二盛德之巍々然一、臣竊謂、此施二于平日一、固可也、將レ施二之於干戈之際一、適足下以添二蕃氣一而招中挫衄上耳、前年鄂羅斯寇二北陲一、守吏望レ風奔竄、虜以二六十人一蹂二踐蝦夷一、若レ入二無人之地一、以二軍法一論レ之、當時逃將退卒、死有二餘罪一、而朝廷特從二寬貸一、重者停レ秩褫レ職、輕者被二譴謫一而罷、夫人情莫レ不二貪レ生而惡一レ死、今也進則殞二於鋒鏑一、死二於弓弩一、退則身命可レ全、室家可レ保、幸者或且不レ失二從前之榮貴一、如レ此而求下其能有二進死一無中却生上、難矣、昔燕晉並起攻レ齊、々師敗績、田穰苴將レ兵禦レ之、與二君嬖臣莊賈一期、而賈後至、即斬徇二三軍一、三軍之士皆振慄、遂走レ燕却レ晉、盡復二侵地一、漢諸葛亮愛二任馬謖一以爲レ將、謖違二亮節度一、大敗二于街亭一、亮以レ不レ可下以二私愛一枉中公法上、戮レ謖謝、衆爲レ之涕泣、其守レ法如レ此、所下以能以二蕞爾之蜀一、與二魏吳一抗衡、而不中少屈撓上也、吳呂蒙入二南郡一、約二令軍中一、不レ得下于歷二人家一有上所二求取一、麾下士取二民家一笠一、以覆二官鎧一、雖二呂蒙一猶以爲レ犯二軍令一遂斬レ之、其所下以能擒二關羽一挫二北軍一、爲中江表名將上者、以二師律之嚴如一レ此也、其他古之良將、所下

以能率烏合之衆、以謀萬倍敵、豈特婦人女子、使赴水火者、豈區々之仁惠、繫着其心哉、蓋豫立之法制、使其畏而不敢違規矩也、良將之設法、進死者有賞、退生者有罰、是以爲士者皆云、進亦死、退亦死、等死、寧死乎敵、寧勝於死刑、况進而力戰、未必不生、僥生則身蒙重賞、不幸而死、尚不失美名榮世、慶及子孫、其果望敗而退者、方無生理、身蒙被惡名、殃及子孫、苟寧進死不可得也、前歲北隆之逃卒敗將、今已不可進罪、則臣之言、亦唯可施于將來也耳、臣請立三軍之法、曰臨陣不進者斬、背敵逃走者斬、則會而後至者斬、臨陣死敵、而偸生苟活者斬、爲敵所乘、喪失旗鼓者斬、不得以私意撓公法、不得以愛惡亂心、但大官貴人、不可顛而誅者、止奪秩籍得、使官人不負實焉可也、若夫一國之主、恐未可以一敗之故、輕行黜陟、但當罪當事之臣、失律沮法、以致敗辱沮喪者、必其歸國損威、害廷社稷、則亦不可易置也、今當國家宴安之秋、豫爲此嚴法苛令之言、天下必有謂臣爲殘酷之徒者、殿下確守不失、力而行之、數年之後、自當肅然有以勸、是可以察成、而不可與慮始、古人之言如此、殿下奚疑

六曰、省冗員以贍國用

方今度支之窮乏極矣、吏方且當應領、而憂國用之不給、仍之以北虜之警、防禦屯戍之衆、糗糧器械之設、費用不貲、有出而無入、有散而無積、無異於責驚駘以千里、幾何不至於顚蹶也、然則富國之術、方爲今日至急之務、不可不察也、夫富國亦多術矣、如臣庸陋、豈能究知、請試

以愚慮所及、爲殿下陳之、所謂省冗員以贍國用者是也、臣觀西土三代以還、開國全盛之際、政簡事省、人稱其職、是以吏員寡而政擧、及其衰也、政煩綱密、加以尸位素餐之臣、滿朝皆是、是以置官日多、而百度日替、臣竊謂、朝廷今日稍坐斯弊、小普請支配組頭、實置自享保中、國初未嘗有也、今誠復舊制、擧小普請隸之參政及御留守居、則小普請支配組頭等官、可以廢而無置、設使小普請之員、蕃養日、非參政御留守居所能督攝、則小普請支配及組頭、去半而留半、猶賢乎已、又大御番往守京攝者、當行必倍其祿、蓋所以憫其勞而優之賞也、夫事君者必致其身、陷腹喪元、且所不辭、于役之勞、於我何有、而乃望莫大之賞耶、臣竊謂勿予、使前日下崇儉之令、因定制、大御番當行者、五百石以下、許仍舊陪祿、五百石以上則不許、蓋亦合處事之宜、然區々以五百石上下立限制、不能斷然劃革、似猶未免墨守弊法、且也五百石與四百石以上、相去幾許、而祿賜之多寡頓殊、又非公平無偏之道也、其他不急之官、無用之祿、未易摟指、以漸沙汰之、有闕不復補、則十數年之內、不至驚駭天下之視聽、而利國無窮矣、孟子稱文王之王政曰、仕者世祿、蓋世祿者、聖王厚下之至也、然亦唯謂其祖有功德者、優其子孫、令得免飢寒而已、豈謂養弱子孱孫、以千萬鍾乎哉、今寄合祿有過九千石者、小普請有近三千石者、比之漢代丞相御史、不啻倍蓰、上之待之、可謂厚矣、乃彼皆自以爲、祿食既豐、可以玉食錦衣度一生、於是乎、晏然婾惰、不復有營爲、甘爲自棄自暴之人、是上之優也、適所以驕之也、夫人臣俸祿百石、足以奉

祖先、畜妻子、臣畜居官享數千石之祿者、身物故乃昔已、而子已居職則已、否則減其俸之半、其子其孫、又世減半、至於百石而止、則益上莫大、又足以大鼓作從等意勉之氣矣、若夫當時諸侯大極奢靡、則弊孔多端、而尤甚徒御供應之費大、諸侯之大者、儀衛導從侈於王者、是以々競々之諸侯其國之入、僅足以供冒貢之費、諸侯以下亦皆以次驕侈相尚、即五六百石之吏、其僕從略如漢三公、宜其多貧而少富也、夫儀仗僕從、貴賤有等差、以諸侯之微、敢與王者抗、無論其難供給、即蹈分僭上罪何、需嚴立之法、痛行減削、財存其什一、則諸侯以下、舉皆感戴惟命、數年之內、富貴可謂是而待也、倘謂徒御僕從、所以備不虞、令單弱無倚、危禍可虞、此大不然、夫今儀衛僕從、衆則衆矣、其實疲軟羸弱、十僅敵一、是以急難之際、抱頭鼠竄、苟謀全身、未始顧其主、今誠以警備為意、則當擇勇敢忠烈、緩急足倚、一可以敵十者、以為僕從、何慴之有、方今天下拘人情、而務外觀、當傚時習、冗贅減僕從、其竟有不驚動人之耳目者乎、顧今蠹弊既深、非痛有剗革、莫以成功、非區區補苴罅漏所能振也、夫申不害之治韓、商鞅之治秦、一偏之術耳、原無是道、惟其儼然自信不疑、是以終能有濟、殿下以正大光明之心、斷而行之、天下豈有不成之事哉

七曰、愛百姓以絕怨嗟

夏書曰、民惟邦本、本固邦寧、孟子曰、得其民斯得天下矣、未有民心悅服、而禍亂萌作者也、

未レ有ニ百姓怨嗟、而國家奠安者一也、自レ古小民怨上、社稷因以覆絶者不レ可ニ勝數一、臣請言ニ其昭々者一、周厲王信ニ用姦回一、放ニ棄忠良一、百姓怨嗟、相率作レ亂、遂流ニ王于彘一、楚靈王貪而無レ厭、思レ呑ニ滅四海一、民不レ堪ニ王之欲一、從レ亂如レ歸、棄疾等因レ之、遂弑ニ王于乾谿一、秦胡亥作ニ阿房驪山一、役徒七十萬、作ニ督責之法一、以困ニ極黔首一、陳渉作レ亂、海内鼎沸、咸陽遂焦土矣、而論者或云、細民之愚莫ニ能爲一、不レ必ニ過慮一、不レ思也耳、蓋天下之亂、皆出ニ於戎狄盗賊之爲一、而其源未下始有中不レ由ニ百姓怨一上者上也、臣聞、高田侯封邑、聞ニ在奥羽之間一者、土地瘠薄、蓋田之下々者、往年北邊之警、羽書交馳、使驛紛紜、使者一夕過ニ此地一者五十輩、僱ニ傳遞馳ニ驛卒一、不レ給ニ一錢之直一、民疲ニ于驅使一、不レ得レ專ニ力于田一、田疇荒棄、茫爲ニ艸莽一者比々、若然滿目、使ニ人心惻一、民相謂曰、若ニ此數月一、吾儕寧逃ニ入山林一、不レ能ニ坐待ニ死亡一、過ニ北邊弭下警而止、又聞、陸奥州南部之地、士曠人少、加以ニ政無ニ綱維一、前年會津戍兵過ニ此驛一、吏往々召ニ二十里外人一以應レ命、往返數十里、纔酬ニ直三十文、或二十文一、又皆收ニ入吏手一、民不レ得ニ一錢著一レ身、怨嗟之聲載レ路、此皆幸當ニ治安之日一、故得ニ無レ事而止一、設不幸當ニ搶攘之際一、因レ之以ニ水旱一、因レ之以ニ飢饉一、彼不レ亡ニ命入ニ山林一、則寧起爲ニ盗竊一、不レ待レ言而後知也、殿下不レ及ニ今日無事之時一、建ニ立一定之法一、嗣後苟有ニ邊警一、假令奉ニ公命一以經ニ歷郡國一者、不レ得ニ妄自恣肆一、凡某使驛卒者、含而馳傳、而不レ問レ直者皆罰、其或使事有レ急、不レ及レ予レ直者、所在吏姑爲出レ直、他日取ニ償於上一可也、臣又聞、都下官人、出ニ使四方一者、所在凌ニ暴士人一、士人疾レ之如レ讎、前日攝府番子歸而赴レ都、道宿ニ於板橋傳舍一、々人過

之、小不諱意、晉子發怒、擲甖瓮碎器皿、屋壁亮陋、臣不躬親、此等瑣々之事、亦可見其一端、矜上責怨、莫大於此、陛下何不一下詔旨、使諸國守規矩、特在陛下之一言耳、何憚而不爲也、夫教民之道、不在一端、臣之所特陳、今日目前之急、非一日、愛民之道盡於此、況天下之大、諸使之衆、土殊而俗不同、事各有宜、非愚臣所能一々通曉、臣故曰、直愛民之道、莫如擇守土之吏而任之、臣昔者因田請助爲常陸州郡官、有政績、交代之際、治下百姓、詣闕老門、請借留一年、朝廷因委任如故、且頃崇其得邑、足以勸牧民之善、然臣竊謂、郡官凡五十餘人、豈別無一二人可擢者乎、豈只有一人可賞者乎、賞之行僅一人、恐未盡也、臣請儲後郡官、皆命大臣、保任其所知之賢者、所保賢則有賞、所保不肖則有譴、所保平々常々、則無賞無罰、如此則才賢競進、而無能不肖者、自無容沮而退矣、又聞、郡官多受賄賂、其屬吏遷々大園牙儈、罔利黷貨、民之蠹殘、茲爲甚、其、臣聞、趙宋之制、一犯贓罰、終身不齒、是以吏皆競砥厲名節、不營貨利、尤爲良法、臣請郡官自有罪、無待乎言、即屬吏並犯贓、郡官不能知而舉者、亦當有責、則數年之後、官無不得人者、官無不得人者、則民無不獲所者、官無不得人、民無不獲所、則天下諸使風靡而化、所謂澄源清流之術也

八曰、封諸侯以守北陲

夫蝦夷爲我邦北陲之捍蔽、要害之地、以鄂羅斯之强大、不得蠶食我者、未必不由蝦夷間之

也、然展亡崗客、纔滅虜隨、古來殷鑑昭々、如彼虜果敢悍然、擧兵先襲據蝦夷、則禍必疾中於我、
雖有智者不能善其後矣、是北陲之防禦、似緩而實急、人情之所易怠、而事勢之所最切、庸
詎得委之度外而漫不顧者哉、臣聞、蝦夷山岸徒絶、海波洶湧、南松前津輕之際爲尤甚、達肥數
十里、潮急如箭、舟一失勢、下流百餘里、覆溺者無數、幸而得濟、比達前岸、舁船皆箕、不
辨人事、嶮惡如此、賊設以大艦數十、襲松前而據之、雖有貔貅百萬、無所用之、然則防守之
策可知也、必也使蝦夷之內足自固、而復可自守、若望其危難之際、出兵相援、亦無及也已、殿下
前歲益封南部津輕兩侯、因命南部歲出卒六百餘人、津輕歲四百人、以守蝦夷、朝廷不復勞遣戍、
衆安其土、悉其風俗、委任而責成功、計無上此者、臣猶以爲、若以此計爲得則可、將謂如此而
高枕安臥、不復勞設施、恐未然也、臣聞、齊檀子守南城、而楚之人不敢爲寇、漢郅都守南門、匈
奴懾引兵去、竟到死不近雁門、是知守邊務在得人、抑不知南部。津輕之將、果有檀子郅都之威
名乎、臣有以知其必不能也、蝦夷地廣袤三百里、三分我邦而居二、而僅々以千人守之、不
知果能防備周至、無遺漏乎、臣有以知其必不然也、古人有云、天下未嘗無賢者、蓋有臣而無
君者、臣故亦曰、獨患殿下不訪求耳、以殿下之明、又且博詢諸公卿大臣、則擾々群臣之中、寧無
萬人之敵乎、寧無堪爲萬里長城者乎、然後擇其尤傑出于衆者以繼之、即所擧失人、不
妨再三置易、授爵以能、命位以德、略如漢之刺史太守、唐之節度觀察使、則庶乎其可也、抑猶

有憂焉、昔管師乘和、而智者知其必有大功、唐李郭屛怨、而中興之業、已在目前、南宋李顯忠邵宏淵不和、而符離之敗、江南幾亡、今津輕南部、爲鄰比之國、而互相爲仇、南部以爲、津輕古爲我屬邑、今則昂然自大、不少卑屈、津輕則云、今日業並列爲諸侯、南部乃我畫伍、何下彼之有、兩相睥睨、怨疾轉深、疆場當無事則已、有事則敗必由之、殿下何不師光武和解賈復寇恂故事、明諭二國云、方今多事之秋、非人臣私怨之日、冀二公爲我解仇定盟、以爲國家屛捍、導以至理、開以赤心、則彼同有人心者、寧能不感泣自悟、然後二國相與一心并力、有無相濟、禍患相助、如手足子弟之於父母頭目、則敵雖至、莫能爲也已

九曰、敎蝦夷以省戍守

臣聞、戎狄相擊、而吾坐承其敝者、策之上者也、疲弊齊民、以從事于無用之地者、策之下者也、故曰以蠻夷攻蠻夷者、中國之形也、夫蝦夷之地、寒氣酷烈、盛夏猶寒、水土蕪鹵、不産五穀、中州之人往戍者、權罹寒瘃大癰之疾、往々死而不反、去歲殿下命仙臺會津二侯、遣卒往戍蝦夷、兵不過千餘耳、在彼地則四閱月、而遭疾死者且百人、今又命南部津輕兩國、嚴發千人以戍蝦夷、夫南部津輕未得爲諸侯之最大者、而使之歲損百人、不出三十年、國已丘墟矣、是自盡之道也、臣故曰、莫如敎蝦夷而用之、今戍守之兵、未可猝減罷、蝦夷之民、未可朝敎而夕用、然則所謂敎調而用之者、亦但可供異日之用耳、未足應目前之急也、夫敎訓練習、不豫於平日、而

創于今日、以求省戍守之勞、顧爲迂濶、然七年之病、求三年之艾、孟子猶謂其愈于不畜、則自今而敎習之、十年之外、猶足以有用、猶勝夫沒世窮年、屬中國之民、以敎育之道焉、或疑蝦夷之民、蠢然蒙昧、與禽獸同類、決不可敎而用、臣竊以爲不然、明和年間、鄂羅斯遣吏經略蝦夷、旣而吏無道、數虐夷人、夷人憤怨、相與合謀、招吏人至家、大陳酒肴以饗之、乘其醉攻之、斬死四十人、脫皈者僅三人耳、寬政二年、我邦商估之區那尓里島交易、數欺夷人以罔利、積取怨于彼、夷人將圖之、恐賈人覺、相與託打魚之海上而謀、還共攻賈人、被殺者八十人、由是觀之、彼果不可敎而用耶、且彼兵器不過木弧竹槍之屬、以頑蒙之夷、操木弧竹槍、尙然、成此大事、今誠授以鳥銃劒戟、訓督焉、練習焉、則其可用爲如何哉、自古戎虜之叛亂、未始有不由守令失人者、今欲敎訓戎人、莫先於擇吏、勿用貪饕之吏、勿用酷暴之吏、勿用瑣屑煩細之吏、勿用姦巧慧黠之吏、擇其溫厚寬大、洞曉事情者、往居其土、豐其互市、厚其賜予、務以恩信結戎人歡心、待其信心悅服、授以火器、或用之於獵狩、或使犛豪按肆、惟命酋帥總其大綱、不必朝夕督責、綏々而導之、徐々而敎之、待其稍習熟、大會酋帥、統率所部、試之于平原曠野之地、其稍工者、即加以賞賜、彼同有人心者、寧不勃焉爭奮、如此數年、雖爲精兵銃卒可也、善哉古人論取國之道云、譬如小兒之毀齒、以漸搖撼之、則齒脫而兒不知、若不以漸、一拔而得齒、則毀齒可以殺兒、此可以敎蝦夷之法矣、昔吳介在蠻夷、不得齒于諸侯、一旦狐庸敎之乘車戰陣、漸蠶食楚

國、使子重子反死於奔命、遂覇天下、臣故亦云、今與英則負然、與露國同類之國也、然果能導之有道、勤之以衛、十年之外、豈不可用以卽戎、即門自明和之後、鄂羅斯與蝦夷、深相仇怨、爾後屢主教主入夷地、欲以邪教誘導夷人、夷人不從、反心內嚮、請夷子朝、蓋天所以賜殿下者、重以丙寅丁卯之寇、鈔夷入、患、勝不可知也、臣又聞、蝦夷地廣人稀、歐至平行無敢支梧者、自今之後、罪未及死者、移住其地、漸實空虛、又一計也、然至葉圖西蝦夷地、以爲西海部、增法五十條、犯者徙之西海、徙者以千萬數、民始怨、此則不可不知而鑑也

十曰、論和親以定猶豫

和親之是非、未易言也、自古建和親之說者、未始不出于庸主姦臣之爲、往々以之誤國是、以之貽害社稷、六國與嬴秦爲敵、六國憚嬴秦之强、割其土地、厚其幣帛、以求媚於秦、惟恐事秦之不謹、媾和輒成、耐秦兵夕至、六國日就削弱、終爲吞併、女眞起于北方、威凌中土、宋君臣震慴畏懦、不敢攖其鋒、卑身屈損、位號以乞哀於彼、卒之二帝爲異域之鬼、而中原永無恢復之望矣、自是之後、苟稍有志氣者、莫不抱義而議和親之非策、然此特泥已事之跡、而强爲之論、未達於變通之情也、夫六國與宋、誠以和親取敗、嬴秦女眞、不以和親勝乎、蓋六國也宋也、畏懦怯弱、畏敵如虎、苟得媾和以偸安一日、不復能有措置規畫以自强、秦與女眞則不然、淬吾鋒刃、勵吾士馬、惟敵是求、外假和親以懈敵國、見利則進、不可則退、此其勝敗興亡、所以懸殊、然

則和親之是非、亦不レ難レ知也、臣竊觀ニ夫鄂羅斯之爲一、蓋幷ニ嬴秦女眞之術一、而加レ之以レ巧者也、未下嘗起上ニ無名之師一、未ニ嘗伐ニ無罪之國一、務以レ大字レ小、柔レ强扶レ弱爲レ事、天下有下不ニ服聽一者上、不ニ先レ之以一レ兵、必先善ニ辭命一以乞ニ通信一、不レ可則使掠ニ其境界一、以刼ニ制之一、彼猶不レ可、然後從而征レ之、用レ兵征レ國、每若レ不レ得レ已、吾有ニ敵レ愾討レ惡之氣一、敵有ニ知レ罪悔レ過之意一、是以所レ向無レ不レ得レ志、遠者畏レ威、近者懷レ德、以至ニ擴地五千里一、爲ニ六洲第一帝者一、彼豈徒然也哉、往年彼遣ニ使者一、甘言重幣、以乞ニ互市於我一、當時大臣慮不レ能レ及レ遠、遽絕而不レ許、吾計既失矣、前年果遣レ兵使ニ掠北陲一、漸爲ニ國患一、蓋我已陷ニ彼術中一、然成事不レ說、既往不レ咎、殿下若ニ彼何一哉、亦勉自激發、以爲ニ之防守一而已、吾防備既嚴、吾守禦既固、則和可也、戰可也、守禦不レ能レ固、防備不レ能レ嚴、吾則和亦不レ足レ恃、戰亦不レ可レ爲也、蓋天下成敗、在ニ吾防守如何一、未ニ始在ニ于和與ニ不和一也、若以ニ今日之利害一論レ之乎、和利而戰害、緩ニ戰利一而急ニ戰害一何也、兵衆之未レ練、舟楫之未レ具、以レ此守レ城、以レ此抗レ敵、正所謂以ニ不レ敎民一戰者、雖レ有ニ猛將虎臣一、恐不レ能ニ必勝ニ于彼一、然虜前年使掠、既得ニ罪于我一、和親之議、切不レ可ニ自レ我言一レ之、適足下以虧ニ辱國體一、而取中笑於四夷上、但彼改悔申請、則或可レ許耳、臣竊觀ニ北虜深奸巨猾一、智慮甚密不下肯猝暴致上レ誤ニ大事一、或應レ有下再請ニ和親一之事上、事固有レ度、勢處レ權者、有下屈レ己以濟ニ一時一者上、彼果再請ニ和親一、不レ如ニ暫許一レ之、和親既成、交市有無、務順ニ適其意一、使下彼不上レ能レ生ニ兵端一、以ニ其間一脩ニ整武備一、數十年之後、舟楫既已繕完、兵衆既已整練、則惟吾所レ欲レ爲、無レ不レ如レ志、是和親所ニ以爲一戰之資、戰之得

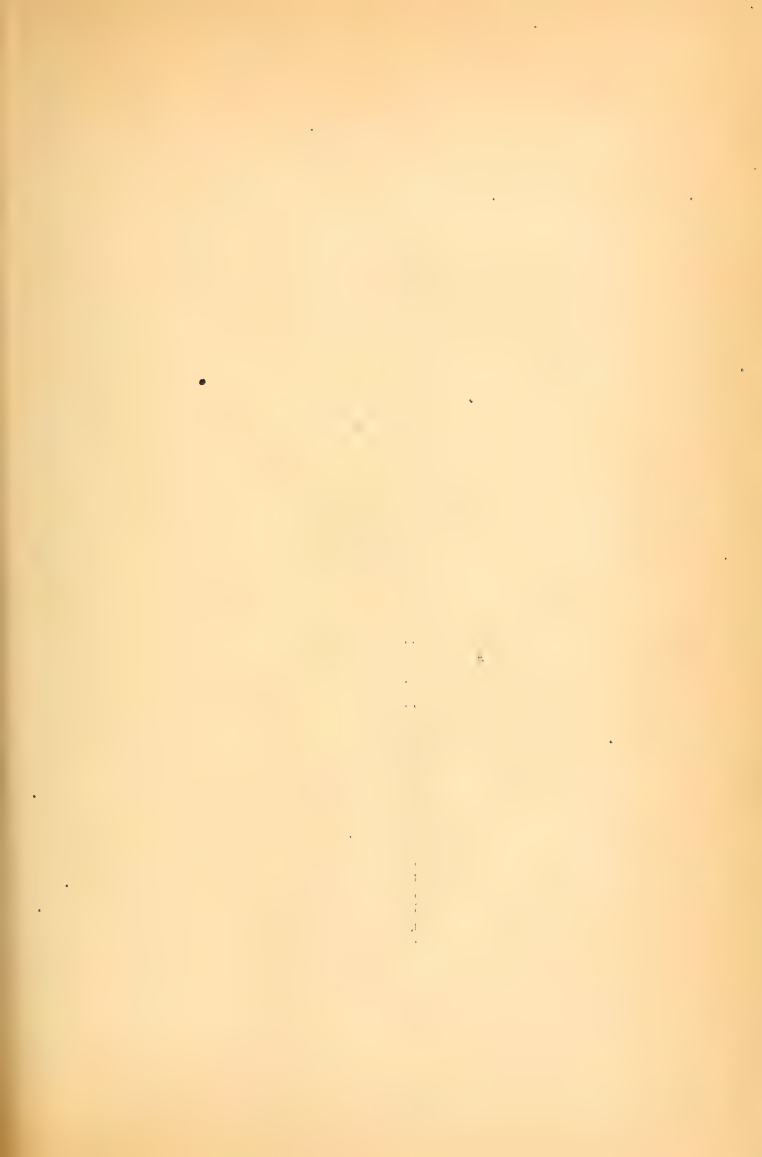
虜、適因和親爲之基也、而豈易言哉、蓋臣所以重於言和親者、恐和親一成、天下因以爲安、甫忘委靡、日就懦慢、不可復振、則和之爲和、反不如力戰決鬬、猶爲足作厲人也、惟陛下赫然憑怒、務率先天下以脩兵備、力可以當敵、勢足以制勝、而後和之利害、方可得而論矣、未及此、而紛々然以和親爲言、無乃大早計乎、今天下論和之是非者、紛然不一、未始有定見、臣恐當遣之際、或因以致僨事、故粗陳其得失、以實備禦、欲使陛下知天下之先務、在彼而不在此也耳

極論時事封事 終

經濟文錄

附軟渉偶語

古賀樸著

經濟文錄　附軟蕩偶語

精里　古賀　樸　著

政府司業裡行臣古賀樸、恐惶頓首再拜上書、明侯節下、往者使侍臣賜臣台撰序文一篇、且輸徵報章、臣虔恩拜受訖、伏念臣賓本庸迂、跡亦疎賤、節下厠之廟堂之顯列、又辱帷幄之寵賜、有一於此、足爲殊遇、而臣何人得而兼之、台文論道藝之務、遂及文辭、夫人君位崇高、而富有邦國、聲色臭味、便嬖之奉、投間抵隙、可以惑耳目、而蠱心志者、環四面矣、設有不溺於此、文辭是耽、即使其所爲全與瞽卜雜劇同科、猶且足稱、況如節下立志、富貴所不能淫、於其所好之文、洞照世際、必由道而游焉、是在臣等、將贊頓詠頌之不遑、尙容異議哉、雖然、明主樂聞、而惡緘默、則臣所聞不敢不陳、惟節下裁焉、臣聞、文之爲物、必有實而發焉、日月星辰、照耀於天、山河草樹、森列於地、氣之著也、其於人也、爲動作、爲威儀、措而爲政事、渙而爲號令、俎豆而爲禮、金石而爲樂、秩然次序、煥然光釆、德之施也、至於操觚、其尤彰彰者、亦必待其實而行焉、四子六經、爲千載法程、能言之士畢然閣筆、何也、和順積而英華發之、不可及已下、而諸子偏僻之文、

亦必有二偏辭之實一、然後傳二于世一焉、至二相如揚雄一、如レ有二虛華無實之文一、遞及二六朝一、則連篇累牘、不レ出二月露之形一、當時靡焉、至二唐韓子出一、擺二脫世習一、務去二陳言一、用レ力久而有レ見二於道一、培レ根以達レ枝、其文莊重正大、變化如二鬼神一、天下改レ觀焉、宋歐陽子善學レ韓者也、其佗柳・曾・三蘇崛起、雖二視於時一、各成二一家一、亦非二虛華無レ實而已一也、如二李・王二氏一、則剽竊纂組、競二長藝林一、議論淺俗、飾以二老佛緒餘一、雖レ曰二無實之文一、不レ誣也、明文名家十有餘、而濂溪正學、陽明拔二乎其萃一、本邦自二物徂徠一、奧二味李王朱明之文一、以二二氏一掩レ之、可レ謂レ屈レ己、然則韓柳至矣乎、曰、非也、昔者堀南湖、欲下以二洛閩之文一、列中於唐宋八家上、鳩巢先生非レ之曰、文自文、學自學、豈可レ混乎、臣心竊疑、此後讀 清人陸隴其集、及程朱韓歐之文一、大意以爲、若岐二文與道一而二レ之、是道外有レ物也、使二文與レ道一一、則孔孟程朱之文、何以加レ此、臣服二其論之確一、時以告レ人、未下嘗不中以レ臣爲上阿二其所一好、嗚呼是難下與二世人一言上、幸遇二明主一、可レ不三一言二哉、請就二載レ道之語一喩レ之、車以載レ粟、然無レ車邪、負載兌折、足二以致下粟、車而無レ任、則索レ之秣レ之、何補二於饑一、亦虛器耳、惟文亦然、有レ實而發、則左行屈盤、猶足二以傳一焉、況其文乎、不レ出二於實一、雖レ不レ愆二乎仁義一、猶爲二空言一、況其虛華乎、節下天縱文武、含英擒藻、固其餘事、而文思日進、非三獨列侯貴介莫二與儔一、學圃老生、將二走且僵一、可レ謂レ盛、而竊恐文苑馳騁、不レ免二搭痛一、今節下求レ道脩レ德、振レ頹祛レ蠹、中興之業方且就レ緒、夫措而爲二政事一、渙而爲二號令一、史書之民誦レ之、可レ傳二諸天下後世一與二夫天地之文一同一轍者、將二於レ是見一、而節下勵精焉、臣請益勉レ之、涉二紙筆一拘二體

哉、犯史官文士之事、而節下游焉、臣請節之、臣等無狀、不能早致豐豫、以弛台躬之勞、莫若省彼注、茲斯養精神、以副臣庶之望、是區々之至願也、至乎論世儒猜忌之態、而謂臣無是、更加嘉奬、臣不敢當、特以見包含之德、世之立門戶、黨同伐異、固不可也、而含糊兩可、以不爭爲高、亦豈得乎、孟子曰、能言距楊墨者、聖人之徒也、又欲息邪說距詖行、以繼三聖之功、而後世稱其功、不在禹下、何邪、蓋洪水猛獸、害止人身、邪說之害、使人失其本心、本心一失、人形而禽獸、無父無君、禍亂莫大焉、故曰、以學術殺人、古人爲之懼、闢之力焉、豈好辯哉、不得已也、偃戈以後、學路漸開、有君子聞道、小人蒙澤之望、而關東之學、鼓簧邪說、毒流海內、斥異說、人殊見、改頭換面、牽外身心以爲道、後生倀倀然、罔所適從、夫道者路也、天下古今由焉、文之所以有實亦是已、外是則胥制棘陷坑塹、今之冒且陷者益多、故不自揣、時一救之、獨奈言不足以動人、狹呼狂走、或以爲非笑、豈復有補哉、亦有待於有力者耳、上之所好、下必有甚者、願風而呼、聲不加大、伏願節下留意於斯、崇正黜邪、使道德政令、粹然一於正、以陶鎔士庶、則中興之[illegible]、亦於此立矣、即罷駑如臣、覽之策之、庶依末光、以展微力、妄論蕪詞、干瀆威嚴、臣不堪戰兢屏營之至、

八月念七日

政府司議裡行臣古賀侗恐惶頓首再拜上書

二月十一日、政府司議裡行臣古賀樸、誠恐誠惶頓首再拜上書、以臣久在告、伏奉密諭、所以開譬臣者、諄悉懇惻、雖慈父之於子、何以加焉、天覆海涵、恩德無涯、臣感極涕零、政府議曹、亦傳不允辭免之旨、臣恐懼奉指揮、豈敢稽遂、然下情終有未安者、欲再入疏政府、則恐徒致紛紛、不能以自達、茲幸奉內旨、特知遇之深、敢陳鄙悃、以祈閣下憐而垂聽、關符斷案、不得不然、仰悉至意矣、此案雖成於堂議、臣等同列實發之、其罪非輕、既不獲已、斷之如彼、則當併按議者以謝衆、向之薄譴、恐不足以壓服人心、無狀如臣等、宜任其罪、是臣之當去政府一也、臣繆蒙恩擢、職列諮議、不爲不重、閱旬五十、不爲不久、而寸籌莫展、大愆如此、有以損閣下知人之明、是臣之當去政府二也、同寅姓阪者、客歲黜出特旨、人皆以爲關符之故、姓富者久移疾不出、近聞亦辭職、勢或得請、人亦必以爲關符之故、則任此責、非臣而誰、且也同發此議者、二人去而臣獨留、義所不安、即使負冒在職、世人必以臣爲擠二人以自解、雖其實有不然、安得家置一喙、以辨之哉、是臣之當去政府三也、膠庠剏建、閣下好學以先之、發令以驅之、鼓舞而作興之、是以向之硬頑不化者、皆風靡云集、唯恐在後、可謂千載之一時矣、臣以菲薄承乏兼董理敎之事、日參政署、强其智之所不及、憂心如醉、退朝入學、形神俱疲、不足以綱紀學政、誘掖後進、今後宜專意學事、以圖副盛意也、是臣之宜去政府四也、方今弊害漸除、理道淸明、然康莊之途、豈無銜橛、以臣之狂疎、周旋其間、未至顚覆、亦幸也已、本邦武弁之

視逢腋、不嘗異類、常摘瑕疵、以相訾謷、不幸一敗、則并先王孔子而罪之、詎昔然矣、今賴明世之隆化、人稍知方、敷典之職亦不乏人、則臣等嘗陟、宜若無毫毛加損於其間、然世人視倡導爲進退、其勢自也、臣或蹉跌、則所謂千載之一時者、不無小衄、是臣之所大懼也、夫貧身事君者、雖刀鋸鼎鑊在前、有所不避、臣雖至懦、豈爲觀望自便之計哉、但所擅僅唯、有自取顚覆之勢、恐彼此兩失、徒有害閣下之事、是臣之當辭政府五也、前三者係閣府之案、後二者臣欲請而未發者、此請也臣既奉密諭、又有屬大臣要聲譽之嫌、欲請而中止、低回數四、然下情終有不安者、此而含嘿、是自欺也、自欺也、豈事君無隱之義哉、是臣之所以冒昧瀆聞、不遑恤其他也、伏惟、臣本庸愚書生、仰承閣下之知、開國以來、儒臣遭遇、所未嘗有、蒙恩以還、中夜以興、念所報塞、而未之得、今也如此、愧懼無地、閣下復何所取於臣、然竊見閣下詢於芻蕘、以虛受人、今世所罕、詩云采葑采菲、無以下體、若未忍即加顯戮、姑從所乞、使臣專意學事、脩其不逮、時侍於經筵於乙夜、獻其千慮之一得、俯賜采擇、則臣猶得以圖微効、死且不朽、仰恃恩遇、披瀝心肝、無所隱諱、臣不堪戰兢隕越之至、

政府再議禮行臣古賀樸誠恐誠惶頓首再拜上書

弘道館教授臣古賀樸頓首百拜上書、爲發內帑以恤民災事、曰者恭候起居、侍臣傳諭、臣樸當今

急務、有所欲言、箚記上之、臣謹奉諭、仰欺下問無倦之美、輙有瞽見敢陳之、以備采擇、往日暴颮、臣省事以來、所未嘗有、壞塌房屋數千、小民波逝鼠竄、僅免壓死、稍定還所、則屋宇以至器皿、摧毀粉虀、不可復日、廼張敗席、以蔽風日、衣絮濡、支體傷、燥濕所使、疾又感焉、出望田疇、則如狼之藉、如戎蹂而櫛梳、終歲之勤、動殆爲雕脂、加之穀價騰貴、得食甚艱、乘相乞貸自給、哀鳴嗷々、如此度日、不轉爲溝中瘠、則濫爲穿窬而已、赤子之失所至此、賑恤之舉、宜急於極焚援溺、而數日來未聞有所施行、蒸颮之所殘、廟墓城堞、內外廨衙、倉廩之圮頹者、不知其幾、秋稼損傷、邦計之蹙、亦不知其幾、有司者方愕眙相顧、拮据措辦、救日前而恐不贍、未遑及民瘼也、有司者以是自諉、猶之可也、仰悉閣下至仁、視民如傷、聞之必至、惻然憫念、起而彷徨、而不有以處之、則愛育之道、幾乎熄矣、臣愚竊以爲、今日之計莫若發內帑千餘金、以濟斯急、竊聞、盜胠左藏之篋、失五千金、尋而捕得、檢贓所失僅五六十金、夫黃白流行天下、交易兌折、不可認識、脫使盜越境尺寸、非復我國家有矣、幸天奪其鑒、耽淫累日、以就收縛也、然則獲之偶然耳、今盡數與之、以固邦本、猶未爲過、況今所須、不四之一、又如所謂救急銀者、逐年塡納、足以敷其數乎、夫天之愛民雖切、陰陽之災沴、則迫於氣數、而不能無、於是責之人主、以通其變濟其厄焉、臣直補翼之從而振德之、旱潦災患、處之有方、使民得其所、而遂其生、亦無適而非承天意、伏見帑金既失而復得、不出十日、而有此災變、安知天意示財

之當散、以擬災後之賑濟也、臣爲斯言、非敢傚五行纖緯之說也、蓋天者理也、理之所在、而民之所欲、乃天意是也、謂天茫茫爾藐藐爾則已、使天愛民而責君焉、奚得無此意、奚得不奉此意、是固賢侯所體、豈待臣言哉、然又竊有慮焉、閣下即是臣言、下內廷議、議者必曰、是政府事也、度支責也、何予內廷事、彼此推委、以致索諸枯魚之肆、爲可惜已、伏望閣下毅然斷之、沛然行之、如時雨下、速使斯嗷嗷者、歡抃鼓舞於再生之恩、且使臣庶瞭然、知閣下外末內本、一視同仁之盛德、臣不堪至願、果蒙施行、則査審戶之上下、災之輕重、死者・傷者・飢者・當恤者・不必郵者、是在有司、今不及也、臣未悉朝廷有無措置、及被災戶應用銀兩的數、急於憂國、率爾妄論、仰冒威嚴、臣不勝竦惕屏營之至、

弘道館敎授臣古賀樸誠恐誠惶頓首百拜上疏、臣侍經帷、恭奉德音、若曰、言路未豁、遇事謇諤、寔難其人、近覺汝樸少啓沃、須上自台躬舉措、下至閭閻利病、指陳無諱、以備采擇、反覆開譬、勿懲既往、以怠其後、遂致緘默、臣恐懼聞命、仰難、詢芻無倦之盛美、人臣許國、苟言而利社稷、刀鋸鼎鑊在前、猶所不避、今導之令言、慰之令安、虛懷待之、若是之勤、孰不欲竭其瞽瞶、以補萬分之一、閣下取善無涯、下愚所識有限、比來傾廩倒囷、無復餘蘊、多蒙垂聽、縱欲冒昧、今復何言、無已則有一二管籥之見、初欲徐察時勢、遲至台駕東覲之期、而後上言、非敢隱匿也、蓋

在今日、開口頗難、不欲以危疑之言、上瀆聰聽也、業已不許因循、則不避斧鉞、披瀝肝膽、伏乞台慈、寬嚴誅而察哀悃焉、臣所懷抱終不言、則害於事也、害於義也、終言之則嫌於悔咎也、嫌於競躁也、何謂害於事、內外臣僚、文武濟濟、遠猷深闇、不乏其人、而閣下若獨以狂直待臣者、是或出於獎誘求言之意、然在臣則不容不悉心奉對、即今政理雖脩擧、未盡善、臣畏罪緘口、閣下或以爲外間無復事可議、則壅蔽孰甚焉、是不亦害於事乎、何謂害於義、向倣百舌之饒舌、今學寒蟬之噤音、閣下或以爲偶因一挫、遂變素節、婾婀浮沈、取容於世、則有犯無隱之善、致不昭晰、是不亦害於義乎、昔日妄言、露出尾蹤、旋獲寧帖、復追論之、是不亦嫌於悔咎乎、出處辭受、已賜恩庇曲成矣、而稍涉敍述、是亦不嫌於競躁乎、即使害事與義者含糊不、自鄙意所不安、而嘗聞避嫌者、內不足也、臣雖駑下、自信頗厚、蒙知亦篤、於冒嫌疑乎何有、況有以明其不然乎、往日妄論、遂加密勅、雖非臣初意、而出不得已、外間戢飭、不爲無益、而側目切齒之患、則因台意、在主張教事、即時斡旋、人莫敢動震來虩々後笑言啞啞、益信人主意嚮所在、□心景從、無善不可爲、於臣實爲再造之德、感銘心骨、今豈絲毫抱悔咎乎、人之制行非一端、而莫大於出處辭受、陳力就列、不能者止、周任明訓、事君致身、欲潔其身、而亂大倫、孔聖大戒、苟於義不安、則千駟萬鍾、固不可貪榮而濫竊、苟於義安、則甲兵錢穀有司之事、亦彈冠而就之、是古今所共由、如臣進退狼狽、固無足云、而其不敢爲身計

益、已墜於台鼎矣、不須分疏、今豈頓改、何爲棄、以生僥倖之心乎、請嘗論之、凡物久則窮、窮則變、變則通、方其變也、必有非常之事、非常云者、可權行、而不可常由、可暫試、而不可久用者、往時邦政頽弛、上下寛怠、不勝其弊、閣下救之之道、在更張而改轍、於是乎、不得已於執、而破陳格、脫舊套、有非常之擧矣、正遇主於巷、納約自牖之時、而如臣輩進非常之論、竊非常之位、閣下勸精圖理、先勞無倦、窮者變而通矣、今昔時勢改、觀異宜、爲臣者當循常守分、不踰尺寸、庶可以无咎、然忝侍講筵、仰觀君子虛受之德、感激奮發、輒生故態、及其退也、未嘗不惕然自咎其僭率也、初臣之自劾免也、伏蒙恩諭淳切、以政敎殊途爲念矣、繼而都堂傳許論事之特旨矣、賤跡已安、而荷眷愈渥、結草銜珠之意、猶謂實封論事、經幄敷言、是以效涓滴、殊不知外間人情、有難處者、往日忝竊官銜、雖不免睚眦、而倚聲執籍柄、可以有言、可以有爲、今也、居散地而談重事、掣政府之肘、熏臺司之心、街談巷說、雖非爲有、豈無吠虛尤人所不容、（今出攻意、實則坐犯者、虛則罪言者可也、至行路之言、則不可究出處、是虛是實、人心並不服、而言者亦不反坐、曖昧含糊、大害理體）或乃以嵯沼之淸議、爲柏臺之白簡、是黨錮之禍之所由作、可爲寒心、賴明主在上、得以無他、而臲卼危懼、如坐針氈、殆甚於竊位之日、且也武人俗吏以屠龍彫蟲視學者、臣爲之日實、於是雖台料之明也、原其端由、則臣年少氣銳、任事太眞、疾惡太深、不識時、不達執之所致、俯仰赧恧、容身無地、往者不可諫、來者猶可追、設使弗是之郵、悍然强聒、攘臂下車、觸發禍機、則攻者目視而起、必曰臣爲

訐告、爲讒邪、爲鬼蜮、臺章飛語、所以中傷、難更僕數、非獨不利於臣、池魚之災、社鼠之憑、必及黌庠、必及國事、雖欲措手、不可得已、不及今念改悔之方哉、然臣於臧得論事、宰相不能言、則御史言之、御史不能言、則經筵言之、先賢格訓、若懲羹吹虀、學立仗馬、則臣弗敢焉、但當就所論、稍加裁酌、去泰去甚、如上係君德、下關民瘼、千篋之害、米價之厄、驕士殺子之類、當仍前論列、（亦須省密使入、不如其出經筵）如俗操微服、花街之燼、行酒之娃、苞苴哺啜、請謁之漸、勞揣指斥主名之類、不當復妄發、萬有一鬨、事體重大、理亂安危之所由、草莽市井、猶欲伏闕下撾登聞鼓、而一言者、亦當不畏誅而坐視也、從上所陳人情所不容云々者、切不可發之聲色、號令之間、無風起浪、適足以致紛々、而臣事債矣、欲乞第依舊於教事加台意、不見幾微於外、淵默鑒照、不動如泰山、則雖有浮言、不足郵矣、（此語當奉台旨）以上所論、中情已逼、言多激切、然待罪教職、兼叨言責、人情事宜、學術隆替之機、所係非輕、亦恃非常之寵遇、獻非常之說、仰望垂非常之聽、干瀆尊嚴、臣不堪戰兢隕越屏營之至、其他近事陋見、無甚發明、遷廳之談、未知當否、謹書一於左方、惟閤下裁幸

一　方今官箴肅、而弊竇杜、民心悅豫、仁聞洋溢遐邇、臣雖所忻舞、但驩虞之績、著於一旦、或難可繼、則有聲聞過情之恥矣、不狥名於外、益務實於內、克儉乎邦、克勤乎家、舉綱張目、聖敬日躋、一此不懈、則雖聖賢同歸可也、何區々聲擧之足云

一　千饑社倉、民習壞、民風壞之敝、凍餒饉之歲、貪小利而遺大害、日今之病、莫斯爲甚

一　今歲飢歉、封內不至有殍殣、最可慶幸、然穀價騰踊、細民艱食尤甚、往日微沴作矣、蓋在樂歲飽健、不爲害者、而飢乏之餘、或一染不救、一夫就蓐、一家盡冷、恐千萬中、不能無一二、人死則曰非饑也疫也、是不知以梃與刃之無以異也、此意尤急疫癘、近來疫氣既除、亦無所得聞賴官府有給粟施藥之惠、年麥登場、米價少減、足略舒倒懸、然君子視民如傷、須因事命有司、常體損上益下之意、不使有一夫之不獲之意、切不可無因而發、第如二年當可也

一　教官與銓部、表裏一體、欲乞東觀臨期、仍委重當軸諸老、令益竭心教事、扶植奬勵、則擔當愈重、足以及物矣

一　士夫雖稍向學、民人社稷、何必讀書之說、往々而有、二三學者、欲與其爭衡難矣、洛誦剛毀、難遁責其成、材童習自粉、或體於世務、非薰蕕氷炭、與世不相容、則同流合汙、以隨俗矣、故學者未必適用、仕者未必顧義理、蓋南分其畔可也、欲歸之一途、則須風勵之漸磨之、如文翁化蜀之爲、使衆心感孚情、頑陋習不變、其庶幾與今日士風被陶鑄、比往時固有間矣、但革面者不耐持久、當如魯有常序之民、宜保護養之、斷機會、宜知適、所以不憚煩瀆而有此條

一　選擧風勵之法未立、則事無根蒂、不能無進銳而退速、烏集而瓦解之憂、熊府良規、雖未能取法、須講所以處之

一　政理根柢、莫先於人材、風俗苟合、趨附之風易成、挺正剛直之氣難振、古今之通患

一　臺諫或暗大體而察小故、掩人過失固善、茹柔吐剛則不可

一　中材以下、有此材必有此病、覂駕之馬、或勝重任、跅弛之士、亦可以有爲、在善調馭焉爾、故以短掩長、則多棄材、縱其短而弗問焉、則紀綱紊

一　後庭婦功、千歲難有之盛事、推此以往、何事不可爲

以上一十則

諭寧波難民（劉然乙、汪晴川）等捌拾陸人、爾等在洋遭颶、折壞舵桅、漂至我遠江州外洋、將船破壞、地方官吏、百計救拔、授館就安、給其衣食、具狀乞指揮國家仁惠、哀其顚沛、更命當該官司、加意撫䘏、仍另發洋船、護送長崎、搭呉船以還鄉土、據地方官吏報、頃者水主舵工憤發辦不速、鬧炒打罵、無復人理者、遠江距都遙遠、節級申報、以取官裁、動歴數旬、加以遠江至長崎、中間水路險惡、當歲必待春末、乃可開船、凡海汛自有時節、非人力所能移易、爾等所知也、今起解爾等船隻資粮略已辦集、未即發者、正爲此耳、我憫惻保護、爲之區處、可謂周至、豈故意稽延、以重困汝哉、這般事理、先是已相曉告、爾等應記得、而不顧恩惠、不畏刑法、敢作無狀、此須懲治者、猶念爾等逐利、絕海罹玆奇厄、慨惋無聊、即當至此、故特置不問、今後須改悔、不敢過動、若悍然依舊者、登時捉拿、以正邦憲、船主亦當坐其罪、不復少恕、須至諭者

寛政　年　月　日

諭寧波難民劉然乙汪晴川等撈拾陸人、爾等在洋、遭颶折壞舵桅、漂至我遠江州外洋、將船破壞顚沛是樣、幸遇國家仁惠、百計救拔、加意撫卹、將另發洋船、護送長崎、獨奈遠江州至長崎、中間水路險惡、當蔵待三月中旬以後、乃可開船、凡海汛自有時節、非人力所及、是爾等所知也、況當該地方距都非近、節經呈報、比得官裁、動歷數旬、固其所也、今奉命送回爾等舟檝、資糧略已辦集、然以風逆濤怒、故展其期、這般事理、先是已相曉告、爾等所聽悉、我保愛爾等、可謂週至、爾等所宜感戢、伏誒指揮、義者柁工水手憤發辦不速、衆口曉々、以致爭鬪、不畏國威、不念恩庥、此須懲治者、特憫爾等逐利、絕海罹玆大厄、慨惋無聊、以至於此、故置而不問、今後須務謹飭、不敢放縱、僅有違犯條欵者、當因之以正邦憲、則船主亦當坐其罪、船主以下、各宜愼之、須至諭者

寛政　年　月　日

遠江州代官

諭寧波船主王永安楊宜亭、照得、爾等係通商長崎、開洋遇風、漂至此地方、向胃穢濁、殆葬魚腹、獲救登陸、亦曠日子、誠可憫哀、但因船沈不出、撈取貨物、應計畫設施、致經三月、目今官所發船、

所レ差吏、爲二監船一者皆到レ此、將下押二爾等及貨物一送中於長崎上、船已有レ監、則爾等進退、當下一聽二其命一、不上レ得二自由一、目有レ約二束下項事件一

一　船艙逼仄、載レ人猥多、各宜二相戒一、欽遜協睦、不レ得二褻慢唐突一、惹二起忿鬩之端一

一　監船該官差、專爲二爾等一防二其疎虞一、須下百事稟畏不上レ得レ違二其指揮一

一　自二銚子浦一至二長崎一水程、候二風潮去處一、其繫泊起離、及淹速之度、皆當レ由二監船一、不レ得下妄出二意見一、擾中撓成算上

一　繫泊地方、無レ論二城市村落島嶼一、一切不レ許二登陸一、其事該二非常一須二登岸一者、當下咨二白監船一、從中其處分上

右國家深仁、惻二爾等漂到一、嚴勅二地方官吏一、悉レ心周卹、今又具レ船押二送長崎一、爾等宜下仰二體恩意一恪遵盡一勿レ有二干犯一、其或不レ然、則須下待レ到二長崎一報知上、奉行所レ議、罪決不二汝恕一、須二至諭一者

文化四年四月　日

擬二答牒一

日本國松前奉行、牒二魯西亞幹薩化師廳一、據二唐太越涅符一人報稱、去年十月、貴國舟兵至二唐太一、虜二所由人等一、搶二奪船隻米鼓魚䱀一、放レ火焚二廠房倉庫一、今夏又至二越涅符一、發レ砲劫略、亦擒二所由人等一、背中

器械、米酒等物席卷去、訖至六月、送還所擒所由人幾名、到本職地方、齎到南國字、及羅甸字牒各一通、此命吾人重譯、知從上作過緣由、以十餘年前、乞互市於我、三年前發使船、奉國書信物到長崎、皆爲我拒絶、以激國王之怒、特遣主帥行使暴、若使今段猶不聽從、則當益施暴我之計、一年劇一年、或至滅國乃已、兼送還所由人、供陳主帥日提言語、咎長崎待來使之不恭等事、目皆粗領略訖、凡國於天地之間、所以能自立者、何恃乎祖宗之法而已矣、我祖宗之法、惟唐蘭商舶許互市、他則禁絶、其或投他港而請者、使必到長崎而遣、其待外國人、防衛供賜、亦有定例、不得參差、凜々恪遵、以至今日、非獨施諸貴國、如前日也、是事理、向嘗曉告來人、謂應見聽悉、而有怪訝何邪、天下萬國、莫不守祖法以立國、若以此爲罪、則天下之不屬貴國者、皆有罪也、前年使船匝地球、而奉國書、可謂勤矣、然以礙法、不得已而謝絶矣、而今欲我怵於邊陬一小擾、迫於言語、一恐動而遽從請、豈謂如此而可以國於天地之間邪、且也此聲一播、向著外國之求市易、而被卻者將紛然而至、亦必有效尤而擾邊者、豈謂如此而可以國於天地之間邪、有一於此、國不可爲、況一舉並至乎、使暴大怨也、劫逼大耻也、是以闔國士民、扼掔切齒、奮迅踴躍、欲一死以報此怨雪此耻、不期而集、業已具兵艦詰戎器、欲一決戰無所顧慮者、然今所以須臾抑衆怒、以答來牒者、則有一說焉、審向之使暴、銃子止用紙毬、不加殺害、所擒亦撫而遣之、因通牒傳語、言互市及結隣好事、察其情實、似渴望互市、遭我拒絶、無以達意、遂出

今策耳、未可輒以必死之怨讐視之、則本職所見、有不可不以告焉者、兵凶器、爭逆德、至於用兵、則使無辜之民、肝腦塗地、非立國者所樂用也、然理勢至不得已、則雖殺人滿野、浮屍蔽海、在所不恤、本職竊歎、貴國以區々求互市之小利、將糜爛兩國之民、恐不得爲知輕重者、以若所爲、求若所欲、則徒深其怨耳、斷無可從請之理、猶之却行而求及前人、兩國言語雖異、習尙雖殊、人心所同、然則一也、主帥盍試代我思如此而有可從之理否乎、其無斯理、不難見也、貴國之意、誠在互市而脩鄰好、不在糜爛兩國之民、則主帥盍思所以謝過自新、使我有以藉口不患不可國於天地之間、有以處之、則本職當請諸本朝求權其輕重、變而通之、細故微物、或有所不較本朝、從違雖未可知、而本職所以爲兩國生靈謀、則得輸其涓埃矣、本職所以答來意者止此、主帥若曰我知求吾所欲而已矣、不復問其佗、則是以無道行之也、以無道行之、則我深讐也、即當以矢砲相待、不用多言、至來牒曰一年劇一年、或至滅國之譖、則吾聞命矣、國於天地之間、孰無禦侮之備、孰無進取之計、當惟力是視、不要恫喝相酬、吾聞、仗義者彊、盈貫者殪、可不戒哉、須至牒者

經濟文錄　終

軟莎偶語

臣舍距負賀之闕數十武、闕宜夏、一夕散步、濯清漪而坐磯側、塵慮暑消、涼颸生樹、滿月含閣、爽然使人思纊焉、有人席莎偶語、多及政治得失、鑿々可聽、竊欽其人、而不敢問其名、一二所記、還舍筆之、嗚乎君門如海之深、孰測其當否、然諫鼓謗旗、若繩以文法、責以證左、何異乎舉杖呼狗、是可存矣

經濟之本、在於立志、志未立則事物搖奪、而事不成矣、志者何、一實而已矣、好善而惡惡、進賢而遠不肖、崇節儉去奢華、生於心發於政者、皆欲無一毫之不實、所謂務決去、而必求得之、如火之熱、如氷之寒、而事不終者、未之有也

人以眇然之軀、居萬物之間、心術之微、毫釐有差、善惡顛倒、豈不可畏、人皆然、人主爲甚、人主皆然、今日爲尤甚、何則人主者、威福所在、而柔媚之風、盛於今日、窺測百端、唯逢人主之好、長惡逢惡、何所不至、涓涓之成江河、速在轉眄、苟非好善如好色、惡惡如惡臭、而徒欲智術防之、則適勞、而遂墮其圈中矣、是聖賢之所以競業、必曰德惟善政也

汲黯中公之告武帝、得其要者也歟

皇立其極、民四面望而取準焉、故一事之病、輒爲百弊之因、可不謹乎

東武發程、本在九月廿六日、如廿九日以廿三日發、昉於前回云、在東一日之費爲百金、若以廿九日發、則可省六百金、以廿三日發、則入邸謁府、必在十一月朔、以廿九日、則在望既謁府之後、則有候問權要、燕享賓客之禮、未謁之前、則寂然屛居、謁朔之比謁望、所差十五日、十五日間、候問燕享之費亦不貲、還鎭之命、在二月十五日、黑田侯則聞命而發、不出三四日、節下則以三月首發、亦所差十餘日、其費千數百金、而候問燕享之費不與焉、節下去邸之遲々、或云資斧未具、或云節下之志也、未知其詳、今之經理國事者、繭絲牛毛、無所不至、至於關係如此者、則知而不敢言、言而不敢爭、獨何與臣僚、又以此疑節下之心、未必如其所令、依阿觀望、爲應文容身之計、佗多此類、國家之事、積年累月、少成效者蓋由此也、嗚乎臣僚何待節下之淺耶、何待節下之淺耶、伏見節下發憤求治、宵衣旰食、苟益社稷、何事不從、豈以樂東武之心而妨國家大計哉、願以順衆望、以省大費、以徹群疑、使革弊去奢之誠意、感孚於人心、則中興盛業、可放目而竢已

節下萬事省約、獨尚衣用度、加陪於先朝、臨藩猶約、在東爲甚、澣濯罕御、皆供賜予左右臂御、裓服楚々、人以爲節下好華、鮮不崇節儉病革弊之難者、未嘗不以爲辭、是等事終爲弊滯、亦勢之必然也

後庭用度雖省於前、恐有未慊人情、亦人所不敢爭、而節下之所宜先之、炳示崇儉之意者歟」

累世諸公所置、器用玩好、倚疊如山、何所不有、而一切視爲不祥器、節下一有所需、有司不取諸府庫、而必求工商駔儈之手、竊聞、秋覲應備束帶儀服、北城尙衣、有未經御者、有司不敢以進、更命京師緞舖製之、其費甚大、夫宮室土地人民、孰非先公之遺、今獨於服御忌之、不知何說

宦豎冗費、節次減損、省其太半、然數尺鯿魚、止取四臠一匙、益膳纔得三刻、矯矢之竹、必採諸山虞、享鬮之水、必求諸河源之類、（是去已革）格套未破、循習依然、今有鹿洲舊法、與三城翁主膳法在、量酌施行、恐足以祛弊

北城遺賜一事、而數失具焉、遺臣受賜、至再至三、可以已而不已、其失一也、醫藥諸費、及大事所需、搶奪諸商家、而不之償、是臣子痛恨、以遺財充之、理之當然、特以內外間隔、痛痒不聞、不一言及此、其失二也、北城與僕、忽遇天地震塌、無祿可仰、昏惑彷徨、欲爲農而身難用、欲爲商而無貨本、散而入于叢社、終爲刁狡無圖之民、此事雖微、亦先君遺隷、今所至此、繼富而不周急、其失三也、節下左右、亦須除惠、頗起物議、其失四也、至賜及呼彼小星、則有司揣摩人主心術、以自固其情狀、可見已、峻絕痛懲、猶恐不悛、而一切施行、其失五也

東武商儈、以諸侯爲私客、東覲之日、事有司如奴僕、或反、或推轂、不問其應用不應用、得他其溪壑焉、其伎倆大抵類此、一應刀劍散樂、文房雜佩、玩好諸器皆然、（竊聞、秋覲當用禮服、不得已之外一切不許取貨、似已賜此弊）

內帑之弊蓋多端、而人所能言有四焉、其一、國計頭燃之急、而內廷不之恤、陰恃此儲、而外廷

亦怙レ之、是以經理、終無下沈レ船破二釜甑一之氣象上、是謂二其體一也、今使レ不レ通二夕假一、亦不レ爲レ得、其二、此儲蓄備二軍國緩急一、今或以導二人主之欲一、亦致二予貸無藝一、其三、內外胡越、借而不レ還、追呼星火、至レ有二資魚叫レ脚之誚一、其四、不レ去二內蠹一、而規二墾田新稅一、所謂放飯流歠、而無二齒決之問一也、賜予之濫、徒糜二財用一、薄レ遠而厚レ邇、適以示二規摸之陋一、恐非下明主惜二顰笑一之意上

玩レ物喪レ志、古人所レ戒、而小人所二依附一也

遊畋招搖、不三必設二鹵簿一、今雖二稍減一、未レ破二舊套一

田獵打圍、事甚張皇、糜レ用妨レ農、須レ有二以處一レ之

善爲レ治者、由レ上及レ下、先レ近後レ遠、故令行禁止、無レ不二風靡一、近歲舉措、率急レ下而緩レ上、詳レ遠而略レ近、是所三以有二搔靴之歎一也歟

左右暬御、乏二素樸勁直之風一、恐外人有三以窺二節下好惡一

監察膺二耳目之任一、而多二言レ利者一、乃爲三其小吏所二指畫一、小吏輩豈可レ望三其識二大體一乎、皆爲レ耳課、而不レ憂レ國、乖繆瑣屑、虧二損治體一、而作二民瘼一者、比々而是

以レ言レ利進者、尤不レ當レ借二名器一

世祿之家鮮レ由二禮法一風俗陵夷、皆有二自起一、下大夫上士、尤甘二暴棄一、朝廷待レ之如二驕子一、欲三舍レ之以繩二其下一、豈可三以望二其響應一也、埠頭齧レ妓、無狀士夫、醉レ花眠レ柳、往日朝廷、震怒正二邦憲一、然後惕

然相喪、不效向之爲慈一面嘗直、亦仁之術也

内官長本爲皆御頭領中爲今裁、而皆御自置長、故其職似要而實散、今日之勢、殆迫廷老、此職也

可以補闕失、可以達下情、在得其人與否而已

内外損下而益上、須反之、乃可如歷陳諸司、即使內官長最劇職、亦不得不自約以奉人、今

會計之初、自爲其地、然後於他司、樣其贅制、且節下儀衛痛損、先是未有也、而内老及長[illegible]、及

支給俱減、皆仍舊額、豈足以厭人心哉

先子自少小時、慨然有匡君濟時之志、深鄙世儒闇於事情、不可使從政、肥之先侯泰國公、不世

之賢主也、知先子可大用、令學於上國、學就而歸、頭超擢參豫政議、時承積弊之後、有司束手無

策、一夕公召先子而詢焉、先子具對所見、公稱善、不覺膝之前席、談論達旦、嗣後多所建

明、公斷然信用、不牽於浮義、於是積年蠹害、次第釐革、闔國洒然改觀、無幾先子辭政署、專管

學政、而公尋棄、命令苟有所見、直言無諱避、經濟文錄所載、皆當時所上也、原公所以致

中興、實由禀性之美、學術之實、而先子羽翼贊襄之功、亦烏可少哉、今讀其書疏、魚水歡孚之實、肝膽

披合之情、藹然乎言外、君臣契合之美、猶可以想見、夫以際遇之盛如此、意必更有可建立、知應

有散佚、且也和文爲之者不錄、故僅々止于此、君臣相遇、蓋自古難之、若先子値泰国公、實

千載一時、而中道投レ間、不レ及レ竟ニ匡濟之略ヲ、況世之事ニ庸闇之君ニ者、其弁ニ髦之ヲ、士ニ芥之ヲ、不レ得ニ一日安ンズル於朝廷ニ固也、此煜所下以讀ニ斯卷ヲ、欣慕之餘、繼以中感嘆上也、既而先子膺ニ嘉辟ヲ、司ニ教鐸ヲ、海內崇仰、又未レ幾、進レ秩加レ祿、寔門光榮、然職有ニ專掌ヲ、不レ干ニ機務ヲ、不レ能レ展ニ濟世之才ヲ、故無ニ復章奏ヲ、先子晩年、語及ニ泰國公知過之日ヲ、尤深愴、良有レ以也、即應辟之後、顧問所レ及、忠誠所レ激、間有ニ建白ヲ、然體皆和文、故不ニ收載ヲ、其論ニ清商ニ文、擬下答ニ雜文ニ牒上、二道頗關ニ機密ヲ、不レ可レ入ニ文集ヲ、故附ニ于此ヲ、軟莎偶語、則泰國公初政時所ニ結撰ヲ、託ニ他人言ヲ、以論ニ當今要務ヲ、雖ニ僅々小冊ヲ、自爲ニ一部書ヲ、不レ可下與ニ章奏ニ混上、故別成ニ一卷ヲ、從上二卷、未レ足レ盡ニ先子之蘊ヲ、然讀者能潛玩熟味、以推ニ及其他ヲ、則於ニ先子之經濟ヲ、亦思過レ半矣

文政辛巳維暮之春　　不肖煜謹識

軟莎偶語　終

詢芻邇言

古屋鬲著

詢芻邇言

古屋鬲著

今度君侯閣下學術ノ御志マシ〳〵、市井賤陋ノ臣ヲ被レ爲レ招候事、淺學寡聞ノ身ヲ顧ミ深ク奉二慚愧一候、然シナガラ積年ノ功ニ因リ、古聖人ノ道ニ於テ一斑ヲ窺ヒ候事モ御座候得バ、短智ノ及ビ候ダケハ隨分御教導申上候所存ニ御座候、先ヅ人君ノ御心入レハ一方ナラヌ御事ニ御座候ヘドモ、御家中御領内數千萬人ノ上ニ被レ爲レ立候事ユヘ、正シキ御身持ヲ以テ群下ヲ率ヰラレ候事何ヨリモ肝要ニ奉レ存候、論語ニ、「政者正也、子帥以レ正、孰敢不レ正」ト申語誠ニ金言ト奉レ存候、又「君子之德風也、小人之德草也、草尙二之風一必偃矣、」是ハ下ノ善惡ハ上ノ御身持次第、如何樣ニモ移リ易リ候譬ヘニテ御座候、先ヅ人君ハ好惡ト申ス事常々御心ヲ用ヒラレ候事第一ニテ候、好トハスキコノム事、惡トハキラヒニクム事ニテ御座候、縱令御心ニ好マセラレ候事ニテモ、下ニテ學ビ風俗ノ害ニナリ候事ハ御嫌ヒ可レ被レ成候、又御心ニ惡マセラレ候事ニテモ、下ニテ學ビ徒ニ成リ候事ハ御スキ可レ被レ成候、是スナハチ克己ノ術ニ御座候、國語ニ、「好惡不レ易是謂レ君、」禮記ニ、「爲二人君一者、謹三其所二好惡一而已

矣、君好レ之則臣爲レ之、上行レ之則民從レ之、又君レ民者、章レ好以示ニ民俗一、愼レ惡以御ニ民之淫一、則民不レ惑矣」此心ハ上ノ好ミ候事ハ下モ好ミ候テ、一統ニ風俗トナリ、上ノ惡ミ候事ハ下ノ人是ヲ不ニ敢犯一シテ、惡事自然ト止ミ候トナリ、サレバ人君其弱道術ヲ不レ好、德行ニ怠リ、只管ニ號令ヲ以テ下ヲ趣トイヘドモ、下ノ人是ニ從ハザル事必然ナリ、古今文武忠孝ヲ以テ天下ニ令スレドモ、是ヲ勵ム人甚希ナリ、是號令ノ獨リ行レザル顯證ナリ、緇衣曰、「下之事レ上也、不レ從ニ其所一レ令、從ニ其所一レ好、」又大學ニ「其所レ令反ニ其所一レ好、而民不レ從、尚書ニ、「念レ茲在レ茲、釋レ茲在レ茲、名言レ茲在レ茲、允出レ茲在レ茲」トハ是ヲ謂フナリ、人君モシ誠ノ心ヲ以テ聖人ノ道ヲ好ミ、諸々ノ雜技ヲ不レ嗜、文武ノ術ニ精勤ノ輩ヲバ賞賜ヲ行フテ是ヲ勵マシ、雜技ノ人終身拔用セラレズンバ無益ノ末技ハ禁ゼズシテ自カラ止ムベシ、（末技トハ、俳諧、茶讌、鞦韆、聞香、猿樂ノ類ヲ云、家中ニ是等ノ藝ニ堪能ノ人アルモ、賄賂ノ害トナルモノナリ、其故ハ後嗣ノ君モシ文學ヲ好マズ、汎ク當世ニ交リテ此等ノ末技ニ志ス事有ルトキ、家中ニ相手トナリテ是ヲ助ル人ナケレバ、其志淡薄ナリ、モシ堪能ノ人出テ己ガ技ヲ衒カシテ是ヲ導クトキハ、其志イヨ／＼深ク、家中一統其藝ノミ行ハル事ニ成リ行クハ、風教ノ大ナル害ナリ、且末技ノ輩ニ國士ノ器量アルハ希ナリ、左樣ノ人時ニ乘ジテ寵ヲ得、賢路ヲ塞グ事有バ、國家衰亂ノ本ナリ、サレバ人君ハ萬機ニ心ヲ配リ、後嗣ノ爲メニ末技ヲ禁ズルモ孫謀ノ一端ナリ）此事ヲ孝經ニハ、「示レ之以ニ好惡一、而民知レ禁」ト云ヒ、大學ニハ、「有レ國者不レ可ニ以不一レ愼、辟則爲ニ天下僇一矣」ト戒メ申候、愼ムトハ、好惡ニ心ヲ用ヒテ輕々シクセヌ事ナリ、辟ムトハ、好惡ノ正シカラヌ事ナリ、夏桀殷紂萬乘ノ主ニシテ、民ノ好ム所ヲ嫌ヒテ、其惡ム所ヲ好ミシ故、終ニ湯武ノ放伐受テ天下ノ僇辱ヲ取レリ、誠ニ己ガ好ム所ヲ棄テ惡ム所ヲ行フハ、人情ノ至テ難キ事ニ候ヘドモ、大學ニ、「物格而後知至、知至而後意誠、意誠而後心正、心正而後

身修、身修而后家齊、家齊而後國治、國治而后天下平ト御座候得バ、好惡ノ正シク成リ候ハ物ヲ格スノ効シニテ御座候、物格ルト申候ハ、篤行ヲ積テ學ビ候ワザ、イツトナク我ガ有ト成候事ニテ、夫ヨリシテ己レガ見所モ易リ、志モイヨ〳〵固ク、好キキラヒノ境モ表裏ナク天性ノ如ク成リテ、善ヲ好ム事如好好色、惡ヲ惡ム事如惡惡臭ニナルヲ「知至而後意誠」ト申候（讀ノ鄭氏、朱ノ朱氏大學ノ皆此義ヲ失ス）然レバ學術サヘ御勤メ被成候得バ、御好キ惡ヒノ所ハ自然ト正ク相成可申候、サレバ人君ノ御心術ハ好惡ノ二字ニ止リ申候

サテ又御平生ノ御身持ハ、恭儉ト申ス事肝要ニテ御座候、恭ノ字ハウヤ〳〵シト訓シテ、下ノ人ニ高ブラヌ事ニ候、儉ノ字ハツヾマヤカト訓シテ、萬事ニ華美ヲ好マヌ事ニ候、孟子ニ、「是故賢君必恭儉、禮下取於民有制」ト申語御座候、禮下ハ恭ナリ、取於民有制ハ儉ナリ、禮記ニ、「恭近禮、儉近仁、」又孟子ニ「恭者不侮人、儉者不奪人」人ヲ侮ラザルハ禮ナリ、人ヲ奪ハザルハ仁ナリ、「君子以仁存心、以禮存心」ト云モ、恭儉ノ斯須モ心ニ忘レザル事ヲ云ヘリ、古聖人如何ナル故ニ此ノ恭儉ノ二ツヲ人君ノ德ト定メラレ候ナレバ、天子ハ申スニ不及、諸侯ニテ一國又ハ一郡ヲ領セラレ候御身分ハ、スグレテ貴キ位ニマシ〳〵候ヘバ、自然ト下ノ人ヲ輕シメ侮リタマフ御心生ジ候ユヘ、臣下モ心ヲ盡シ忠節ヲ勵ミ候者少ク候、マシテ賢才ノ人ハ左樣ノ驕慢ノ君ニ翫弄セラレ、己レガ智能ヲ盡サスル事ヲ悔シキ事ニ存候、此事ヲ尙書ニ、「狎侮君子、罔以盡其心、狎侮小人、罔以盡

其力一」又云「匹夫匹婦、不レ獲二自盡一、民主罔三與成二厥功一」ト戒候、然レバ恭ノ字ハ人君ノ一大要務ト相見エ申候、サテ儉ヲ以テ是ニ配シ候譯ハ、人君一國郡ヲ領セラレ候ヘバ、其國中ヨリ納マリ候租税、及ビ山海ノ征莫大ノ倉入リニ候ユヘ、如何ホド華麗汰（マヽ）侈ナル奢リモ心ニ任セ申候、是ニ因テ宮室・衣服・飲食ノ三ツハ申スニ不レ及、其外後宮ノ佳麗、燕居ノ玩好マデ、年々ニ侈心增長シテ、終ニハ其莫大ノ倉入リニテモ賦リ足ラヌヤウニ成リ行キ、家中ノ祿ヲ削リ領内ニ運上ヲカケ、商人ニ用金ヲ仰グ、當時ニテ人君困窮スレバ、臣下ノ祿ヲ削リ、商人ノ借金ヲ斷リ、有功有勞ノ臣ニモ賞賜ヲ行ハズ、文學武術モ一切廢弛シテ是ヲ儉約ト號ス、大ナル僻事ナリ、儉約トハ、萬事ヲ質素ニシテ無用ノ奢ヲ止メ、自身ニ艱苦ヲ嘗ムル事ナリ、臣民ノ物ヲ奪略スル事ニ非ズ、畢竟人君身ヲ儉素ニスルハ、財貨ヲ貯ヘテ臣民ヲ救ン爲メナリ、故ニ儉ハ近レ仁ト云ヘリ、下ノ財ヲ奪テ上ノ用度ニ給スルハ、則易ニ在テ損ノ卦トス、「有若曰、百姓不レ足、君孰與足、有レ味哉」是皆人君一身ノ奢ヨリ生ズ、夫レ涯リ無キ慾ヲ以テ、涯リ有ル財ヲ用ユ、爭カ困窮ヲ招カザラン、然レバ人君ハ萬事儉素ヲ守セラレ候事肝要ト奉レ存候、尙書云「位不レ期驕、祿不レ期侈、恭儉惟德」此ノ心ハ位貴ケレバ人ニ高ブル心ナケレドモ、自然ニ驕慢ノ心興リ、祿優ナレバ事ニ侈ル心ナケレドモ自カラ華奢ニ趨ムク、サレバ常々恭儉ノ二字ヲ以テ心ノ守リトスベシトナリ、孝經ニ、諸侯ノ孝ヲ說テ曰「居レ上不レ驕、高而不レ危、制レ節謹レ度、滿而不レ溢」是モ亦恭儉ノ事ヲ云ヘリ、人君ノ御身持ハ先ヅ右ノ通リ、好惡ヲ愼ミ恭儉ヲ守ラセラレ候事一大用心ト可レ被二思召一候、其上ニテ古聖人ノ道ニ從ヒ、宗廟ニツカヘ社稷ヲ祭リ、官職ヲ分チ制度ヲ定メ、文學ヲ勸メ武術ヲ勵マシ、功アル人ヲ賞シ、罪アル人ヲ罰シ、士民トモニ廉恥ヲ養ヒ、貪欲ヲ去リ候ヤウニ御示シ可レ被レ成候、宗廟社稷官職ノ事ハ、人君ノ天職ヲ奉ゼラレ候本

ニテ候ユヘ、尚又荒々左方ニ書キ記シ奉レ入二御覧一候
先ヅ天職ト申候ハ、天帝ヨリ被二仰付一候職分ト申ス事ニ候、天子ヨリ庶人ニ至ルマデ皆夫レ〳〵ノ職分定リ申候、天子ハ天下ノ民ヲ安ンジ候ヲ職分ト被レ遊候、諸侯ハ領内ノ民ヲ安ジ候事職分ニテ候、此ノ職分踈カニ御座候ヘバ、天罰ヲ受ケ候事顯然ノ道理ニ候、天罰ト申候ハ重キハ天下國家ヲ亡ボシ、輕キハ大風洪水大火蟲蝗ナドノ災是ミナ天神地祇ノ怒リニ觸レ候ユヘニテ、一國ノ難儀ト成リ申候、サテ天ニ好生ノ德アリテ、人ハ申ニ不レ及、無用ノ鳥獸草木ニ至ルマデ、皆其惠ヲ得テ夫々ニ生ヒ立チ候ヲ好生ノ德ト申候、好生トハ物ヲ殺ス事ヲ嫌ヒ、何ニヨラズ育テルト云フ義ニテ、即仁德ナリ、大戴禮曰、天作レ仁、地作レ富、人作レ治。人トハ人君ナリ、人君天意ヲ奉ジテ治理ヲ施シ玉フ故、大學ニ為二人君一止二於仁一ト申候、然レバ人君ノ職ハ汎ク民ヲ安養スルニ止リ申候テ、職分人君一人ニテ行キ屆キ不レ申候ユヘ、家老川人以下サマ〴〵ノ役人ヲ立テ手傳ヒ申候、サレバ家老以下モ皆々人君ヲ相ケテ民ヲ安ンジ候事天職ニテ御座候、尚書ニ、惟天惠レ民、惟辟奉レ天 此心ハ天帝民ヲ愛スル心アリトイヘドモ、自カラ民ヲ治ムル事不レ能、人君ニ命ジテ是ヲ治メシム、然レバ人君ハ天意ヲ奉ジテ民ヲ惠ミ候事職分ト相見エ候、又孟子云、民為レ貴、社稷次レ之、君為レ輕、コノ意ハ天子ヨリ萬國ノ民ノ為メニ五穀成就ノ祈禱所ヲ建立シ、其祭祀ヲ主ドル役人ニ人君ヲ立候ヘバ、畢竟民ノ為メノ社稷、社稷ノ為メノ人君ト申ス心ニテカク申候、愚ナル君ハ己レ一人ノ身ニ奉ゼンタメニ、家老以下サマザ

マノ役人ヲ立テ、其下ニ農工商賈ヲ置テ事辨ジ候ヤウニ心得ラレ候ハ、大ナル相違ニテ御座候、然レドモ此ノ民ヲ安ンジ候ニハ、古聖人許多ノ方法ヲ立ラレ候ユヘ、學問不レ仕候テハ其切リ組相知レ不レ申候

宗廟ト申候ハ、先祖ノ靈屋ニテ御座候、是モ古聖人ノ制ニ、天子ハ七廟、諸侯ハ五廟、大夫ハ三廟、士ハ一廟ト限リ有レ之候、七廟トハ、大祖ノ廟一ツ、是ハ大先祖ノ靈屋ナリ、其次ギニ有德有功ノ二祧アリ、有功トハ、始テ天下ヲ有チ候人ナリ、有德トハ、有功ノ先祖、又ハ子孫ノ中ニテ德ノ勝レテ高キ人ヲ云フ、此ノ三廟ハ幾代過ギ候テモ祭リヲ絕チ不レ申候、其外ニ當代ヨリ數ヘテ高祖・曾祖・祖廟・禰廟ト四廟ヲ立テ候テ、毎月必ズ自カラ齋シテコレヲ祭リ申候、勿論粢盛ニ備ヘ候供米ハ、天子自カラ籍田ト申スモノヲ耕テ、祭服ハ王后手ヅカラ蠶ヲ養テ織レ之候事禮ニ見エ申候、諸侯五廟トハ始テ國ヲ有チ候有功ノ人ヲ大祖トシ、其外ハ當代ヨリ四代上ミヲ高・曾・祖・禰ト四廟ヲ立テ候事天子ト同然ナリ、是モ粢盛ハ人君手ヅカラ籍田ヲ耕シテ作レ之、祭服ヲバ夫人養蠶シテ是ヲ織ル、大夫以下皆然リ、サテ此ノ宗廟ヲ天ニ配シテ尊ビ候事、如何ナル故ニ候ナレバ、貴賤トモニ人ノ出デ候本ハ先祖ナリ、若シ此先祖ナクンバ天子トナリ諸侯トナリ、今日如レ此富貴ヲ極メ榮耀ヲ受ケ候事決シテ成リ不レ申候、然レバ先祖ヲ大切ニ仕リ候ハ、己ガ本ヲ忘レヌ心ニテ御座候、凡ソ人古ヘヲ忘レ本ヲ忘レ候ヨリ、侈リニ長ジ欲ヲ縱ニシ、終ニ國ヲ失ヒ家ヲ破リ、身ヲ亡シ先祖ヲ辱シメ候事古今其例

少カラズ候、國政ヲ行ヒ候ニモ先代ノ仕置ヲ取リ與シ候得バ、人心モ能ク歸服仕候モノニ御座候
社稷ト申候ハ、社ハ土神ヲ祭リ候ヤシロ、稷ハ五穀ノ神ヲ祭リ候ヤシロニテ御座候、五穀ハ萬民ノ命ヲツナギ候モノユヘ、是ヲ主ドリ候神ヲ祭リ申候、其五穀ノ生ジ候本ハ土地ニテ候ヘバ、始テ國ヲ賜リ諸侯トナリ候節、天子ヨリ大社ノ土ヲ割テ被レ下候フ、城内ニ於テ社壇ヲ設ケ、永代是ヲ祭リ候ヲ社ト申候、何レモ土壇ニテ屋ヲ不レ葺、風雨霜露ヲ受ケ申候、畢竟萬民ノタメニ立テ候社稷ニテ御座候、人君一國ノ中ニテ我ヨリ上ニ立チ候モノ無レ之候ユヘ、自然ニ驕奢ノ心生ジ、事ニ惰リ政ニ怫リ申候、コノ所ヲ聖人熟々考ヘ玉ヒテ、宗廟社稷ト申モノヲ建立シテ、人君恭敬ノ心ヲ養ヒ、怠惰慢易ノ心ノ萌サヌヤウニ導キ玉ヒシハ、深キ意味アル事ト見エ申候、孝經ニ、諸侯ノ孝ヲ説テ曰、「能保二其社稷一、而和二其民人一、蓋諸侯之孝也、」禮記ニ、「國君死二社稷一、又國有レ患君死二社稷一、謂二之義一、」孟子云、「諸侯危二社稷一、則變置、」是等ノ語ヲ推テ社稷ノ重キ事明白ナリ、我朝ニモ古ヘヨリ鎮守ト申スモノ國々ニ御座候ヘドモ、一通リノ神祠ニテ、土神ヲ祭リ候事不レ承傳候、神道家ノ説ニ、稲荷大明神ハ稷神ト申傳候、何レニモ社稷ノ二神ハ、五穀成就ノ德ニ報ズル爲メ、御城内ニ於テ御自身御祭リ被レ成可レ然奉レ存候、烈風・鴻水・螟螣ナド年々害ヲ成シ候モ、神明ノ怒リニ觸レ候テ擁護少キユヘト可レ被二思召一候、然シナガラ御家中御領内ノ人君德ニ歸服不レ仕候テハ、如何ホド神明ヲ被レ爲レ祭候テモ擁護ハ有レ之間敷候、尚書云、「至治馨香、感二于神明一、黍稷非レ馨、明德惟馨、」又左傳ニ、季梁云、夫民神之主也、

是以聖王先成レ民、而後致ニ力於神一、於レ是平民和而神降ニ之福一、」サレバ前ニ申候通リ、好惡恭儉ノ四字ハ神明ニ事ヘラレ候本務ニテ御座候

官職トハ人君天ニ代リテ民ヲ治メ候方法ニテ御座候、尚書ニ「無レ曠ニ庶官一、天工人其代レ之、」曠ハムナシクスルト訓ジテ、其任ニ當ラヌ人ヲ其官ニ置ク事ナリ、工ハ功ト同ジ事ナリト訓ズ、此ノ意ハ人君ノ爲ル所ミナ天職ナレバ、其器ニ非ル人ヲ用ヒテ民事ヲ治メシムベカラズトナリ、帝舜ノ「咨汝二十有二人、欽哉惟時亮ニ天功一」ト戒玉ヒシモ此意ナリ、歷代ノ聖王必ズ正德・利用・厚生ノ政ヲ以テ萬民ヲ安ンジ玉フ、故ニ亦必ズ正德・利用・厚生ノ官ヲ設ク、是ヲ三事ト云フ事詩書ニ見エタリ、正德トハ、民ノ風俗ヲ正シクスルナリ、利用トハ、器械ニ事缺ヌヤウニ拵ヘ出スナリ、厚生トハ、勝手ムキ不如意ナラヌヤウニ世話ヲスルナリ、帝嚳以前ハ六府ノ官ノミニテ、專ラ利用厚生ノ爲メ設ケラレタリ、堯舜ニ至リ始テ九官ヲ建テ、正德ノ教興ル、夏商周ヲ歷テ少ク沿革アリ、サテ天子ニ六卿ナリ、我朝ノ八省ニアタル、諸侯ニ三卿アリ、三卿トハ、司徒・司馬・司空ナリ、此ノ三人ニテ國中ノ仕置ヲ三通リニ分テ是ヲ治ム、第一ニ司徒卿ハ正德ノ事ヲ司ドル役ニテ、我朝ノ民部ニ當リ、一國ノ戶籍ヲ司ドリ、職業ヲ授ケ徒役ヲ課シ、市雄ヲ明メ鄉黨ヲ睦ビ、老幼ヲ養ヒ庠序ヲ興シ、風俗ヲ正シ譜牒ヲ叙デ、喪祭ヲ修メ農桑ヲ勸メ、租稅ヲ斂ムル役人ナリ、第二ニ司馬卿ハ利用ノ事ヲ司ドル役ニテ、我朝ノ兵部ニアタリ、一國ノ武備ヲ司ドリ、兵賦ヲ治メ卒伍ヲ督シ、僕御ヲ率ヰ輿服ヲ書シ、儀仗ヲ正シ

官衙ヲ設ケ、田獵ヲ習厩牧ヲ育シ、器械ヲ制シ爵祿ヲ詔ル役人ナリ、第三ニ司空卿ハ厚生ノ事ヲ司ドル役ニテ、我朝ノ宮内ニ當リ、一國ノ土田ヲ司ドリ、城池ヲ修メ屋宅ヲ授ケ、時令ヲ謹ミ山川ヲ征シ、草萊ヲ闢キ道路ヲ除シ、隄渠ヲ通ジ營造ヲ監シ、章程ヲ定メ貨賄ヲ算シ、錢債ヲ治ル役人ナリ、皆ソレ〳〵ニ頭・助・允・屬アリテ此ノ諸官ヲ領スルナリ、此ノ外ニモ禮儀ヲ掌ドリ、法令ヲ敷キ刑罰ヲ行フ官アルベシ、我朝ニテハ治部卿萬事ノ儀式ヲ掌ドル、古ヘノ宗伯ノ如シ、刑部卿刑法ヲ掌ドル、古ヘノ司寇ノ如シ、魯國ニテ夏父氏世々宗伯タリ、臧孫氏世々司寇タリ、唐虞ノ世ニハ納言ノ官アリテ法令ヲ掌ドル、周ニ至テ太宰ノ官國法國令ノ事ヲ總掌ドリ、内史御史大僕小臣ノ類是ヲ出納ス、武家ノ大目附ノ職ノ如シ、膳羞・醫藥・園池・圖書・畫繪・裁縫等ノ事ハ中宮ヨリ領ス、武家ノ小納戸ノ屬隷ナリ、此ノ手分ケ無クテハ治メ方混雜シテ行屆キ難シ、當時何レノ家ニモ武官ニハ番頭・物頭・旗奉行・鎗奉行・使番・歩士・足輕ナド云モノ有テ荒方ハ管轄アリ、文官ニハ用人・目附・勘定頭・郡奉行・町奉行・作事奉行・道奉行・其外山林川澤マデ夫レ〳〵ニ役人アリ、サレドモ不學無術ノ人ノ手ニ出タル制ナレバ、統轄ノ法宜シカラズ、其上風俗ヲ正シ人倫ヲ厚クスル役人ヲ一向設ケズ、一大闕事ト云フベシ、右ノ三卿ノ中ニテ司徒ノ官ハ、産業ヲ授ケ風化ヲ美ニスル最重キ職ナルニ、當世ニテ是ノ官ヲ立テズ、僅カニ儒者ナドニ託シテ孝弟仁義ノ空論ヲ說話セシムル事、古ノ道ニ暗キ故ナリ、聖人智仁勇ノ三徳ヲ立オカレタルモ、智ハ心計ノ善キ事ニテ、司空ノ徳ナリ、仁ハ人ヲ教テ退屈セヌ事ニテ、司徒

ノ徳ナリ、勇ハ難ニ臨ンデ懼レヌ事ニテ、司馬ノ徳ナリ、尚書ノ九徳周禮ノ六徳、皆官ニ因テ徳ヲ立ツル事古ヘノ道ナリ、一人ニテ智仁勇ヲ兼備ヘル事ニ非ズ、穀梁傳ニ「智者慮、義者行、仁者守」トイヘルモ三卿ノ徳ヲ擧ルナリ、勇ヲ舍テ義ヲ擧ルモノハ、「孔子曰、君子有レ勇、而無レ義爲レ亂、小人有レ勇、而無レ義爲レ盜」、又曰、「勇而無レ禮則亂」凡ソ人學バザレバ禮義ヲ知ラズ、禮義ヲシラザレバ勇者ハ上ヲ害シ、怯者ハ難ヲ逃ル、ソレ故周禮ニモ、義ヲ以テ司馬ノ徳ト爲リ、無學ノ徒ニモ智ヲ好ム人アリ、仁ヲ好ム人アリ、勇ヲ好ム人アリ「孔子曰、好レ知不レ好レ學、其蔽也蕩、好レ仁不レ好レ學、其蔽也愚、好レ勇不レ好レ學、其蔽也亂」コノ三蔽ノ中勇ノ蔽最甚シ、故ニ勇ハ必ズ義ニ由テ然後ニ其徳全シ、サレバ此ノ三徳ハ詩書禮樂ニ熟シテ或ハ智・或ハ仁・或ハ勇・各其性ノ近キ所ヲ得テ國家ノ用ニ供スルナリ、徳ヲ成シ材ヲ達スルノ道、學問ヲ捨テ他ニ求ムベカラズ候、閣下ニモ古聖人ノ道ヲ御學ビ被レ成候バ、精シキ理モ御分リ被レ成、御家中御領内マデ漸々風化ニ嚮ヒ可レ申候、古今ニ渉リ和漢ニ求メ、サマ〴〵ニ思慮仕候ニ、學ヲ好ムニ優リ候好事ハ無ニ御座一候、是ニ因テ左方ニ一段ノ議論ヲ附記仕候」

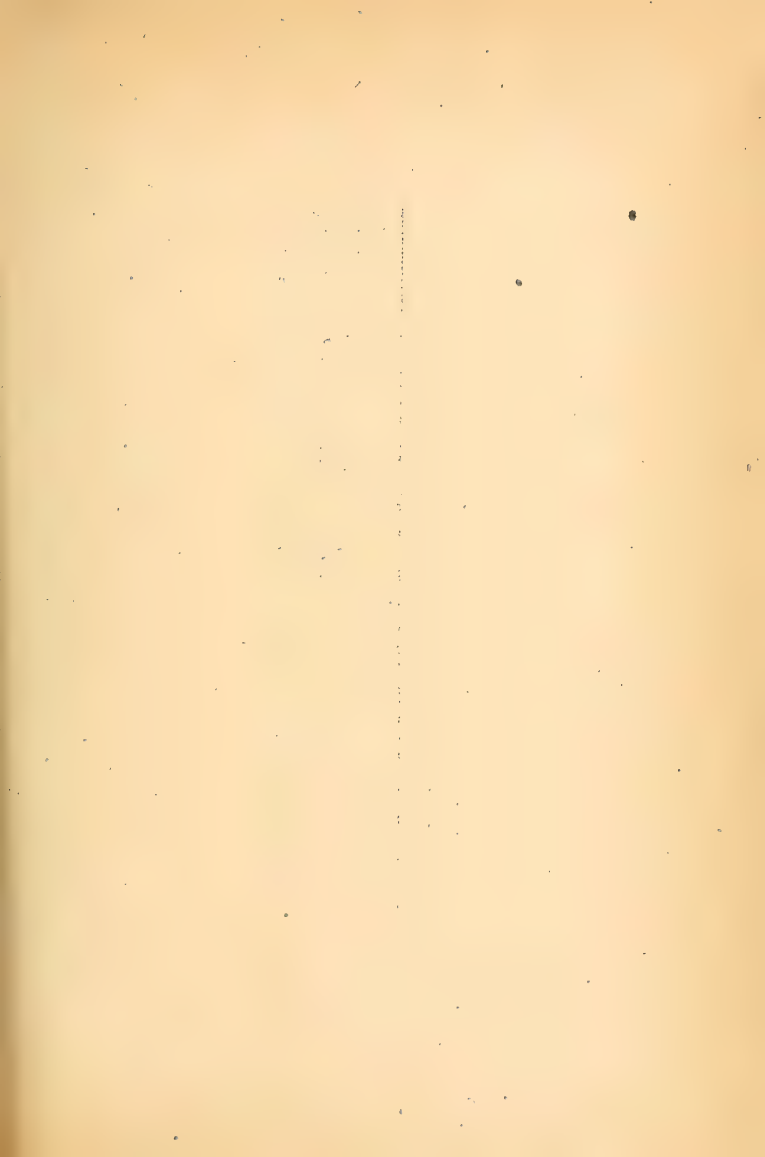
治ニ國家一之道、知レ人爲レ先、知二人之要一、近在二乎己一、己不聽不明、則逆レ耳之言不レ察、而負レ俗之行見レ棄也、不レ察見レ棄、則賢智將三自逃二焉、故人君之德、聰明爲レ先、聰則逆耳之言納焉、明則負俗之行取焉、齊桓於二夷吾一、晉文於二勃鞮一、皆去二其私怨一、而公二過之一者、蓋知下其過之有上レ利二於國一、而怨之無レ益二於身一也、由レ此觀レ之、人君之德、莫レ大二於知一、知莫レ大二於學一、記曰、好レ學近レ知、學也者、所下以開二心

知一生二聰明一也、故曰、致レ知在レ格レ物、物格而后知至、知至而后意誠、又曰、自明誠謂二之教一、不レ明二乎善一、不レ誠二乎身一矣、蓋知慮不明、則慾可レ克而意可レ誠矣、戰國之君、率無二學術一、而其言行暗與レ道符者、固歷二世故一、達二事變一、深知三克己之得レ衆、而縱欲之失二國也、昇平之君、欲レ敗レ度、縱レ敗レ禮、不レ知二恭儉之爲二何物一也、且其好惡大拂二乎衆一、然而衆猶阿諛取レ容、不三敢陳二其非一、苟非三學以開二其聰明一、何以治二國家一哉

右ノ一段ハ學問ノ身ヲ修メ人ヲ知ルノ本タル事ヲ明シ申候、國字ニ認候ヘバ冗長ニ相成リ候間漢文ヲ用ヒ申候、以上ノ事皆古聖人ノ道ニ相考ヘ、其旨ヲ以テ錄上仕候、聊臆見ノ論ニテ無二御座一候、此ノ書ノ旨能々御體認被レ成、學術御勵ミ被レ成候バ、誠ニ御家中御領內ノ弘福、朝廷ヘ第一ノ御奉公ト乍レ畏奉レ存候

市井臣　古屋　鬲　謹撰

奉呈　圖　書　侯　閣下

詢芻邇言終

經濟隨筆

經濟隨筆

事ニ觸テ感發スルヿアルニ任セテ書ツク、他日就ニ有道之人ニ而正レ之バ、其言ノ是非ヲモ知テ、進修ノ一助トセント欲スルノミ

○今世ノ人思フニハ、戰國ノ時ハ專ラ武力ヲ以テ爭テ、勝レル者國郡ヲモ得シヤウニ思ヘドモ、左ニハアラジ、皆仁智ヲ兼給ヘル人々ナリト見ユ、如何トナレバ、仁ニ非ザレバ親シカラズ、親シマザレバ人心服セズ、智ニアラザレバ事タラズ、勇ニアラザレバ事行ハレズ、智仁勇三者兼玉ハザレバ、天命ニ叶テ御子孫迄モ民牧トハ成給フマジキ也、然レドモ戰國ノ事ユヘ、跡ノ見ユルハ勇ノミ、ソレユヘ武力ノミニテ、今ノ諸侯ノ位ニ立玉フ樣ニ思ヘドモ、ソレハ心得違ナリ、然ルニ近年諸家トモニ困究ノ世トナリ、百年刑措ノ治世ニ不相應ナル行跡アルニ至ル、是其人ノ器ニアラザル故トモ云モノアルベケレドモ、予ガ見ル處、否ラズ、凡天地ノ間ニ生レテ人ノ形アル者ハ、古モ今モ人才ノ生レツキニサノミ違アルベカラズ、拔群ノ才ハ古トテモ亦格段ノ生付也、然レバ今ノ國君モ、今ノ當路ノ士大夫モ、既ニ天命ヲ得テ國君士大夫ト生レ得玉フカラハ、國初ノ國君、士大夫ト均ク、智仁勇ヲ兼給ヌル御生レ付ナリ、然ルニ國初ニ在テハ、アノ如ク草創ノ功ヲ成シ玉フニ、今日ニ在テハカク費弊シ玉フハ

何故ゾヤ、予僭踰ノ罪ヲ犯シテ是ヲ論ズ、コレ他ナシ、畢竟御志ノ立ト不レ立トニ在ノミ、然レバ今ノ費弊ハ今ノ國君士大夫ノ大ナル御恥辱ニ非ズヤ、匹夫ヲモ志ヲバ不レ可レ奪ト孔夫子ノ宣シモ、恥ヲ知タル者ハ如何ヤウナル卑賤ノ者トイヘドモ、三軍ノ將帥ニモ勝ツタリト稱美シタル意ナリ、志トハ恥ヲ知タルコト也、茲ニアッテ御憤ヲ御興ナクンバアルベカラズ、茲ニ在テ憤發シ玉ハバ、百事何ゴトカ成ラザラン、茲ニ在テ志ヲ立玉ヒテ、國初汗馬ノ勞ヲ思召ヤラレテ、其十分ノ一ノ勞ヲ今日嘗メ玉ハヾ、功ハ古ニ倍セン、茲ニ在テ憤發シ玉フハ、武運長久ノ御祈禱コノ上モナキコトナルベシ、御冥加ノ程最目出度カルベシ

○近年諸家ノ困究、其兆一朝一夕ノコトニ非ズト見エタリ、其困究ヲ弛メントテ、願クハ土着ノ風アリタキモノト、首ニ熊澤氏、次ニ荻生氏、ソノ餘白石君等論議アリト聞ク、然レドモ是ハ天下ノ評議ニテ、諸侯ノ預リ望ム所ニアラズ、諸侯ノ御家ニテハ今ノ時制ヲ守テ、百世當行ノ經濟ノ術アルベシ

○今ノ勢ニテハ年々困究シテ、後ニハ家中扶助スベキヤウナシ、其極ハ一日ノ食物モ乏シキニ至ルベシ、今時ナマ志アル國君士大夫モアルベケレドモ、勢ト云モノヲ改革セザレバ、勞シテ功ナカルベシ、コノ勢ト云モノ容易ナルコトニハ革ラルベカラズ、國家中興ノ業ニ志アル人コレヲヨクスベシ、國君中興ノ御志サヘ立玉ハヾ、相弼ルノ士大夫自然ト憤發スベシ、コレ同氣相求メ同聲相應ノ常理ナリ、忠誠ノ士ハ國アルコトヲ知テ我家アルコトヲ忘ル、コヽヲ以テ能國ノ爲ニ心力ヲ盡ス、コヽヲ以

テ下民其志歳ニ惰慢シテ、上下響ノ如ク應ズ、ソノ源ハ國君中興ノ御志ヲ立玉フニ出ヅ、國君中興ノ御志アルニ、上下響ノ如ク應ゼザルハ、若ノ美善ヲ固從スルコト不レ能ニヨル、コレ大夫ノ罪トモ云ベシ、國君ト大夫ト一體ニ志ヲ合セ給ハズシテハ其功ナルベカラス

○醫者ノ疾ヲ治スルニハ、先其病因ヲ洞見スト云ヘリ、今世困究ノ病因ハ驕奢ナリ、治世ノ弊下々マデモ物毎ニ美麗華奢ヲ事トセリ、是ヲ病ニ譬ヘバ、上下專言レ利ハ譫語ニテ、ソノ病狀ハ顯ハレテ見易シト云ドモ、天下舉テ病メルノ日ニ至テハ、明醫ニアラザレバ無病ノ人ノ常語ハ、一唯有二仁義一而已矣一ト云コトヲシルアタハズ、良醫ハ病狀ニ泥ズシテ、洞ニ其病因ヲ見テ之ガ主劑ヲ下ス、苟クモ安ズト云モノ大惡症ナリ、茲ニ至テハ扁鵲倉公モ藥匕ヲ捨テ逃去ベシ、サテ是ヲ治スル主劑ハ悔ノ一字ニアリ、易困ノ上六ニ曰、有レ悔征ケバ吉ト、コレ困ヲ出ベキ所以ノ道ナリ、悔コト眞切ナレバ心既ニ其本ニ復リテ、虛文ヲ棄テ朴素ニ入ル、易ニ吉凶悔吝ヲ云リ、吝ハ凶ノ漸也、悔ハ吉ノ漸也、不レ可レ不レ愼、儉約ハ衣服ノ如シ、夏ハ葛ヲ著、冬ハ綿入ヲ着ルノ理ニテ、衣服節ナラザレバ外邪從テ入、少儉約節制ナラザレバ、外誘ニ引サレテ日々ニ華美ニノミ入ル、通財ハ食物ノ如シ、多キハ飽滿シ、少ケレバ饑餓ス、從ニ命ハ食ニ在ト思フベカラズ、勸農ハ家宅ノ如シ、家宅有ザレバ身ヲ寄ベキ所ナシ、僥倖ヲ庶幾スルコト勿レ、コレ大禁物ナリ、米直段デモヨキカ、又ハ臨時ノ運上デモ出ルコトアラバ、又ケ樣バカリニテモ有マジキト希ヒ居ルハ、鄙諺ニ所謂熊坂ガアテ飲也、是故ニ勸農ノ家宅ニ

住シテ通財ノ飲食ヲ節ニシ、儉約ノ時服ヲ用ヒ、禁物ヨクシテ悔字ノ藥劑ヲ服用セバ、元氣日々ニ復シテ無病ノ人タランコト日ヲ算テ待ベシ

○困ヲ濟フニ、ソノ主劑ノ悔ノ字ニアルコトヲ知ラザレバ、苟安ト云惡症ヲ發シテ、鼻ノ先ノ手繰バカリニ目ヲ付テ、終ノ落着如何ニト慮ル心ナシ、先ヨシ〱ト惰氣ニ成テ、中興ノ憤發ハ聊モナキナリ、故ニ通財ノ食物ヲメッタニ貪リ、高利ノ鰒汁マデ食テ彌毒ニ中リ、儉約ノ衣服モ節制違テ人情ニ悖リ、外邪ニ侵サレテ病彌重ク、勸農ノ政ナキユヘ、滅他ニ年貢ヲシボリ取テ民疲レ、後ハ收納モ年年減ズベシ、コレ家宅修理ヲ加ヘザルガ如シ、故ニ風寒暑濕ニ感冒セラレテ、病日々ニ沈痼ス、儻是ヲ憂ル人アルモ、徒ニ其疾ヲウルサク厭フ心カラ、妙藥詮議ニカヽルモアリ、是等ノ人ハ元來中興ノ志ナキ人ナリ

○拔群特立ノ志アル人ニ非レバ、困ニ處シ得ルコト難ラン、困ヲ厭フベカラズ、厭フ心アレバ成功ヲ急ユヘニ、宋人ノ苗ヲ拔如ノ害アリ、シッパリト困ニ堪ルノ心肝要ナリ、君子ノ固ニ窮スト云フコトモ、コノシッパリナルベシ

○悔レバ改メント欲スル心生ズ、困ノ上六、動ケバ悔。有レ悔、征ケバ吉ト云テ、困ニ次ニ井ヲ以ス、井ハ本ニ復ルノ意ヲ取ト云リ、悔テ本ニ復ル、改ノ道生ズ、是故ニ井ニ次ニ革ヲ以ス、革ハ改革ナリ、革ハ決斷ニヨッテ行ハル、斷ハ心ノ切レナリ、心ノ切アジ鈍レバ革ルベカラズ、革ノ九五ニ大人虎變、

未ㇾ古有ㇾ乎トイヘリ、コノ心ノ切ァジ鈍キハ大ナル恥ナラズヤ
○儉約ト簡略ト辨別アルコトヲ知ルベシ、世間ノ人儉約トイヘバ、何事モチビ〳〵スルコトナリト思ヘリ、夫ハ簡略ナリ、簡略ハ為ベキコトヲモ可ナリニスルコトナリ、儉約ハ物ヲツヾマヤカニ捨タリ無キヤウニスルナリ
○儉約トイヘバ、臺所ヲ詰ルヿニ先取カヽル者多シ、是ハ第二ノ事也、儉約ノ最第一ハ玩好ノ物ヲ止ルコト也、然ニ人心ハ活物ユヘニ不ㇾ動コトヲ得ズ、サルモノナレバ何モセズニ居ルコトハ、貴モ賤モ成ヌモノナリ、故ニ善ニ動ザレバ惡ニ動ク、中奥ノ御志サヘ立バ、治道ニノミ勵ミ玉フユヘ、玩好ノ御暇ハアルマジ、且御慰モ治道ニ益アル弓馬ノ藝ニノミ遊ビ玉ハヾ、一家中ノ士氣モ振フヤウニ成ベシ
○儉約ハ定法ヲ立テ守ルベシ、奥表トモニ御儉約中、何ケ年ガ間ハ如ㇾ此守ルベシト初ヨリ年限ヲ觸知ラスベシ、上下貴賤トモニ事ニハ際限ナケレバ、人情堪難キモノナリ、上ヨリ如ㇾ此アラバ家中ハ自ラ行ハルベシ、艱難ニハ誰モ堪兼ルモノナリ、就ㇾ中奥向ガ處シ難キ最第一ナルベシ、是ハ君侯ヨリ奥様ヘヨク仰含ラレテ、君ノ中奥ノ御志ヲ奥様モ御志ト成レ、奥向ノ事ハ奥様ノ御志ヲ老女ヘヨク仰含ラレ、奥様ノ御志ニ總女中感服シ奉ルヤウニ無テハ、女中ハ制シ難カルベシ、若殿様幷御連枝方ヘモ是ニ准ジテ能々仰含ラルヽコト專一ナリ、大事ニ臨テハ戰時ノ政ニテハ功ヲ成難シ、故ニ行軍ニ

將ヲ選テハ兵權ヲ專ニセシム、中興ノ業モ小事ニアラズ、其成功ヲ庶幾セバ、事ヲ一人ニ任テ、在所江戶共ニ此人ノ取計ヒタルベシ、任ヲ受ル人モ成功ヲ志ニハ、一エン負任セザレバ功ハ成就シ難シ、賢明ノ君ハ其臣ニ委任シテ疑ザルベシ、既ニ臣ニ委任ストイヘドモ、是ヲ使フコトハ君ニ在リ、權ヲ貸ザレバ成功ナリガタシ、コレヲ貸ノ柄ハ君ノ手裡ニ在リ

○　百年昇平ノ化ニ慣テ人氣惰弱ニナレリ、コノ沿習ヲ改メザレバ事行レ難シ、衆人ノ耳目ヲ一新スルコトハ、委任ヲ得ル人ノ術ニアルベシ、而後法ヲ立テ是ヲ守ラシム、今ノ人法ヲ守ルコトヲ知ズ、コノ習氣ニテハ事行ハルベカラズ、委任ノ臣一タビ法出シテハ、君侯ト云ドモ衆臣ト共ニ此法ヲ守テ失スベカラズ

○　事ヲ發スルニハ害モ素ヨリアルベキナリ、一利一害陰陽ノ屈伸トテ、利バカリト云フコトハ無キ道理ナリ、中興ノ業小事ニ非レバ、ソノ事ノ上ニハ百千ノ害モ有ベシ、病人ニ鍼灸ヲ用ユル意也、終ニ平快如何ト眼ヲ付テ、今日ニ疑惑スルコト勿レ

○　大業ニ志ヲ立玉フ賢明ノ君ハ、御身ニ奉ゼラル、物諸事手輕クナシ玉フベシ、最初ニ論ゼル如ク、國初先君ノ浴雨櫛風シ玉フ辛勞ヲ思召ヤラル、御心サヘアラバ、五年ヤ七年ガ間ハ如何樣ニモ儉約ノ法ハ御守ナルベキコト也、本朝仁德帝民ノ饑寒ヲ愍ミ玉ヒ、三年租稅ヲ許サレ、宮殿ノ作事修理モナカリシカバ、雨露御衣ヲ犯シタルト云コト人ノ能言傳ル所ナリ、是ヲ以テ見レバ、御平生ノ調度御衣

裳ニ至ル迄、諸事手輕ナリシコト思ヒ遣ベシ、今ハ至テ下情ニ疎ク諸事手重ナルヲ大名ジヤ、サスガ御歴々ジヤナド、譽ルモノ多シ、カヽル愚頑ノ人ノミ左右ニ勤仕スルナレバ、下情ニ通ジ玉ハヌモ道理ナリ、或者大名ノ前ニテ云ケルハ、今ノ世ノ大名ニ生レザリシコトハ無上無外ノ大悦ナリト云ケル、其子細ハト御尋アリケレバ、彼者云ヤウ、十人並ニ勝レタル資質ニテモ寄テタカツテタワケニサレル也、人間ニ生テ一生涯タワケニテ果ナンコト口惜カルベシ、我ハ賤ク生タルユヘ、生レ付ノ才ハツクスナリ、ソレ程ノ悦ハナシト云ケルヨシ、其言滑稽ニ近シトイヘドモ、味ナキニシモ非ズ

○近年通財ノ道日々ニ否塞シテ上下ノ一難事也、コヽヲ以テ賢士ノ智力モ及ビ難シ、愚按ズルニ、財ハ天下公共ノ物ナリ、富モノ一人私セント欲ストモ得ベキニ非ズ、有レ富ト無レ富ト皆天命ノ然ラシムル所ナリ、「無レ資二於有一、有レ足二於無一」コレ又天道ノ常理ナリ、常道ヲ踏テ常理ニ處セバ、何ノ難ズルコトカアラン、カク否塞スルハ無レ富モノ常道ヲ不レ踏、常理ニ處セザル故ナラン、有レ富者ノ罪ニハアラジ

○財ヲ通ズルノ大道ハ人ヲタオスコトヲ不レ嗜ノ一言也、今ノ世ニ在テハ人ヲタオスコトヲ嗜ザル者能困ヲ出ンノミ、内外法律ヲ正シテ、入ヲ量テ出スコトヲナスハ、コレ人ヲ倒コトヲ不レ嗜ノ政ナリ、人ヲ倒コトヲ不レ嗜ノ心ヲ以テ、人ヲ倒コトヲ不レ嗜ノ政ヲ行ハヾ、天下ノ富人皆吾用ニ給センコトヲ欲セン、如レ此ナラバ誠ニ天下ノ通財ノ街道ニ立ガ如シ、或諸侯大公儀ヨリ御手傳ヲ仰蒙ラレシ

時、町人へ用金仰付ラレシニ、其町人ノ曰、急ニ御返シ有マジキナラバ御用立ベシト願ヘリ、尤ナルコトト御聞入アッテ、五年借居ニスベシト有ケレバ、其町人難レ有トテ差上ヌ、是ハ八九年以前ノコト也、コレハ何年過テモ御倒ナキコトヲ慥ニ呑込タル故ナリ、一時ノ手段ニテハトテモ百世ノ經濟ハ成難シ、千乘ノ國ノ盟ヲ信ゼズシテ一人ノ諾ヲ信用スルノ類、コノ公案ヲ看得スベシ

○今迄ノ借金ヲ忽ニ半減ニモ三分一ニモ減ズル仕方アリ、其仕方ハ利息ヲマケサスルコト也、利息ヲ減ジテ一割ノ者ヲ五分ニサスレバ、借金忽チニ半減ニナリタルト云モノ也、今ノ通財ノ利息ハ二割餘ニ當ルユヘ、五分ニサセタラバ四分一ニ減ジタルト云モノ也、此理ヲ推サバ如何樣ニモ仕方ノアルベキコト也、此減ジタル勢ヲ失ハズ興業ヲハカルベシ

○今ノ勢ニテハ年賦ト云フコトハ通財否塞ノ魁ナルベキカ、十年賦ナレバ一割ヅヽナリ、一割渡サルレバ年賦ヲ頼ムマデモ有マジ、スレバ始ヨリ僞ナリ、夫ヨリハ千金ノ所ヘ米二三十俵ナリトモ利息トシテ遣タラバ、元金ノ生々ヲ絶セザレバ、通財ノ道開ベキカ、是等ハ一概ニハ論ジ難ケレドモ、人ヲ倒スコトヲ不レ嗜政ヲナスノ一術ナリ

○今ノ世ノ風說ヲ聞ニ、十萬石ノ諸侯ノ家ニハ二三十萬ノ借金アリト云リ、夥シキコト也、年々ノ收納ニテハ年々ノ賄ニ不足スルトミヘタリ、然ルニコノ後不足セヌ樣ニ賄ヒテ、此ノ借金ヲ殘ラズ濟スヤウニハ如何シテナルベキヤ、眞志アル人コノ公案ヲ看破セヨ

一　近年ハ御歷々ノ御身トシテ、卑賤ノ町人ヘ御手自賜ナド給ハリ、御盃マデ下サル、ヤウノコト聞及ベリ、如何ニシテモ口惜キ次第、上下尊卑ノ辨別モ今ハナキニヤ、其勢カラシテ御家老御用人衆禮辭ノ厚キ推シテ知ベシ、富有ノ町人ハ今ノ風俗ニ習テ、我身ノ程ヲ忘レテ斯アル筈ノ者ト思ヒ、家老用人衆ヘ對シ持恭ニ打意氣アリ、四民ノ下ニ立ベキ身ヲ忘レタル淺猿シキ事也、何ゾ殿樣御用金ト唱ルカラハ、此詞相應ノ御アヒシラヒニ成ヤウニアリ度モノ也、中興ノ基業ヲ立玉ハヾ、風儀一新スベシ、上貧ク下富ミ、下富メハ財權下ニ移ルト古人モ論ジオケリ

一　古昔ヲ聞ニ、郡縣ノ世ト封建ノ世ト云コトアリ、愚按ニ、今ハ此二ツヲ兼玉ヒテ草創シ玉フ事ニテモ有ンカ、諸侯モ此意ニ則トリ玉ハヾ益アルベシ、此意ヲ以テ視レバ、今日諸家ノ御暮シ方アマリ手直ナリ、勤番同樣ノ御心得ニテ、物事今少シ手輕ニアリタキモノカ、斯ル勢ニテハトテモ收納ニテハ不足スル事ニテ、年々困究彌益ナルベケレバ、志アル君侯士大夫省悟アルベキノ時ナリ

一　世ヲ患ル忠誠ノ士ママ有レ之トイヘドモ、一木ノ力ヲ以テ大厦ノ顚ルヲ支ヘ難シ、是理ノ必然ナリ、然ルニコノ人學ヲ知ヤ不レ知ヤ、學ベル人ハ人情事變ニ通達スル故ニ能人ヲ感化ス、學ヲ不レ知人ハ己ガ私ナキニ任セテ一偏ニ押ヤラントス、學ベル人スラ王荊公ノ如キアリ、況ンヤ無學ノ王荊公ヲヤ、中興ノ業ニ志アル人能自ヲ反省スベシ、今時少シク志アル人コノ病アリ、其人ノ量ヲ視ニ足レリ

一　下問ニ不レ恥ナド云コトモ常々云コトナレドモ、爰ニ一ツノ惑アリ、其惑トイフハ自ラ思ニ、敢

テ下問ヲ恥テ問ヌニモアンネドモ、問タラバトテ其人ニ智識アルニモ非ズ、智識アル人ナラバ、如何ナル卑賤ノ人ニモ誰リテ問ベシト此樣ナル心位アルモノナリ、是大ナル惑ナリ、愚者ニモ千慮一得トイヘバ、九百九十九ハ埒モナキ事トミヘタリ、志アル人ハ九百九十九ノ埒モナキコトニハ目モ觸ズ、唯一ツノ善言ヲ取リ用ンコトニコソ、是何故ナレバ、治ノ道ニ心ヲ盡シ玉フ故ナリ、善ヲ嫌フ者ハ無レドモ、九百九十九ノ埒モナキコトヲジツト聞テ居ルコトガナルマジキナリ、然ラバトテ人々ニ逢テ機事ヲ泄スコトニテハアルマジ、治道ニ心ノ拔ヌコトヲ言タルコトナリ、コヽガ眼ノ着所ナリ、或代官支配下ノ扱ヲ仕損ヒ、百姓大勢詰カケ傲訴ニ及ベリ、如何樣ニ慰レドモ聞入ズ、今ハスベキヤウナク切腹セバヤト既ニ其用意セシガ、去ニテモ我日頃書籍ノ片端ヲモ見タルニ、今ノ業ニ益ナキコトコソ口惜ケレ、サラバ一遍尋テソノ上ニテ心靜ニ切腹ヲモセント思ヒ、先ヅ論語ヲ取出シテ學而ノ首章ヨリ日ラク探ニ見ケルニ、知ヲ爲レ知ト、不レ知ヲ爲レ不レ知ト云ニ至テ、不レ覺掌ヲ打テ歎賞シ、夫ヨリ表ニ立出テ、大勢ノ中ヨリ年老タル百姓ヲ四人招テ、今日ノ處置如何スベキト懇ニ問ケレバ、其眞實ニ感ジケン、此者共衆情ヲ言述、如レ此セヨト言教ケル、其言ノ如クセシカバ、事故ナク靜リケルトナリ、カク手詰ナル場ニ至テハ不思議ナルコトモ有ルモノ也

○或人人才ノ乏コトヲ歎ク、一己ニ志アル上カラハ尤ナルコト也、然ドモ數十年來因循苟且ノ習氣ニナレテ、經濟ノ志ハ夢イサヽカナキコトナレバ、今更是非ニ及バヌ次第ナリ、志アル人々今日ヨリ

人才ヲ教育スル術ヲ始メ、成功ハ十年ノ後ヲ俟ベシ、庭前ノ花木サヘ其灌漑ヲナサヾレバ、他日濃香氣々タルコトハ望ムベカラズ、況ヤ人才ヲヤ、今ハ此教絶タレバ、宜ナリ人才ノ乏シキコト、七年ノ病ニ三年ノ艾モナホ止ニハ愈ルベシ、今日ヨリ教養ノ術ヲナサバ、コレ程手近ニ成功ヲ見ルコトハ又アルマジキ也、帝堯ノ舜ヲ庶人ヨリ擇ミ擧玉フモ、初ヨリ天位ヲ讓ント思召タルニテハ有マジ、今ノ時世ヲ以テモ孝悌忠信ノ心アルモノ卑賤ノ中ニ間アリ、是ラヲ取立テ召用バ、其中ニハ年ヲ經テ用ニ立ツモノアルベシ、ヨシヤ一役ニ幹タルニ足ラズトモ、賊非ヲ犯スコトハ稀ナルベシ、今ノ卑賤ヲ見惡シトシテ棄ルハ惜キコトナリ、居ハ氣ヲ移シ、養ハ體ヲ移スト云ナレバ、人ノ居リ場ニテ才ノ働キモ違アルモノナリ

○學校トイヘバ書籍ノコトニハヤナルナリ、是モ今ノ風俗ナリ、正眞ノ學校ハ國家ノ元氣ヲ補助シテ、始ヲナシ終リヲ爲ス者也、コレ無テハ叶ハザルベシ、正眞ノ學ハ古ノ舜ノ契ニ命ジ玉ヘル五敎ヲ敷ノ學ナリ、今ノ文雅風流ノ學ハ國家ノ元氣ニ補少シ、コノ故ニ武家ニ取用ルニ用ナシ、古昔契ノ司リ玉ヘル學ハ善キ武士ニナルコト也、今ノ世ノ風流ヲ以テ學トスルヲ見ルニ、少シク文字モ讀レバ武士ノ勤ヲ厭フ心アル者多シ、文章詩賦ヲ事トスルハ浪人儒者ノ所業ニテ、志アル武士ナドノ儒者メキタルハ入ザルモノカト覺ユ、今ハ人才ヲ教育スルコト廢レタル故、學問ノ道浪人ノ口スギニ落タリ

○人才ヲ育スル學校ノ制ヲイハヾ、堂上ニ文ヲ講ジ堂下ニ武ヲ講ズベシ、文トイフハ文字ヲ讀バカ

リノコトニ非ズ、其制ハ如何ニモ無造作ニナスベシ、江戸邸ニテ興シ玉ハヾ、明キ長屋一軒ニテ事足レリ、文學モ上ヨリ法ヲ出シ玉ヒ、何々ノ書ヲ讀ベシト、其書ヲバ讀ネバナラヌ風俗トスベシ、書物多クハ入ヌ者ナリ、其書ハ五倫五常ノ道筋明ナル書、次ニ經濟ニ益アル書ナルベシ、其餘ハソノ人ノ好次第ナルベシ、算學・地方・水利・書札・禮法コレラノ類皆文學中ノ事ナルベシ、堂下ヲ武場トシテ弓馬鎗劍術ノ類ヲ學バシム、如レ此教導ノ法ヲ立テ玉ヒ、年ニ兩三度ヅヽモ御聲ヲ掛ラレタラバ、一家中勇ミ勵ムベシ、其中ニテ才氣ノ殊ナルヲバ意ヲ加ヘテ御教育アラバ、成功疑ナカルベシ、今ノ時一日モ早ク建立シタキハ、人才教育ノ道ナリ

○　人々其職ノ本分ヲ能覺悟スベシ、凡何ノ職ニテモ「天工人其代レ之」ト云ガ本分ナリ、我私スルコトナラヌコヲ知ベシ、然ルニ其職ノ勤方ハ人々資質ノ才ノ働ナレバ、俄ニ諸葛武侯ノヤウニ成度トテナラレモセマジキナリ、只何事モ本根ト枝葉トアルモノナレバ、先本根ヘ目ヲ付ベキ也、凡人臣タルモノ忠義ト云ガ本根タルコトハ誰モ知タルコトナレドモ、却テコヽニ油斷アリタガル也、心掛ヨキ人ハ平生自ラ勵ムベキコト也、コヽニ勵ム志サヘアラバ、才モ次第ニ長ジテ大功ヲモ立ベキナリ、志アル人ハ傍輩中ノ惡キナド云コトハアルマジキコト也、昔後醍醐帝八尾別當ヲ賴思召テ召レケルニ、八尾ガ勅答ニ、楠正成ハ累代ノ讐ナリ、コレヲ得テ甘心セバ勅ニ奉ゼント也、楠公コレヲ聞テ召レヨト云、八尾勅ニ應ジテ參内セシカバ、正成佩刀ヲ脱シテ八尾ニ配膳ヲナシタリ、八尾コレヲ見テ大ニ感ジテ

云、楠氏ハ眞ノ忠臣ナリ、我何ゾ恥ザランヤト、是ヨリ無二ニ云合セタリト也、此事虛實ハ暫ク閣キ、能楠公ノ私ナキコトヲ明スニ足リ、今ノ人楠公ノ意ニ則バ上下何ゾ一和セザラン

○河越侯ノ家臣河口三八ノ書レタル、政事說トヤランイヘル假名書ニテ二三枚アルモノヲ先年覽タリ、其大意ハ政ト事トヲ分テ論ジタルモノニテ、政ハ國家ノ經濟ナリ、事ハ君侯ノ身ニ奉ズルトコロ也、夫ヲ一ツニ心得、且治道ニ倦タル時ハ、家風自ラ政ハ輕クナリ、事ハ重クナルト云コトヲ論ジラレタリ、何レ是言ノ如ク表向ノ御仕置筋ヨリ、御身ノ廻リノ御用掛ヲ大切ニ取アツカフ人情ニナリタルヤウナリ

○或町人ノ云ク、人ノ身上ノ廻リメニ成タルトキニ、是ニテハ成ヌト思ヒ、年々物事內端ニスルヤウニ仕タル分ニテハ再興成難シ、初ニ思切テ內端ニスベキナリ、是ヲ譬テイハヾ、階子ヲ下ニ今年一段下リ、又來年一段下ルヤウニテハ、又上リ詰ルコトハ成ヌモノ也、初メニヅカリト下ヘ下ルト、勢ヲ持ツ故又上ラレルナリト云ヘリ、是言俚言トイヘドモ大ニ益アル言ナリ、他ヨリ見テハ過タリト見ユル程ナラデハ、內ニ勢ヲ含ム程ノコトハ有マジキ也、今十萬石ノ家ニテハ、君侯ノ身ニ奉ジ玉フトコロハ五千石ノ御旗本ニモ准ジ玉フホドノコトニ非ンバ中興ノ業ハ成ベカラズ、表立タル御格式ハ闕レヌコトナレドモ、御一分ノコトハ如何樣ニ成玉フトモ不レ苦コトナルベシ、兎ニモ角ニモ上ニ化スル下ナレバ、君侯ノ御志次第ニテ下ハイカヤウニモ行ハルヽ者ト見ヘタリ、楚王細腰ノ女ヲ愛シテ、楚

國食ヲ絕タル女アルノ類推シテ知ベシ

○郡奉行代官ハ勤農ノ職ニテ古ノ后稷ニ則ベシ、スレバ農民ヲ敎養スルガ本分ニテ、年貢ノ取立ヲ掌ル役ナリ、然ニ今ハ代官トサヘイヘバ、年貢取立ノコトバカリヲ第一トセリ、但シ代官ハ年貢取立ノ役人ニテ、郡奉行ガ后稷ノ職ジヤト云ベキカ、然ラバ今ノ郡奉行ノ勤方疎ナルコト也、其職ノ分チハ兎モ角モ定メヤウ有ベシ、唯勸農敎養ノ意ナキコトヲ憂ルノミ、今ノ代官衆コノ意アラバ、鄕中農業ニ精ヲ出スコトニナリ、人ガラモ自ラヨクナルベシ

○井田ノ事古聖ノ法ナレバ、後世トイヘドモ敎化徧キ後ハ行ハルヽコトモ有ベシ、然レドモ古ノ如キ田地ノ形ハナスベカラズ、聖人ハ時處位ノ至善アレバ、其時代ノ制作アルベシ、今日トイヘドモ古ニ則ツテ其意ヲ行ハヾ利益少ナカラジ

○農ハ國ノ本トイヘリ、誠ニ百姓困窮スレバ上亦取立ベキ物ナキ故、上ノ困窮ニナルナリ、近年打續キ收納少キコトハ年ノ豐凶ニモヨルベケレドモ、勸農敎養ノ政ナキ故ニ、民罷レタルト、風儀亂レテ惰農多クナリタルト是二ツノ内ナルベシ、當職ノ人徒ラニ歲ヲ罪スルコトナク反省スベシ

○仁政トサヘイヘバ年貢ヲ減少ニトルコトトノミ思ヘリ、故ニ是ホドニ取立テサヘ、收納少クテ上ノ用度不足也、コレヨリ取箇ヲ減ジテハ猶々上ノ困リ也ト思ヘリ、夫故今ハ仁政ト云コトハ除モノニシテ置ナリ、是人情餘儀ナキコトナリ、畢竟仁政ト云コトヲ心得違タル故ナリ、愚按ルニ、仁政トハ萬

物各其安ズル所ヲ得ルコトナレバ、イツノ時世ニテモ行ハレズト云コトナシ、不レ行ハ仁政ト云ニハ足ラズ、今時ノ儘ニテ取箇バカリヲ滅ジテハ、上ノ用度不足ナル而已ニ非ズ、下民ノ爲ニモナルマジキ也、今迄ノ年貢取立ノ高ヲモ減少セズシテ、百姓ノ困究ヲ救フ仕方アルベシ、是上ニ費ル處ナクシテ下ニ救フ所アラバ、仁政ニ非シテ何ゾヤ

○郡奉行代官桒勸農教養ノ意サヘアラバ、定免ノ法コソ仁政ニテ、假ニ井田ノ遺意モアルベシ、如何トナレバ、上下トモニ各其利ヲ利トシテ事公ナレバナリ、事公ナレバ上下共ニ人心正クナリ、風俗モ厚クナルモノ也、人心正ク風俗厚クナラバ、是程能コトアルマジ、毛見ノ法ハ是ニ反セリ、然レドモ數十年來沿習シテ上下共ニ其弊ヲ知ラズ

○下民ハ愚ナル者故ニ、上ヨリ導キ玉ヒテ勢ニ乘玉ハズンバ働ナキモノ也、看ス／＼損徳アルコトニテモ、自分カラスルコトニハ心付兼ルモノナリ、定免ノ下ノ百姓ノ情ヲミルニ、今歳不作ニテハ年貢ヲ足サネバナラズ、豐作ナレバイクラナリトモ己ガ作リ出スホド徳ナリト心得テ、春耕ニモ夏耘ニモ、精力ノ入ヤウ格別ナリ、植付ルニモ地ノ植ラレルダケハ植付ル物ナリ、毛見ノ地ノ情ハ是ホドノ勵ミハナシ、是ハ毛見ト定免ト年限アッテ、代ル／＼行ハレタル土地ノ百姓ニトクト聞タルコト也、コノ百姓云ケルハ、ドチラヘシテモ精ヲ出スガ能キコトナレドモ、毛見ノ年ハ定免ホドニ思ヒ入ナキ者也ト云ヘリ

○小役人ノ多ク郷中へ出入スルコトハ、殊ノ外下ノ損アル者也、定免ナレバ是等ノコトニモ違アリ、總テ口ニ立ヌ事ニ使役セラレテ農事ニ妨ル事、上ノ利ニモアラズシテ下ニ費ルコトアリ、此等ノコトハ勸農ニ意ヲ盡ス代官衆アラバ能知玉フベシ

○定免ナレバ人心正クナルト云ハ、如何トナレバ、今迄毛見免ノ上下ノ人情ヲ以テ知ベシ、大方ガ上ノ情ニテハ百姓ト云モノハ兎角横着ナル者ニテ、相應ニ出來タル歲ニテモ、不作々々ト云立テ隱ヲル不屆ナル者也ト、詞ニハ出サネドモ心ニハ民ヲ惡ム意アリ、夫ユヘ百姓メラニ欺カレシ共欺ヲ見出サントト察知ヲ用ヒラルヽ也、成ホド夫ニ違モ無ク隱スモノ也、サテ又下ノ情ニハ上ト云モノハ兎角ヒスラコク、有次第絞リ取玉フ者ゾ、隱サレ次第ニ隱セト云樣ニ成ヲル也、是ヲ以テ觀レバ、上下利ヲ相爭ムト云ツベシ、如何ゾ斯ル上下ノ情ニテ、百世ノ後一旦緩事ナドアランニ、誰トトモニ國ヲ保玉ハンヤ、定免ナレバ下モ上ヲ欺ノ邪念消シ、上モ下ノ欺ヲ禦ノ患ナシ、上下利ヲ公ケニ取テ、人心正シカルベシ

○兎ニモ角ニモ一法ニテハ民情居付テ弊生ズル者トミユ、今迄毛見免ノ國郡ナラバ定免ヨカルベシ、亦國初ヨリ定免ノモリニテ、年ノ豐凶ニヨッテ用捨シ玉フ國郡モアリ、是等ハ又手段アルベシ、民情居付ヌヤウニ引廻スコト肝要ナリ

○定免ヲ行ンニハ年季ヲ限ルベシ、夫モ上ヨリ仰付ラレタルハ惡シ、先ヅ初メニハ一村カ二村カ、

高ハ三百石ニテモ五百石ニテモ、何程ノ免ニテ三ヶ年定免ニアソバサルベキカ、御請スベキヤト申聞スベシ、夫ニテ其村ニ益アルコト目前ナレバ、其年ヨリハ近郷悉ク願フモノ也、兎角年限ハ短キガヨシ、二年三年ニスベシ、年季過テ又年季ヲ願ハヾ、免ノ高下ハ其郷村ノ民力ニ因ベシ、兎角勸農ノ政ニテ民心ノ居付ヌヤウニシテ、惰農ヲ變ジテ上農ト爲スベキ術肝要ナリ、親ノナキ孤ハドコヤラコセテ潤澤ナキ者也、親ノアル子ハドコヤラ貧テモ潤澤アル者ナリ、民ノ父母タル御方ハ御心得アルベキコトナリ

○新田開發ノ事ハ輕々シク成ベキコトニ非ズ、是モ民ヲ教育シ玉フ御心ヨリ成レタラバ過チ少カルベシ、何ントナレバ、田面ニスレバナル處ヲ、天地開闢以來セズニオクハ、ドコゾニ其子細アルベキコト也、天地開闢ノ後人物初生シテ、既ニ田作ルコトヲ知リタルトキ、マヅ其作リ能水掛リ等ノヨキ地ヨリ初タルベシ、其後次第ニ開發シテ如レ是世界ヲナセリ、然ルニ今マデ殘リタル地ナレバ其子細アルコト也、心ヲ公ニシテ天地ノ間ヲ論ズルニ、近世諸國ニ新田多ク出來タレドモ、何レモ其近郷ノ古田ノサヽハリニナラザルハナシ、新田開テ古田ニ水旱損ノ憂アルコト眼前也、天地ヲ一マイニミル眼カラハコノ新田ヨリ出ル米ト、古田アレテ用ニ立ヌ所ト差引シタラバ、サノミ利德アルマジ、然ルニ是古田ニアリツキタル民ノ數イクバクゾヤ、仁者ノ心忍バザルベシ、モシ新田開發ノ事アラバ、先此憂ヲ先ニ議スベシ、小サキ了簡ニテハ見エベカラズ、我領分バカリノコトニ非ズ、此ニ利アリトモ彼

ニ害アランコトハ可レ爲コトニ非ズ、禹ノ水ヲ治メ玉ヘル如クナラズンバ、眞志アル人ノ事業トハ云難シ、畢竟新田開發ニ心付ク人ハ、其地ノ田ニ成カ成ヌカト云コトバカリ謀テ、他ノ害ニ心付クコト淺キ也、爰ニ欲スルコトアレバ、心片寄テ他ノコトハ見ヘ難シ、鹿ヲ逐フ獵師ハ山ヲ見ズトイヘル諺ノ如シ、故ニ新田開發ノコトハ輕擧スベカラザルモノ也

○古昔九年ノ大洪水ニテ、天地未曾有ノ大饑饉ナリシニ、禹・皐陶・益・稷四百餘州ヲ馳廻リ、艱難困苦ノ御世話ニテ、烝民粒食スル樣ニ成タルト也、後世勸農ノ職タル人モコヽニ主意ヲ立玉ハヾ、禹稷ノ徒タルベシ

○經書ノコトハ何レノ書トテモ言モ更ナレドモ、就レ中尙書ハ經濟ヲマツスグニ書載タレバ、急ニ覽ルベキ書也

○近世ハ虛文日々ニ盛ニシテ、實德日々ニ衰フト云ツベキカ、片田舍マデモ華奢ニバカリナリユク也、風流華奢ニテ鉏鍬把ラルヽ者ニ非ズ、俳諧ナドヽ云モノハ惰農ノ魁ナリ、勸農ニ志アル人心ヲ用ユベキコトナリ

○百姓ノ中ニ小商ヒヲスル者近世村每ニ多ク成タリ、善カラヌコト也、此風俗モ改メタキモノ也、百姓ニハ農業バカリサセタキナリ、政ヲ執ル人ノ心ヲ用ユベキコト也

○近習ハ君ノ耳目ナリ、善良ナル人ヲ用ユベキコト也、中興ヲ謀リ玉フ君ハ猶以テノコトナリ、才

短ナリトモ中興ノ志アル人ハ、質朴ナル人ヲ擧用シ玉ハヾ宜ルベシ

○學術ニ志ヲ立テ其志ヲ持ト云コト有、志ヲ立ルハ樹ヲ栽ルガ如シ、持ト云コト添木ヲ結ガ如シ、コレナケレバ風雨ノ爲ニ覆サルヽ、人君モ亦中興ヲ志シ玉フトモ、侍臣ノ風雨ヲ禦ノ助ナケレバ、朝ニ立テ夕ニ覆ラン

○古人云、兩陣相接ノ間心動者先敗ト、コノ言ヲ以テミレバ、一將ノ心即チ三軍ノ心ト見ヘタリ、然レバ今日中興ノ志ヲ興シ玉フニモ、一戰場ノ意ヲ以テセバ上一人ノ御志立バ、下一家中ノ志モ立ベシ、上一人怠リ玉ハヾ下一家中モ怠リスサマン

○今世ニテモ中興ヲ志シ玉フ君モアルベケレドモ、補佐ノ良臣ニ事闕玉フベシ、然レドモ御志次第ニテ下ハ憤發スベシ、善カラヌ引言ナレドモ、甲州ニテ晴信公ノ父信虎公ヲ追出シ玉フ事ヲ以テ言バ、最初晴信ノ心ニ出テ千計萬計盡サルヽコトナラメ、終ニ追出ノコト成就シタルナリ、是一擧信虎人心ヲ失ヘルヨリ事起トハイヘドモ、甲州一國晴信ニ心ヲ合セタルニテモアルマジ、サテ追出ノ後一兩年ノ間ハ、晴信ノ心ヲ置レタル者モ有ツラン、此一擧ノ始末晴信ノ心盡シ思ヒ遣ラレタリ、勇猛ノミニテ心服ハサセ難カルベシ、飯富板垣ノ黨トイヘドモ、晴信厚ク賴ミ思ハレメルベシ、職ヲ守テ力ヲ盡ハ臣子ノ本分ナレドモ、希代ノ功ヲ立ルコハ常理ヲ以テ責ガタシ、君侯ヨリ情義ノ恩ヲ以シ玉ハヾ、忠臣晝夜ノ星ノ如ク出ベシ

○人才敎育ノ術ハ一日モ早ク建立シタキコト也、是ハ家中ノコトバカリニ非ズ、人君ノ御身ノ上ニモ入用ノコト也、今モ御歴々樣ニモ御學問ナサセラルヽト云沙汰モアレドモ、其筋ヲ聞ケバ詩賦ノコトノミナリ、最モ在內ノコトナレドモ、最第一ノコトニハ非レバ、先治國經濟ノ大本ヲ學ビ玉フ樣ニ有度者ナリ、五常ノ道ハ日月トトモニ萬古地ニ墜ザレドモ、日月ニ雲霧ノ障蔽アルガ如ク、此ニモ亦時トシテ湮晦ノ憂アリ、今ノ時ヲ以テ觀ルニ、治上ニ隆ナリトイヘドモ、下民ノ沿習コレガ隔蔽ヲナシテ、五倫ノ中朋友ノ一倫其淪晦尤甚シ、殆ド欠闕ニ近シ、學問ノ道サヘ闢タラバ倫理整フベシ

○咬ニ得菜根ヲ則百事可レ做」ト汪信民ノ語面白シ、誠ニ是言ヲ味フベシ、一國ノ主トシテ躬布衣ノ行ヲ履玉ハヾ何事カ成就セザルコトヲ憂ンヤ

右丙子秋九月識

經濟隨筆 終

富強六略

高野昌碩著

富強六略

高野昌碩 著

節儉第一

一　臣謹で古今歷代之盛衰を傳承候に、亂世之弊は戰爭之爲に其國を困ましめ、治世之弊は奢侈之爲に其國をくるしましむ、治亂世を異にし、戰奢事ことなりといへども、其困ましむる所以は一なり、當今御治世二百年之久しき、目に干戈を見ず、四民太平の化に浴して、まことに難レ有御代に候得共、奢侈之弊日々に長じ、月々に盛に相成、國これが爲に虛衰する事、只今四海一同之大病と相見へ候、御國内も又有之病毒に染られ、百姓困窮に及候に付、是迄每度御世話も被レ爲レ在候得共、今以止事なく、近年別て增過仕候、就レ夫下樣之儀奢侈を第一に相禁じ申度由申上候者も有レ之候、臣畎畝之中に成長仕候故を以、奢侈御禁制之利害御尋御座候に付、退て愚按仕候に、當時之人情にては禁と不禁との間に可レ有レ之儀と奉レ存候、凡そ奢侈之根本と申は、一朝一夕之事にあらず、乍レ恐御先々代樣以來、何

事も江戸之風俗に移り、士大夫上にこれを好み、商人下にこれを誘ひ、滋蔓浸淫して御國内困窮之基と相成候樣に相見へ申候、すべての儀上より成し下すべし、下より成し上すべからずと承傳候得ば、下を御禁じ被ㇾ成度思召に候はゞ、先御膝元より御調被ㇾ成候樣にと奉ㇾ存候、凡節儉質素之儀に相限不ㇾ申、是迄種々之御觸事大概皆御家中より崩れ初、夫より鄕村に流れ下り申候樣にのみ相見へ候、扨其本根を正し候得ば、上下之人情にて可ㇾ有ㇾ之候、人情和同不ㇾ仕候所へ御法度を被二仰出一候ては、外面は何分かしこまり候ても、内心は相服し不ㇾ申、世に所謂三日法度と申物に相成候、抑人情を捨て御法を御賴被ㇾ成候事は、たとへば流れを止めんと欲して堤を築くにひとしかるべく候、何程堤をかたくいたし候ても、其水上を塞ぎ不ㇾ申候ては、或は橫に溢れ、又は上に逆して、却て大害を生ずる物に候、いはゆる人情は水、法度は堤にて候、水を鑿らずして堤を御賴被ㇾ成候ては、極て橫溢上逆之罪人のみ多く出來、其果ては汎濫淼漫之患に相成可ㇾ申哉も難ㇾ計候、依てよく〳〵其病根を御探、人情より御調被ㇾ成候事、當今第一之急務と奉ㇾ存候、扨又人情和同之事、士民衣食之爲に困しみ候樣成儀にては、決して相行はれ申間敷候間、先國を富し候事を仕度候、管仲などは此術に早く目が付候故、齊は大國なれども人情よく和同いたし、九合一匡の大物入有ㇾ之候ても下をくるしめ不ㇾ申、其美談世々可二申傳一候、凡そ富國之術只今迄之御趣法、いろ〳〵御手を盡し被ㇾ成候得共、下より見上候ては、何れも商人山師などのやうなる事のみにて、長久之本を捨て目前の小利に走り、一端御益之樣

に見へ候ても、世諺に帳面よしの錢不足と申樣成儀にて、御趣法之度ごと上之御不益に計相成候樣に奉レ存候、乍レ去上にも御仁心不レ淺、士民は救之御手當被レ爲レ在候得共、思召樣御屆被レ成兼候御時節に候得ば、是又御指支奉レ恐察レ候、依て急卒に奢侈御省被レ成候事は、先御家中之面々土着之法御立被レ成候樣可レ然奉レ存候得共、古人之所謂祖宗之法を變ずるの道にて、御果斷相成兼可レ申歟、存寄之儀申上候樣御達に付、僭越不恭之罪を相忘れ、在之通言上仕候

開荒第二

一　開荒と申は荒地をひらく術に御座候、臣が申上候荒地は、世に所謂荒地とは事替り、結構成御田地を散田と申に仕立、御年貢を上不レ申、やはり永久之荒地同樣に仕る事に御座候、此散田凡そ村々相ならし、御領内へ相かけ候はゞ、夥敷御損毛に被レ存候、乍レ去右散田と申儀御制禁に候間、いろいろに名をかへ、不作之由に申立候間、定て左程之儀とはしろしめされず候得共、御藏入は是非夫だけに減少仕候儀と相見へ申候、扨右散田何故結構成良田を作りあらし候哉と相尋候所、上田にて御取付高免御法之通相納候ては、百姓之利德無レ之難儀に及候間、しるし迄に苗をはさみ、草も不レ取苗もかけず、扨秋に成候得ば、場所により蘆葦など生しげり居候、其田地を檢地に見せ候得ば、元より米らしき物更に無レ之候間、御年貢は皆引に相成候、其跡を荊捨候へば隙費候まゝ其なりに指置、來年も又右之通りに仕立申候、其内に冬に至るを待、右之草むら枯果候時節、火を付燒捨候者も有レ之よし、

是即御勝手向御不如意根本之患と相見へ申候

一又一種之姦民有レ之、先づ壹斗蒔之田地なれば、八九升蒔之分をばよく耕し、よく歯し、苗をも早く植付、熟作仕候樣にいたし、扱早く苅取よき籾を取入、殘一二升蒔之場所わざと惡作に仕立、檢見立と號し苅殘し置、それを檢見に見せ候間、元より不作旁のみに候まゝ皆引に相成候、依て右田地一枚之内、先に早く苅取候よき籾八九升蒔之分は、百姓方にて無年貢作り取之姦計を相設候由折々承及候

一往古田畑上中下之位を定め候事は、成程動きなき鑑識之由にて、上田と申は、大概水旱之患に逢はず、膏腴之地にて熟作仕候場所に候間、其昔は農家珍寶之如く、實之上田と尊び大切に仕候由之所、寛永年中御繩入以來、大抵五割增にも相成候歟之由申傳候、依て作之上田所持之輩一向利德無レ之、民間之困窮に相成候故、他人に遣し度存候てももらひ人無レ之、無二是非一右之上田へ金子を添て讓り申事に成行候、乍レ去上田讓り受候程之百姓、是又極窮者に候間、後之苦痛を不レ顧、當分之金子見込みもらひ取候故、右中上候通無レ據散田に作りあらし、年々御年貢不納にのみ仕立申候

一近年百姓方にて召使之下人身之代金御かし出し、其者居住の村へ御返し、持來之田地御作らせ被レ成候事相始り申候、是外向は結構成事の樣に候得共、實は不レ宜御仕置之樣に相見へ申候、元來奉公に出候程の貧民は大抵上田持之百姓にて、御田地之爲に困窮仕り身を賣申候得ば、何程共村へ御引返し、田地を御引付被レ成候ても、右不勝手之土地故、やはり己が持分は散田に作り、別に加減よき田

地を見立請作と申に仕り、夫にて取續申者數多有」之由承及候、依」之下人大勢召抱ひ右田地作り來候大百姓は、右之人返し以來奉公人大に拂底に及、持分御田地手餘りに相成、其上奉公人給金殊之外高直、先年之一倍に相成、何程に出精仕候ても、給金だけ御田地より作り出し候事は相叶不」申、或は酒を造り質を取、又は商賣を始、御田地之かゝりを償ひ申度存候ても、皆々奉公人之埋草にのみ相成間に合不」申、古來之大百姓共大半困窮に相成候

一　檢見入之場所に稲かつぎと申事御座候、是は右高免御田地之中にも散田に仕候程之儀にも無」之、大抵割合にも當り可」申場所は、隨分熟作仕候樣精を出し、取入申つもりいたし、其内水旱又は風難等之年は實のり不」宜、平年之通御年貢上ゲ候ては百姓損毛に當り申候、然る所嚴酷之檢見に出合候得ば用捨もなく引不」申、何れにも相凌がたく、依て其村方百姓共作之稲を荷ひ連れ、御城下へ强訴に罷出申候、是を稲かつぎと申習はし候、此儀先年より御制禁に候得共止事得ず候、依」之山横目庄屋抔途中へ出張、右稲かつぎ共を指留、大抵御城下先は出し不」申候樣にいたし、扨右村役人等入割を以其年之上納は妻子を賣せ、又は家財を拂はせ不足を償ひ、或は拜借金等之御救ひを以て、表向は罪人をこしらへ不」申候樣工面仕候得共、右拜借金と申者實は後日の苦痛に相成、誠に歎敷事共に御座候、以上之四弊は其最大なるものに御座候、ヶ樣に御田地を下に御あづけ被」指置、人情之和不和乍」恐よくよく御憐察可」被」爲」在候、此外檢見之儀に付瑣細なる儀吟味仕候はゞ中々不」少事と奉」存候

一　世間尋常之荒地と申は、大概谷地山野等の場所のみ多く、たとひ御ひらき被レ成候ても、膏腴の土地半納の御益にも相成申間敷候、前件申上候散田は實に結構成良田のみに候故、上之御不益下之難儀無二此上一事と被レ存候、依て散田御開發之御仕置相立不レ申内は、決して御勝手向御取直しには相成間敷候、扨其開發之御仕置と申は、其田ことを御あらため、御取付御免被レ成候儀御正法に候得共、當時上にも御不如意之砌故、餘り煩はしく相成可レ申歟、左候はゞ同じくは簡易にしたがひ、先検見を御やめ定免に御改被レ成候様に仕度候、彌定免に相成候はゞ、御國内の散田凡三年を待ず、不レ殘相ひらけ可レ申候、右申上候通田方永久之御益は、定免被二仰出一候事結構至極之御事故、是迄願出相濟居候村方も有レ之候處、近年追々本免に立歸り、或は二三ヶ年之内より御益相過し申候事に相成候、是以山を燒き獸を得候類之儀にて、却て上之御損毛多く相成、其餘は凡小検見引方拾ヶ年平均之法にて、豐凶にかゝはらず其内より御益指上定免に相成候事故、實は拾ヶ年平均とは申せども、八年半歟九ヶ年之平均に相當り可レ申候、拾ヶ年平均に候はゞ、拾ヶ年は全く年數之内に可レ有レ之所、二ヶ年三ヶ年、又は五ヶ年位に御高年限切、又は御益御取上被レ成候に付、拾ヶ年拾五ヶ年も相過候内には、やはり本免御取付同様に相成候故、右定免無二是非一百姓より御返し申上候、尤其二三ヶ年之内は御引方も少く御益に相成候得共、三四ヶ年目よりは不作散田年々相過し、御損毛無レ限事と相成申候、畢竟平均して定免に相成候得ば、元取五ッ取にても、四ッ取歟三ッ八分取に相成候故、一旦は御損毛に相開へ

申候得共、拾ヶ年平均之法と小檢見引方かけ合候はゞ、小檢見之費は大切之良田不作散田に相成、實に御取付之名目計にて、御收納辻更に無レ之候間、定免之方乾と御益に罷成候事と相見へ候

一　享保天明両度畑田御改にて、谷間天水場にても本免御取付之田地出來仕り候、是等之分は表面にては御益之樣に御座候得共、年々不作皆引に相成候故、却て御損毛に相成、百姓方にては實に無益之高相過し、年々小檢見歩人足之費は勿論、諸懸り物等之わきまへ永久之内痛に相成候、凡拾ヶ年平均之上乾と拾年宛之定免被二仰出一候はゞ、四ッ取にても三ッ八分にても村方にて高辻引わけ、其内には一ッ取にも三ッ取にもそれぞれに御取付割合候故、水屆兼候分は畑作仕付候共勝手次第、水屆候場所は勿論之儀、不作散田可レ仕樣は無レ之候、左候はゞ作方大に相增候間、御國內米麥之貯多く相成、檢見も無用に相成候故、上下不和爭奪之心を忘れ、百姓自然と農にすゝみ、人情和同之術誠に此一擧に可レ有レ之儀と奉レ存候

一　右定免之御法相立候上は、先是にて大抵人情はおだやかに相成可レ申候得共、其外窮民育子等之御手當、專ら御國用を相たすけ候儀無レ之候ては、何れにも御不如意之御相濟不レ申御事と奉レ存候、依て一ヶ年金子五千兩ヅヽ、御益相生じ可レ申工夫存付候間、禁遊之部へ委しく申上候

禁遊第三

一　遊民と申は商人などの類にて、耕さずして食ひ、織らずして着る者共之儀に御座候、是即國家之

爲には實に浮蠹と申者に御座候、此浮蠹を御へらし、男子は耕に就き、女子は繊をはげむ樣に相成不ㇾ申候ては、上下之困窮取直し兼可ㇾ申候、凡一家內にても耕作織縫もしらぬ懶惰之者共大勢扶持仕置候ては、其身代年々蕣しこみ、勝手向取直し候儀決て行屆不ㇾ申物に候、今三拾五萬石之御國中を一家內と見おろし了簡仕候所、右樣之者夥敷事と奉ㇾ存候、依て其無用之中より有用を相生じ候儀此末に申上候

一　件之遊民共增過仕候根本は、當今田德三折返しなれば、結構之土地と人皆心得居候得共、此三折返と申は、上納三分一之つもりにて、九俵取之田地にて三俵を出し、六俵之作德に成、三俵取之田地にて一俵を出し、二俵之作德に罷成、是を三折返と申候、乍ㇾ去上納籾一俵之分へは先づ半俵ヅヽもすべての費用相かゝり候事故、其割にて九俵取よりは四俵半、三俵取よりは一俵半と出辻有ㇾ之候間、實之作德は當半に相成候、凡農人之家內夫婦兩人之力を以相作り候分、通例二斗蒔と割付候物に候所、良田之割にて籾取入、一升蒔に付二俵取と見て、一斗蒔二拾俵、二斗蒔なれば四拾俵に候、夫を上納出辻指引當半に仕り、殘り作德二拾俵と相成候、右二拾俵之內にて一家衣食住之物入は不ㇾ及ㇾ申、吉凶懇切之義理屆、又は坊主山伏之爲にしぼり取られ、すべて一年中之物入皆此內より出申候、其上夫婦兩人のみならず子共多く持、又は老衰之者、或は病身等之厄介有ㇾ之候ては、右三折返し之作德にては眼前間に合不ㇾ申、依て麥粟稗芋蕪菜大根等を糧につかひ、夫食をたすけ取續候得共、畑作よりも代

方多く上納仕候得ば、生涯之力を以農業相かせぎ候ても中々息をつぎ兼候間、皆々商人又は職人等を相企經營仕候事に成行申候、右之通三折返し之田地なれば、不足ながらも取續かれ申候得共、右樣之田地も中々數少く候間、是非貧民のみ多く罷成害に候、依て農業をばいとひ商人に計相成申候、只今商を兼不ㇾ申、農計にてよく暮し候者は十が一二と相見へ申候、金銀珠玉は飢て食ふべからずと承候所、如ㇾ此商人共年々に增過仕候ては、彌以御田地手餘り、萬一凶年打續申候事有ㇾ之候はゞ、誠に恐るべき儀と奉ㇾ存候

一 士民之奢侈は大抵商人より導き申候、二十年以來別て鄉村之人情大變に相成、金さへ有れば侍にも成られ候と申所へ目を付、おの／＼僥倖之志たくましく、本を捨て末に走り、皆々農をいやしみ商を貴び申候、依て村々夥敷店共仰山に相はびこり先年に十倍仕候、依ㇾ之御城下之店々は不ㇾ及ㇾ申、所所の市場大概衰微仕、鄉村のみ次第に繁昌仕候、是等は不ㇾ殘御潰し農民に御かへし被ㇾ成候樣仕度候、中にも木綿店之儀下り木綿下り染等一切御停止、御國木綿計にて通用仕度候、左候得ば御國內紡績之者自然と多く相成女工相弘り、困窮取直しの道相ひらけ可ㇾ申候、乍ㇾ去此儀も定免之御法相立申候上ならでは、人情歸服仕間敷樣子に相見へ申候

一 僧は遊民之巨魁にて御座候、乍ㇾ去人情之維持する所にて急に御潰にも相成兼可ㇾ申歟、左候はゞ御領內寺々之知行を先拾ヶ年之間御借上被ㇾ成候樣に仕度候、大抵御國內寺數凡五百計と見すへ、一ヶ

寺に付知行御借上金拾兩ならしには參り可レ申歟、此金千二年つもりて五千兩之御益に相成、拾ヶ年には五萬兩之御手當は相生じ可レ申候、扨右御益金を以て育子御手當は不レ及レ申、窮民御救ひ其外御國用を御賑はし被レ成候はゞ、是程之御陰德にまさる儀は有レ之間敷候、御家中幷に御百姓は乍レ恐御一大事之御備に候所、此輩をば先年御借上又は御用金等被ニ仰付一、坊主のみ御手入無レ之御事如何敷奉レ存候、凡坊主は侍百姓とは相違、乞食頭陀之境界に候得ば、其身一ツ之經營に御座候、知行無レ之候ても取續かれ可レ申事本色之儀と奉レ存候、依て御借上拾ヶ年之間は二三ヶ寺之住僧共を一ヶ寺に同居爲レ仕候はゞ、彼者共も暮し方にも勝手宜敷可レ有レ之候、當今諸士百姓極窮に及、吾子の養育さへ行屆兼候砌、坊主のみ閑暇無事驕奢飽暖にすぎはひ仕候事相當申間敷候、既に宋の神宗熙寧二年免役法と申候事相始り、其内助役錢と申事相見へ申候、其文之略に「女戶寺觀、品官之家、無ニ免役ニ而出レ錢者、名ニ助役錢一」と、右は當々役をゆるされたる家より錢を出し國用を助け候に依り、助役と申候由御座候、是宋末衰世之風にて御座候得共、異國にも寺觀より錢を取て國用を助け申候證據明白に御座候

一　往古度牒之法に習ひ、猥に僧に成候事嚴敷御停止に仕度候、近年之坊主殊之外風儀惡敷、學文筋之分は甚疎略に仕り、大に民間之害に罷成候事共承及候

一　僧徒之衣服甚奢侈に相成、綾羅錦繡不斷身にまとひ申候、是戒律に相背き候事と相見申候、眞之法服は麻木綿之類に限り候由佛書之表明白に御座候、元より乞食頭陀之身之上に候得ば、衣食之奢侈

は皆是士民之當階にて御座候、然るを先年より御制禁無レ之候事如何敷奉レ存候

一 禰宜山伏も又遊民に御座候、乍レ去此輩は妻孥有レ之五倫をたもち候故、坊主とは又格別なる者に御座候、然るに此者共平生覺悟を承候に、大方禰宜は吉田家之家臣と心得、山伏は聖護院又は三寶院之家臣と心得居候樣子に相見へ候、是御國役無レ之候故、仰ぐ所を相わきまへ不レ申、上之御恩をおろそかに存知此心得違仕候、右之心得に仕置候ては治平之節は格別、萬一之砌は各二心を懷可レ申事難レ計候、ケ樣之者共御國内に多く御養ひ被二指置一候儀御不用心と被レ存候、依て是等は兵民に仕立、其内にて才德ある者には學文を仕込み、其者に鄕村之敎化を仕らせ、才德なき者には武藝を仕込、其家之格式にしたがひ、見付番などのやうなる事に御仕ひ、やはり本職土着のまゝにて、交替番之樣に爲二相勤一申度奉レ存候、左候得ば所々之御番人減少、此御物入相省かれ可レ申候、此者共既に御除地等も被二下置一、常に帶刀迄御ゆるし被二指置一候間、是非々々御役儀爲二相勤一、君臣之差別屹と存込せ置申度ものに御座候、但門徒寺は妻子有レ之候間、山伏之部類に組入可レ然奉レ存候

一 巫・惠比須・猿引等之類、又は鬼神を賣て人を惑し、良民之金穀を貪候間、是等は禰宜山伏等之附屬に仕り、彼家之家來同樣に召仕、機織之業に就せ候樣に仕度候、若其儀をいとひ候者は百姓に御返し被レ成、本職を御奪ひ被レ成可レ然奉レ存候、彼等が本職は禰宜山伏にて事濟可レ申候

一 醫者も遊民に御座候、近年鄕村之間に夥敷相ふゑ申候所、大抵惰夫頑民之類にて、農にも商にも

用立兼候もの醫者に相成候事はやり申候、假初ながら人命に拘り候儀、不學無術にては相濟申間敷候、是又延喜式などに有ㇾ之候如く、猥りに不ㇾ相成ㇾ候樣屹度御法相定申度候

一　三昧堂檀林は御菩提所久昌寺とは別院にて、御先々代樣思召も被ㇾ爲ㇾ在御立被ㇾ遊、他國之坊主共御招き御扶持被ㇾ下置ㇾ最早二百年之間莫大之御物入御座候所、既に御國之遊民さへ夥敷御費に相成候砌、他所之遊民を御養被ㇾ指置ㇾ候儀如何敷奉ㇾ存候、此者共數年御扶持等被ㇾ下候ても、其年限相立申候者は各々其國々へ立歸り候間、御國之御用には更に相成不ㇾ申、御費のみに相成、誠無用之者共に可ㇾ有ㇾ之候、異朝にも「廢ㇾ寺爲ㇾ學」と申事相見へ候間、同じくば此御物入を以學校に御改、右僧徒之御扶持を書生料に御直し、文武兼備之學問屋に取立、弓馬劍鎗は不ㇾ及ㇾ申、禮樂書數天文醫學等に至る迄こと〳〵く修行爲ㇾ仕、人才を養育しよき人を澤山こしらへ、御國內之重寶に仕度奉ㇾ存候、猶又學校制度之儀異國本朝無沿革も有ㇾ之候樣に相見へ申候、尤有識之者へ御尋之上、是非々々御創建被ㇾ遊候樣に仕度奉ㇾ存候

一　博奕之儀近年過料被ㇾ仰出ㇾ猶又村々には隱密役人相立、紙上には甚嚴重に御下知相屆候樣に御座候所、却て繁昌に罷成候、此者共は誠に遊民之中にも其心底を考候はゞ、禽獸とも虎狼とも可ㇾ申大に良民を僞りそこなひ申候間、御仕置之儀別て屹度相立候樣に仕度奉ㇾ存候、元來彼者共御仕置に過料と申候樣成儀乍ㇾ恐相當申間敷歟、其餘は博奕仕候程之者大抵人情を取失ひ、己が貪慾に耽りて耻をし

らず、金銭を取扱渡世仕候事故、過料さへ指出候得ば此上六ヶ敷事なしと推量り、猶又寺社人共晝夜閑暇に相暮候まゝ別て相好み、其上此方共は支配違故、構無之など申ふらし候由にも及承候、中にも隠密役よりたまく其筋へ申立候ても、少分之過料等に相成候故、却て申立候者無調法之様に相成、自然と等閑に仕り、近き頃は長脇指帯候者共粗往來仕候故、愚昧之百姓共は大に心得違仕候者も有之由に候、乍去一旦被仰出候過料之儀此上被仰付候共、たとへば金壹兩被仰付候はゞ、當人貳兩村中壹兩、寺社之族は檀家一兩當人二兩共御法被仰出候はゞ、不見不聞之者共より仲間吟味に相成申候事必定之儀と奉存候、只今迄之過料にては中々以相止不申風情に相見へ申候

一 右博奕打共禁獄等被仰付、又は御國拂等に相成候ても、他所へ出候へばやはり他國之害に罷成候、依て相考候に、此者共は罪人には候へ共、律之大辟之数にも無之候間、往古之作法城旦舂と申様成儀に習ひ大小屋を立、見付次第相捕、其中に籠め置、米を搗せ、粗を搗せ、或は縄むしろ・沓・草鞋之類それくの手職を申付、其日々飯料に仕り、又は御堀御普請・川よけ・石ひろひ等之大徭役へは別て此者共を御召仕ひ、此御法を以二年も三年も御試被成候内、追々覺悟相直り候者、御吟味之上村歸し被仰付候様仕度候、元來當時人別減少之砌、御追放に可相成程之罪人をば、士民に相限り不申右之小屋に籠置、御國内之人をへらし不申萬一之御備に仕度候

省役第四

一　夫役之儀近年別て煩多に罷成、百姓之苦痛此事のみ歎息仕候、此根本を承及候に、上に御役人多く、何事も人に任する事なく、郷村庄屋組頭等之役替迄重き衆中より聲をかけ候樣に成行候間、其筋之役人は上と下との中にはさまれ、存分之取扱出來兼候かゝひ物に成、手代などは猾吏風之吹なりに廻り候間、役儀にはり込不レ申、念に念を入てむつかしき事は大方人にゆづり、萬一仕落出來候時は、己が拂を立候樣にと計相勤申候故、直切果斷と申事は近年すたりものに相成、諸事持滯に及隙取候內、物ごと重複いたし、人を多く費し候樣に相見へ申候、凡古來よりの制度承傳候に、只今之郡奉行は異國之縣令、吾朝之郡司と申樣成役人に候間、都下に住居仕候事不相應之儀と奉レ存候、專ら郡縣之をさめをつかさどり候職故、やはり便宜よき村方に役所を構へ、手代共も同居仕候得ば、郷村之利害、年穀之豐凶も居ながら察せられ、手代元〆等に至る迄、近村之往來には人馬を費候に不レ及、其上滯留之日數も減少いたし候間、村さし錢かゝり少く、庄屋組頭共は御城下往來之物入を省き、猶又郷村之取しまり萬事行屆、役を省之一策に可レ有レ之候、既に小川運送奉行海老澤津役奉行等は各其土地に住居被二仰付一候、纔か運送津役等之小事をさへ、其土地に住居不レ仕候ては行屆兼申候、況や日用御政務之大役所郷村を遠ざけ居候事如何敷奉レ存候

一　御郡奉行所手代餘り大勢に過候樣に承及候、願はくば役所土着之上、可二相成一候事に候はゞ一部七八人に減少仕度樣に奉レ存候、若夫にて不手廻り之節は、郷士又は山横目等之者共御借り出し御使被

」成候樣に仕度候、世諺に人と器物は有次第と申習はし候、大勢は大勢、小勢は小勢之樣に大方事缺ぎ不」申物に候、是又人に任ずると任ぜざるとの差別に可」有」之候

一　手代之數御減之上は其御切符を打込、今少し勝手向福やかに仕度物に御座候、纔か二人扶持五兩七兩位之御あてがひにては夫婦も漸相暮し、其上出生等多く、又は老人など厄介持候者は經營甚難儀仕候由、中にも郡手代は鄕村を取扱候事故、廉直に無」之候ては百姓より侮を受候故、御法も事によりては猶ゆるみ候樣に成行、別て育子等之儀此罷專ら取扱候儀候間、衣食に苦しみ不」申候程之御あてがひ被」下置」候樣に仕度候、扨手代之數減少仕候はゞ、御用向相廻り兼候趣、定て申上候者も可」有」之候得共、右役所鄕村住居被」仰付」候上は、別て相廻り兼候儀は有」之間敷候、既に公儀御代官所奧州棚倉近邊塙と申處に有」之當支配寺西重次郎と申者、彼地之取扱承及候に、西は棚倉近邊より東は岩城小名濱を限り、十萬石計之場所を纔か手代五六人にて相をさめ、其上御年貢取立江戸運送迄持前に仕、事缺ぎ候儀共無」之候由に御座候、是全く煩を去て簡にしたがひ、よく人に任じ候故之事と相見へ候、乍」去此術は郡奉行土着仕候後ならでは取行不」申事と奉」存候、依て四郡共に鄕村へ御押出し、往往は御年貢取立迄御任せ被」成、とかく役人を御へらし不」被」成候內は、省役之儀被」行不」申事と奉」存候

一　手代御取立之儀、民間庄屋由横目など老練精密成者御取擧御用被」成候樣に仕度候、只今迄は大

抵町家育立、又は重き衆中之若黨中小姓等より御召抱ひ被レ成候故、應對取廻し等は立派に見へ候得共、肝要之下情にうとく百姓と和同不レ仕候、右村内より御舉被レ成候得ば此弊を相除、却て百姓共之横着自然と相止可レ申候

一　近年驛路通行之商人共御用達と相稱し、往來荷札等を所持仕、己が商賣荷を武士荷同樣之賃錢にて罷通、或は徒歩夫等迄も召仕ひ申候由、是又大に御百姓農業之隙を費し、一ヶ年には餘程之痛之由承及候、此儀御達も有レ之候得共相止兼候趣に御座候、嚴敷御停止に仕度候

育子第五

一　育子之儀は士民衣食之不足より、人情不和との弐ツより相崩れ申候樣子に相見へ候間、專ら御救ひ行屆、殊更敎化之法無二油斷一出精仕候樣に仕度候、先年御入國之節、重き御慮之程村々男女御召集御達之砌は誠に難レ有奉二承知一、萬一心得違之者は勿論、少之御疑心相蒙候ても、如何程の御咎御座候哉も難レ計心得居候故、村役人共下知も行屆申候由之所、太田御郡手代岡部茂十重き御咎之筋にて御追放被二仰付一候以來、其次第一々相辨不レ申者共、子育御糺に付、糺し人却て不調法に相成候と申觸し候、依レ之子育かゝり之役人共一同恐れをなし役儀にはり込ぬけ、此砌より諸向先寐入候樣子に承及候、猶又近き頃は御山横目共へ御任せ、深く立入候者無レ之候に付、御下知之限と推量仕、御山横目よりも一ヶ月切に懷胎人仕出し取集申候所、是又宿次駄賃帳など相しるし候にひとしく、横目共より配

得を以右書付取集、全く申わけ一箭之樣成事に罷成候、依て右教戒之志有ㇾ之者も無精に罷成自然と口を閉、先大方世間並に打過申候體に承及候、只今にても御入國之御時節の如く鼓舞仕、猶又前件申上候寺菴御借上の金子を以御救ひ存分に相屆、猶以志有ㇾ之者共教戒出精仕候はゞ、十年を經ずして悪風俗乾度相止可ㇾ申候、乍ㇾ去可㆓相成㆒御儀に御座候はゞ、別て恐多御事に御座候得共、右手代茂十最早年數も相立候事故何卒御召返し、却て彼者へ育子がゝり被㆓仰付㆒候はゞ、諸人之眠りをさまし、別て行屆可ㇾ申歟と奉ㇾ存候

愼終第六

一　喪祭之禮釋迦流にては相果候得ば、遺骸を見る事土芥の如く、三寶を供養する迄にて、祖先を祭ると申事は佛律に無ㇾ之事之由、是即西天夷狄之法にて天地之大道に相背き、中にも父母之尊體を火にて燒捨候儀、尤非禮之甚しき無㆓此上㆒事と奉ㇾ存候、元來人倫を捨切候坊主共へ喪祭を御任せ被ㇾ成候故、諸事混亂仕候て人道を取失ひ申候、願くは先御國中計も火葬を禁じ、孝子慈孫愼終之志を遂させ申度候

一　棺之制度士人は寢棺、庶人は座棺之御法に御座候所、座棺と申者聖人之書に相見へ不ㇾ申、依て相考候に、是は亂世之砌相用候早桶等之遺風にて、全く正禮には無ㇾ之儀歟と奉ㇾ存候、凡座棺之制町家賣買之品は至て狹小にて、人之大小により父母といへども手足など折屈め、甚しきは足をかけ踏折不

」申候ては其中に入來候者も有」之、又は頭など餘り候者は、棺の蓋の上に登り踏すくめ候樣成者も有」之由、是又非禮之甚しきしのびざる事と奉」存候、父母之喪は貴賤となく、同之由にも相見へ候得ば、何卒士庶一同寐棺に被」仰付、只板之寸法厚薄等にて貴賤を相分ち、右之非禮相止申候樣に仕度奉」存候

一　士庶之諡を僧より相贈候事只今風俗に相成候所、是又だん／＼古風を取失ひ、不」得」其意」事共相見へ申候、先ヅ尊貴之御戒名相伺候に、上に院殿と題し、下に大居士と相記し申候、謹で相考候に院之下に殿之字を付候事は實に吾朝之例にて、攝家華族等尊貴之御所をさして、逍遙院殿與樂院殿など〻稱し奉り候事本式と相見へ、天竺にはいまだ無」之事故佛果菩提之爲に相成候例は曾て無」之儀と相見へ候、夫を尊貴之人といへども、御戒名之上に相加へ候事、釋迦流にては相當り申間敷候、況や院と計相稱し候儀は、元來天子官衙之名にしても、其居所を僧に賜り候事を例にいたし、某院某寺と相呼申候由に候得共、實は僧之居所をば精舍と申候事本號と相見へ申候、然るを近世に至り候ては、士大夫は勿論町人百姓輕き者共に至る迄、僧より猥りに院號を相贈、夫を戒名と相心得候儀風俗に相成申候、乍」恐上は天子を始奉り、下は末々輕き士民迄一同院號に罷成候事、誠に以言語同斷之儀と奉」存候、凡諡法は往古以來至て大切之事に仕り、異國は不」及」申、吾朝にも天子御代々は勿論、淡海公を文忠と諡し、房前公を忠仁と諡し、又は將軍家にても經基公・滿仲公、又は淸盛・重盛等之戒名いづ

れも二字ヅヽに相限り候事、正中之長開白に御座候、既に佛道にても坊主共之戒名同[illegible]迴業をはじめ、昔々二字號に御座候、然るに右之道り院號と申儀を還し、其外にも戒名字數頗多に相成候事、全く室町家之頃より因循仕り來候儀に相見へ申候、是皆戰國之陋習にて制度無之、ヶ樣之儀すべて坊主まかせに成行候故、唐にも天竺にも古制にも無之一種之論法を建立仕候、猶よく〳〵御吟味之上佛道を御用ひ被成候はゞ、釋迦流之戒名に御したがひ、儒道御用ひ被成候はゞ、聖人之論法御取用ひ被遊候樣に仕度奉存候

一　只今民間之風俗は坊主共より戒名を賣物に仕り、尊卑階級をこしらへ、施物たくさん遣候得ば文字數を多く付、施物輕少に候得ば文字數少く付、其外院號料、居士號料等之名を付、通例施物之外に内分にて金子を貪め取申候、併之右坊主共然るに深く愚民を惑はし、戒名之尊卑をあらそはせ候故、此儀に付輕き者共公事に及び、上　御苦勞に被成候事度々承及申候、別て院號之儀は殊に輕者共へは無益之儀と奉存候間、先重役御停止被遊、戒名は二字號と御定之儀佛家相應之事と奉存候

一　居士と申事處士と同趣にて、昔仕官せずして隱居する者之號と相見え申候得ば、高位之人の法號に無之事勿論之儀に候、韓非子外儲說篇に「齊有居士田仲者」云々」又書記玉藻に「居士錦帶」と申事相見へ候、鄭玄注云居士、道藝處士也　又自ら雅號などに用候時は、隱士山人など同樣之儀に可有之候、釋迦流にても智論九十八日、「雖是無德財、不求仕官、亦名居士」謂、士夫凡人之通稱、不

レ有レ所レ仕、而自居、故名二居士一也、」また十誦律第六曰、「居士者、除二上王臣、及婆羅門一、種餘在レ家白衣、是名二居士一」と相見へ申候得ば維摩居士などの如き者もいまだ佛果に至らざる名に候故、菩薩如來等よりは至て卑き稱呼と相見へ申候、元來佛道にては成佛仕候より外に難レ有尊き事は無レ之儀を假初にも尊貴之御方に對し奉り隱居者等之號を用ひ、又は佛果にも至らざる居士あしらひに仕候事、言語同斷不敬至極と奉レ存候、其上又居士之上に大之字相加へ、大居士と申事彌以當り不レ申儀と奉レ存候、大姉號是又右等之儀と相見へ申候得ば、尊號に相用候事旁以如何敷御事に奉レ存候、猶又よく〳〵御吟味可レ被レ遊候

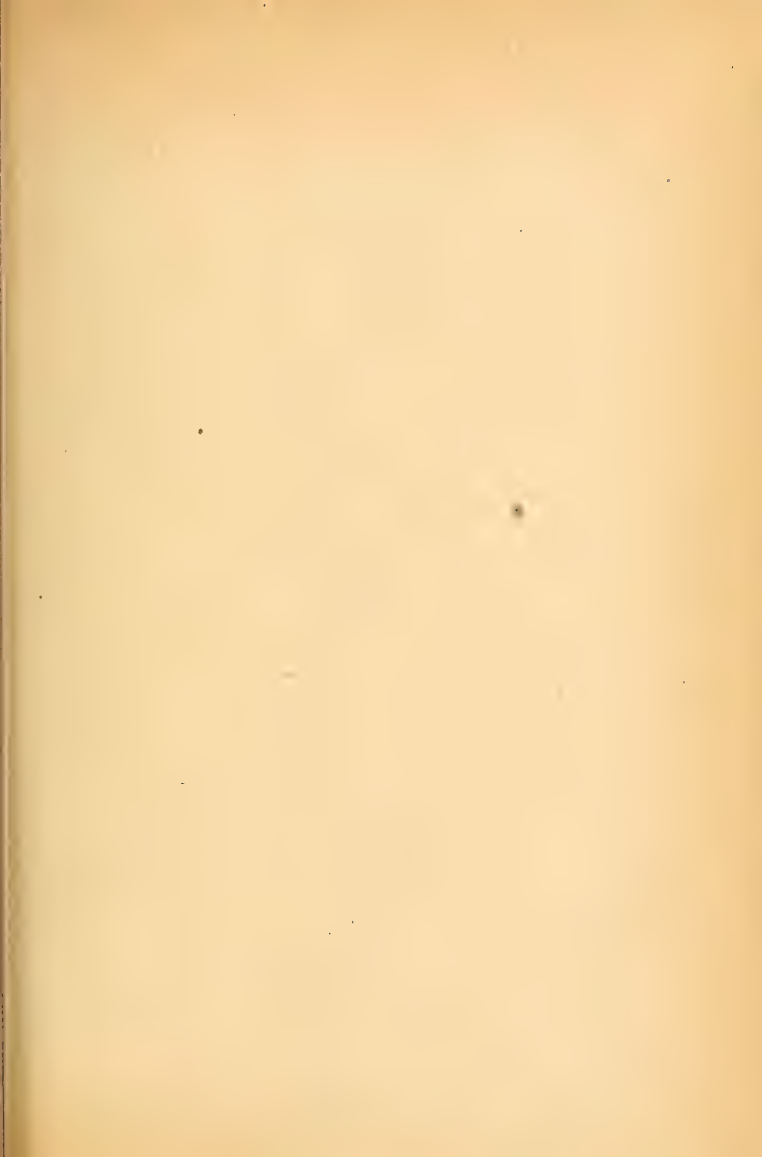
臣誠恐誠惶頓首頓首再拜謹言

以上六篇參拾貳條

寛政十一年己未夏六月

富強六略終

籠田の水

高野昌碩著

序

こたびはからずも牧民の職を蒙り、くさ〴〵の村里をめぐり見る折から、ある山田のこぞの稲葉さへ得かりをさめず、霜がれふしていとあれにあれたるを、案内顔なる翁に其よしを問侍れば、瀧田とこそは答へ申ける、此瀧田と申は、くれ竹の日瀧の水の底たもちなき心地して、はゝかに日照する時は、ますら男のちからいか計からうじて、種かし水まかせつるも、むなしく地にもり引て、終には實のるべきたよりなく、かくあれはつる事なりとぞ、いでや經濟をつとむるいさをしも、はたかのますら男がかひなきちからに、かゝみべき事なきにしもあらざれば、たゞちに瀧田の水と題して、おほやけにたてまつる事とはなりぬ

籠田の水

高野昌碩著

一御勝手向之儀に付、他國町人を御引入被レ成候事商賈融通之術にて、つまる所は御國之膏脂を町人に吸取られ申候間、夫だけは是非御國内之御よわりに罷成候、是即御武備之大本に相拘り、天晴御大切之御事と奉レ存候、何程御仁恕之思召被レ爲レ在候ても、いはゆる出ぬ乳は吞せられぬと申諺の如く、御國之膏脂かはき候得ば、自然と御撫育も御届被レ成兼候事に成行候間、一國は一國ぎりの御手當にて、諸事御すまし被レ成候樣仕度物に御座候、乍レ去只今迄之御風儀と違ひ、物ごと御不自由を被レ成、民と艱苦を共にすと申程に、御堪忍不レ被レ爲レ在候ては被レ行不レ申事に候、此御堪忍之一ッさへ、纔か數年之間御屆被レ成候得ば、上下は安穩に罷成可レ申候、凡ケ樣之儀定て心付候人も可レ有レ之候得ども、君上へは何事も思召之まゝに被レ遊候樣にとこそ可レ奉二申上一儀を、それとは引違申候間、心付候ても恐多く、決て言上仕間敷候、乍レ去安民之思召深く、言路を開て衆心を率ゐたまひ、諫に從ふ事流るるがごとく、人を容るゝ事海之如く、是非々々御政道御屆被レ成度賢慮之程を奉二相伺一候上は、此後之

御苦辛少も早く奉レ相安レ度、多罪をかへり見ず憚る所なく申上候、凡是迄之御仕方、御勝手向は町人に御まかせ、金銀を御自由に御つかひ、御便利之様には御座候得共、太平を御たのみ被レ成候て、亂世之御備御手薄き様に相見へ申候、安危治亂一動一靜は天地古今之變態に御座候得ば、只今之御治世はいつ迄も如レ此ものとは相定兼可レ申候、萬一不平之事有レ之時節は諸國之往來斷絶し、只今無二と御賴被レ成候町人之手もきれ可レ申候、其砌は誰を御たのみ被レ成候て、一國を御たもち可レ被レ成哉、大抵是迄御行ひ被レ成候融通方、定て御帳面之上は立派に仕立、連年御仕方殘る所なき様に御見渡し被レ成候御事と奉レ存候得共、上は御勝手向御取直し之沙汰も無レ之、下は困窮年々に指つまり申候、是皆大本を御捨、末利に計御拘り被レ成候故之儀と奉レ存候、依て此上は御國限り之財用を以出入を摺合せ、諸向之御入用には土地を以御引當、夫を以萬端を打切申度候、然る上は乍レ恐御奥向を始奉り、御連枝様方は不レ及レ申上、他所へ御縁付被レ成候御孃様方御物入に至る迄、大概壹ヶ年御暮方五千石計ヅヽ土地方御引當御打切に被レ成候様仕度候、是全く御省略之様には御座候得共、既に仙洞御所御料五千石ヅツ之御手當に御座候由及レ承候得ば、御國柄之御あしらひに相準じ申御事に候間、別て御批判にも相成申間敷哉、其外諸御役所料も大抵夫々に土地にて打切、玄米取諸士之俸も相成たけ地方に御直し、そろ／＼と土着之御修法御目論被レ成候様仕度候、此法土地と人との割合より出候事故、和漢古今之例を相考候に、長久之制度無レ此上一事に奉レ存候、乍レ去ヶ様打切申事只今迄之御風儀、先例規格に相

泥み候譯定て新奇之事に可ㇾ存候得共、歷代之作法皆此所より割出し申事にて、即ち租庸調の依て相起る所に御座候、此御法さへ相立申候得者、上には財用の御苦勞なく、下には末利の念を生ぜず、年之豐凶によりて上下出入を共に仕候樣に罷成候間、節儉質素之道も甚行はれやすく、治平には其業をたのしみ、亂世には其國をつよくす、是國家御武備の根本、御經濟之奧義と相見へ申候、左も無ㇾ之いつ迄も太平を御たのみ被ㇾ成候御風儀にては、かぎり有御國用を以かぎりなき人慾にしたがふの類にて、此上金山・銅山・水運之利いかほど御成就被ㇾ成候ても、籠田に水を入るゝが如く、上下の困窮は相直り申間敷候

一　町家商人共は四民の末列に居候て、諸士百姓之間にはさまれ、其餘澤をなめて經營仕ものに候間、諸士百姓さへ豐饒に成候得者、商人は其まゝ御搆不ㇾ被ㇾ成候ても、自然と繁昌仕候事と相見へ申候、當今人情太平の化に浴して、遊惰にふけり奢侈に走り、農をいとひ商を羨申事、上下困窮之病根に御座候、此病根を療治仕候工夫は、商をいやしみ農を貴ぶしかけに不ㇾ仕候ては相成間敷候所、凡そ去年來之御仕置は、鄕村を次にして町家を先にし、飯盛女・堺町芝居は不ㇾ及ㇾ申、土場楊弓藝妓等に至る迄諸方より走集り、奇巧末作を以他國之民財を引入れんとす、是全く財用にのみ御目を付られ、太平を御たのみ被ㇾ成候御風儀にて、眞之御德政と申事には有ㇾ之間敷候、只今御國內之大病は、田畑は年年荒蕪し、山林は歲々空虛し、民家は亡失し諸士は極窮に至る、ケ樣之御時節に相成候事一朝一夕之

故には無レ之候間、よく〳〵其病根を御さぐり、浮薄を去て倹素に歸し候事第一之御急務に可レ有レ之候、然る所江戸淫靡之風俗を以て、東海僻地之御城下に御移し、いよ〳〵惰弱之人慾を盛にす、是即油を以暫にそゝぐの類にて、一端他國之民財を引入れ候とても、漸それに拘はり候遊民共のみ少々懐をあたゝめ、其他は御家中鄕村之費に相成、億萬之風俗をそこなひ申候間、割合候得ばやはり御國内の損に罷成申候、凡飯盛女芝居などを悦び來候者共、多くは惰弱無賴之民にてたとひ他所より家を移し妻子を携へ、人別増過仕候ても、農をいとひ商を願ふ志に御座候間、ヶ樣之者共多く御引あつめ被レ成候ては、何之益にも立不レ申、近くは江戸の人情にて相知れ申事に御座候

一　或は賣女を以姦淫を防ぐと申人も可レ有レ之候得共、大抵姦淫と申は鰥寡之民多きと、敎化之法行屆不レ申との二ツより相やぶれ候間、賣女盛なる都會にも間々有之沙汰及レ承申候、依て此弊風を防候には、周禮に相見へ申候媒官之樣成役を相立、男女婚姻之期におくれ不レ申事を專一に下知仕、其上には敎化を施し申度候、是即民戸增過之基にも相成、御仁政之一術と奉レ存候

一　制度を御立被レ成候には、人才をよく〳〵御撰被レ成候樣仕度候、只今にては萬機之事只御一人にて御世話被レ爲レ在、末々に至り候ては請取渡之風勢に相見へ申候、是いまだ其人を得給はずと申樣成儀にも可レ有御座一候哉、凡是迄御慰勞之御次第、御役成以後其功之成不成を不レ論、年數さへ相立候得ば大抵は御慰勞被レ下候、是御仁惠之樣には可レ有レ之候得共、此所より諸向皆怠惰に相流れ、御役

儀にはりこみ不ㇾ申、仕落さへなければ今幾年過れば御慰勞有ㇾ之などゝ其年數之來るを待うけ申人情に成行候事、當時之大弊に御座候、表御役相勤候輩御職人などは、隨分此風儀にても可ㇾ然候得共、御政事取計候御役筋之人は、其功績相立不ㇾ申候ては決て不ㇾ相濟ㇾ事に候、山林之空虛、田畑之荒蕪を見て、其國之政を知ると申候古今の通論に御座候、只今委く其御時節と相見へ申候間、御經濟之大本、御精力之有たけ、一向に鄉村へ御押かゝり、大活眼を御ひらき、上下の間を御見通し被ㇾ成候はゞ、所謂社鼠城狐之類も可ㇾ有ㇾ之、鳳雛龍駒之類も可ㇾ有ㇾ之候、其除くべきを除き舉べきを舉不ㇾ申候得ば、上下壅蔽仕候て何時迄も先入爲ㇾ主、舊染之弊風を御あらため被ㇾ成候儀決て相成不ㇾ申事と奉ㇾ存候、依て上下之間要務之所へ人才を御くばり、其職を深く御任じ被ㇾ成候樣仕度奉ㇾ存候、以上

寬政十二年申二月十五日　　　　高野文助

籠田の水　終

徹法考

平榮實著

徹法考

徹法考一卷、錄周室田法兵賦之說、余嘗考和漢兵制之次、略撮其要領、記之片紙以備遺忘、備後數年、稍飽蠹魚之腹中、於是命侍臣輯錄、譯以俚言、又少補其所不足、而爲一小冊、別附圖一卷、淺見陋識、雖固不足采觀、鄙意竊比鷄肋、傳以示家童云

文政十一年二月小盡　　平榮實子不甫

目錄

徹法考

平　榮實　著

王畿幷ニ九服

姬周ノ國土夏殷ノ制ニ傚テ、地ノ遠近ヲ以テ分チテ十等トス、〔圖第一〕天子ハ畿方千里トテ、王城ヲ中ニシテ四方ハ五百里ヅヽ、合セテ方千里ノ間ヲ王畿トイフ、コレヨリ外ハ又五百里ヅヽ九重ニ分テ九服トイフ、〔九服ノ事周禮職方氏及大行人ニ見エタリ、大司馬ニハコレヲ九畿トイヘリ、〕其ウチ第一王畿ニ近キ服ヲバ侯服トイフ、其次ヲ甸服ト云、其ヨリ次第シテ男服・采服・衞服・蠻服〔大行人ニハ是ヲ要服トイヘリ、〕トイフ、此六服ハ公・侯・伯・子・男五等ノ諸侯ヲ封ズル地ニテ、コレヲ畿外邦國トイフ也、侯服ノ地ニアル者ハ毎歳朝覲シテ方物ヲ貢ス、甸服ナルハ二歳ニ一度、男服ハ三歳ニ一度、采服ハ四歳、衞服ハ五歳、蠻服ハ六歳ニ一度ヅヽ朝覲シテ各其方物ヲ貢ス、四方ノ國々各四ツニ分リテ四時ニ來朝スル也、此六服ノ外ニナホ三服アリ、夷服・鎭服・蕃服トイフ、此三服ハ九服ノウチニハ入タレドモ、王化ニ順ヒ年ヲ定メテ朝覲スル並ニハ非ズ、タヾ天子卽位ノ時又ハ我國ノ代ノ替リタル時、一度來リテ見ユルノミ也、此三服ヲスベテ蕃國トイフ、サテ此王畿ト四方ニ環遶セル九服トヲ合セテ方一萬里ノ地トス、然レドモ是ハマヅ其大抵ヲイヒタルニテ、實地ハカホドニ非ルヨシ、其說アル事也、此九服ヲ初メトシテ大條ニ載ル趣ドモ、別卷ノ圖ト照シ合セテ

考ベシ（禮記王制ニ、「九州州方千里」トアルハ、鄭註ニ殷ノ制トイヘリ、コレ要服以内ノ地ヲイヒテ方三千里也、又禹貢ニ見エタル五服ノ要服以内ハ方四千里也、代々ニ差ヘリ、詳ナルコトハ其書ニ就テ見ルベシ）

一說ニコノ九服ヲバ、毎服一面ニテ二百五十里ヅヽトシ、兩面ヲ合セテ五百里ト見テ、禹貢ノ五服ト同事ナリトイヘリ、今舊說ニ從フ

○夷服以外ノ地ノコトハ此書ニ用ナケレドモ、九服ノ全キヲ擧ルニ付テ合セテコレヲ記シヌ

王畿千里

圖第二
王畿千里ノウチハ一百同（一同ハ方百里也下ニ詳也）ノ地也、井ニテイヘバ一百萬井、（一井ハ方一里也、コレモ下ニ擧）夫ニテイヘバ九百萬夫（一夫ハ方百歩也、コレモ下ニ擧）ナリ其眞中ニ王城アリ、方十二里也、サテ四方ヘ百里ヅヽ方二百里（四同）ノ間ヲ郊トイフ、ソレヨリ又四方ヘ百里ヅヽ四段ニ分テ、邦甸•邦削•邦縣•邦都トイフ也、其郊ノ地ノウチ王城ヲ中ニシテ、四方ヘ五十里ノ間方百里ノ地ヲ近郊トイヒ、ソレヨリ外五十里ヲ遠郊トイフ、此郊ノ地ノ田法ヲ溝洫ノ法トイヒテ井田トハ違アリ、天子六郷ノ軍ハ此所ニアリ、其外廛里•場圃•宅田•士田ナドトイフ田九等ヲ置也、（此九等ノ田ハ郊内ノミニ限ラズ、王畿ノウチニイヅクニモアルベシトモイヘリ）サテ此遠郊ヨリ内ヲ國中トイヒ、遠郊ノ外甸ノ地以下ヲ野トイフ也、（或ハ王城ノ内ヲ國中トイヒ、城外ヲ野トイフ、又ハ王畿ノウチヲ國中トイヒ、畿外ヲ四郊トイフ、處ニ隨テ心得ベシ、一

概ニ在ベカラズニ〇邦甸ノ地ハ遠郊ノ四面ヲ遶リテ十二同アリ王城ノ四方百里ノ外二百里ニイタル地ナリ、又是ヲ州トモ云、此甸ノ地モ田法溝洫ヲ用フ、六遂ノ軍此所ニアリ、六遂ノ地ノ外ハ公邑トテ天子ノ公領也〇邦削（又稍トモ書也、都ノ字ヲモ用フ）ノ地ハ甸ノ四面ヲ遶リ、王城ノ四方二百里ノ外三百里ニ至ル凡テ二十同ノ地ナリ、其内ニ大夫ノ采地アリ、方二十五里ヅヽノ小國六十三也、コレヲ家邑トイフ、王ノ子弟ノ疎遠ナル者、大夫ト同ジク小國ヲ受テコヽニアリ、家邑ノ地凡テ三同九十三成（一成ハ一百井也下ニ見）七十五井アリ、此地田法井田也、其餘ヲ公邑及ビ祿士トテ天子ノ元士（上士也、當時ニ□□フトアル是ナリ）等ノ知行所トス、是ハ田法皆溝洫ヲ用フ〇邦縣ノ地ハ又稍ノ地ノ四面ヲ遶リテ二十八同アリ、王城ヨリハ三百里ノ外四百里ニイタル地也、此地ニ卿ノ采地アリ、方五十里ヅヽノ次國二十一也、コレヲ小都トイフ、又王ノ子弟ノ常並ナルモノ卿ト同ジク次國ヲウケテコヽニアリ、小都ノ地凡テ五同ニ二十五井アリ、此地田法井田也、其餘ヲ公邑及祿士ノ地トス〇邦都ノ地（又都トイフ）ハ又邦縣ノ四面ヲ遶リテ三十六同アリ、王城ノ四方四百里ノ外五百里ニイタル地也、此地ニ公ノ采地アリ、方百里ヅヽノ大國九ツナリ、コレヲ大都トイフ、王子母弟ノ親シキモノハ公ト同ジク大國ヲ受テコヽニアリ、大都ノ地凡テ九同、是モ井田ノ法也、其餘ヲ公邑又ハ祿士ノ地トス、サテ家邑小都大都ノ三ツヲ皆都鄙トイフ也、（一説ニ稍・縣・都ノ地ヲスベテ都鄙トイフトモイヘリ）右ノ如クナル故都テコレヲイヘバ、王城ノ四方近郊遠郊ノ地ニテ一段（百里）、邦甸（二百里）邦削（三百里）邦縣（四百里）邦都（五百里）各一段合セテ五段ノ地、東西南北四面ヘ五百里、縦横千里ノ間ヲ

王畿（或ハ圻ノ字ヲモ用フ、同意也）トス、或ハ國畿トモイヒ、又邦畿トモイフ、又コレヲ甸トモイフ、（甸トイフハ、五百里ハ甸服ニアルヨリイヘル也）猶此末ニ詳ニイフヲ見ルベシ、（漢志ニハ周ノ時洛邑ト宗周ト通ジテ封畿千里也トイヘリ、實地ハサモアルベシ、宗周トハ鎬京ノコトナリ）

郷遂溝洫法（溝トイフモ洫トイフモ、田閒ノ水道也、コレヲ以テ田法ノ名トスルコト經文ニ見エズ、タヾ井田ヲ作ラズシテ、溝洫ヲナストイフ意ニテイヘルナルベシ）

郊ノ地ト甸ノ地ハ田法殘ラズ此溝洫ノ法也、六郷六遂コノ地ニアリテ各六軍ヲ出ス、ソレヲ主トシテ郷遂ノ地トイフ、廛里・場圃九等ノ田、サテハ甸・稍・縣・都ノ四地ニ散在スル公邑、其外畿外諸侯ノ郊内モ皆此溝洫ノ法ヲ用フ

○溝洫トイフハ則夏ノ貢法也、タヾシ夏ノ法ト差ヘルハ、夏ハ五十ニシテ貢ストイヒテ、一夫ゴトニ田五十畝ヅヽヲ受テ耕作シ、其ウチヨリ十分ノ一五畝ノ米ヲ計テ上ニ貢スル也、コノ溝洫ノ法ハ一夫ゴトニ百畝ヲ受テ、十分一十畝ノ米ヲ貢ス、其耕ス所ノ十分一ヲ貢スルコトハ同事也、總ジテ貢法ハ助法ト違ヒテ、公田トイフヲ置コトナク、私田ノ内ニテ貢上スル數ヲ定テ、年々其數ノ如クニ出スナレバ、今ノイハユル定免也、其數ヲ定ルニ豐年ヲ以テ計レバ、凶歉ノ時ニ至テ民苦ミ、凶年ヲ以テ計レバ、上ノ用度足ザル憂アリ、此二ツハ共ニワロシ、タヾ數年ノ間ニ豐凶ノ中分ヲ考テ定ムル時ハ、上ニ足ザルコトモナク、下ニ怨ムベキ筋モナキハヅ也、夏ノ世ノ法モ必如レ此有シナルベキヲ、イカナレバ貢ヨリ不善ナルハナシトイヒ、終歲勤動シテ父母ヲダニモ養ヒ得ズナドイヘルトイフニ、コレハ

其初メ立タル法ノワロキニハ非ズ、世ヲ經テ後ニカヽル弊ハ出來タルナルベシトイフ、是先解ノ趣也
（圖第三）古ヘ用シ耜（未頭ノ金トナリ、耒ノ頭ニツキタル刄ノアル金也）ハ周尺ニテ廣サ五寸アリ、二人立テ此スキヲ二ツ並ベテ田ヲ耕スヲ耦トイフ、ソノ幅一尺トナル、其上ヲ發シテ高クシタル所ヲ伐トイヒ、其溝ノ如クナリタル所ヲ甽（畎ノ字）ト云、サテ六尺ヲ歩トシ、歩百ヲ畝トストイヘバ、一畝ノ地ハ幅六尺ニ長サ百歩也、一伐一甽ノ幅ハ二尺ナレバ、三伐三甽ニテ幅六尺ヲ得ル也、然レバ一畝ノ地ハ幅六尺、三伐三甽ニテ其長サ百歩也、（前漢書食貨志ニ一畝三畎トアル是也、苗ハ其畎中ニ殖ル也、畎ハ字書ニ水小流トアリ、畎中クボクシタルハ水ヌキノ爲也、古ヘハ稲ヲ作ルニ田中ニ水ヲ湛ヘテ植ルノ法ナク、タヾヒタスラ水害ヲ恐レテ、田間ノ水ヲバ疏通シテ其患ヲ除クコトヲ旨トセシ也、此次ニ舉ル遂・溝・洫・澮ノ類モ皆田間ノ水ヲ流シ捨ルコトヲ専トス、古今ノサマヲ辨ヘザレバ思誤ルコトアル故、コレヲ辨ズ○又畎ハ畝ト畝ノ間ニアリトイフ説アリ、然レドモ周禮匠人ノ趣サヤウニハ見エズ、食貨志ノ一畝三畎トイフモノ、周禮トヨク合ル故、今コレニ從フ）此一畝ヲ（圖第四）百合セテ方百歩ノ地ヲ一夫トイフ、（一萬歩ノ地也、コレ一夫ノ受テ耕スベキ地ナルユエ、コレヲ一夫トイフナリ）畝百ヲ爲レ夫トイフ是也、サテ夫間有レ遂、遂上有レ徑トテ夫ト夫ト並ビタル間ニ、廣サ二尺深サ二尺ノ水道アリ、コレヲ遂トイフ、畎ヲ縦ト見レバ、遂ハ横也、遂ニソヒテ小道アリ、是ヲ徑トイフ、徑ハ車馬ヲ容トアリテ、車馬ノ往來シテ狹カラザル程ニ作ル也、サテ（圖第五）十夫有レ溝、溝上有レ畛トテ十夫重リタル所ニ、其ニソヒテ廣サ四尺深サ四尺ノ

水道アリ、コレヲ溝トイフ、コレハ又縦ニ設ク、溝ニソヒテ又道アリ、ヤヽ大ニシテ大車ヲ容ベシ、コレヲ畛トイフ、是ニテ十夫（千畝）九遂一溝トナル、三百歩ヲ一里トスル故、此地ハ長サ三里百歩、廣サ百歩也、サテ百夫（圖第六）ニ有レ洫、洫上有レ涂トテ、此十夫ノ地ヲ十合スレバ方十夫積百夫（一萬畝）ニテ、方三里百歩ノ地也、コレニ又廣サ八尺深サ八尺ノ水道アリ、コレヲ洫トイフ、溝ヲ縦ト見レバ洫ハ横也、洫ニソヒテ設ル道ヲ涂トイフ、乘車一軌ヲイルヽホドノ道也、コレニテ九溝一洫トナル、サテ千夫（圖第七）ニ有レ澮、澮上有レ道トテ、此百夫ノ地ヲ十合セテ長サ三十三里百歩、廣サ千歩ノ地ニ廣サ二尋深サ二仞ノ水道アリ、コレヲ澮トイフ、尋ハ八尺、仞ハ七尺也、然レバ廣サ一丈六尺深サ一丈四尺ノ水道也、洫ヲ横トスレバ澮ハ縦ナリ、澮ニソヒテ設ル道ヲ道トイフ、コレハ乘車二軌ヲイルヽ幅也、コレニテ千夫（十萬畝）九洫一澮也、サテ萬夫（圖第八）有レ川、川上有レ路トテ、此千夫ノ地ヲ十合セテ方三十三里百歩積、萬夫（百萬畝）ノ地ニ川アリ、（自然ノ川ヲ云）川ニソヒテ道アリ、コレヲ路トイフ、廣サ車三軌ヲ容ルヲ限トス、以上郷遂ノ地ニ用ル所ニテコレヲ溝洫ノ法トイフ、孟子ニ「國中什一使ニ自賦一」ト見エタルハ是也ト先儒イヘリ

此條專ラ周禮遂人ニヨリテイフ、案ズルニ、周禮ノウチニ田法ヲ擧ルコト遂人・匠人ノ違ヒアリ、遂人ハ十ノ數ヲ以テイヒ、匠人ハ九ノ數ヲ以テイフ、鄭玄コレヲ以テ貢法助法ノ違也トイヘ、、其後諸儒ノ論區々ニテ一定ナルコトナシ、或ハ鄭説ニ従フモアリ、又ハ周ノ世井田ヲ用ルハ天下ノ通法也トテ、遂人・匠人同事ノ趣ニ説ヲナスモアリ、朱子ハコレヲ論ジテ二ツノモノ決シテ合ベカラ

ズ、鄭氏ノ分チテ兩項トシタルガ却テ是也トイヘリ、今朱説ニ從テ兩樣ニワカテリ、詳ナル事ハ末ニシルス

(田法ニ南畝・東畝トイフ事アリ、是ハ其田ノ東方ノ畝南方ノ畝トイフ意ニハ非ズ、モト詩經小雅信南山ノ詞ニ南[レ]東其畝[一]ト見エタルヨリイヘル也、一畝ノ田ハ廣サ一歩長サ百歩ニテ、其形長キモノ也、東西ニ長ク作リタルヲ東畝トイヒ、南北ニ長ク作リタルヲ南畝ト云、其地ノ形勢ニ隨テ南ニモ東ニモ便利ヨキ樣ニ作ル也、圖畫ノ上ニテイフ時ハ常ニマヅ上ヲ南トシ下ヲ北トシ、左ヲ東トシ右ヲ西トスル故、畝ノ圖ヲ設ルニ縱ニ長ク書タルハ南畝横ニ長ク書タルハ東畝ナリ、然ルニ遂人ノ鄭註及賈疏ニ以[二]南畝[一]圖[レ]之、則遂縱溝横、洫縱澮横トイヘリ、畝ヲ南北ト縱ニ圖スレバ、遂ハ東西トナリテ横也、溝以下モ皆違ヘリ、此事欽定義疏ニ辨ジテ、注疏ハ遂・溝以下ヲイヒテ畎・畝ニ及バザリシ故誤レルナリトイヘリ、今此本文義疏ニ從ヘリ

山陵林麓等三分ノ一ヲ去

前ニ載ル王畿方千里トイフハ、其地ノ廣サヲ統ベイフ也、九服ハサノ也其千里ノ内ニハ或ハ山陵、或ハ林麓・川澤・溝瀆・城郭・宮室・塗巷ノ類皆コモレリ、是等ハ田地ニナラザルコト故、大概ノツモリヲ以テスベテノ地面ノツチニテ三分一減ジテ見ルコト王制ノ法也、シカレバ王畿千里ハ九百萬夫ノ地ナレドモ、其實ニ耕スベキ田地ハ六百萬夫ニ不[レ]過、近郊遠郊ノ地ハ三十六萬夫ナレドモ、耕作ノ地二十四萬夫ナ

ラデナシトシルベシ、畿内邦國トモニ皆此心得也、(但六遂ノ地以下ニ至テハ十八分ノ五ヲ減ズトイフ說アリ、末ニイフ)

案ニ、漢書刑法志ニ載ル趣ニテハ、一百分ノ三十六ヲ減ズル也、許愼ノ五經異義モ然リトイヘリ、コレニヨレバ王畿九百萬夫ハ五百七十六萬夫トナリ、近郊遠郊三十六萬夫ノ地ハ、二十三萬四百夫トナル也

○井田ノ法ニテハ一同一成ノ上ニテ減ズルコトアリ、其所ニイフベシ

六鄕授レ田

一夫トイフハ百畝ニテ、則一家ノ授カル田也、然レドモ一家百畝ヲ受ルハ上地ノ事也、其實ヲイヘバ不易・一易・再易トイフ違アリ、不易トイフハ上地也、年々ニ耕シテモ地味カハラザル故、一夫百畝ノ外別ニ田ヲ授ラザルヲ云、一易トイフハ、一等次ナル田ニテ、年々耕ス時ハ地味變ジテアシキ故、定レル百畝ノ外ニ又百畝授リテ、百畝ヅヽ隔年ニ耕スヲイフ、再易ハ、又一等ワロキ地故、一人三夫ノ田ヲ授リテ、三年廻リニ耕スヲイフ、コレ六鄕及都鄙ノ法也、六遂ノ地又ハ畿外ノ邦國ニテハイササカ違アリ、末ニイフベシ、サテ右ノ如クナルユヱ、一人ノ授ル田地上地ナレバ一夫百畝也、中地ナレバ二夫、二百畝下地ハ三夫三百畝ナリ、押ナラシテ一人ニ二夫アタリトナル、然レバ百夫ノ地ハ五十家、萬夫ハ五千家ト心得ベシ

六鄕毎家人數幷賦役（皇國近世戰國末ノ兵制此ニ本ヅケリ、別ニ記ス之）

總ジテ上地ハ毎家七人トス、其內一人ハ老人ト見テ除レ之、其餘六人ノ半分三人ヲバ、十五ヨリ六十五マデノ男夫ト見テ、一家ガ役ニ任ズル者三人トス、（但國中ニテハ二十ヨリ六十マデヲ力役ニ任ズ、國中ハ役夫ニ使フコト繁ク、其勞多キ故遲ク使ヒテ早クユルストイヘリ、此國中トハ城中ヲイフナルベシ）中地ハ毎家六人トシ、右ノ割ヲ以力役ニ任ズル者二人半トス、（二家ニ五人也）下地ハ毎家五人力役ノ者二人也、但毎家七人六人五人トイフハ中分ヲ以テ云也、其實ハ夫婦二人住ノ者ヨリシテ十人マデスベテ九等トス、サテ上中下ヲナラシテ見レバ、力役ノ者二家ニ五人也（一家ニ二人半）此內徒役ヲ起ス時毎家一人ヲ限ニテ其餘ヲ羨卒トイフ、留守ノ耕作又ハ更代ノタメニ殘ス也、サテ是ヲ常ニハ城郭・塗巷・溝渠・宮廟等ノ普請ニ用フ、毎年三日ヨリ多クハ使ハズ、其三日トイフモ豐年ノ例也、中年ニハ二日、無年ニハ一日ナラデハ使ハズ、モシ凶札ノ年ニアヘバスベテユルシテ使ハザル也、（此コト周禮均人ニ見エタリ、註ニ、豐年トハ人ゴトニ四鬴ヲ食フ年也、中年トハ三鬴ヲ食フ年也、無年トハ二鬴ヲ食ヒテ贏餘ナキ年也トイヘリ、是皆一月ノ飯米ヲイフ、一鬴ハ六斗四升也、周禮廩人ニ見ユ）然レドモ軍旅ノ時ハ此日限ニハ拘ラズ、其模樣ニ從ヒ使フ也、ソレモ一人ニ過ルコトナシ、田獵ノ時及盜賊ヲ追捕スルニハ、羨卒トモニ皆出ル也、是ハ田獵ハ軍事ヲ習フタメ、盜賊ノ追捕ハサバカリ遠ク鄕里ヲ去ニモアラザル故、此兩事ニハ皆ユク也、（一說ニ羨卒ハ則餘夫也トモイヘリ、餘夫ノ事ハ六遂ノ所ニイフベシ）サテ又十五以上六十五以下ニテモ、貴人・

賢者・及能アル者・天子へ奉公スル者・又ハ病人・此類ノ者ハ役ニ使フコトヲユルス也、又八十ハ「一子不レ從レ征」トテ八十ニナレバ其子一人役ニ使フコトヲユルシ、九十ハ「其家不レ從レ征」トテ一家ノ役ヲユルス也、其外父母ノ喪ニハ三年其者ノ役ヲユルシ、齊衰大功ノ喪ニハ三月ノ間ユルス也、家ヲ移シテ外ニ去ントスル者ハ三月使ハズ、又今外ヨリ來テ移リタル者ハ一年使ハズ、是皆周禮禮記ノ法也

六鄕幷六軍

六鄕ハ近郊遠郊ノ地ニアリ、大司徒ノ法五家ヲ比トシ、五比ヲ閭（二十五家）トシ、四閭ヲ族（百家）トシ、五族ヲ黨（五百家）トシ、五黨ヲ州（二千五百家）トシ、五州ヲ鄕トス、一鄕ハ一萬二千五百家也、「六鄕スベテ七萬五千家」コレヲ以テ田法ニアツルニ、六鄕ノ地二夫ヲ一家トスル故、一比ハ十夫也、一閭ハ五十夫、一族ハ二百夫、一黨ハ千夫、一州ハ五千夫、一鄕ハ二萬五千夫也、六鄕合セテ十五萬夫ノ地トス

小司徒卒伍ノ法五人ヲ伍トシ、五伍ヲ兩（二十五人）トシ、四兩ヲ卒（百人）トシ、五卒ヲ旅（五百人）トシ、五旅ヲ師（二千五百人）トシ、五師ヲ軍トス、一軍スベテ一萬二千五百人也、六軍合セテ七萬五千人トス、天子六軍トイフ是也、（此外ニ六遂ニ又六軍アリ、六鄕ノ六軍ヲ正軍トシ、六遂ノ六軍ヲ副倅（サイ）トス、合セテ十二軍アレドモ、一時ニ出ル事ハナク、六軍ヅヽヲ用ル定ユヱ、六軍トハイフ也）コレ六鄕七萬五千家ヨリ家ゴトニ一人ヲ出ス也、其總數ヲ擧レバ左ノ如シ

一鄕一萬二千五百家（其田二萬五千夫）

五　州　　二十五黨　　百二十五族

五百閭　　二千五百比

一軍　一萬二千五百人

五　師　　二十五旅　　百二十五卒

五百兩　　二千五百伍

六鄕　七萬五千家共田十五萬夫

三十州　　百五十黨　　七百五十族

三千閭　　一萬五千比

六軍　七萬五千人

三十師　　百五十旅　　七百五十卒

三千兩　　一萬五千伍

六鄕六遂ノ軍ハ、車馬甲兵ノ類皆官ヨリ支ス也、賦法重クシテ餘力ナキ故トイヘリ

六鄕及六軍ノ官員

六鄕ノ官員

鄕　老　　公二鄕ニ一人

郷大夫	卿每郷一人	六郷凡六人
州長	中大夫每州一人	六郷凡三十人
黨正	下大夫每黨一人	六郷凡百五十人
族師	上士每族一人	六郷凡七百五人
閭胥	中士每閭一人	六郷凡三千人
比長	下士五家ニ一人	六郷凡一萬五千人

每郷郷大夫以下其官三千百五十六人、六郷合セテ一萬八千九百三十六人

此餘猶大司徒・小司徒・郷師アリテ其政ヲ治ル也、此ニ略ス

○右ノウチ郷老トイフハ三公ニテ、三公各二郷ヅヽ、請取ニテ其民ヲ敎諭シ、賢能ヲ興シ擧ルコトヲスベ司ル也、郷大夫ハ則冢宰・六司徒等ノ六卿也トイヘリ、(又別ニ郷大夫トイフ官アリテ、六卿ノ外コレモマタ卿也トイフ說モアリ、一决シガタシ)サテ又比長トイフハ則一比五家ノウチニテ其人ヲ撰ミテ用フ、閭胥以上ハ別ニ設ケタル官ニテ、比閭・族黨ノ民ニハアラザル也

六軍ノ官員

軍將	命卿每軍一人	六郷凡六人
師帥	中大夫每師一人	六郷凡三十人

旅　帥　　下大夫　每旅一人　　六鄕凡百五十人

卒　長　　上士　每卒一人　　六鄕凡七百五十人

兩司馬　　中士　每兩一人　　六鄕凡三千人

伍　長　　每伍一人　　六鄕凡一萬五千人

每軍其官三千百五十六人、六軍合セテ一萬八千九百三十六人

外

每軍府二人、史六人、胥十人、徒百人（府ハ藏ヲ司ルモノ、史ハ物カキ、胥徒ハ輕キツカヒモノナリ）

此餘猶大司馬・小司馬等コレヲ統司ル也、此ニ略ス

○右軍將ヨリ伍長マデノ官常ニ六官（天官・地官等ノ六官ヲサシテ云）及六鄕ノ吏ノウチヨリ兼シメテ、別ニ此官ヲ設ルコトナシ、マタ六鄕ノ比長ハ下士ナレバ、此伍長モ下士ナルベキヲ、下士トイフコト經ニ載ズ、ソレハカノ比長ハ常ニ五家ノ治メカタヲ司ル役ナル故、德行才能ヲ撰ミテ下士ノ爵ヲ賜ヒテ比長トナルコトナリ、軍旅ニ在テハ專ラ勇壯ノ者ヲ撰ム故、比長ヲ以テ伍長トスルコト決定ニハ非ザレバ也（六鄕ノ外五家ノ長タル者モ、セト士ニハ非ルナリ）

府史胥徒ノ四ツハ、軍旅ノ事アル時ニ臨ミテ任ズル也、常ニ此官アルニ非ズ

廛里以下九等ノ田

六郷六軍ノ衆ハ近郊遠郊ノウチニアルコト前ニイフガゴトシ、此外郊ノ地ニ於テ廛里・場圃・宅田・士田・賈田・官田・牛田・賞田・牧田トイフアリ、廛里ハ王城ニ限ラズ、スベテウチニアル民家ノ空地也、場圃ハ城邑ノ側ニアル園ニテ、草木瓜瓠ノ類ヲ植テ其利ヲ貢スル地也、廛里・場圃ノフタツハ田地ニアラズ、其利少キ故其税カロシ、（次ニ詳ナリ）サテ宅田トイフハ、致仕ノ者ノ家ニ受ル田也、（一説ニ、士ノ未レ仕シテ家ニ居ル者ノ耕ス田也トイヘリ）士田ハ官ニ仕フルモノ常祿ノ外ニ受ル田ニテ、孟子ニ見エタル圭田也、（祭祀ノ爲ニ賜ル田也）（一説ニ、士田ハ士ノ子ノ耕ス田也トイヘリ）賈田ハ城市ニ居ル賈人ノ其家ニ受ル田也、（一説ニ賈人ノ子ノ耕ス田也トイヘリ）官田ハ庶人ノ官ニメサレテ役人トナリタル者ノ其家ニ受ル田也、牛田・牧田ハ牛飼・馬飼ノ類ノ家ニ受ル田也、賞田ハ賞賜ノ料ニ設ケ置田也、此九ツノモノ郊ノ地ノウチニアリ、六郷ノ地ヲ除テ其餘ヲ以テ是等ノ田トス、上中下地ヲナラシテ一家ゴトニ一夫ヲウクル故、コレヲ半農人トイフ、猶後ニイフヲ照シ見ルベシ

案ニ、此九等ノ田ノコト、モト地官載師ニ見エタリ、其文「以二廛里一任二國中之地一」（國中トハ城中ヲイフ、「任二國中之地一」トハ國中之地ニオクトイフ程ノコトナリ）、以二場圃一任二園地一（鄭注ニ「樊圃謂二之園一」トアリ、又天官大宰園圃ノ注ニ、樹二果蓏一曰、圃園トハ其樊ナリト見ユ、圃ハハタケ也、其廻リニ垣ヲシテ圍タル所是園也、サテ園地トアレバサス所アル詞也、然ルニ園地イヅクトイフコト先

解不詳、但據官場人ニ國之場圃ト見エタレバ、國中ナルベシトイフ說アリ、是モ如何、義疏ニ附郭ノ地也トイヘリ、今コレニ從テ本文ヲ書ス）以宅田・士田・賈田、任近郊之地、以官田・牛田・賞田・牧田ハ、任遠郊之地ニトアリ、鄭玄ナドヨリ以來種々說アリテ決シガタシ、今大カタ鄭注ニヨリテ載之、一說ノ捨ガタキモノハ分書シテ疑ヲ殘ス也、載師本文右ノ次ニ「凡任地國宅無征（國宅トハ官舍ノ類ヲイフ）園廛二十而一、近郊十一、遠郊二十而三、甸・稍・縣・都皆無過十二」トアリ、十一ノ稅ハ三代ノ通法ナルヲ、二十之三又ハ十二ナドトアルニ付テ先儒種々ノ說アリ、然ルニ軍禮通考ニ載ル方觀承ガ辨、諸說ニスグレテ聞ユ、其趣ハ此條上文ヲウケタレドモ、田稅ノコトニハアラズ、「園廛二十而一」トイフコリ下、スベテ城中ヲハジメ近郊・遠郊・甸・稍・縣・都ニアル園廛ノ征ヲイフ也トイヘリ、コレ極メテ然ルベシ、園廛トイフハ即上文ノ廛里・場圃也、廛里・場圃ヲハジメ九等ノ田ハ、國中及近郊遠郊ニアルノミニアラズ、畿內ノ地イヅクニモ皆アルベク、載師ノ文ハ王城四郊ヲ擧テ其例ヲ示スナルベキヨシ陳傅良モイヘリ、（載師ニ公邑之田ハ任甸地トアレドモ、公邑ハ甸地ノミニアラズ、稍・縣・都ノ三地ニモ皆アルト同ジ趣也、廛里ノコト猶六遂ノ所ニイフベシ）（）右ノゴトクナレバ此九等ノ內廛里場圃ハ二十之一ヲ貢ス、士田ヲ圭田ト見レバ圭田ハ無征、〔〕其餘ノ六等稅法考ベカラズ、モシ稅アラバ皆十一ナルベキカ、賦役ノ事モ詳ナラズ、遠郊ノ內ニアルナレバ六鄉ト同ジカルベシトモイヘリ、（朱子圭田ノ說ニ、大抵イニシヘ田祿ハ皆助法ノ公田ヲ授ケテ、其一井

八家ノ者モコレニ屬セシ也、圭田モ同事ナルベシ、ソレ故ニ圭田征ナシトイヘル也トイヘリ、朱子モモト鄉遂ノ田法溝洫トイフニ從ヘルナレドモ、此說ニヨレバ九等ノ地ハ井田トスル意ニヤ、タヾシ圭田ハ九等ノウチニアラズトスルニヤ)

溝洫井田兩法一致ニ歸ス

田法溝洫ト井田ハ別法也、溝洫ノ法ハナホ以テ數ヲ起シ、百夫萬夫トタテヽ、萬夫ニ川アリトイフヲ限ニテ、サテ畿ニ達ストイヘリ、井田ハ九ヲ以テ數ヲ起シ、九百夫ヲ一成トシ、九萬夫ヲ一同トシテ、同間廣サ二尋深サ二仞ナルヲ澮トストイヒテ、サテ川ニ達ストアリ、田數ノタテ樣違ヒ、マタ水道ノ多少モ差ヘルニ似タリ、然レドモ溝洫ノ法ノ(圖第九第十)百夫萬夫ヲ各九ツ合セバ即一成一同トナル、(一成ハ九百夫一同ハ九萬夫ナレバ也)水道ノ設樣モ大抵合ル趣アリ、其ヨシハ井田ノ下ニイフベシ、今此次ニ郊ノ地四同三十六萬夫ノ總計ヲ擧ルニツキテ、マヅ其一致ニ歸スル事ヲコヽニシルス

近郊遠郊ノ總計

右ニ(圖第十一)段々截ルゴトクナル故、今六鄉及九等ノ地近郊・遠郊ニアル田數ノ總計ヲイフ、郊ノ地四同三十六萬夫(一同ハ九萬夫ヅヽナリ)山陵・林麓・宮室・涂巷ノ類三分ノ一(十二萬夫)ヲ去、(王城十二里モ固ヨリ其内ニアリ)餘二十四萬夫(二同ト六萬夫)ナリ、六鄉ノ民七萬五千家ノ受ル田數、不易・一易・再易ノ三等ヲ通ジテ一家二夫ヲウクレバ、十五萬夫(一同ト六萬夫)ノ地也、其餘九萬夫ヲ以テ廛里等九品ニアツレバ、九品各一萬夫也、(コレ唯大概ヲイフ也、

九品カナラズ皆一萬夫トイフニハ非ズ、不易・一易・再易ヲ通ジテ一家一夫トスレバ、九品合セテ九萬家也、然レドモコレ半農人ニテ、二家ヲ以テ正夫ノ一家ニアツル故、九萬家ハ四萬五千家ニアタル也、六郷七萬五千家ト合セテ十二萬家トス、コレ近郊・遠郊・四同三十六萬夫ノ大抵也

邦甸ノ地以下山陵林麓等十八分ノ五ヲ去トイフ説

邦甸ノ地以外ハ城郭宮室ノ類モ少ナク、道路モセマク成ナレバ、三分一ヲ減ジテハ過分也、十八分ノ五ヲ去ベシトイフコト鄭玄ノ説也、此説ノヨル所ヲ考ルニ、六郷ノ地ハ上中下田ヲ合セテ、三家ニ六夫、六家ニ十二夫ヲウク、六遂ノ地ハ上田ニ五十畝ノ萊アル故、三家ニ六夫半、六家ニ十三夫也、（萊ノ半夫備ニイフ）六遂ヲ以テ六郷ニ比スルニ、六遂ノ田地六郷ノ十二分ノ一多クナル故、其田地ニアタル家數ハ六郷ヨリハ少ナシ、サル故ニ山陵・林麓等三分ノ一減ズル數ヲヘラシテ十八分之五ヲ減ズ、六郷ニテハ三分一減ズル故十八分トスレバ、三分一ハ六分ニアタル也、六遂ノ地ニテ其一分ヲヘラシテ、十八分ノ五ヲ減ズレバ田地ニ不足ナク、家數六郷ノ數ニ準ズルユヱ此法ヲタテタル也、然レドモ上地ニ五十畝ノ萊アルハ遠方ヲ饒ニストイヘリ、山陵等ヲ減ズルハ地勢ニヨルコトニテ、本ヨリ別ノ事ナレバ其說當レリトハイヒ難シ、マシテヤ此法只其大略ヲイフナレバ、細數ニ拘ルベキニアラズ、漢志ニ一百分ノ三十六減ズル法モアリ、タヾ大略ヲ以テ三分一ヲ減ジテ事タルベシ、都鄙邦國トモニ同事也（天下ノ地勢ヲイヘバ山嶽多クシテ平地少シ、スベテノ土地ヲ四ツニ割テ、山ハ其三分、平地ハ其一分ナ

ラデナシトイヘリ、又唐山ハ殊ニ土地廣クシテ田地少ナク、耕種ノ地ハ十分ノ一ナラデナシトモイヘリ、コレヲ以テタヾ其大數ヲイフナルコトヲ知ベシ）

六遂授レ田

六遂ノ地田ヲ授ルコト六鄉ト同ジ、タヾ上地ニ五十畝ノ餘分ヲ授クル。是六鄉トノ違ナリ、王城遠ク不自由ナル故、遠方ヲ饒ニスル意也トイヘリ、其餘分ノ田ヲ萊トイフ

上地	一家	田百畝	萊五十畝
中地	一家	田百畝	萊百畝
下地	一家	田百畝	萊二百畝

右三家ニ六百五十畝ナルユヱ、整數ヲ以テイヘバ六家十三夫アタリトナル也、又此外ニ餘夫ノ田トイフアリ、是ハ正夫ノ四之一分二十五畝ヲ相當トシ、ソレニ正夫ノ割ヲ以テ萊ヲソヘテ授ル也、餘夫ノコトハ次條ニイフベシ

上地	一人	二十五	萊十二畝半
中地	一人	二十五畝	萊二十五畝
下地	一人	二十五畝	萊五十畝

六遂毎家ノ人數幷賦役附餘夫

六遂每家ノ人數六鄕ト替ルコトナシ、力役ノ者モ上地ハ一家三人、中地ハ二家ニ五人、下地ハ一家二人ノツモリナレドモ、六遂及四所ノ公邑ハ下劑致甿トテ、上中下三等ノウチニテ下等ニツヤヤ、スベテ上中下ノ差別ナク、一家ニ人ヲ力役ノ者トス、其內一人ヲ正卒トシ、一人ヲ羨卒トス、是野人ヲ優スル也トイヘリ、（コレニ因テ六鄕ノ賦役ヲバ、三劑致甿ノ法トイフ也）

（一家ノ田數人數大凡右ノゴトクナレドモ、成長ノ子弟多ク田數不足ナルニハ、又其人數ヲ計リテ其內ニテ夫婦アル者ニ田ヲ授ル也、コレヲ餘夫トイフ、此餘夫即羨卒也トモイヘリ（羨夫ノコトハ詳ナシ、今ノ說ニヨリテイフ）六鄕ノ地ニ餘夫ノ文ナシ、近郊・遠郊ノウチハ、六鄕ノ衆及九等ノ田ニテ餘地ナキ故、其餘夫ハミナ邦甸ノ地ニ出テ耕ス也トイフ、コレ舊說ノ趣也、義疏ニハ輪將ヲ以テ公事ニ服スル者、皆近ク鄕ノ地ヨリ取ユヱ也トイヘリ、（輪將ヲ以テ公事ニ服スル者トハ、正夫ノ力役ノ者ヲイフニハアラズ、後世ノ備功人ノ類ヲイフナルベシ）

六遂幷六軍

六遂ハ邦甸ノ地ニアリ、遂人ニ鄰里ノ法アリ、專ラ大司徒ノ比法（族黨ノ法是也）ト同ジ、タヾ其名ノ異ナルノミ也、五家ヲ鄰トシ、五鄰ヲ里（二十五家）トシ、四里ヲ鄼（百家）トシ、五鄼ヲ鄙（五百家）トシ、五鄙ヲ縣（二千五百家）トシ、五縣ヲ遂トニ、一遂ハ一萬二千五百家ナリ、六遂スベテ七萬五千家也

コレヲ以テ田法ニ當ルニ、六遂ノ地六家十三夫ヲ受ル故、一鄰ハ十一夫弱也、一里ハ五十四夫强、

一鄙ハ二百十七夫弱、一酇ハ千八十三夫强、一縣ハ五千四百十七夫弱、一遂ハ二萬七千八十三夫强、
六遂合セテ十六萬二千五百夫ノ地トス

一　遂　　一萬二千五百家 共田二萬七千八十三夫强
五　縣　　二十五鄙　　百二十五酇
五百里　　二千五百鄰

六　遂　　七萬五千家 共田十六萬二千五百夫
三十縣　　百五十鄙　　七百五十酇
三千里　　一萬五千鄰

右每家出兵一人六鄕ト同ジ

六遂ノ官員

六遂ノ官六鄕ニ準ズ、但爵秩スベテ一等下レリ（軍ニアルベキ時ニ臨ミテ爵秩アゲテ六鄕トヒトシクストイフ說アリ、イカヾ難レ信）

遂大夫　　中大夫、每遂一人　　六遂凡六人
縣正　　下大夫、每縣一人　　六遂凡三十人
鄙師　　上士、每鄙一人　　六遂凡百五十人

鄙長　中士、毎鄙一人　六遂凡七百五十人

里宰　下士、毎里一人　六遂凡三千人

鄰長　五家一人　六遂凡一萬五千人

毎遂其官里宰士下以上六百五十六人、六遂合セテ三千九百三十六人

此餘遂人師アリテ其政ヲ治ム、猶其上ニ大司徒アリ、爰ニ略ス

六遂以下ノ地圖廛

案ズルニ、周禮遂人ニ夫一廛トイフ事アリ、鄭注ニ、「廛城邑之居」孟子云、「五畝之宅、樹レ之以レ桑麻」者也トイヘリ、又載師廛里ノ注ニハ、「廛里者若二今之邑里居一矣、廛民居之區域也、里居也」ト見エタリ、注文ニテハ載師ノ廛里モ、遂人ノ廛モ大カタ同事ノ樣ニ見ユレドモ、廛里ハ鄭注半農人ニテ、一家一夫ノ地トイヘリ、孟子ニイヘルハ五畝ナレバ、同事トモ聞エズ、此二ツ先解分明ナル者ナシ、然ルニ圖廛ノフタツハ鄙内ニ限ラズ、甸・稍・縣・都ニワタリテイヅクニモ有ベキヨシ、六鄕ノ所ニイフガ如クナレバ、廛里ノ廛モ、遂人ノ廛モ同事ナルベキカ、城邑ノ居ナレバ總樣ノウチニテ減去スル三分一ノ内ニアルベシ、鄭注廛里場圃ヲ以テ半農人トシテ計ヘタル意ハ辨シガタシ、今姑ク愚見ヲ述テ參考ニ備フ（小雅信南山ノ詩ニ「中田有レ廬、疆場有レ瓜」ト見エタル、此廬ハ便利ノタメニ田中ニ設ケタルモノ也トイヘリ、此說從フベシ、漢書食貨志ニ廬舍ノ說アリ、此事ハ井田ノ處ニイフベシ）

公邑

甸・稍・縣・都ノ地ハ、皆公邑アリ、（夏ノ世ニハ、是ヲモ閒田トイヘリ）甸ノ地ニテハ六遂ノ地ノ外ハ皆公邑也、稍・縣・都ノ地ハ三等采地ノ外皆公邑也、其内祿士ノ地アリ、是ハ天子ノ元士ノ知行所、又ハ公卿ノ子ノ父ノ死後爵ヲ續ズシテ、其祿ノミヲウクル者ノ知行所也、公田ハスベテ大夫ヲシテ治メシムル也、甸・稍ノ地ハ上大夫、（州長ノ類）縣・都ノ地ハ下大夫（縣正ノ類）奉行スベシト鄭玄ノ說也、サモアルベシト先儒イヘリ、田法賦役スベテ遂ニ同ジ

邦甸ノ地總計

（圖第十二）邦甸ノ地十二同ニテ一百八萬夫アリ、山陵・林麓等三分ノ一（三十六萬夫）ヲ去、其餘七十二萬夫（同八）アリ、六遂ノ民七萬五千家ノ田數不易・一易・再易ヲ通ジテ六家ゴトニ十三夫ヲ受レバ、六遂スベテ十六萬二千五百夫（一同ト七萬二千五百夫）ノ地ナリ、其餘五十五萬七千五百夫（六同ト一萬七千五百夫）ヲ以テ公邑トス

都鄙井牧法

邦・稍・邦縣・邦都ノ地ニアル公卿大夫ノ采邑ヲ都鄙トイフ、都鄙ノ地ハ井牧ノ法也、畿外邦國ノ郊外モ井牧ノ法ヲ用フ（井トイフモ、牧トイフモ同事也、左傳ニ井ハ衍・沃・牧・隰・皐トアリテ、牧ハ一等ワロキ田ニテイフ名也、下ニ詳也）

○井田ハ殷ノ助法也、殷ハ七十ニシテ助ストイヒテ、七九六百三十畝ヲ九ツニ割、七十畝ヅヽノ田九

ツトナル、コレヲ方ニシテ其中ノ七十畝ヲ公田トシ、其外ニ連ナル八ツノ田ヲ八家ニワケテ、家ゴトニ七十畝ヲ私田トス、其公田ハ八家力ヲ合セ耕シテ其稅ヲ奉リ、私田ハ各己ガ有トシテ其内ヨリ又貢スル事ナシ、コレ民ノ力ヲカリテ公田ヲ助ケ耕ストイフ心ヲ以テ助法トイヒ、又助ハ藉也トモイヘリ、其田ノ堺井ノ字ニ似タルユヱ、井田ノ法トモイフ也、周ニテハ一夫ゴトニ百畝ヲ受テ公田百畝ヲ耕ス也、其法ハ右ニ同ジ

井田ノ法、步百ヲ畝トシ、畝百ヲ夫トスル事溝洫ノ法ト同ジ、畎・伐・遂・徑モ皆同ジキ也、サテ一夫三爲屋、屋三爲井（圖第十四）トテ一夫ヲ三ツ重ネタルヲ屋トイヒ、屋三ツ合セタルヲ井トイフ、一井ノ田ハ方一里積九夫（九百畝）也、中ノ一夫（百畝）ヲ公田トシ、廻リノ八夫（八百畝）ヲ私田トス、サテ一屋ノ間々ニ溝畛アリ、遂徑ヲ横トスレバ、溝畛ハ縱也、一井ノ地ニハ左右ノ横ニ各一溝一畛アリ、中ニ二溝二畛アリ、合セテ四溝四畛也、井十爲通（圖第十五）トテ此一井ヲ十ナラベタルヲ通トイフ、通ハ廣サ一里、長サ十里、積九十夫、（九千畝）ノ地也、又通十爲成（圖第十六）トテ此通ノ地ヲ十重ネタルヲ成トイフ、成ハ方十里、積百井（九百夫）ノ地也、一通ノ間々ニ洫涂アリ、是ハ横也、又成十爲終（圖第十七）トテ一成ノ地ヲ重ネタルヲ終トイフ、終ハ廣サ十里、長サ百里、積千井（九千夫）ノ地也、又終十爲同（圖第十八）トテ此終ノ地ヲ十並ベタルヲ同トイフ、同ハ方百里、積一萬井（九萬夫）ノ地也、一終ノ間々ニ澮道アリ、コレハ又縱也、サテ此一同ノ外ニ川路アリテ同ヲ纏フ也、是都鄙ノ見ニ用ル所ニテ、コレヲ井牧ノ法トイフ、孟子ニ「野九一而助」トアルハ是也ト先儒イヘリ

此條司馬法及周禮匠人ノ趣ヲ取テ擧レ之、案ズルニ、遂人溝洫匠人井田ノ兩法決シテ合ベカラザルヨシ、朱子ノ說前ニ擧ルゴトク也、然ルニ近代ニ至テモ猶種々說アリテ、遂人・匠人一法也トイフモ少カラズ、義疏ナドモソレニ據リ、其說牽合ニ似タルモ多ク聞ユ、(或ハ遂人ハ積數、匠人ハ方法也トテ、井田ノ九數ト溝洫ノ十數トヲ同事ト見タルモアリ、或ハ匠人ハ溝畛洫涂ノ類ヲ除タルモノニテ、其地ハ遂人ト替リナシ、遂人ノ十夫モ其實ニ耕スモノハ九夫也トイフモアリ、猶諸說多端ナリ)其ウチ從フベキモノハ、匠人ノイハユル井間・成間等ノ間ノ字ヲ以テ中間ノ義トシタル說也、此間ノ字ヲ間際ノ義トスレバ、遂人・匠人・溝畛・洫涂ノ數大ニ違ヒテ、遂人ニ幾ニ達ストイヘルニ適ハズ、其遂人匠人ノ文ハ左ノゴトシ

遂人

凡治レ野、夫間有レ遂、遂上有レ徑、十夫有レ溝、溝上有レ畛、百夫有レ洫、洫上有レ涂、千夫有レ澮、澮上有レ道、萬夫有レ川、川上有レ路、以達二于畿一

匠人

九夫爲レ井、井間廣四尺、深四尺、謂二之溝一、方十里爲レ成、成間廣八尺、深八尺、謂二之洫一、方百里爲レ同、同間廣二尋、深二仞、謂二之澮一、專達二於川一、各載二其名一

遂人ノ趣ハ郷遂溝洫ノ條ニイフゴトクニテ、百夫ニ一洫九溝、萬夫ニ一川九澮ナレバ、一成九百

夫ノ地ニハ三澮、九洫八十一溝也、直ニ通リタルナ一ツトスレバ、三澮三洫二十七溝也一同九萬夫ノ地ニハ九川八十一澮トナル、直ニ通リタルナ一ツトスレバ、三川三十澮也匠人ハ成間ニ洫アリトアレバ、九百夫ニタヾ一洫也、同間ニ澮アリトイヘバ、九萬夫ニタヾ一澮也、是間字ヲ以テ間際ノ義ト見タル也、然レバ遂人ト大ニ違ヒテ、遂人ニ幾ニ違ストイヘル事通ゼズ、サレバ鄭註幾ニ違ストイフヲ釋シテ、三中幾レ有二都鄙一、遂人盡主二其地一」トイヘリ、畿内ヲスベ主ル事ヲバ、一以遂二千畿一トノミイフベキ事モ如何也、サレバ間字ヲ中間ノ義ト見レバ穩ナルヤウ也、鄭樵ノ説ナド殊ニヨク聞ユ、但ソンハ遂人・匠人トモニ井田ノ法ト見タル説ヲタツベキ爲ニイヘルニテ、一井中ニ一溝トイヘルナドイカヾアラン、今其説ヲ摘的シテ畢ルコト本文ノゴトシ、然レバ一成九百夫ノ地ハ十洫百三十溝也、直ニ通リタルナ一ツトスレバ、三十溝也一同九萬夫ノ地ハ九澮ニテ川図第十九溝洫法九萬夫ノ境其外ニアリ、猶遂人ト差ヘルハ其法本ヨリ異ナレバ也、同外川アルニ至テハ終ニ一致ニ歸ス第二十ハ一川ナレドモ、是ナ九萬夫ノ外ニ[illegible]セバ、三百ナ[illegible]ヒテ猶一直ナ列ス也、井田同外ノ川モ必同直ナ[illegible]ワニ非ズコレヲ幾ニ違ストハイフ也、但此川トイフハ人造ノ川ニハアラズ、自然ノ川ナレバ只其大抵ヲイフト心得ベシ（図第二十一山川地勢ノ大略ヲイハヾ、古ヨリ雨山ノ間ニハ必水アリ、雨水ノ間ニハ必山アリトイヘバ、マヅ一條ノ大川アリ、左右ヨリ多少ノ小川流レ入ニ、其間山林等交リテ大概一同ノ地ヲ容ベキヲ以テ、此ノ如ク定ムルナルベシ、其實ハ廣狹大ニ同ジカラザル者アルベキナリ）

都鄙長レ田幷賦役

都鄙田ヲ授ル事六鄕ニ同ジク、上地ハ一家ニ百畝、中地ハ二百畝、下地ハ三百畝、上中下ヲ通ジテ一家二夫ノ田ヲ受ル也、一通ノ地山陵林麓等三分ノ一ヲ減ズレバ六十夫トナル、（山陵・林麓等三分ノ一ヲ去事總計ノ上ニテ去モアリ、又一同一成ノ上ニテ去モアリ、鄕遂ノ地ハ總計ノ上ニテ去ヌルツモリ也、是ハイマダ去ザルモノヲ一通一成ノ上ニテ減ズルツモリヲイフ也）一家二夫ヲ受レバ三十家也、（此内公田アルユヱ、實ハ二十七家弱也）一成ノ地三分一ヲ減ズレバ六百夫、一家二夫ヲウクレバ三百家也、（公田ヲ除レバ、二百六十七家弱也）一終ノ地三分ノ一ヲ減ズレバ六千夫、一家二夫ヲ受レバ三千家也、（公田ヲ除レバ二千六百六十七家弱也）一同ノ地三分一ヲ減ズレバ六萬夫、一家二夫ヲウクレバ三萬家也、（公田ヲ除レバ二萬六千六百六十七家弱ナリ）毎家ノ人數ハ替ルコトアルベカラズ、賦役ノコト不レ詳

○一井九夫ノ内、一夫ハ公田ニテ私田ハ八夫也、然レドモ賦稅ヲ計ルニハ、公田ヲモ加ヘルコト古法也トイヘリ

附云五經異義授レ田九等ノ差アリ、九等トイフハ、度・鳩・辨・表・數・規・町・牧・井也、是皆井ノ別名ト心得ベシ、（一度一鳩ナドトイヘバ、則一井ノ事トナル也）度トイフハ、九井ヲ以テ一井ニ當ル地也、惡地也、鳩トイフハ、度ヨリハ少ヨロシキ地ニテ、八井ヲ以テ一井ニアツル也、辨ハ七井ヲ以テ一井ニアテ、表ハ六井、數ハ五井、規ハ四井、町ハ三井、牧ハ二井ヲ以テ一井ニ當ル也、本文ニ載ル三等ハ井・牧・町ノ三ツニアタレリ、規・數以上ノ惡地ハ稀ナル故、其ソモリヲ省ケルナルベシ

漢志廬舍ノ說

漢書食貨志ニ廬舍ノ說アリ、ソレハ一井九夫ノウチ私田八百畝八夫ヲ八家トス、サテ公田百畝一夫ノ内二十畝ヲ廬舍トイヒテ廬ヲ結ブ所トス、是漢志ノ趣也、先儒コレヲ附演シテ、孟子ノ五畝ノ宅トイフ是也トテ、二十畝ヲ八家ニワクレバ一家二畝半ヅヽトス、猶二畝半ノ宅地城邑ノウチニアリ、コレヲ合セテ五畝ノ宅トイフ、春ニナレバ各其田中ノ廬ニ出テ農事ヲ勤メ、冬ハ皆邑中ニ入也トイヘリ、シカレドモ如此ナレバ公田ハ百畝ニアラズ八十畝也、又八家皆私百畝トアレドモ、是ニテハ八家ノ者ハ百二畝半也、サレバ漢志ノ說ハ誤ナルベシト先儒イヘリ

都鄙出軍ノ法

小司徒鄉註ニ司馬法ヲ引テ都鄙出軍ノ法トイヘル者其故ヲシラザレドモ、今姑ク舉之左ノゴトシ

都鄙及邦國境内ノ軍ハ、車馬・甲兵ノ類皆民ヨリ出ス也、賦法輕キ故トイヘリ

一　通　三十家（公田ト共バ二十六家半強也、成・終・同ジ是ニ倣テ見ルベシ）

馬一疋　士一人　徒二人

一　成　三百家

革車一乘　士十人　徒二十人

一　終　三千家

革車十乘　士百人　徒二百人

一同　三萬家

革車百乘　士千人　徒二千人

右士トイフハ甲士（甲士ハ在車士ト注セリ）徒トイフハ歩卒也、皆十家毎ニ一人ヲ出スモリナリ（公田ナサレバ八家半强一人ナ出ス也）

邦削邦縣邦都總計

都鄙ノ事大カタ前ニイヘルガゴトシ、邦削ノ地ハ王城ノ四方二百十里ヨリ三百里ニイタル地也、凡二十同アリ、此地ニハ大夫ノ采邑方二十五里ノ小國六十三アリ、是ヲ家邑トイフ、王ノ子弟ノ疏遠ナル者大夫ト同ジク此内ニアリ、（大夫ノ田二十七、致仕セル大夫ノ田二十七、王ノ子弟ノ田九ツト王制ニ見エタリ、只大抵ヲイフト見ルベシ）家邑ノ地スベテ三同・九十三成・七十五井・田法井田也、其餘ハ公邑及祿士ノ地也、上ニ見エタリ〇邦縣ノ地ハ王城ノ四方三百十里ヨリ四百里ニイタル地也、凡二十八同アリ、此地ニハ卿ノ采地方五十里ノ次國二十一アリ、コレヲ小都トイフ、王ノ子弟ノ常ナミナルモノ卿ト同ジク此ウチニアリ、（六卿ノ田六ツ、致仕ノ田六ツ、三孤ノ田三ツ、王ノ子弟ノ田六ツト王制ニ見エタリ）小都ノ地スベテ五同・二十五成・田法井田也、其餘ヲ公邑及祿士ノ地トス〇邦都ノ地ハ王城ノ四方四百十里ヨリ五百里ニイタル地也、凡三十六同アリ、此地ニハ公ノ采地方百里ノ大國九ツアリ、コレヲ大都トイフ、王子母弟ノ親シキモノ公ト同ジク此ウチニアリ、（三公ノ田三ツ、致仕ノ田三ツ、王ノ子弟ノ田

ニツトエ暫ニ見ユ大都ノ地スベテ九同、田法井田也、其餘ヲ公邑采士ノ地トス

邦國大小郊内郊外ノ制及郷遂出軍ノ法

畿外諸侯ノ邦國五等公・侯・伯・子・男ノ替リアリ、公爵ノ國ハ方五百里二十五同也、圖第二十二コレヲ大國トス近郊二十五里、遠郊五十里、方百里一同ノ地也郊内ハ田法溝洫ヲ用フ、三郷郊内ニアリ三軍ヲ出ス、三遂郊外ニアリ、是モ三軍ヲ出ス、一遂ニ諸侯ノ國ニハ遂ナシトモイヘリ一家各一人ヲ出ス也、スベテ天子郷遂ノゴトシ、郊外ノ田法ハ井田也、邦國田ヲ授ル法ハスベテ六遂ニ同ジ境内ノ軍ハ丘甸ノ法アリ後ニ畢、境内トハ郊外ノ地ヲイフ也○侯爵ノ國ハ方四百里十六同也圖第二十三コレモ大國トス近郊二十五里・遠郊五十里、三郷三遂也、其餘スベテ公爵ノ國ニ準テ知ベシ○伯爵ノ國ハ方三百里九同也第二十四是ヲ次國トス近郊十五里、遠郊三十里、二郷二遂也○子爵ノ國ハ方二百里四同也第二十五是ヲ小國トス近郊五里、遠郊十里、一郷一遂也○男爵ノ國ハ方百里一同也圖第二十六是モ小國トス近郊五里、遠郊十里、一郷一遂也（王制ニ公侯田方百里伯七十里、子男五十里ト見エタルハ夏ノ制トイヘリ、然ルニ周ノ初メモ夏ノ制ト同ジカリシ事ハ、武成ニ列爵惟五、分土惟三トアルニテシルベク、其後周公攝政ノ頃ニ至リテ九州ノ地ヲ廣クシテ、爵ニ從ヒ邦國ヲモ五等ニ分テルコト、大司徒ニイヘル如クナルベシト、是久先儒イヘリ、今本文大司徒ニヨレリ○殷ノ制ハ爵三等ニテ公・侯・伯也、其他ハ夏制ノゴトシ）

但一説ニ侯爵ノ國モ次國ト稱シテ、二軍ヲ出ストモイヘリ

爵尊クシテ國小サク、爵卑クシテ國大ナルモノモアリ、一概ニ泥ムベカラズ

邦國境內出軍ノ法

小司徒丘甸ノ法、乃經土地、而井牧其田野、九夫爲井、四井爲邑、第二十七四邑爲丘、四丘爲甸、第二十八四甸爲縣、第二十九四縣爲都、以任地事、而令貢賦

司馬法出軍ノ制、四井爲邑、四邑爲丘、丘十六井也、有戎馬一匹、牛三頭、四丘爲甸、甸六十四井也、有戎馬四匹、兵車一乘、牛十二頭、甲士三人步卒七十二人、干戈備具、是謂乘馬之法

此丘甸ノ法ハ前ニ記セル井田ノ一成一同ニ付テ立タルモノニテ、一甸ハ一成ニアタリ、四都ハ一同ニ當ル、スベテ別事ニ非ズトイヘリ、然ルニコレハ四數、彼ハ十數ニテ全ク合コトナシ、一甸六十四井ノ田ヲ以テ一成一百井ノ內ニ入ルレバ、緣邊一里三十六井ヲ餘ス也、此事ニ付テ種々ノ說アリ、マヅ丘甸ハ實ニ稅ヲ出スモノニ就テ立タル法ニテ、其緣邊ノ一里ハ洫ヲ治テ（井田ノ法前ニ擧ル趣ニテハ、一成ノ地十洫アリテ、左右ハ澮トナル也、舊說ハ一成ノウチニ洫アルコトナク、洫ヲ以テ一成ノ外ヲ繞ヒタル也、一同ノウチニモ澮ハナク、澮ヲ以テ同ヲ繞ヘリ）稅ヲ出サヌ者ユヱ省キタル也トイヒ、サテ一甸ハ六十四井ニテ方八里、「四甸爲縣」トアレバ、縣ハ方十六里、「四縣爲都」トアレバ、都ハ方三十二里ナルヲ、カクテハ其數齊整ナラズシテ一同ノ田ニ合ザルニヨリテ、縣都ヲ計ル時却テ一甸ノ傍四面ニ一井ヲ加ヘテ（洫ヲ治ムル故除キタルト云、傍ノ一里ヲ今又加フル也）方十里トシテ、ソレヲ四ツ合セテ一縣方二十里トシテ數ヲ合セ、一同ノ地ニ四都ヲ入テ、（縣ハモト方十六里ナレバ、一都ハ方三十二

里、四都ナレバ方六十四里ナリ、然ルニ甸ノ四面ニ一里ヅヽヲ加ヘテ方十里トシ、ソレヲ四ツ合セテ一縣方二十里トシ、又四ツ合セテ一都方四十里トシタルモノ故、四都ハ方八十里トナリテ一同ノ地ニ入也）緣邊十里ハ溝ヲ治ムル故、除キタルトイヘルナド牽强殊ニ甚シク聞ユ、或ハ緣邊ノ一里ヲ除タルハ山陵林麓ヲ減ジタルナルベシトイフ說モアリ、又ソレヲイカヾトイフモアリ、又丘甸ハ溝・畛・洫・澮ノ類ヲ去タル者也トイフモアリ、スベテ決定セズ、案ズルニ、丘甸ノ法ハ税賦ノタメニ設タルモノニテ、一同一成ノ法トハ意味違ヘリ、一同一成ハ山陵林麓ヲ除テモイフベク、コメテモイフベシ、丘甸ハ專ラ田地トナリタル上ニテ其税賦ヲイフナレバ、コヽニテ山陵林麓ヲ去トテ、緣邊一里ヲ除クニハ及ザルベシ、又一成ノ地ハ百井也、タトヒ溝・畛・洫・澮ヲ去テモ井數ニ違ヒハ有ベカラズ、一甸ハ六十四井ナレバ溝・畛・洫・澮ヲ去タル者トイフ說モ信ジガタシ、サレバ緣邊ノ里ヲ除タル意ハイカナル故トモ知ベカラズ、强テ其說ヲナサバ皆牽合ニ落ベシ、然レドモ一甸ハ則一成ノ地ナルコトハ疑アルベカラズ、其ツモリヲ以テ一同ハ則百甸ニアツベキ也、其故ハ都鄙ノ條ニ載タル司馬法出軍ノ法ハ、一成ニ革車一乘トアリ、又一同ノ出賦戎馬四百匹、兵車百乘モ一成一乘ノツモリ也、然レバ一甸六十四井、兵車一乘トイフモノ、則一成ナル事疑ナク、一成ゴトニ一甸ヲ入ルレバ、一同ハ百甸ナルベキコトモマタ論ヲ不レ俟、是本軍賦田税ノタメニ設タルニテ、田法ニ拘ルニ非ル故、丘・甸・縣・都スベテ一成一同ノ數ニ合コトナシ、又小司徒ニ丘・甸・縣・都ノ四ツヲ擧タルハ、田賦

ニ就テイフナリ、司馬法丘甸ヲ擧テ縣・都ヲイハザルハ、軍賦ノタメニハ縣、都ヲ用ルニ及ザルユエ也、如レ此見ル時ハ井田ノ制、丘甸ノ法相妨ル所ナクシテ通曉ナルガゴトシ、サテ一邑ハ四井三十六夫也、一丘ハ十六井方四里百四十四夫也、此地ヨリ馬一匹、牛三頭ヲ出ス、一甸ハ方八里五百七十六夫也、此地ヨリ兵車一乘、牛十二頭、甲士三人、歩卒七十二人合セテ七十五人ヲ出ス、七家半強ヨリ一人ヲ出ス也、（若公田六十四夫ヲサレバ五百十二夫トナル、シカレバ七家弱ニシテ一人ヲ出ス也、モシ又一成ノ地民家不レ足時ハ、他ノ地ヨリ加ヘテ軍賦ノ數ヲ上ルナルベシ）コレヲ丘甸ノ法トイフ、諸侯邦國ノ境内皆此法ヲ以テ軍ヲ出ス也、其卒伍ハ皆鄕遂ノ法ト同ジ○一甸ノ出軍甲士三人、歩卒七十二人ノ外、炊家子十人、固守衣裝五人、廐養五人、樵汲五人合セテ二十五人アリ、（此內ニモ甲士一人アルベシトイヘリ、）又重車小荷駄車也一乘アリ、然レバ一甸合セテ百人也、シカレドモ炊家子等二十五人ハ副貳ノ者ニテ、正數ニハイラズトイヘリ

○竊ニ案ズルニ、鄕遂ノ軍ハ每家一人ヲ出ス事、經文ノ趣疑フベキ所ナキガ如ク、其餘力ナキヲ以テ車馬甲兵ハ官ヨリ給スル事モ、司兵兵ヲ授ル文アリ質人馬ヲ授ル事アリナドニ證アレバ、マタ異論アルベカラズトイヘドモ、其輕重多寡ノ甚シキ猶疑ナキコト能ハズ、司兵質人等ニ兵馬ヲ授ル文アレドモ、是モマタマヅ皆民ヨリ出シテ官ニ收メ、然シテ後官コレヲ給スルナルベキモ知ベカラズ、サレバ彼丘甸ノ法ヲ推テ考フルニ、十同、九十萬夫ノ賦ハ兵車千乘甲士三千人、歩卒七萬二千人、合セテ七萬五千

人ニテ六軍ノ數ニアヘリ、王畿ノウチ郷遂十二軍アリトイヘドモ、一時ニ征スルコトナケレバ、郊甸ノ兩地合セテタヾ六軍トイフベシ、然レバ此六軍ハ郊・甸合セテ十六同ノ賦ナルベキカ、十六同ノ地山陵林麓等三分一ヲ減ズレバ十同、六十六成餘也、モシ又漢志ニヨリテ一百分ノ三十六ヲ減ズレバ十同、二十五成也、此地ヲ以テ十同ニアタル軍ヲ出スコト相應ナルベシ、タヾシ此十同餘ノ地ニアル者互ニ替リテ出ルニハ非ズ、其人ハイツモ郷遂ノ衆ナルベケレドモ、其費ヲ助ル事ハ近郊・遠郊、及邦田ノ民預ラザル者ナカルベシ、(若又不易・一易・再易三等ノ田ヲ通ジテ、一家二夫ヲ受ルノ例ヲ以テイハヾ、二十同ノ地ニシテ後初テ十同ノ賦ヲアツベシ、今十同餘ニシテ地猶狹ケレバ、其不足ノモノハ邦甸・邦縣・邦都ノ公邑ヨリ助ルナルベキカ)サテ如レ此ナレバ六郷六遂及邦國ノ境皆此一甸七十五人ノ法トナレバ、諸侯郷遂ノ軍モ同事ナルベシ、然レドモ畿内采地ノ賦ニ限リテ其制異ナルベキヤウケナシ、只同一法ナルベキ也、八家一人ト云ヲ以テ天下ノ通法ト見ルベキカ(公田ヲ去テ云ハ七家一人也、先儒云、王畿百萬井ノウチ山陵林麓等三十六萬井ヲ減ズレバ六十四萬井トナル、一井八家ナレバ凡テ五百十二萬家也、萬乘ノ賦ハ七十五萬人ナル故、コレ七家ニテ一兵ヲ賦スル也、七家替リテ一兵ヲ出スナレバ、王畿ノ内凡ソ七タビ征シテ始メテ一遍スル也、孫子ニ「興レ師十萬、不レ得レ操レ事者、七十萬家」トイヘルモ、七家一人ヲ出ス證トスベシトイヘリ)又六軍七萬五千人ハ十同ノ賦ナル故、王畿一百同ノ地ヨリコレヲ出セバ十征シテ一遍スナドトイフ説モアリ)

シカレドモ愚考當否ヲシラザレバ、コヽニ附記シテ參考ニ備フ

附庸閑田

附庸ハ五等諸侯ノ外ニテ小國也、方五十里ニ滿ズシテミヅカラ天子ニ通ズルコト能ハザルニヨリテ、大國ニ附テ達スル者也、閑田ハ諸侯封地ノ外イマダ附庸ヲ封ゼザル地也、（畿內ノ公邑ノ如シ）人ヲ封ズレバ則附庸也、イマダ封ゼザルハ閑田也ト心得ベシ（軍制皆邦國境內ノ如クナルベシ）

邦國卿大夫ノ采地

公ノ孤ト侯伯ノ卿ハ方百里、公ノ卿ト侯伯ノ大夫トハ方五十里、公ノ大夫ト侯伯ノ下大夫トハ方二十五里、子男ノ臣ハ明文ナシトイヘリ（易ノ訟卦注ニ、小國之下大夫采地方一成、其稅三百家）

邦國郊內及境內ノ總計

畿外侯服ヨリ蠻服マデ六服ノ間ヲ諸侯ノ封國トス、王制鄭注ニヨルニ周ノ九州方七千里ニテ、方千里ノ者四十九也、其中ノ千里ヲ王畿トス、其餘四十八アリ、八州各方千里ノモノ六ツヅヽ也、一州ノ封國方五百里ノ者四ツ、方四百里ノ者六ツ、方三百里ノ者十一、方二百里ノ者二十五、方百里ノモノ百六十四、スベテ二百十國ニテ、方千里ノモノ五ツト方百里ノモノ五十九也、其餘方百里ノ者四十一ヲ附庸閑田ノ地トス、（王制本文ニ凡四海之內九州、州方千里、州建百里之國二十、七十里之國六十、五十里之國百有二十、凡二百一十國トイヒ、又八州々二百一十國トイヒ、マタ凡九州千七百七十三國ト

モ見エタルハ殷ノ制トイヘリ）.

賦税ノ軽重

税ノ軽キハ賦重ク、賦ノ軽キハ税重シ、孟子ニ三代ノ税法ヲ論ジテ其實皆十一也トイヘルハ、三代田法各異也トイヘドモ、賦税ヲ合セテ計ル時ハ、皆十一ニ過ザルヲイヘル也ト先儒イヘリ

	正税	園廛	賦役	出軍	車馬甲兵
近郊	十一	十一	三剤	毎家一人	取二于官一
遠郊	十一	二十之三	三剤	毎家一人	取二于官一
邦國郊内	十一	○	○	毎家一人	取二于官一
六遂及四廛公邑	十一	十二	下剤	毎家一人	取二于官一
邦國郊外三遂二遂一遂之地	九一	○	○	毎家一人	取二于官一
邦國境内	九一	○	○	八家一人	自出
畿内采地	九一	○	下剤	十家一人	自出

右圖子ハ分明ナラザルモノ也

軍士ノ糧食諸用官ヨリ給セズ

周禮ニ九賦九式ナドイヒテ、（冢宰大府等ニ見ユ）財用出入ノ事詳ナレドモ、スベテ軍旅ノ備ヲイハズ、サレバ軍

人ノ糧食諸用官ヨリ給スルコトナク、皆ミヅカラ辨ズルナルベシト先儒イヘリ（義疏ニハ、道ニ在テハ遺人職道路ノ委積ヲイタシ、畿外ニ出テハ諸侯ノ國々其所ニオイテ資糧ヲ給スルナルベシトイヘリ）

車乘ノ法

戰車ノ用動キテハ敵ヲウチ、止リテハ營ヲナシテ將卒ヲシトミ、サテハ兵器衣裝ヲ運ブ、其利用大也トイヘリ、兵車ニ數種アリ、戎路（王ノ車即革路也）廣車（横陳ノ車）闕車（陳ヲフサグ車）苹車（蔀ム車）輕車（驅引ノ車）ナド云、（此五ツヲ五戎トイフ也）是皆革車ニシテ戰ニ用ル車也、是ヲ戎車トモイヒ、轂長キ故長轂トモイフ、サテ一車（馬四匹ヲ以テヒクナリ）甲士三人、歩卒七十二人合セテ七十五人也、一卒百人ナレバ一車ニ二十五人ヲ餘ス也、此ハ次ノ車ニツケテ次第ニオクリテ、車四乘ニ人三卒（三百人）トス、然レバ二十乘ニ三旅、（千五百人）百乘ニ三師、（七千五百人）五百乘ニ三軍（三萬七千五百人）千乘ニ六軍（七萬五千人）ナリ、六軍千乘ハ古ノ定制也トイヘリ

一車ゴトニ重車一乘（牛十二頭）炊家子等二十五人アリ、コレハ今ノイハユル小荷駄也

○凡ソ車ハ九乘ヲ小偏トシ、十五乘ヲ大偏トシ、（左傳ニコレヲ廣トモイヘリ）二十五乘ヲモマタ大偏トス、此大偏ヲ五ツ合セテ百二十五乘ヲ伍トイフ、コレ車ノ卒伍也トイヘリ、車ノ卒伍トイフ事ハモト周禮司右ニ見エ、小偏大偏等ノ事ハ司馬法及左傳ニアリ、然レドモ本文車乘ノ法ト其數合ザル故姑ク論ゼズ

○一車七十五人ノウチ甲士三人車上ニアリ、左ハ弓ヲトリ、右ハ矛ヲトリ、（右ヲ車右トイフ、天子ニハ戎右ノ官アリ、）中ハ御ヲ主ル也（將帥ノ車ハ御者左ニアリ、將帥中ニアリ、右ハ替ルコトナシ、弓ヲトル者ハ乘ザル也）其

餘七十二人、三ツニ分リテ前拒二十四人前ニアリ、左角廿四人左ニアリ、右角二十四人右ニアリ、各車ヲ離ルヽ事ナク、車ニツキテ進退シテ戰フ也、左傳桓ノ五年ニ先偏・後伍・伍承・彌縫トアルナドハ、車ヲ先ニシ歩卒ヲ後ニシテ、其車ノ隙ヲバ歩卒ヲ以テ補タル也）此法春秋ノ頃マデ殘レリシニ、戰國以後遂ニ廢レタリトイヘリ

萬乘之主千乘之國百乘之家

第三十 一同萬井ノ地戎馬四百匹車百乘ヲ出スト一同ノ地ハ百成也、一成ゴトニ一甸ヲ入テ、馬四匹車一乘ヲ出スナレバ、百成ニテ馬四百匹車百乘トナル也）コレ卿大夫ノ采地ノ大ナルモノニテ、コレヲ百乘ノ家トイフ（コヽニ諸侯ノ臣ノ家ヲイフ也、）第三十一 又同十爲封トテ、此同ヲ十重ネテ長サ千里、廣サ百里、積十萬井（九十萬夫）ノ地ヲ封トイフ、コレヲ方ニスレバ方三百十六里餘ノ地トナル、是ヨリ戎馬四千匹、車千乘ヲ出ス、是諸侯ノ大國ニテコレヲ千乘ノ國トイフ、（諸侯ノ大國公爵ノ國ハ方五百里、侯爵ノ國ハ方四百里也、然レバ邦境一封ヲ限トスルニアラズ、コレハ一封ノ地ヲイルヽニ足ヲイフナルベシト先儒イヘリ、又一封ニ滿ル國ヲバ成國トイフ、公侯ノ國ハ成國也）第三十三 又「封十爲畿」トテ此封ヲ十合セタルガ天子ノ畿方千里也、戎馬四萬匹、兵車萬乘ヲ出ス、故萬乘ノ主トイフ也（漢志司馬法）

文政十二己丑十月六日　藤陰　鱗川　同　校

徽法考 終

徹法考附圖

第一 九服圖

或稱謂九畿

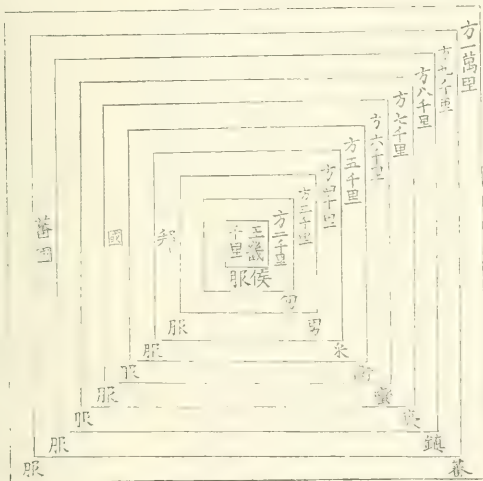
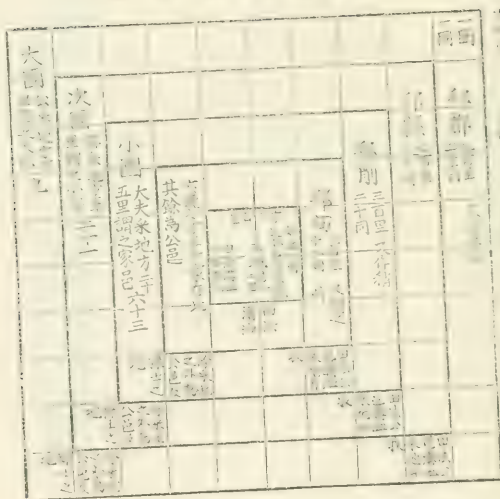
王畿與九服共方萬里

第二

王畿圖

據作雒文為圖

小國大夫采地方二十五里謂之家邑六十三

共餘為公邑

郊內謂之國中

郊外謂之野

又城中及王畿

亦皆謂之國中

城外謂之野畿

外謂之四郊

家邑小都大

都皆謂之都

鄙

鄉在溝在溝洫法即貢法也〔十貢七一〕公邑及邦國都內亦用之

第二
步百爲
畝三伐
三畝圖

長百步
伐尺一
畎尺一

第四
畝百爲夫圖
夫閒有遂遂上有徑

方百步
遂廣深各二尺
畝長百步闊一步

第五
十夫有溝
溝上有畛
圖

第六
百夫有洫洫上有涂圖

第七

千夫有澮澮上有道圖

第八

萬夫有川川上有路圖

第九　九百夫爲一成圖

方十里

百夫　百夫　百夫
百夫　百夫　百夫
百夫　百夫　百夫

澮　道
洫
澮　道　澮　道　澮　道

第十　九萬夫爲一同圖

方百里

萬夫　萬夫　萬夫
萬夫　萬夫　萬夫
萬夫　萬夫　萬夫

路　川
路　川
路　川

第十一

近郊遠郊圖

方二百里（四同）

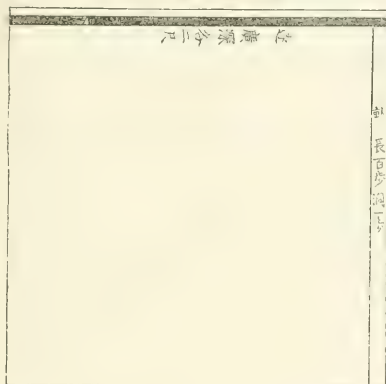
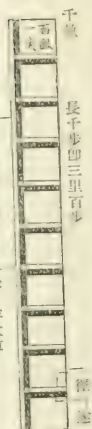
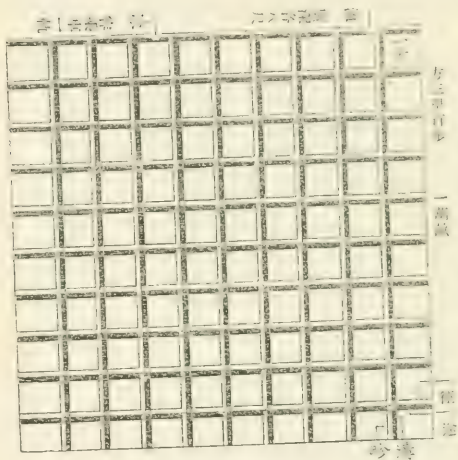
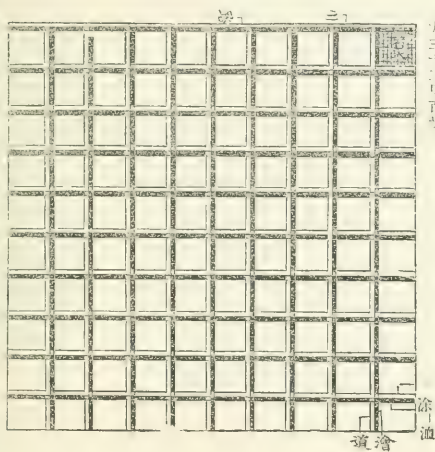
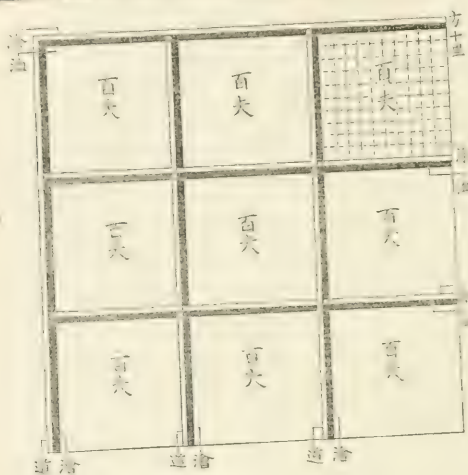
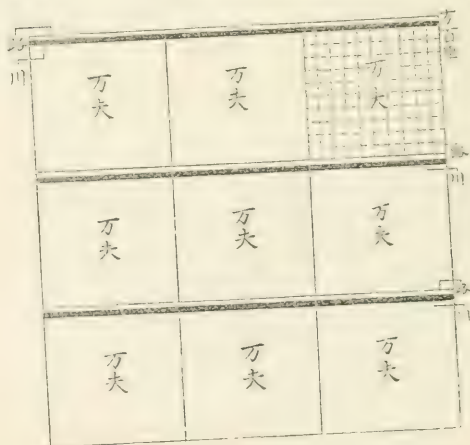
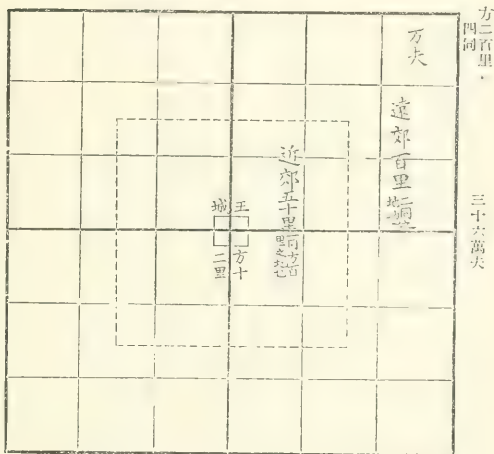
万夫

遠郊百里（二同之地）

三十六萬夫

近郊五十里（一同方百里之地）

王城

方十二里

六鄉之衆居于近郊遠郊之圖

凡四同三十六萬夫三分去一（十二萬夫）二十四萬夫（二同六十六成又六百夫）六鄉之民七萬五千家通不易一易再易家受二夫則十五萬夫（一同六十六成又六百夫）其餘九萬夫（一同）爲廛里場圃九等之田

第十二

邦甸圖

十二同

一同

一百八万夫

近郊遂郊之地

六遂之民在此

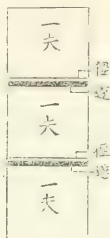
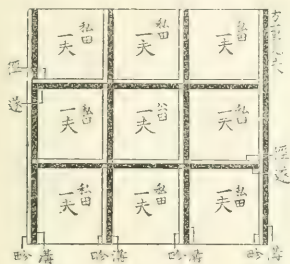
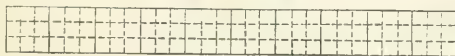
凡十二同一百八萬夫三分去一（三十六萬夫）餘七十二萬夫（八同）六遂之民七萬五千家通不易一易再易六家受十三夫則十六萬二五千百夫（一同八十成又五百夫）其餘五十五萬七千五百夫（六同十九成又四百夫）爲公邑

○都鄙井牧法即助法也○九一○邦國郊外亦用之
畝百爲夫圖與鄉遂同

第十三
夫三爲屋圖

一夫
徑
遂
一夫
徑
遂
一夫

第十四
屋三爲井圖

私田 一夫　私田 一夫　公田 一夫
私田 一夫　公田 一夫　私田 一夫
私田 一夫　私田 一夫　私田 一夫
徑 遂　徑 遂
畛 溝　畛 溝　畛 溝　畛 溝

凡九十夫三分去一三十夫餘六十夫通不易一易再易一家受二夫則三十家去公田言之則爲二十七家弱

一通所出
士一人、徒一人、馬一匹
則毎十家出一人也去公田言之則爲八家半强出一人也

第十六

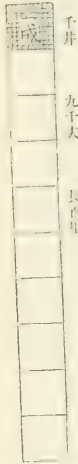
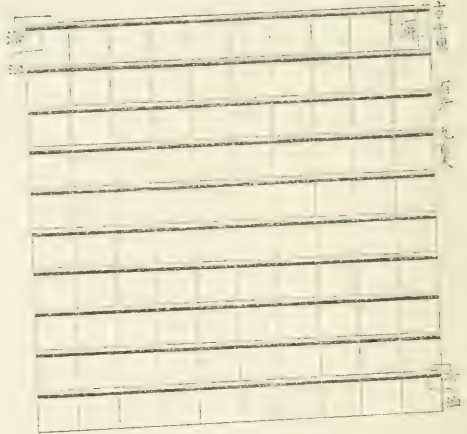
通十爲成圖

方十里

百井 九百夫

澮

洫

十洫

凡九百夫三分去一（三百夫）餘六百夫一家受二夫則三百家去公田言之則爲二百六十七家弱

一成所出

革車　一乘

士　十人

徒　二十人

第十七

成十爲終圖

千井

九千夫

長百里

三十澮

凡九千夫三分去一（三千夫）餘六千夫一家二夫則三千家去公田言之則爲二千六百六十七家弱

終所出

革車一乘、士百人、徒二百人

第十八

終十爲同圖

凡九萬夫三分去一三萬夫餘六萬夫一家受二夫則三萬家

去公田言之則爲二萬六千六百六十七家弱

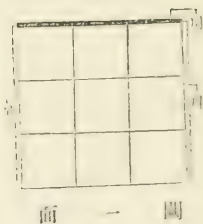
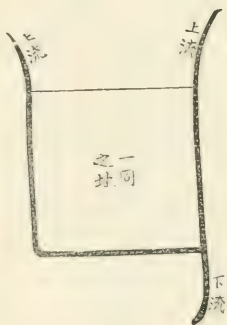
一同所出

革車　百乘

士　千人

徒　二千人

第十九
溝洫九万夫之三川繞
外邊圖一面圖
万夫
面一圖
第二十
井田同外之川
不繞四面圖
上流
一同之地
下流
又圖
上流
上流
一同之地
下流

第二十一

山川地勢大概圖

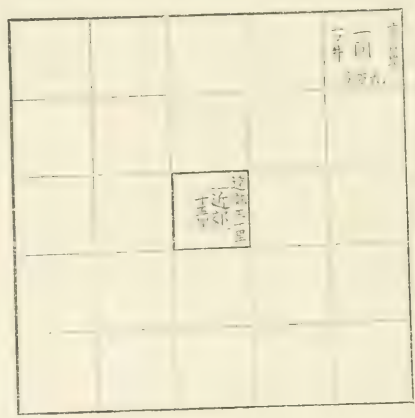
姑就邊海之地圖之餘須準知

○封國五等　在侯服以外畿服以內之意

二十五同　二十五萬井　二百二十五萬夫之地也

第二十二

公國方五百里圖

郊內滿漁

三鄉三遂　鄉在郊內遂在郊外

並一家出一人

境內井收

一甸所出九百人

兵車　一乘

戎馬　四匹

牛　十二頭

甲士　三人

步卒　七十二人

餘甲士　一人

炊家子等二十五人

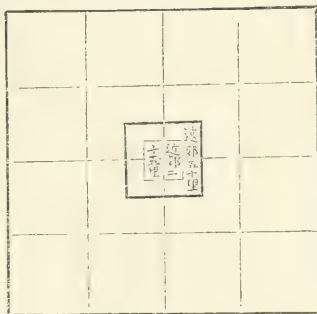
第二十三

侯國方四百里圖

十六同　十六萬井　百四十四萬夫之地也

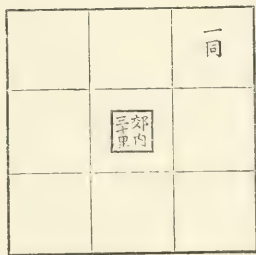
三鄉三遂

或云二鄉二遂郊内三十里

第二十四

伯國方三百里圖

九同　九萬井　八十一萬夫

二鄉二遂

第二十五

子國方二百里圖

第二十六

男國方百里圖

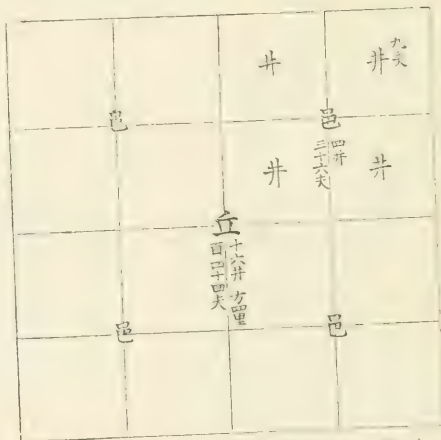
一同萬井

九萬夫

郊内十里

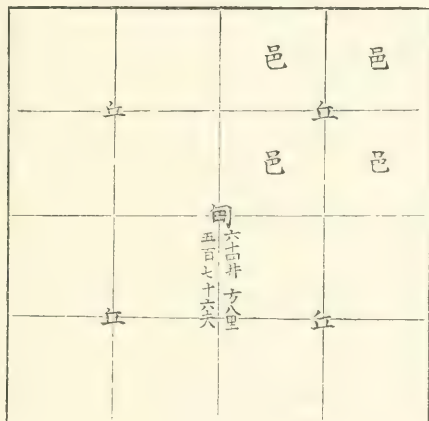
一鄉一遂

第二十七

四井爲邑四邑爲丘圖

一丘所出

戎馬一匹 牛三頭

第二十八

四丘爲甸圖

一成中容一甸

一甸所出

戎馬　四匹

兵車　一乘

牛　十二頭

甲士　三人

步卒　七十二人

則七家半强出一人也

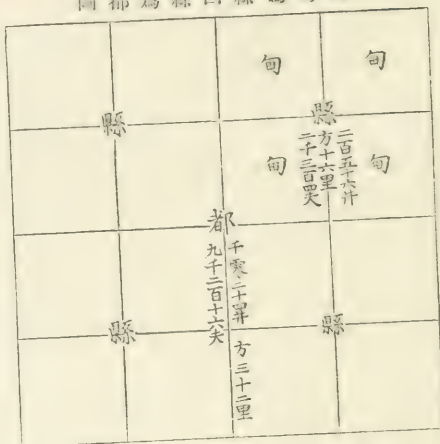
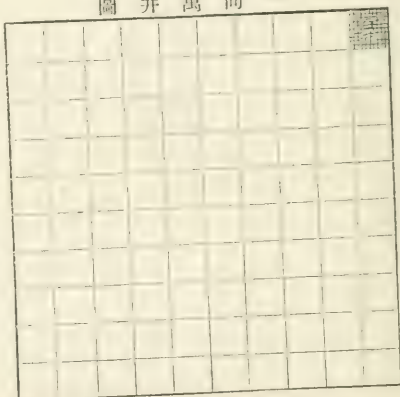
去公田言之則爲七家

弱出一人

第二十九

四甸為縣四縣為都圖

第三十

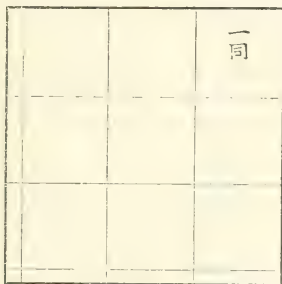
一同萬井圖

一同萬井戎馬四百匹車百乘此卿大夫采地之大者是謂百乘之家

百井卿一成也每成容一甸出戎馬四匹車一乘一同凡一百甸乃出戎馬四百匹車百乘

第三十一
一封十同圖

一同

千成　十萬井　九十萬夫

第三十二
一封開方之圖

一封十萬井戎馬四千匹車千乘此諸侯之大者是謂千乘之國

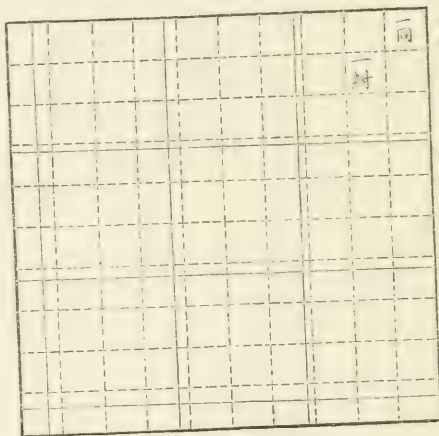
第二十三

十封方千里圖

一同

一封

百同

百萬井

九百萬夫

畿方千里百萬
井戎馬四萬匹
兵車萬乘故稱
萬乘之主

徹法考附圖終

井田附言

三木量平著

井田附言

三木量平著

王制曰、古者周尺八尺爲レ歩、今者周尺六尺四寸爲レ歩、古者百畝當二今東田百四十六畝三十歩一、古者百里者當二今百二十一里六十歩四尺二寸二分一

此説ニ從テ本朝神武天皇ヨリ以還傳來之夏尺ヲ以テ、漢人之百四十六畝三十歩ヲ還元シテ、是ヲ量リ觀ルニ、今ノ八寸二分七厘六毛ニシテ、歩ハ今之四尺九寸六分五厘六毛ニ當ル、亦周尺六尺四寸ヲ以テ漢人之歩トスル時ハ、周尺ハ今之七寸七分五厘八毛七五ニシテ、歩ハ今之四尺六寸五分五釐二毛ニアタル、亦周尺八尺ヲ以テ殷尺トスル時ハ、殷尺ハ今之一尺零三分四厘五毛ニシテ、歩ハ今之六尺二寸令七厘ニ當ル、継ヲ以テ孟子之所謂夏后氏ハ五十ニシテ貢シ、殷人ハ七十ニシテ助シ、周見ヽ人畝ニシテ徹スト有、井法ニ因リ之ヲ量リ觀ルニ、漢之一夫ハ方百二十間四尺九寸八分六厘ニシテ今之方百間、此平積一萬歩、亦殷之一夫ハ方八十三間四尺ニシテ今ノ方百三間二尺七寸、此平積一萬七百一歩九分二毛、亦夏之一夫ハ方七十間四尺二寸五分九厘三毛ニシテ、此平積五千歩、亦今

之尺ヲ以テ假ニ周尺トナシ、漢人之說ニ附會シ觀レバ、夏尺ハ今ノ一尺四寸一分四厘二毛ニシテ、步ハ今ノ八尺四寸八分五厘三毛、亦殷尺ハ今之一尺一寸五分五厘七毛七六ニシテ、步ハ今之六尺九寸三分四厘六毛五、亦又漢尺ハ今ノ一尺一寸三分二厘八毛二八ニシテ、步ハ今之六尺七寸九分七厘五毛六、亦本朝ニ傳法スル所之漢尺ヲ以テ今之尺ニ比スレバ、夏尺ヨリ短キ事二寸五分ニシテ、今之七寸五分、步ハ今之四尺五寸、百畝ハ今之間ニ比スレバ方七十五間、此平積五千六百二十五步、是ヲ今之段ニ比スレバ一町八段七畝十五步ニシテ、町ハ今之四十五間、是ヲ井ニ比スレバ今之二百二十五間、此平積十六町八畘七畝十五步也、外ニ四十五間阡陌溝洫之部ヲ加ヘテ、今之方二百七十間ニ當ル

經文ニ古者周尺八尺ヲ以テ步トスト云シハ殷尺也、本朝ニ傳法トスル漢尺ヲ以テ、經文ニ因リ漢人之說ニ從ヒ殷尺ヲ量リ觀ルニ、殷尺ハ今之九寸三分七厘五毛ニ當ル、經文ニ東田ト言シハ東漢之田ト謂ル事也、其證經文ニ古ハ周尺八尺ヲ步トス、今ハ周尺六尺四寸ヲ步トスト錄スル時ハ、周代之作ニ非ル事明也、亦古之百畝ハ今之東田百四十六畝三十步ニ當ルトアルハ、禮記ハ東漢ニ作リシ事疑ナシ、然ル時ハ殷之步ハ今之五尺六寸二分五厘、此說ニ因テ孟子之殷人ハ七十畝ニシテ助スト言ルヲ量觀ルニ、方八十三間四尺、今之間ニ比スレバ七十八間二尺六寸二分一厘、此平積六千百五十二步一分令三八此段別今之二町五畝二步二分ニシテ一夫之田也、町ハ今之五十六間一尺五寸、一井

ハ今之二百三十六間三尺七寸二分五厘四毛、此平積五萬五千三百六十八歩九分三厘四毛、此段別今之十八町四段五畝十五歩也、外ニ五十六間一尺五寸阡陌溝澮之部ヲ加テ、今之方三百三十七間三尺ニ當ル、亦經文ニ周尺八尺ヲ歩トシ、今ハ周尺六尺四寸ヲ歩トスト云ルニ因ル時ハ、周尺ハ今之七寸令三一二五ニシテ、歩ハ今之四尺二寸一分八厘五毛、此説ニ因テ周人ハ百畝ニシテ徹スト云ルヲ量リ觀ルニ、百畝ハ方百間、今之間ニ比スレバ七十間一尺八寸七分五厘、此段別今之一町六段四畝二十三歩八厘四毛七六ニシテ一夫之田也、町ハ今之四十二間一尺一寸二分五厘、一井ハ今之二百十間令五寸六分二厘五毛、此平積四萬五千四百九十四歩六分令二毛八四、此段別今之十四町八段三畝四歩六分令二毛八四也、外ニ四十二間一尺一寸二分五厘、阡陌溝澮之部ヲ加テ今之方二百五十三間七寸五分ニ當ル、亦右之説ニ因テ、夏后氏ハ五十畝ニシテ貢スト云ルヲ量リ觀ルニ、五十畝ハ今之七十間四尺二寸五分九厘三毛、尺ハ今之尺歩ハ今之歩成故、此平積五千歩、此段別今之一町六畝六畝二十歩ニシテ一夫之田也、町ハ今之町、一井ハ今之二百十二間七寸七分七厘六毛、此平積四萬五千歩、此段別今之十五町歩也、外ニ四十二間二尺五寸五分五厘四毛、阡陌溝澮之部ヲ加テ今之方二百五十四間三尺三寸三厘三毛ニ當ル、王制ニ因ル時ハ、殷之一井ハ夏ヨリ過タル事一萬三百六十八歩九分三厘四毛ニ、亦周ハ夏ヨリ少事五百五歩三分九厘七毛也、是漢儒附會之説、紛々トシテ觀ルニ由ナシ

程伊川曰、古者百畝止當二今四十畝一、今百畝當二古之二百五十畝一

曰ニ古ト言シハ周畝之事也、此説ニ因テ量ル時ハ、宋尺ハ今之一尺一寸二分四毛ニシテ、四十畝ハ方六十三間一尺四寸七分ニシテ、今之七十間五尺一寸五分八厘二强、百畝ハ方百間ニシテ、今之方百十二間二寸四分二强、亦周之二百五十畝ハ百五十八間六寸九分强弱ニシテ、今ノ百十間四尺七寸五分八厘也、雖モ亦伊川周尺ヲ不レ知シテ、宋尺ヘ附會シタル説也、此説ニ因時ハ却テ宋尺ヲモ誤ル也、宋尺ハ伊川之言ル今之一尺八分三厘ニ强シ、然ルヲ周尺ヲ不レ知シテ周尺ヲ説ク故ニ、其誤レル語ニ因ル時ハ、今之一尺一寸二分四毛ニ當レ共、其實ハ今之一尺八分三厘二强、唐之一尺ハ今之六寸、歩ハ今之三尺六寸也、地ヲ畫スルニハ六尺五寸之尺ヲ以テ正ス、今之尺ニ比スレバ三尺九寸百歩ニシテ五丈、雖ノ夏尺ニ比スル時ハ六十五歩ト成、是ヲ六十二除ケバ、一歩ハ夏尺之六尺五寸ト成、是ヲ六ヲ以テ除キ尺トスレバ、一尺八分三厘三毛三ト成、是即チ今本朝之京間也、「子張問、十世可レ知也、子曰、殷因二於夏禮一所二損益一可レ知也、周因二於殷禮一所二損益一可レ知也、其或繼レ周者、雖二百世一可レ知也、即所謂宋因二於唐禮一其所二損益一又如レ此也、」今京間ト云モノハ宋法ニ效テ古法ヲ失ヘル也、近代清人ニ王士禎ト云ル者有、乾隆年間周尺漢銅尺歴代十五尺之尺考ヲ錄ス、其指トスル所ヲ觀ルニ、「乾隆十一年丙寅丁卯間、從二故工部郎侍孫岷瞻治下河在江都一、得二漢銅尺一一、上有二文字一、曰二慮虎銅尺、建初八年八月十五日造一、後又得二一尺一、爲二司馬文正布帛尺一也」ト云リ、此二尺ヲ以テ徴トシテ、其

餘ハ孟子ヨリ以後之文儒記スル附論之説ニ因テ辨ズル所、其言巧ニシテ克ク非ヲ飾ルニ足ル、長キ故妄ニ略ス、精ハ居易錄ニ因テ觀ルベシ、其錄スル所ノ尺ヲ以テ孟子之言ル三代之井法ヲ量リ觀ルニ悉ク齟齬セリ、然ル時ハ之ヲ言フ事ハ可ニ似テ、之ヲ行フ時ハ遊ト言ル古言ニ等キ者乎、亦士禎ガ得ル所之漢銅尺、布帛尺、何ゾ克其眞正タル事ヲ極ンヤ、奸邪之徒世財ヲ掠ン爲ニ贋物ヲ造ル者多シ、士禎博ク書ヲ讀ム事ヲ好共、孔門傳授之法ヲ知ラザル故ニ、言ヲ飾ルノミニシテ正疑ヲ辨ズル事不能、二尺ヲ得テ寶トス、亦云、漢儒有指黍二尺之辨、此尺取指取黍、因不能定、今以中指中節量之、適當一寸、無毫髮差、及纍黍試之、正足一百何指與、指與黍之偶符若此耶ト云フ何ゾ中指之中節ヲ以テ量リ、毫髮之差無事ヲ得ンヤ、中指之中節ヲ以テ量ラバ厘分ヲモ差フベシ、文儒多言ヲ好ミ、首尾ノ合ハザルヲモ愧ズ、子曰、古者言之不出、耻躬之不逮ト、夫古言曰、布手知尺、舒肱知尋ト、又曰、側手爲膚、按指知寸、布手知尺トハ此其體ヲ取テ云也、度ヲ定ルノ法ニ非ズ、又曰、度量以粟生之、十粟爲分、十分爲寸、十寸爲尺ト云フ、十粟ハ一粟ニ造ルベシ、禹貢ニ曰、百里賦納、總二百里、納銍三百里、納秸服四百里、粟五百里、米此其地之遠近ヲ以テ納之、法異ル也、秸ハ穀也、服トハ穀之皮也、穀之皮有事人之衣ヲ服シタルガ如シ、故ニ服トヱフ、粟トハ玄米ヲ謂フ、米トハ舂米ヲ云フ、一粟ハ一分ニ从ブベシ、然共疎漏之説也、又黍寸ハ樂人諢世之説也、史記律書黄鐘長八寸七分、註ニ漢書黄鐘長九寸ト云フハ九分之寸也ト有、黄鐘

管長九寸空圓九分、可下以二子穀秬黍中者一千二百一實上其龠重十二銖、蓋度量權衡、皆生二於黃鐘一ト、夫人間未ダ尺斗之定ナキ以前、聖人何ゾ先ニ樂器ヲ造ンヤ、人ハ食有テ後衣有、衣有テ後宅有、宅有テ後夫婦・父子・君臣之道有、君臣・父子・夫婦之道有テ後諸道百伎之藝有、然ヲ漢儒還元之法ヲ不レ知シテ妄説ヲ述ル也、然其正名之法ヲ知ラザル者ハ多岐迷ヒ易キ乎、故ニ爰ニ錄ス、傳曰、夫度ハ蠶糸ヲ以テ定ム、一糸ヲ忽トシ、十忽ヲ絲トシ、十絲ヲ毛トシ、十毛ヲ釐トシ、十厘ヲ分トシ、十分ヲ寸トシ、十寸ヲ尺トシ、十尺ヲ丈トス、士禎其正僞ヲ辨ズル事不レ能シテ無稽之説ヲ述ルハ、所謂一犬虛ヲ吠ル時ハ衆犬實ヲ吠之類也、然共其是非ヲ辨ズル事不レ能シテ、士禎ガ説ヲ奇トシ信ズル者多シ惜ムベシ、士禎孔門傳授之法有事ヲ知ラザルノ失也、故ニ「孔子曰、必也正レ名乎、亦曰、視二其所一以、觀二其所一由、察二其所一安、人焉廋哉、人焉廋哉、亦曰溫レ故而知レ新、可二以爲一師矣、」其古ヲ溫テ新ヲ知ルヲ還元ノ術ト云フ、士禎若シ聖法之五術有事ヲ知ラバ、周之都シタル郱鎬ニ往テ、周武之造ル井疇ヲ正繩ヲ以テ正サバ、周尺之正法ヲ知ルベシ、然共是ヲ知ルニ法有、其法トハ所謂孟子之潤澤也、其潤澤之法ヲ知ラザル時ハ其尺ヲ知ル事不レ能、夫潤澤之法タルヤ、一井ニシテ五十有二尺五寸、百夫ニシテ一百有七十五尺、一萬夫ニシテ一千有七尺、百五十尺外ニ畎洫ト溝畦トノ差四尺五寸ヲ加フ、故ニ一井ニシテ五十有二尺六寸三分五厘、是ヲ一井之法方六ニテ除キ、町ニシテ八尺七寸七分二厘五毛ノ減有、止余長五十八間三尺二寸二分七厘五毛也、此法ヲ不レ知時

ハ正綱モ亦答ナシ、故ニ孔子曰、我非二生而知一レ之者一、好レ古敏以求レ之者也ート、亦曰、夏之禮吾能言レ之、杞不レ足レ徵也、殷禮吾能言レ之、宋不レ足レ徵也、文獻不レ足故也、足則吾能徵レ之矣ート、是古之道ヲ溫ルニハ、其國其奇ニ因テ溫ネ徵トスルヲ以テ孔門之法トスル事明也、是ニ因テ之ヲ觀ルニ、禹之正法ヲ溫ムト欲スル時ハ冀之安邑ニ有、湯之正法ヲ溫ント欲スル時ハ豫之亳ニ有、士禎二尺ヲ覚テ奇トス、此人小惠有ン、身ヲ殺シテ以テ仁ヲ成ス事能ハジ、然其古ヲ好ハ事切ニシテ經術ニ心ヲ煉リ、二尺ヲ覚シハ稱スベシ、其正僞ヲ辨ズル事能ハザルハ天性也、故ニ其人ハ惡ムベキニ非ス、其說ハ惡ムベシ、嗚呼士禎ガ十五尺考ノ辨說有ヲ以テ、後人其失ヲ傳フモノ多カラン

又浪華之文儒中井積善、其弟履軒ト言ル者有、積善說ヲ作リ、履軒尺步ノ圖ヲ偽リ、以テ井田說ト題シ、其序ニ官生ニ答ト有、其錄スル所今之曲尺七寸二分ヲ以テ周尺トシテ、孟子之所謂夏・殷・周、三代之井積ヲ各本法ニ聞キ其圖ヲ載ス、其尺タルヤ僻、其圖タルヤ更ニ由ル所ナシ、一笑ニ堪タリ、其步尺ヲ譯スルニ及テハ、周以前二代皆同シト言フ、故ニ其圖ノ解タルモ阡・陌・徑・畷・畦・畔・畹・畸・通・達・毓・[illegible]・漆・[illegible]・溝・洽・溢・渠・署・淯・洛・場・書・道路・防禦・附陂・潤・澤・瀦・濱・瀕・理・塘・堤・川・河ノ名目ダモ記スル事不レ能、其余之名位且夫潤澤之如キハ省テ知ル所ニ非ズシテ、唯井法之本積ノミヲ以テ自得シタル事ト思ヒ、其辨ニ曰、井田之說今少シ分明ナラズ、定說ハナキヤノ旨承ルナド、言リ、其錄スル所ヲ見ルニ、井法萬中ノ一モ知ル事ナシ、世ノ諺ニ謂ル盲蛇物ヲ怖レ

ザルノ徒乎、爾ラザル時ハ、洪々トシテ端ナキ事ヲ知ズ、管ヲ以テ天ヲ覗キ、淵也トシテ古ヲ語ルノ意有、其文長故爰ニ略シ、錄セズ、夫井田之圖タルヤ、是ヲ縦ニ觀ル時ハ乾位之三通、之ヲ衡ニ見ル時ハ坤位之三違ス、是ヲ動運スル時ハ八卦方位ヲ正ウシ、之ヲ上下スル時ハ六十四卦ト成、亦其周ヲ觀ル時ハ二十八宿ヲ列シ、其數ヲ算フル時ハ三十六禽ヲ布ク、其大數ヲ算ル時ハ九州之封疆正ク、衰甦之位備リ、是ヲ潤澤シテ十千隅ニ疆理スル時ハ河圖洛書ヲ出シ、其沿革之精ニ至テハ里•邑•丘•甸•服•郡•縣•國•州•大小次之邦式定リ、公卿大夫士十等之殺祿等々、井法ハ諸道之原ニシテ其廣大成事斯之如シ、其精明成ニ至テハ筆端ニ盡スベキ事ニ非ズ、故ニ孟子ヨリ以還二千餘年和漢井法ヲ說ク者ナシ、何ゾ市儒之辨ズベキ處ニ有ンヤ、「子曰、君子於ニ其所ニ不レ知、蓋闕如也」ト、彼ガ如一儒生ニシテ君子タルニハ非レ共、博ク書ヲ讀事ヲ好ム時ハ、君子之道ヲ慕フニ似タリ、然時ハ何ゾ己ガ不レ知ヲ以テ、妄ニ無稽之說ヲナシテ其害ヲ千歲ニ遺スヤ、「子曰、不レ知爲レ不レ知、是知也」ト、聖之教有事ヲ知ラズ、是古人之糟粕ヲ喰ヒ、其甘苦ヲ辨ズル事能ハザル之徒也、大和ト浪華トハ其路程僅ニ七八里也、其大和タルヤ神武天皇之都シ玉フ井法之今猶存スル事顯然タリ、其近クシテ眼前ニ觀ル所ダモ此ヲ知ル事不レ能シテ、焉ゾ書史ニ記スル處山海萬里ヲ隔タル異國之制度ヲ知ル事ヲ得ン哉、況ヤ其傳之詳カナラザルモノヲヤ、故ニ予維ヲ誹リ維ヲ詰ルニハ非ズ、先ニ清人王士禎ガ誣說有、今亦爰ニ彼ノ妄說有ヲ以テ後人其失ニ迷時ハ、三代聖王仁政之法

ヲ亡スルニ因テ、其失有ン事ヲ畏レ以テ完説ヲ恵ム也

孟子曰、夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實皆什一也、徹者徹也、助者藉也、孟子之說ニ因テ夏后氏ハ五十ニシテ貢スト言ルヲ量リ觀ルニ、尺ハ今之尺、步ハ今之步、唯古ト今ト異ル者ハ畝ノミ、古代本同百步ヲ以テ畝トス、其徹神武天皇卽中年大和州ニ井田ヲ疆理スルニ夏尺ヲ以テス、然ニ弘仁中ニ至リテ李唐ノ制ニ效ヒ、三十六步ヲ以テ畝トス、李尺ハ夏尺之六寸ヲ以テ尺トス、故ニ步ハ今之三尺六寸也、百步ハ方十間ニシテ夏尺之三丈六尺也、間ニシテ今之方六間、此平積三十六步ニシテ李唐之百步也、故ニ三十六步ヲ以テ畝トス、李唐ニ籍シテ神武天皇之古法ヲ失ル事ハ弘仁中ニ有、亦今三十畝ヲ以テ畝トスルハ千歳拔群之法也、然其耕田之町ヲ以テ是ヲ町里ニ比スル時ハ合致セズ、亦李制ニ比テ論ズル時ハ、其勝レル事十倍セリ、李法ハ矩ヲ私ニス、是夷法也、夏之五十畝ハ今之方七十間四尺二寸五分九厘三毛ニシテ一夫之田也、一井ハ今之二百十二間七寸七分七厘、此平積四萬五千步、外ニ四十二間二尺五寸五分五厘四毛、阡陌溝洫之部ヲ加テ二百五十四間三尺三寸三分三厘、此町今之四町十四間三尺三寸三分三厘也、亦殷尺ハ夏尺ヨリ短事一寸五分四厘八毛四絲二忽七ニシテ、今之尺八寸四分五厘一毛五絲七忽三、步ハ今之五尺令七分令九毛五絲三忽八、町ハ今之五十間四尺二寸五分六厘六毛二八ニシテ、七十畝ハ方八十三間四尺、今之方七十間四尺二寸五分九厘三毛ニシテ一夫之田也、一井ハ今之二百十二間七寸七分七厘、此平積四萬五千步、外ニ四十二間二尺

五寸五分五厘四毛、阡陌溝洫之部ヲ加テ二百五十四間三尺三寸三分三厘、此町四町十四間三尺三寸三分三厘也、亦周尺ハ夏尺ヨリ短事二寸、尺九寸二厘八毛八絲五忽ニシテ今之七寸令七厘一毛一絲五忽、歩ハ今之四尺二寸令四厘二毛六絲九忽ニシテ、町ハ今之四十二間令二寸五分二厘四毛一絲四忽ニシテ、百畝ハ今之七十間四尺二寸五分九厘ニシテ一夫之田也、一井ハ方二百十二間七寸七分七厘、此平積四萬五千歩、外ニ四十二間二尺五寸五分五厘四毛、阡陌溝洫之部ヲ加テ二百五十四間三尺三寸三分三厘、此町(カ)四間町十四間三尺三寸三分三厘也、故ニ夏之二畝半ハ周之五畝也、孟子之說ニ因ル時ハ、夏后氏之五十畝、殷人之七十畝、周人之百畝、何モ同數ニシテ小差ナシ、孟子之說信ズベシ、孟子ハ周人也、道ヲ子思ノ門人ニ學ブト、故ニ孔門傳授之法正ク詳也、王制ハ東漢之作、漢人ハ周尺ヲ以テ殷尺之八寸三分一厘九毛四絲五忽七トス、故ニ夏尺之七寸令三厘一毛二絲五忽トス、孟子ハ夏尺之七寸令一絲五忽トス、漢人附會之說由ナシ

秦孝公制二百四十歩爲レ畝也、

維ヲ還元シ量リ觀ルニ、秦尺ハ夏尺之六寸四分五厘四毛九絲四忽ニシテ、歩ハ今之三尺八寸七分二厘九毛六絲四忽也、漢尺ハ漢人之記スル所今之七寸五分ニ隨フ也、本朝ニテ銅鐵ヲ量ルニ漢尺ヲ以テ法トスト云リ、今刀劒ノ定法二尺二寸五分トスルハ、劉氏三尺ノ劒ヲ以テ法トスル者也、漢尺七寸五分ヘ三ヲ乘ズル時ハ二尺二寸五分ト成也、其餘釘、鍼之類都テ七寸五分ヲ以テ一尺ト定ム、今唐之尺

ハ今之六寸ヲ以テ一尺トシ、三尺六寸ヲ以テ歩トス、故ニ唐之百畝ハ今之方六十間也、外ニ町ニ五間ヲ加テ阡陌溝洫之部トス、因テ地ヲ盡スルニハ三尺九寸ノ間ヲ用ユ、此平積一萬歩也、百歩ヲ畝トシ、千歩ヲ段トシ、萬歩ヲ町トス、畝ハ本朝之三十六歩、段ハ三百六十歩、段ハ畷也、町ハ頃ニ當ル、本朝弘仁中李唐ニ效テ三十六歩ヲ以テ畝トシ、三百六十歩ヲ段トシ、三千六百歩ヲ町トス、周禮畷氏爲鎛器、鎛ハ迫地去艸者、即チ田器也、畷段音同、故ニ段ヲ以テ畷トス、李唐之井畫ハ今之三町ニシテ、町ハ今之六十五間也、方三町ヘ十五間ヲ加テ阡陌溝洫トス、精ハ傳ト図解トニ明也

孟子之所謂夏后氏之五十畝ハ、一畦之内畛・畷・遂・溝之部ヲ除キ、廣五十間長百間、此耕田五千歩也、亦殷人之七十畝、周人之百畝モ右ニ同ジ、別ニ殷周二代之尺ヲ以テ各別ニ井ヲ畫スルニ非ズ、然ヲ前條各半法ニ錄セシ事ハ、王制之誣說ト孟子之正說トヲ分ツガ爲也、亦夏后氏之五十畝、殷人之七十畝、周人之百畝、何レモ其廣五十間其長百間成時ハ、其地凡今ノ一町ニ二町也、然ル時ハ一井ハ方六町成故、九夫ニ非ズシテ十八夫也、方三十三里小半里ハ、萬夫ニ非ズシテ二萬夫也、其軍役ヲ出ス事萬夫、故ニ是ヲ萬夫ト云フ、夫ハ今之農ニ非ズ、則チ所謂農兵也、甲斐州元龜天正年間マデ地下衆ト云者有、其宗子被官ヲ養フ、是井法之夫ニ效ル也、今萬夫ヲ以テ二萬夫也ト云フ時ハ、井法ヲ知ラザル者ハ附會之說ニ泥デ垢ヲ脫スル事不レ能シテ此說ヲ非ル者有ン、故ニ其微ヲ裁テ後ノ誹ヲ防グ、詩大雅噫嘻之章曰、「十千維耦」ト有、十千ハ一萬夫也、耦ハ二夫也、論語微子曰、「長沮桀溺耦而耕」ト有、

耦ハ耒ニ从禺ニ从ブ、耒ハ耟也、禺ハ田ニ从、内ニ从、内ハ獸足蹂地也、合テ禺トス、禺ハ遇、偶ト同意、「不レ期而倶至也、」亦易ニ陽卦ヲ奇トシ、陰卦ヲ耦トス、耦ハ比也、耦耕ハ則チ並耕也、是ニ由テ之ヲ觀ル時ハ、十千耦ハ其夫二萬夫成事明也、然ニ是ヲ萬夫ト云ハ、一萬夫ハ其防禦ヲ守リ、一萬夫ハ其軍役ヲ勤ル故也、其出役一萬夫成ヲ以テ此ヲ萬夫ト云也、夫井法ハ天地自然之成數ニ因テ先王是ヲ爲ル、故ニ治水開田之法ノミニ非ズ、天地之間有用之法悉ク井法ヨリ出ヅ、因テ一代トイヘ共度量衡ヲ革ルノミニシテ、書井ヲ革ルニ非ズ、其徵トスルハ神武天皇之理メ玉フ井書ニ因テ知ルベシ、田ハ地理勢脈ニ隨テ墾クモノ故、平地ハ悉ク井法ニ從ヒ作レ共、山際林間亦ハ山側水涯ニテモ、其地高下有所ハ、法ヲ井法ヲ取テ其形容方正ノミニ拘ラズ、或ハ方、或ハ斜、或ハ長、或ハ短、或ハ圓、或ハ歪、然共阡陌・溝洫・澮・洛・道路・疆理ハ其方正ヲ主トス、若其地ニ臨デ悉ク式ニ當ラザル所ハ、彼ヲ以テ是ニ代ルノ法有、故ニ「孟子曰、若夫潤二澤之一則、在二君與一レ子矣」ト言リ、精クハ天皇井書之地ニ因テ觀ルベシ

夫規矩準繩者、天地自然之正器也、井田之法、以二規矩準繩一爲レ原也、治水開田之法、以二井法一爲レ原也、仁義禮智之道、以二夫法一爲レ原也、君臣父子之道、以二井法一爲レ原、貢税庸調之法、以二井法一爲レ原也、賞善罰惡之法、以二井法一爲レ原也、堠堡城廓之法、以二壁法一爲レ原也、隍減溝池之法、以二浮法一爲レ原也、社稷祭祀之法、以二墓法一爲レ原也、置郵傳命之法、以二涂法一爲レ原也、射御之道、以二圃法一爲

原也、浚溝方舟之法、以準法為原也、堵嵩垣墻之法、以圬法為原也、軍旅隊伍之法、以陣法為原也、攻伐防禦之法、以兵法為原也矣、此其大略也、總国家有用之要法、悉以井法為原也、」故ニ「孟子曰、夫仁政必自經界始、經界不正、井地不均、穀祿不平、是故暴君汙吏必慢經界、經界既正、分田制祿、可坐而定也」ト、之ヲ以天下ニ行フ時ハ、人心正クシテ孝悌忠信ヲ知ル、之ヲ邦国ニ行フ時ハ、国ヲ富シ兵ヲ強シ、武術ヲ張ルノ要法也、故ニ孟子ノ曰、「地方百里、而可以王」ト、地方百里ハ今之十六里二十四町也、然其地ヲ理ル事井法ニ因ル時ハ、水旱之憂ナク地性立直リ、薄地モ厚地ト成ル、故一疆理方三十三里小半里ハ今之方五里二十町ニシテ一萬夫ヲ養フ、其一夫之耕田今之段別ニ比スレバ一町六段六畝二十歩ニ當ル、故ニ今之農戸ニ比スル時ハ一夫ハ三戸ニ充ツベシ、然ル時ハ農家六萬戸ニ充ツベシ、今五畿内之高田畑上中下平均シテ、今之一段今之一石五斗ニ當ル、此高ハ大高故ニ貢米一石五斗ヲ納ル、豊凶ニ比スレバ五斗取ノ三石ニ中ル、本朝弘仁中四段歩ヲ以テ一戸トシ、其高十石今ノ四段八畝也、式ニ因ル時ハ六十一戸半ニ當ル、甲・信・參ハ四十六戸八分七厘五毛ニ中ル、兩總ハ三十一戸二分五厘ニ當ル、故ニ五畿内六萬九千四百四十四戸四分四厘四毛ニ中ル、此国家之大要也、故ニ「孟子曰、夫天未欲平治天下也、如欲平治天下、當今之世、舍我其誰、吾何為不豫哉、」是ニ由テ之ヲ観ルニ、孟子之時ニ當テ天下井法ヲ知ル者ナシ、井法ヲ知レルハ孟子一人成事間也、士民ニ知ラスベキ法ニ非ズ、是ヲ以テ孔子ハ不言、故ニ「孔子曰、不在其位、不謀其

政ニ比ト、聖言禁誡之深キ事斯ノ如シ、亦本朝日本紀ヲ見ルニ、義ヲ以テ之ニ比シ、象ヲ以テ之ニ比シ、類ヲ以テ之ニ比シ、假ヲ以テ之ニ比シ、音ヲ以テ之ニ比シ、信ヲ以テ之ニ比シ、後世讀者ヲシテ安ク其義ヲ諭ラザラシム、是其法ヲ秘スル事頗明也、此ヲ以テ今日本紀ヲ解スル者希也、故ニ其經文ヲ錄シテ其傍ニ描キ解ヲ加テ、非法之深秘ヲ述ル也

日本紀卷三　神日本磐余彥天皇稱神武天皇

紀曰、民之朴素、巢棲穴住、習俗惟常、夫大人立制、義必隨時、苟有利民、何妨聖造、且當披拂山林、經營宮室、而恭臨寶位、以鎭元元、上則答乾靈授國之德、下則弘皇孫養正之心、然後兼六合以開都、掩八紘而爲宇、亦不可乎、觀彼畝傍山東南橿原地者、蓋國之墺區乎、可治之、是月即命有司、經始帝宅、庚申年秋八月癸丑朔戊辰、天皇當立正妃、改廣求華胄、時有人奏曰事代主神共三島溝橛耳神之女玉櫛媛所生兒、號曰媛蹈韛五十鈴媛命、是國色之秀者、天皇悅之、九月壬午朔乙巳、納媛蹈韛五十鈴媛命以爲正妃、辛酉年春正月庚辰朔、天皇即帝位於橿原宮、是歲爲天皇元年、尊正妃爲皇后、生皇子神八井命。神渟名川耳尊、故古語稱之曰、於畝傍之橿原也

神日本神ハ明ナリ磐余磐ハ大石也、荀子困安磐石ニ義ヲ安泰ニ執ル也、余ハ語之舒也、又我也彥天皇彥ハ美士也、尙書傍ク作彥ヲ求ムト有立制立ハ建也、置也、制ハ正也、法禁也、初ト同意、裁衣也、衣ヲ裁チ是ヲ從ヒ服トスル也、故ニ法ヲ造リ民ニ道ヲ敎ル是ヲ制ト云也義必隨時義ハ宜也、其心ヲ曲ザル也、故ニ忠也、羊ハ群ヲ好デ、一羊之向ノ方ニ向ヒ衆羊方ヲ異ニセズ、人モ其心ヲ曲ズ外心無時ハ人是ヲ信ズ、信ズル時ハ從ル、故ニ義之有所ハ人是ニ歸スル事羊之群ヲ爲

代ニシテ一畿ス、故ニ更也、替也、亦苗田是ナ苗代ト云事、代ハ苗代ナリ

三嶋溝橛耳神之女 三ハ陰陽和合ノ数也、詩大雅噫嘻之章曰、「駿發ニ私田、終三十里、亦服ニ爾耕一、十千維耦、」周禮曰、「凡治ニ田野一、夫間有レ遂、遂上有レ徑、十夫有レ溝、溝上有レ畛、百夫有レ洫、洫上有レ涂、千夫有レ澮、澮上有レ道、萬夫有レ川、川上有レ路、計ニ此萬夫之地方三十三里小半里也、耜廣五寸、二耜爲ニ耦、一川之間萬夫、故有ニ萬耦耕一ト、耜廣九寸ハ當レ爲ニ六寸、書寫ノ誤ナラン、又周禮之說モ匠人制ト同ク僻害多シ、然共是ナ帶ビル時ハ、其說長キガ故ニ爰ニ載セズ、精ハ國ニ明カ也、嶋ハ島之俗字、海中之國ナ島ト云フ、亦三島ハ三萬夫ニ當タル也、一島ハ方三十三里、小半里ハ今之六町也、川河四方ナ遶フ、故ニ島ニ比スル也、和州ニ三島有、故ニ三井樓有、其一曰ニ畝傍山一、其二曰ニ耳無山一、其三曰ニ香久山一是也、何レモ方六丁間、是ナ三山ト云フ、香久ハ嗅ニ造ルベシ、曰嗅ハ言ハザル也、人嗅スル時ハ閉口ス、是象義ナ以テ比スル也、溝ハ田溝也、畎ニ通ズルモノナ溝ト云フ、洫ニ通ズルモノナ瀆ト云フ、橛ハ杙也、溝洫ナ補理スルノ具也、耳ハ柔ニ從フモノ水ナ治ル事ハ柔ニスルニ有、剛成時ハ其性ニ逆フ、故ニ瀆ス

玉櫛媛 玉ハ陽精之純也、其美成ナ言ノ、櫛ハ髮ナ梳束スルノ器也、詩大雅良耜之章ニ曰、「其比如レ櫛、以開ニ百室一」ト有、亦鐵齒ハ田ナ磨著スルノ器也、其象櫛ニ似レルナ以テ是ニ比ス、櫛ハ枝相連引也、即チ孕レ子ノ原也、稼之禾ナ孕穀ナ熟スルノ義ニ執テ當トス

媛蹈鞴五十鈴媛 蹈鞴ハ吹鞴之類、革囊ニシテ火ナ吹、鐵ナ煉ルノ器也、其蹈鞴ニ兩意有、其一曰、蹈鞴ハ鐵ナ煉リ、鎡基ナ作リ、水ナ治メ、田畝ナ開ク也、其二曰、父蹈鞴ハ親ラ耕ナ以テ稱トス、又鞴ハ借也、民力ナ借テ田ナ開クナ云フ、是義以テ當トスル也、五十八井一畦、廣一町長二町也、內ニ五十畝ナ納ム、孟子ノ所謂夏后氏ハ五十ニシテ貢ス是也、鈴ハ鐸ニ似テ小サク、形圓ク半裂ニシテ聲ナ出ス、銅珠ナ內ニ納シテ以テ是ナ鳴ス、郡章ノ帶ル所、即チ驛路之符是也、所謂驛鈴也

國色之秀者 國ハ畿外之郡名、畿外前後左右五百里ナ邦ト言、亦邦外五百里ナ國ト言、亦國外五百里ナ部ト言フ也、內ニ含ムモノナ氣ト云、外ニ發スル物ナ色ト云フ、國色ハ美色也、則チ上色、亦禾熟之色、是ナ國色ト云、秀ハ美也、不吐レ華曰レ秀

命 命ハ易ノ乾象、「各正ニ性命一、保ニ合大和一、乃利レ貞也ト有、士ハ貞ナ以テ主トス、貞ナ失スルハ士ニ非ズ、故ニ士ニハ命ナ以テ名トス、亦貞ハ正也、士貞正ナルハ賢也

九月壬午朔己巳納ニ媛蹈鞴五十鈴媛命一以爲ニ正妃一 納ハ容也、禹貢ニ曰、「百里賦納總」ト有、九月禾熟ス、刈テ以テ納ルナリ

尊ニ正妃一爲ニ皇后一 尊ハ宗也、夏商皆妃ト稱ス、周始立レ后、以ニ正妃一爲ニ皇后一ハ、上中下之九位ナ定ル也、此所兩義有、一ハ井界ナ定ルニ拠リ、一ハ皇后ナ立ツルニトル

神八井命神渟名川耳尊 井ハ八夫之耕ス所、亦波井也、渟ハ水止也、是ナ先天之氣ニ譬フ、陽精止テ女孕ム、水ハ陽精之純成モノ、故ニ易ニ天一ト有、一ハ水ナリ

紀曰、天皇二年春二月甲辰朔乙巳、頭八咫烏、亦入ニ賞例一 頭ハ首也、古ハ酣ナ呼テ黎首ト云フ、黎ハ黑木之名、民首ノ黑キナ以テ黎首ト云フ也、烏純黑成故烏ナ以テ稱トス、一井八家有、亦八寸ナ咫ト云フ、字ハ口尺ニ从フ、數聚ナ以テ之ニ比スル也、烏亦陽鳥也、故ニ易乾爲ニ烏、人一ハ陽精之長也、因テ義ナ以テ烏ニ比ス、烏亦反哺之養有ナ以テ人之孝養ニ執也、亦渴烏ハ引水之器其形方ニシテ左右ニ引水口有、前ニ二ツノ吐水筒有、內ニ二ツノ蹈鞴板有、左右更ル帰代シ、更ル水ナ吸、更ル水ナ吐ク、養田之要器也、田ハ稼ナ以テ求本トス、故ニ渴烏ナ以テ之ニ比ス、入ハ出ルノ對、納ル也、亦加ル也、亦賞ハ有功ニ賜フ也、墾田ノ功有ナ以テ此賞ナ與フ也、例ハ類ナリ、各其類ナ以テ

列スルナリ

維本朝其法ヲ秘スル事文意皆斯之如シ、是ヲ以テ世ニ所謂ル國學ヲ唱ルモノ、其古ヲ知ラザル故ニ今ヲ知ル事ナシ、其國名ヲ說キ其事實ヲ說ガ如キハ、己附會之說ヲ爲テ人之耳目ヲ迷ハシ、其餘殃千歲之後ニ建ス、賀茂之眞淵、伊勢之宣長ガ類是也、易ニ曰、各正性命、保合大和ニト、夫大和之名タルヤ理無姦道、事無乖戾、乃天下達道、故曰、大和、由是觀之、則大和之國名、以易爲原也、故名ニ其臣ニ曰ク命矣、亦其流ヲ汲モノ其支ニ遊デ其本ヲ知ラザル故ニ、古言ヲ覚テ徒ニ文ヲ綴リ歌ヲ詠ズルヲ以テ指トシ、其心ヲ正シ其身ヲ修メ邇クハ是ヲ家ニ及シ、遠クハ之ヲ天下ニ及ボスルノ道、神武天皇之教有事ヲ知ラザル也、孟子ハ井法之絶ン事ヲ悲ミ、梁惠・滕文之君ニ說ニ井法ヲ以ス、然其士大夫ノ爲ニ設カズ、維レ孟子モ亦法ヲ秘スル也、故ニ孟子以後井法ヲ說ク者ナシ、杜預ガ左傳ノ註ノ如キモ、其辭ヲ說ガ如キハ可ニシテ、其制度事實ヲ說ガ如キハ失有、然ニ文儒其井法ヲ不知ヲ愧ト思ヒ、却テ井法ヲ誣ル者多シ、亦市儒妄ニ奇ヲ好デ理門ノ正法ヲ破ル、其仁義ヲ講ズルガ如キハ、實ニ矛ヲ借テ主人ヲ討也、孟子若シ井法ヲ說カザル時ハ、後世三代ノ制度ヲ知ルモノナカラン、今三代之制度之遺リタルハ實ニ孟子之賜也、然其孔門傳授之五術傳ハラザル故ニ、孟子以來二千年余井法ヲ說ク者ナシ、古法ノ漢土ニ亡シテ本朝ニ存スルモノ多シ、今井法並ニ五術之傳リタルハ實ニ神武天皇之洪德也、予不才ニシテ文辭ヲ好マズ、唯實ニ傳ル所ノ地方溝洫之術ヲ以テ、本朝之古法ニ隨ヒ三

代井法ノ圖解ヲ詳ニス、然其井法ハ孔子モ其位ニ在ザルヲ以テ說カズ、孟子。梁惠。滕文之什ニ說トイヘ共、其辭ヲ盡サヾルハ其法ヲ秘スル也、亦本朝之正史ニ深秘シヽルヲ鑑ルニ、妄ニ說ベキ道ニ非ル也、今關東苗代之古法ヲ知ラズ、之ヲ甲信ノ法ニ比ルニ畊ニ七升余ヲ費ス、之ヲ平均シ見ルニ、年ニ種穀ヲ費ス事二十萬石ニ充ツベシ、亦鎡基ニ乏シ、因テ無益ノ人力ヲ勞ス、亦諸作養方拙シ、故ニ田ヲ犂キ稼穡ヲ播種シ、維ヲ耕シ維ヲ耘シ、維ヲ培シ維ヲ鎭シ、維ヲ收テ以テ維ヲ納メ、庸調ヲ勤メ、入テハ以テ其父兄ニ事リ以テ其妻奴ヲ愛シ、出テハ以テ其父老ヲ敬ヒ以其親族ヲ睦ス、其孝悌之道ハ以テ國人ニ說ベク、圃ニ射シ泮ニ游シテ、以テ其身ヲ脩其防疆ニ據リ、進デハ以テ敵ヲ討ベク、退テハ以テ守リ衞ベク、上ハ以テ其君父ニ事リ、下ハ以テ其百姓ヲ惠ベク、其宗廟祭祀ノ如キハ以テ士大夫ニ說ベク、井法ヲ以テ經界ヲ正シ、士ハ守リ、農ハ耕シ、工ハ造リ、商ハ賈シ、各正名ヲ以テ其國ヲ富シ、是ニ加ルニ仁政ヲ以シ、武衞ヲ張テ以テ封疆ヲ固シ、其社稷祭祀之如キハ諸侯ニ說ベシ、其余ハ王者之道ニシテ秘スベキ事也、夫三代之隆ナリシハ井法ノ行ハレシヲ以テ也、其井法ヲ行フ時ハ隆ニ、其井法ヲ廢スル時ハ衰フ、周之季ニ及デ井法行レズ、故ニ英雄割據シ、諸侯迭ニ其封疆ヲ侵シ、攻伐止時ナシ、上ニ君臣ノ義ナク、下ニ父子ノ禮ナシ、故ニ孔子之聖トイヘ共其世ニ容レズ、是其井法ノ廢タル故也、是ヲ以テ之ヲ觀ル時ハ、維ヲ如何カスベキ、唯此道ノ絕セム事ヲ畏ル、因テ密ニ是ヲ錄シテ以テ需ニ天命ニ矣

予少ナリシ時白華先生ニ從ヒ論孟詩書ヲ學ブ、是レヲ讀事五六十ニシテ漸ク覺フ、其月ヲ過ルニ逮デ先ニ學ブ處ヲ失ス、先生ノ曰、術ザ性理ニ敵シテ學ニ鈍シ、夫先王ノ道ハ詩書ニ存ス、故ニ孔孟之道ヲ說ク事詩書ヲ以テ徵トス、然其是ヲ讀事濕クシテ、其誦スルニ非レバ其意ヲ知ル事不レ能、因テ古人詩ヲ誦スト云リ、以テ數百ニシテ誦スル事ヲ得ベシト、予性果ヲ好ム、其强シテ讀事ヲ欲セズ、產業素ヨリ治水墾田ノ任タルニヨリ好デ禹貢ヲ讀ム、長ズルニ及デ家ニ秘スル處ノ道ヲ學バン事ヲ請フ、父曰、其漫ナラン事ヲ畏ル故ニ許サズト、享和二壬戌年秋八月家法ヲ傳ノ、其目一曰地方之三實、二曰九上之定位、三曰東貫石之三法、四曰租賦唐調之法、五曰五衛術其一曰量方術、其二曰正名術、其三曰量觀察術、其四曰量步術、其五曰學算術六曰五繪圖其一曰鄉村排地、其二曰逐田宅圖、其三曰山區案作、其四曰邦國割畝、其五曰駐步軍陣七曰推步切判術、其余之支術ヲ學ブ、維ヲ以テ甲斐州ニ存スル所之地方ニ琢磨スル事數年ニシテ、眞正ヲ得ル事多シ、文化九壬申之年春正月東京ニ來リ某知晉之宅ヲ主トス、癸酉年兩總ニ遊ビ、村老ノ用ル處疆理・石斗・徵毛・戶帳等ヲ觀テ、北條家地方之寬滿且ツ國人耕耨之法疎成ヲ知ル、甲戌之年某家ノ食邑大和葛下郡大田村ニ役シテ逐田圖ヲ造ル、且村タルヤ文祿四乙未年豐臣家之治理也、然其今其田圃無位無段別ニシテ、更ニ主トスル所ナシ、皆村長ト奸族トノ爲ス所也、故ニ傳ル所之法ヲ以テ之ヲ推步シテ、悉ク其古ニ復シテ豐臣家之制法ヲ知ル、亦其圖タルヲ觀察スルニ、吾聞ク所之井畫也、因テ奇トシテ其國存スル所ノ遺蹟ヲ甲老ニ温テ、其名ノ徵トスベキ者ヲ得ル事七八、同年十月東京ニ歸スルノ時、某家之食邑三州八幡之作造村ニ往テ、其

長之納ル所検毛貢徹之簿ヲ視ル、此ヲ讀事三返、東照神君之御聖慮洪遠ニシテ、御恩澤之萬代ニ至ル事ヲ恭ニ恐伏ス、文政戊寅之年冬十二月墾田之事有テ、再ビ三州設樂・加茂兩郡ニ往キ、己卯之年春正月東京ニ歸ル、途ニシテ遠州榛原・駿州志太兩郡ノ古法ヲ聞テ、又神祖御軍役之夫法詳明成ヲ覺フ、爾ヨリ以還維ヲ研究スルニ、廣ク諸州ノ遺法ヲ溫ネ、其正ヲ取元トシ、勘考シテ辛巳ノ年秋八月門人之求ニ應ジ初テ地方春秋ヲ述、然其地方ハ國家之大要、故ニ他ニ不レ出、同十月南總ニ遊ブ、亦門人書ヲ送テ曰、今絶タル井田之圖說、勘考シテ其基ヲ開カバ國家之大寶ナラン、嗚呼二千餘年和漢井法ヲ說人ナキハ地方ヲ知ラザル故也、性敏博覽タリ共事實ヲ知ラザレバ、溫古之術ヲ以推明圖解ヲ爲ン事難シ、夫地方ハ國家之大要タルヲ知ラザル故ニ、年々歲々事實ハ失テ紙上糟粕ノ論ノミ殘リ、其原ヲ知ルモノナシ、强メ考正有ン事ヲ請フ、幸田舍之閑靜ニ因テ、今年壬午之春經年溫ル處ヲ以テ還元ノ術ニ從ヒ、前ニ造ル處和州遂田之圖ニ按考スル事晝夜七十日余ニシテ、孟子說ク所之井法ヲ以テ先生之言ニ隨ヒ、徵ヲ詩書ト亦日本紀ト春秋左氏傳トニ取リ、圖ヲ神武天皇之理ル處之井晝ニ效テ其正法ヲ得タリ、熟實圖ト其數トヲ稽ルニ、自然之成數也、因テ聖賢之說ク所附言ニ述ル處ノ法ヲ以テ、之ヲ井法ニ比テ研究スルニ、悉ク其正ヲ得ザル事ナシ、然其其道ノ洪大成ニ至テハ、今爰ニ盡ク明ム事難シ、故ニ其得ル所ヲ以テ之ヲ錄ス、未其得ザル處ハ後日校正シ之ヲ述ン、然其孟子ヨリ以還二千餘年、漢人モ之ヲ知ル事不レ能、本朝正史ニ其道ヲ載ルトイヘドモ、秘言ニシテ其文意ヲ知ル事難シ、

故ニ其法傳ハラザルヲ以テ狐疑ヲ生ズル者多カラン、若シ予ガ述ル所ヲ以テ疑心有バ、附言ニ述ル所孟子潤澤之法ヲ以テ圖スル所之法ニ從ヒ、和州ニ往テ天皇之埋メ玉フ井畫ヲ逐田圖ニ造リ、以テ是ニ合觀シテ其少差ナキ事ヲ知ルベシ、其傳タルヤ三代聖王之秘法、本朝天皇之神秘成ヲ以テ故ニ附言ニ載セズ、孔子曰、我非生而知レ之者、好レ古敏以來レ之者也

文政五壬午年春三月

三木量平謹述

井田附言終

經國本義

三木廣隆述
山田勝理筆記

經國本義

三木廣隆　著
山田勝理　筆記

檢見法之事

田畑良作ノ立毛ヲ見テ坪刈春法シ、其合毛ヲ試テ年ノ豐凶ヲ知リ、稅法ヲ定テ民ノ農不農ヲ知リ、賞罰ヲ正シク爲スヲ檢見ノ要法トス、徒ニ立毛ノ多少過不足ヲ知ルノミニ非ズ、則巡狩ノ法ニ同シ、故ニ皇國神武ノ御法、大和ニ三封疆アリ、其一ニ天畝傍山（アマノウネビ）、其二天耳無山（アマノミヽナシ）、其三天嗅山（アマノカグ）、此三山ハ皆敷方三十六間、高七丈二尺、上壇ノ方十二間苑ノ築出ナリ、其義畝（ウネ）ノ傍ニアレバ、畝ハ方十間、此歩百歩、畝先ハ方六間、此歩三十六歩、方視ヘズ、耳無キ時ハ聞ヘズ、香ヲ嗅グ時ハ口ヲ塞ギ、鼻ヲ呼吸ス、因テ言ハズ、則是三猿ナリ、亦寧樂（ナラ）ノ都ニモ此三山有リ、天ノ神垣山・天ノ袖振山・天ノ手向山、是モ亦垣ノ内ニテハ外視ヘズ、袖ヲ振テ諾ハザルノ義ニシテ聞ヘズ、亦神ニ供物ヲ捧ル時ハ、覆面閉口シテ言ハズ、是レモ亦前ト同義ニシテ、禮ニ所謂ト前後逢延、前有垂旒示不邪視也、傍有紆纊示不聞讒也、前低後伏示恭也、之モ其延ハ音、猿ニシテ三猿ノ義也、亦武總二國ノ境、墨田川ノ上ニ眞乳山ト云封疆アリ、之レ

モ亦同法ニシテ、方三十六間、高七丈二尺、上壇ノ方十二間ノ築山ナリ、其山名比丈ニシテ知ル人ナシト見ヘタリ、古ハ王公此壇ニ登テ、縣邑ノ耕田、禾熟ノ善惡、民屋ノ形勢ヲ眺望ナシ玉フモ、則今世檢見遠見ノ類也、民屋四壁ノ竹木繁疎ヲ見テハ貧福ヲ知リ、家宅ノ荒タルヲ見テ乏ヲ知リ、衣ヲ飾ラザルヲ見テハ、質朴ニシテ能農事ヲ勤ルヲ知リ、美麗ヲ好ヲ見テハ、怠リ驕ヲ知テ、其里ノ貧福盛衰寂賑ヲ知テ徹ルナリ、故ニ定免ハ止事ヲ得ザル時ノ略法也、亦年々豐凶ニモ仍ラズ、前十箇年ヲ平均シテ民ノ農不農ヲ知テ、賞罰ヲ行フハ良法ニ非ズ、豐年ニハ民飽キ、凶年ニハ民苦ム、故ニ平均ノ良法ニ非ズ、亦檢見ニモ色取トテ、坪刈ヤウモ大略ニシテ、前年ノ振合ニ隨ヒ、取箇ヲ定ルコトアリ、此等ノ法行ハレテヨリ、檢見法麁末ニナリ、遠見ニテモ濟ムベキヤウニ心得ルナリ、亦切出シト云フテ、其耕地ノ内ニテ最上ノ出來宜キ所ヲ見立、坪刈爲ルヲ譽レノヤウニ心得ルモ有ナリ、是皆地方ニ拙キナリ、禾ニ養作アリ素作アリ、惡水懸有、素水懸アリ、田ニモ水口有、水末アリ、水口ハ作毛能、流末ハ惡シ、平均ノ法ハ中央ニ因ルコトナリ、故ニ耕地毎ニ叮嚀ニ見廻リ、坪刈合毛、平均過不足ナキヤウニ税法ヲ定、其土地ノ風俗ヲ見テ農不農ヲ知リ、法度ヲ嚴明ニシテ農人ノ倦怠ヲ誡シメ、驕奢ヲ制シ、勸農ヲ賞シ、懈農ヲ罰シテ、民ヲ善道ニ教化スルヲ檢見ノ大要トス、故ニ上ニテハ其耕地ヲ平均シテ取ヲ定メ、下ニテハ其税法ニ隨ヒ、其耕地毎ニ其ノ田ノ出來不出來ヲ巨細ニ見、平均シテ取ヲ附ルナリ、是ヲ免振ト云フ、其法譬バ本途ノ取箇、高一石ニ付五斗ニ當ル所モ、其田ノ土性變リテ惡ク成、

亦ハ用水不足シテ熟セザル歟、又最寄樹木生茂リテ日陰遮リ歟、又水旱風ニテ割附ホドニ納メ兼ル所ハ取來ヲ下ゲ、亦新田ニテモ水懸能、土性立直リ、耕方熟、本途ヨリモ勝ル所有、譬バ高一石ニ取米三斗ノ所モ、五斗ニモ取增ナリ、是等ヲ取增ト云、如此平均スレバ、田每ニ得不得ナク、民ニ利不利ナク、能營者ハ利多ノ、怠リ不農ノ者ハ利少ヶシテ貧シ、此免振ノ法ハ、自然ノ惡シキニ免振シテ、怠農ニテ惡ニハ免振セズ、今諸國一統ニ此法ヲ用ヒズ、偶用ル所モ私有テ、貢米每田ニ過不足アルユヘ、農利等シカラズ、其利多ノ地ヲ德田ト唱ヘ、又安成ト云、利少キ地ヲ高免ト唱ヘ、又高成ト云、其高免高成ト唱ル地ハ、上田ニテモ勤メ耕コト能ハズ、荒地ト成也、財多者ハ安成地ヲ持、財乏キ者ハ高免地ト云所ヲ持也、故ニ安成ト云所ヲ持モノハ、農事ヲ勤ズシテ下作ニ預置、其利潤ヲ得テ富賑、財乏キ者ハ高免地ヲ持ユヘニ、勸農夫モ乏シ、是等ハ皆免振法無キ故ノコト也、如此所ハ、民農ニ怠リ商ニ走ルモノ多シ、因テ田ハ終荒地ト成、貢ハ古ヨリハ格別減タレド、窮民多シテ村柄宜カラズ、故ニ心有モノ、能ク免振ノ法ヲ用バ、年々貢モ增シ、村柄モ立直リ、農ニ怠リ商ニ走リテ、家出他嫁退散ノ者無ルベシ、此法ヲ用ヒザル故ニ、高免ト唱ル地ハ、勤耕テモ作德少シ、貢夫役ヲ勤テ、其田ノ殘德ニテ、耕手間代、糞代、收納ノ引當少キ故ニ、地所ハ村力ヘ差出テ、其身ハ退散爲ル者多シ、是等ノ地所ヲ都テ高免地トノミ心得タルハ、地方ニ拙キ故也、右ヤウナル村々ニハ必隱田有ノ、又背負高モアリ、地所不平均ニシテ、賊吏ノ族、貪欲奸曲ノ徒ニ教タルコトニヤ、檢見・合毛搦・内

見案內帳ニ、譬ヘバ桝入一歩ニ付一升八九合モ有ベキ所ヲ、五合毛、亦ハ四合毛ナドト、合毛少々毛揃帳ヲ僞リ作出コトナリ、是等ハ悉ク上ヲ誣欺ノ邪計ニシテ、罰スベキノ甚シキナリ、慶長寛文度ノ檢見合毛帳ヲ見ルニ、一升毛、亦ハ一升三四合抔ト調記セリ、其心正直ニシテ、ソノ事明白也、故ニ其時代ハ收納米多シテ、御國用不足ナク、民質朴ニシテ、能農事ヲ勤メ怠ラズ、亦父母ノ葬禮、佛事供養等ニハ、其祿相當ニ力ヲ盡シタリト見ヘテ、時代ノ墳墓ヲ見ルニ、當時ノヤウニ輕薄ノコトニ非ズ、其祖ヲ祭ルコトノ厚キ故ニ、諸宗共何國ニテモ、宮寺ノ形勢其土地ニ應ジテ、相應ノ經營ナリ、然ルヲ當時ニ至テハ、農商共ノ私宅ニハ驕ヲ極メ、瓦屋根白堊ノ藏長屋ヲ立、或ハ冠木門、兩扉等ニテ軒ヲ高クシ、棟ヲ聳テ、其閒ニハ泉ヲ穿チ、或ハ堤ヲ築廻シテ、堡塀ニ等シキコト、甚シキ驕奢ト謂ベシ、又商徒ハ身分ヲ辨ヘズ、別莊ヲ搆ヘ、或ハ數寄屋ヲ作リ、庭籬ヲ築キ、諸侯ニ等シキ奢ヲ爲セドモ、其祖先ヲ祭ルコトハ薄シ、故ニ宮寺ハ何處モ破壞シテ、修復造營モ行屆ズ、立朽同ヤウニ成所多シ、之ニ因テ天神地祇ノ御心ニモ叶ハザルニヤ、寒暑不順、風雨多シテ、年穀熟ラズ、漁獵等モ薄ク、山海迄モ德惠ノ少キヿ歎ズベキナリ、聖賢ノ教ニモ、民ハ愚タルベシ、以テ智ナラシムベカラズト、古ハ民ハ甿ト云フテ、其田亡ニ从ブモノ、其亡ハ芒ニシテ、民ノ頭ハ藁ヲ以テ髮ヲ束結タルモノユヘ、脫ル時ハ其象芒ノ如シ、然ルニ御治世二百餘年、太平ノ御恩澤ヲ蒙リ奉リ、國ニ干戈ノ聲ナク、家ニ犯シ掠ルノ賊無ク、四民鼓腹シテ、席ヲ安ジ枕ヲ高クシテ、心ヲ寧シ樂ヲ極ルユヘニ、農商共其身分ニ似アハザル碁・將棊・琴・笛・詩・歌・茶・花・蹴鞠・

弓馬・劍術・書畫等ノ諸藝ヲ學ビ、日ヲ費シ年ヲ積テ、少シク其道ニ至レバ、自ラ君子抔ト交リ誇リテ、能耕シ能織リ能商ヒ能工デ、各其產業ヲ守ル、良農良工商ノ者ヲ見テハ、卑夫野人抔ト賤ヤ謗ル族間々之アリ、罰スベキノ甚キ也、如レ此治世ノ御恩澤ヲ蒙リ奉テ、忝キコヲ知ラズ、父母妻子安堵ニ撫育シ、子孫繁榮、人家相增シ、右ニ准ジ毎年田畑開發モ多シテ、古代ヨリハ貢租モ增ベキ所、却テ百四五十年以前ヨリハ、御收納高二三分通モ減ジタルヤウニ見ヘタリ、如レ此貢ハ少シ減ジタレト、御仁政ニモ相成ラス、僞ル者ハ益僞リ、奢ル者ハ益驕リ、貪ル者ハ彌貪リテ富、正シキ者ハ貪ラズシテ貧シ、稅法ハ徵ルベキヲ取ラザレハ、民驕ニ長ジテ農事ヲ怠ルナリ、工商モ亦是ニ同ジ、諸品價ヲ高シテ多ク利ヲ貪リ、富メルト雖モ終ニハ神明ノ咎ヲ受、罰ヲ蒙テ火・盜・疾ノ害ニ懸リ、或ハ子孫ニ不孝不義ノ惡徒出テ、身ヲ亡シ家ヲ破ルノミニ非ズ、親類出店迄モ究迫ニ及ブ類多シ、故ニ當時ノ風俗ヲ見ルニ、小藩ノ知行所取箇ハ、格別往古ニ變ルコト無レド、諸侯モ慶長以來、永續ノ場所替無キ所ハ往古ニ等シ、數度國替ノ領ハ、ソノ時ニ地方役人ヘ賄賂ヲ以テ、納高ヲ書替後主ヘ渡サルユヘニヤ、其時々納高減ジタル所多シ、亦關八州ハ代官一在役、凡五ケ年ヲ規則トナシタルコトニテ、右手代ノ了簡ニテ賄賂ヲ取、格外ノ減高ヲ爲シテ、古來ノ半減タル所多シ、仍テ村役人モ右ニ倣ヒ、又私欲橫領多シ、故ニ諸國ニ夫錢並ニ御取箇過米取立ノ出入訴事多シ、古ヘモ國政ハ必經界ヨリ始ルト云ヘリ、境界正シキトキハ贓吏行ハレズ、贓吏行ハレザルトキハ訟事少シ、是ニ仍テ之ヲ考ルニ、

其境界ヲ正シクスル法ハ、逐田繪圖ヲ行フニアリ、仍テ諸國村々一ケ村毎ニ、逐田繪圖ヲ造リアルトキハ、些少ノ切添埋地ニテモ明白ニ分ルユヘ、上ヲ僞リ下ヲ掠テ、取筒ヲ自己ノ氣儘ニ上ゲ下ゲスルコト能ハズ、稅法ハ取ベキヲ取ラザレハ、却テ民驕ニ長ジ農事ヲ怠也、譬バ田一段耕テ米一石餘レバ、二段耕テ二石有テ食足リ、三段耕テ衣足リ、四段耕テ住足ルベシ、人衣食住ノ三ツ足ル時ハ、自然ト怠ルモノ下民ノ常病也、又一段耕テ米五斗餘レバ、四段耕テ食足リ、六段耕テ衣足リ、八段耕テ住足リ、一丁耕テ衣食住祭祀ノ具足ルベシ、此一丁ノ田甫ヲ一戸ノ田ト云モノ三道ノ制法也、都テ一夫ニテ一丁耕ス時ハ、三餘ノ外間隙無ルベシ、（所謂三餘ハ、冬ハ歲ノ余リ、夜ハ日ノ余リ、陰雨ハ時ノ余、）小人間隙アレバ、怠テ不善ヲ爲コト多シ、故ニ百姓ハ活サズ殺サズト宜フモ、其義稅法ヲ緩シ夫役ヲ薄クスレバ民間隙有テ怠ル、其怠ル時ハ不善ヲ爲シ驕ル、又稅法ヲ嚴ニシテ夫役ヲ厚クスレバ、民勞テ仆レ離散ス、故ニ稅賦トモニ節ニ爲ヲ以テ政道ト云也

萱畑椚畑萩畑等幷古代束永之事

萱畑・茶畑・萩畑・椚（クノギ）畑等石盛ハ束錢永ト號シテ取ナリ、此永トハ永錢以後ノ稱也、古ハ束ナリ、一步ニ此刈何握、十步ニ何束、百步ニ何十束、一段ニ何百束ト定、其束數ニ隨代錢永ヲ附ルナリ、亦其永ニ依テ石盛ヲ定ル也、譬バ一步ノ刈三十握アレバ、十握ヲ一把トシテ三把ナリ、十把ヲ一拱トシテ、五尺尋（ヒロ）繩ニテ一束ナリ、仍テ三把ヲ今三百步ニ乘ジテ九十束トナル、此九十束ヲ三ニ除キ、一ハ刈、

一ハ持運、一ハ納トス、此納三十束ヲ其山元平均直段ニテ拂、譬バ一束永三文ナレバ、三十束ハ九十文也、是ヲ束永納ト云也、亦是ヲ石盛ニ定ルニハ、其所十ヶ年ノ内穀相場平均ヲ以、譬バ金一兩ニ一石一斗ニ當レバ、永九十文ハ九升九合トシテ取也、尤椚畑ハ毎年下枝刈取、五ヶ年ニシテ本木ヲ取ユヘニ、右ニ准ジテ平均ナリ、亦桑畑楮畑ハ毎年刈取ユヘ、是モ亦其所桑楮直段ノ割合ヲ以テ取也、是等ハ三分一ノ納也、一段ニ何束刈、一束ニ永何十文ト定也、亦束永ヲ石盛ト爲テ戸役ヲ定ル法ハ、金百兩ヲ以テ一戸ニ宛テ五百兩ヲ五戸ニ結、其五戸ハ上農夫ニ准メル夫役ノ勤ル也、四百兩ハ四戸上次農夫、三百兩ハ三戸中農夫、二百兩ハ二戸中次農夫、百兩ハ一戸下農夫ニ准ズ、仍テ金千兩ハ十戸ニ當ル豪商也、此法ハ金一兩ニ付米一石八斗替ノ法ニシテ、今三斗六升入五俵ナリ、拾兩ニ米五十俵、百兩ニ米五百俵、故ニ金千兩、此利足一割ニシテ金百兩也、因テ金千兩ハ士祿ニ比スレバ五百俵ニ當ル、萬乘ノ下輿其封戸四十戸ニシテ、此俵法五ツ三斗五升入五百四十俵餘也、亦千乘モ下輿ニ當ルユヘ、商家ニテモ戸役ヲ勤ルコトハ農家ニ同ジ、上商ハ五戸ノ役ヲ勤メ、大商ハ十戸ノ役ヲ勤ム、故ニ千兩ハ十戸、萬兩ハ百戸、十萬兩ハ千戸、百萬兩ハ萬戸ノ役ヲ勤ベキハ、三道一致ノ制度也、然ルニ今四海泰平安宅ノ御世ニ生レテ御恩澤ヲ蒙リ、夜戸ヲ鎖ザ、ズ、衣食住ノ三ツヲ保チ、妻子臣妾ニ至ミ迄、起居安樂ヲ爲シテ、地子不納ノ地ニ在ルコト餘リニ難有御惠ミ、過當ナル御慈悲也、仍テ近年寛政ノ度、江戸町方ニハ七分金上納ト云ヘルコト有テ、少ハ御國恩ノ御奉公ニモ相當、天道ノ御惠ニテ、町

家ノ者永續ノ基業、佛家ニ所謂功德トモ成、永續致ベキノ御仁政也、然レドモ未ダ京・大坂・奈良・堺・伏見・其外諸國城下等ニ之無シ、漢梵共ニ城下無地子ノ國ト云者ナシ、然ルニ明智光秀主人信長ヲ弑シタル惡名ヲ避ン爲ニ、初テ京・大津等ノ地子ヲ免ジテ、亦豐臣家モ之ニ倣シヨリ、今ニ一統其例行ハレテ、城下地子無キ所多シ、其無地子ノ所ニ在テ、諸國ノ產物運送、請ズシテ來リ、招ズシテ得ル、自由自在ナル所ニ居テ坐ナガラ高利ヲ貪リ、衣食住ニ富ルコト怖ルベク愼ムベキノ事也、是等ノ所少モ心附タル者アラバ、京・大坂・奈良・伏見・堺・其餘諸城下ニ住居ノ者モ、右ニ等シキコト何成共仕法ヲナシ、子孫永續祈禱ノタメ納度事也

諸夫役割合之法

軍役ニ三法アリ、高割軒割人割ナリ、諸夫役モ之ニ同ジ、是ハ高多ク持テ貧者アリ、亦高少ニテ財ニ富ム者アリ、亦高少ニテ人多キ所アリ、亦高多シテ人家少キ所有故也、一國ノ內ニテモ高家數人別相當モアリ、亦不相當モアリ、亦過當モアリ、相當トハ高千石ニ家數百軒人別六百人、不相當トハ是ヨリ少キヲ云、亦過當トハ是ヨリ過タルヲ云、國中ハ此振合ニ當レド、山添・山中・海岸・津湊・宿町場等人家トモニ此三倍四倍ニモ當リテ人家共ニ多シ、如レ此處ハ人別割ヲ以テ取ナリ、川除普請、浚渫等ハ高割ヲ以テ取リ、人別ニ不レ拘、往來道普請等ハ、戶割亦人別割ニテモ取ル也、傳馬役ハ高懸ナリ、然ドモ山添・津湊等ハ人別多シ、如レ此所ハ人別懸ニテモ可レ取也、當時ハ元宿五分持、是ハ其宿

場ニ有テ旅人通行繁多故ニ、賣利ノ多キヲ以ナリ、其外林役・藪役・船役・車役・牛馬役等ハ其持主ヨリ取ナリ、大軍ハ高百石ニ付一人、大國ハ二人、次國ハ二人半、小國ハ三人、郡ハ三人半、縣ハ四人以下同斷、其元法ハ天子六軍ニシテ七萬五千人、大國ハ三軍四萬六千八百七十五人ニシテ、實ハ三軍三師三旅三卒三輛之法ナリ、次國ハ二軍二師二旅二卒一輛ニシテ、三萬千二百二十五人、小國ハ一軍二師四旅一輛ニシテ一萬九千五百二十五人、郡ハ一軍ニシテ一萬二千五百人也、故ニ郡普軍、亦普群、亦普君、一郡ノ領主之ヲ稱シテ君ト云、故ニ郡ノ制字ハ君邑ニ从フ、縣ハ一師二旅四卒二輛三伍二夫ヲ出スナリ、是ハ皆神儒佛三道一致ノ制也、然ルニ天子六軍ヨリ以下、大國三軍、次國二軍、小國一軍ト云ヘルハ、其大數ヲ擧ル也、非法ヲ不ル辨者ハ難キ悟所也、此何儒書ニ多ノ、國ハ三十三里小半里ヲ、詩ニ三十里ト云、以亦原思ガ粟祿九百ト云、以亦詩三百十一篇ヲ詩三百ト云ヘル拍也、隊伍ノ法一組五人ヲ伍ト云、以五伍二十五人ヲ輛ト云、以四輛百人ヲ卒ト云、以五卒五百人ヲ旅ト云、以五旅二千五百人ヲ師ト云、以五師一萬二千五百人ヲ軍ト云フ、縣ヨリ以下、服ヨリ里迄ノ五等モ、皆縣法ニ同ジ、此法天子ハ一ツ、大國ハ一ツ五分、次國ハ二ツ、小國ハ二ツ五分、郡ハ三ツ、縣ハ三ツ五分、都ハ天子ノ連枝ノ國ナル故ニ、上國ト同法ニシテ二ツ也、亦林役・藪役・船車役・馬役等ハ、其持主ヨリ右之割法ヲ以テ取也、亦遠國ニテ人夫・牛馬・船車共ニ難キ勤處ハ金納米納等ナリ、其法金一兩ニ錢四貫文ノ割ヲ以テ、一人一日ニ五里持運、貫目十一貫四百目也、此法穀一升ノ重サ二百八十五

錢目ニシテ、秸四斗重リ也、秤二ノ緒目罫也、（罫ハ尺目ナリ故ニ秤ニモ用ユ）是ハ一人持軍卒役ノ法也、今傳馬宿ニテ五貫目一人持ノ法ハ、弓力ヲ試ノ法ニシテ、弓ノ長サ七尺五寸厚六分一人張也、當時ノ弓ハ三寸ノ弰詰リナリ、六分ノ弓ニ弦ヲ懸テ、弝ヲ高キ所ニ結付、其弦ニ五貫目ノ重ヲ下テ、二尺五寸十束ノ矢、尺下ルヲ一人張ト云フ也、故ニ七分ハ二人張ニシテ十貫目懸リ、八分ハ三人張ニシテ十五貫目懸リ、九分ハ四人張ニシテ二十貫目懸リ、一寸ハ五人張ニシテ二十五貫目懸ル、是ハ弓力ヲ試ノ法ナリ、今ノ弓ハ三寸ノ弰詰リニテ長七尺二寸、故ニ六分ニテモ一人半張ニモ適ルベシ、七貫五百目モ懸ルベシ、慶長ノ度迄ハ亂世ニシテ、諸士皆一人毎ニ五貫目宛ハ持タル故ニ、直ニ陣中ノ法ヲ以驛卒持ノ法ト爲タルモ、仁政ノ至レル也、人卒一人ハ拾一貫四百目ヲ持テ一里ヲ行ク、此賃銅錢四文八分、輕尻馬ハ附乘テ七文二分、中馬ハ米四斗入二俵、此正味三十貫七百二十目、俵二ツ繩共ニテ二貫三百目モ有ベシ、合テ三十四貫目九文六分、本馬ハ四斗入三俵、此重サ五十貫目ヨリ五十一貫目迄ニテ、十四文四分也、故ニ中馬ハ十里ニテ百文、百里ニテ一貫文、則金一分也、因テ一分ヲ百匹ト云モノ、馬ノ百里ノ賃錢ノ義也、因テ本馬一貫五百文ニシテ金一分二朱ナリ、乘輕尻雜役馬ハ銅錢七百四十八文也、亦格別遠國ニテ軍役難レ勤處ハ、金納ニテ取立ル時ハ、右割合ヲ以テ一日一舍、但シ三十六丁ヲ以爲二一里一ノ法ニシテ、五里一日路ノ積ヲ以テ取也、町家ハ前々述ル如ク、五商ノ割合ヲ以テ、近キ所ハ人夫、遠キ處ハ金納也、尤鰥寡・孤獨・病身者・亦ハ貧窮ニシテ一日暮ノ者ヲ除也、故ニ富ム者ハ課役ヲ當ル也

今諸國一統、田畑平均ノ村方ハ、高千石ニ八百人位、亦皆田ノ村ハ六百人位、亦皆畑村ハ千二三百人、亦山添村ハ皆田ニテモ千二三百人、皆畑ハ二千人、山中ハ二三千人、海岸モ右ニ准ズベシ、尤津湊等ハ五六千人ヨリ一萬人ニモ及所有ルベク、故ニ夫役ノ法ハ、高割人割戸割ノ三法ニ不レ依バ、過不足可レ有コト也、厚地ハ人多、薄地ハ人少シ、强弱・剛柔・智愚・眞僞・虚實・興廢ハ皆土地ニ因ル也、故ニ地理ニ不レ達バ人情ニ通ルコト不レ能、亦教諭シテ豐饒ヲ令レ爲コト不レ能、國人ノ聚散・興廢・盛衰・多少・貧福ハ教導ニ因ルベシ

移民勸農之法

水土宜キ地ハ國人生育多シ、然レ共驕ル時ハ土地衰微シテ、人家自ラ退轉シ減ズル故ニ、土地ノ盛衰、國人ノ聚散ハ國政ニ因ル也、亦地狹クシテ人餘ル時ハ、是モ亦過タルハ不レ及ガ如ニシテ却テ衰フ、今甲信越ノ如キハ人多シテ餘ル、其アマル者ハ餘業ヲ爲也、餘業ヲ爲モノハ財利ニ富、勤テ農事ヲ守ル者ハ財利ニ乏シ、故ニ勸農モ終ニハ怠農ト爲テ、商業ニ走ル者多シ、因テ人多シテ過タルモ、亦不足ナルニ同ジ、農事未熟ニシテ、夏秋兩毛ノ取入少シニ成テ、貢モ自ラ減ズル也、加之其商家ハ衣食住ニ富、美麗ニシテ、農家ハ乏ク、此三ツノ者見苦敷、其勤モ苦シ、都テ人ハ難ヲ去リテ易ニ附キ、貧ヲ憎テ富ヲ羨ミ、衣食住ノ惡キヲ恥ルハ、世俗ノ通情也、故ニ水土宜シケレバ人家殖、地狹ケレバ人民餘ル、仍テ三法ヲ立テ別地ニ移シ墾田ヲ爲シメ、税法ヲ正シテ妄僞ヲ制シ、民心ヲ質直ニ爲

スハ、地方ノ要法也、其三法トハ、一ニハ子孫多者ヲ撰ミ、二ニハ田畑少ニシテ、日傭稼而已ヲ業ト爲ル者ヲ撰ミ、三ニハ其土地ニテ營ミ兼ル者ヲ撰ミ出シテ、此三ツノモノヲ以テ開發地ニ移シ、家作農具ハ勿論、衣食迄モ一ヶ年分ヲ與ヘテ農人ト爲シ、其内少シハ才覺有テ貞實ナルヲ撰デ、取締モ可レ爲レ致コト也、右手當米金等ハ、何程モ入用次第ニ、少モ差支無レ之コトハ、天地ノ正理也、都テ古ヨリ今ニ至ル迄、人ハ利ニ走テ、難ヲ去テ易ニ屬者故ニ、數代住馴タル地ニテモ、其所ヨリ營方安ク世渡ノ能キ所アレバ、舊地ヲ放レテ新地ニ移ル也、仍テ舊里ハ自然ト衰ヘ、人家共ニ減ジ、古田ハ手餘シ荒地ト成テ、貢モ悉ク減ズル也、此故ニ其所ヲ領知スル領主地頭モ公私ノ用差コトハ、皆地方ヲ司ル人勤導キノ不行屆ニシテ、政事ノ等閑故也、右等ノ處ハ陽氣衰ヘ陰氣盛ニ成テ、何時トナク風俗モ移リ變リ、人ノ勢力モ衰ヘ、農事モ倦ミ勞レテ、耕業未熟ニシテ作毛熟方モ惡ク、取入ノ諸穀少ク、家貧キニ隨ヒ、子孫撫育ノ情愛モ薄ク成テ、産メル赤子ヲ庰蓐ノ内ニテ壓殺爲ルコト常トナリヌ、之ヲ其所ニテハ俗言ニ間引ト云モ、産子ヲ莱蘆ヲ抜テ根ヲ絶タル心得也、如レ此薄情ハ可レ歎可レ忌ノ甚コト也、元龜天正ノ頃亂世ノ内ニテ、髮ヲ亂シ綴レタル敝衣ヲ纏ヒ、以苫屋ニ臥、柴ヲ枕ニシテ、軍役ニ被レ駁タル時サヘ、子孫撫育シテ、人家モ月々年々増益タルニ、今ハ行者道ヲ譲リ、耕ス者畔ヲ譲リ、夜モ戸ヲ鎖サヌ静謐ノ御世ニ逢ァ、不レ飢不レ寒、天然ノ命ヲ持ッ雖レ有中ニ、兩總・二毛・常陸ハ勿論、江戸近在迄モ、右ヤウ成ル人外ノ者間々有、故ニ右等ノ村方ハ、古田畑ノ荒地多、人家モ過半ヲ減ジ、

貧ニ有ル道ニ准ジテ濟ゼリ、其中ニモ貧ニシテモ甚シキニ至テハ、妻ヲ迎ルニモ其價ナクシテ、生涯寡ニシテ暮スモアリ、其子細ヲ尋ルニ、困窮者ノ男女私通シテ夫婦トナルハ、親兄弟モ制シ兼ル也、左モ無ク嫁約ノ頼ミ、結納ヲ入テ女ヲ求ル者ハ、男ノ方ヨリ其女ノ身代金六七兩モ、女ノ家元ヘ無束修ニテハ未詳セズト也、斯其數ノコト抔ハ、江戸住居ノ武家方ハ未聞ノコトナルベシ、中ニハ右場所知行持ノ衆ハ、傳聞モ可レ有レ之コトナレド、右等ノ所哀憐心配ノ儀ハ無シテ、只貢取立而已ヲ專要ト爲ルコト多シ、依テ年々以來ニ衰微募ノミ、是等ハ皆其地頭領主モ、地方ノ道ヲ不レ辨故ニ、只貢計ノコトヲ嚴重ニ爲シテ、農民ヲ撫育スルノ政事ヲ不レ行ノ失也、然ル中ニモ亦江海川河ノ岸津湊、又ハ神社・佛閣其佗流行場抔ハ、其土地田畑反別ヨリモ、人家其ニ過當ニ多キ所數多有レド、是等ハ皆往來旅人參詣者等路資ノ潤ヲ以宜シク營ミ暮シ、家宅諸道具、衣類等迄モ都下ニ不レ劣形勢也、右ニ准ジ多ク金銀ヲ貯持タル者モ多シ、然レドモ元來高不足ノ所ニ住居スル故ニ、其領主地頭ヘ年貢諸夫役金等ハ些少ノコト也、亦漁獵場ハ其所業多分ノ金銀ヲ得テ、衣食住ノ驕ヲ極ル者モ多シ、如レ此不用ノ者アレド、是ヲ彼ハ移シテ、手餘シ地ヲ耕シ荒地ヲ起シ、本ニ復スルコトヲ不レ爲ハ不忠ノ甚シキ也、今右等ノ所等閑ニナリテ、農モ商ヲ專業トシテ、農事ハ名ノミナリ、請願クハ有道ノ人有テ、正名ノ道ヲ行ヒ、農工商ノ業ヲ正シク爲シテ、法ヲ嚴ニシテ規則ヲ立、高反別ヨリ人家不相應ニ多キ所ハ、三法ヲ以テ撰出シ、其親族共ハ勿論、他村ニテモ金銀貯持タル者ヘ、夫々割合出金爲レ致、困窮者ニハ家作・農

其・衣類・器物等迄モ悪デ移民ヲ取立、尙亦其地ヲ離散致サヾルヤウニ嚴法ヲ立、固ク足留爲レ致置、永久ノ良民トナシ度コト也、當時モ高反別ヨリ格外餘計ニ人家多處ハ、百年以前ヨリハ却テ耕田モ荒、收納モ減ジ、其土地ニテ營ミ兼テ都下ヘ迯去シ者多シ、亦田畑多ク所持ノ者モ奢ニ長ジテ、地處ハ下作亦ハ召抱ノ下男女共ニ任セ置、其身ハ農家ニ不相應ナル詩歌・連俳・武藝・或ハ碁・將棊・書畫・茶湯・活花・其他婬樂・三味線・淨瑠璃等ニ泥ミ耽リテ、田畑耕シ方ハ勿論、ソノ地處ヨリ取入ノ穀數、就テハ貢夫役ノ出方モ不レ知シテ賄男ニ任セ置、身ヲ亢(タカブ)リ、質朴ニシテ能ク農事ヲ勤ル良民ノ誹謗シ、人ニ五孝アレバ五業ノ道有ルコトヲモ不レ辨、書ヲ讀、詩ヲ作リ、文ヲ綴リ、歌ヲ讀、又武藝抔モ學ベバ、己モ君子ト心得、在位ノ君子、道德ノ君子、其階級ノ差別モ不レ知、書ヲ讀又人ニ敎テモ、却テ人心ヲ迷ハシテ農民ヲ亂ス者多シ、是等ハ敎方ノ不ニ行屆一歟、近頃武家ノ浪人國々農家ヘ入込、武藝ノ稽古致モノ多シ、宜コトナレド有祿無祿ニ不レ限、博奕及ビ女衒、勾引ノ徒迄モ、金銀サヘ出セバ其人ヲ不レ撰シテ指南ス、仍テ於ニ在々一近年不法ヲ働者多シ、右等ノ取締リ方ノ爲メ、近頃ハ農家ノ武藝ヲ禁ズルコト衆多也、是ハ善キ事ナレド、其ノ一ヲ知テ其ノ二ヲ不レ知事多シ、故ニ村役人並有德ノ者ニテモ、惣テ同ヤウニ制スルハ不ニ行屆一コト也、在方ニテモ村役人ハ、其身分相應ノ武藝モ不レ習シテハ不レ叶事ニテ、若於ニ其所一不法ノ者有時ハ、番非人計ノ働ニテハ難レ制、其時ニ臨ミテハ村役人無ニ武藝一時ハ、惡徒ヲ制シ誡ルコト不レ能、故ニ身元相當ニシテ御役ニモ可レ立者ハ、常々武藝モ

爲レ致置度コト也、其餘小百姓農事ノ稼ノ者ニテ、武藝等習モノ有時ハ、其處村役人共ヨリ、嚴敷禁止爲レ致度コト也

今關東ノ內、上總・下總・常陸・下野・武藏等、在々古ヨリ人家過半減ジ手餘シ地多キ所有リ、亦往來筋大川通舟車牛馬ノ通行多キ所ハ、檢地高ノ外ニ新田切添場多ク、荒地多ノ處ハ檢地ノ節ヨリ貢多ク減タリ、又隱田多ノ處ハ、夏秋ノ入金算ヘバ金千兩余モ有ベキ處ニテ、貢米金ニテ纔ク金高ニ三十兩計納ル所アリ、右ニ準ジ私欲ノ所多シ、此レニ由テ是ヲ考ルニ、地方ノ大道ヲ辨別セザル者多シ、算辨タル者有テモ、賄賂ニ眼ヲ昧シテ調方モ無ク、只異言ヲ申テ金銀ヲ貪ルノミ、仍テ等閑ニイタシ置クコト多シ、右ヤウ成ル隱田場有テモ、誰カ正路ニ其罪ヲ糺スモノナキ故ニ、正直ニ貢納ル者ハ偽無キ倥者ノゴトク思ハル也、仍テ正路ノ者モ往々ハ不正直ニ成ユキ、富ル者ニ倣テ、正直モ後ニハ不正路ニナル者多シ、此故ニ孟軻モ國政ハ必ラズ從二經界一始ルト云ヘリ、是等ニ仍テ熟々地方經濟ノ事ヲ稽ヘ見ルニ、請ヒ願クバ大國小國トモニ徑・畷・隄・溝・洫・藻・端ノ規則ヲ立テ、少シモ定ノ外ニハ贔屓偏頗ノ差略ナク、正シク繩入ヲ爲シテ石盛ヲ宥シ、段別ヲ明白ニ爲シテ取箇ヲ等シク爲シ、其國郡村每ニ田畑・屋敷・山林・芝地・沼淵等迄モ、席上ニテモ明白ニ見分ルヤウニ分間繪圖、逐田繪圖ヲ作テ、御料所村方ハ勿論、領主地頭所迄モ被二渡置一度コトナリ、然ル時ハ經界正シクシテ、民ニ地境論・水論等ノ訴訟事ナクシテ、能ク和熟ニシテ治リ、能稼者ハ富

ミ、怠ル者ハ貧キ故ニ、自然ト農事ヲ勵ミ、民心正シク爲テ孝貞忠信ノ道ヲ可レ守歟、然レ共地方ニ習熟セザル者ハ、手重キコトト思フベシ、是ハ其道ヲ不レ知故也、此法ヲ行フニハ、譬ヘバソノ村々ニテ少シハ氣才有モノヲ一人宛モ撰出シ、一度ニ廿人モ稽古爲レ致レバ、五六日ニシテ先習得ベシ、又其習得タル者ヨリ、一人ニテ廿人宛へ稽古イタサスレバ、十日ニシテ四百廿人ト爲、亦此四百廿人ノ者、一人ニテ廿人宛教ユレバ、十五日ニシテ八千四百人ト爲ル、亦此八千四百人ノ者、一人ニテ廿人ニ教ユレバ、廿日ニシテ一億六萬八千人トナル、然ル時ハ二人一ケ村へ懸リ造ル所、八萬四千村ノ逐田繪圖五ケ月ニシテ可レ成、如レ此爲ス時ハ、日本國中ノ田畑一枚毎繪圖面ニ造テ、且一枚毎ニ其畝歩ヲ改メ記ト云共、三ケ年ニハ不レ可レ過、如レ此ナル時ハ田畑ハ勿論、金銀・珠玉・竹木・奇石ノ出所迄モ、明白ニ席上ニ於テ分リ可レ申事也、尤右ノ手當入用等ハ、其村々ニテ夫錢掛リニナルコト故、御料私領社寺領ニ至ル迄、別段入費ノ愁モ無レ之、容易ニ成就有ベシ、亦町家モ是ニ等シ

經國本義終

田制沿革考

及國郡管轄考

星野常富著

田制沿革考　及國郡管轄考

葛山　星野常富著

上古田制之事

尙書に「民惟邦本、本固邦寧」と見え、古先明王天下を治め、兆民を撫綏し玉ふに、勸農をはじめとせざるはなし、說文に男の字を釋して、男丈夫也、字从田力、言男力於田也と見えたり、職に四民の差あれども、農を本業と稱し、工商を末業とし、士といへども祿は代耕になるによる、農を勸むるの本は、經界を正しくするに起る、故に孟子に、「仁政必自經界始、經界不正、井地不均、穀祿不平、故暴君汚吏必慢經界、々々既正、分田制祿可坐而定也」と見えたり、田地の經界を精密にし、財賦は土壤の美惡により、上下の科ありし事を禹貢に出せり、我國の上古も農を重じ、田制を密にせられし事、彼國のごとくにぞ有べき、されども易簡の代なれば、其制の概略今に傳はらざるは惜むべき事也、國史に記されし處は、三十七代孝德天皇二年、班田既訖、凡田長三十步、廣十二步爲段、十段爲町とあるをや始とすべき、昔には四十五代聖武天皇僧行基に命ぜられて、諸國の[illegible]界を正さしめ玉ふ、町段步の制此に起ると申す歟、孝德帝より帝王六代年歷八十餘年の後なれば、舊制に[illegible]るべし

此時に方五尺を以て一歩とし、三百六十歩を一段とし、三千六百歩を一町とせらる、則唐朝の制度をうつされ、町は唐の頃に准じ、段は唐を畝に准じて大小あり、（唐制に六典に出し、方五尺を歩とし、二百四十歩を畝とし、百畝を頃とすとあるによられしなり）五尺を歩とする事、今の制と異なるに似たれど、この頃は尺に大小有て、量地は大尺を用ゐる、小尺の一尺二寸を一尺とせる故、五尺はすなはち今の六尺と同じ、（是亦唐朝の小尺大尺の二種ありしによられしなり、大尺は今の布帛、（俗名鯨尺といふ）小尺は今の曲尺も同じかりき）其後大尺にて地を校量する事を廢し、小尺にて校量せしと見へ、拾芥抄には、「凡田以二方六尺一爲二一歩一、三十六歩爲二一段一」とあり、古の五尺に一尺を加へて量とせしにはあらず、尺の大小異なる故と知るべし、亦同書の頭の註に、「積二七十二歩一爲二十代一、百四十歩爲二二十代一、二百六十歩（當按當作爲二百十六步）三十代一、二百八十歩爲二四十代一、五十代爲二一段一（乃三百六十歩）式云、代頭也」と註せり、代頭の事令に見へず、如何なりといふ事、今の代にて臆斷しがたけれど、古へ班田せられし時の遺法と見へたり、古へは廣十二歩長三十歩を段とす、拾芥抄には、三十六歩を一段とすと云、廣十歩長三十六歩の事とみゆ、古への班レ田一戸田二段を常とす、廣サ十歩長サ七十二歩にあたる、代頭といふは是よりおこれる歟、都て制度の事をしるせしは、令・式の外徵シルシとすべきなく、律格の二書殘闕し人間に少らして、吾黨の寒陋寓目すべき事難し、長息すべき事也

上古田租の事

令及び義解を參按ずるに、一段三百六十歩の田土の美惡、年の豐凶を平均して稻五十束を獲、一束の

す所の貢也、調の和訓都麼軒別といへども、家内の人數の多寡老幼によりて差あり、令云、「凡調絹絁絲綿、並隨₌鄕之所₋出、正丁一人、絹絁八尺五寸、六丁成₋疋、長五丈一尺、廣二尺二寸絁は和名抄、帛ノ屬似₋布也、阿之岐沼とあり、此あしきぬといふ物今に有や未₋詳、六丁成₋疋とは、正丁一人八尺五寸ツヽ出しあひ、六人にて疋とする也、下皆傚₋之美濃絹六尺五寸、八丁成₋疋、廣同₌絹絁₋絲八兩、綿一斤、布二丈六尺、並二丁成₌絢屯端₋絲十六兩を絢とす、重六十四錢也、綿二斤を屯といふ、此頃の一斤は十六兩を一斤とすれは、一屯の綿の重百二十八錢に當る、正丁二人合して絢屯となして納るをいふ端長五丈二尺、廣二尺四寸、其望陀布四丁成₋端、長五丈二尺、廣二尺八寸、和名抄に、「望陀者上總國郡名也、其體與₌佐國調布₋頗異、故以₋所₋出郡名₋爲₋名」とあり、「四丁成₋端」とあれば、正丁一人一丈三尺宛を出せしなり、此外に雜物とて、鐵・鍬・鰒・堅魚・紫菜・海藻の類を納めて、調布の代りにせし處も有し也、又調の副物とて、紫・茜木綿・藥種抔國々の產物を調に添て納る事恆例也、拾芥抄に、「一家謂₌一戸₋、々々一烟事、正丁四人一疋、正丁四人二石二斗、中男一人租穀四斛、烟數一戸、卅束爲₋限」とみゆ、交の義詳に解し難けれども、封戸の收納の事と見へたり、封戸といふは、位田職田の外に三位以上の公卿に給りし也、所謂位田職田は（詳に下に見ゆ）上より給ふ事にて、封戸は戸調と口賦を給ふ事とみゆ、譬へば一戸に正丁四人あれば、調布一疋と庸役四十日也、公卿は在京する故庸役する所なし、故に庸の代りに米貳石貳斗とみれば、一端の布米五斗五升の價も同しきと見へたり、米價賤しければ、百姓害ることもなく、國常に充實し、租稅の益大なり、中男一人租穀四斛といふは、黃麥の類、精米にあらざるをいふと見へたり、中男は次丁なれば、正丁の半役を勤るさはあなる故、布半段を出して庸役五日の代りとし、調の絹又四尺二寸五分也、布半段と絹四尺二寸五分の代りに、黃麥の四斛にては大重きに似たり、外に子細有る事にや、一烟事又は烟數といふ事未₋詳、若くは今いふ一竈といふ事歟、卅束の事も詳ならぬに似たり、稻の事とすれば、卅束は米壹石五斗也、前人に正丁四人二石二斗を出、後に一戸卅束爲₋限とあれば、首尾矛盾していづれとも思ひよりがたし、識者に尋べし同書に民部式を引て、「凡諸家封戸者爲₌三分₋、一分者充₌輸絹之國₋、二分者充₌輸布之國₋」とあり、輸の字未₋詳、若くは相似たるにより、緰の字の訛字にして、緰絹緰布の事にはあらずや、封戸は太上天皇に二千里（里は戸に作るべし）一品親王に六百戸、太政大臣は千五百戸、正一位は二百廿五戸より次第に減じ、無品親王は百五十戸、參議は六十戸、從三位は七十五戸、夫より以下は封戸なし令の文謬り讀時は、正丁一人ごとに、絹絁絲綿を濫く出す樣に疑ふべけれども、左にはあらず、絹絁絲綿及

び雑物に至るまで、其国の宜により自ら定式ありて、一物づゝを納る也、調の品不足すれば、庸役をつとめて其數に充し也、詳に下に出づ、庸といふは、人別役の事也、人生れて三歳を黄と云、十六歳以下を小と云、二十歳以下を中といふ、廿一歳より六十歳までを丁と云、六十歳より六十五歳までを老と云、六十六歳以上を耆と云、其内二十一歳より六十歳迄四十年の間、本役を勤る者をさして正丁といふ、中と老とは半役を勤めしめ、是を次丁と云、黄・小・耆の三ッには雑役なし、正丁といへども爵有て役を免除かるゝ事も多、篤又は癈疾の人は次丁に准じ半役を除かれ、或は休役を賜事も有也、作役とは正役の上に免ぜらるゝ事也、十日なれば雑徭の二ッ共に是に准じて免さるゝ也令に云、一正丁歳役十日、若須收庸者、布二丈六尺、一日二尺六寸、須留役者、満三十日、租調俱免、役日少者、計見役日折免、通正役並不得過四十日、又義を按るに、正丁一人一年の庸は十日と定め、たま役につかはされば、其代りとして布を出さしむるを庸布といふ、一人前一日二尺六寸と定め、十日には二丈六尺の割とる也、正役の外臨時の別役に十日勤むれば、作る所の田租、居る處の戸調共に免さるゝ也、一人前の租調を三十日に割、其一分を一日とし、日数の多少に應じて調を折免と云、四十日に充れば二役共に終る、故に不得過四十日と定められし也

公田私田の差ありし事

古へは地に公私の差ありて、近代と同じからず、所謂公田と云は、今の代の御領所と同じく、国衙の正税を納る處なり、私田は尤科多し、大概にいふ時は、功田・位田・職田・神社・佛閣の料田の類是也、先功田と云は、勤功有し人に賜ひし田地にて、大功は世々不絶とて、子孫其地を傳領し、其次は功の輕重に應じ、或は三四代に傳るもあり、亦は其身一代に留り、其身の死後は直ちに国衙に上返し、

公田となるも有る也、位田と云は、爵位により賜ふ所の田地也、正一位の位田は八十町、夫より以下階ごとに減少して、從五位は位田六町、六位より以下には位田なし、惣じて位田は其身死して、後一年は收公を免され、翌年に至り官に收めらるゝ定め也、職田は官職によりて賜ふ所の田地なり、太政大臣の職田四十町、夫より以下官ごとに減少し、史生の職田六段に至る、神社佛閣に寄ごるゝ處の料所は、今の代に異なりとも聞へず、一槪にいはゞ、功田は今の私領、位田職田は今の代の役料知行に同じき物と知るべし

良家奴婢の差ありし事

古へは惟地に公私の別ありしのみにあらず、民にも良家奴婢の差あり、所謂良家の民は正丁一人、二段の田地をうけ取て耕作し、租調庸の役を勤る事前に出し所の如し、私田を耕す民を奴婢といふ、是亦田二段を受て、其三分の一二百四十歩を口分田とて己が作り採にし、其餘四百八十歩の田に生る所の穀物盡く其地の主へ納め、調庸の二ッは勤めるざる也、按ずるに、位田職田を耕す所の民盡く奴婢にして、調庸を免かるゝ時は、封戶の制と矛盾して不同に似たり、惣じて我邦の制度今の代にして窺ひ摘きことのみ多し、若くは奴婢は功田免租田を作る者のみにして、位田職田は良民耕し國司にをさめ、國衙の運送して京着の上、其租を頒たれし事なるべき歟、良家減じて私奴多くなりしは、莊園のみたりなりしによれるなるべし、猶下條を案ずべし

鄕里莊園の事

封畿の外を七道に分たれ、道下に國あり、國下に郡有、郡下に鄕あり、鄕下に里あるは古への制也、

處を、前稱を改めずして唱へしとみへたり、亦太上天皇の御料に莊號あるは、封戸と勅旨田の外に沒官の莊園を押て院內へとられし處にて、定制の外なる故、御厨とは唱へざるなるべし、領は寺社の領田、亦は諸寮の料所也、內給及諸寮の料は國々より收る正稅にて用を辨じ、外に料所といふ事はなきことなりしが、莊園多く成しにつれ、此等の類まで料所きはまり、正稅といふはなき樣に成行たり、

國々にて收納する租稅を國府にて集め、京へ運送するを正稅と云、國へとゞめて國守・介・掾・目、抔の俸祿、官舍修理の料、池溝の料、衞士の料、救急の料、俘囚の料、其外萬事の經費に遣ふを公廨といふ、正稅公廨ともに國々定限ある事延喜式に詳也、正稅大藏に納り、夫々の費用に充、是亦式に出、朝廷の用度、諸寮の料用、州々に定田出來て、國衙によらず、別に有司を充て租稅を納るゝ時は、國務に用なく正稅はなき事になり、公廨の費用のみ公田を仰ぐに至れり、國司權を喪ひ守護威福をなし、天下武家に屬して君黨の宰となれるは、內にして執政により、外にしては莊園によれる歟、法之不ㇾ行、自ㇾ上破ㇾ之とは、此の謂にあらずや

町錢石の差別の事

古へは土地の廣狹を量るに町を以てし、中頃は錢を以てし、近代は米を以てす、地には町を用るは周制井田に起り、五等の諸侯の料百里・七十里・五十里皆田制によれり、秦井田を廢し新法を用ひ、後世從て革むることなしといへども、頃畝の名今に依然たり、我邦唐制を模され、只其名目を改められ、町段を稱とす、度量自ら正しく、有司も愚民を欺く事克はず、愚民も己が應受田の廣狹をしり易し、中葉の錢を以て量りしは虛僞也、近代の米を以て量るも亦虛設也、まづ錢を以て地を量る事、何れの代に始まりし事や未ㇾ詳、諸書を案るに、北條氏陪臣にして國命を執し頃に始りしに非ずや、但し制作を改め、古の田何町錢何貫に準ずといふ定法有りしとも聞へず、桃花蕊葉に、越前國濱田見は一條家

の領地にて、四千疋宛の定納なりしを、鎌倉の一族東郷といふ者、年々七千疋宛を納むべきよし一條家に申請て預りし事みへ、同書に土貢何百貫請申請之といふ事處々に見へたり、是等によりて憶ふに、御給莊園の旨其始は家司青侍抔其地へ遣し、租税收納し京師へ運送せしめ、小莊は其經費のみ多く得分少き故、隣莊と合して兼司らしめ、又は莊内の百姓を撰み、其事を司らしめしに起り、（莊園を預る人を莊司といふ、今の代官の如き也、後には領主と莊司を同じ様に心得へし人もありしにて、[illegible]といへども、[illegible]にて[illegible]内の事を管る、今いふ莊屋の如きもの也、莊司は陪臣にして、國司の臣下にはあらず）後には其の近邊の富有なるもの、此莊の租税何百石、年の豐凶、穀價の高下を平均すれば、錢何十貫の定輸にあたれり、我は夫に增こと若干貫文にして、都合何十貫の錢を豐凶に拘はらで進ずべきの間、我に預け主へと申請を、莊園の主は一合の米一錢の錢にても增事を歡び、たやすく前莊官を黜け請ふ人に與ふ、世流に人黠く成し頃は、次第に土地にも應ぜぬ貢物を約し、強て申預り下民を虐げとりて其數に充、餘分にて己が身を肥し、京家の人は田園に疎く下情に疎き故、我もちたる莊園は是程の得地とは憶はで、只今迄僅の土貢を納め家貧しく莊司の私藏のみ富せし事口惜けれ、誰なかりせば我をして何十貫の錢を、年々泥土へ投棄すべし抔と新莊司を褒揚して疑はず、莊司たる人は恩は己に歸し、恨は主へ歸する樣にのみ取計ひし故、百姓に思ひ付れ、自然と其地の主の樣に成し也、（[illegible]然らば貫高は今いふ見取年貢の類はじめか）にして、土地により甚不同なりしなるべし、今はおしなべて上方は百貫千石にあたり、奥筋は百貫五百石にあたるともいひ、又は一千貫百石にあたる事常法ともいふにや、いづれも算勘者の強解にして、

定論にはあらぬなるべし、貫高石高にし改りし頃の高口帳といふ物をみるに、其昔千貫ときこへし地四千四五百石になれるも、三千石に足らぬもあり、故に世に傳へし事悉く信ずるに足らぬ事を知れり、元貫高は虚信にして、石高又虚穀なれば、沿革の際定法なかりしなるべし錢を以て地を量る事を廢し、米を以て地をはかる事是亦其始を知らず、世には豐臣家の時におこれりと申傳ゆるにや、憶に織田家功臣に割與へられし封土に石高見へたれば、足利家西走して織田家權をとられし時の變制にて、天正の初年に萠しけれど、織田に服せざる割據の國々は古制によれりしかど、豐臣家の掌握に歸せし後に、天下盡く貫高を廢し石高となりし也

近代田制租賦の事

織田家貫高を廢し、石高を以て土地を量られしかど、所管の地二十有餘州の經界を正し、租税を定められしとも聞へず、我國紛結の中なれば、大概のみにして精しきに至らざるならん、豐臣家一統の後、文祿三年に至り、定制ありし處は天下の租税三分の二は地頭取て、三分の一は百姓の得分たるべしとなり、經界不同なるを以て是を均正するの志おはして、五奉行の内長束大藏大輔正家近江國水口城主五萬石を領すに命ぜられ、是乘坊と云算學者と會議し、盡く古法を變じ新制を定めらる、六尺五寸を一步とし、百步を小步とし、二百步を大步とし、三百步を一反とす古への三百廿五步にあたる反の字、田畝の名に用る事いはれなし、東涯伊藤長胤は段の字帥書して訛寫し反となれるなるべしといへり其制を馴熟し、慶長の始より檢地し、畿内を終り近江を歷越前に至りしに、豐臣家薨逝につき此役を罷らる、今も猶其制殘りし處ありて、世に太閤檢地といへり

當代田制租賦の事

当代にては古法と勝國の制とを兼用ひられ、歩は古への六尺を用ひ、（但し量地には間竿とて六尺を用ひ、其一丈二尺の外に二分を加へ、俗人是を唱ふ、一歩は六尺一分なり）反は勝國の百歩を用ひらる（勝國の制に従ふに似たれども、古は六尺五寸を歩とし、一反［illegible］に減ずる事三十五歩なり）外に畝といふ名目を立て、三十歩を一畝とす、三千歩は一町也、但し何れの時此制を設けられしや未だ詳ならず、総じて量地は諸國公私領、共に寛永年中より慶長の初年に多くは有し之事と聞ゆ、公領の量地の制度は元禄年間に粗備り、享保に及で完整せり、私領の量地も是に准じてする事なれど、其主の意に任せ量地したるも多く、或は一歩六尺五寸を用ひ、又一反三百六十歩を用る處も有りと聞ゆ、租税は勝國の苛歛を弛め、是に反せらる、其法一歩六尺四方の稲を刈て、其穂を摘て毛を除、粃を簸て籾となし、實量するに一升に充れば、一升に一反三百歩を乗じ、三百倍して粟三石となる、熟粟なる故、風に中り日に乾けば、縮にして減ずる故、平均十分の二を減じ二石四斗とし、粟を米にする時は、半減して一石二斗となるを高とす、是を石盛十二の田といふ、其十の四を租とす、米四斗八升也、（四公六民とて、田にある處の米十分の四を租とし、十分の六を民食とす、その實は粟を乾減して十分の二を減ずるに至らず、粟を米にしても半減に至らざる故、十分が二分を租として、十分が六を民食としたる當にして、勝國の法に反せられしなり）田地の經界を正し、石盛を定め租税を究るは、豐凶五年又は九年を平均せざれば不同ありて、重き時は民困窮し、輕き時は民佚奢するゆへ、尤容易に定め難き事也、譬へば一石二斗の田は一歩粟一升を獲べき圓なれど、年熟して粟二升を獲る時は、反に乗じて十分の四を租とすれば米九斗六升になり、田地の高一石二斗に乗ずれば、十の八にあたるを八つ物成といふ、（物成［illegible］）又凶年にて粟一升獲べき田地、僅

に粟五合をうれば、前法のごとくして租米二斗四升にして、高に乘じて十の二にあたるを二ッ物成と云、如ㇾ斯年々の豐凶を見て、租稅なきはむるを年免と云、豐凶を平均して定租をきめ置くを定免と云、田に石高をつくるを、石盛又は高を結ぶ抔と唱へ、田に上中下の科ある、位又は色と云、（前文に記せし五年又は九年の豐凶を平均て石高をおはすれば、平年はいづれも四ッ物成にして、過不足の差なき筈なれど、檢田の吏意に任せて、石高をきめおく事多きゆへ、苛刻の吏の定めたる田地は、高のみ多くして租稅は少く、一ッ二ッの物成にあたりて、民困究する地も有、寛裕の吏の定めたる田地は、石高は少くして租稅は多く、八ッ九ッの物成にあたり、民安佚する地もある也、民の公に奉るは租稅のみゆゑ、租稅さへ少くば民困む事有まじき筈なれど、當代は調庸の役なく、萬の事皆石高に係る故、租稅を少くても石高多ければ民困しむなり）石盛の高下は粟の多少より起れば、一反三百歩の田高一斗より以上三四石に及ぶ處も有と聞ゆ、（高一斗は一歩の地の粟九勺餘、高四石は一歩の地の粟三升三四合に及ぶなり）或は新墾して土地馴熟せず、石盛きはめ難き歟、又は惡地にて水旱風霜の爲に傷られ、年々熟不定なき田地歟、山溪の間を墾し人家遠く耕養に勞し、僅に植僅に耘るの間猪鹿に損傷せられ、穫收に至り僅に翌年擭す計の粟を得るの如き田地は高役を除き、其年の豐凶に應じ租稅ばかりを取るを見取場抔と稱す、（以上水田の制也、田は字書に「樹ㇾ穀謂ㇾ田」とありて、陸田水田の別ありとは見へず、周制の井田我邦の令に載る處皆然り、近代は水陸の田租を異にすれば末に辨ず、俗に用る處の畑畠の字義詳にし難し、好奇の者は圃の字を用るにや、圃は菜園にして陸田にはあらず、然るべからず、元來此書通俗を要すれば、止む事を得ず俗に傚ひ畑の字を用ゆ）畑は一年に兩收の利あり、麥を夏收とし、菽黍荏稷の類を秋收とし、是を米價に平均し、石盛亦は租稅を定むる也、尤鹵莽及び惡地一作すべく再收なり難き處は、一收の利のみを較量し、石盛租稅ともに減ずる也、收穀の多少、米價の高下、年々の平均容易に成難き故、田畑六分劣りの法を用る共いふ、（其法に云、中田の位と上畑の位と同しきは定法也、故に中田一石の地は上畑も亦一石也、中田一石の租米四斗を出す、上畑一石の租も是に同じ、畑は稻なき故銀を出して米に代しむ、米價の高下に拘らず、米二石五斗金一兩に代るの價を常例とす、租米四斗の價銀九匁六分也、米二石五斗一金に換るは虚價にして、實價に平均すれば、田高六斗の租

米二斗四升の宗、中田一石の租穀米四升の類と相同じて、是も四分六分通の法と云、平均米一石九斗一合にあつると見えたり、或は此法なるべからず、下田の位に六を乗じて中田の位とし、中田の位に六を乗じて上田の位と立、下田の位は上田中田の位の十へるに準じてつくべしといへり、或ハ上田一石二斗、中田一石、下田八斗の積りは下田八斗也、六を乗ずれば六八四十八となる、是を中田の位とし四斗八升とす、上田一石へ六を乗じて六斗となる、是を上田の位とし六斗とす、上田六斗、中田四斗八升なれば、上中の位三ふことと一斗二升也、然に下田の位を中田の位とし六斗とするなり、本田畑は一等を減じて位を立、上田中田に準下るを云前説に同じ、上田一石二斗、中田一石、下田八斗の積りに、上畑一石、中畑八斗、下畑六斗とする上畑の熟穀甫收しても、皆中田の熟穀に及ぶべからず、故に租税の軽重を用ゆ、實へば田畠一石の租は七ツ八ツの物成にもし、畑高一石は二ッ三ッの物成にもするをいふ若しく是高也、其軽重の租を徴すべからざれば、虚價を設けて平均すと云上の米二石五斗一合に換ふ石を同じ耳を掩ふて鈴を盗むの譬と同じく、民の耳目を愚にするのみにて、定制といひ難し、定制とし置き難き故に、一村一郷の内經界の廣狭、地高の高下、租税の軽重、雲泥の差ある事多し、總て檢田の法區々にして、予が傾聞のまゝしし處も小冊に盡し難し、茲に其概略をしるすのみ

田制沿革總論の事

夏禹洪水を平げ、敷土隨山、刊木奠高山大川、六府孔修、庶土交正、財賦の出る處皆三壤を則とし、上下の科を定められしかば、黎民其所を得、其業を樂しみき、殷の助周の徹名は異なりといへども、土地を正し租税を徴す、各其時の宜きによるとぞ見へし、秦井田を廢し、阡陌力田の法行れしよりの後、志ある人主は藉田の禮を躬し、天下の農民を勸むるあれば、其治三代に及ばざる事の遠きこと、田制の正しからざるによれるなるべし、我邦唐山を去る事海路三百里にして、遙に風土殊に人氣異なるに似たれど、田制沿革して終に古制に復し難きこと、猶井田を廢して復し難きと同じに侍りき、

むかし皇朝いの盛におはしませし代には、班田の政も行はれ、人を量りて田を授け（正丁次丁の差により授る所の田地を、班受田又口分田といふ、家につく田を永業田といふ）田により租を徴されしかば、怠農も其業を勤めざるを得ず、貧民も其田宅を賣、永業に離るゝ事なく、富者も特り善地を占る事能はず、家に調あり、口に庸あり、遊民苟倖して身を容るゝに所なし、自ら曠土なく遊民なく、困窮に家富、四民おの〳〵其所を得たりき、漸衰ふる頃に群臣外任を厭ひて京官を希ひ、執政姑息を事とし、私恩を敷れし程に、國司在京して國務の大綱を傳聞し、（職原抄の頭註に、「後代置ㇾ權、々大略遙授也、正者居ㇾ其國ㇾ執ㇾ政事ㇾ、權者其身居ㇾ京都ㇾ、以ㇾ爲ㇾ兼官ㇾ謂ㇾ之遙授ㇾ也」とみへたり、後には國司國に赴く事なく、只目代を遣し置事になりぬ）國務を介に屬す、介も亦自ら高大の細事を聞事なく、是を掾に屬す、掾の細事判決するは猶其職也、目に至ては佐刀筆の任にして、簿を錄し算を執り、合計中る事を勤とす、後世に及で介掾高拱して成を目に仰ぐに至る位（目は大國は從八位、小國は少初位を相當とする也、位有といふ迄にして、今の代官手代などゝいふにひとしき賤職なり）嗚呼如ㇾ此にして猶烹鮮の職、分憂の任と稱して可ならんや、法必上より敝りて下隨て敝る、正税減じて調庸の布帛百官に給するに足らず、玆において盛に莊園を設けて群臣に躬ら租賦を召さしめ、正税は唯大藏に歸し、公事に供するのみ、大藏既に乏しく、切下文（今云切手）數すれども國用猶足らず、終に內給の厨料を置、諸寮各領あり、誠に一國の地圖を披けば、內給・院厨・公卿・官女の莊園・神社佛閣の料田櫛比して、正税公廨徵べきに地なし、公廨積なき時は吏俸いづれより出べき、池堝・溝埋・陂傾・川溢・修治の料なく、歲饑民餓すれども救急の設なく、正税京運せず、主税寮を運らす所なく、調物庫に充たず、主計度支の方なし、下りて源平の亂に至り、徵發國衙

一元に歸するといへども、北朝の天子徒扈器を擁せられ、世の共主たるのみ、宮外咫尺も皇家の地なく、武命を重んじて、官は何物たるを知らず、北朝の主擁せられし時、頑愚の上の諺に、持明院ほど大果報人はおはせじ、何の武功もなくて、將軍より天子の位を賜はらせ給ひしといひしと、土岐賴遠が太上天皇の御幸に參り合ひて、院といふか犬といふか、犬ならば追物射せんと罵り、狼藉に及びし杯にて時勢を見つべし足利氏の國郡を制する、他の政令なく、國郡郷莊盡く割て士に與へ、租稅は其主の指揮に任せ、別に五十分一の課を充て自らの奉とす、譬へば租米五十石を出すべき地に、別に一石を出さしめて京に運送し、將軍の財料に充られしや、武は增て二十分一に至りし年も有し也守護地頭自ら共出る用を量りて入る事を制す、故に兩稅なり、一收あり穀錢布帛徵こと其欲に從ふ、元莊園の遺法によるゆゑ調庸の設なし、調庸なしといへども、段錢・棟別・倉役・時を撰まずしてはたらる、段錢とは、田地にかけて錢を出さしむ、今の高掛り、といふが如し、棟別とは、軒別にわり附て錢を出さしむる也、今いふ雜役なども同じ、倉役とは、富民富商へばかり割附る也、今いふ分限割といふに同じ、倉役、義滿公の代には四季にあてられ、義教公の代には一箇年十二度に及び、義政公には十一月九度、十二月八度に至りし故、百姓田宅を棄て逃散し、商旅戶を閉て財を交へざりし事應仁記に出、不仁不義窮りぬといふべし是皆軍國の用に充るにもあらず、功臣の勤を勞ふにもあらず、甘レ酒嗜レ音、峻レ宇彫レ墻の爲に拋て足らず、足らざれば亦虐ぐ、黎民の肝腦盡く地に塗るといふべし、應仁亂後に及び侯伯國々を割據し、租稅京運せず、五十分一の租をいふ府庫竭盡して庖厨も辨ずる事なし、外は明國に哀告して恥をを海外に曝し、義政公國用乏しき事を明帝に歎き、錢を丐し事二度に及びし事善隣國寶記に出ヅ內は得政を創成して嘲を後世に傳ふ、借貸を破りて更始するを得政といふ、義政公の代に始り、十三度迄行はれし也財貨通ぜずして四民堵を安んずる事なし、織田氏の柄を執られし事僅に十年、聲敎の迨ぶ所二十餘州、其田制少しく變革ありしかど、貫高の石高と成しをいふ準直とするに足らず、豐臣氏に至て田畝の制大に古と違ひ、租も亦甚苛斂也、然も猶古へ私田の制を傚はれし也私田二段奴に耕さしむるに、三分の一二百四十步を奴の口分とし、其妻子を

當[時]、四百八十歩の田盡く主人に納む、太閤の租を制するこれと同じ農民三時に粉骨して田に餘糧なく、妻子飢寒にたゆること能はず、工商の二民は僅に賦を出して世に云遊士坐食佚飽す、工商猶可也、醫・巫・卜・祝・樵・漁・獵・優・及僧尼・道士戶口の徭役なうして、鼓腹の化を共にす、善政といふべからず、茲に國初に及で、勝國の苛刻を厭ひ、租稅三分の一を弛め、民の顚倒の急を解き、仰て父母に事るに足り、俯して妻子を養ふに足らしめらる、聖政と稱すべし、竊に惟ふ、昇平二百餘年、、蕃蕃殖し、立錐の地も墾闢せざる事なきに至るべきに、農夫耗減し、游民倍殖し、田野舊によれども熟穀漸寡きは、地氣の然らしむる歟、將に調庸の制復せらるゝ事なく、租賦特り農夫に取の故にはあらざる歟、善哉白石翁の田を論ずる、豐臣氏天下を丈量するに、古法に變じて三百歩を以てする事は、一歩を以て一夫一日の食分にあつといふ、然るに斯つゞめられしに古法に、六尺を歩とす、豐臣の時には六尺五寸を歩とす豐又當代六尺の繩を用ひられしかば古への一段の内にして六十歩を失へり、民いかで窮せざらんといふ、亦惟ふ農民田宅に安住し、官地なるを知らず、私地の思ひをなし、租稅をつくのへば已が役充りと思ひ、有司も公私の別あるを知らず、兼併を禁ぜず、懶惰を戒めず、其田にして其租をいれて事畢るとす、田租の外徵に物なし、故に魚[illegible]桑楮[illegible]菜の所出盡く米高を蒙らしむ魚多きは減じ、廣狭に應じ高をつけ、[illegible]は高に準し、[illegible]菜の損得有無の法あり、有司の苛酷によれば、いにしへはなき事なり民に賦するに餘力を殘さず、怠農を[illegible]し遊民に變ぜしむるは時勢にして然り

田制沿革考終

國郡管轄考

中古國郡管轄之事

神代より人の代となれる始め迄、國郡定かならず、其頃國と稱せしもい、後も治て國となれるもあり、革て郡と成しもあり、郡と成しもありとぞ見えたりに、（常陸・常世國・日高見國・衣手の常陸國抔と唱へしは、今の常陸國新治國・筑波國・茨城國・仲國・久自國・高國抔といへしは、今は下して常陸の一國となりしの類也、郡はあかつにてわかつの儀によれ、郡は又は其にて小く郡わかつの義によれると、古人の云傳へたること也）其國といふも大小甚不同ありし事にて、其の始人類の生出る山野の形勢により多少均しからねば、自然に郡をなし落をなしたるによりて、分割を改め制せらるゝに及ばれざりしとぞ見へたり、國を統る司を國造と稱せし事、神武帝の頃既に其名見へたれど、國々に徧く設け置れしとも見へず、第十代崇神帝の時四道の將軍抔いふとありしかど、皇化に服從せざる國郡を伐平げし事にて、永く設け置れしにはあらず、第十三代成務帝四年に至りて、始て諸國に國造を定め置かれし也（神武帝代に大和國橿原宮に都合ひしより、第十三代年數七百九十四年を經て國造を定め置かれ、又二年を經て國郡を分給ありし事後なるべし、其十代の間史冊なく、不審なるのみにはあらざるべし）同六年に國郡を分、封疆を定めらる、縣主・村主等の稱ありしも此の頃よりの事なるべし、（後世に至り縣主・村主、又國造し、其國主たりし人の子孫皆己が氏となせしなり、漢に所謂宮内郡氏の類なるべし）其後三十六代皇極帝の朝に、國造を改め國司と號せられ、第四十二代文武帝大寶中大に制作を改められ、萬世の規矩を定められしより以後、文献の徴今に弊ずる

事を得たり、まづ戸籍の法を嚴にせられ、伍鄰相保し、一人を長とし、五十戸を一里とす、里に亦長あり、（令に、里郷の名混雑して見へ、和名抄に、郷名ありて、里の名見へず、竊に案ずるに、里といひ、郷といふ、續名異なるに似たれど、訓同じく佐渡なれば、古へは郷里ともに通用したるとみへたり、譬へば郡と書すべき處に、縣の字を用ひたるが如くにぞあるべき、されば和名抄に載する郷名を數へば、中古の戸口多からざる事を大略辨ずるに足りぬべし）長は其里の耆老の謹愿なる者を用ふ、里を統るを郡とす、郡は大小均しからず、二十里以下十六里以上あるを大郡とし（管戸は九百ヅヽありしなり、六十代醍醐帝の頃には、戸口漸く蕃殖せしと見へ、大郡は千戸と云事延喜式に見へたり）大領少領各一人、（或は郡用とも申せしにや）主帳主政各三人を置て衆民を撫養し、田農を勸課する事を掌る、十二里以上を上郡とし、（管戸六百余なり）大領少領各一人、主政主帳各二人、八里以上を中郡とし、（管戸四百余なり）大領・少領・主政・主帳各一人、四里以上を下郡とし、（管戸二百余なり）大領・少領・主帳各一人、主政をば置れず、二里以上を小郡とし、（管戸百余なり）領及主帳各一人を置る、是等の吏人多くは其の土地の人を用ひらる、漢に所謂上官也、其職或は替り、或は譜代にしたるも有しと見へたり、（譜代とは、世々其職に在るをいふ、今云代々、後漢に所謂世官の事也）郡を統るを國とす、國も亦大小あり、（或は小國にして數郡あるあり、或は上國にして郡少なるもあり、郡に大小あるによるとみへし、大概大國といへども、萬戸を過るは少に、最小の國は千戸にたらざるも有しと見へたり）大國には守介各一人、（守從五位上介正六位下）大掾・少掾・大目・少目もあり、是れも同じ、（大掾正七位下、少掾從七位下、大目從八位上、少目從八位下）史生三人、此外博士醫師あり、大國中國（官位令中國無介、清和帝貞觀中置・後世據之）は守・介・掾・目各一人、（上國の守從五位下、介從六位上、掾從七位上、目從八位下、中國の守正六位下、介從七位下、掾正八位下、目大初位下）下國は守・掾・目各一人、（守從六位下、掾從八位下、目少初位下）介をば省て置れず、史生・博士・醫師ある事は、上國以下も大國に同じ、是等の官人國府に在て布政施養する事を掌る、亦兼任權官の名あり、大概京官の人の遙授にして、任所に趣くは稀なり、權官其國に趣く者多くは黜配左遷

にして、巻名を擁し政務に預らず、（官にある官人は在京より下る也、国に在るは国官也、後世土人を用ひられし事を指し也）国守以下郡領主帳に至る迄、下民を撫養するを掌る、所謂文官也、其武官には国々に軍団あり、大毅一人・少毅二人・主帳一人・校尉五人・旅帥十人・隊正二十人を置く、兵士を検校し、陣列弓馬を訓練する事を掌る、兵士凡一千人、（兵士には丁男三丁毎に一丁を点し兵に取せらる、其遣る者の口分田に租を免じ[illegible]、番上の者は衛士と云、[illegible]兵士或は便宜とも帰せし也、往行は）其下に不レ満、乃ち五六百人なるは、分に随て官吏を減ぜらる、（分番して京にあるを衛士と云、[illegible]番々上試れしを行しとみえたり、[illegible]を役を免され、[illegible]国に至り、弓馬を習ひ、武芸を学ぶ、一度なるもあり、[illegible]を以て田役する事也、[illegible]に、凡そ国[illegible]見習武芸に[illegible]兵士の事也）毎年冬国司簡閲して其不精を戒めらる、四十四代元正帝養老六年、諸国に按察使を置て、国守以下の能否、居民の利害を監察せしめらる、其の後或は置、或は廃す、後世只奥羽にのみ按察使あり、今に其職名は残れども、大略納言以上の兼官と成て虚銜となれり、五十一代平城帝大同元年畿内七道に観察使各一人を置く、職掌按察使に同じ、五十二代嵯峨帝弘仁元年観察使を廃して参議とす、是郡県の時国郡管轄の大較なり、猶委しき事は国史令格式等に因て尋べし

朝家衰微して威權武家に移る、其の萌し久しき事

第五十七代陽成帝権臣の為めに廃せられ、光孝帝親王を以て継統ありしより、皇家の権盡く執政に奪はる、（太政大臣基経の計ひにて廃立ありし也、猶是より以前文徳帝外戚の故に迫て、長子惟喬親王を廃し、[illegible]を太子に立らる、清和帝の外祖太政大臣藤原良房摂政して権を縦にせしより例を啓く、[illegible]也）群臣苟偸を事とし、制度大に弛む、京官の事は爰に關るにあらねば置て論ぜず、上大夫皆外官を厭ひ、（家貧にして外）其国々に赴く人は不過斥外に非ざれば、貧人貧吏苞苴を以て家を富さん事を欲する徒也、

任を請へる類、古書に見へたり　遥近當途の人の外任受領あるは、皆兼任にして在京し、介に國務を委す、介も亦京官を望みて任に赴くを快とせず、終には國務を掾に任ずるあり、目に授くるあり、間己が子弟を國府に遣し、吏人を總領せしめしもあり、譬へば源平亂の時、豐後の國司は刑部卿三位賴資の兼任たり、其身國に赴かず、己の子賴經を國司代として豐後に遣し置る事源平盛衰記に出づ、爭亂守禦の際猶府に主なし、況や平世をや、時勢を見つべし　國府に安在する守介は、大略其土地の人也、況や郡領以下の土官は其人を撰む迄もなく、世官の樣になりし程に、國司希有に在國する輩も、僅に四ヶ年を任限すれば、土地の美惡、四民の苦樂を觀察する事能はず、下情上に通ぜず、上欲下を化し易く、威惠二ッながら行はれ難く、土民皆土官に親み、統官を輕んずるに至る、故に百姓を撫養し、農桑を勸課する事をせず、租調耗減し、戶口隱匿すれども、捜索勾稽する事能はず、其の弊の極莊園を設て其の料に充らるゝに至る、莊園は租多く、公田は租税少きによれる也、詳に田制沿革考に見へたり　所謂莊園は熟田の外に墾發するにあらず、亦荒廢の田を再耕するにもあらず、古所謂食封の戶或は不輸租田の中神田・寺田・布薩戒田・放生田・勅旨田・公廨田・御巫田・學校田・諸衞田抔といふ類を以て莊園と唱へしに始まると見へたり、莊園の地子を檢校し、本主に運上する頭目を莊司と稱す、莊園を耕作する民は私家の奴隸たれば、公田を授り調庸を勤むる所の良民と齒する事を得ず、其の良民と稱する者も、朝家盛にましませし頃戶口を較量し、六年を限て班田ありし故、侵掠兼倂の弊なく、自ら貧富均かりしかど、莊園の地は班田の法なく、本主は年貢の所當多からん事を欲し、耕輸の者は古地の歩數多からん事を欲せし程に、子弟親戚多き者は、地子を增進して良地を古

し、古へは地廣く人稀なりし程に、子弟親戚を分配し、山野を開墾し、家を富し身を肥し、豪農終に素封の勢をなす、第六十七代後一條帝の長元年中、前上總介平忠常安房守惟忠を私に殺戮せしを、平直方に命ぜられ伐しかども、王師屢挫け成功無りし程に、源頼信を代て將軍として其亂を討平げ、六十九代後冷泉帝天喜年中、東夷安倍頼時陸奥守登任を逐しを、頼信の子頼義を將軍として伐しめらる、頼時戰死して其子貞任猶も王師に抗し、漸九年にして夷滅しぬ、斯時東州の健兒勇士に出陣せし輩、九年の久しき頼義が指揮に隨ひし間、互に主從の思ひをなしぬ、七十三代堀河帝寛治年中、頼義が子義家陸奥守として、封疆を臨へて出羽の山北・清原武衡・家衡を私に討亡す、此合戰の砌も東州より[illegible]に援來る輩少からず、官符なくして兵士を催し、私鬪の爲に良民を殘ひ、府庫を耗盡し、國帑を凋弊す、若王綱密なる代にあらば、細鮮も脱るべからず、況んや其亘鬪なる物をや、此[illegible]に聞へたる[illegible]、[illegible]太郎武[illegible]・三浦[illegible]平太郎[illegible]・[illegible]五郎景政抔、健士の有時なりし者なるべし其頃よりして健士分番して京師に宿衛する從、各縁に因て武將の家に倚頼して上番せしにより、家人・家頼・家來等の俗稱も起りしなるべし、家の子と稱する者は、[illegible]と共に[illegible]從する者[illegible]、郎黨は[illegible]也、家の子に[illegible]く、郎黨とは異なり、然れども家の子孫の者下りて、郎黨になれるもあり、古書には元に家の子、今は郎黨と名のりたる類也、郎黨は[illegible]に出身しても、家の子となれるはあらず一度武將の家に、倚頼したるは、永く其家門に伺候し指揮に應ずる風習となれり、武將は家目を生役の權を縦にせしとごみへたれ、帥家にには姑息の政のみ行はれ、八逆の罪猶放流に止りて、不殺を仁とし、損シ減損チ帰シたかへる故、民小惠に撓ぎ難く、嚴刑に畏れ易ければ、武家の畏服する事一朝一夕の事にあらず、其所由來遠しと思

はる、下りて保元平治の亂官符未廢せず、兵權轂の下に聚り、處分兵部に係らず、唯其倚賴する人に應ず、然も其兵士を指揮する人多くは朝官衞府の人にして、閭巷の匹夫に非ず、治承・養和の際に至ては、一位一官の稱すべきなき土豪兵を八洲の內に弄し、國には正稅官物を抑留し、莊には年貢所當を辨へず、公を假て私を營み、力を賴て官を屬とせず、所謂國守・郡領・毅校・除正の稱ある徒、何れの處をか防禦し、節度使六衞の官軍何れの敵をか征せん、各國藩籬の固めなく、官門禦侮の人なし、天子西海に蒙塵し、神器龍都の有となる、爭亂既に平らぎ海內無爲に屬するに及び、屈强の武夫兵を放して革面し、盡く本籍に復し、子弟婢奴を携へ力を農桑に併せば、猶維新の化を施すに足るべし、騎虎の勢再び下るべからず、絆を絕し馬如何ぞ自羈縻に就く事を甘んずべきや、況や健兒勁兵多年戰鬪の中にして、朝士黔驢の態を窺ひ盡し、其孱弱にして廉耻なき事を侮り欺くをや、賴朝卿天下の向ふ所を知て、其勢を藉て朝家を脅かして參らせ、私欲を遂られしなり

守護地頭職之事

第八十二代後鳥羽帝文治元年二月、左衞門尉源義經東國の兵を帥ひ四國に渡り、讃州八嶋の行宮を襲ひ申せしかば、平族先帝安德帝を奉じ西海に遁る、東兵踵を踏で三月二十四日長州赤間ヶ關に及び、平族を鏖にし、前內大臣宗盛父子を虜にして、先帝海底に崩御あり、四月賴朝從二位此より先、正四位下八月義經伊豫守兄賴朝と不和、十月賴朝土佐坊昌俊に命じて義經を襲はしむ、不ㇾ克して殺さる、十一月義經難を避

中　國守二町 掾一町一段　目一町

下　國守一町六段 掾・目中國に同じ

是を職田又は公廨田抔とも唱ふ、國司以下在國すれば右の田地を賜ひし事也、延喜式に、「凡遙授國司、不レ給二公廨田幷事刀一」（事刀とは今世に云夫の事也、役用に召置てつかふ事なり）と出づ、遙授とは、先づは權官を指とみゆれど、權官に非ずとも其身在國せぬ人は同樣なるべし、文治以後は國司はいふに及ばず、介・掾の類も國府に在りし事は見へず、目代抔と唱ふる輩のみ國には在りしとみえたれば、所謂公廨田なる者は盡く守護の料と成りしなるべし、さて守護を始て置し時は、譜代の職分にあらざれば、本領を持たる人は妻子をば本領にも殘し、亦は鎌倉にも殘して守護する國に赴きしなり、三五年を過れば餘人と得替し歸る也、始めは其士人を用ひ、其國の守護としたるは希にて、皆關東伺候の人を配して監察せしめたるみえたり、守護の領分其國にある處は僅にて、其餘は本國亦は諸國に散在してもてる也、其後いつとなく譜代の職になりし故、在京在鎌倉する輩は國に代官を遣し置、是を守護代といふ、守護代は己が一族親戚、又は其國人を用ひたるなり、鎌倉の代の守護は、武家の中にては重職の樣なれども、評定衆抔と唱へしよりは輕くして、官位あるは希也、尤執權評定衆にて守護をかねたるあれば、守護代國事を專にす、誰某の分國抔と唱ふ守護は、只守護領の貢稅を所得としたる也、北條氏亡びて朝家克復有し時も、其制を改めらるゝに及ばず、（尊氏に武藏・下野・常陸・義貞に上野・播磨・正成に攝津・河内を給ひし抔いふは、其守護領を給ひしなり、國一國にはあらず）足利氏に至ては國司

は全く停任し、守護のみ國事を專にす、先代の國司料に充し、田地は守護の領にもなり、亦有功のものにも割與へしなり、先代に比すれば守護の領地も多し、威權十分したれども、守護する國中を全有したるにはあらず、國郡に割據する土豪を羈縻せしのみ也、俗に某下某下抔といふ是なり、亦土人の中にて守護に屬せず、一揆をなせる者もあり、守護の領地抔は皆更守護の下知には從はず、守護又其人の封抔を今もいひ傳へしこれなり應仁亂以後は有力の守護も郡鄕を蠶食し、終に一國を全有し、隣國を併呑せしも有、武田晴信・今川義元の如き是なり寡力の守護は守護代に奪はれ、阿波の細川が三好に奪はれ、美濃の土岐の齋藤に奪れし類是なり土豪に逐れ、兩上杉が北條に逐れ、土佐の一條が長曾我部に逐れし類是なり子に放れ武田信虎が子の晴信に逐出され、[illegible]が子の義政に廢れし類なり家臣に掠められ、山名豐國が其臣武田某に掠められ、阿波の[illegible]が織田[illegible]に取はれし類也國を失ひ家を破り身を殺せし者枚擧に暇あらず、織田豐臣の天下を得たる頃にも、其始めは舊國人を以て守護に屬せられし事も聞へたれど、國人の有勢なる者は守護の爲に斃され、佐竹義宣が南方三十三館と稱せし國人を誅し、常陸を一統し、黑田長政が城井鎭房を亡し、豐後六郡を全領せし類也其最小なるものはいつとなく臣となりたり、舊家に此類夥し、毛利の益田・福原・國司・吉鍋島の後藤・陣廻・多久などこれなり人の所謂封建者勢也といふは、本朝にて思ひ當りぬ

地頭は貫主の義也、其地の主は本所也、本所の代官として其地の所務を進退する者は莊司也、寺社の領地、公家の莊園抔は、強暴の百姓莊司を侮り命令行れ難き故、地頭の兵士を置て貢物を催促し、非常を禁斷せしむ、國には國司守護を並べ置き、莊園には莊司地頭を並べし也、地頭の得分は本主への貢物の中を分ち取し也、別に民より出さしめしや未だ詳、莊司地頭と並べ置法なれども、後には地頭に莊司を兼させたるも多しと見へたり、鎌倉の八莊司抔と云たるは此地頭と見ゆ鎌倉時代より太平記の頃迄の高き武士の將

帥の如く見ゆる者は皆地頭の土也、元來莊園の地は大小甚不同にて、今の代の法にていふ時は一庄僅千石にもたらぬ處も、亦萬石に及ぶも有と見へたれば、莊の大小により地頭も分限不同なるべし、尤一莊の地の地頭たるに限らざれば、七八ヶ所に十ヶ所も莊園を兼持し地頭も有しなるべし

總地頭といふ名目あり、譬へば天下につきていふ時は、六十餘州の總地頭は鎌倉殿なり、一莊の地にていふ時は、上野の新田の莊は、元新田郡新田に郷の地なるを女院の料所になされ、（上東門院の御料と申にや）莊園の地となりたるを、後に義家の三男加賀介義國莊司と成て、下野足利郡より移り住み、嫡男義重より代々相傳して新田と稱す、是新田の莊の總地頭なり、後に支庶段々分れ、脇屋村の地頭職を分たれしは脇屋次郎と稱し、木崎村の地頭職を讓り得たるは、木崎某抔と號し總地頭の下につく也、亦名主職といふものあり、新田の嫡流にて新田と稱し、新田の莊を持ときは是名主也、二男三男の家別氏を名のらず、同じ新田を稱すれども、名字の地を持ぬ者は名主にあらず

總領職といふあり、總地頭と同じ樣にて其實は大に異也、地頭は其地の民を支配する迄にて、其地の主にはあらず、領主は其地の主也、前にある新田の莊領主新田殿なれば、脇屋木崎の類は支庶にて、莊内の村々を配分せらるゝ其村の領主にて、惣領は新田殿にてあるなり、將軍家の下文之新田殿に賜りある也、（内にいふ、下文とは今云領地の御朱印と同じく、其地を下し賜ふ由書載せらるゝ文也、又充文といふもあり、是は何方に於て領地を賜ふべきよし約束の印に給ふ文也、人に領地を賜はるに先充文を給はゝ、後實に地を賜はるに及て、下文と引替になるなり、足利の代には御教書御内書奉公といふあり、徧く文の知る處なれば其譯を釋せず）

御家人といふは、前に出たる家人宗領の事也、頼朝總追捕使と成しより以來、外の家に倚頼して武士の身を立る事成らざる樣になれる故、諸國の健兒の中にて筋目もあり人をも持しは、夫々守護地頭となり、取目も左迄になく人も持ぬは、皆御家人と稱し諸國の公私田に散在し、守護地頭の被官たり、此輩源平亂以前は舊により、上番して京師に宿衛したり、（世に大番と稱したる也）其徒の中を撰れ、瀧口帶刀又北面の侍武者所になされたる歟、頼朝以來東州の武士は鎌倉に伺候し、其餘の國々より百日代りに上番す、第八十六代四條帝仁治元年、將軍頼經京都鎌倉に篝を焼、辻々を警固せしむ、是より上番の武士皆其所に屯したる也、太平記に見へたる四十八ヶ所の篝は是なり、一篝を一國にて持しなり、二箇國一箇國にて寄合持にしたるもあり、兵數不同なれども、大概一篝五百人程宛にて、四十八ヶ所にて凡二萬四千人と申す也、此輩南六波羅の下知をうけて京師を警固す、（南六波羅は京都の政職にて六波羅の舘の留守、今の所司代なり、平氏亡びて義經堀川に在て京を守護し、義經亡て北條時政是に代り、夫より段々交代して守護す、承久の後は北條の一族二人を定め、南北在京す、北一人の事もありし也、六波羅の舘は京師守護の人の宿所にせらる、是より以前は京師守護の人宿所定らず、是より後は六波羅に居住せしむ）北條氏亡びて朝家の政行はれし時は、武者所を再興にし諸國の武士を六番に宿衛せしむ、足利氏に至りて上番の事は絶果たり

探題職と云は九十一代伏見帝永仁元年、北條貞時が計ひにて筑紫の探題を筑前太宰府に置て、九州の成敗を掌らしむ、長門の探題を長府に置て中國の成敗を掌らしむ、何れも北條の一族を撰みて一人宛遣し置し也、長門探題は北條氏亡びし後絶ぬ、筑紫の探題は將軍義滿の代迄も交代して置り、其後に絶たり、

豐後の大友が家の譜代の職となりしとも其家にては申すにや未だ詳、探題の名義は執事といふが如し

管領は自專におさむるの稱なり、義朝東海道を管領し、持明院殿長講堂領を御管領抔といふ類は、本主より預りて其地を支配し、己が家人を分ちて其所稅を掌らしめしなれば、莊司の頭といふべきもの也、北條が家の事を掌りし老を內管領といひし事あれば、今の家老の事と聞ゆれど、是は長崎盛綱始北條の莊司を奉行し、後家事まで掌りし故、家事を執行する者を指して管領ともいひしにや、義滿の時執事を改め管領とせられしは、全く北條が內管領によられ、今の大老職の事也、（義貞が山陰山陽十六州の管領を免されて其氏が東八ヶ國に管領たりし迄は、土地を管り領するの姿發りし也）

代官は名代の義也、土地を檢校し貢物を進納する吏に限りたる事に非ず、（義經が八嶋にて鎌倉殿の御代官と稱したる類なり）守護代・國司代・目代・莊司の類はいふに及ばず、陣代抔と唱ふる者迄皆通じて代官といふなり、（建武の制法に所領數ヶ所相傳事、懸命の所に自可二勤仕一、自餘所者可レ差二進代官一とあり、名代の事也）後に訛りて土地の役人の事となりし也

莊司は前に見へし如く莊園の代官の事也、其下につく吏を公文といふ、今の書役といふに同じ、但し莊司といふは職名にも非ず、自稱にもあらず、人より稱呼する名目也、國守を國司、郡領を郡司と稱呼するが如し、尤中には人より稱呼せらるゝ儘、己も稱したる輩ありて、官名の格になれるなるべし

莊園の外に御厨といふあり、禁裏・仙洞又は太神宮の領に割れし時、莊園の名を立られず、何の御厨と稱す、（信濃國安曇郡に仁科の御厨ある類なり）厨は庖厨の義にて、今云臺所入と云ふが如し、御厨の租稅を掌る人を別當と稱

與へても家來と稱するが如し

若黨は老黨に對する名也と徠翁が說に見へたり、黨は郷黨の事にて、今の組合といふが如し、郡縣の代には和漢共に天子の外に君臣の稱號なければ、君を主、臣を從者と唱ふ、故に己に從ふ組合の者といふ心にて、黨の名ありしなるべし、郎黨の郎は男子の通稱なり、亦古書に黨も高家も押なべ抔といふ事あり、此黨は寄合組といふ事也、(私黨・兒玉黨・紀清兩黨といへる類是也)亦一揆ともいふ、(花一揆・桔梗一揆などゝいへる類也)郎黨の事にあらず、高家は上にある大名にて筋目ある人をいふ、黨は小名也

本領といふ事あり、數ヶ所莊園を持たる人にも、必家につきたる舊領の地、又は己が住居する所を指て本領といふ、亦懸命の地抔と唱ふ、其の餘の莊園を代官を遣て治めさする也

本國生國といふ事あり、生國は誰も知りたる己が出生の國也、本國は名字の出たる國を指て云也、地に因て名付し氏にあらぬは、其家のはじめて出たる國を指すなるべし(工藤武藤大內抔の類の如きを云)

足輕の兵といふは步兵の事也、古へは戰士皆騎馬也、故に源平亂の比は旗指指馬に乘しなり、步兵は至て稀なると見へたり(盛衰記に、梶原生田の追にて足輕の兵に、逆茂木を引かけさせし抔と出たる類也)

中間も步兵の事を指と見へたり、足輕中間共に今とは異也(天文の頃より長柄と云槍織田家にて制せられ、これを持る兵を中間と云、足輕より一等下なる者なれば、足輕小者の中間と云心にて名付る抔と軍法者は云にや、太平記にある和田が中間細川賴春を突倒す、當時能が中間惣八郎抔見へしと、室町殿の御中間と呼し者などは、正しく今の代の足輕の事と聞ゆ)

野武士(野伏と書は宜しからず)といふは、地下人の內にては筋目もあり、武藝をも習ひたるが食祿あらぬ者を云、斯

いふ時は浪人の樣に聞ゆれども、延喜式に見へたる浮浪人は、今の世の帳外泰り物抔といふが如き戶籍を出る者をいふ也、野武士は其里の戶籍に入て出て仕る事なき者也、野は野部の義と見へたり

鎌倉の時の武家の職名、大概左之通り、但し不同

執權（北條氏一族代々任ず各其上樣の內一人之に當て連署と云）　評定衆　引付頭人　侍所別當　小侍所別當　政所執事　奉行　守護地頭　御家人　探題　論斷　問注所執事

室町の世には

三管領（細川等と云）　四職（他四也）　奏者（伊勢氏代々の職）　一族　大名　守護　外樣　評定衆　供衆　申次　番方　國人　奉行　末男

此一冊は中都生の許より守護地頭の事を問はるゝ事あるを以て、假初に答の趣を註し遣したる也、事々皆筆記と憶斷にて、引用の書を捜るべき暇なかりし間、疏漏の多かるべきはいふに及ばず、憶に出る儘筆つけし草稿なれば、いふべき事の前後したる抔は尤多し、只其梗槩を示す計也、尚暇日潤色註すべき也

文化九年五月於葆光囤　　平　常　富　漫　筆

題國郡管轄考後

予近年欲下渉二獵國史一、以明中古今之事蹟上、固陋寡聞、無三一得二其要一、偶星葛山先生、在二我天山之社一、實稱二白眉一、殊以二史學一爲レ任、予於レ是乎、就而正二其疑一、得レ益者不レ少、爰壬申之五月、復有二不レ安者一而問レ之、即著二此書一、以見レ示焉、乃與二其所レ著田制考一、足三互發二明之一也、先生名常富、字伯有、高遠内藤侯之臣也、六月從二麾于霸府一、十二月四日、遂以レ疾歿二于霸邸一、享年四十、予聞二其訃一流涕溢レ面、噫此書之著、實賴二予之問一、則毎レ讀レ之、得レ無レ感乎、因題二其後一以二此言一

文化壬申十二月念二日　　　後學中村奇謹書

謹問

文治以後上番に出たる武士は、地頭或は御家人にや、健兒の稱は鎌倉時代にはこれなきに似たり

賴朝の臺所入と定めたるは何れの地にや、武家評林に、治承中武田一條が背冠者を討たる時に、宮所龍市（今の辰野にや）平出等を以て諏訪神領に寄附すといふ、當時王土を以て私に寄附せられしこと其理なきに

似たり、未ㇾ審、此地菅氏の領地にて、菅氏を滅してこれを私田とせし者にや、然らずんば、これを諏訪に寄附せられし事甚難ㇾ解、頼朝も平家を滅して、其地を我が有とせし者にや（平家の莊園は皆有功の士に頒ちしなり 東鑑）に、藤澤黒河内は諏訪神領なれば、莊園の名なきよし見ゆ、然らば神田并に寺田は莊園に非るに似たり如何（莊園の名有て寺社の領たりしは、東鑑所々に見ゆ）

新田氏は新田莊の莊司にて、後には地頭を兼たるにや（書面之通なり）

六月　　中村信頓首拜

明曉出立に付甚紛間草卒御免、尚又御不審も候はゞ東都にて可ㇾ承候　　常富

國郡管轄考終

農喩

鈴木正長著

諭農序

禮曰、國無九年之蓄曰不足、無六年之蓄曰急、無三年之蓄曰國非其國、蓋道儲蓄之急務也、然當今之國、鮮克有三年之蓄者矣、萬之其一、遭蝗旱風霖之凶、其何以濟之耶、夫蝗旱風霖天也、濟之與不濟人也、天譴之災、雖不可遁、而人力所及、豈其可不勉哉、所謂人力所及則非他也、儲蓄之謂也、此有鈴木武助者、諱正長、武助其俗稱也、學問勤實用、武伎究奥旨、傍善書圖、門人稱爲蘭庭先生、下野黑羽之執政、而夙有循吏之譽、嘗以享保壬子、生其藩中、此歲黎民阻饑、是以自襁褓中、而得聞荒歉之阨矣、故其從政、以勸農儲蓄爲旨、後又遭天明癸卯之凶、明年甲辰、穀賈沸騰、至貧財之力、無能得食、於是有瘦者・菜色者・饑而不能與者・貧田宅者子女者・流亡離散不知所之者・道殣野殍、爲狐狸蠅蚋之食者、慘怛何勝、延及乙巳丙午、荐饑、至是草賊・強盜・剽掠・劫奪・殘虐之暴、使人恂恂、皆凍餒不獲已之所爲也、先生乃苦其心志、竭其智力、賑賙以爲己之任、糴糶之計、賑救之謀、緩急處置、皆得其宜矣、夫然、故黑羽封內、雖曰最僻、數萬生靈、悉得蘇息者、可謂能盡人力所及矣、爾後未數年、民之蚩々、徒知稼穡之艱難、而不慮饑饉之窮阨、專利煙草・紅花・楮皮之業、而迂稻麻・菽麥之利、遂將以蕃殖之畝田、附與

不毛之那須原上、何其不レ思之甚也、先生深愍レ之、審記二享保天明荒饑之事一、至三其信州淺間之崩、諸邦米穀之値、及釋二正山・高山彥九之譚一、則讀者悄然沮喪焉、人身之肝、誰不レ銘者乎、先生以敎二諭庶民一、勸レ農課レ業、以勸二儲蓄一、不二亦仁之術一乎、同藩人長坂生、欲レ授二之剞劂一、請二余作一レ序、先生歿、六二年于今一、常思三慕其爲レ人、義不レ可レ辭也、乃作二之序一如レ此、此書本志在レ諭二庶民一、故其言鄙而俚、要在レ易レ讀而已、見者無下以二辭之不文、意之不奇一、輕中視之上則善矣

文化八年辛未八月念五　鈴木之德澤民撰

農喩（きゝん用心）

目録

第四　天災地變の事

第五　長しけ不作の事

第六　こく物高直の事

第七　乞食に出し者たふれ死の事

第八　かてをたくはへし人の事

第九　金を持し人うゑ死せし事

第十　農業不皆をよむべき事

農喩

下野國那須郡黑羽家士　爲蝶軒　鈴木武助正長著

第一　饑饉の憂の事

夫人たるもの一生の間に憂とすべき事多しといへども、その中に饑饉を第一とせり、これに越し大難はなし、むかしより度々ありし事たれば、書物にかきもつたはり、又は年よりの物語にもする事なれば、此用心をしてきゝんに備べき食物の貯を、かねてより設置べき事也、されども世の中には心なき人の多きものなれば、此のきゝんの一大事をうはのそらにおもひて、むかしはありし事なるべけれども、今はあるまじき事のやうに心得違、其の用心を忘れて農業におこたり、うか〳〵と年月を過しけるに、はからずも天明三年癸卯に至り、天の災地の變ありて凶年たりしかば、諸作物實のらずして、關東より陸奥出羽の國々迄きゝんとなり、人多く死しにけり、その有樣を見もし聞もしけれども、先はよそ事の樣に思ひ居し程に、やがて我身の上に及ぼし、家内の者も饑に臨む時に至りて、目を覺せしごとく俄におどろきし人も多かりし、此節にあたりかねての油斷を後悔し先非を改め、物事すべて儉

約にと心づき、扨農業もまへよりは出精の様に見えもし聞えもせしが、其後年月の過ぎ去るにしたがひ、天地の災もなく、打つゞきて豊なるめでたき御世にあひぬれば、彼のきゝんの困窮を忽にわすれしがごとくにて、元のやうに農業におこたり、食類の貯をもさまで心にかけざる者も多くなりぬ、其故は彼きゝんの難にあひし人々は、年月の移にしたがひて死にさりしが多く、其後に生れし者は、ききんの時のかんなんなりしむかしがたりを、折にふれてはたま〳〵に聞事ありても、よそ〳〵しく思ひなして、さほど心にかけず、されば近年に至りては卯年のきゝんの苦患をいひ出す人もなければ、今時の年若き者やなわらべは夢にもしらず、如レ此にて過ぎ行世の中に、彼の凶年きゝんの備にとて穀物を貯へ置くべき事を喩し教へ、農業をすゝめおこたりを禁める人少ければ、年月の過ぎ行にしたがひゆだんにのみなれり、此あり様にては又もや近年に凶年きゝんたらむ時には、なにとして命をつなぎ、いかにして親兄弟を饑さず、妻子をもはごくむべきや、食物なくて外に命をたもつ術なければ、かねてより此喰物を貯て、凶年に備べき事用心の第一と知るべし、このきゝんのうれひある事を、よく〳〵おもひはかりて、かくあいがたき太平無事なる世の中にも、人にはかゝる危事ありとしかと心得、農業を専とし、心を用ふべき事肝要也、抑此用心といふは、米穀の類はいふに及ばず、其外食物に成べきものは何によらず、かね〳〵貯置心がけをする事也、喰物の餘るも不足とは世の中の一大事たるを、皆人へさとしたき我念願故、卯年のきゝんにて極々難義の趣見もし聞もせしあらましを書き

つゞり、世に傳へ農民を喩さん事を旨として此書をあらはせり、されば心あらん人々は、我志をわきまへしりて、食物を貯へる事を隨分と心がけ、さて其意を妻子を始家頼迄へもさとし聞かせ、猶又他の人までを喩しなば、其人は乃ち大善事を行にて、われにおきてはよろこびのいたり也

第二　きゝん度々の年數之事

遠きむかしよりきゝんの度々ありし事、世々の書に記し載たれば、其年代はつたはりたれども、樣子はつまびらかならず、太平以來慥に書きもつたはり、近く耳にもとゞまりしを擧げて左に示せり

寛永十九年壬午きゝん、さて三十三年を經て○延寳三年乙卯きゝん、これより五十七年を過ぎ○享保十七年壬子きゝん、こののち五十一年ありて○天明三年癸卯きゝん、これにあひし人は今も多し

此の凶年ききんの難度々ありし事かくのごとし、扨その年數を計りしに、近ければ三四十年の間にあり、遠くとも五六十年の内には來るとおもふべし、然れば其間は百年ともなき事と心得、今にも來まじき事にあらずとおもひ、深く恐れ此事を常にわすれず、農業を一途に勵み、勉めて穀物を餘し貯へる樣に心がけ、少しも怠るべからず、このきゝんは人間世界の大變也、此時にあたり人の死すると活るとは、唯手あてのなきと在るによるのみ、此手あての貯なきときは、家にあやうき事たりと思ひ、生涯の一大事はこれにとゞまれりと知るべし

第三　餓死人の事

右にあげし卯年のきゝんたりしをつく〴〵と思ひ見れば、近頃の様に覺えしに、年月は早くも過行て已に二十三年になりぬ、廿三年になりぬとは、此書をかきし文化二丑年までをいへり、今文政八酉年迄四十三年也實に光陰は矢のごとしといへり、さあればこのきゝんの難はいつ來べきもはかりがたければ、今にも來りて又もやうき事を目の前に見るならば、いかほどの苦患ともいふばかりなき事なれば、恐れうれひてかりにもわすれべからず、但卯のきゝんも此近國關東のうちはいまだ大きゝんとはいふにいたらず、其故は秋作の實のりも少づゝはありてとりもし、又御領主方より御救の米穀、および友救の雜穀等もありし故、食餌のたえてうゑ死にせしといふほどのものは一人もなかりければ也、扨又奥州等の他國にてはうゑ死にせしが多くありけり、わけて大きゝんの所にては、食物の類とては一色もなかりければ、牛や馬の肉はいふに及ばず、犬猫までも喰ひ盡しけれども、つひに命をたもち得ずしてうゑ死にけり、其甚所にては家數の二三十もありし村々、或は竈の四五十もありし里々にて人皆死に盡し、ひとりとして命をたもちしはなきもありけり、其なき跡を弔ふ者なければ、命の終りし日も知れず、死骸は埋ざれば鳥けだもの〻餌食となれり、庭も門もくさむらと荒て、一村一里すべて亡所となりしもあり、かく成果て見る時は、これに過し悲はなし、然を其由を知らぬ人などは、何ほどのきゝんたりといふとも、さまでの事はあるまじきと思ふもあらんが、其疑ひをはらさせんために、我耳に聞き届けしを示す事左のごとし

右卯年のきゝんの後、上州新田郡の人に高山彦九郎と云ひしあり、奥州一見の爲め彼國に至り、こゝ

やかしこと經めぐりあるきしが、ある山路へかゝりしに踏まよひて行べきかたを失ひ、難儀のあまり高き峯によぢのぼりて、山のふもとを見渡しければ、山間に人家の屋根のかすかにあるを見つけしかば、心悦びて草木を押分けつゝ、やう〳〵としてふもとに下りしに、其村里に人とてはひとりもなし、こはいかなる事にやと見まはせば、田畑の跡は茫々たるくさむらとなり、家々は皆たふれかたぶき、軒端には萑などはひまとはれり、あやしと思ひながら空家に入りて見れば、篠竹など椽をつらぬき出たり、其間々に人の骨白々と亂れありしを見て目も當られず、大におどろきいと物凄おぼえければ、身の毛よだちて恐れをなし、とく〳〵そこを走出、人住む里へと志し路を尋ければども、あれはてたれば其あたりには路がたちたえしゆへ大に苦みしが、路らしきにたづねあたり、とやかくとして人里に馳着、始て人心地となりけり、かくあれば奥の方のきゝんたりし餓死の様子は、關東へ聞えしよりも、直に其所を見ては殊更におどろかれ、恐しき事共なりとの物語なりし

是は相違なき事と我聞うけしなり、さあれば大きゝんの恐しさ、うゑて死に盡せし有様、此一ヶ條をもつて其外をも察すべき事也

第四　天災地變の事

卯年凶作にてきゝんたりし事、天よりは災を降し、地にも變ありしよりおこれり、其故は前年の寅の冬より氣候いつもとは大きにたがへり、夫冬はさむかるべきに、さはなく其十二月甚あたゝかにて、

まづ菜種の花などさきそろひ、又は筍を生じ、陽気春に似て三月頃のごとし、且時ならざる雷雨度々あり、殊に大坂にては御城の門に雷おちて焼しと聞えし、極月にかくある事は前代未聞の天災たりとて人々おそれをのゝけり、扨其年も暮れて明れば卯の年となりぬ、此春はなほさら暖ならんとおもひしに、冬とは引かはりて寒気甚しくありけり、其上雨のふる日おほくして、晴天はまれなりし、されども夏に及びしに、麦作はいつもとさまでのちがひもなくとりけり、かくて五月になりぬれば暑気の節たれども、さはなくて田植の時にいたれども余寒なほさらず、人皆綿入を着て火にあたるほどなれば、此さむさにては作物不熟ならんと察せられしかば、穀物の直段諸国一同大きにあがれり、此時にあたりまれには米穀を余分に持し者ありしかども、たくはへおくべき思案なく、唯目の前に過分の金銭手に入るをのみ悦びて売払しかば、多くは倉を空くせり、かくて日を送行しほどに、七月に成りしかば雨にまじりて砂をふらし、あるひは風につれて白き毛のごときもの、此あたりまで飛来れり、又大地のふるふ音して夜も昼も聞えけり、これはいかなる事やらん、不思議なりとて人々打寄いひあへり、是は信濃国浅間山の焼出せしにて、其火勢のとゞろく音遠くも響き渡りて聞えしにぞありける、かくて山の上の煙は空をおほひ、電光夥しく雷きびしく鳴りはためき、其あたり二三里がほどは闇となりて昼夜をわかたずありしかば、灯火を用ひつゞけて常に明しを消す事あたはず、夫よりしては泥土をふらし、或は火の石を飛しつゝ、其震動雷電次第〳〵にいやまさりしかば、皆人肝を消し魂飛

て夢のごとし、されども爲方なくて日を送し事七日七夜におよび、つひには淺間の高山裂崩て大水出しかば、火の石泥土をおし流せし事夥し、其勢の恐しさたとへていはん樣もなく、言語にたえし事共也、其上燒石さんらんして二三里がほどに充滿り、其石砂をふらせしは二十里にこえけり、中にも高さ三間程に長さ十三間の大石まろび出たり、かほどの大石たるをだに、さばかりの洪水たれば、一夜の中におしながせし其道のりは十三里にてとゞまりぬ、これもとより燒石たれば其流の水も大熱湯と沸かえり、水の中よりしてしば〳〵けぶり立のぼれり、されば此石の上にながれかゝりし物は、草も木も忽に燃あがり、悉火となりしを見し人奇異のおもひをなせり、恐しなどもおろか也、かほどの大石たるをだにおしながせし事たれば、五間や三間の石などは數限もあらばこそ、押出し〳〵流かゝりし勢ゆへ、其水すぢの村々里々其數都て五十三箇村、一時がほどに押流せり、其家數は千七百八十三軒、人は三千七十八人を溺し殺せり、其外牛馬の類は數を知らず、取りわきて矢倉村•岩木村•橫尾村•松尾村•河原村等五ヶ村の水損といふは、其地幅十八町に竪は一里半がほどほりうがたれ、水の深さ三丈二尺餘を湛へてあらたに沼となれり、これらの家數人馬の死亡はいまだしれざるよし申出しと聞えけり、其外杢の御番所をもおしながしければ、其水すぢたる十八ヶ村も水難にて、溺死の人馬は是も數を知らざると也、抑此出水の色といふは赤き事血のごとく、且其泥水たる水とはいへども大熱湯たる故に、それにふれしものは忽ちに煮殺されて、こと〴〵く亡失にけり、されば死を免かれべきやうと

てはたゑてなかりし事也と聞えし、實に古今未曾有の地變とこそ云べけれ

第五　長温不作の事

あさまやけの前より雨ふり出しけるが、つゞきて長しけとなれり、さりながらたまさかには晴されもありて、日影のあらはれし事ありといへども、晴天といふは一日もなくて毎日〳〵しけ續ければ、陰氣がちにてありしゆへ、諸作毛成長する事あたはず、一切の野菜の類もくされかじけ、木の實草の實におよぶまでも熟せざりし、此有樣にては秋の收納はいかゞあらんと、皆人うれひて口をふくりしほどに、二百十日になりしかば長の風大きにおこり、二夜三日吹きとほせり、其後も雨ふりやまず、抑此しけは六月の始より九月の末まで四ヶ月におよびけるこそうたてけれ、こゝに至りて諸作物の色益かはりて實入らず、まづ稻の穗はそらだちしてたれこゞみしはなく、所によりてはまれ〳〵に少しの實入しがあれども、久しく長しけにあひたれば、其實風にいたみしと見え、米となしても其性續けたればくだけやすく、飯に炊ても酢味あるひは甘味ありて、つねの米の風味はあらず、其外の雜こくとてもこれに似たり、又其菜を用ふる野菜のたぐひも不熟たりし事は相同じかりければ、つひには秋の作毛すべて皆無同然となりはてければ、上も下も穀食にとぼしく、倉廩空くして人々多くうゑにたびしかば、きゝんの大難此時に至りとかなしめる事のみにて、其なげきの甚さ言語にたえし世となれり、凡民は貧くして貯なきが多き者たれば、忽にうゑに臨めり、せめてはうゑを凌がんとて、蕨の根葛の根、又

は野老の類をほりとりつゝ扶食とせり、其求る有様は、山に登り谷に下り其辛勞限なし、其上製しこなす事もたやすからず、一日のかせぎにて一日の食に當りかねけり、又栗柿しだみ樫の實くぬぎの實を拾ひ、其外木の葉草の根をつみなどして、凡人の口へ入るといふものとだにきけば、何によらずくらひつゝ只命をつなぐ事のみ也、かく千辛萬苦して心を勞し力を盡しけれども、尚其飢を凌ぐに足らずありしかば、食物を假むとすれども、きゝんは世間一同たれば、いづ方にてもこくもつとては不足ゆへに借す人なし、金錢とても殊に不通用たれば、假借の道たえて一粒一錢も不自由の世間となり、人の命實にあやうく見えたりけり、此時に當り諸國の御領主御地頭方、各領分の民をうやさゞらむが爲に、穀止といへる作法をきびしく設て、他領へとてはこく物を出させられず、それは奥の白川・三春・仙臺・南部・津輕・會津・米澤・及び越後國等也、扨は此下野・常陸すべて關東八ヶ國に至て、一同のこくどめとなりて、只同じ領分限のみの賣買になりしかば、何ほど金錢を持し者とても、他領よりしてはこく物を買取る事少しもならず、たとへば隣村に親類縁者ありといへども、他の領分なればこく物の取やりは少しもならず、其不通用のほど察すべし、扨當御領主にては、町方のこく屋共がたくはへたりしこく物の有高をかねて御しらべ有りしに、日をおひて減少すれば、多くの人の命を危く思召れ、うりかひに法を御建ありて、買人共多分のこゝ物を一度にかひとる事を禁じ、又米買人としてこく屋へ來らむ者に、紛れ者のなき爲にとて、その村々の名主役人より其買人の家內の人高を糺し、分

に應じ升數を書きつけて切手に認め、それを證據として買取べしとの御下知也、されば其切手をこくや共見留し上にて、こく物をうりあたへる作法となれり、それも買者ども一人分に付錢高三百文を限とすべしとの御定なりしかば、金錢をおほく持しものたりとも、此節のこくもつを多分に手取る事はならざりけり、かくありしかば買人ども村役人の切手を以て、こくや／＼に群集して、毎日／＼市のごとし、其中には家内の年より子ども、又は病人などの難儀を告げ、様々のかなしみをいひたてし其有様のいたはしさ、あはれに堪へざりしと聞えし

第六　米穀高直の事

此とうこく物の直段、自國他國等聞及びし分をあらましに左に記せり

金壹分に付	奥州、三春・仙臺・南部・津輕	米貳升八合
同	同　會津・出羽國、米澤	同四升八合
同	水戸御領馬頭あたり、是は野州那須郡の内武茂の郷也	同四升五合
同	奥州、白川	同六升
同	越後國	同七升
同	野州那須郡黒羽領、同郡大田原領同斷	同七升五合
同	同所及近邊	あはひえ六升五合より七升

同　同　つき麥九升八合
同　同　から麥壹斗四升
同　同　小麥壹斗四升
同　同　大豆壹斗貳升五合
同　同　小豆八升四合
代錢百文に付　生麩（小麥のかす也）貳升八合
同八百文に付　ひえ糠壹俵
同十六文以上　大こん壹本
同五十文以上　同ひば壹連

此外わらびのこ・くずのこ・しだみのこ・ならのみをいへりし惣て木の實草の實、および野菜のるひ、およそ食物になるほどのものはうりかひありしかども略せり

石の巾にて　金壹分に米貳升八合がへの所にては、壹升に付代銀五匁三分五りン余に當り、又黒羽あたり七升五合がへの所にては、壹升に付代錢百七十文にあたれり、（但し後に貳百文條までにいたれり）此時錢相場金壹兩に五貫貳百文がへ也

第七　乞食に出し者倒死の事

奥州の中にてもきゝんの甚き村々の者ども、くふべき術のなきはこくもつ少しもありときゝおよべる

所へは、はる〳〵と志して家内皆つれだちてこじきに出しが多くありしときこえけり、其中にわきてとぼしきは金錢もなければ、途中にても食餌にとぼしかり、日をかさねしにつれて身のおとろひはてし上、遠路のつかれにたえがたく、山路などにゆきかゝりてたふれ死せし者おびたゞしくありけり、かくていづこのたれと云名もしれず、たづねとふべき人もなければ、つひには鳥けだものゝゑじきになれり、いとあはれなる事なりし、又家を去らずしてありし者の中には、うゑにたえかねてみづからくびをくゝりて死し、あるひは井戸や川へ身をなげて、親に別れ子をすてゝ死せし者いくばくといふ數かぎりもなかりし、殊にいとけなき子のうゑしは乳房をくはひれども、母も食に遠ざかりし身たれば乳もたえて出ず、さあれば子はうゑにせまりてちぶさをくひきり、又は父のもゝなどにくひつきてやみ犬のごとくなるゆへ、せんかたなくひつ長持の類におし入れおき、死するをまちて取捨しも有しと也、かゝるあはれにひきかへて、此時にあたりつよくさかりなる者どものうゑにせまりしは、つねの心を變じ徒黨をなし、村々にてこく物のたくはひありし家々へは、大勢にておし入り〳〵おしかりをし、又は亂妨狼藉をはたらき、或は諸色をみだりにうばひとれり、はなはだしきは領主の城下や、地頭の居所の町々まで多勢にておし來り、大聲をあげてあばれ入り、こく屋〳〵を始として、物持の家くらとうを打破れり、此時の有様何方も同くて、はやり事のやうたりしかば、晝夜騷動たえずして喧かりし事共也、其とうの中には時を得て盗賊もまじりし事たれば、心うかりし世の樣也、里々町々だに

かくさわがしくありしかば、況や道端にては辻切追剥おほく出て、旅人を殺し衣類をはぎとり、金錢を奪ひしかば、往來の妨となれり、太平無事の世の中もかやうにみだりがはしくなり、無法非道の人情とかはり、言語にたえし事どもは何ゆへぞや、これきゝんの災のなす所也、さればこそ恒の產なき則は恒の心なしといひ、又小人窮すれば斯に濫すとは聖賢の至言にて、實ありがたき示しと知るべし」
右の如くたれば、人々の生涯に此きゝんの難のあらん事を忘れべからず、毎日食に向ふときは、穀を食する事のたふときをおもふべし、此誠の心有るときは、自然と天道の意にかなひば、其冥加を被りて、たとへきゝんのなんにあふとても、非業の餓死をまぬかれべし、もし大きゝんの至る時は、我身を始妻子眷屬すべて命を保ち得ざるほどの一大事たり、それをも恐れずして、つね〳〵忘れし如くの者は、幸にして一生涯きゝんの苦患にあはずとも貧きうをまぬかれじ、其困窮に迫れば是非なく惡心を生じて、ぬすみ惡黨などの非道をもなすに至れば、其天罰をうけてつひには非業の死をもとげべき也、かへす〳〵も恐れ〳〵て穀食の事を心にかけ、つねにおもひてわすれべからず
右卯のきゝんにこんきうし、うゑに及びし者多くありしかども、御當領分の事は上より御救として米こくを出し給はり、又はかねてより貯ひたりし溜稗をあたへさせ、或は村々里々にては名主頭だちし者どもが才覺を以て食物を配り、殊更こくもつの貯ひまゝありしものどもより配分をさせしめ給ひければ、下にては友救ひの惠もあり、かやうに上よりは仁心、下にもそれ〴〵の慈悲情ありて急をすく

ひしかば、かほどの大難たりしかども、がしせしといふべき程のものは一人もなかりけるこそ幸なりけれ、然れば餓死人といふ名をまづは免れたれども、つぐる辰の年に至り、病を生じて死せしも多しときこえし、これ去年のきゝんの節食毒にあたりありしと察せられし、其ゆへはこく類乏しかりしかば、かてとして取くらひし木の葉草の根などの色々の中には、毒のあるかなきをもえらばずして、みだりに用ひつゝ月日をかさねしゆへとしられけり、さあればつねに用ひざりし毒ある物をもくひしかば、後に至り其食毒の病を發して、命を亡せし事も非業の死たれば、これもうゑ死の類也、是おそきと早きとのちがひあるまでにて、がしせしにおなじといふべし、人々こゝをよく察すべし、只がしにんまではなかりしといふ事のみをきゝつたへて、なほざりにおもへるものあらんかとてかくは示せり、いささかも油斷すべからず

第八　かてをたくはへし人の事

ある所に米穀は云におよばず、凡くひものになるべきほどの色品をたくはひ、何によらず心を用ふる事のくはしき人ありしが、毎年秋の末に至り里芋を刈取るせつ、莖をば皆ほしあげてたくはひ、又きりすてし芋の葉をも遺さず取集めおき、よき日よりには庭へひろげてほしあげ、扨家内中かゝりてもみこなし、其葉を紙袋におし入れ、しめりけ虫氣のつかざる様に心を用ひ手入をして、年毎におほくたくはひおきけり、かくて此きゝんの時にいたり、此芋の葉の貯を出して雑穀にまじへつゝくひけれ

ば、そくばくの日數うゑを凌ぎて、大きにたすけとなり、又人にもあたへしときこえしは、よき心がけと知るべし

此貯の心がけは里芋の葉にかぎらず、何にても心を用ふる事くはしくあらば、すたるべき物をすてずして置き、又草木の多き中には毒にならずして、長くたくはへになる物もあるべければ、つねにわすれず貯おくべし、遠き慮のなきときは必ず近き憂ありと聖人の教訓をおそれたふとむべければ也、然るをさはおもはで、過ぎし事にはかまはず、さきの事をもうれひとせず、ゆだんのみにて無益に月日をおくれる愚なる者は、人にして人にあらずといふべけれ、智恵なき鳥けだものだもくひ物を得て餘あれば、土にうづみ木にはさみおく事あるは、うゑし時のたくはひぞかし、是は人々も知りし事也、禽獸だにも用心をする事かくのごとし、然るを萬物の長たりといふ人に生れながら、きゝんの憂ある事を忘れ居て、食物を貯おくべき用心もせで、農業耕作におこたり、こくもつ夫食にとぼしく、あまつさへ吝がましくいたづらに月日をおくる者は、鳥にだもしかずといはん、よくよくこれをおもふべし

第九　金を持し者うゑ死せし事

前にもあげし享保十七年壬子西國すべて大きゝん、うんか也、此事を年代記に西國いねむしつき、大きゝんと有 此時道にゆきたふれてうゑ死せし者おびたゞしく有けり、其中に一人の男ありしが、衣類を始身のまはり腰の物に至る迄、美美

しくてなみ／＼ならざる出立ゆゑに、其所の者死骸を見届ければ、金百兩をくびにかけてありしと
也、さあれば多くの金を持し人くひ物を求んとて旅に出しと見えたれども、うゑをしのぐべきわづか
の一飯を得る事あたはずして、かく餓死せしと察せられたれば、殊に殘念なるもの也、百兩の金を身
に添へし人だにがしをまぬかれざりし有樣かくのごとし、いはんや貧乏人のがしせしはなほすみやか
ならんとおもひやられしとなり

是は伊豫國松山の產にて正山といひし老僧が、其所にて直に見きゝしとありし物がたりをわが若き
頃聞置し事なり

然るを今の世の人心たる、只金錢のみを重しとし、食物をかろしとし、米穀のたぐひは年毎に生じて
價に賣のるものゝやうに心得て、まゝには凶年不作もある事をはからずして、大切なる農業をおろそか
になしぬるものも多くあれば、其天罰を蒙りて、又もやきゝんの災難あるまじき事にあらずと心得、
おそれつゝしみ此世の中にきゝんの大難ある事を忘ず、唯一向に農業のみをつとめて、天道天意にた
がはざる樣に其職に心をゆだね、日々夜々に慮べき事肝要也、蓋五穀は人をやしなふために天より授
け給ひし物なれば、天地の賜にて大恩たり、それを愚なる者は何とも思はずして、必つとめべき農業
をうとみきらひておこたれる上に、奢の風俗にうつりゆくほどならば、其天罰としてつひには大變凶年
又もやあらんと、來らん世をうれひおそれるの餘、人々の心得の爲にとて、今我かくのごとくに書き遺

しおく事たれば、此書を見もし、聞もせん者は、今までよりも精を出してつとめべく、又心得違をせし者は志を改て人たる本心にたちかへり、五穀のたふとき事をわきまへ、耕作をつとめべき道理を知りて、農業をこそはげむべけれ

第十　農業全書を讀べき事　（此書は板行にて書林にあり）

書物の義理をわきまへのなるほどの才覺あらん者、ねがはくば農業全書一部を求得てよみたき事なれ、其故は農人の爲にあらはせし書たれば也、これをよみ見れば、宮崎安貞翁が四十年來心を費し力を勞せし深切なる志を尙ぶべきを知り、および貝原翁が同意を以此書の末に附錄せし旨を見て、米と麥との作德たる、其證據ある事どもを知りて、不心得なる者へよみてきかせたき事なれ、如レ此人をさとし示す志あらば、善を行ふの至りといふべし

農業全書の卷末に載せし米麥の德の事

貝原翁曰、夫天の人を養ひ給ふために生ずるこく物樣々多しといへども、中に就て人間の生養の備と見ゆる物二種あり、稻と麥となり、稻は秋實のりて夏の初迄人を養ふ備也、米の盡る時分には麥又一樣にいでき、四月半より中秋まで人民の食となる、（又夏秋の間にあは・きび・そば・ひえ・大小豆・さゝげなどのこくもつありて、稻麥のたらざるたすけとなる、又大豆とひえは牛馬のくひものとなるなり）凡天道の人を養ひ給ふ備誠にありがたき事いはんやうなし、たとへば小兒生れて食する事ならねば、母の食物が乳となりてこれをやしなひ其子生長し、其母又子をはらめる時は、其乳とまりて次の

子のやしなひとなる、或は四足のある獸は翅なし、翅ある鳥類は皆足二ッあり、角あるものは牙なく、牙あれば角なし、（人は生類の長なれば、智ありて諸用をはかり、兩手ありて萬の用を調ゆる事自由なり）此天の施の委しき趣を鑑て、五こく皆人のために生ずる理を知るべし、右の内取分稻と麥とは、他の穀物の類をはなれたる重き物なるゆへ、聖人の春秋といふ書をあらはし給へるにも、稻や麥の損亡を擧げ給へり、此二種の損毛は人世の大なる災なれば也、農人たらん者よく此天道の理を仰ぎたふとび、愼で天意をうけ、殊更稻と麥を作るに其術をつくし力を用ふべし、是則農民天道をたふとぶ道にして、命を保ち福を受る術なり（と見えたり以上）

右黒羽鈴木武介氏所レ著農喩書、具論二民間備豫急務一、欲レ使三人免二阻饑之患一、其濟物之志、可レ謂二至深切一矣、此間往々有二寫本一、而字句多レ謬、余近得二其郷人長坂氏刻本一、因與二一二同志一謀、重刻以廣二其傳一云

文政乙酉仲秋　　水戸秋山盛恭識

農喩　終

文政八年乙酉仲秋發行

江戸書林　通油町北側　鶴屋喜衞門

水戸書林　上町鐵炮町　舛屋治三郎

製本所

治國大本

朝日丹波著

治國大本

朝日丹波 著

太平ノ世ニ國家ノ危難ニ及ト云ハ、過半借用ヨリ起ル也、以前ハ通用手形ト云モノ有テ、ソレヲ元ニタテ、郷中ヨリ米附ケ來ルヲ飯料トシ、其餘ヲ賣テ諸用ノ手合ニ及ケルニ、何時カ役所ヨリ米無キ手形ヲ仕出シテ、國用ノ不足ヲ補ヒシ故ニ、代官ノ勘定大ニ滯リ、竟ニハ形廢リニ成タリ、又札座ヲ構ヘテ本無キ銀札ヲ使ヒ出シ、國用ノ不足ヲ償フタル處、是亦無原ノ貨ナレバ、札座ノ勘定大ニ滯リ、竟ニハ銀札廢リニ成タリ、如ㇾ是スル中ニモ、國用ハ年々增益スル故、種々ノ詐謀ヲ以テ金銀米錢ヲ借リ出シ、御借用ノ額莫大ニ至リヌ、總ジテ難澁ノ金銀ヲ借ルニハ、京大坂ハ勿論ノコト、御國中ニテモ士大夫タル者ノ有ルマジキ、町人百姓ニ頭ヲ下ゲテ阿リ諂ヒ、共ニ色ニ溺レ酒ニ淺リテ、交リ親クナリタルトキニ言ヒ懸ケテ、借用調コト也、此風推移テ酒色ニ耽ル者ヲバ、良役人器量者ナリトスルニ至ル、有程ニシテ手合ストイヘドモ、詐則必窮スルノ道理ニシテ、御返濟毎時間違ケルユヘ、終ニ借用ノ術盡キ、御家ノ危難實ニ朝不ㇾ謀ㇾ夕ニ至ル、是更張ノ由テ起ル所以ニシテ、第一ニ借用ノ道ヲ截斷テ、詐僞ノ源ヲ塞シハ是ガ爲也、然レドモ人情ハ淫ヲ好テ正ヲ忌ミ、奢ヲ羨ンデ儉ヲ羞ルモノナレバ、正儉ノ

政ハイツホドナク崩レテ、以前ノ爲方再興センコトヲ憂ヘ恕ルヽ也、然ルニ借金ニテ潰レタル大名ハ無シト云人アリ、不忠不智ノ至極誠ニ言語ニモ筆紙ニモ陳盡シガタシ、「詩大雅曰、庶人之愚亦職維疾、哲人之愚亦維斯戾」ト言ハ、庶人ハ無祿無官ニシテ上ノ人ニ治ラレテ居ル身ナレバ、愚ナルハ持前生得ノ疾也トガムベカラズ、上ニ立ツ人ハ君ヨリ重キ官祿賜リテ、政事ニ與リ國ヲ治ル身ナレバ、元來知慧アル筈ノコト故哲人ト稱スルニ、其哲人ガ愚ニシテ國家ノ危難ハ何事ヨリ起ルト云コトヲモ不レ知、又危難ヲ救テ國家ヲ治ル爲方ヲモ不レ知ハ、戾リ背キタリト也、彼借金デ潰レタル大名ハ無シト云ハ、カヽル人ナルベシ

附記

府庫ニ金錢充實スルヤウニナレバ、徒ニ積ミ置ンヨリハ利息ヲ賤クシテ貸シ附ルガ、人民ヲ救フノ仁政ニシテ、上ニハ居ナガラ金錢ヲ殖ヤスノ大益アリ、是卽惠而不レ費ノ術ナリト思附ク役人必出來ルモノ也、其爲方理ノ當然ナレバ、執政モ速カニ聞納レテ貸付ノコト興ルナリ、貸付ノコト興レバ次第ニ取廣ガリテ、數年ノ間ニ府庫ノ金錢ハ過半人手ニ渡リ、上ニハ數千枚ノ證券ヲ貯ユルノミナラン、然ン時ニ若シ公役ノ大費用出來ラバ、寸志用銀ヲ科附ル上ニ、貸附タル金錢ヲ俄ニ取リ立ントスルモ、得出スマジケレバ不レ得レ已他所ヨリ高利ノ金錢ヲ借リ出シテ、間ニ合スルヨリ外ニ術無ラン、是御借用ノ禍再ビ興ルノ始也、扨其御借用御返濟有ルベキノ期ニ至リ、若水旱盜賊ノ災有テ、御成稼大

ニ不足セバ、銀主ニ信義ヲ失ハン、其時ハ百姓モ困窮スレバ、後貸附タル金錢モ取返スベキ所無ラン、コヽニ至テ貸タル金銀モ不レ歸、借リタル金銀モ返スコト不レ能、國勢大ニ衰フ、國勢大ニ衰フレバ、必彌增ニ災難有ルモノナレバ、其後ノ形狀ハ如何ナル大事ニヤ成ン、實ニ可レ畏也、荀子ニ前後慮ト云コトアリ、庸人ノ事ヲ興スハ、目前ノ利ヲ見レバ以後ノ害ヲ慮ラズ、智者ハ前ニ以後ノ害ヲ慮テ、其事ヲ興サヌ也、コレヲ前後慮ト云、然レバ前ノ貸スノ利ハ後ニ借リルノ害タルコトヲ前後慮シ、唯不レ貸不レ借シテ謹デ府庫ノ財ヲ守ルベキ也

右ハ以前御借用國家ノ大害ヲ成シタル大概ヲ記シテ、且當時府庫ノ財ヲ積ムヲ本トスルニ就テ、後來貸附ノ事興テ再ビ御借用ノ禍ヲ引キ出サンコトヲ恐レ、爲ニ其一條ヲ附記シテ、國害ヲ未然ニ制スル者ナリ

夫執政當職ハ、國家ノ安危存亡ノ係ル所、此上モ無キ重任也、タトヘバ扇ノ樞ノ如シ、樞ユルミ脫レバ、骨コト〱ク分レテ扇ノ用ナサズ、上ノ御選ヲ以テ執政被二仰付一、國ノ樞也ト被二思召一ニ、其身ハ權威ヲ得タルヲ喜ブマデニテ、治國ノ政ハ如何樣ニスルモノト云者モナク、徒ニ緣組養子屋敷替ナドノ願ヲ聽クノミヲ、大臣ノ職分ト意得、金銀米穀ノ出入ヲバ、差引算用下品ナルコトトシテ、專ラ用人ニ任セ、用人ハ勝手方ニ任セ、勝手方ハ下役人ニ任セテ、一國ノ大本勘定人ノ掌ニ落チ、國家ノ大難到來ノ時ハ、當職ハ茫然トシテ如何トモスルコト不レ能ハ、不忠ノ甚キ也、不忠ト云モノモ格式ノ尊

卑役儀ノ輕重ニヨリテ一樣ナラズ、當職ノ不忠ハ人君ノ御身ト國家ニ係ルコト故、大不忠也、夫治國ノ本ハ金銀米穀ヲ府庫倉廩ニ實シメテ、國用不足無樣ニスルコト也、其爲方ニ邪正ノ差別アリ、邪ナルハ詐僞ノ謀ヲ以テ、百姓町人ヲ虐取リ、他國ノ金銀ヲ借出スヲ主トシテ、出シ用ル所ヲ節スルコト不レ能、故上下共貧ク成テ國家ノ危難必至也、正キハ嚴ク上下ノ分ヲ立テ定テ、威權ヲ上ニ握リ、而後田圃ノ歩數ヲ詳カニシ、正理ヲ以テ年稅ヲ取リ、收納ノ額ヲ何ホドト云コトヲ知リ、コレニ因テ出シ用ル所ヲ裁制シテ、一定ノ法ヲ立ル故、米穀金銀必餘羨有テ、倉廩府庫充實スルニ至ル、百姓町人モ虐取ルヽコト無故、衣食住ニ窮セズ、コヽニ至テ上下共ニ富ミ、不慮ノ大費用アリトモ凌ギ行ク也、禮記ノ王制篇ニ、「量レ入爲レ出」トイヘリ、是萬世治國ノ妙方也、孔子ノ「道二千乘之國一、節レ用而愛レ人」トノ玉ヒシ語ニ、前後次第ノ義アルコトヲ知ルガ、經濟ノ肝要ナルヨシ聞及ベリ、節レ用トハ國ノ入用ニ限ヲ立テ、限ヨリ外ヘハ決シテ出サヌコト也、人君タトヒイカホド愛レ人ノ仁心有ラセラレテモ、御入用ニ限ヲ不レ立、妄ニ費シ玉フナラバ、何ホドノ金銀モ不足故、畢竟大ニ群臣ノ俸祿ヲ減ジ、百姓町人ヲ虐ゲ取リ、他國ノ銀主マデヲ顚スヨリ外無キナレバ、心ハ愛レ人玉フトモ、實ハ不仁ノ至極也、因テ聖人節用ヲ前ニ云テ、愛人ヲ後ニ云玉ヘリトカヤ、此處ヲ熟知シテ、總テノ入用ニ嚴ク限リヲ立ベキ也、是仁政ノ本也、論語ニ有子ノ本立而道生ト云ルノ本ハ、孝弟ヲ指スヨシナレドモ、經濟ノ上ニテハ富ヲ本ト意得ベキ也、其富ハ各分ヲ守ルヨリ起ル、國君ハ御領知ノ額ヲ分トシ守リ玉ヒ、其臣モ千石ノ

者ハ千石ノ分ヲ守リ、百石ノ者ハ百石ノ分ヲ守リ、他ヲ不レ羨不レ學シテ其身ギリニ支配スルトキハ、窮スルト云コト無クシテ自然ニ富ヲ致ス也、然ルトキハ當職ハ國ノ分ヲ知テ、國君ノコレヲ守リ玉フヤウニスルヲ第一トスベキ也、此處立定レバ、仁モ義モ禮モ従テ生ズル也、貧ナルトキハ不手廻ニシテ、諸事後ロ前ニナルモノユヘ、智者モ愚鈍ニ見ユル、俗ニ所謂貧スレバ鈍スルトハ是也、富ムトキハ諸事思フマヽニ調フ故、俗ニ有レ智樣ニ見ユル、然レバ富メバ智モ生ズルト云テ可也、扨政事ノ品繁多ナルニ付テ、當職一人ニテハ行届ヌ故、同役ヲ立置ル、也、同役是亦扇ノ樞ノ如シ、扇ノ樞ト云モノハ一本ニテハシマラヌ故、左ヨリ一本、右ヨリ一本、同ジ形ノ物ヲサシコミ、中ニテジツトシマリ合テ、數多ノ骨ヲ持堅ル也、同役モ如レ是ニ何人アリトモ、同心同力ニシテ國政ヲ執ニテ、治國ノ功業成就スル也、扨又江戸御屋敷ニモ當職カハルヽヽ勤番セデカナワヌ也、江戸ト御國トハ諸事大ニ異ナル故、江戸ニツムル人ハ江戸ヲ主トシ、御國ニ居ル人ハ御國ヲ主トシ、自然ニ心一和セヌ樣ニ成也、是亦扇ノ樞ノ如ク東ヨリサシコムモ西ヨリサシコムモ、同樣ノ樞ニテ少シモ異ナルコトナク、同心同力東西ヨリシマリ合テ國ヲ治ルニテ、國永ク安富、君永尊榮ナリ

右ハ席上ノ空論紙面ノ虚文ニハ非ル也、實ニ奉レ蒙ニ嚴命一、親試テ大ニ其效ヲ得タル爲方故ニ、記シ置者也

易ノ履ノ卦ノ象ニ、上レ天下レ澤、履、君子以辨ニ上下一、定ニ民志一トアリ

右ハ國ヲ治ルニハ、上下ノ分ヲ立テ定ムル證據ナリ

昔漢ノ文帝ハ賢君ニテ、明カニ國家ノ事ニ習玉ヘリ、有時右丞相周勃ニ、天下一歳ノ決獄ハ幾何ゾト御問アリケレバ、周勃不レ知ノ旨謝申シ上グル、天下ノ錢穀一歳ノ出入ハ幾何ゾト御問有ケレバ、又不レ知ノ旨謝申シ上グル、是時周勃對ルコト不レ能ヲ媿テ、汗出テ背ヲ洽タリ、文帝又左丞相陳平ニ同樣ノ御問有リケレバ、陳平各有ニ主者一ト答フ、主者ハ爲レ誰ト御問アリケレバ、陛下即決獄ヲ問ヒ玉ハントナラバ、廷尉ヲ責メ玉ヘ、錢穀ヲ問ントナラバ、治粟内史ヲ責玉ヘト申シ上ル、諸事各有ニ主者一、丞相ノ所レ主ハ何事ゾト御問アリケレバ、「宰相上佐ニ天子一、理ニ陰陽一、順ニ四時一、下遂ニ萬物之宜一、外鎭ニ撫四夷諸侯一、内親ニ附百姓一、使ニ卿大夫各得一レ任ニ其職一也」ト申上タルニ付キ、陳平ハ御前ノ首尾善リシトカヤ、此等ノコトナド見聞シテ、執政當職ハ陳平ガ申ス通リニコソ可レ有也ト思フハ、大ナルコヽロ得違也、周勃ハ武人ニテ經濟ノ道ハ不案内ナル故ニ、決獄錢穀ノ數ヲ知ラザリキ、宰相ノ知ラデカナワヌ事ヲ知ラザリシヲ恥ヂテ、汗洽レ背メルハ實意ニシテ末頼母シキコト也、陳平ハ智ヲ好デ甚敏辯ナル人ユヘ、脫避ニ妙ニシテ己ガ過ヲ過ト見セズ、丞相ト云モノハ決獄錢穀ノコトヲバ、其主者々々ニ任セテ、其身ハ不レ知ガ本體ノ樣ニ言ヒ廻シ、賢君ヲ欺キ直臣ヲ愧シムルニ至ル、實ニ悪ムベキ也、明ノ凌稚隆ガ評ニモ、「一歳治獄、可三以知ニ民俗厚薄一、一歳錢穀、可三以知ニ國計盈虛一、此眞宰相任也、而陳平責ニ之廷尉治粟一、烏得レ爲レ知ニ其任一哉」トイヘリ

周ノ世ニ齊ノ管仲・鄭ノ子産ト云シハ、イヅレモ其國ノ執政當職ニシテ、名高キ賢大夫也トカヤ、其所ﾚ爲ヲ管子左傳國語等ニ考フルニ、第一ニ田畝ノ利害錢穀ノ出入ヲ熟知シ、是ヲ本トシテ諸政ヲ取捌ケル由見ヘタリ、禮義廉恥ヲ國ノ四維トシ、「倉廩實而知榮辱、衣食足而知禮節」ト云シハ、即管仲也、上下富タル上ハ、士農工商トモニ自榮辱禮節ニ心附ク樣ニ成ル、四民榮辱禮節ニ心附ケバ、俗美ナルノ國ト可ﾚ謂也、其本ハ當職タル者ガ田園ノ利害錢穀ノ出入ヲ熟知シテ、國ヲ富スヨリ起ルナリ

禮記ノ王制篇ニ、「冢宰制國用、必於歲之杪、五穀皆入、然後制國用、用地小大、視年之豐耗、以三十年之通制國用、量入以爲出」ト云ヘリ、冢宰ハ天子ノ執政當職也、天子ノ執政大臣スラ、親制ニ國用如ﾚ此、右ハ執政大臣ノ金銀米穀ノ出入ヲ量リ、國用ヲ制スル證據ヲアゲ示ス者也

荀子ニ、有治人無治法ト云ヘルハ、國ヲ治ルニハ國ヲ治ル程ノ器量アル人ヲ得テ任用スレバ、下地ニ治法無クトモ、其人己ガ智ヲ以テ治法ヲ立テ、治ル也、是ヲ有治人ト云、假令下地ニ聖帝明王ノ立置玉ヘル治法アリトモ、其人ナキトキハ法ハ死物ニ成テ動カス故、國不ﾚ治也、是ヲ無治法ト云、然レバ國ヲ治ルコトハ專ラ執政當職ノ器量ニ在ルコトナレドモ、年來國治リタル實迹ノ法ハ、後ノ當職私智ヲ挾ヘズ、他智ヲ用ズ、其通リヲ堅ク守リテ國ヲ治ル、是亦大器量也、昔漢ノ蕭何ハ高祖ニ事テ、開國第一ノ功臣也、病危カリシ時、高祖其第ニ臨御アリテ、君即百歲ナラン後ハ、誰カ君ノ職ニ代ルベキト御問有リケレバ、臣ヲ知ルコトハ莫ﾚ若ﾚ主ト申シ上ル、因テ曹參ハイカヾト御問有ケレバ、

蕭何頓首シテ帝其人ヲ得玉ヘリ、臣死ストモ不レ恨ト申上タリ、其頃曹參ハ故アリテ蕭何ト不和也シニ、蕭何臨レ終曹參ヲ推擧スルコト如レ是ナルハ、曹參ハ私智ヲ不レ用、他智ヲ不レ容、蕭何ガ立置タル法ノ通ヲ少シモ不レ違施行、大器量アル故也、蕭何死後曹參代テ相國トナリシニ、果シテ諸事無レ所ニ變更一、コト〳〵ク蕭何ガ政跡ニ循テ、四海平安也、萬民コレヲ悦デ、「蕭何爲レ法講如ニ畫一一、曹參代レ之守而勿レ失、載其清淨民以寧壹也」ト歌ヒシトカヤ蕭何曹參不和也シトイヘドモ、蕭何ハ曹參ガ經濟ノ上ニ於テハ、己ト同心ナルコトヲ知テ、高祖ニ推擧シ、曹參モ蕭何ガ經濟ニ心服シ、私ノ怨ヲ以テ其政ヲ傷ラズ、況ヤ私ノ怨モ無ク、モトヨリ扇ノ樞ノ如ク、同心同力ニシテ政ヲ執ル者ヲヤ

右ハ後ノ執政當職私智ヲ不レ加、他ヲ不レ容、前ノ國治リタル法ヲ堅ク守ルヲ大器量タル證據ヲ示ス者也

朝日丹波鄕保

治國大本　終

治國譜及治國譜考證

朝日丹波
森文四郎 著

治國譜序

老侯之言老也、貽今侯以朝日相公、國人望之、猶得大禹於九載洪水也、乃越舉上下、定民志、臨之以威、如雷如電、疏川増防、大脩田疇、上下並富、併合要官、澄汰冗員、庶事無曠、廣交鄰以柔詐欺之源、期海運而樹信義之臬、平糴價毎貴於浪華、賑窮恩動同于岐周、其餘善政不可勝數、未及七年、吾藩大治、八年夏四月、貴妹氏歸于淀藩、冬十二月、君夫人至自奧藩、費用並浩多、當是時也、秋毫不取諸民、民心乃安云、蓋相公之爲政也、不屑踐迹、而暗契于古矣、契古而後、信聖人賢者之可法矣、信聖人賢者之可法、而後師經友史、雖諸子百家、收諸藥籠中、而不遺焉、遂與諸相公、率參政以下、凡職當要路者、月三詣泮宮、請[illegible]首說荀子、今方謂孟子、毎言及政體、輙顧下風、曰、爲仁之方、故當如是、治國之道、故當如是、蓋自徵也、相公自徵、而後人皆信其政矣、信其政、而後知學問之歸于治國矣、知學問之歸于治國、而後游泮宮者益多矣、方今國家殷富、誠使游泮宮者益多不已、則淳風美俗又何疑焉、大東之盛、藩倫三百、其大夫爲國勸學、如我相公者、無聞乎爾、則無有乎爾、相公嘗自記其所以更張紀綱、大致治安之梗概、以貽後嗣、森子章作之考證、其義明悉、所謂汗不至阿其所好者、子

章在焉、源藏竊下、深蒙ニ相公之知遇一、無レ公無レ私、凡其有レ爲、未下嘗不上レ告ニ源藏一、故知ニ相公一、則不ニ敢讓下人也、因示ニ此書一、屬レ序且擇レ名、昔南朝傳氏、世爲ニ山陰一、並著ニ奇績一、家有ニ理縣譜一、子孫相傳、不ニ以示下人、今相公之治ニ大藩一何啻ニ山陰一令郎元明君、見爲ニ參政一、好レ學勞ニ心于政一、他日必有ニ繼レ之錄ニ甚一歌一、亦何啻ニ傳氏一、特取ニ其似者一、謹命レ之曰ニ治國譜一

桃　源　藏　拜撰

治國譜自序

曾て聞く、人の非を稱して己が是を陳ることは、訟者の道にして君子の爲ざる所也と、事を執て幸にして其驗を得るといへども、天命の然らしむることなれば、己が功と思へるは惑ひ也、善に伐る事なかれとは先賢の戒めなれば、愼しむべき事也、され共其事由を語ざれば其理分らず、爰を以予が政を執て行ふ所の大略を述べて、吾家に傳ふ、是人の非を稱するにもあらず、己が是を顯すにもあらず、善に伐るにもあらず、世上に公にせんとにも非ず、子孫の經濟に與らん者に知せんがために、事實を述る事しかり

安永四乙未年春二月　　　　　朝日丹波郷保誌

惣論

御家之御支配累年之御差支にて、時之當職代る〳〵政を執て心を盡すと云へども其功を遂ず、其故をいかにと案ずるに、多くは小利に拘りて大事を辨ずるに意なく、或ひは其量餘りて妄りに大業を存立、中途にして癈するに由れり、延享二丑年老侯御入部まし〳〵、時に予當職の列に具りて難默止同役村松伊賀・平賀筑後・大野舍人へ存寄たる儀を無覆藏申談じ、何れも其理に中れるの旨申に付而上言之書を相認、一統に罷出差上之處、程なく伊賀は疾を以御役を辭、筑後舍人兩人は退役被仰付、予一人被差殘、有澤土佐・黒川監物・三谷權大夫同役に被仰付、翌寅年老侯御參覲被遊、御支配之筋御苦勞被思召、其夏予を東邸へ被爲召御尋有之、仍而手詰の愚策を捧候所、其通被試の旨奉蒙命罷歸る、於是古を考へ今を制せんとするに數世を因循したる風俗なれば、容易に改がたし、然りといへども猶豫せば身を其職に納れざるの罪有、爰を以同役心を合せ、入るを量りて出る事を爲んとして、諸の費用を省き儉素の風に復さんとするに、懶惰の時節にして習ざることのみなれば甚人情に戻れり、

于ㇾ時小田切備中と同役に被㆓仰付㆒、監物は於㆓東邸㆒病死す、翌卯年老侯御歸城まし〱て、土佐は隱居被㆓仰付㆒、權太夫予兩人をば其後御居間へ被ㇾ爲ㇾ召、暫く御役席を退くべし、拜領物有ㇾ之ては實之御免に相當候之間、不ㇾ被㆓下置㆒之旨御直書を以被ㇾ仰㆓渡之㆒、依而御自身に御政事を被㆓聞召㆒、御手傳として備中を被㆓仰付㆒、思召の御經濟を行はせられ、幾ばくもなく御自身之御捌を止させられて某氏に任ぜられたり、夫よりして御滯府年久敷して、御支配之基本も漸々に崩れ、上之信義も行はれず、御取續の爲として諸士の知行四ッ五歩の免を三ッ免に減じ、給扶持取の士列をも知行に應じて渡高を引下げ、雜人の俸をも右に准じて引方を立、種々の術を以當用を渡らんとすれども、元來其本を治めざれば國用彌足らず、於ㇾ是農民に位階を賣て時の用を足し、義田或は免許地と號して土地を裂き多くこれを與へ、公田の賦税を民の私倉に收納せしめ、其價を取て無ㇾ涯の費用を償ひ、或は小役人の中に民家を欺き、邪謀を以金銀を出させ、公用に備んと云者有れば、器量の長短を量らず、出銀の多少によりて其功を論じて賞を施し、僥倖の俸は日々に增して、昔に比すれば十倍せり、武士の祿は年々に削られて尾大の愁をなすに至る、予退役之後二十年を歷て、年々の有樣を見るに、執政の職掌も年數をかさねず、諸役人の轉役も一年の滿るを待ず、其勤る所も金銀の才覺而已に打はまり、上下交々利を征る事を要務とし政道の事は心を留るに遑あらず、漸々に亡國の機を發せんとするに似たり、予干城たるべき家に生れて空しく年月を送り、まのあたり危難に至らんとするを見るに忍びがたけれども、進みで出る時は遂

に上に獲られざれば、思ひを述る術もなく、道同じからざれば相爲に謀るべき人もなく、徒らに牙齒をくひしばりて年を過ぬ、時に明和三戌年六月廿六日、世子御歸城之上御後見役被仰付之旨、老侯より御直書を以被仰下、重任といへども世臣なるを以命ぜられたる事なれば、辭すべき所なく御受に及たり、此秋世子御入部ましまして、當職の面々も御支配必至之急迫にて、御暮し方の工面而已に心を盡すといへども、投返しの手段も盡たるにや、追々言上に及び、君命を待居たる、此秋八月十八日、又老侯より御直書到來、世子御入部御規式相濟、四五日と過なば早速雲州發向いたし、江戶表へ可致出府之旨被仰下、予思ふに、御支配向は斯までに崩れ果、其上御政事は一向あさましき事に成行し事なれば、此儘にて治るべきにもあらず、若歸役の沙汰有りとも容易に受べき事にあらず、然ども君命なれば、召に應じて東邸に至る時、果して執政の職を被仰付、予老て氣力も衰へぬるに、まして頽敗に及べる御政事を、昔に挽回す事は能はざるよしの狀を述といへども强而命ぜられ、固辭するも忠誠之道にあらず、止事を得ず御受して國に歸る、時に十一月朔日なり、事を改んと欲れども年内餘日なく、區々にして仕損ぜば御大事の端にもならんことを慮りて、是迄の法を不改、唯老侯之命を以、御家中年來及引方、且山門御普請御手傳被蒙仰候以來、諸士一統半知差上御賄被仰付、引續作方不熟、彼是に付而引方御寛め可被下時節無之、予今御賄にて被差置、非御本意儀に付而、不被爲願前後丸知被下置候段被仰渡、格別之思召を以て三ッ免を丸知にして渡し置しか共、本法

之儀は途中之事故難レ及ニ手配一、扶持米之外は買米にして、代銀を以相渡し無ニ相違一手合に及たり、其外數々之事は其儘にして差置、日用之取扱を瑣細之事まで自身に承り、予が思ふ所と異なる事をも胸を磨らして時節を待、衆人と同じく口をつぐみて一年の光陰を送り、種々の計略を以當手〳〵の間を合せ一所務を掌どり行ぬ。兼て御支配向御難澁之趣達ニ御聽一置し故、翌年亥夏に至りて、江戸より岡氏を被ニ差歸一被ニ仰下一には、御家老一統相談に及び、表同席の惣代として小田切氏を被レ召、予と同道して出府いたし、事由を達すべきのよしにて、其砌り同席一統度々議論に及び、最早御取續の手段も盡きぬれば、何れなりとも存寄あらん面々は進出て勤られよかし、忠勤も此時ぞかしと丁寧反覆して讓りしかども誰有て我勤んと云ふ人もなし、さらば何れも存寄なきよしを表同席よりも言上に被レ及、予も一所務を試むるに、此まゝにては術計も盡きたる趣達せんと決斷して、小田切氏と同じく同年五月廿八日雲州を發して東都に到り、御支配御難澁至極に及べるよしを言上して君命を待居たり、此時老侯遠き慮りを廻らし給ふに、所詮御在位にてまし〳〵ては、公邊の御勤を闕ぎ給ふ事も成りがたく、御國政の上にもむつかしき事有べしと云ふ事を御會得まし〳〵て、御世を當侯に讓り給ん事を被ニ仰出一たり、予つら〳〵此儀を案ずるに、老侯いまだ御壯年にまし〳〵て、御隱居の御身と成らせられん事、臣として殘念此上もなく、言語に絕したる事共也、されども御支配必至の急迫に及び、一家中困窮云ふばかりなく、一國中の塗炭極る所なれば、何ほど惜しみ奉りても爲んかたなきに歸したり、さ

れば御意の儘にするにしくはなかるべしと、小田切氏も予と同心なる故、其趣を以て答へ奉りぬ、老侯の命に曰、年來之困窮に付て、家中之祿四ッ五分之免を三ッにして、擬作の高を減ずといへども、曾て永續の筋も見えず、是に依て何卒御在世之中に、本免に返し可レ被レ遣旨被二仰出一たり、是至て難き事なれ共、我侯の御深切を感じ奉り、何分思召の相立樣に可レ仕と御受して、同年八月五日江戸出立、同月十七日大坂へ着、彼地にて御藏元のメリ合を定め、登せ米の高を究め、江戸仕送の規矩を立、御藏元と約をなして、同九月十四日大坂を出、同月廿日國に歸り、俄に其手〳〵の役人に申付、諸士の給帳を改め、古免の四ッ五分に返し、御徒以下の給扶持も古來の通の高に直し、御家中一統へ被二仰出一有りて古免に返し被レ下之旨、老侯より御意の趣も事濟ぬ、扨此冬御世を御入替の御議定有て、兼て老侯よりの命を以、當侯の御後見に任ぜられたるに依て、彌以て御國政を予は存分に執行ふべきよしを改て被二仰出一、御後見の事なれば、御身分の事をも聊憚なく打はまり、兎にも角にも御國の堅固ならん事を本として一家中の困窮を救ひ、一國中の疾苦を免かれしめ、公儀へ忠勤の相立つ樣に心を盡すべきのよしを被二仰渡一、予も仕懸りたる事なれば辭し奉るべき道なく、御受に及びたり、重き仰を蒙り奉りて、誠に安からず思へども、君の爲に能その身を致すは臣たる者の常なれば、我が智の至らざるは論なし、此場に臨みて家を忘れ身を忘れ、存分の治を爲ずんば有べからずと、心を定め取懸りたるに、幸にして天道に背ける事もなきにや、年穀も熟し、國その國に非るの危を免かれ、冠履倒置の風俗

を引替て、上より下を御する道に趣けり、是全く予が功にはあらず、上より其始を啓き給ひて、予をしてこれを輔けしむ、即今治に廻る時節なるにや、一家中一國中も能服して、予が寸志之勤も立ぬ、其行ふ所の目錄を左に擧て、子孫をして是を知らしむ、予が功業の成就せるは、此時坐列も諸大夫の上に居て、其齡ひも人に讓る事なく、志も國家興廢の境に至りて、老侯の御壯年の御身を以御世を讓り給ひ、專ら丹波が存寄に任せ取捌べき旨仰を蒙り奉りたる故也、唯恐らくば我子孫斯る譯をも辨へず、猥に功業を貪りて國家を誤らん事を、孟子不ㇾ云乎、「雖ㇾ有₂智慧₁、不ㇾ如ㇾ乘ㇾ勢、雖ㇾ有₂鎡基₁、不ㇾ如ㇾ待ㇾ時」と、能々此意を味へかよし

目錄

一 百姓之御免地幷御日見格を取上る事
一 郡々之酒屋を減じ往還端の茶店を止る事
一 米直段を定むる事
一 義倉方を起す事
一 鐵山之制度を立る事
一 御手船を造る事
一 貧民御恤之事
一 勸學之事
一 諸借用取遣を永く閣年申付事
一 地方之法を改る事
一 常平方之法を行ふ事
一 御家中之免を老佚之命を以古に復す事
一 大河普請を以水難を除く事
一 訴狀を以民之邪を糺す事
一 御堀浚並橋普請之事
一 將來必用之御備を立置事

治國譜考證序

朝相公其始メ政ヲ執シ中塗ニシテ已メラルヽト云ヘドモ、其職ヲ去テ自若タリ、今又政ヲ執テ其事ヲ遂ゲ其功ヲ成スト云ヘドモ、其職ニ在テ自若タリ、之レヲ用ユレバ則行ヒ、之レヲ舍レバ則藏ル、唯君ノ命ズル所ノマヽ也、國家ニ干城タルヲ以テ其家ノ分トス、當職ノ事ハモトヨリ與カラザル者ノ如シ、

相公恒ニ誦シテ云ク、孔子九夷ニ居ント欲ス、君子居ラバ何ノ陋キコトカ有ント、先大夫往昔神祖ノ麾下ニ屬シテ難波ノ大亂ヲ鎭メ、高眞廟ニ事ヘテ國初ノ功臣タルヲ以テ、代々卿相ノ家ナルガ故ニ、相公ニ至テモ治國ノ業ハ實ニ其任ト思ヒ玉フナラン、即今當職ニ就テ政ノ闕タルヲ補ヒ、風俗ノ頽敗スルヲ改メ、立派ト號シテ舊格古例ニ拘ハラズ王制ノ根元ヲ踏ヘ、人情ノ因ル所ニ本ヅキ、治要ノ樞機ヲ立テヨリ以來、國用聊カ事ヲ闕グコトナク、西丸大奥向御普請御手傳ヲ始メトシテ、姫君御婚禮、大夫人御殿造立、君夫人御入輿、連三郎君御出世、數々ノ費用莫大ナルヲ、民ニ少シノ課役モ無クシテ事盡ク整ヒヌ、猶又年々ノ税ヲ餘シテ、府庫ニ藏シテ國家永續ノ基ヒヲ立テ、治道ノ大體ヲ持シテ、上ミ君ヲ匡輔シ、下モ臣民ヲ撫育シ、禮義上ミニ行ハレ、恩澤下ニ降テ、一家中静謐、一國中無事、官法閒暇ナリ、其人存スレバ其政擧グト、豈虚語ナランヤ、惜ムラクハ時移リ世變リテ、相公ノ政跡傳ラザランコトヲ、是ヲ以テ其考證ヲ著シ、事實ノ梗槩ヲ述ルコト左ノ如シ

安永四年乙未春二月　　郡奉行兼御勝手方

森文四郎元綏謹識

治國譜考證目次

治國譜及治國譜考證

朝日丹波
森文四郎 著

發端

朝相公語テ曰、御國ノ御支配急迫ニ至リテ、明和四亥ノ夏老侯ノ命ヲ奉ジテ、朝相公田大夫ト東邸ニ至リテ、各治安ノ策ヲ獻ゼラル、此時老侯朝公ニ命ズラク、上初テ本藩ニ就キ玉フ時、積年ノ弊政ニ依テ、群臣内ニ困ミ百姓外ニ窮シテ朝不レ謀レ夕、臣等ノ知ル所也、是ヲ以臣民撫育ノ爲ト思召シ、暫ク御政事ヲ親ミ玉フト云ヘドモ、御疾病ノ故ヲ以テ御滯府マシマスコト數ニシテ思召ニ任ゼラレザルノ間、御世ヲ嗣君ニ讓リ玉フベキノ旨決斷シ玉フ、然ル上ハ御政事ヲ相公ニ任ゼラレ、嗣君ヲ輔佐シ奉リテ國家安泰ノ計ヲ廻ラスベキ旨仰出サレタリト、於テレ爰ニ相公政ヲ執テ御後見ノ任ヲモ蒙リ玉ヘバ、愈君ノ御仁德ヲ導キ、驕奢ノ道ヲ絕チ、儉德ヲ愼ミ守リ玉ヒテ、國家永久ノ圖ヲ思シ召ンコトヲ慮リ玉フ歟、老侯ノ時御納戸金トテ、年々定例トシテ上ゲ來レル奥向キノ御用金ヲ除キテ、御納戸金ト云フ名ヲ消シ玉フ、當侯御世ヲ嗣ギ玉ヒテ、朝政ヲ懈リ玉ハズ、寬仁ノ德具リ玉ヒテ、淫樂ノ御好ミモナク、

神祖ノ御掟ヲ守リ玉ヒテ、御朝覲御交替ノ時ヲ亂リ玉ハズ、一家中ノ風俗モ益々盛ンニシテ、一國中ノ民モ日月ノ光リヲ蔽ハル、コトナク、年穀モ能ク熟シ、極治ノ瑞於レ是在リ、夫難レ得ハ時ナリ、幸ヒナルカナ相公賢佐ニ事ヘテ專ラ委任ヲ蒙リ、膏澤民ニ降ル、寔ニ元首明ナリ、股肱良ナリト云ベキ者歟

書ノ太甲ニ曰、愼二乃儉德一惟懷二永圖一

書ノ益稷ニ曰、元首明哉、股肱良哉、庶事康哉

大意

相公新政ノ始ニ子産ノ子太叔ニ語ル詞ヲ誦シテ云ク、凡國ヲ治ムルニ時勢ノ機ヲ考ヘ、寛猛ノ辨ヲ明ラメザレバ、縱ヒ大智ノ人タリトモ其功ヲ遂ゲルコトハ難カルベシト云リ、左ニ記ス所ノ條件一ツトシテ猛ニ非ルハナシ、是舊政ノ弊ヲ改メ玉ハンガ爲メニ、新政ノ始メニ猛行ヲナシテ、所謂三尺ノ岸ヲ築キ玉ヘバ雲州大ニ治マレリ、蓋子産ノ詞ニ本ヅキテ、其始メニ猛ヲ以テ事ヲ起シ玉フ歟

鄭子産有レ疾謂二子太叔一曰、我死子必爲レ政、唯有レ德者、能以レ寛服レ民、其次莫レ如レ猛、夫火烈望而畏レ之、故鮮レ死焉、水懦弱狎而翫レ之、則多レ死焉、故寛難、孔子聞レ之曰、善哉、政寛則民慢、慢則糾二於猛一、猛則殘、殘則施レ之以レ寛、寛以濟レ猛、猛以濟レ寛、寛猛相濟、政是以和　見二左傳一

家語曰、三尺岸、空車不レ能レ踰、險故也、百仞之山、童子升而遊焉、陵遲故也

定二東都邸規矩一

江戶御屋敷ノ入用牒ヲ穿鑿シテ、無用ノ物ヲ省キテ元立ヲ減ジ、是迄ノ假金ヲ年賦ニシテ返辨ノ期ヲ約シ、諸役所ノ買掛リヲ償ヒテ以後ノ定法ヲ立テ、諸役人ヲ勵シテ官事ヲ兼シメ、當時ノ務メニ與ラザル者ハ御國勝手ニシテ、定府ノ人高ヲ減ジ、御交替ノ時節ヲ忘ラセ玉フヿ無レバ、權門方ヘ不時ノ贈物ヲ呈ズル事モナクシテ諸ノ費用ヲ除キ、月次ノ銀高ヲ定メテ、前月ニ江戶ヘ達セシメ、凡御買上ゲノ物ヲ當銀ニ調ヘテ其價ヲ賤クシ、月次ノ外ノ臨時ノ入用ハ、其時々ニ運送シテ負金ノ費無ラシム、相公ノ曰、御支配ノ本ハ御國ナレドモ、其占リヲ定ムルヿハ東邸ヲ以源トシテ、其源濁ル時ハ流派如何トモスベカラズ、依レ之東邸ノ占リ合ハ脇坂公ヘ屬シ玉ヘリト、蓋相公ノ政ヲ執レル、省レ事養レ財ノ道ヲ主トシ玉フ歟

易象傳曰、澤上有レ水、節、君子以制ニ數度一議ニ德行一

史記禮書曰、孰知夫輕ニ費用一之所ニ以養一レ財也

會ニ大坂藏元一

相公執政ノ命ヲ蒙リ玉ヒテ、東邸ノ費用ヲ省キ諸物ノ規矩ヲ定メ、損益ノ巨細ヲ審ラカニシテ負金ノ根ヲ斷チ、諸役人ヲ戒メテ利息ノ出ル假借ヲ堅ク禁ジ、小シノ費ヘモ無キヤウニ約ヲナシテ、次ニ大坂ヘ登リテ彼地ノ入用ヲ點檢シ玉フニ、年々ノ負金ニ利子ヲ加ヘ、每年會計ヲ見ルト云ヘル、其利息ヲ償フニ足ラザルハ、去年ヨリ今年ハ負金ノ高增加シテ、鼠ノ子ヲ生ズルガ如シ、是ヲ以相公諸銀主ニ會シテ既往ノ不質ヲ謝シ、後來ノ信ヲ約シ、負金ノ元ヲ年賦ニシテコレヲ償ヒ、利子ノ費ヘヲ免カル、

脩每年登セ米七萬俵ニ定メ、一俵貳拾錢目ヅヽ、假直段ヲ立テ、此ノ銀高千四百貫目、年中ノ月割ヲ以テ每月江戸ヘ運送セシメ、前月ニ江戸ヘ達シテ遲滯ナカラシメ、其出銀ノ月ヨリ利息ヲ加ヘ登セ、米ノ賣代ヲ以テ元利ノ差引ヲ立テ、若シ足ラザレバ正銀ヲ以テ償ヒ、一年切リニ皆濟ヲ遂グ、新政ニ利息ノ出ルモノハ是ノミナリ、是又登セ米ヲ止メ、正銀運送ニシ玉ハヾ、利息ノ費ヘハ有ラザルベケレドモ、御藏元ノ困ミヲ失フ時ハ、江戸表ノ臨時ノ變アル時ノ備ヘナクシテ、安カラザルノ憂ヒアランコトヲ慮リ、利子ノ費ヘヲ厭ハズシテ御藏元ノ親ミヲ結ビ玉フ、蓋小利ヲ見ル時ハ大事不ㇾ成ノ理ヲ以テ、遠年ノ計ヲナシ玉フ歟

論語曰、子夏問ㇾ政、孔子曰、毋ㇾ欲ㇾ速、毋ㇾ見二小利一、欲ㇾ速則不ㇾ達、見二小利一則大事不ㇾ成

減ㇾ人

所謂故國ハ喬木有ルノ謂ヒヲ謂フニ非ズ、世臣有ルノ謂也ト孟子ノ云ル如ク、高眞公御入國ノ時ハ、大坂陣ヨリ間モナク大臣上ミニ列シ、精兵下ニ备フシテ武備モ盛ンナリシニ、天下一統シテ太平年久シク續キテ、世界ノ風俗奢侈ニナリ、各々財ヲ败リテ國用足ラズ、是ヲ以テ市井ノ人ニ乞貸シテ當手當手ノ不足ノ補ヒ、入ルヲ量リテ出スコトヲナスノ制モ行ハレズ、其虛ニ乘ジテ種々ノ智謀ノ者出テ、民家ノ財ヲ聚斂シテ己ガ功トシ、些レヲ以テ上ノ費用ヲ償フコトヲ善シトシテ、事ヲ執ル人モ專ラケヤウノ人ヲ用ヒ、出金ノ多寡ニヨリ其功ヲ賞シ、農ヨリ進ミテ俸ヲ賜ル者枚擧スヘカラズ、是ヲ以テ御

徒以下ノ御扶持ハ、高次第ニ增シテ、御支配ノ基本モ是ヨリ崩ルヽニ至ル、相公政ヲ執テ、御徒以下ニシテ無用ノ人ヲ省キテ浪人トナシ、一代ギリニ養料ヲ遣リテ其跡ヲ斷絶シ、郷町ノ者ニ與フル所ノ給扶持ヲ取上ゲテ平民ニ反シ、始テ士農ノ籍中定ル、庸人コレヲ見テ浪人ノコトハ不仁也ト云フ、君子ノ國ヲ治メ民ヲ安ンジ、仁政ヲ施シテ各其所ヲ得セシメテ、飢寒ノ憂ヒ勿ラシムルヲ以テ仁ト稱スルコトヲ知ザルガ故ナリ、疾ヒ將ニ膏肓ニ入ントスル時ハ、瞑眩スルホドノ藥ヲ用ヒザレバ治シ難シ、國モ亦然リ、御支配ノ急迫ニヨリテ其痛ミ將ニ民ノ骨髓ニ入ントス、今弊政ヲ改メズシテ其儘ニサシオキ玉ハヾ、一國中亂レ一家中食ヲ失ヒテ、飢ニ及バントスルコトヲ日ヲ算ヘテ待ツベシ、是レ食ノ重キヲ取テ仁ノ輕キヲ捨テ玉フト見ヘタリ、蓋孟子禮ト食トノ輕重ヲ以テ屋廬子ニ對フル意ナラン歟

孟子曰、任人有問屋廬子、曰、禮與食孰重、曰、禮重、色與禮孰重、曰禮重、曰、以禮食則飢而死、不以禮食則得食、必以禮乎、屋廬子不能對、明日之鄒、以告孟子、孟子曰、於答是也何有、不揣其本而齊其末、方寸之木、可使高於岑樓

廢銀札

御國寶鈔ヲ製シテ銀札ト名ケ、一文目ヲ六十錢ノ定價ニシテ銅錢ノ代リニ用之、銅錢ノ適用ヲ禁ズ、是ヲ以テ一國中銀札ニアラザレバ、米穀貨物ヲ買フコト不能、銅錢ハ斤目甚ダ重クシテ運送自在ナラズ、銀札ハ斤目太ダ輕クシテ交易便利ナルユヘ、人々歩行ノ易キヲ好ミテ、漸々ニ銅錢ヲ出シテ銀札ニ易

へ、融通自由ナルヲ以テ、拔ケザル費ハヲ生ジテ、彼モ我モ皆ナ敗ルニ至ル、其虛ニ乘ジテ商家ノ利權益々切ニシテ、上ノ御支配モ彌增ニ難澁ニシテ、止ムコトヲ得ズ空札ヲ出シテ國寶ヲ增シ、國中ノ財ヲ浮キ立シメテ、其中ニ居テ人ノ有ヲ取テ我ガ無ヲ補ヒ、無涯ノ費用ニ供ヘントシテ商賈ト利ヲ爭フトイヘドモ、商賈ノ利ニ敏キコト譬ニ神ノ如シ、是ヲ以テ札坐ノ元備ヘノ有無ヲ計リテ、銀札ニ私ノ價ヲ立テ、壹匁目ヲ或時ハ五十錢トシ、或時ハ四十、或時ハ三十、或時ハ二十ト見テ貨物ヲ買賣ス、商賈ノ利ニ走ルコト弓矢ヨリモ速カナリ、依レ之ニ國中ノ人忠信ノ志ヲ失フテ、贏秦ノ風俗ニ移リ、四民共ニ困窮ス、相公新政ノ始メニ札座ノ役所ヲ廢テ、銀札ノ取遣リヲ禁ジ、銅錢ヲ以テ通用セシメ、不實ノ媒チヲ退ケ玉フ、蓋シ一國中ノ忠信ノ路ヲ啓キ玉フ歟

呂氏春秋曰、君者仁義以利レ之、愛利以安レ之、忠信以導レ之、務除二其災一、致二其福一、故人之於レ上也、若二璽之於一レ塗也、抑レ之以レ方則方、以レ圓則圓、若二五種之地必應一レ其類一、而蕃息百倍ナルカ此五帝三王之所二以無一レ敵也

廢二新役所一

御國之御支配數十年來之趣ヲ見ルニ、其年ノ御取稼ヲ以テ前年之假金ヲ償ヒ、又當年之不足ヲ他ヨリ假リテ月々歩ミ行クト云ヘドモ、入ルヲ量ラズシテ費用之來ルヲ待テ當手ヲ合セ、種々ノ計略ヲ以テ艱難ヲ渡ルニ幾ア、其道ヲ助ル者ヲシテ聚斂ノ媒チトシ、新役所ヲ建テ之ヲ掌ラシム、是札座・義田方・

新田方・年餘方ノ由テ起ル所以ナリ、相公新政ノ始メニ此數箇ノ役所ヲ廢チテ聚斂ノ道ヲ斷チ玉フ、蓋其本ヲ强クセンガ爲ニ末ヲ刈リ玉フ歟

論語曰、君子務本、本立道生

大學曰、其本亂、而末治者否矣

攝官事

治國ノ要ハ財ヲ足スヲ以本トス、財ヲ足ラスハ用ヲ節スルヲ以テ守リトス、用ヲ節スルハ省クヲ以務メトス、事ヲ省クノ源ハ官事ヲ攝ルニ在リ、官事ヲ攝ルハ執政ノ取捨ニ有リ、相公政ヲ執テ御番頭ヲ減ジテ御番士ノ支配ヲ兼掌ラシメ、御者頭ヲ減ジテ足輕ノ支配ヲ兼シメ、諸奉行ヲ減ジテ郡奉行ニ御勝手方奉行ヲ兼、御勘定奉行ニ御作事奉行ヲ兼、御破損方奉行ニ御小人方、屋舖方御堀方ヲ兼ネ、御修復方奉行ニ寺社修理方ヲ兼ネ、一役所二人ノ奉行ハ一人ニ減ジ、衆議判之事ニ害アルコトヲ察シテ一人ニ是ヲ掌ラシメ、各存分ノ務ヲ爲ンコトヲ欲ス、而後諸奉行ヲ招キテ、面々職トシテ判ル所ヲ問ヒ、新政ノ心得ヲ吐露シテ人別ニ是ヲ教誡シ、小役人ノ勤メ向キヲモ邪路ヲ塞ギテ正道ニ趣カシム、蓋聖人ノ意ニ本ヅキテ、官事ヲ攝テ儉德ヲ愼ムコヲ施シ玉フ歟

論語曰、或曰、管仲儉乎、孔子曰、管氏有三歸、官事不攝、焉得儉

群書考索曰、古者官不必備、惟其人而已、有其人則備、無其人則兼、是以周官之作、實倣唐

廩之制ニ、商賈事不レ損ヒ、吾夫子所ヲ以深責ニ管仲[illegible]之ニ先王之法ナルコトヲ也

戒ム豪民ノ驕ヲ

御國至極ノ急迫ニ及ベル時、假金ノ方便モ絶ヘ、諸役人ノ術計モ盡キタルニ依テ、御國中ノ下部役ノ者ヲ招キ御幕方ノ目録ヲ渡サレ、厚ク御賴アリテ月々ノ御運送物、且ツ御家中ノ渡シ方金ノ入用盡ク下部ヨリ手ヲ合セ、御歳様ノ裁配モ下部ノ手ヲ歷ザレバ出入スルコト不レ能、是ヲ以追々ニ威ヲ振ヒ、役人ヲ侮リ上ミヲ畏レズ、己レヲ高ブリイツトナク分限ヲ失フ、其手ニ屬スル豪民モ出銀ヲ肝煎スル役者ナルニ依テ、自然ト下部ノ風俗ヲ見習ヒ、百姓ノ本實ヲ失ヒ、冠履倒置ノ國風トナレリ、相公新政ノ始メニ猛威ヲ以テ下ヲ御シ、下部ノ役ヲ取上ゲテ平民ト爲シ、人別ノ分限ヲ計リテ迷惑スル程ノ出米ヲ課シテ取立ヲ嚴クシ、若異議ニ及者アレバ田畠家財ヲ闕所シテ、沒收スベキ由ヲ以日限ヲ極メテ運滯無カラシム、是其人ヲ惡ムニ非ズ、事ヲ改ムルニハ猛ニ非レバ服セザルニ依テナリ、夫ヨリシテ後豪民モ上ハ恐ロシキモノト云フコトヲ知テ、己ガ分限ヲ守リテ其業ヲ務ムル事ヲ事トス、蓋シ民ハ國ノ本ナリ、農ハ民ノ本ナリ、故ニ本業ヲ舍テ末作ニ走ル者ヲ戒メ玉ハンガ爲メニ、豪民ノ驕ヲ挫キテ一國中ノ觀ニ備ヘ玉フ歟

易恒家傳曰、剛ニシテ上而柔ニシテ下、註ニ云、上剛ナレバ可二以斷一レ制ス、下柔ナレバ可二以施一レ令ス

沒ニ收ス義田及ヒ免許地ヲ

御國多年ノ困窮ニ依テ御勝手御取續キモ益々危ク、國用ノ不足ヲ補ハントシテ人ニ假ンコトヲ求ト言ヘ共、動モスレバ返辨ヲ滯リテ信義ヲ失フヲ以人是ヲウケガハズ、是ヲ以投返シノ術モ盡キタル時、公田一萬石ヲ裂テ豪民ニ賣リ與ヘテ、永ク稅セザル事ヲ約シテ、其價ヲ取テ是ヲ別役所ニ藏メ、利息ヲ賤シテ貧民ニ貸事ヲ本トシ、且軍旅ノ變ニ備ヘ、飢饉ノ防ギニ供フルヲ以テ用トシテ、范文正公ノ名ヲ假リテ義田ト號ス、此役所ヲ呼デ義田方ト稱ス、又其後新田方ト云フ役所ヲ起シテ新田ヲ開テ、其土地ヲ裂テ豪民ニ賣與ヘ、是亦永ク稅セザルコトヲ約シテ、其價ヲ取テ當手〲ノ費用ニ供ヘ、コノ賣田ヲ免許地ト號シテ、義田ノ法ニ倣フテ大同小異アリ、其始メハ貧民ヲ利スルヲ以テ稱スレドモ、御支配之急迫ニヨリテ追々ニ費用ノ償ヒニナリテ、前ノ貸シタル者ヲ債責シテ、却テ貧民ノ煩ヒトナル、土地ヲ買ヒ得タル者モ、素ヨリ悖テ入ルノ貨ヲ以テ求メタルモノナレバ、又悖テ出ル事ヲ免カレズ、相公新政ノ始メニ義田及免許地ヲ沒收シテ是ヲ公田ニ復シ、御國ノ有高ノ闕ゲタルヲ補ヒ玉ル、蓋田ハ先侯ヨリ傳ヘ玉フ所ナレバ、貴價ト云ヘドモ豪民ニ賣リ與ヘテ、永ク稅セザルハ義ニ非ズ、貧民ニ貸シテ利ヲ征ルコトモ義ニ非ズ、費用ノ償ヒニ取闕ギテ、民ニ信ヲ用フコトモ義ニ非ズ、詐術ヲ遺シテ人望ヲ失フコトモ義ニ非ルヲ以沒收シ玉フ歟

孟子稱、或人曰、世守也、非身之所能爲也

又曰、諸侯之寶三、曰土地、曰人民、曰政事

大學曰、國不以利爲利、以義爲利也

制百姓之御免地及格式

御國ノ政ニ百姓ノ中ニ先祖ノ功ヲ以代々相續テ御免地ヲ賜リ、或ハ引ケ屋舗ヲ賜リ、或ハ先國主ヨリ重キ判物ヲ以土地ヲ充テ行ハルヽコアリ、又御當家ニ御用達ノ功ヲ以、百姓ニ格式ヲ與ヘテ代々小算用御目見格トシ、或ハ平小算用格トシ、或ハ帶刀ヲ免ルシ、或ハ昔ノ御目通ヲ免シテ其家々ノ格トシ、出銀調達ノ多少ニヨリテ、其優劣ヲ立テ格式ヲ定ム、相公新政ノ始メニ御免地引屋舗ノ類、功ノ大小時ノ先後ヲ論ゼズ、殘リナク是ヲ取上ゲ、御目見ヘヲ免サレタル者モ老侯御入國ノ初ニ出タル者數人ヲ免シテ、其後用達ノ功ニ依テ御目見ヲ免サレタル者ハ、殘リナクコレヲ取リ上ゲ、代々小算用ニ召抱ヘラレタル者ハ其撰作ヲ取上ゲ、一代切リノ格式ニシテ跡ヲ百姓ニ復シ玉フ、蓋民ヲ御スル事法ヲ審カニシ、貴賤ヲ分チ祿賞ヲ重ンジ、人主ヲ尊敬スルヿヲ本トシテ、治國ノ大經ヲ立ツベキヿナルニ、祿賞ヲ猥リニ民ニ與フルヿハ道ニ非ズ、餘澤ノ盡キタル者ニ相續デ恩惠ノ下ルモ道ニ非ルヲ以テ、コレヲ剝取リ玉フ歟

管子曰、法者將用民力者也、將用民力者、則祿賞不可不重也、祿賞加於無功、則民輕其祿賞、則上無以勸民、上無以勸民、則令不行矣

制文武役人

御國ノ御支配必至ノ急迫ニ至リテ、當年ノ御成稼ハ前年ノ借用ニ引取レ、又其假反シヲ以テ御暮シ方ヲ

立ルコト當トナリテ、出ルニ迫レテ入ルヲ量ルノ制ヲナスコト不能、依之諸有司ノ手ヲ以テ入出ヲ掌ルトキハ、却テ種々ノ行キ閊ヘアルコトヲ慮リテ、郡役人ニ御支配ヲ任ゼラレ、御成箇ヲ一圓ニ鄕中ヘ引受、惣百姓ヲ銀主ニ立テ、日々ノ御當用ニ隨ヒテ繰出シテ受負ヒ、郡役人技量ヲ以テ人別ノ身上ヲ見テ面割ヲ定メ、中百姓以下ハ持石ノ高ヲ以テ押シテ割合ヲ極メ、急ニ催促シテ責ルト云ヘ共、力足ラザル者ハ自己ノ働ニ叶ハズシテ、郡役人ニ賴ミテ外ヨリ假リテ償之、年々ケ様ニ課役アリテ、持高ノ田地モ皆借用ノ質地トナリテ、地利ヲ以テ家ヲ立ルコトモ一向ニ其圖ヲ失ヒ、懵然トシテ其日ヲ送ルノミ、萬民ノ塗炭於斯窮ル、相公新政ノ始メニ十郡ノ下郡ヲ殘リナク變改シテ、民ノ耳目ヲ新ニシ民間ノ風俗ヲ轉化シ玉フ、蓋政ノ正シカラザルヲ以テ、全體ヲ改メテ是ヨリ事ヲ起シ玉フ歟

董仲舒對策、琴瑟不調、甚者必解、而更張之、乃可鼓也、爲政而不行、甚者必變、而更化之、乃可理也

禁民間負金之償

御國多年ノ困窮ニ就テ鄕中ヘ御支配ヲ任ゼラルヽトキ、民各々過分ノ課役ヲ蒙リテ己レガ蓄ヘナキ者ハ、子錢家ヨリ假リテコレヲ償フ、民間コト〳〵ク貧苦ニ迫ト云ヘドモ、豪家ノ富ハ日々ニ殖、鉅萬ヲ重ヌルニ至ル、是ヲイカニト云フニ、御國通用ノ銀札札座ノ備ヘヲ猥スニ隨テ、次第ニ人望ヲ失フテ、公室ノ定價ハ一匁六十錢ナルニ、民間ノ取リ遣リハ、正銀壹匁ヲ百八十錢内外ノ直段ニシテ銀

札ヲ以テ交易ス、予錢宗ノ利ヲ好ム者ハ、銀壹貫目ヲ賣ルトキハ銀札三貫目計リニナル、コレヲ人ニ貸ストキハ銀札一匁ヲ六十錢トシテ券書ヲ據、百八拾貫文ノ元ニナル、其レニ利息ヲ加ヘテ相倍徙シ相什佰千萬ス、是ヲ以テ兼併ノ家ハ日々月々ニ盛ンニシテ富彌足ル、己レノ蓄ヘナキモノハ譲從ノ來ル毎ニ、人ニ求メテ是ヲ償ヒ、有ヘ〱貴息ノ物ヲ假リテ償ヲ守ルノ度ヲ失ヒ、家產ヲ敗ルニ至ル、銀札廢リテ銅錢與ルトキ民ノ負金ヲ償ハズ、國中十ノ八九ハ田畑山林ヲ失フテ、一時ニ無賴ノ民トナルベキニ、相公新政ノ始メニ、民間負金ノ償ヲ永ク圖年ニシテ、コレヲ返辨スルコトヲ堅ク禁ズベシト屹ト法令ヲ出シ玉ヘバ、何程固キ證文ヲ取置キタル者モ、是ヲ以債責ヘルコトヲ得ズ、愚民ノ中ニ誤テ圖年ノ債ヲ以テ訟ルモノアレバ、法令ヲ犯スノ狀ヲ以テコレヲ罰シ玉ヘバ、貸シタルモノモ責マジキ事ヲ知テ、假リタル者モ質ニ入タル田地ヲ人ニ渡スコトヲ免カレテ、始メテ土地ヲ拜領シタル心地ニテ、一國中ノ民新タナル國ニ入ガ如シ、蓋子産鄭國ヲ治メテ田疇ヲ伍ニシ、民ニ各其所ヲ得セシムルノ意ナル歟

春秋左氏傳曰、子産使都部有章、上下有服、田有封洫、廬井有伍、從政一年、輿人誦之曰、取我衣冠而褚之、取我田疇而伍之、孰殺子産、吾其與之、及三年、又誦之曰、我有子弟、子産誨之、我有田疇、子産殖之、子産而死、誰其嗣之

省商賈

御國多年ノ困窮ニシテ利權ヲ上ニ取ルコト不レ能、御成稼ノ出納モ民ヨリ支配スルホドノ時節ニナリテ、一言ヲ吐キ一事ヲ出スモ、皆利不利ヲ論辨スルノミニテ、仁義忠臣ノコトハ此時ノ急務ニ非ズト云ニ似タリ、夫レ民ハ國ノ本ナリ、農ハ民ノ本ナリ、商ハ民ノ末ナリ、農ハ力ヲ竭シテ耕作シテ、年穀熟スル時ハ食ヲ得、年穀熟セザル時ハ食ヲ得ズ、米穀貴(タカ)キトキハ利ヲ得、米穀賤キトキハ利ヲ失フ、商賈ハ貨物ヲ交易シテ、賤キ時ハ買ヒ、貴キ時ハ賣リ、好デ智ヲ用ヒテ米穀貨物ヲ買ヒ求メテ、人ノ乏キヲ待テ是ヲ賣リ、急ニ乘ジテ價ヲ増シテ己ニ利スルコトヲ上策トス、商賈ノ利ニ於ル豐年ニモ亦得、凶年ニモ亦得、治ルニモ亦得、亂ルヽニモ亦得、大智ノ人ト云ヘドモコレト利ヲ爭フトキハ、畢竟商賈ニ合セラルヽ、是故ニ政ヲ以テ是ヲ制セザレバ、農ヲ去テ商ニ走ル、自然ノ勢ヒナリ、相公新政ノ始メ、農ヲ勸ンガ爲メニ課役ヲ省キテ、下ノ好マザル趣向ノ科ヲ悉ク止メ、商賈ヲ省ンガ爲メニ、利權ヲ上ニ取テ奸計ノ路ヲ塞ギ、諸物ノ價ヲ平カニシテ民ノ煩ヒヲ除キ、鄕中ノ市ニ京店物ヲ賣ルコトヲ禁ジテ、國都ニ遠キ都會ノ地三所（杵築 今市 安來）ヲ限リテコレヲ許ス、御城下ノ町ヘ甚遠ケレバ、民力ノ費アルヲ以テナリ、且又民間ノ酒店ヲ減ジ、往還筋ノ茶店ヲ驟ツ、蓋商賈ノ數ヲ省キテ之ヲ農ニ歸スノ道ヲ得玉フ歟

荀子曰、省ニ商賈之數一

賈誼曰、今毆レ民而歸ニ之農一、皆著ニ於本一、使下天下各食ニ其力一、末技游食之民、轉而緣中南畮上、則畜積足、

而人樂二其所一矣

改二地方之法一

御國多年ノ困窮ニ依テ出入ノ調ヲ爲スコト不ㇾ能、費用ノ足ラザルヲバ民ニ課シテ此レヲ補ヒ、或ハ市井ノ人ニ乞貸シテコレヲ給シ、或ハ新田ヲ開キテ實ㇾ之、其償ヲ取テ足ラザルヲ助ルコト、援反シノ常トナリテ其他ヲ顧ルニ暇アラズ、相公新政ノ始ニ、地方役人ヲ召テ一々其事務トスル所ヲ問フ、地方役人ノ曰、御國ノ政元來課役ヲ以テ年々ノ御不足ヲ補ヒ玉ヘバ、地方ノ有ダケヲ取ルトキハ民不ㇾ立、民立ザレバ却テ上ノ不利トナル、備又苗代草手ヨリ悉ク見分スルトキハ、辻見ノ時節ニ至リテ種々ノ愁訴ヲ告來ルノ煩アルヲ以テ、本役ノ者ハ常ニ出郷スルコトヲ闕グト云フ、此レ理ニ似テ大ニ非ナリ、然レドモ時世ノ變ナレバ如何ントモスベカラズ、相公地方役人ニ諭シテ曰、今マデ心得タル所ハ大ニ非ナリ、自今以後志ヲ改メテ精勤ヲ勵ムベシ、先ヅ民ノ立ツト不ㇾ立トヲ量テ撫育スルコトハ上ノ政ニアリ、此レヲ達スルハ郡奉行ノ職分ナリ、地方役人ノ與カル所ニ非ズ、地方役人ハ眼力ヲ以テ立毛ヲ一盃ニ見テ取ルコト事務ナリ、一盃ニ見テ取ルコトハ其稻ノ素性此ノ土地ニ相應スルカ相應セザルカ、苗立草手ノ模樣ヲ見、培養ノ仕形ハ何ヲ用ヒテ宜キ乎、此村ノ百姓ハ深切ニ精ヲ入ル乎、用水ノ便利イカナルカ、且ハ天氣ノ趣ニヨリテ水損アリ、旱損アリ、風損アリ、蝗アリ、此數箇ノ考ヲ以テ辻見ノ眼力ヲ定ルニ非レバ、其正眞ヲ察スルコトハ難カルベシ、常ノ出郷ヲ怠リテ百姓ノ愁訴ヲ聞マジト云

フコトハ、役分ノ本意ニ非ラズ、猶又新田ヲ開クトキハ、河内ヲ埋メ水道ヲ塞ギ、土手ヲ傷ヒ本田ヲ妨ゲ、大ナル害トナル、是地方役人ノ思ヒヲ廻ラスベキコトナリ、今ヨリ改メテ常々出郷シテ地勢ヲ能ク察シ、惰民ヲ戒メ、手足ノ胼胝ヲ厭ハズ自ラ經界ヲ奔走シ、五土ノ利害ヲ考ヘ、地力ヲ盡スコトヲ勤ムベシト、丁寧反覆シテ敎戒シ玉ヒテヨリ、地方役人一統力ヲ合セ、平日巡村シテ農ノ時ニ違ハザルコトヲ折檻ス、且又井溝堰（イセキ）用水堤ニ多分ノ人夫ヲ以テコレヲ修理シテ、用水懸リ惡水拔キ自在ナラシメ、大河普請ニ廣大ノ人力ヲ用ヒテ滿水ノ害ヲ除キ玉ヒテヨリ、年々御成稼增シテ出入ノ制ヲ立テ、御永續ノ道是ヨリ始ル、蓋古人地力ヲ盡スノ道ヲ得玉フ歟

周禮、大司徒之職、以二土會之法一辨二五地之物生一、（山林、川澤、丘陵、墳衍、原隰）

漢書食貨志、李悝爲二魏文侯一、作下盡二地力一之敎上

平糴

糴貴キ時ハ士農ニ利アリ、工商ニ利アラズ、糴賤キ時ハ工商ニ利アリテ、士農ニ利アラズ、貴キモ工商ニ害アルニ至ラズ、賤キモ士農ニ害アルニ至ラザルヲ平糴トス、御國ハ邊土ニシテ他國ノ通路自由ナラズ、コレニ依テ利權下ニアル時ハ、商賈ニ利ヲ占ラレテ甚ダ士農ニ害アリ、多年ノ困窮ニヨリテ利權ヲ上ニ取ルコト不レ能、數十年ノ模樣ヲ考ルニ、米ノ價四斗入壹俵ニテ大坂ノ直段文銀十七八匁ナル時ハ、御國ハ銅錢壹貫文位ヒノ直段ニ過ズ、大坂ノ直段十七八匁ト積リテ運賃諸雜用ヲ引ク時ハ、御國ノ

直段壹貫文モ相應ノ價ナレバ、如何トモスベカラズト思ヒテ、事ヲ執ル人モ此ノ所ニ疑ヲ容レズ、是ヲ以商賣ノ思ヒノマヽニ利ヲ占ラレテ、士ト農トハ往々貧シ、於是上ノ御支配モ豐年ニハ御度依ノ高增スト云ヘドモ、糶ノ價賤キニ依テ費用ノ高ヲ償フコト不能、又凶年ニハ糶ノ價貴シト云ヘドモ、御成稼ノ高減ジテ費用ノ備ヘ猶足ズ、諸士ノ暮ン方モ糶ノ價賤キ時ハ出入ノ制ヲ爲スコト不能、上下ノ困窮此時ヨリ甚シキハナシ、相公新政ノ始メニ、御支配ノ本ヲ厚シテ利權ヲ上ニ取リテ糶ノ價ノ極々、年ノ模樣ヲ考ヘ四斗入壹俵ニ付、文銀貳拾壹匁、或ハ貳拾貳匁、或ハ貳拾參匁トシテ、町家ノ廉潔ナル者ヲ選ビテ取捌カセ、口錢ヲ遣シテ外ニ利潤ヲ與ヘズ、御家中ノ糶モ買入ニシキ時ハ、口錢程ヲ引下ゲテコレヲ買ハシム、譬ヘバ上ノ直段貳拾壹匁ナルトキハ買米ハ貳拾貳匁ニ定ム、餘ハ倣之、斯ノ如ク利權ヲ取テ自在ニ低昂スルコトハ容易ノ力ニ非ズ、凡千貫程ノ銀子ヲ除ケ置キテ利權ヲ取ルノ備ヘニシテ、一國中ノ其年ノ出來米ノ都合ヲ記憶シテ年中ノ飯料ヲ積リ、其餘レルヲ目算シテ他國ヘ出シテ賣之、國內ノ米高ヲ耗シテ跡ノ釣リ合ヲ見テ利權ヲ取ルヲ本トス、其年ノ末ト翌春トノ二季渡リノ節、定府勤番ノ御渡シ米、並ニ御家中ノ賣米凡三四萬俵程モ有ルベシ、是ハ運送ノ時節ニ限リ有コトナレバ、直段ノ賤クシテ買ンコトヲ計リテ商賣ノ巧ミヲナス、是ノ時ニ兼テ備ヘ置タル銀子ヲ出シテ、御買上ゲノ直段ヲ極メテ殘リナク買ヒ取ルコトヲ利權ヲ取ルノ始メトス、於是元ノ備ヘ足ラザレバ、商賣ニ見透カサレ、下ノ爲メニ計ラレテ、輕重ノ術行ハレズ、一タビ利權ノ奪ハル、時ハ又取リ復スコ

ト雖カルベシ、借糶ノ直段ヲ立ルニ按量アリ、物ノ價ヒハ天下一統ナレバ、是ヲ定ムルコトハ至テ大儀ナリ、相公ノ新政以後ノ直段ヲ視ルニ、七八年以前ヨリ三四年マデハ大坂ノ直段ニ暗ニ符合セリ、是大坂ノ直段天下一統ノ相當ノ價ヒナルニ依テナリ、二三年以來ハ大坂直段ヨリハ、四斗入壹俵ニツキ貳匁位モ御國直段貴シ、是レ大坂直段天下一統ノ價ヨリ賤キニ依テナリ、此ノ譯ケハ江戸大火以後、諸國ヨリ大坂ニテ金ヲ假リテ、其代リニ國中ノ米ヲ餘分ニ登セテ、全體ノ登リ高平年ヨリモ多キニ依テ、大坂町人ドモノ言合セヲ以テ直段ノ位ヲ一等引キ下ゲタル者ナリ、此ノ價ヒハ御國ノ直段ニ引キ合セ難キ故ヲ以テ、俵ニ付キ貳匁位モ引上ゲテ直段ヲ定メ玉ヘルナリ、又年ニヨリ御國中米高寡クシテ、御國民ノ養ヒ足ラザル時ハ、大坂ヨリ調ベ下シテ足スノ積リヲ以テ、運賃ヲ加ヘテ直段ヲ貴ク立ルコトモ有ルベシ、是レ又其年ノ考ヘニヨルコトナレバ、容理ヲ以テ紙上ニ著シ難シ、商賈ノ論ニ云ク、凡國ヲ治メ玉フコトハ士農工商皆上ノ民ナリ、上ハ民ノ父母ナリ、而ルニ今御國ノ米ニ運賃ヲ添ヘテ他國ヘ出シ、賤キ直段ニ賣拂ヒ、御國中ノ米ヲ耗シテ其跡ノ直段ヲ貴ク立テ、上ノ米ヲシメ賣リニシテ工商ヲ困シメ玉フコトハ、工商ニ於テ何ノ咎カアル、御仁政士農ノミニ及ンデ、工商ニ及バザルコトハ何ゾ哉ト云、是不通ノ論ニ非ズ、一通リ尤ニ聞ユルナリ、然リト言ヘドモ工商ヲ悦バシムル時ハ士農ニ利アラズシテ、上ノ御支配モ是ヨリ崩ル、上ノ御支配不レ立トキハ、倉廩虛シクシテ忽チ匱乏ニ至ル、一タビ匱乏ニ至ル時ハ、仁義有リト云ヘドモ之ヲ行フコト不レ能、相公諭シテレ之ヲ曰チ、商ニ志ヲ得セシム

レバ必國ノ害ヲナス、夫レ米ハ四民ノ食ナリ、國家ノ本トスル所以ナリ、孔子モ「足レ食足レ兵民信レ之」ト云リ、然ニ米ヲ商賈ノ手ニ渡シテ、直段ヲ勝手次第ニ任ズル時ハ、己レヲ利スルコトノミヲ計リ、士農ニ害アルコトヲ巧ミテ國ヲ貧クスル者也、其窮ル所ハ、必商ハ己レニ利スルノ餘リヲ以テ、田地ヲ求メテ子孫ニ讓リ、家督ニスルコトヲ計リ、農ハ終歳勤苦シテ其利少キ故、商ノ利益多キヲ羨ミテ、末作ヲ事トシテ本業ヲ疎略ニス、然ルトキハ田荒レテ粟ノ生ズルコト少ク、國貧クナルコト必セリ、是故ニ利權ヲ上ニ執テ米直段ノ貴賤ヲ自由ニシ、上御支配ノ道ヲ立テ、下諸臣ノ暮シ方ヲ定メ國政ヲ正シクシテ、民ヲシテ各々其所ニ居ラシムルコトヲ致ル者也、愛ノ料簡ヲ取違ヘ、商賈ノ論ニ惑ハサレ、毫釐ノ差ヒヲ生ズル時ハ、千里ノ謬リトナルベキナリ、商ニ志ヲ得セシムル事勿レトハ愛ヲ以テ也、前車ノ覆ルヲ見テ後車ノ戒メト為ベキコト也、執政ノ大事於レ斯在リト、蓋古人平糴ノ道ヲ得玉フ歟

魏李悝平糴説曰、糴甚貴傷レ民、甚賤傷レ農、民傷則離散、農傷則國貧、故甚貴與レ甚賤、其傷一也、善爲レ國者、使二民毋一レ傷、而農益勸

按、當今所レ憂、當レ因二甚賤傷一士農一

除二水害一

相公恒ニ言テ曰、御國ハ帝都ヨリ西北ノ陽ニ當リテ、神皇ノ代根ノ國底ノ國ト稱シテ素盞嗚尊ノ祠シ玉ヒテ、天下ノ旱濕ノ地ナリト云ヘドモ、水害ヲ除ク時ハ不備肥壤ニシテ稻ヲ樹ルニ宜ク、其上ヘ諸ノ

貨物魚鳥茶菓ノ類マデ、用ノ度ニ乏シカラズシテ日出度キ御國ナリト云リ、水害アル所以ヲ尋スルニ、東ヨリ西ニ折ケテ伯備石ニ隣リテ無盡ノ高山ヲ負ヒ、北ニハ峩々タル險山ヲ抱キテ水ヲ注グニ道ナク、西北ノ間ニ小シキ水道アリテ、神門郡ノ水ヲ西海ヘ注グ、此地ハ常ニ西風烈シクシテ海中ノ泥沙ヲ吹キ上デテ甚シキ時ハ行客ヲ留ム、此積沙宛カモ山ノ如シ、土人呼デ高濱ト號ス、是ヲ以テ大水ヲ行ルニ便ナラズ、東ニ馬潟ノ渡口アリテ、僅ニ百間餘ノ澗ヲ通ジテ北海ニ注グ、一國中ノ水ヲ海ニ注グ所此二流ノミ也、依レ之霖雨ゴトニ河水淫シテ堤防ヲ害シ、或ハ人家ヲ毀チ、甚シキトキハ牛馬ヲ溺ラス、是故河中漸々ニ埋リテ泥沙ヲ積ムコト岡ノ如シ、御支配ノ急迫ニヨリテ、河中ノ島ヲ新田ニ開キテ其價ヲ出ス者アレバ、後ノ害ヲ慮ルニ暇アラズ、望ムニ任セテ許レ之、新田方ノ役所ヲ設ケテ、吏ヲ置テ是ヲ利スルコトヲ勸メズト、是故ニ水道愈々埋リテ、少シキ水ニモ田稼ヲ害ス、相公政ヲ執テ御國ノ地理ヲ察シ、水道ノ便利ヲ考ヘ玉フニ、河中ノ新田害ヲナシテ年々田稼ヲ傷ヒ、上下ノ損失勝テ計フベカラズ、先ヅ初メニ此害ヲ除クニ非レバ、農事ヲ勉メシムルト云ヘドモ、一日ノ雨ニモ數旬ノ功ヲ空フシテ其年ノ立毛全タカラズ、先進君子モ之レヲ憂ヒ玉フト云ヘドモ、經費莫大ナルヲ以テコヽニ及ブニ遑アラズ、新政ノ始ニ河普請ノ事ヲ起シ玉フト云ヘドモ、西丸御普請ノ公役有テ外事皆廢ス、而シテ三年ヲ歴テ明和七寅ノ秋ヨリ事ヲ起シテ、大河ノ中島凡百餘所、大河下碇島ノ一郷、及大橋下モノ新田水行キニ障ル所ハ殘リナク取リ除キ、且ツ又神門郡石塚村ヨリ楯縫郡平田灘分村マデ凡ソ二里餘

ノ間ニ、幅三間ゾヽノ墳土手ヲ築キ、安永二巳ノ秋マデ三年ノ春秋ヲ以テ、百萬人ニ及ベル役夫ヲ用ヒテ其功ヲ卒ヘ玉ヒ、仁多・飯石・神門・大原・出雲・楯縫六郡ヲ經タル大河ノ中島・及碇島ノ一郷ヲ取リ拂ヒ、一圓ノ河トナリテヨリ流水盡ク宍湖ニ入テ、意宇・島根・秋鹿三郡ノ水ヲ連ネテ大橋下ヘ出テ、馬潟ノ津ヲ過ギテ北海ニ注グマデ、水道ノ妨ナクシテ溝水ノ害ヲ免カレ、田疇ノ登ヲ歛ルコトヲ得テ、御歳稼モ年々ニ增シ、上御支配ノ本モ立、下萬民ノ養ヒモ備リ、上下安泰ノ國トナル、是誠ニ仁政ノ國ニ行ハルヽト謂ツベシ、孔子曰、剛毅朴訥近於仁ト、相公恒ニ此語ヲ稱シテ云ヘリ、誠ナル哉此言ヤ、治國ノ業ハ仁政ヲ國ニ行ソヲ以テ專務トス、仁政ノ國ニ及ブコトハ數月ノ力ノ能スル所ニ非ズ、任重フシテ道遠ケレバ、剛ニシテ物ニ屈セズ惑ハサレズ、毅ニシテ能ク大事ヲ決斷シ、朴ニシテ物ノツヤ飾リヲナサズ、訥ニシテ言フ後ニシ行ヒフ先ニスルニ非ザレバ、國家ニ長トシテ國ヲ治メ民ヲ安ンジ、倉廩ヲ實タシメ兵ヲ强クスルコハナラヌ也ト、蓋此舉ヤ國初以來ノ大業也、其觀ル所ノ迂遠ナラザル爲メニ、先達君子モ竟ニ疑ヲ生ジ、百吏モ之ヲ是也トセヽ、唯相公獨リ決斷シテ此事ヲ行ヒ玉ソ、獨斷ノ功大イナル哉

武王問太公曰、得賢敎士、或不能以爲治者何、太公對曰、不能獨斷、以人爲斷者殃也（見六韜）

衛鞅曰、疑行無名、疑事無功、且夫有高人之行者、固見非於世、有獨知之慮者、必見敖於民、愚者闇於成事、智者見於未萌、民不可與慮始、而可與樂成、論至德者、不和

於レ俗、成ニ大功ニ者、不レ謀ニ於レ衆、是以聖人、苟可ニ以强レ國、不レ法ニ其故ニ、苟可ニ以利レ民、不レ循ニ其禮ニ　見ニ史記ニ

常平倉

御國ニ常平方ノ役所以前ヨリ有レ之ト云ヘドモ、其法ヲ行フコトナクシテ名有テ實ナシ、是御支配ノ怠迫ニ依テ其役所ノ蓄ヘヲ闕テ、其元立ヲ失フガ故也、相公新政ノ始メニ、常平倉ヘ收リ物ヲ立テ、其役所ノ蓄ヲ厚クシ、平日入用之貨物相當ノ價ヨリ貴ケレバ蓄ヲ出シテ他國ヨリ買ニ求之ニ、官船ヲ以テ漕寄セテ價ヒヲ賤クシテ賣レ之、又薪ノ價貴ケレバ、民間ノ立木ヲ山ニ入テ買レ之、薪コシラヘテ價ヲ賤クシテ賣レ之、其外明シ油材木諸色ノ類モ同レ之、此法行ハレテヨリ商賈ノ非義ノ利ヲ貪ルコト止ヌ、蓋漢ノ耿壽昌ガ常平倉ノ名ヲ假リテ其法ヲ行フ、彼レハ平糴ヲ以テス、此レハ貨物ノ價ヒヲ平カニス、民ヲ恤ムニ於テハ一也

前漢食貨志ニ曰、宣帝即レ位、用レ吏選ニ賢良ニ、百姓安レ土、歲數豐穰、穀至ニ石五錢ニ、農人少レ利、時大司農中丞耿壽昌、以ニ善爲ニ算、能商ニ功利ニ得レ幸ニ於上ニ、壽昌遂白、令ニ邊郡皆築レ倉、以ニ穀賤時ニ增ニ其賈ニ而糴以利レ農、穀貴時減而糶、名曰ニ常平倉ニ、民便レ之、上廼下レ詔、賜ニ壽昌爵關內侯ニ

再ニ興義倉法ニ

御國ニ先年義倉ノ法行ハレテ恤民ノ政起ルト云ヘドモ、其蓄ヘヲ出シテ百姓ニ假シ小惠ヲ施シテ、凶

年飢歲ニ貧民ニ給スベキ者ナシ、假シタル物ヲ取立テントスレドモ、年穀熟セザレバ償フベキモノ無シ、受ヲ以其法絶ヘテ行ハレズ、相公政ヲ執テ再ビ義倉ノ法ヲ興シテ夾ノ年貢ヲ出サシメ、毎村、或ハ二三村ニ在々所々ニ倉ヲ建テ是ヲ收メ置キ、年々新麥ニ詰替テ、又其年ノ取立ヲ合シテ、郷方吟味役ノ者ト郡足輕トヲ出シテ郡役人ニ立合セ、倉ニ納メ置テ相符ヲシテ其所ノ年老ニ護ラシメ、凶年飢饉ノ備ヘトシテ人ニ假スコトヲ禁ゼラル、蓋隋ノ長孫平ガ義倉ノ名ヲ假リテ行フ之、我日本ニモ文武天皇ノ世ニ朝廷ニ行ハルヽコト有シト云フ、彼レハ人ニ貸シテ利息ヲ取ル、是亦民ヲ惠ムノ一助ナルベケレドモ、凶年ニ至リテハ貸シタル物聚ガタキニ依テ、飢饉ノ備ヘニナラズ、是ヲ以テ今相公ノ興シ玉フ義倉ハ、人ニ貸スコトヲ禁ゼラルヽナリ

通鑑、隋開皇五年、度支尚書長孫平奏、令民間每秋家出粟麥一石以下、貧富差、儲之當社、委社司撿校以備凶年、名曰義倉、隋主從之

論遺列士之祿復古

御國多年ノ困窮ニ依テ御支配甚ダサシ支ヘ、豐年ト云ヘドモ國用足ラズ、是故ニ諸士ノ祿モ年々引ケ米ヲ以テ邑入ヲ減ジ、一家中ノ困窮於斯極ル、此時老侯田大夫ニ命ゼラレテ、俸祿ノ實三分ノ一ヲ減ジテ、二分ヲ以テ定額トシテ、全ク給スルナラバ、群臣ノ覺悟モ定リテ、儉ヲ守ルノ基モ立ツベシトテ、四ツ五分ノ免ヲ三ツニ減ジ、其レニ准ジテ米俸・金俸・藁米ノ類モ其員ヲ減ジテ分限ヲ定メ玉フ、サレバ

此ウヘハ引ケ米ナクシテ全ク賜ハルベキコトナルニ、公室ノ費用ハ年々ニ增シ、利權下モニ在テ糶ノ價ハ愈々賤ク、國用愈々乏シクシテ三ツ免ヲ全ク賜フコト不レ能、於レ是老侯御世ヲ當侯ニ讓リ玉フ時、朝相公召サレ、諸士ノ祿ハ御代々四ツ五分ノ免ナルヲ、國用乏シキノ故ヲ以テ、三ツ免ニ減ジテ諸臣ノ境內ヲ狹ノスルコトハ、政ニ於テ耻ベキノ甚シキ也、先君ノ尊靈ニ對シテ之ヲ何トカ謂ン、仍テ御在世ノ中古ニ復シテ、先君ヨリ傳ヘ玉ヘル儘ニシテ嗣君ニ讓リ玉ハンコトヲ命ゼラル、相公君命ヲ蒙リ玉ヒテ、此ノ事至テ重シト云ヘドモ、老侯ノ思召深遠ナル故辭シ奉ルベキ所ナク、命ニ應ジテ速ニ其事ヲ行ヒ玉フ、相公曰、我侯神孫ナルヲ以テ貴キコト御三家ニ亞グ、列國比肩スル者其レ亦多シトセズ、諸臣ノ列國ノ士ニ於ルモ亦唯是ヲ以テ其家ノ列ヲナス、然ルニ士ノ境內ヲ縮メテ志ヲ屈セシムルコトハ、兵ヲ弱クスルノ道ニ非ズ、老侯ノ尊命誠ニ當レリ、祖先ニ奉ジテハ孝ヲ思ヒ、下臣ニ接シテハ恭ヲ思ヒ玉フト謂ベシト

書曰、伊尹曰、王懋ニ乃德一、視ニ乃厥祖一、無ニ時豫怠一、奉レ先思レ孝、接レ下思レ恭、視レ遠惟明、聽レ德惟聰、朕承ニ王之休一無レ斁

攻ニ鐵山之制一

御國ノ產物ニ鐵ヲ出スコト最モ上品也、鐵ヲ攻ムル事ハ山ノ砂ヲ切リ崩シテ、水ニ淘汰シテ其精ヲ取テ、火ニ和シテ之レヲ鎔シテ鐵ヲ得、此切崩シタル砂簸野河（土人此河ヲ大河ト稱ス）ニ入テ水行ノ害ヲナス、是ヲ以

前政ニ勇モスレバ鐵山ヲ廢スルコトアリ、相公政ヲ執テ簸野河ノ害ヲナス中島ヲ取リ除キテ水道ヲ立テ、鐵穴ノ流シ口二百箇所ニ及ベルヲ、六十箇所ニ減ジテ鐵師ノ員ヲ限リテ、仁多郡ニ五箇所ニ定メ、此外ニ增スコトヲ許サズ、家業ヲ勤ンコトヲ勵マシメ、產物ノ絕ザランコトヲ施ス、元來仁多郡ハ深山ニシテ草木茂リ、禽獸人ニ逼ルノ患アリ、其上無田ノ民、耕作ノミニテハ世ヲ渡ルニ足ラズ、是ヲ以テ拝民騒擾スルノ患アリ、依テ仁多郡ヲ治ムルコトハ、他郡ノ並ビ合ヒヲ見ル時ハ民其鄉ニ住ムコト不ㇾ能、是故ニ新政ノ始ニ、年貢上納ヲ半バ米ニテ取リ、半バ銀ニテ取テ、米ノ直段ヲ平生ヨリモ賤クシテ取立テ玉ヘバ、百姓モ力ヲ得テ其土地ニ在リ著シキ鐵山ノカセギモ他國ノ人ヲ用ヒズシテ事足リ、年貢ノ算ニ立木ヲ伐リ用ヒテ、禽獸人ニ逼ノ煩ヒヲ除キ、產物長ニ生ジテ國ニ銀錢ノ入ルコト多ク、年貢ノ取立テモ滯ハコトモナク、上ノ用度モツカヘズ、昔貧郡タリシモ今還テ富郡ト唱フ、蓋相公能ク地理ニ通ジテ、利シ難キモノヲ能ク利シ玉フト謂フベシ

湯問伊尹九卿之行、伊尹對曰、九卿者不ㇾ失二四時一、通二於溝渠一、修二隄防一、樹二五穀一、通二於地理一者也、能通ㇾ不ㇾ能ㇾ通、能利ㇾ不ㇾ能ㇾ利、如ㇾ是者舉以爲二九卿一（見二三略一）

造二廻船一

夫レ物ノ價ヒハ寡ケレバ貴ク、多ケレバ賤シ、是故ニ交易シテ均ㇾ之天下通義也、御國ノ產物ニ最モ多キ物ハ米穀ナリ、其餘ルモノヲ以テ他國ヘ出サント思ニ、陸行セントスレバ路險ニシテ且遠シ、舟行

セントスレバ運漕ノ經費又多シ、利權ヲ取ントスレバ、蓄ヘナクシテ如何トモスベカラズ、是ヲ以テ糶ノ價ハ益々賤クシテ、其利盡ク商賈ニ皈ス、國用ノ足ラザル所以也、士農ノ貧窮スル所以ナリ、和公新政ノ始メニ、御支配ノ元ヲ強クシテ利權ヲ上ニ取リ、御國ニ餘レル米ヲ他國ヘ運漕シテ其跡ノ釣合ヲ善クシ、糶ノ價ヒヲ極メテ人ノ求メヲ待ソ、利權上ニ歸シテ國用益々足リ、餘澤士農ニ及ンデ列士ハ義ヲ守リ、田夫ハ居安ンズ、御國ハ邊土ナリト云ヘドモ、海運ニ因ルコトハ遠シトシテ到ラザル所ナシ、爰ヲ以テ廻船數艘ヲ造リニ用レ之、運賃ヲ人ニ與フル費ヲ免カレ、交易自在ノ用ヲナシテ、米穀貨物ノ輕重ヲ視テ、其價ヒヲ低昂スルコト唯上ノ命ズル所ノマヽナリ、蓋治國ノ要ハ民ヲ富スニアリ、民ヲ富スハ利權ヲ上ニ取テ、米穀貨物ノ有無ヲ通ジテ價ヲ平カニスルニ在リ、廻船ハ有無ヲ通ズル媒ナル哉

管子曰、凡治國之道、必先富レ民、民富則易レ治也、民貧則難レ治也、奚以知二其然一也、民富則安レ鄉重レ家、安レ鄉重レ家、則敬レ上畏レ罪、敬レ上畏レ罪則易レ治也、民貧則危レ鄉輕レ家、危レ鄉輕レ家、則敢陵レ上犯レ禁、陵レ上犯レ禁、則難レ治也、故治國常富、而亂國常貧、是以善爲レ國者、必先富レ民、然後治レ之

戒ニ民微邪

明律曰、凡投二隱匿姓名一文書上告二言人罪一者絞、見者即便燒毀、若將送二入官司一者杖八十、官司受而爲理者杖一百、被二告言一者不レ坐、トアレバ書ツケニ己レガ姓名ヲ隱シテ人ノ罪ヲ申シ出ル者顯レバ、

是ヲ絞リ殺ス、此ノ匿名ノ書ツケヲ見附タル者ハ即時ニ燒棄ツベシ、此ノ文書ヲ見ツケ次第ニ燒棄ルコトナルヲ、左ハナクテ官府ヘ進ル時ハ、其科ニテ杖ニテ八十ウタルベシ、役人ガ取リ上ゲ一訴人セラレタル人ヲ僉議スル時ハ、其役人ヲ杖ニテ一百ウツナリ、訴人セラレタル者ハ罪セラレザルナリ、此レ明律ノ法ナリ、相公政ヲ執テ姓名ヲ隱シタル訴狀ニテモ、其譯アルベシト見ユルコトナレバ、是レヲ取リ上ゲテ、訴人セラレタル者ヲ僉議シ玉ヒテ、訴狀ニ申出ル通リノ科アレバ、相當ノ罪ニ行ハル、コトアリ、御國多年ノ困窮ニ依テ、下部ニ御支配ヲ任ゼラレシ時、豪民ノ驕奢日々ニ盛ンニシテ、邪謀ノ者國政ヲ亂ルコト放逸至極ナリ、新政ノ始ニ、猛威ヲ以テ下ヲ御シ、民ノ奸邪ヲ禁ジ玉ヘバ、大邪ノ者ハ隱ル、ト云ヘドモ、數十年ノ弊政國風トナリテ微邪今ニ民間ニ行ハル、微邪ハ大邪ノ生ズル所ナリ、禁ゼズンバアルベカラズ、匿名ノ文書ヲ以テコレヲ糺シ、告言スルモノヲ僉議シ玉ハズ、是微邪ヲ禁ズルノ一術ナリ、蓋管子ニ因テ之レヲ行ヒ玉フ歟

管子曰、凡牧レ民者、欲二民之正一也、欲二民之正一、則微邪不レ可レ不レ禁也、微邪者大邪之所レ生也、微邪不レ禁、而求二大邪之無一レ傷レ國、不レ可レ得也

漢書、趙廣漢爲二穎川太守一、爲二缿筩一、吏民相告訐、廣漢得以爲二耳目一、盜賊以レ故不レ發、發又輙得、壹切治理、威名一聞

植二貧民一

明和四亥年冬十二月當侯御世ヲ嗣玉ヒテ、同六丑年秋九月西丸御普請御手傳ノ公役畢テ、同年冬十一月御休息ノ爲メトシテ以上命御國ヘ入ラセラル、翌年明和七寅ノ夏五月初テ御國ヲ巡リ玉フ、是ノ時朝相公御供ニテ、郡々ヲ巡見シテ民ノ疾苦ヲ問ヒ玉フニ、御支配數十年來ノ急迫ニコリテ、聚歛ノ痛ミ民ノ骨髓ニ染ミ、上農夫モ無告ノ者ヲ恤ニ餘力ナク、新政ニ移リテモ間ナキ故、恩澤末貧民ニ不レ及、於レ是君侯ノ思シ召ヲ以テ府庫ヲ開キテ、銅錢三千貫支出レ之、鰥寡孤獨ノ窮民ヲ賑救シ玉フ、繼デ又同年秋八月ヨリ大河普請ヲ起シテ、一周年ニ三十萬人餘ノ夫役ヲ用ヒ、此人夫ヲ御國中ノ惣百姓ニ賦シテ出サシメ、定法ノ賃米ノ半分ヲ上ヨリ賜ハリ、其他ノ百姓ノ石高ニ割リテ之レヲ償ハシム、傭夫ノ賃錢ハ民間ノ相對ニ約シレ之、一日一人百錢許リノ傭賃ニテ使ハル、安永二巳ノ秋マデ三年ノ春秋ヲ歷テ、傭夫ノ高百萬人ニ及ベリ、是ヲ以テ細民食ヲ得テ經營ヲ快クス、貧民菜色ノ憂ナク、還テ役使ノ人稀ニシテ奴婢僕隷ノ給米昔年ニ倍ス、都鄙ニ乞食ノ聲ヲ聞ズ、此恩澤下民ニ及ブノ證也、蓋文王ノ治レ國鰥寡孤獨ヨリ始ルト云フニ本ヅキ玉フ歟

孟子曰、老而無レ妻曰レ鰥、老而無レ夫曰レ寡、老而無レ子曰レ獨、幼而無レ父曰レ孤、此四者天下之窮民而無レ告者、文王發レ政施レ仁、必先ニ斯四者一

浚レ塹治レ橋

御家ノ御支配數十年來御國用乏シクシテ、當手〳〵ノ費用ヲ償フノミニテ外事盡ク闕ケタリ、依レ之郭

内ノ橋モモト板橋ナルヲ、二三十年以前ヨリ土橋ニシテ、當分經費ノ少キヲ以テ得タリトス、御堀筋モ漸々ニ埋リテ小舟モ通リ難キ程ニナリテ、運漕ノ路塞ガリテ衆人之レヲ愁フト云ヘドモ、之レヲ修理スルニ暇アラズ、郭外ノ大橋天神橋モ大イニ弊テ、往來安カラザルニ至ル、相公ノ新政ニテ御支配ノ御元立モ備リテ、其餘リヲ以テ御手懸リノ御修復所モ順々ニ事ヲ起シテ補レ之、大橋天神橋ヲ新タニ懸直シ、郭内ノ土橋ヲ板橋ニシテ本ニ復シ、御堀ノ埋リタルヲ浚ヘテ、舟行自由ニシテ人力ノ費ヘヲ免カレ、是又仁政ノ一事ナリ、孟子ニ子産ノ政ヲ議スルコト味アル哉

孟子曰、子産聽二鄭國之政一、以二其乘輿一、濟二人於溱洧一、孟子曰、惠而不レ知レ爲レ政、歲十一月徒杠成、十二月輿梁成、民未レ病レ涉也、君子平二其政一、行辟レ人可也、焉得二人人而濟一レ之、故爲レ政者、每レ人而悅レ之、日亦不レ足矣

備フ將來必用ニ

說命ニ曰ニ有レ備無レ患、相公恒誦レ之曰、凡經濟ニ與カラン者ハ、此語ヲ得テ拳々服膺シテ之レヲ失ハザルベシ、相公新政ノ初年、明和四亥ノ秋ヨリ去歲安永三年冬マデ凡八年ノ間、國事繁多ニシテ莫大ノ費用ナレドモ、民ニ少シノ課役ヲモ懸ケ玉ハズシテ事皆整ヘリ、其自序中ニ詳カナルユヘ略レ之、且年々ノ餘リヲ蓄シテ府庫ニ貯シテ、御支配永久ノ基ヲ立玉フ、尚亦將來ノ必用ヲ慮メ案シ玉ヒテ、饑百姓借御救様ノ事ハ、五百兩借ノ例ニ任セテ木實方ヘ仰付ラレ、御手當ノ道モ當リテ年々生財ノ法行

ハル、若シ木實方ノ蓄ヘ未滿ノ中ニ御縁談アレバ、其御積リノ足ザル所ヲバ、御勝手方ヨリ當手ヲ合セテ、而シテ後ニ木實方ヨリ償レ之コト、是亦先例ノ書記明白ナリ、偖又大樹公御上洛ノコトアルトキハ、御名代トシテ國々ノ舊例ニ任セテ上京ノ事アリ、此レ公役ナリト云ヘドモ、勅任ノ義ハ人ノ欲スル所ナリ、我君侯ノ御上京モ御順期恐ラクハ遠カラジ、其時ノ御備ヘノ爲ニ常ニ課役ヲ除キテ民ヲ富マシム、百姓足ラバ孰レト與ニ足ザラン、御參内ノ事ハ上ノ御轉位ト云ヒ、其上ヘ御在世一度ノ御國役ナルユヘ、一國中ノ力ヲ以テ御費用ヲ勤ムベキコト當然ノ道理ナルヲ以テ、兼テ其心得ヲ沙汰シ玉ヘバ、是亦御心當ニモ成ベキ也、是迄ニテ格別ノ御入用ハ殘リナク整ヒヌ、桓公ノ曰ク、臨時ノ費用ニ府庫ノ財ヲ散ズル時ハ、忽チ利權ヲ失フテ匱乏ニ至ンコト必セリ、是ヲ以テ右ノ備ヘヲ立タルナリト、其意深哉

書說命曰、惟事事、乃其有レ備、有レ備無レ患

論語有子曰、百姓足、君孰與不レ足

勸學

當時天下封建ノ制ナレバ、士大夫世祿ニシテ生レナガラノ君子タリ、サレバ君子ノ位ニ在テ君子ノ道ヲ爲ザレバ、尸位素餐ノ誚リヲ免カルヽコト不レ能、御家ノ御支配累歲ノ御差支ヘニテ、御家中ノ御擬作モ年々引ケ方強ク、諸士一統困窮ニ及ンデ、豪民富商ニ乞貸シテ不足ヲ補フヨリ外ニ術ナシ、是ヲ以

テ禮儀廉恥ノ綱モ殆ンド絶ヘントス、相公此ヲ執テ御支配ノ本ヲ損ゼシテ御永續ノ道ヲ興シ、御家中ノ御撰作ヲ增モ月淺ノ法ヲ立テ、暮シ方ノ規矩ヲ定メテ、人々入ヲ量リテ出スコトヲ爲シム、是各我家ヲ齊ノヘ四維ヲ張テ、國家ノ藩屛ヲ守ラシメンコトヲ欲シ玉フカ、禮義廉恥ノ由テ來ル所ヲ知ラシムルニハ學ニ因ルニ如クハナシ、然リト云ヘドモ仕ヘ優ナラザレバ、縱ヒ志アル人モ學ブニ暇アラズ、勸於是相公躬親ラ先ンジテ御政事屬官ノ面々ヲモ文明館ヘ誘引シテ、白寛先生ニ就テ學ヲ受ケシム、勸學ノ意ハ序文ニ於テ先生盡レ之

管子曰、國有二四維一、一維絶則傾、二維絶則危、三維絶則覆、四維絶則滅、傾可レ正也、危可レ安也、覆可レ起也、滅不レ可二復錯一也

治國譜及治國譜考證　終

世營錄

藤井直次郎著

世營錄序

夫れ人事といふ事は天の咎也、咎ある事は專意人欲恣にして天理に違ふゆへ也、依て人君は六經を學び、經濟の術に達し、民に不ㇾ爲ㇾ敎國家治る事なし、鄙人修身には政法を守、天理に隨て不ㇾ爲ㇾ業修る事なし、故に慶長以來の風俗、天災の曆數を撰んで、世營錄と號す

天明七丁未秋七月

東都　藤井氏書之

世營錄

藤井直次郎著

天明六丙午年不時の冷氣にして、諸國米穀登り薄く、半毛に至らず、關東は七月十七日より大水にして、在家は勿論、東都の下谷・本所・武家・商家、洪水に浸る事數日に及べり、農家の人民飢餓するもの多く、富たるものゝ門に食を乞ふといへ共、遂には道路に飢死するもの多く、常州信太郡の邊には、人家に畜たる犬雞を食したるも有、四月に至り麥作に取續き、農家は息を繼しかども、五月に至り俄に米價ひ貴く、金一兩に二斗内外に商ひしかば、東都の工商共飢餓して、米商するものゝ家を打破り騷動す、因レ之伊奈半左衛門に命ぜられ、上より御金貳拾五萬兩出させられ、在々より麥を買集、價半減にして町々へ與へられ救ひ給ふ、騷動して家を壞ちたるは、京都・大坂・其外諸國繁華の町々皆同時に同然たり、是人倫のする所にあらず、天のする所也、近來聞傳なき飢餓なるに依て、古を尋ぬるに、推古天皇の代に天災ありて米穀登らず、飢るもの多く、天皇宸襟を困め給ひ、朕不德ならば天吾をこそ困めん、萬民に何の過あらんやと恭んで天禱、三韓へ米穀を乞て、七十五艘を送りしに仍て飢民

を助け給ふ、又聖武天皇の代、天平七年飢饉にして、先例に隨ひ又請て七十五艘を送る、其時始めて日本へ小兒疱瘡の病來りしと醫書疱瘡論に見へたり、又鎌倉右大將家の後、北條武藏守泰時、天下の權を執りし時、寬喜四年四月二日改元あつて貞永と號、其年關東いかなる氣運に當りしか、打續大雨・大風・大地震・洪水・旱魃・火難・疫癘等あらゆる天災あり、米穀・柴薪貴くして人民百姓等困窮し、視に離れ子を失ひても、朝夕の烟竈に絕、飮食の便なく、高貴の門に袖を乞、食を乞ても、終には行倒れ飢死するもの道路に充、武藏守此有樣を聞、痛〻胸肝〻燗かし、飢凍の民を救んと矢田六郞右衞門尉に命、米穀九千餘石を持て救ひ、濃州の貢納を停め、往返流浪の人等には粥を煮て與へ、緣者を尋ねて行歸るものには、行程の日數勘て旅の糧米を與へし也、米穀貴しといへども中古以來沙金を用い、唐の開元の錢多く渡り通用せし時なれば、今の金に割合競る事詳ならず、此度の飢饉此三度より薄かるべし、其外古へ飢饉ありといへども、左程の事なくやうす詳ならず、御當代にては元祿十二卯年八月十五夜、大風にて關東は米穀登らず、其冬御帳紙、元字金五十兩にして、東都在々におゐて飢餓するもの多く、道路に倒死するもの數しれず、本所の邊に小屋を建られ、粥を與へ救給ふ事百餘日に及べり、其翌年の春に至り飢民稍寡なり、其秋米穀も熟し米價賤く成べき處に、癸未十一月廿三日夜、東都大地震にて、關東諸國殃災に罹り、大小の諸侯は、東都御城の修理に人夫を出し困めり、其翌年寶永と改元有り、申七月三日關東水災にて米穀登らず、價貴事前同然たり、此時東都近在猿ヶ俣といふ處切て、

下谷・本所の人家水に浸り困めり、其時伊奈半左衛門に命られ、家根に上り居て飢るものに握り飯を與へ救ひ給ふ、また寶永四丁亥十月下旬富士山燒て砂石數十里へ雨り、地理埋もれて廢たる事、勝て計べからず、是に依て米價元字金一兩に七斗餘にして、小民困むといへども、元祿卯以來困窮に馴たる故飢死する程の事なし、其翌年より米穀稍々賤くなるべき處に、正德二壬辰年元字金銀通用止り、慶長の故金に復す迄との上意にて、先乾金を行る、此金一兩目方貳匁四分にして、慶長金の半分なる故に、米價四斗餘を以て商ひ、正德の末に及て小民飢饉するものあれども、元祿卯年に比すれば甚だ少し、同四午年に至り彌慶長の故金に復し、新金銀と唱へ海內に行る、夫より米穀・百貨・金銀の位に隨て賤くなり、初は金一兩に米穀九斗より一石にて、斷々に賤く成るべき處に、享保十三戊申五月關東大水にて、東都兩國橋落る程の水災にして、米穀登り薄く八斗內に商ひ、されど小民飢に及程の事なし、同十七壬子年西國に稲の虫附米穀登らず、畿內北國の米、西國の方へ引て、東都へ出でず、其時に高間傳兵衛といふ商人古買し舟に圍ひ置たるゆへ、翌丑の冬より價貴く、寅の夏に至り御張紙新金五十六兩にして、一兩には六斗二升五合（此五十六兩ハ今ノ文金ニ割合八九十二兩永四百文ナリ）にして、元祿已來の高き事なれ共、此時に東都に飢餓のものなく、享保の末に至り徃々米價賤く、慶長の古に立歸、豐作續、金一兩に一石六七斗に賣買す、（今ノ文金ニ割合ハ一石ホドナリ）元文元丙辰より今の文金銀に代り、海內に行れしより、天災多きは何ぞや、關東計を尋るに、寛保二戌八月大水、寶暦七丑七月大水、明和三戌年八月大水、同七寅同八卯兩年續大旱

魃、安永五申八月大水、同九子八月大水、天明三卯七月信州淺間山燒て、上州吾妻川より利根川へ泥石を押出し、上牧・中牧・下牧三ケ村泥に埋れ、人民多く死し、砂石數十里へ雨り、地理廣たる事勝て計ふへからず、此時に米價四斗にて、久しく九斗一石に賣買せし米價宜きに依て、田所多く持たる農民は前年より圍置たる米を賣、金銀多く取り悦びたるも有り、田所不レ持水吞の無レ貯小民は、飲食の便りなく袖乞に出、道路に饑死するもの多し、同年七月大水にして、今年の飢饉最初に昔す、但今年ハ天明六年本朝にて古へは如何なる金幣なる事しらず、中古以來は沙金を用ひ、織田信長の時に板金を用ひたりと聞く、銀も何れの世より始るといふ事詳ならず、今の金銀幣は慶長年中佐渡の山より金多く出て、金を作らせられ海内に行る、此金大判金目方三十六匁、小判金四匁八分、一分金一匁二分にて、大判は小判の七兩二分なり、此金七十有餘年行るゝ内天災を尋るに、寬永三丙寅旱魃、同四卯年地震、八月洪水、同十酉相州小田原大地震、延寶三卯飢饉にて東都小民へ施行出させられたれども、さのみ飢餓する程の事なし、尤も關東計りの天災にて其外は不レ知、米穀は金一兩に一石二三斗より五六斗迄に賣買す、今の文金に割合せば八斗より一石迄也、都て世の風俗質素にして、貨物の價賤かりし也、元祿八亥年慶長の金銀を止められ、銀・銅・鉛・錫を雜へて新幣の金銀を造せられ、元字金銀と稱し海内に行はる、此金銀は正金銀にあらざる故、金は黃金の直色を失ひ、鐵石の如く、銀は錆を生じ鉛錫に異ならざるに依て僞安く造僞安く、罪人多く磔に行るゝもの絕ず、民間にも此金銀を賤んじ、惜まずして遣ひ捨る、

依て貨物の價貴くなり、金銀動散工商の手に落て利潤有、故に工商より奢侈し、農民是を學び奢侈し、此金銀元祿八より正德二迄十七ヶ年行るゝ內、前に書する如く五年に四度の大天災有、其外四五分の損毛なる天災は數度にして人民困窮し、金銀僞造の罪人絕ず、文昭院樣此事を深く憂へさせられ、登極の初より金銀幣を故に復さん事を思惟させられ、正德二辰より先乾金を行る、同四午年より慶長の故金銀に復し行れしより、貨物價賤くなり、金銀動かずして小人の手に落ち難うして奢侈ならず、金銀を貴く思ひ家業を樂とするやうになり、漸々米穀も充、享保の末に及では慶長の古に立歸り、一兩に一石六七斗に賣買し、金銀小人の手に入ざれども、食するに易かりし由、此金銀正德二より享保二十迄二十四年行るゝ內、關東の天災と云て諸國へ響きたるは享保十三申五月計、元文元辰より今の文金銀行る、此金一兩日方三匁六分、其內へ銀一匁一分七厘雜へて、慶長金に六割半位を下げ、一分金は日方九分也、銀も銅を雜て位同所に下げ、米穀・百貨とも慶長金より六割半價貴くなる、金の位にして動き强く、小人の手に多く入故、奢侈し遊樂して家業を怠るやうに成行し所に、安永元辰より南鐐の貳朱判行れしより錢の代りとなり、其上鑄錢多く、錢賤して小人窮す、又南鐐の費立事は、譬ば金計の時に一分錢を買へば一貫四五百文有故、行先にて百文二百文入用ありても殘多く、懷中に入るにも嵩みしゆへ、無據事ならねば遣はずに濟事あれ共、貳朱判にては半分なる故、嵩みなく調法にして用度辨じ、能錢を買て遣ひ殘り有故に、又無益に遣ひ捨る事あり、遠方へは多持步行事不

レ成故、不益の両がへ賃を出し金に替て費立なり、また金と両替とを懐中するに、金をば惜み跡に残し、両替は銭同然に心得遣易、是不レ貴所の人心也、又諸買物直を立る事、摂州大坂諸国へ運送の津にて、古より富たる商賣のものあり、諸賣物大坂へ入津して其時々の形氣に隨ひ、直を立るに銀にて直を立て、夫より諸国へ運送す、貳朱判不レ行已前金と銀との両替貴き時六拾貳三匁、賤き時は七拾目餘にて両替せし處に、今は天明六年なり四拾八匁より五拾五六匁に両替す、是れは丁銀は不レ増して、文金は貳朱判出たる丈け増して、金の方多、銀の方少く、金賤、銀は貴くなりし也、因て伊勢より東國金を遣ふ國々は、古も今も銀にて同じ直のものにて、金を出し買ふ時に元一両にて買しものを、今は一両一分餘にて買なり、是金と銀との相場計にて、直貨貳割餘貴ふして人民窮す、又金賤く成たる謂しは、大判は慶長金の儀にて、慶長の小判にて七両二分、文金には六割半貴きゆへ、十二両一歩二朱の割なれども、賣買の両替に、寶暦年中迄は拾二三両の両替なりしに、追々と大判貴くなり、今は二十二三両餘に両替す、是則文金賤くなりし證なるべし、金銭多ければ賤く貨物貴く、金銭動散て小人の手に入て奢侈し、家業怠り人心天道に違ふゆへか、元字金銀十七年通用のうち、前に書するごとく數度の天災受て窮し、正徳二より慶長の故金銀に復し、二十五年行るゝ内、天災は一度にして米穀充滿し、慶長の古に立歸り、食するに窮する事なし、元文元年より今の文金銀行れ、今年迄天明六年なり五十二年、前に書する如く數度の天災有て窮す、是金銀高き時には窮せず、賤時には窮

す、さすれば金銀數多賤ければ動き强く、小人の手に落易ふして奢侈する者なるべし、因て今又慶長の故金銀に復しなば、人心古に立歸り天道に逆ふ間敷か、是日輪は常度有り、毎過不及なく運動し、三百六十五度四分度の一を歴て故に歸る、是天道の正直なる處也、人の道は天に本附たるものなれば、上天子より下庶人に至迄、平日の業を悉く天道に順てなすならば災受る事なし、因て天道を重んずる人は修身・齊家・治國・平天下也、是堯舜天下を治に天文を重んじ、朝廷の側に司天臺といふ高き臺を作りて、太史欽天の官人を日夜此臺に登らせ置、天文を視せ、若し變見る事を奏聞するならば愼で德を修め給ふ、古の人主は天を畏るゝ事如ㇾ斯、又虐ㇾ民天道を輕んじ、天下亡し失ㇾ身ものは夏の桀・殷の紂が如き是なり、人の奢侈する其本は士人より發る也、士人は國亂れたる時は軍旅行役に暇なく、治世には心慮を痛る事なく、佚樂して好食・美服・珍貨を弄び而已して、金銀工商の手に落て利潤有ゆへ、工商賑ひて奢侈し、農民は骨を折て利潤薄く、工商の骨不ㇾ折して賑を羨んで、農民より工商に成るもの多く、農人の人數減じて、田所手に餘り荒て山林となり、貢納も減じ士人は貧窮す、是己より發りて己へ返る也、故に今諸侯の内には貧窮して家人に扶助する事不ㇾ成やうに成行しもあり、富たる商賈のもとに仕送を憑、高利を出して金銀を借り用度を辨じ、工商を富し又珍膳を襲し、故無き輩に祿俸を與へ官人の席へ加へ、取り用ひて家事を行はするも有、元より小人なる故に知ㇾ利不ㇾ知ㇾ仁、故に一家一領不服にして騷動す、米俸給する士人は藏宿へ低ㇾ首武士の失ㇾ威、金銀を借り用

度難じ、皆佚樂より興也、漢の代の武帝奢靡を好み、臣下是を學び貧窮し、富たる商賈に無心して用度を辨ぜしに付、漢書に此事を「封君低首仰給」すと書けり、さすれば古も今に似たる事こそ有、愚思ふに、國亂たる時は武學も自ら習へども、治世には日々に心がけねば急の間に合ず、因て武道文道に心慮を碎くならば、佚樂の暇なふして美服珍貨に金銀不「費、さすれば美服珍貨の工商衰微にして、農になるもの有て田家賑ひ荒れたる田所も立歸り、金銀工商の黨に落ずして、士農の黨に補て窮する事道理なり

農家の人民奢侈するは、國々城下の外に二三里づゝの間に町場有、毎月六度十二度の市日あり、在家より賣買の貨物持運んで當の用度を辨ぜし處に、近來連々在家殊に商人出て、酒屋は勿論百貨を賣買するゆへ、居ながら自由足りて奢侈し、農業を怠り佚樂して衰微し、佚樂するより若年の業骨折ることを嫌ひ、東都并繁花の町々へ出て、骨折ざる稼する輩多く、水呑たる百姓の子供たりとも、田家に奉公するものなき故、田所を持人抱へ耕せし農民、二十年以前迄は男給金は一両二分位、女三分位なりし處に、近來男四両女三両位に成し、因て人を抱耕しては不二引合一、人少にて耕す故田所の養ひ手入不レ行屆、地所疲て登り薄く追々衰微し、古より田所多く持たる農民多く潰れ、田家の竈減じ田所は荒て山林となる、東都は在家より出るもの多き故に、追々人數增し小商人多くなり、百貨持ち歩行賣者も賣手多き故、賣買少く利薄く、其上一圓の人數多き故に、朝夕用る薪柴の類貴ふして俱に困窮す、

田家は人數減ずれば田所荒れて窮す、商家は人數增せば工商の稼を分けてするゆへに窮す、田家と商家とは反覆する也、愚按ずるに、東都へ出る者多き事は、少しのしるべを尋來り主も世話し、しるべなきものは人屋有りて世話し落付なりし故に、田家より若年の輩闕落して出、稀には相應の武士・町人にも有付もの有しを羨み、我も〳〵出で、心がけ惡き輩は身の置所なきやうに成行き、無宿菰冠りなどに落行、盗賊する族もありて死罪に行るゝも有、連々天下の人民減ず、今是を止ん政法は、東都の町の於二宰所一主の官紙と號し、白紙の裏に印を押して、其領知を支配する官人へ渡置、在家より東都へ奉公稼に出度ものは、其所の官人へ願ひ官紙を貰ひ、其官紙へ其村の長送り狀を認め持せ出し、又東都にては町々の町へ官紙の印鑑を渡置、在家より送狀持來らば、印鑑に引合可レ爲二世話一旨の命を下させられなば、在家より闕落して出る事ならず、又田畑を捨て可レ出旨を願ふ族をば、其村の長官紙を願ひても貰ひ與れず、田所を多くもたぬ百姓の次男三男等にて、親兄得心にて東都へ出るものには田所の障にもならず、東都へ出で無宿菰冠にもならず、闕落して出るものには無宿菰冠になるもの多かるべし、如レ斯行れなば東都に惡もの少く、田所の人民多く減ずまじきなり

凶歲に飢餓せざる先王の行、禮記王制に國九年の蓄なきを不足といふ、六年の蓄なきを急といふ、三年の蓄なきを國非二其國一といふ也、三年耕て必一年の食有り、九年耕て必三年の食あり、三年の通を以てする時は、凶旱水溢有といへ共民菜色なく、是は一年の實を四ツ割、其三ツにて一年を賄ひ、

一ツを餘せば三年に一年の賄ひ出す、如此して六年耕せば二年の賄有、九年耕せば三年の賄有、三十年積は十年の賄有、因て水旱風の災十年續と民飢し事なく、隋の文帝の時に長孫平といふもの地理の政法を司る官人にて、倍に奏聞して在家に倉を建さ、農家の貧富に隨ひ、年毎に粟麦一石以下を出さしめ、其村の長是を主り、蓄置て飢饉の時是を出し難義を救ふ、急難を凌たる故に義倉と號す、日本にては文武の代に此法を行ふ、愚按ずるに、先王の政は四分一を餘す法なれども、今天下一統窮したる時なれば、四分一を餘さば其年の用度足るまじ、然れども十分一を餘す事は、少の用度を節にすれば餘されずといふ事なし、因て士人は祿の十分一を餘し、積貯置、凶年の難を凌き、農家は其地理を支配する官人世話し、年々行徳の十分一を出さしめ、官人封印して其村の身元善き長に預け蓄積、凶年に飢ものゝ難義救ひ、豊作に返させ積置けば飢に及事なし

近來農家に居りながら工商の職を稼とするもの多して田所荒るなり、工商の職は其日〳〵利を得る所見へて營易く面白き故、我〳〵と工商に成れども、始に利を得るものは後に亡び、始に利を得ざるものは末に利得身終る、農業は春耕し夏耘て、秋に至りて利を得て遠き事なれども、米穀利を得る故に蓄に成ものなれば、凶年の時にても飢事少し、工商は日々金錢にて利を得故奢侈出て遣ひ捨る、蓄る事ならずして、凶年有て米穀貴き時は、先に飢るものは工商也、又町場といふものは在家有りて、在家より用度を辨ずるに善き場所〳〵に古より有て、在家より賑して繁花なる故に富たるものあり、其富

羨むべからず、工商の富るゝ貧するゝ其場所に有り、又只蓄たる商賈たり共、平日利欲に拘りて營ゆへ、亡るに及では睫する間もなく亡なり、農家は衰ふるに及でも五七年ゝ保ち、其内には又興然として起る事ありて、家名を失ふ事なし、商賈家に生るゝ共、分辨ある輩は田所を求むるものある、富て金銀有りても一時に失ふは金銀也、田所は一時に失ふ事なく、年々利を生む故也、因て農家に生れたる輩の商賣を羨むべからず、農業を專にするなれば、家を失ふ事なし

近來諸貨貴しといふは、前書する如く金銀多く成し故、金銀賤しく成て諸貨貴く見ゆる、金錢賤ければ動散り人民の手に入易、奢侈するゆへ貨物ゝ貴くなり、貨物貴ければ貨物の商賣は富べき道理なれども、譬ば絹を織るものは糸貴し、糸とるものは薪貴し、因て諸貨貴く、窮するゝ天下一統、賤ふしし富るも天下一統なれども、其内に富めると窮するとは其人にあり、今天下皆花麗を好みし奢侈すれども、人の華美に不ㇾ拘、其身質素にして家職を要にするならば、富ずとゝ窮する事なし、又天下の人民皆如ㇾ此の人心になるならば、金錢賤ふして諸貨貴しといへども、諸貨捌け難ふして自ら安くなるなり、因て天下の人民飢寒を凌ぎ、命を養ふの外好事なき事は、天下に窮する人なしと云々

東都

藤井直次郎書之

世營錄　終

獨愼俗話

一名白木屋管店書

獨愼俗話　一名白木屋管店書

一　我々共儀不思議御縁を以て、當御店へ幼年之節御目見得に罷越、誠に東西も辨ざる愚者を御召仕被レ下候に付、累代の支配役衆中を始頭役衆中に至迄、唯々御奉公大切に相勤候樣被二仰下一候ればこそ少々施耳に止り、數年來の御厚恩蒙り奉り候得ども、己壹人の働を以て成人いたし候樣に存、亦は我賢して御役儀等も結構に被二仰付一被レ下候と而已相心得、天道之御罰を恐ざる働今更恥入奉るの所なり、實に其本源を忘卻し己を推擧(たかぶる)は、深恩を思ざるの失にして、禽獸に替る所なしと古人の戒今我身の上思ひ出られ候、然るに無智無才の我々共、年數之功により斯のごとく結構に被二仰付一、各々方筆頭に居りて當御店預り、商内の道を勵ませ候儀甚々恐入るの所也、其故は身不肖に候へば萬事行屆かざる勝と存候、左すれば各方にも快からざる事而已儘これ有べしと察存候、然る時は自家内の備亂べき筈に候、家備混雜いたし候へば自然と商内の道も衰へ、不易の相續心もなく候に付、此度愚意相認候間何卒惣中子供に至迄一致和順して、我々共と同心においては大慶これに過べからず候、畢竟は各方粉骨辞身して相働被レ申候時は、御店繁榮いたし商高も加増いたし候時は、各方勤功の勵方によつて我我共儀も忠節相立、何れにも天の道に相叶被レ申候に附、當御店末代忠義の名も殘り候て、人の鏡にも

相成被レ申候儀、生涯の面目此上やあるべきと存られ候、夫に付身不肖の我等故定て得手勝手のみ可レ致と存候、此儀は己が事は己より見へざるものに候間、各方へ此段御賴申候、第一忠節之志薄く候て御式日之趣違背是あり、御店之御法度を相破り候か、我心に叶ひ候人を其器をも考へず不相應之役替申渡し候か、又は己に諂ふ人を愛し、差たる功も無レ之者に順席を引上げ、得手不得手の差別をも不レ辨重役に居候か、忠義なき人亦實體にて御店の役に立べき人など聊の落度を申立、暇遣し候か、假令律義にても下知行屆かざる人物を支配役に居候か、己が身よりのもののみ立身致させ、他所より參り候人は其沙汰に不レ及しらぬ體にて差置候か、其外依怙贔屓の沙汰を以て人の理を非に言掠、己が惡を善と僞り候か、何事によらず我のみ合點いたし候へば相濟候か、心得一存を以差略いたし示談に及ざるか、我々共の氣に叶ひたるもの左程の働と申立候儀もこれなきに、心附等いたし遣し、又は氣に叶ざる者格別の働きこれあり候ても存ぜざる風情にて、心附等之沙汰に及ばざるか、各方より申出され候儀是非も相糺さず、我意を以取用ひ申さゞるか、勤べき所の役目をおろそかにいたし今日を徒に送り候か、出入方の衆中へ依怙の取扱致候か、御定を相守らず他所へ時貸等いたし遣し候か、我々共出勤之時刻日々遲滯いたし、夜分迚も歸宅怠候か、日永之節毎日晝寢等致候か、折々虚病作病を搆へ出店不レ致候か、晝之内私用を以度々他出いたし店を明申候か、店表は儉約と申立吝嗇の取計ひいたし、我々宿元にては奢りを究め遊興がましき取沙汰これあるか、日々食事いたし候節菜好いたし候か、臺

所男共より追從致食物等宿元へ差遣し候か、又は我々共より申出し候て、不時之食物等宿元へ運ばせ候か、代呂物を始紙油多葉粉其外帳面へ相記さず、斷なく宿元へ持參いたし候か、大酒を好み身持放埓に在之候か、貴度金銀を遣ひ拾借過銀餘分いたし候か、女色にふけり夜泊り抔致候風聞在之候か、華美を好み衣服を飾り家法に物數寄致候か、不用之諸道具等求候か、前文之趣我々共身の行狀弁取計ひ方おいて相違之儀在之候か、右之外にも相心得がたき事ども有之候はゞ、誰にても心あらん人は異見相加へ見られ候樣に賴入存候、愚盲の我々共故折にふれ時に隨ひ候ては、各方の氣にさからひ腹立いたし候儀もこれあるべきや、夫迄も一旦の事のみにて、野心に存じ恨み申所存毛頭無之候間、假令左樣之儀在之候共懲申されず候て、遠慮なく申談見らるべく候、我々共後も成べき丈は相愼候樣に可致候、若又面談にて申難く被存候はゞ、書面に認候て差越され候樣賴入存候、尤名前認候ては如何と被存候はゞ無名にて不苦候間、頭役中迄被指出候て夫より我々共へ御渡可被成候、乍去如斯相認候迚も我々共身持勤方のみ宜いたし、立身出世相願ひ候存念聊無之、只々上下和順いたし水魚の思ひに住し候時は、自然と家格備亂れず候得ば、御店萬代不易之瑞相、商内繁昌の基ほんならん事疑ひ有間鋪候、一統に此趣能々味ひ被申候て、同心被致候樣に希候事に候

一　町家商人と申者は祿之無之者ゆへ、年貢知行等を何方よりも貢獻候方無之、唯日々の商内いたし候所より、おのづから賣德と申もの顯れ候て、其利潤を以て家内相續致候事に候、依之商内高倍增

在レ之時は、右之潤も餘分出候ゆへ、衣類食物家居之造作、其外心附等迄も家法之通行はれ候事に候、又商内高減少之節は利德の顯れ薄候得ば、右に准じ衣食住の三ツを始とし、何事に至る迄家法より引下げず候ては、何を以てか安泰之相續致べきや、然れば商人の家において定式といたす事は、賣高加增より外は在レ之間敷儀に候、其增減によつて年々歲々臨氣應變の取計ひ致候儀規矩と存じられ候處、商高の過不及に拘らず累年之式を建置候事は、相續の基を失ひ候道理かと存候、畢竟は己の身贔屓よりして忠節の心もなく、去年今年の見競致し衣食心付方の劣たるを不足に存じ、勝たるをも御恩と存ぜず、冥加を知らざるの至り恐れ耻べき事に候、假令御恩を存ざる人に於ても、商内繁昌不レ致候ては例年の定規相違候事を辨へ、一向に商内に打入り候て心の奢をしりぞけ、今日雨霜に濡ず炎暑寒氣を厭ひ飢渴の愁を除き候より外、此上之儀あるまじきと存らるべく候、勿論ヶ樣之儀は無レ之事に候得ば假令ば家曲み壁落候とても起臥いたす所在レ之候得ば能と心得、麁布綿服を着し候ても肌身を隱し候へば宜と存じ、麁飯麁菜を食し候共舌三寸のうちのみにて、腹中へ入候ては麁美の差別是なしと中心持にて、どこまでも不足を遠ざけ候やう致候時は、則足事を知るの道理にて、自然と天の御惠みにも相叶家內安泰の相續いたし、銘々の冥加も宜しかるべき事に候

一　商内之儀は多少を撰ざる事に候得ども、餘分の商内は自然と精も入、會釋方も氣を付候に付、取はづしも無レ之ものに候へども、兎角少分之商內をば麁略にいたし、身にしみ申さゞるものにて候得ば、

商人の第一は少分の商ひを大切にいたし候儀肝要と被存候、其譯は商文の通り商家の儀は、何方よりも貢被見候と申儀無之ゆへ、纔之小賣商ひにても家内大勢相續之助力に候、其根本と申せば、人は命程大切成ものは無之、命終候てはいかなる望有之とも益なく立身出世も何にかはせん、然ば我命を御養ひ被下候基立に候間、其御恩の程を能々被存候て、多少の差別いたすべき儀は無之候、世俗之諺にも、微塵積で山となると申ごとく、日々小賣高を以て半季中積り上候時は廣大之賣高に相成候、左候へばおろそかに可致筈は無之候處、兎角人は差當り候所のみに目を付候ものゆへ、第一商内の少分なるを侮り、第二には御使の女中衆子供衆とのみ見下し候儀在之物に付、思はずして會釋方も麁抹に相成候事も是あるべきやに候、萬事之儀我身に引請ず候ては相知れざるものに候、先銘々調物いたし候節、外方へ參り候ても餘分の買もの致候時は、鼻の程うごめかし候氣味合にて、かさだかにて無理成直切等もいたし候へ共、少分の調物いたし候節は自ら卑下致候心持にて、先方の仕向をかせに相成申物に候、然れども會釋方挨拶の善惡は歸宅之上にて批判いたす事に候、其ごとく他所より御買物に御出被下候御方迚も、御心持に何れ御替り是なきもの候へば、是非此方の取扱方とても、善惡につけ御風聽に預り申ものに候ゆへ、兎角世間之御評判宜やうに仕向度事に候、畢竟は惣中今日の露命を繋候因に候へば、聊の御買物に御出被下候御方樣迚も、私の命を御養被下候爲に御出被下候と、御恩之程を内心に深く存じ候て、難有御座候と御禮いたし御返し申候樣にいたし候へば、自然と

麁略の御取扱も仕らず不作法なる儀も出來不ㇾ致候に付、先樣御氣請能御取沙汰も宜御風聽に預り候ゆへ、商内の大小を論ぜず叮嚀に平等の御會釋被ㇾ致、何事によらず御店の御名目に瑾は附ざるや、御暖簾を穢し候儀も是なきかと、夫のみ一統こゝろに被ㇾ掛候て、萬端に心配被ㇾ致度事に候

一　父母に孝順を盡し主君に忠節を勵み候事は、人たるの道にして、車の兩輪のごとく鳥の兩翅に譬て、一方闕候ては相濟ざる事に候、既に片輪車には通用不ㇾ致、車の所詮無ㇾ之候、人として忠孝の兩度を失ひ候時は鳥の翅なきがごとくにて、性を請たる甲斐是なく候、此道理は申さず迚も銘々合點の事に候へ共、知れたる道も不斷歩行いたさず候ては、草生茂りて道を失ひ候物に付、君父の御恩の程を露計書記し候、抑我身出生の根元は、父の白骨と母の赤肉と和合いたし、始て形顯れ母の胎内に宿り候、尤懷姙の内とても夫々の式在ㇾ之、食物を始寢臥起居に至る迄大かたならぬ心遣ひにて、或は惱み或は苦しみ、漸々十月に及び出産有ㇾ之候所、夜具襁褓等迄支度被㆓成置㆒候て、晝夜母の懷にいだかれ、二便を洩してもむさくも思召さず、手づから取始末被ㇾ下候迄乳味を戴き、其上病に犯れ候時は、父母ともに終夜寢玉はずして御看病被ㇾ下、針灸藥の御手當に預り衣食の御養育によつて段々成長いたし候に付ても、人中へ出候ても恥しからぬ樣にと筆道を始、諸藝御學ばせ下され、當御店へ之御縁を求め御奉公に被㆓差出㆒被ㇾ下候處、年月を經に隨ひ、又は年功を積み立身いたすにまかせ候ても、いつも幼稚のごとく思召、父之方にては御店之御家法を背かず、身放埓に相ならず不法なる儀も不ㇾ仕、御

奉公を大切に相勤候やう朝夕思召被ㇾ下、母の方にては風邪流行候に付ても相煩は致さゞるや、灸治等いたし候て善悪にも使れず候か、大酒不身持等いたし病身にも相ならず候やと、實に月日の御光りを拜せざる日は在ㇾ之といへども、我子の事を思召ざる日は是なく候、如ㇾ斯認候時は父母の思召異なるやうに相聞へ候得共、豢る處の御慈悲は同じ事に候、然るに十二三才より當御店へ罷出候處、御主君様は京都に御座成せられ候へども、御名代として夫々の役人を御附御世話被ㇾ下候に付、作法物言等まで上下の差別を御教被ㇾ下、夜るの寢臥の御世話迄心附被ㇾ下、冬の寒夜は夜具蒲團を以御勞り被ㇾ下、夏の温夜は蚊帳を以御凌がせ被ㇾ下、頭上の髮月代よりして身にまとふ所の四季の衣服凍患を除く脚下の足袋、晴雨の履ものに至迄、一ッとして、御主君様の御恩にあらざる事是なく、別て日々三度宛戴候食物は、父母より受得たる所の命を御やしなひ被ㇾ下候根本に候、然るをこゝろなき人は奉公いたし候に付、年々定銀并に衣服食物等を御あてがひ被ㇾ下候様に存、己が勤候を却て御主君様へ恩にかけ候氣味合是あるものに候間、一衣一飯を戴候ても冥加をも存ぜず、天道の御罰を蒙る事も恐ざる事に候、先奉公と申文字は公に奉ると讀候、是は何を公に奉るなれば、我身を公に奉り候、尤我身體髮膚は父母より預りものに候、其預りものを御主君様へ捧奉り候事ゆへ、我物と申譯は無ㇾ之候處、己がものと心得居候に付、得手勝手をいたし、或は不足を申、或は氣随氣儘をいたし、或は身持放埒に相成、或は大酒大食を致候て身養生致さず、或引込居候程之病氣にも是なきに御奉公を闕、あるひは店用に

付他出いたし候ても、道より私用を達し肝心の店用は身に染み申さず、見世に詰居候儀を退屈に存じ、或は物に徇候て我役日を等閑にいたし候は、皆是奉公の道を取失ひ居候理りに候、畢竟は御主君様へ差上奉る我身に候ゆへ、頑是なき頃より今日迄御勞りに預り、四季には灸治等いたし候樣御世話被㆑下、相煩ひ候得ば醫療加へられ御介抱成下され、殊に〻樣之御店に相勤候事ゆへ、銘々宿元にて食し申さざる方も在㆑之候、山海の珍味をも戴かせ被㆑下、幷に他家に勝れ五節句に休息を致候やうに一日宛の御暇被㆑下、別して年褒美等の御心附下し置れ、其上年數に隨ひ休息とり等迄被㆓仰付㆒、冥加之程難㆑有奉㆑存候得ば感涙肝に銘じ、心に浮ぶ所の九牛の一毛を筆に顯し候、此餘は銘々身に引請られ候處にて、御恩之程感察いたさるべく候、因㆑玆童子敎にも父の恩は高き山須彌山猶低し、母の恩は深き海滄溟海却て淺しと譬られ、纔十一二歲まで御撫育に預り御恩すら斯のごとし、況んや二十ヶ年三拾ヶ年來御厚恩の蒙り候事何に喩へ申べきや、去るによつて喪服の俗令にも、主君の忌服は、忠義によりては父母同じ事たるべしと在㆑之候へば、何れ忠孝は偏廢しがたき事に候、既に武家方は四民の頭に立せられる程の儀在㆑之、御主君樣へ身命を差上られ候驗にや、戰場に臨んでは命をも惜ませられず、忠義によつては親をも不㆑顧候、いかに身は士商の隔て是あるといへども、心におひては忠節違は在㆑之間舖事と被㆑存候へば、責ては命を捨候程の儀は仕らずとも、我身は御主君樣へ差上奉り候ものと心得、不法不忠なる儀仕らず、商內之道に打入り御恩之程を厚く存じ候はゞ、我身の程も大切に相成不養生も不㆑致候

時は、自から忠孝の道理に相叶ひ申べく候、假令兩親居まさぬ人たりとも草葉の蔭にても滿足に思召
御歡に候得ば、何よりの追善と被レ存候、必しも君々たらずとも臣々たらずば有べからずと心得られ
候て、忠節を相勵まれ候儀肝要に存候

一　夫日夜行状勤方工夫被レ致候儀、役目とのみに被二心得一候人は在レ之間鋪候得ども、如二前書一銘々
御厚恩蒙り居候事ゆへ爲二冥加一と存じ、古來より御主君樣より御建被レ置候ごとく、諸品仕入元其國々
産物出場所向を相考へ、相庭下直の時分島模樣風合遂二吟味一下直に調入、代呂物取扱第一に心掛專用
之事、其上見世御買人樣方勿論、先々より御注文仰被レ下候節、手早く御用向を相辨じ等閑に不レ致、
御誂もの染仕立等被二仰下一候はゞ念に念入、少しも相違無レ之樣出來上り悉く相改、又は少分の商内を
麁略に不レ致、諸事實（まこと）を盡し、地性宜所見繕ひ下直に買上る事を元と在度候事、左候時は自と賣高も相當
代呂物の取扱麁抹にも難レ成、揉損じ等も少く是商人の根元也、然るに厚き御恩をも不レ存人は唯物事役
目のごとく存じ、手足あるべかゝりに動し候へば宜ものと相心得、賣物の善惡にも差別なく、先々樣
より御用向申參候ても左のみ心に留ず、浮世噺雜談或は自分身の廻りに心を奪れしゆへ、商内の妙と
申事難レ顯、既にいにしへ左甚五郎が彫候鷄は時を造り、後藤祐乘が作の鯉は水中にて動き、狩野古法眼
が馬の畫は野に出、艸を喰ふなどゝ申事は、其職分の妙と申儀にては在レ之間鋪哉、此人迚も人並に替
り無レ之何事によらず如レ斯の妙出候と申は、其職分に一向入り候より外有レ之間鋪なり、然ば商内は勿

論其外諸用に至迄夫々の承り役儀の工夫專にして、心をゆだね他へ氣を散らさず、念なき時は其實妙相あらはれ不ㇾ申といふ事在間敷、然る時は世間賣物と先々樣にて御見競に相成候時は、唐の代呂物格別下直に保等も能、島模樣迚も宜、德用と萬人之御目留り意に叶ひ候時は普く御評判を請、則其妙德の印にて天性として、聲なふ日每に御人足繁く御用向彌增、誠に掌をさすがごとくに候、是全商人の誠意とやいはん、然ば店繁榮の有無は家内惣中の和熟一心より外に目留る所あるまじく候、此趣分て頭役の銘銘得と勘考いたされ、萬事惡敷をはぶき實意に打入り被ㇾ申度事に候

但

前段の一條每以熟々承知之儀に候へ共、走る馬にも鞭を打とやいはんと書記所也

一　人は萬物の主なれば、禽獸魚蟲の類にすぐれたる儀無ㇾ之候ては、人と生れたる所詮なく候、されば大學の序に天より生民を降す時は、則既にこれに與ふるに、仁義禮智の性を以てせずといふ事あらじとあり、然ば仁義禮智の五常は人體に備り居候得ども、其氣質の受たる事或は齊しき事不ㇾ能して、聖賢の君は生れながらにして五常の道を行ひ給ふ、又今時我等ごときの者は下根下智なるによつて、教に隨ひて五常の道備りたる事を知るといへども勤る事を知らず、然れども行ざる時は禽獸木石に異ならずして人たるの益なし、依ㇾ之承り得たる所の有增を書記し候、先仁とはいつくしみの心深く、義とは今日の人たる儀を忘れず、禮は上下其禮を失はず、萬事に涉りて貴賤の差別を明らめ、少しも其理に

違はず事を辨へしる所、則智なり、信は五常のくさびにて假令ば扇の要のごとくなり、要めはなれ候ては扇の仁たる風を出さゞるがごとくに候、しかしながら此信と申候は容易に相知れがたき事に候間、知識に值遇被致接得あらるべき事に候、倚有之道理に候時は、仁義禮智の四ッは別々の樣に相聞へ候へども、畢竟は仁の一道にこもり候、勿論仁はいつくしむ所に候へ共慈愛のみ限り不申、忠節を勵候も、孝順を盡し候も、正直を守り候も、禮敬を行ひ候も、義理を重んじ候も、智惠明達いたし候も、堪忍を保候も皆是仁の主どる所に候、取譯上に立候人は、仁の道を專ら守り不申候ては下たる者之難儀出來候間、能々心掛可有事に候、假ば未役儀に至らざる人上たる人の執行ひの是非を考へ、其非なる所の批判をなし、平日おもふやうは我役儀を蒙り候はゞ、無理なく依怙の取計ひいたすまじくなど〻申居候處、其役に至るや否や志忽ち替り、我役儀の權威におごり、下たる者の理をいひ掠め、人の志をそこなひ、御店の不爲をも不顧、前々我見聞しおきたる所の人の舊惡を申出し科に陷し候儀など、皆人欲の私にして不仁之至りとや申べく候、是等は慈愛の心これなきゆへに、これによつて萬事非道の取計ひ方致さず、邪正を正し仁德に服し候やう仕向候時は、惡心これあるものも志を改め、御店の冥加をぞんじ忠節を勵候事に候、扨又上たる人は下たる者の得手不得手を聞辨いたし、役儀を申付候事仁の道に候、たとへば柳の枝に梅の花を咲せ、松の木に櫻の花を咲せ候儀は出來不致候、人の用ひやうもそのごとく、人には生質請得たる所の德と申もの有之候へば梅は梅なり櫻は櫻なりの役儀を申付す

候ては差支出來申ものに候、何れ無益の人は是なきものに候へ共、上に通ずる者と下に達する者との差別是有候得ば、其器量を考へ用ひ可ㇾ申事に候、既に楠正成千早城において泣男を抱へられ候も、其德を考へられて一途に立られ候へば、取捨候者とては有ㇾ之間舗候、尤日々若者子供等召仕心持にも渉り申べく候、假ば拾貫目の石を持候人に、貳拾貫目の石を爲ㇾ持候ては、力に不ㇾ及候ゆへ無理と申ものに候、又は貳拾貫目の石を持候人に、拾貫目の石を爲ㇾ持候はゞ是亦其力量を考へざる事に候得ば、人々力丈けの事をあてがい度事に候、下たる人も此旨を辨へられて、我力量より少しなりとも重き品を持べきと心被ㇾ掛候得ば、終には其願成就いたすべき事に候、夫に付己より後輩の人役儀等蒙り候ても、決して遺恨に存じ候儀これあるまじき事に候、かやうの所に仁不仁の違有ㇾ之候事に候、又智恵明らかに達し候理にも叶申べき儀と存じ候へば、疾と工夫有度事に候、偖又禮敬を盡し候と申儀は、己より壹人たりとも上たる人をば親の如く兄のごとく敬ひ、用答問談之節とても、跪き候て言葉を改挨拶いたし、又己より下たる人をば弟のごとく子のごとく慈憐いたし、言葉を和らげ整なく敎へ導き申べき事に候、仍て狹き所などにて上下行合候事有ㇾ之候共、貴用にて急候はゞ下の者をも先へ通し候樣心掛候こそ謙退の志とも申べく候、其外食事の節膳に付候か、又は風呂等へ入候砌も互に斟酌のこゝろざしを發し辭宜合有ㇾ之候こそ、禮義正しく敬を盡し候共申べく候、鳩すら三枝の禮と申儀是あり、親鳥には三枝謙候て禮をなし候との事に候ゆへ、鳥類にも劣り候振舞無ㇾ之樣心掛有べき事に候、將又正

直を守り候事は横なる事は横といたし、堅なる事は堅と致候儀正しく直とは申候、少しにてもゆがみ候て人欲の私を加へ候ては、正直と申儀に難〻叶候、尤不正直とは跡より顕るゝも知らず、虚言偽を語り候のみには限り申さず、代呂物を始め諸道具等取扱候ても、なげやりにいたし跡の始末も致置ず候か、又は年功によつて夫々の役儀被 仰付候迄、諸所より音信等是有候を我役徳とのみ相心得、支配人には扶持に及はざるか、又は費おとし、四端等取集置候て自分之ものと心得候儀、皆是正しく直と申儀を取失ひいつの間にかゆがみ居候、かやうなる微少の所より改めず候ては、大なる不正直も相譯らざる物に候、偶に己か身に付候は同じ事に候へども、届候と不沙汰にはいたし候との一念の上にて、正直不正直の差別これ有、亦義を守り候道理にも叶申べき事に候、既に古語にも渇しても盗泉の水を呑ずと在之候は、孔子はいかやうに喉のかわき候事あるとも、盗人の家の井戸の水をすら汲ては呑まはずとの事に候へば、古今隔なりは是有とも銘々の本心において賢愚の違ひ無〻之候へども、かやうの道理を辨へ候て義理を重じ候事第一と存られ候、次に堪忍を保ち候と申事は、常に怠りなく心掛候が肝要と存られ候、先堪忍の二字はこらへこらゆると讀候て、刄の下に居り候ても動ぜぬ心持をこらゆるとは申候、それは如何様なる所と申せば、今日迄堪忍致候へ共、もはや堪忍ならぬと申所をこらゆる場所に候、其所を守らず候ては堪忍と申所も是なく候、皆堪忍袋を破り候、假令十の内一二やぶれ候へば、千日に刈溜め候萱を一時に燒亡し候道理にて、身も修らず家も斉はず候、則堪忍を守る時は仁義禮智

の五常に叶候間、家も治り可ㇾ申筈にて候、然るに此堪忍是なきゆへ喧嘩口論をなし疵を蒙り命を失ひ、或は家の掟を守らず上たる人の下知を背き、終には其身も難澁に及び候事、皆堪らへ忍び候心是なきゆへの事に候、畢竟堪忍を守り候も仁の主どる所に候へば、五常の道闕候はゞ此身に災難も來るべき事にて候、且亦上たる人は下たる者と樂を同じくする事を心がけず候ては、下に恨み出來いたすものに候、下に恨在ㇾ之時は自ら家亂れ候ものに候、偖下と樂を同くすると申に付て、衣類等は上下夫々の格式これ有候へば、破壞いたす事には是なく候、夜の具等上たる人のみ暖に着し下の寒苦をも思はざるか、食物等も上達候人計美食を好み下には麁食をあてがひ候など、上下の樂み同じからざるの類ひに候、餘は是になぞらへて分別可ㇾ被ㇾ致候、偖又三種の神器と申は我朝の神寶にして、神璽は神の印とて正直を以て神璽と申候、則正直の頭に神やどり候へば、祈らずとても神明の應護有ㇾ之候、寶劍は村雲の劍とて慈悲を以て寶劍と申候、則慈悲を施候得ば七難八苦の惡魔も悉く切拂ひ申候、内侍所は八咫の鏡にて智惠以て内侍所と申候、則智惠明達いたし候得ば向ふ所の人の心移り候ゆへ、自然と其志を破り申さず候、依ㇾ之日の本の大寶にして國家を治るも、此三種の神徳にあらずんば穩ならず候、然ば仁は萬事の根元たる事明らかに候へば、何卒仁の道にたがひ申さず候樣いたし度事に候、此外は粗略いたし候

一　四民の上において心掛べきの作業といふは、士は武術の道、農は植刈の考、工は造立の企て、商

は算筆の嗜みこれなきときは其[illegible]きものに有之候、依之商人之儀は算術を専ら心掛らるべき事に候、算勘未熟に候へば商ひの道闇き道理に候ゆへ、行届ざる所に思ひよらざる損失もこれあるものに候、殊に算筆不達者に候へば、先様の御前などにて算用違等在之時は、其人も恥辱の様に可被存候、又御店の御外聞にも拘り候事、出来申間候に候ゆへ、大様に心得られ候ては相違かと存られ候、人は恥と申事を存ぜず候ては木石に替る所なく候、恥辱を存じ候迄にて、萬物之司と申人とは生れたる甲斐有之候、勿論[illegible]席など引下り候て後輩の人の下知を請候か、或は下輩の人に對し非道なる儀を申出し、却て理に伏し候抔申儀は恥辱の様に聞へ候へども、時宜に應じ候ては違て恥と申程の儀とも存られず候得ども、唯商人の算筆未熟なるほど大なる恥はこれなきかと被存候、兎角眼に見へざる所の恥辱を[illegible]いたし候が弌の事に候、筆道迚も同じにて世上に名を弘るほどの儀は及びがたく候へ共、他人の一覧に相成候ても、恥かしからぬ程は習學致すべき事に候、又宿元抔へ書面遣し候にも手跡見事に候へば、父母にも嘸満足に思召べき所、いかにも筆法も苦しき文字の居所をも存ぜず、誤字等を認遣し候ときは、御心の内にて定て嘆はしく被思召べき事と存られ候、然ば手跡の嗜宜ときは則孝の道にもあたり、亦御店の御用に相立候得ば忠義の理にも契ひ、且は生涯其身に付候徳に相成事に候へば、より〳〵心がけあるべき筈に候處、休夜の折節など無益の軍書并繪草紙等に暇をついやし　圍碁双六等にあたら夜を更し候事は有之まじき儀と被存候、既に徒然草にも圍碁双六好みてあかし暮す

人は、四重五逆にもまさされる惡事とに思ふとあれば、道を守れる人の好ものとは存られず候、亦論語にも行餘力ある時は文を學べとの教に候へば、銘々勤功を積候て其術に達候上にては、何事も心任せにて然るべきと存候、必しも一概に心得られ候事にも無レ之候、然共商人の道を失ひ申されぬ程に、萬事心掛有度ものに候

一　御式目に內證の備亂れ候ては、商內等も薄く相成、夫に隨ひ勘定出來申さず候との御儀は、一統合點はいたし居られ候事に候へ共、不斷此趣心底に深く貯へ居申さず候ては、君父の御恩も忘却いたし、いつとなく家備混雜いたし候儀も出來申ものに在レ之候、先內證の備亂れしと申は、上を敬ふ心なく下を憐む心薄く、我意を募、私欲を搆へ、佞奸の志是ある時は上下和熟いたさず候故、商內の道も身に染み申さず、自ら目錄尻を不勘定に相成事に候、然れば銘々の身の上も、天命に背き候科によりて御暇被二差出一候時は、其身も難澁に及び、剩父母にも辛勞相掛、不忠不孝の名を取、行末迄も安隱に渡世いたし候儀も覺束なき事と被レ存候へば、右之患を遁れ候やうに正路に相勤申され度候、偖正路の勤方はいたし候に付、上を敬ふと申は己より一人たりとも上達候人をば、親のごとく敬ひ禮義正しく挨拶等叮嚀に、假にも卑賤の時行言葉等を用ず、上よりの下知を背かず、一言たりとも言葉がへしいたさず、志謙り候を要とす、下を憐と申儀は我より以下の人をば弟の如く慈しみ、心得違ひの筋も在レ之候はゞ內々異見を加へ、あしき道へ立入不レ申樣に心附致遣し、御主君樣の大切成儀を敎導き、

餘念なく奉公に打はまり、立身爲ゝ致候やう引立遣し候を第一とす、又我意を募ると申事は御主君樣の御惠みによつて立身いたし候儀を打わすれ、我年功の働きによりて立登り候と相心得、身勝手のみ申立、萬事を私に取計ひ、あるひは朝寢晝寢をいたし大酒を好み、別して御定日之外私にゆるして酒を呑、同じ肴迄も御定を用ひず、我好處に隨ひ下男の勞するをも厭はず手重き儀どもも申附、いつとなく御定の如く申通じ定例を改替候儀、皆是氣隨氣儘の振舞にして、家備亂れ候基ひと存らるべく候、依ゝ之勤功を積候人程仁義眞退の旨を心中に貯へ候を本とす、又私欲を搆へ候申儀は、當時の人の上においては聊も在ゝ之儀とは存られず候へども、後世の心得にも相成候へば荒增認置候、勿論私欲に付ては身に貪り候欲と、口に貪ぼり候欲と、心に貪候よくと三ッ有ゝ之候、巨細に申せば長文に相成候間干か一貳を書載候、まづ心の欲と申は今日の勤方を大儀に存じ、見世を明候て休息にのみ心によせ居候は、人の眼を掠候ゆへ心の貪にあたり候、殊に衣食につけ亦好色の道なども、我身の分限に及ざる所を悔み、不相應の望を達せんと存付、御主君樣の代呂物を始金錢を掠取候て身にまとひ口に味ひ拵いたし候は、身と口にて貪候欲に有ゝ之間舖哉、然に己壹人不實をなすのみならず、友をかたらひ實體成人迄も終に同道に進め入、大切成御恩を仇にて報ずるの輩、不忠不義の至言語に絶候儕に候へば、如ゝ斯の族在ゝ之においては惣中子供に至るまで、見及び聞およびて次第に早速申通じらるべく候、急度可ゝ申付ゝ事候、歳に内々の備亂れ候は、萬事私欲より發候間、萬一左樣の非有ゝ之時は、君父の御恩の深き事を

存じ出し、速に出路に立歸り被レ申候儀肝要と存候、亦佞奸の志と申事は上に諂ひをなし、我壹人立身を好み下たる人へ非道を申掛、或は人の心を疑ひ、人の仲合よろしきを憎み、其人に向ては褒るといへども、蔭にては貶をなし兩舌を構へて不和に致させ、或は人の立身の妨をいたし、御店の御爲に宜儀をば教へずして、人の落度にならん事のみ企て、人の愁ひを悦び人の歡びを妬みの志これあらば。人たるの道に叶ひがたく候故、是等の人は御店の仇敵とも申べく候、別て御店の備へを亂し候儀、御式目の趣を相守らざるの科有レ之候間、何れ了簡も可レ在レ之儀に候、併ながら立身の妨いたし候と申に付、心得違の筋も出來可レ申かと存候、其譯は銘々出精被レ致候勵も是なきに、年數の重り候のみを申立られ候ては、其理にあたりがたく候間、此段分別いたすべく候、將又私欲を求めず邪佞の志も無レ之人は、先善人の樣にも相聞へ候得ども、上を敬ふ心是なく下を憐む心も薄く、理非も糺さず禮義をも疎にして、強に私の身を勵み候志も無レ之人は、前の私欲佞奸の人よりは勝たる樣に候へ共、御家風在レ之候へば頭分に居べき器とも存ぜず候、是迄も生れ質きに受得たる所に候はゞ致べき方も無レ之候へ共、磨候心持これあらば玉の光も出ざると申儀は有間鋪候、兎角は內證の備へ正しく、商內高賣倍いたし日錄勘定尻宜候へば、惣中一統出精の規模顯れ候事ゆへ、追々御惠の御沙汰有レ之べき儀に候間、末頼母敷被レ存候て無二餘念一勤仕致さるべく候、役人中を始我々どもたりとも非道の取計ひも有レ之、內證の亂れにも及ぶべき事の樣にも被レ存候はゞ、無二遠慮一申聞られ候樣にいたし度候、打捨置れ候ては却

て不恐之至に候間、誰にても當閑に被致候儀有之間舗事に候

一　人は世の盛衰と申儀を辨へず、是に奢りの心も省がたきものに候、盛衰とは一度盛るものは一たび衰ふると申事に候、譬ば春の花の盛なるに春の風にちり、人生れて盛たるは死に臨んで散、家富て奢りに盛なるは終に滅び散る世のありさま、何れも眼にさへぎり耳に觸れ候所に候へば、萬事分限より一際引下げ候心もち肝要と被存候、然る時は御家永久の業疑ひあるまじく候、斯申せばとて我命數萬歳の齢ひを期しがたく候、人の命は風前の燈火のごとくと承り及候へば、久しくたもち申べき此身とも存ぜず候に、おのれに具はらざる財を願ひ、分に應ぜざる望を求め候も無益の事かと存じ候、畢竟は奢りの心より出たる願望に候へば、萬が一も叶ひ申まじき様にも存じられず、人は只心を正敷身を修め、富ても貧しきを忘れずして奢を退け、一己々々の家業を大切に守り、別て朝夕御先祖様の御靈前に跪き御家の繁栄を祈念り候へには、現世も安穏にして當來迚も善所に至るべく候、此外に雜念有之候はゞ銘々出世の妨となり、行末も身貧しく終焉の後とても惡趣に墮獄すべき由に候へば、此段能々思慮いたさるべき事に候

一　君父の御恩は前々のごとくに候得ば、筆紙に盡し難き程難有存候事に候、然るに人は萬物の司にして萬物を遣ひ果し候へ共、如何成ゆへと申儀を不存候、先萬物と申は世界の中にありとあらゆる程の有情非情を申候、此一切の萬物は我一人の爲に出生して、生涯のうち何不自由なく暮し候事、畢竟

は天地の御惠みによつての事に候、然ば天地の御恩之程を深く敬ひ奉るべき事と被ㇾ存候、俗日々否に味ふ所の食物、身にまとふ所の衣服、雨霜を厭ふ所の家居、幷に多葉粉一ぷく鼻紙一枚に至る迄、皆是天地の御惠みにあらずして出生いたす事無ㇾ之候、別て炎暑の節は自然に麻と申もの出生して、暑を凌がせ被ㇾ下候衣服となり、極寒の砌は自然綿と申物出生して、寒さをいとわせ被ㇾ下候衣ふくとなり候儀、能々勘辨いたし候程妙とも不思議とも申計に無ㇾ之儀に候、尤人力を以耕作いたし候事故、豐作凶作の差別を以て價の高下これあるといへども、食を斷候日もなく肌身隱ざる夜も是なく候は、偏に天地の御惠にして廣大深重の御恩に候、此理を辨へ候上は代呂物始として衣類食物諸道具幷に紙一枚に至る迄、麁末にいたさず大切に取扱ひ被ㇾ申候時は、自ら儉約の道理にもあたり天の冥慮に叶ひ被ㇾ申候間、深く敬ひ奉られべき事に候

一　主君に仕へ候ては忠義盡し、父母に隨ひては孝行を勵候事は、三歲の童子迄も存知居候得ども、忠とは如何成意味や、孝とはいか樣の心持や我等においては其味ひを存ぜず、今日迄もむなしく月日を贈り候事淺間舖次第、人と生れたる詮もなく俗々耻入の所に候、されば能々勘考いたし見候へば、忠と云孝と申も眞實の心より外には是あるまじくと存候、其ゆへは御主君樣は大切なるものとまでは存知候得共、眞實の心薄き時は左のみ大切の樣にも存知られず、夫故商內いたし候にも御調被ㇾ下候はゞ賣上申、是迚も代呂物も御意に入らず御求下されず候ても差て殘念とも存ぜず、或は日々の勤方も不

東にて隙をねらひて杙を友となし、亦は大酒を好む人は酒に心を奪はれ萬事に不足のみ申など、何として是等を忠義の仁と申べきや、畢竟は眞實の心薄より發り候事かと存候、然れども右體之儀は各方には御座有まじく候へ共、我々今日迄の行狀書顯すまでに候、乍ㇾ去己すら不行跡にて他の教示無益の事など、嘲り申され候儀は有間じく、都て人を見る事おほきなる不足にて、すでに小人は人に見らる、君子は其獨りを愼と申てかやうの事を承り候ても、我方へ引受候儀肝要とぞんじ候、扨眞實の心と申儀を譬て申さば、明樽へ酒を一盃詰候時は實入在ㇾ之故、一切音はいたさず動し候ても倒れ候事も無ㇾ之、然に右の樽へ酒半分程も入置時は、實入不足ゆへ動し候得ば直樣音いたし候、又右之明樽の儘にて一滴も酒の實入是なき時は、洞故音いたさず候へども少し障りてもこけ廻り候、我々迚も其ごとく酒と申眞實の心にて、此實入厚くして一杯詰居候得ば、忠義一途に凝候ゆへ如何樣なる我意に叶はざる儀有ㇾ之とも、御主君樣の大切なるを忘れやらず候儘、聊も不足がましき事など申出す心もなく、奸佞姦の人ありて彼是惡智惠等勸め候事在ㇾ之とも、一寸も轉ぜずして心の牢籠と申儀は是有間舗、是全く眞實の心充滿いたし居候故にて候、偖又半分入の樽は平日に實入薄きゆへ、萬事に付不足のみ申出し、其虚に乘じ邪成事共勸候者も有ㇾ之時は、直に心を動し候ゆへ音の致候道理に候、次に一向實入これなき明樽と申は、分別もなき人をや申べく候、假令ば水に浮べる瓢のごとく何べんともなく今日を送り、日々御養育を蒙り居候事も身に徹し難ㇾ有とも存ぜざるゆへ、いつも不足の思ひに住し、或時は人

の上を美み亦は氣に叶はざる事是あるに付御暇をも願ふべきとも思ひ候は、皆是眞實の心淺くして洞なる所より發り候不足なれば、何卒實氣を專らにいたし度事に候、然ども我身の上を顧る事出來がたきものゆへ、まづ人の實不實を見て我方へ引請申度候、それにつき三人行ふ時は必我師ありと申儀有之候、譬ば朋友之内三人を見競候て、此人は實情深く何事によらず己を捨て正直を本として相勤られ候と思ひ、亦此人に實情も是有とは存られ候へど、折にふれては我を愛して勤方を疎かにし、御主君樣の御事は大切に存ぜられずと思ひ、又々此人は萬事を投やりにいたし商内向とても身に染ず、誠に實情薄きとは斯のごとき人や申べきと思ひ、此三人を己が行狀の鏡といたし其あしきをば取捨て毛頭も用ひず、其善をば我身の手本となし一向に習學致候時は、終には堪能の位に至らずといふ事なく、是則眞實の心に基づくの道たるべく候得ば、假令善惡の友に交る共此心がけを忘却致さゞる時は、己が心の鏡曇らざるゆへ、勸善懲惡の理にも叶ひ、亡跡とても忠義の名も殘り可申事と存候

一　五穀實のる時は則伏、小人滿る時は則仰と申事は、稻は實のるに隨ひてうつむき、人は實のいるに任せて仰ぐといふ事にて、誰々も存知居り候儀なれど己が身の上と存ぜざるゆへ謙る事は打忘れ、自然と我をたかぶるやうに相成候、先人に實の入と申は身上の富る事のみにてこれなく、銘々年功に隨ひて御役儀等結構に仰付られ候處、其德の至らざる内は朋友は勿論出入方の衆中ども未心易だて退ざるゆへ、自然と人も敬ひごゝろ薄きものに候處、己計役儀の權柄に誇り以下の人をば眼下に見降し、

剰へ御督意方へ對しても左之心持出し候ゆへ、尊敬の禮も薄く、或は眼上の仁などへも不禮等粗有之是儀は、皆仰と申理に相聞へ候、全體我を高るは人を侮るの道理ゆへ、君子は必其獨を愼むとも仰られたれば、己が方を謙り候へば自ら人も敬ひ申べき筈に候、其儀いかゞぞなれば銘々の本心は本鏡のごとくにして、曇霞なき明らかなる物ゆへ、白きものをかざせば白く移り、黒き物をかざせば黒く移るごとくにて、悦びをうつせば笑ひ、怒りを移せば腹立、歎ひをうつせば是非へり下り申さねば相ならず候ゆへ、何事によらず我方を愼み候事肝要と存候、併斯申時は役儀の規模も是なきやうに相聞へ、却て以下の人にも侮られ候やうにも存られ候へども、右之鏡の德在之故中々以左樣なる儀は無之候、ましてや其德の具はりたる人においては申に及ばざる儀、さるによつて理非邪正をも相糺さゞる取計いたし候時は、下たり共下知相用ひ申さゞる儀は、先方に鏡の德これあるゆへに候、然れば上に立候人は下に思の出來申さぬ樣に慈悲を專らに心掛申さずしては、上下和順にいたさず候ゆへ、家も修まらずして銘々の心の内も穩かならず辛勞のみ多ものゆへ、只慈悲の心を本といたすべき事に候、勿論非理法權天と申儀も在之、時宜に應じては權威を以て取計ひ申さねば相濟まじき儀もあるべきや、其譯は先非と申事は他の人より非道の儀を申立られ候とも、理を以て咎、邪正を糺し候時は申披き出來いたし候、然ども理と申ものには身勝手是有物に候、譬て申さば親に孝行なる人水飴を見て年老たる親に進らせ候ても、歯にも障らずして腹内へ入たるとも御藥にもなるべきと孝心の思ひを增し、亦同じ水

飴を見て盗する人の申方は、夜盗に忍び入る時戸障子の溝に流し候はゞ、音いたさずして宜かるべきと彌盗する心を生ごとく、何れ我勝手の理を拵候ものゆへ、假令いかやうの理屈申出候ものゝ在レ之とも、正理にあらずして法に背き候はゞ、法を以てとり捌いたすべき事に候、法と申は則掟の事に候得ども、掟をも破り候時は權威を用ひずしては治らざる儀もあるべきや、されども權は一旦の道具にて畢竟は天の一字に止り申べく、則天は一切萬物を惠む所の慈悲の本源ゆへ、是に越たる儀は有間舖と存候、殊に古人も四海兄弟と被レ仰たれば、此御言葉を以て考へ候ときは、隔べき人もなく候へば、則四海兄弟たる事を能と底意に納置、自他の隔いたすまじく候、是は何故に兄弟ぞと申せば、人は天下の靈物と申て天地の性力を以出生いたしたる我々なれば、天地は則我父母なり、此所に至ては、天地同根の兄弟故、尊卑の差別是なき筈に候へども、請る所の宿因に隨つて高位高官の御方となり、或は匹夫下賤の身の上と生れ來り、此形體に見る所の今日の行狀は、是以て天命にして私に拵たるものにあらざれば、何事によらず我意を募候ては天命に背き申べく候、天命に隨はざる時は自然と凶事も來るものに候得ども、其業報に遲速輕重是あるによつて、我方にては思ひ合はせたる儀も無レ之といへども、身に難澁來るか心に苦勞是有は、皆天の然らしむる所にて則天罰を蒙る科にて、既に中庸にも其睹ざる所を戒愼、其聞ざる處を恐懼と申事も、天命に背ざる趣を被レ仰ける外は有間舖と存じ候、是に依て四海兄弟たる事を明らめ、我より已下の人をば天地を惠む如く慈しみ、己より上たる人をば地の天を尊むご

とく敬ひ、平生に我をへり下り候樣之愼み肝要と存候

一萬之事見聞いたすにつけ損德の在之儀と承り候へば、なに事によらず損を嫌ひ德を好む我々ゆへ、同じ事に候はゞ德の方を心掛申度事と存じ候、先諸木の花咲實となり候といたづらに眺る時は、花の可否を論じ實の善惡のみを沙汰いたし候へども、花の盛なるにつけ實の熟したるにつけても、我方へ引請候を德をつむとも申べきや、偖花といひ實といふも銘々日々の行狀に在之、則我身の花と申は上下おしなべて平生の勤方之事にて、商內之差略其外萬事の取計ひ迄も、我を立人前のみ飾り候は見事に花の咲と申にて、既に誰々も賞翫いたし候、然れ共花のみにして實のとまらざるは無下に殘惜く、實と申は銘々の眞實の心の事にて、此實情是なきは花は咲候得共其際ばかりにて仇に散果候道理ゆへ、何卒實となり候樣にいたし度候、御主君樣へ召仕はるゝはいふに不及、親子兄弟朋友の中迄も、花ばかりにては美しきまでにて實情是なきゆへ、折には喧嘩口論をなしいつとなく不和になり、果は義絕抔いたし候儀出來致候、亦日々の賣買にて我發明を以て追從のみ申か、或は賣拔買ばめ等いたし候は、花ばかりにて實の無之ゆへに、終には天道の御憎しみを蒙り、商內衰微の基と可相成候へば此道理を考へ、先樣之御爲に相ならざる品等は其御斷申上置、重て不束に思召めさゞるやうに實儀を以て商內いたし、其外親子兄弟朋友の交りにも表裏輕薄を好まず、眞實心を以て會釋可申事と存候、然る時は天の冥慮に相叶ひ、銘々安穩に相續致べき儀に候、右花實の理いさゝか書顯し候、偖亦世間に御

主人へ不忠にして殺害なし、或は父母に孝ならずして刄傷に及びたる人抔、風聞承り其取沙汰のみいたし居候はいたづら事かと存じ候、是亦我身の方へ引請候はゞ自德を積とも可ㇾ申哉、其故は我々迚もケ樣の御店に御召仕被ㇾ下候へばこそ、何不自由なく相勤居候ゆへ差たる不足を申出さず、御主君樣へ敵對候根性も是なく候得共、萬一無理邪まなる儀をも仰出され候はゞ、定て右の人に少しも志の替る儀はあるまじく所、御慈悲深き御店に相勤居候ゆへそ、私の仕合と御厚恩之程難ㇾ有ぞんじ、我身へ立歸り候事此身の德にも可ㇾ相成、將又御主君樣へ忠節を勵み父母へ孝順を盡し候に付、天之冥感に預り、御公儀樣より御褒美等頂戴仕候樣子見聞いたし、右評判のみいたし居候事、誠に他家の財をかぞふるごとく無益之儀と存候、これ以て己が方へ引請候時は、偖々如何なる宿植多善の仁やらん、御公儀樣の御聞に達し御褒美迄頂戴被致候忠孝の仁さへ是ある中に、不忠不實之我等ごときの者を殘る所もなく御手當に置れ、御召仕被ㇾ下候事の難ㇾ有やと、御厚恩の程を存じ出し、實情を以相勤候時は是に過たる陰德は是あるまじくと存候、此外一切の得失掛て算へがたく、餘は是になぞらへて思慮いたさるべく候

一　世の中に善く人の意ほど怖しく、頼みすくなきものは有ㇾ之まじく、さるによつて昨日迄は味方となりて諫し人も、今日は敵と替りて譏し、今朝は愛して與たる人も夕べには護りて惜み、先迄は善心と見えて人をいたわりしも、後には惡心と變じて人を害し、終には我身までも亡す類ひまゝ多し、是

はゞにゆへになれば、我意をたてのみにいたし怖しきものと知ざるゆへの咎かとぞんじ候、否自我は善
心なるものと思ふは過なるかと覺候、何商家々においては欲心是なきかと存候處、金銀衣食等の我身
に付候所得はひたすら好候へ共、我心の寶となる道の教などを好候欲心は稀なる故、畢竟にも我
身の爲に相成事拵承り候にも氣に進み見なきゆへ、十度の内に漸一言も我意に徹し候事もあるべきや、
假令耳に聞覺へ口に云ならへゐる迚も、心に會得いたさず候ては雖と聞得たるとも中間端哉、既に我
心の悪性なる證據は、何之益にもならざる儀を承り候事は好候ゆへ、或は浮世の雜談又は世間にて盜
なん劍難等に逢し噺など承り候へば、所は何方にて何箇賣いたされ年齢は何歳位の人に有之やなど、
根問葉問ないたし無益の噺を覺し候得共、我身に德の附候方は閑遁しにいたし、兎角裏表の相違是あ
るやうに覺候、是全本善心すくなきゆへの儀かと存られ候、則古人も我等ごときの愚人は背正歸邪まさ
ると被仰たれば、正しき事を嫌ひ邪なる儀を好むが凡俗の常にて、夫ゆへ禮義を窮屈と嫌ひ、惣じて
氣の詰りたる事は尻込して、兎角自堕落に正しからざる儀を好が身勝手に候、是は何故ぞと申せば本
悪性より發る儀なれば、彌我心は怖しきものと見限り候て、人欲の私を賴まざるが專要とぞんじ候、然
ども性は善なりと申て元來本心においては善悪之差別是なきものにて、譬て申さば白絹のごとくなれ
ども、我好所に隨て色々に染なし候共其にはいかんぞ成ば、同氣相求るの道理にて、色欲を好ものには
人來もて色欲に溺るゝ事を勸め、あるひは名聞利害を好ものには人來て名利に沈ませ、或は無益の噺

舞妓狂言咄し、又は野中の流行言葉、浮世の雜談等を好者には、人來て無益の浮說雜談を噺し、或は邪智を以人を疑ひ物を六ヶ鋪取計ひ候者には、人きたりて物之入組むやうに致させ、或は學を好ものには人來りて書の道理を語り、あるひは道に志の有之ものには人來りて道の教をなし、其外己が好む所によつて心と申物は變化いたし替り安きものゆへ、則白き絹を種々に染替候理に候得共、兎角あしき方に移り染らざるやうに日々夜々に油斷被致間鋪候、古人も心の駒に手綱ゆるすなとも、又は賢よりもかしこきにうつさば、などか移らざらめやとも仰られたるは、生質白きものゆへ此方の染次第にて、何色にも染らずといふ事これなき御教誡と覺へ候、世に賢しき人は善惡不二ゆへ、皆本心の成業と心得候抔申かたも有之よしに候へども、聖賢の御教には左やうの僻事はあるまじきかと存候、善惡不二と申事は、善も惡も形のなき處に至らずしては、不二とは申さゞる樣に承り覺へ候、唯々我意は怖しきものと心得候て、譬ば高き階子へ登るごとく、踏はづし申さば怪我いたすべきと思ひ、油斷すまじき事とぞんじ候

一　我々が意に時々刻々浮ぶ所の惡念鏡に移るべきものならば、定て移れる影形の見苦しかるべきならんと、古人も口ずさみ申され候へども、左程に我意の姿見にくきとも存じられず候は、全く恥を知らざるゆへと覺へ候、二六時中之間意に浮ぶる善惡の想を棄置ず考へ見る時は、善事は稀にして積惡のみ多く、第一金銀を貪る意深く、好色に眼くらみ美服を餝らん事を望み、魚肉厚味に飽く事なく我

身の及ばざる處をうらみ、その外何事によらず足事を知らざるは、いかにも恥かはしき儀と存候、然れ共これらを是と心得居候ゆへ、鏡にも移らず見苦しき我心の姿とも存ぜず候、勿論鏡と申は銅にて鑄拵たるにては無之、もと銘々の本心は磨上たる鏡のごとく明らかなる物に候へども、年歴を積に随ひ悪念の曇積重りて錆のごとくになり候ゆへ、悪を作りても悪と知らざるは、鏡に影の移らざる道理にて、恥をはぢと知らざる所かと存候、譬ば碁象戯など好人の未熟なるは、盤面に向ひても愚智の眼くらみ儀の付ざるを嫌ひ候ゆへ、一二手先も見へずして却て己が方より禍を招き、終には負手を打白讓などいたすは、畢竟其術に闇きゆへの事にて候、是則我意の明らかならざる道理に叶ひ候、去ながら未熟の人たりとも他の人の盤面ひかへ居候を側にて見物いたし候時は、其咀手迄も見へ候故重て我業の德に用ひ候、一切之事も其如く初心の人は先他の善悪とゝもに我手本と致し、悪しき儀は闇き書を撰み候事肝要と存候、既に其術に達したる人は盤面に向ひ候より始終を考へて勝負を決し申事は、其藝能に明らかなる驗にて、是則我心の明鏡曇りなき道理ゆへ、終に負手をうたざるごとく、あしきと心得たる方へは少しも心を傾ざるものに候、されば生れながらにして智ある人もすくなき物ゆへ、おほくは習ひ修して智徳兼備いたし候へば、何事も不斷之心掛によらずしては成就いたすまじく事と覺へ候、所詮は心鏡之明らかなる所に至らずしては、恥も知れざるものに候へども、都て道を守らざるは皆恥にて可有之候、尤恥と申事は廣大にて、中々筆紙にも書盡しがたき儀どもゆへ巨細には記さず候

得共、先人に對して前後勘辨なき儀を申出し候處、却て其相手より理非相糺候挨拶いたされ候時は、始の程は言葉も違ひ候て後悔いたし候事など是ある儀、誠に外聞をも思ざる振舞恥を知らざるとは可」申哉、既に古人も九思一言と被」仰、人に物いわんと思ふには九之度心の内にて思ひ返し、是ぞ直なる所にて申違ひは無」之と、心に決し候事ならでは言出すまじきとの御禁に有」之、去るに依て童子の教にも言葉多き人は品少し、老たる犬の友を吠るが如しとも仰置れたれば、人は何となく言葉ずくなにて無益の雜談、或は僻事抔申出さゞるこそ恥をしりたる共申つれ、俗父人より申聞置れし儀を相用ひずして、再應同じ事を申聞られ候など恥とは可」申か、其譯は犬猫すら一度嚴敷申候事は二度と過いたさゞるものにて候、ましてや萬物の司たる人物として耳へも聽々とも入ざる儀は恥とや申間鋪や、其外他所より借受候品等返すべき念もなく、或ひは他の人の物を斷なく遣候ても、咎めざるうちは苦からず抔心得たる族は、天罰を恐ざるの働ゆへ今日の家業も亂妨いたし、果して生涯身の上立行ざる樣に相成、人の嘲りをも厭ざるの類ひは、皆恥を知らざるの所より發り候、されば忝も天照皇太神宮の御詫宣にも、謀計は眼前の利潤たりといへども必神明の罰を蒙る、正直は一旦の依怙にあらずといへども、終には日月の憐を蒙るとの御神詫分明に候へば、豈偏執する人可」有」之哉、兎角人は心に奸曲なく、萬事實儀を以正直を本といたさず候においては、今日の道に背き候ゆへ自ら災も來るべき事と存候、其外は銘々日々之行ひの處にて勘辨可」被」致候、定に大海へ小船にて乘出したるごとくに世の中

なおし悪れて慎む人なり、心の曇りなきとも申べきや、玉の性は同じけれども琢くと磨かざるとに異なるをも候へば、絶ず心に悟られ候時は、自然と我心も磨かれ善悪の想も移り可ㇾ申事と覺候

一　口は禍の門、舌はわざわひの根と申せども、左のみ禍の在之ものゝ様には存ぜず候處、纔一言の誤りによつて一生涯の縁にも離れ、或は大切の命をも亡し候事も出來いたし候、然れ共我等にをゐては命を失ふ程の災は申出す事もなく候へ共、日毎に言出せる言句禍にあらずといふ事もなきかと存候、其故は心口各異言念無實と申して、口と心とはいつも相違いたし居候ゆへ、我意に思ふごとく不斷口に言ひならへ候はゞ、定て今日迄も御奉公相勤候事も出來いたしまじく、別して商内などいたし候にも意に思ふごとく會釋いたし候、再び御買物にも御出被ㇾ下候御方迚も有間敷なれども、我も意に思ふ事は皆身勝手ゆへ悪しきと存居候に付、人に應對する毎に我意の念は隱し置、時の宜に隨ひて挨拶いたし候へども、心口異なる時は實情無ㇾ之道理ゆへ僞りを申も同前之様に相聞へ候、されば古人も僞りと知りつゝ人には申せ共心が問ば何と答へんとの名言、誠に釘も打るゝ如く胸にこたへ耻入計に候、何卒意に悪念なくして口に言出す事とも心と符合いたし候様に心掛たきものに候、殊に災ひの仲立と申は人の上を陰口申か、或は譏るか亦は嫉妬など皆己々が方へ報ひの來る禍にて、是非我もそしられ嫉まれ候事掌を返すよりも早く、假令遠国隔たりたる人迚も此方より憎み候へば、先方にても憎まるゝものにて、一業所感の道理は免かれ難く候、ましてや悪事などいたし相知れまじきと存じ居候は、

因果の理りをなきものといたしたる振舞愚なる儀と存候、是よつて君子は必其獨を愼み仰られ候所、君子と申は聖賢の御身の上とのみ心得、いつ迚も我は田夫野人の身と卑下いたし、一生涯盲闇にて朽果んも口惜かるべき事と存候、諸君子と申時は我々ごときの匹夫たり共其列に加わるべく候へば、伺ふへのみ預け置ず我方へ引請候て、己壹人を愼み申べき事專一と覺候、別て君子は怒りを人に移さず過を二度せずと申事も有ㇾ之候へば、是等を能々愼たき物に候、先我心よりして一旦悪きと存じたる事は再びいたさゞるものに候へども、我心には差てあしきとも覺えざるに、他の人より過いたしたる趣申聞られ候時は、過にては無ㇾ之由申譯などいたし候は、重ねてもいたすべきやうに相聞へ苦々敷存候、誤て改るに憚る事なかれと申て、一度人よりして悪舗儀と被ㇾ申候事は、假令我意にはいか程の善事と存じ居候とも、再び其事いたさゞるは過を二度せずとも申べきや、倍又怒りを人に移さずと申せばとて不法の者など御店の掟を破壞いたし、或は申付かた等違背いたす族有ㇾ之時は、是非相談の遂べき事は勿論にて申に不ㇾ及申ㇾ候、唯己が意趣遺恨に依て憤りを發し、人に咄合致さず候ては胸ひらかざる樣に思ひ、朋友をかたらひ荷擔人を拵候など申か、或は我意に立腹致候儀是ある砌、其譯も知らざる者へ非道の挨拶などいたし、却て其人に腹立いたさせ候事皆人に怒りを移すの道理に候へば、兎角口は禍の門と心得候儀專一と存候、都て門と申は内外より出入いたし候を門と號け、是に用心を加へずしては盜賊の災もこれあるごとく、人の口とても右に等しく言説を出すごとくに用ひ、是なき時は禍も多か

るべき事ゆへ、九思一言の金言不断にこゝろにかけたきものに候

一　ものの曲りたるは曲尺を以て試し、人の邪なるは正路を以て試すべきの處、平日我意にかなひたる人と、又は己が機に入らざる人との差別是あり、自ら依怙贔屓の取計も出來いたす事も在之ものゆへ、人の理非邪正を糺すべきと存じ候時は、小僧三ヶ條と申儀を心底に貯へて采配いたすべき事に候、此三ヶ條は恐多くも東照權現宮樣天が下の御政務の御規矩御定被仰出候ところに、此三ヶ條を以萬事執行可申旨諸御役人中樣方へ被仰渡候由傳へ承り、誠に難有御金言に候へば思置候、假令下萬民に至るまで此三ヶ條の趣を相守取計ひいたし候においては、贔屓偏頗の筋聊在之間敷候と存候、僧共昔は在寺に大德の和尚住寺いたされけるに、近在より小躮壹人召れ和尚の弟子にいたし度旨願ひければ、早速領掌ありて則剃髪いたさせ小僧に召仕はれけるに、此者怪らざる氣隨徒ものにて和尚の申付を用ひざるゆへ、不便に思はれ或は叱り或は方便偏奇さに色々と異見の加へられ候へども露計も聞入ずして、唯己が致すべきと存じ附たる事は止ざるゆへ、和尚も手にあまし止事得ずして宿許へ返されける所、親父小僧に向ていふやう、いかなる不調法有てか歸りたる哉と尋ければ、小僧申には、雪隱へまいるが不埒と申され下宿いたしけるよしを申せば、親父甚だ憤り夫は不束なる和尚にてまします哉、如何に小僧の身分なればとて大便致さずには居られまじ、併ながら夫計にも有まじ外に不調法なる事もあるべしと亦尋ければ、小僧の答には味噌の研樣が宜しからぬよし申されけるといへば、親父又怒り

を含み此小腕にて何として大人の如く味噌のすれべきやうなし、さて〳〵無理なる事を言るゝ和尙にてはあると、其外には不埒も是なきやと問ければ、小僧申けるは月代の剃やうの惡敷とて呵られ候、此外は何も是なきよし申せば、親父彌立腹して今迄は大德と思ひしに僞りとや想像もなき和尙かな、稚き小躬が腕先なれば剃刀の取扱も出來がたき筈なるに、夫を彼是申さるゝ儀は言語同斷の事なれば、某參りて對決せんとて寺へ罷越和尙に面談いたし、倅小僧を御返し被ㇾ成たる譯合、味噌する方月代の剃樣惡敷に付てのよし以て外の儀と存じ候、纔十二三歲の小僧の身分なれば未熟の儀は勿論に候、別して雪隱を御差留なさるゝ事餘り御無理なる儀に候得ば、向後は師弟の緣を御切被ㇾ下度旨を申處、和尙の仰には一往聞れては左こそ可ㇾ有事なれ共、先雪隱を差留たる譯は客殿に在之ㇾ所の廁にて、內に高麗緣の疊を敷置、御大名方之御出之節入れ申積りの用意に拵置候へば、我等を始め同宿たり共一切遣入申さゞる所、渠は每日右之雪隱へ參るゆへ是を止め候へども兎角用ひず候、又味噌を摺事は三人の小僧へ隔番に致させ、摺木にてすり候樣に申付置候に、外兩人は其通りいたせども渠は決して用ひず、杓子にて押潰し候ゆへ度々杓子を折候とて取寄見せられけるに、折杓子五六本を持參いたしける、扨又月代剃事は所化の役として死人の首を剃候ゆへ、手練の爲に小僧の內より月代を剃習はせしに、渠は剃刀は器用にて同宿どもの月代は至極奇麗に剃けるゆへ、我等が天窓も剃らせ候へば、月代度每に疵を付候まゝ氣を付べきやうに申付候へども、一向恐る色もなくいつ迚も此通りに剪候とて頭巾を取りて見せら

れければ、實は數ヶ所の剪裁ゆへ親父も仰天して、偕々誤入候とて後悔いたし、何卒此上は御慈悲を以出實道を立候樣に御意見を加へられ被下度と頼ひけるよしに候得ば、此小僧三ヶ條の道理を分別致、邪正を糺すへしと存候、

一　世の中の有樣常住不變なるものと心得候は僻事かと存候、いつもところなへと存居候時は時代の風俗の移り行を知らず、或は契約を堅しと思ひ、或は年月を待、あるひは我命を頼みにいたし候得共、家業の道を始として其外何一ッにても、己が方に取究候事の變改せずといふ事もあらず候は、本天地の際の事變易これある事にて候、其品は立春は年の始とて壽を祝し候内に、はや日脚もたち頓て水もぬるむ緑に綻に成、無程初夏の衣がへにも至りぬると存じたるに、水邊も好ましき炎暑におもむき汗を絞りたる月の夜も、忽露のきらめく秋と替り、手洗ふ水も冷たく覺ゆる間もなく、冬の軒端に置る霜も朝日に消行、淺流せる水もたゞちに氷となり、此頃若水汲て祝ひけると覺へしに、又晦日の水垢離など取やうにもなりて、終には年の名殘となるぞ哀とや申べき、其内には雨の降りつゞく日もこれあると思へば快晴にもなり、或は旱魃にて池水の乾などする事もあり、又は大風も吹立雷鳴地震もいたし、雪霰も降り、何時も常住なる儀これなきありさまは、誠に有爲轉變の有さまともやいふべき、されば我々とても母の胎内より出生いたしたるは死の始なれば、日累り月を積容貌の替りゆく事、四季の移り變る如くにて、生れ出たる日年の始にて、命終るは霞の名殘なり、されども其内には種々の花

も咲しなれど、或は嵐のために散されたるもあり、又は風雨の憂もなく實と成たるもあれど、終には其年も暮ぬ、尤是を引寄て手近くとる時は、今日の一日も是に等しく皆籠り申べく候、然どもいつも替らぬものと思ふ心よりして足事を知らず、飽迄强欲に耽りて生涯安堵の思ひに住せざるゆへ、君父の御厚恩の程も存じ出さず唯々徒に今日を贈り候こそ淺間しく候へば、只日々を無事に相勤、御恩の廣大なる事を感察いたし候樣に心掛たきものに候、既に古人は苟に日々に新なり、日々に新にして又日日に新なりと、湯の盤の銘に書記し置せられて、日暮湯を遣ひたまふ毎に是を見て忘れたまはざるやうに守らせられけると申すも此理りと存候、左なくては人欲の私に引れ色々の惡念發り、我が命を賴にして明日を期する意これあるは、御恩を忘却いたし種々に意の變候道理ゆへ、是全く天地の際に風雨災害の變易在レ之ごとくに候へば、前後を打すてゝ今日を大切に存じ候心掛、常住不變にまもりたきものに候

一　儉約と申事はおのれを約やかにいたすのみに候處、吝嗇と紛しくなりて儉約の用ひ方間違是あるやうに相成、仁義禮智の五常にも闕申べきかのよし承りおよび候、其故は禮の大法と申時は父母逝去の御葬式の執行ひ方、或は年回追福の經營、又は子孫之祝賀等之節、己れ〳〵が分限相應にして、過不及是なきを禮といたす旨承り候處、驕の兆在レ之人は右等之節山海の珍味を取集め、家具器物に至る迄善盡し美盡し饗應いたし候こそ、亡親への孝養と心得たる所、呼迎る一家親屬の人品は分に應ぜざる危服な

れば、膝部の綺羅と釣合ざるは却つて客をあなどるに當り或に不禮とや可申、倚又富家成人の幸不幸の節織家之歴々を相招、各當の取計ひを以て麁飯麁菜の會釋いたし候、是以分限に應ぜざる振舞なれば禮義を失ふとや申べき、かやうの過不及これなきを倹約を守るともいふべきか、勿論己を約やかにいたすの第一は、奢を省き事を專らに心掛申さず候にては相勤り難く、先心に當り在之時は御主君様を蔑しろにいたし候ゆへ、忠節の志も發らず亦父母を疎略に存じ候ゆへ、孝順の心も是なく、兄弟をなきものと心得候ゆへ、睦敷いたし候心もなく、朋友を眼下に向降し候故、實義を盡す心もなく、眼上の人を無智と侮り候ゆへ、敬ふ心も是なく、眼下の人を匹夫下僕のごとく思ひ愚昧の者と嘲し、邪見の取扱いたしたる迚も苦しからずなど存じ候ゆへ、憐の心も是なきは、畢竟我をたかぶり居候ゆへの儀なれば、御法令にも背き仁義の道にも闕申べきや、又身奢是有時は生得の肌身も摩磨候はど美しくならんと思ひ、髮頭にも匂ひなど入たる油を付、小道具其外鼻紙等に至るまで麁抹成を嫌ひ、或は衣服等に綺羅を衒らん事を願ひ、家居造作などにも物數奇を好み、後には身上破滅する類ひも有べきや、亦眼に奢り是有時は女色を始として物見遊山の節とても、他に劣たるを無念に思ひ人に勝れう事を願ひ、無益の財寶を弃捨する類もあるべきや、耳に奢是有時は、笛囃子をはじめ小歌淨瑠璃琴三味線其他の音曲などに心奪れ、化に月日を費す類もあるべきや、亦鼻に奢り有之時は伽羅沈香、其外都て匂ひに意ときめき、あたら金銀を水の泡の如く失ふたぐひも有べきや、又舌に奢有時は其奢も麁菜を存ず、美酒珍味魚肉に飽事なく好

み、果は病を生じ大切の命を亡す類ひも可ㇾ有ㇾ之哉、又口に奢りある時は人に向ひても我自慢をなし、或は權柄に挨拶し、あるひは奴僕のごとく詈り、却て我を譏るゝ事を知らざる類ひも有べきや、亦手に奢有ㇾ之ときは茶の湯生花盆石盆譸其外の慰抔を好み、貴人に交りて己が家業を疎にいたす類ひもあるべきや、又足に奢是あるときは蹴鞠に全盛をなし、或は履もの抔に物好して足事を知らざる類ひも有べきや、此外種々の驕り多くといへども繁きゆへに省略いたし候、尤家財等の用ひらるゝを用立ず、古きを新に仕替施抹の所にて濟べき物も上品なるを求などいたし候、皆奢より出たる事かと存じ候、惣じて形の顯れたる物其品の滅せざる内は用に立ざると申儀は無ㇾ之ゆへ、家内の紙屑迄も買取るゝ人もあり、家の外の塵あくた迄も用ひらるゝ所ありて人の助となる道理なれば、萬事に心を付儉約を用ひ申さず候はでは、冥加にも違ひ我身に天罰を報い申べき事に候へば、假令紙一枚にても無益に遣ひ捨ず、細切藁すじにても其役に立ずして打弃まじき事と存候、右に述る所の奢りを退け費を省き、我身の分限相應の執行ひいたし、上を敬ひ下を憐み候時は自ら上下和順いたし候ゆへ、己を約やかにいたす理に契ひ、身も修り家も整ひ申べき儀と存候得ば、能々感得いたすべき事に候

一　凡士農工商を始として其外の人なり共、上下尊卑の別れ是あるとはいへども、人は天が下の靈なるゆへに、依ㇾ之倶統倶助けにして一人にても無益の人と申は是あるまじく、既に士は萬民のために政務を執行せられ、農は諸人の爲に五穀野菜等作り出し、工は室屋器財を拵立、商は右の諸品を賣買なし

世界の人に自由をいたさせ、其外貴よりして賤きゝ乗馬追車引、乃至非人革剝のるいまでも天地の際に生れ出たる人に於て天の命を請ざる人達は是なく何れも今日の役目を受り居候得ば、是をいやしめ役を惰むといふ事は有まじきや、別して人は萬物の司たるゆへに、一切萬物森羅萬象に至るまで、我我が爲に性を果して今日の養を施し候、先山に生ずる木草石竹は、舍屋となりて風雨を厭はせ、家財器物と成りて自由を足させ、炭薪と成ては炎焼或は寒氣を凌がせ、備又野山に住所の獸の革は、武具馬具に遣れ、或は鼓太鼓三味線等に張られては諸人の心を慰め、あるひは革羽織頭巾などになりては火事の防かたの助力となり、毛は筆刷毛其外となり角は諸色となり、又牛馬には重荷を附て人物の用を足し、備又鳥類とても羽は鑓の鞘などに遣はれ、あるひは矢に矧れ羽箒其外となり、肉は人の食となりて皮肉を肥させ、又里に生ずる所の五穀を始め野菜には大切の命を連(つなぐ)所の食物と成、或は木の皮草の根は病を治する所の藥種となり、其外麻(あさ)草木綿は肌身を隱し寒暑を凌ぐ衣服となり、或は菜種胡麻の類は油を絞りて世界の暗を照し、或は楮は紙に漉れて萬の事に用ひられ、又海川に生ずる魚類は大なるは鯨鮫の類ひより、小なるは鰮鯡の類に至るまで、網にかゝり針に釣れて、油ある魚は是を絞て灯に挑られ、肉は人物の食事となりて祝ひ事に遣はれ、或は田畑等の養ともなり、其外一切の萬物禽獸魚虫草木の花實、或は衣食器財等迄も其用ひらるゝの德擧て算へがたく候へ共、皆人身を養育せんがための役人なれば、何れを捨、何を依怙にいたすべきや、都而(すべて)所は天地よりして我一人を御撫

惠下さるゝ所の御扶助に候へば、誰か是を難ㇾ有と存ぜざらんや、恩を戴て恩を知らざるは、鳥の樹の枝を枯すがごとく、徳を蒙りて徳を思はざるは、野の竈の草を損ずるが如しと承り候へば、責ては萬物の司たる人體を受し事を思惟いたし、天地の御恩のほどを尊敬し奉りたき事と存候

一　人は四恩と申事を不ㇾ存候ては、天地の御恩の廣大なる事を辨へざる物に候、其荒增を認候、先四恩と申は天地の恩・國主のおん・父母の恩・衆生の恩なり、第一に天地の御恩と申は、天の陽性は地に降り、地の陰性は天に昇り、陰陽和順の御德を以春夏秋冬の四季自然に行はれ候ゆへ、春は暖に夏は暑く、秋は涼しく冬は寒く相成、其上日輪は火の性の主(つかさ)にましませば、晝は一切萬物を火勢を以て潤し、月輪は水の性の主にましませば、夜は一切萬物を水性を以て潤され候ゆへ、萬物時を違へずして春生ずるものは春芽を出し、秋生ずる物は秋豐實、我々が爲に居住する所の家となり、暑寒を厭ふ所の衣服となり、飢渴を凌ぐ處の食物となり、日用辨ずる所の諸品となり、一切不自由なく今日を御養ひ被ㇾ下候は畢竟天地の御恩德によつてなり、殊に旱天より日輪の光耀を以黑闇を照し給ふゆへ、士農工商の道を勤、日輪入給ひ候へば、日輪の火性を續て油蠟燭の灯を挑、自在を働候も、皆是萬物御撫育の御恩也、尤火は石と鎌を以打出し、火口に移り飲食の品等煮燒いたし、或は手足を暖て寒を凌、明りを照して用向を辨じ、煙草を吸付て纔の欝を散し候も、石鎌の打合より出候火と存候得共、其源は日輪の御智惠より顯れ候火性に候、扨又水は食物を煮焚いたし候本にして、或は湯茶に沸して渴を凌ぎ、又

は汚たる顔容手足を清め、其外穢たるを洗潤候て、井より涌候ものと心得、麁抹に没流し候へ共、其根本は月輪の御情真よも顕れ候水性に候、是等は悉く天地の御恩徳に候へば、第一に此御恩の程を崇敬し奉るべき事に候、第二に国王の御恩と申は、四海静謐に御治世をし玉せば、五日の風凪枝をならさず、十日の雨塊をくだかずに候ゆへ、弐三歩の戸板の内八九歩の壁中に、優々と夜具着して枕をいたし、緩々と足を延して臥り候ても、猥に家尻を切て剝取ものも是なく候、又は白昼に商賣物拵理不盡に手込にいたし奪取候者も無之は、御政道正しき故に候、萬一遷近に不法之者有之におゐては、夫々の御役人方御聞置せられ、御威光を以早速に召捕られ、罪科の軽重に随ひ誅罰に行はれ候、殊に御法令の第一は御制札之最初に、親子兄弟夫婦を始め諸親類にしたしく、下人にいたる迄これを憐むべし、主人有難は各々本分に精を出すべきよし被仰出候に付、主君に忠節を励候者父母に孝養を盡し候者は、召出され御褒美被下置、誠に御聖代の御仁徳の程有がたきとも可奉申様これなく候、然に主君に忠孝なくして或は金銀代呂物を掠取、又は手むかひをなし刃傷におよぶ族是ある時に、重き刑罰に行はれ候も、誠に天罰を蒙る咎難遁ゆへに候、扨又飢饉の患これなき為に国役等の御手當下し置れ、其上出火災破損等にて世間困窮の節に、御定役の外に御増役御付させられ、御政道厳重にして、只々萬民安穏に家業いたし候様に御救米下し置れ候儀、誠に付ては民の父母たる事、何程冥加に存奉り候とも中々申盡りも無之、其外国王の御深恩筆に顕ふるに暇あらず候、第三に父母の御恩と申は、此人々よく得奉

る事父母の御恩德にして、我力を以て造り候ものにては無ㇾ之、則父は天の仁愛の氣を施し、母は地の哀憐の志を以御撫育下され候事ゆへ、至て大切の人體に候、御大家方にては御附人御乳母の背にかしづき御養育被ㇾ成候へども、民家下賤の者は我手ひとつにて育候ゆへ、入艱難被ㇾ成、先商家の父は未明より露霜にうたれ、晩景には雨雪に小濡て商内物を販、農家の父は炎天に身を焦し、寒風に身を曝して田畑を耕し、其外諸家迚も漂濤の危を凌ぎ遠境の疲を忍び、嚴寒の指を落すにも、大暑の金鐵を蕩すにも厭はず往來なし候も、皆是妻子を養はんが爲の千辛萬苦なり、殊に我子の一寸育候には、母の生肉を一寸宛片(へぎ)と申譬も有ㇾ之、夏の短夜も寢玉はずして乳味をあたへ、冬の寒夜も我は凝寒(こごへ)ても陵に臥せ、病煩ひの節は夜中も厭はず人を馳て藥を求め御介抱に預り、段々成人いたすに付父に行儀作法を御教、其上人の中へ出候ても耻をも請ざる樣にと筆學諸藝とも御習はせ被ㇾ下候所、頑是なき心よりして直々稽古いたさず候へば御折檻を加られ候も、畢竟は我子の爲を思召御慈悲より發候事に候、母は打れ候を不便と思し召、若哉怪我にてもいたさゞるやと御いたわり、此上精出し候やうにと和らぎ仰被ㇾ下候も、同じ御慈悲にして御恩德之廣大成事筆紙に認め盡しがたし、誠に父の御恩は天に勝り、母の御恩は地に越候とも申限りも無ㇾ之候得ば、父母の命は露ばかり背かず、一言たりとも言葉を返さずして大切にうやまひ候心持に相成候時は、自然と我體は我物に是なき道理も感得致候に付、益御奉公も疎略に相成まじき事と存候、第四には衆生の御恩と申て、都て衆生といふは、御主君樣を始奉り父

父母師長兄弟眷族、其外大千世界の人々を以一切衆生と名付、此御恩に預り居候事廣大に候、先御主君樣之御恩は前編に認候通畢てかぞへがた、候得共、第一大切之命を御養被下候に付、御蔭を以年々星霜を贈り、其上寒暑を凌ぐ衣服を御惠み被下、殊にかやうな御家造に相住候ゆへ、雨露にうたれ候事も見なきは、是に過たる御恩は御座有間舗と存候、其譯は我人ともに此衣食住の三ッを貯へん爲に、一生涯身を勞し心を苦しめ、定れる命をも縮候處、御主君樣の御惠によつて其辛勞を遁れ、何べんともなく暮し候こと、此上もなき樂、有候には在ゝ之まじきゆゑ、去るによつて元祿の頃大石内藏之助殿と申義士の仰にも、平人は主君を持は天下をしらずとの名言感じいるの所に候、偖大切の命を達成する根本と申は八木にて候、此米の出生をあらまし承り候處、春の頃田を返すとて人馬を以て馬把とて土を起し能碎し、其上こやしを入土をねかし置、夫より八十八夜過候へば種浸しとて籾を俵に入、河水池水等にふせ置、其程を考へ引揚て水を絞り暫く日天子之光耀に干、一夜菰莚の類を掛置候へば芽を出し候、又苗代の土をすき平均水を張置、種蒔とて未明に出てむらいなきやうに田に蒔てより、日毎に夜は水を干朝は水をかけ候丹誠によつて始て二葉を生じ、段々日を經て五月の比には五六寸も生育候を、田植とて大勢の男女打交り早苗を植付候處、田蛭の足に取附血を吸ふにも構はず植仕舞、夫より田へ水をかけ候へ共、旱魃の年は水乾候ゆへ夜も寐らず候ゆへ河水を汲込、昔は大暑の堪がたきにもいとわず、田の草とるとて一株宛根を分小草をとり、壹番草より三番草迄取仕舞候内に、はや

秋になり穗も出、二百十日比は花盛にて次第に實となり候へば、鳥獸のあらさん事を恐れ、鳥おどし、鹿鷲•添水等を拵其患を退け、穗熟らむ時分には水を落し、實入いたし候へば是を刈取、鐵扱にて稲をこぎ一穗宛落候は拾ひ分、連枷にて打攸て日輪の光耀にて干揚、夫より臼にて挽、萬石通しに掛候へば、米と殼と粃と分り候故、藁にて繩を綯、菰をあみ俵となし、村役人立會升取いたし米を計り入、口掛り俵作りして牛馬の脊に負せ、山を越川を渉りて海邊に運び、大船に積入候得ば船頭水主の人々請取、晴天を見定順風に帆を揚げ、渺々たる灘を乘出すといへども、沖の岩鼻にて船を碎れ惡風に楫をとられ、其身も海底の藻苔となり、中には危きを遁れ幸き命を助り、受役所と漂泊して湊にたどり付て、其所の村役人などを頼み難船の樣子を改貰、濡荷物等干乾し船の破損を修復いたし、漸々風並の宜に隨ひ出船して品川沖に着ぬれば、小船にはしかけて米問屋の藏に納候得ば大金を以て仕切置、夫より中買の人に渡し升目の不足を改、賣捌奥られ候ゆへ、我々が方へ調請て、米搗の人を賴てしらげさせ候得ば、大道に臼を居へ厲風に吹さらされながらも身より汗を流し、早天より昏におよぶまで拜搗にして精奨[しらげ]られ候を、何度ともなく水にて流し磨上げ、ゆきも欺く程にして日毎に飯に焚候は、我々一人が食事といたし飢を凌ぎ命を全ふせんが爲也、八木一色すら斯のごとし、況や其外の五穀を始味噌•鹽•醬油•酒•青物•乾物•魚類等に至る迄も、其出所を考ふれば幾許の人の難行苦行して、大切の命をも賭となし其品々を作り出し、我々壹人を御養被下候御恩之程思ひ量り盡しがたく候、偖又寒暑を凌ぎ肌

身を隠す衣の衣類にも、絹布綿服の品是有といへども、先木綿の其始は、初夏の頃畑を鋤にて打鋤にてうなひ、塊を砕き土をならし畝を作り足を引、しゆごへを引込干付置候て種を撰分、五月に至り綿種とこやしと灰とをまぜ合候て、蒔村のなき様に土をかけ置候へば、頓て二葉を生ひ出し候ゆへに小草を取、夫より二寸程も延候時はさくを切ると申て鍬にて根を切り、又こやしを入しばし日を経て一番くるみとて土にて根をくるみ、其間〳〵には草を取、程なくくるみ返しとて根をくるみ替候へば、五六寸にもなり候節枝を打せん爲に芽をかき置、六月の頃は段々生長して花咲、早秋に至り實も入ゑみて桃吹候を、一番ひろいと申て本なりを取りて翌年の種に囲ひ、日毎に日入れて皮を剝殘實等にならべ、日輪の光耀を受日數をほして塵などひろひわけ、其上繰車にて挽候と綿と種とわかり候を、打綿となして篠巻にして紡車を以て絲にとり、それより機を巻立候を釜にて焚候て、紺屋之方へ遣はし候へば嶋の好みを應じ、夫々に染色を分け染上げ候を、糊の加減能程にして日輪の光耀に干置、乾候頃織取に遣ひて筬を通し、機にて筋を立ながら苧巻といふ木に巻、機臺にかけ織上げ候て壹反宛疊付、其上荷造りいたし廻船問屋の元へ出しぬれば、遥の海路を波濤の患もなく、御江戸表に着船して、夫夫の市店に渡りて交易いたし彼是候も、我々壹人の肌身を隠さんが爲に候、又絹布の其本は蠶種と申にも、春蠶夏蠶秋蠶或は大蘭絹蠶などゝて色々在レ之、何れも色赤く、鮫の皮のごとく蠶紙に悉く種付居候を、寒中に四五日も水にひて囲ひ置候、尤夏蠶は眞綿になり候ゆへ蠶も大きく夏に至り飼ひ、秋蠶

は秋飼ひ候よし、先春蠶は桑の芽吹候比、右之種を紙の儘にて清き澁紙の類に包上、圍爐裏近き天井へ五尺餘りも高く釣し置、二三日も溫め候へばはきたてとて色青く變り卵生て出候ゆへ、鳥の羽根にて掃寄奇麗なる盆やうのものに新敷紙をしき移し候て、桑の新葉を摘、至極細に刻ふりかけ候へば、是を餌食として少々宛育候に隨ひ、桑を少しづゝあらく刻さし候所、蠶になり候迄に四度宛の休と申事在レ之、大體二日程宛蠶の口腫頭を押立候を、寐るとも稱へて桑を與へ不レ申候、翌日頃は頓て口の皮むけとれ候時頭を下げ、常のごとくになり候を起るとも申候に桑をつけ候、先初休をしゝといひ、二度休をたけといひ、三度休をふなと云、四度休をにはと申て其間十日程宛にて、しゝよりして桑も毎日三度宛付、其上多少の分量を考へ與へ候て、追々育候を大小を撰分大なる方をば外の籠に移し、後には桑も葉の儘枝とも付候へ共莖は殘し葉のみ食し候、勿論西風南風を忌候ゆへ、若や西南の風烈敷時は戶障子をさし置屛風などにて圍ひ、風の吹込ざるやうにいたし、或は忌服不淨を忌候ゆへ婦人經行の節は、別莊に移り別火を以て愼み居候、其外藥の匂ひ肴などの香を嫌ひ候に付家內の心遣ひ大方ならず、亦蛇を嫌ひ候ゆへ長蟲などゝ申噺もいたさゞるやうに氣を付、縱令落候事在レ之共死と申事を忌、或は轉ぶ亦は流るゝ抔唱へ、萬一忌所の事ども在レ之時は蠶の色變じ、或は瘦又は尻腐轉び候も出來候へば、是非なく川へ流し捨候、別して夜分は鼠の付候儀恐れ、棚を釣置用心いたし猫など多飼養ひ候、偖桑も馬に附ニ候を何駄となく調置、日々の餌食となし、には起より五六日過候と最早上り前と成候を、巢

前ともづうとも申て身打透戻り候樣になれば、又外の箔に拾ひ分棚へ上げ候て、一日程に二便影舗いたし候、夫よりまぶしを離くると申て桑の枝・豆の殻・麥藁のるいを立置候と、其間々へより繭を作り其蟲はまゆの中に納り候、併ながら天氣能ときは進候へども、時候不順之節は進兼候ゆへ、中には蛹類となるも在之間是を不作と申候、尤繭をかきとり日輪の光輝にて干固め置絲に取候節は、夫を鍋に入焚候て箸にてかき廻し候得ば、糸口出候を四五本程づゝ立候て壹筋といたし枠に移し候所、上繭は性合あしく紡絲となり中よりして生絲出候を不殘繰立、其の儘にて干乾し壹管宛入絲して把となし、其所の市日に持出賣買いたし候へば、爲登絲師買取荷造りして箇になし、驛路の道程を駄馬を以て京都に登せ、絲問屋の方へ送りぬれば絲屋町中買の許へ人を走て荷捌いたし、夫より西陣織屋の人に賣渡候處、絲の太細を見分小窓に繰返し、小管を拔取口を合せ機に掛て生絹に織立、仕入店に持參して賣代なし候へば、夫より練り屋へ遣し練上來り候を、又染屋に渡して染立地節を取揚付、賣物には花を餝るなれば化粧絲など付候て價に積、飛脚屋に預遣し候へば産包にして、宰領人附添百有餘里の道も遠きとせず、山坂の勞を厭はずして御當地へ到着之上、呉服店に賣り附け候へば、我々一人が涼暖を凌候衣服を貯へ置れ、其外會儀正しき御裝束まで分限に應じ候望を達被ㇾ下候、御恩之程申限りも無ㇾ之候、將又雨露をいとひ候其源は、松杉椴等始諸材木ともに天地の御恵みによつて深山に生出、數百年を經て大木と成候を、杣山賤の人々朝には霧を拂ひ夕には星を戴き、夜は猪鹿の聲に肝を冷し、風雨寒暑を凌ぎ枝

を樵、根を伐候所、日向に生ずる木は目合の筋長閑にして和らかく、日影の木はあてと申て目こわく角堅く候へ共、手練を以て角取をなし、或は板に挽などして谷川近き所は水の力を借り濱手へ流し出し、又に便りあしき場所は修羅地車等に載、山坂の難所をも汗を絞りて持出し筏に組、又は船に積風波の難を遁れて、諸材木問屋の川岸に漕着候へば、價究りて帳面に記候處、角物等は角縮の法と申て壹尺角に長サ貮間を一本と定置、縦令ば五寸角に長サ貮間半之代銀盛立候には、五寸角は又五寸を掛合角に貮歩半といたし、長サ貮間半を定法貮間にて割候て一本貮間半として右之角に貮歩半を掛又六を掛、其上小判壹兩に付何本何歩替と申相庭にて割候て代銀を定仕切金相渡し、夫より川並の人抔かゝりて林小屋に積上置、我人の望に任せ賣捌與られ、或は人の肩に載又は車に積運送致し、おのれ〳〵の方へ引取候所、地所無レ之者には富貴なる人大金を出し地面を調へ置、間口奥行とも好み隨ひて貸與られ候間、物數奇に任せて普請いたし候へども、自身と家建いたし候事叶はざる者には借家を建置れ候ゆへ、身分相應之住居をかり請、風雨霜雪を厭ひ候事、畢竟は番匠之大かたならぬ工を以て造り立、壁塗の骨折より屋根の柿葺・置石迄の辛勞、幷に戸障子等の建具揃舗疊の刺方に至る迄、我我壹人が爲に幾千人の粉骨碎身して、炎暑嚴寒を凌がせ被レ下候御恩之程量り盡しがたく候、衣食住の三ッ大略斯のごとし、其外日用の金銀家財器物をはじめ、一切萬物夫々の出所をかんがへれば、其仕方種々の遊ひ在レ之といへども諸萬人の衆生天より其役々を蒙り、艱難辛苦して其品々に成就なし、我

我壹人が爲に日用を辨じ自由を足させ被ㇾ下候御恩之程を存候へば、燈心一筋割木壹枚にても麁抹に可ㇾ致筈は無ㇾ之、都て衆生の御恩と申て一切のもの事一ッとして洩る事なく候へば、假令卑賤の手業或は厠屋の掃除人たり共、天より命ぜらるゝ所の御役人にて候ゆへ、あだには存じられず候、夫は如何さなれば雨便の掃除等自身と取始末いたし、二三里の程も我と持運び捨參るべき事に候はゞ、嘸々迷惑成儀と存候處、自分すら忌嫌ひ候糞土を、先方より金銀を出し態々と掃除いたし吳られ候を、折悪舗抔とて悪口等申儀放逸無慙の振舞とも申べきや、右四恩の趣畢て算へがたく、秋の一葉の露はかりを認候へ共、何れ天地日月の御恩澤にあらすして、何一品にても出生不ㇾ致といふ事無ㇾ之候得ば、たとへ鼻紙壹枚貰若一服たりとも御恩の程を存じ出し大切にいたし度事に候

一　人體を請て此世界に出生いたし候事は至て稀なる事にして、三千年に壹度花咲優曇華にも譬在ㇾ之、殊に其上男子に生を感じ候事、古人は三樂の中の一ッと欽ばれて、一入大切に被ㇾ心掛ㇾ候よしに候得共、我々共此人身を請し事左程に大切と存候儀是なきは恐恥べき事に候、然に生得無病にして身强人あり、又は柔弱にて病人なる人ありといへども、都て人體は同じ事と心得、身弱き人など其生質虛性なる事をしらずして、人の食する程のものを食し、人の飲程の物は吞が能と思ひ、身の强弱を辨へざる人在ㇾ之由へ、古への人は友とするに可否ある事を記し置れ候、中に猛く勇める人、病なき身强き人、酒を好む人など友とすまじ、よし制せられ候へば、能々分別可ㇾ致事とぞんじ候、是いづれ病の氣なき人

もすくなきや、凡病は四百四病と申せども多分内七情外六淫より發り候、先六淫と申は風寒暑濕燥火とて、春夏秋冬の四季の時候によつて病ひを生じ候得共、身中實情なる人は邪氣の受かた淺候ゆへ、左のみ煩はしき事もなく取臥候程の儀も是有間敷や、亦身弱く虚損ある人は邪氣深入いたし候ゆへ、時疫傷寒其外色々と煩病して、終には醫藥の詮もなく大切の命を失ひ候事も出來いたし候、是全外六淫にうたれ居候故と存候、偖内七情と申は喜怒哀樂悲恐驚なり、喜は歡事、怒はいかる事、哀はあはれなる事、樂はたのしみの事、悲はかなしむ事、恐はおそるゝ事、驚はおどろく事なり、尤喜怒憂思と申時は、憂はうれふる、思はおもふなり、此七情は心・肝・肺・脾・腎の五臟に備り候ものゆへ、中々止め候事迚は相成がたく、殊に世の中のありさま是に離れ候ては、五常の道に外れ候ゆへ、人の悦を見ては倶に悦び、人の悲しみを見ては倶にかなしむこそ今日の道に候へば、片時も行はずしては人倫の交り出來がたく候、然ば此七情に深く執着いたし候ゆへ、愚痴の心發り、色欲に耽り、或は嗔恚をもやし、人身の大切たる事をも存出さず、五臟の傷候をも打忘れ候事に候、尤肝の臟といふは春を主どりて木なり、心の臟は夏を主どりて火なり、脾の臟といふは四季の土用を司どりて土なり、肺の臟といふは秋を主どりて金なり、腎の臟といふは冬を主どりて水なり、此五行を内七情に傷らるゝによりて、過不及出來して虚損の症となり候、これによつて我身大切と存候はゞ、第一愼べきは色道なり、則喜怒哀樂の心發り候も、元來色欲に愛着するゆへなり、勿論壯年の比元氣盛なるに任せ無益の陰房を犯し候時は、虚弱の人は

腎之水涸候ゆへ自ら火盛に成り候、火勢盛なる時は土乾き潤ひ是なきゆへ、金も生ぜずして木も枯れ候道理に候、尤男女交合の道は天地開闢の氣を主どる所にして、子孫相續の基ゐ爲なり、さるによつて七去の女の法にも、子なき女は[illegible]すべきよし戒しめ有之候、然るを我愛念にひかれ猥りに邪淫を犯し候事天地の道にはづれ居候間、平日心掛有たき事に候、五行相生相剋の理を辨へ身の養生肝要と存じ候、相生とは木より火を生じ、火より土を生じ、土より金を生じ、金より水を生じ、水より木を生じ申事に候、然れば水土の二ツ衰候ては虚實循環しがたきゆへ、此儀分別いたし置ものに候、偖又此體は五行の集り物に候へども、一體は土を主り候ゆへ、則此皮肉は皆土なり、夫ゆへ命終之節焼ば灰となり埋は土と成り候、然るに土と申物は動静に依て可否の違ひ有之候、其譯は往還之土はうごかす事無之候ゆへ、米穀野菜等植付候共實のり事不能、又田畠の土は數日鋤鍬を以堀起し、其上こやし等いたし候ゆへ、萬物生長して能實のり候、此身迚も其ごとく動働いたさず候ては、第一食しもたれ氣を塞ぎ胸つかへ、又は睡眠を出し病を生じ候、既に貝原先生も食後三百足宛歩き候こそ、養生の第一と記し置れ候、まめやかに立働いたし、假令食後睡眠等出候共精催などいたさず候時は、自然と氣血循環いたし此身も健に病を生ぜざるよしに候、されば日輪の朝には東の空より出させられ、夕には西の空に爲入たまひて、日毎に休閑のなきは人身の立働いたし候鏡にして、陰陽循環の理に候、勿論人は一箇の小天地なればば天地と同根の行状に見たくては、其身に病難も來り長壽も保がたきよしに候、且又土にこやし致さ

ず候ては作物の花實生育致がたく、則此體のこやしと申は日々の飲食に候、然るに天下泰平の御聖代にして、殊に御當地は恐多くも國君之御居城にましませば難レ有も繁花の土地ゆへ、日本國中の名產を始として美酒佳肴等の運送夥敷、隨てかやうの御店に相勤候故、折にふれ時に依て珍味珍膳等御載せ被レ下候に付、全體土に應じ候てはこやし過候を其分量なく飽迄飲食いたし候時は、身弱き人又は幼年にて五臟整はざる人は、脾胃虛して即時に病ひを生じ、或は溜飲となつて身を痛め、或は肥まんすべき人も却て瘦候て酒毒食毒に疾痞を生じ、又は身强き人も老年におよんで中風水腫等の病を生じ候事も粗有レ之ものゆへ、是等の患を除かんといたし候には平生の用心にこれ有べき儀と存候、既に邊鄙邊土にては朝夕麁食を以命を養ひ耕作等に身を平懷（こなし）候ゆへ、自然と無病にして長壽の人々多く候、然に御當地は武藏野の廣き御惠の御深厚に候ゆへ、難レ有も明暮白米を食事に戴き魚物を菜となし、或は酒を呑其上身を平懷（こなす）事すくなき間、自ら病ひを生じ身にも苦痛出來候、是全土のこやし過候ゆへ土の性氣强くして、却て萬物を生育する事能はず、草木枝葉ともに枯損するの道理に候ゆへ、自分と天命をも縮め候て短命を祈る理りに相聞へ候、別して春の旬に生ずる物を冬の内にもやしと申て無理に芽を出させ、秋の季に生るものを夏の内に作り出し候を、初物と號して賞翫いたし候得ども、都て其時候にあらざる品、或は天の性氣を請ずして出生いたすものは、毒在レ之身の害となるよし古人も戒め置れ候間、其旬能（カ）はざる物は食すまじきとの事に候、將又酒と申物は、米の正味をしぼり性氣强き物に候ゆ

を學び藥を與へたまへども、其術古人に等しからざる方もあるまじきにしも存られず候、されば持病なき人もすくなからず候へば、平日の養生に超べき儀有レ之まじきや、勿論少々の外邪抔は沐浴いたさず、魚肉を禁、冷なる物を食せず、粥等暖きものか、又は惡寒ある時は衣服多く着し、食事あたゝかにして發表いだし候へば、是以少々の邪氣は拂ひ申べきものか、尤服藥いたし候とも的中の藥は早速に驗これあるものに候間、相應不相應を自分と考く一兩日も服藥いたし、其功無レ之候はゞ申達し轉藥いたさるべく候、藥は病ひにあたりて病根を治し候ゆへ藥と號け候、然るに病症に不レ應して敵對候時は、毒と變じて生涯身の內に於て災をなし、病ひ增長して却て持病となり候、勿論服藥には好嫌在レ之ものにて、藥好なる人は未病の發らざる用心の爲とて服藥いたす抔と申人も儘有レ之候へども、必病ひの氣無レ之節麁相に服藥すべき物にては無レ之、相煩候砌は良醫を撰んで服藥頂戴すべき事に候、偖又針鍼は急難を救ふものに候へ共、日數を打候時は內に冷を催し、又は氣を減し候ものゆへ、針治請候節は其考あるべき事に候、將又灸治は內に陽をまし候ものゆへ、折々いたし候時は風寒暑濕を退け候間、四季に懈怠いたされまじく候、然れ共熱等有レ之か、氣分勝れざる節は忌べきよしに候、是迄數多見聞いたし候處醫案の違ひ是あるや、亦は藥力の及ざるや、夭なるかな命なるや、命を縮めし人も頗有レ之、誠に定まれる壽齡とは申ながら哀に殘り多、畢竟は我身の大切なるに任せ斯のごとくの愚案をも認候へども、讀人の意にまかせらるべき事に候

一　孟子離婁章句の下に大人は其赤子の心を失はざる者なりと申事の候は、先大人とは形體の大ひなる人をさして申儀には無レ之、貴人高位の御方にも限らず、假令匹夫下賤の人たりとも、心の明らかなる仁を大人とも君子とも申、又意の暗らきとは如何様の事かと申せば、第一我體は我物と心得、物の理に明らかならずして式法を守らず、强欲に耽りて身に備はらざる財寶を望み、分限に應ぜざる衣食をこのみ、非道を以人を苦しめ情をしらず、適々善心かと思へば頓て惡心と變りてうらみをなし惡事抔、みなこれ意の暗らきより發り申事に候、又心の明らかなるとは如何成事ぞと存候得ば、我體は父母の赤白の淫より出生いたすとのみ存じ候處、人は天が下の靈物と申て、天より命ぜられて母の胎内に授りたる身なれば、此體は我ものにして我物にあらざる事を明らめ、萬事天命に任せ五常の道を守り、富貴を羨まず貧賤を恐れず、古人の言葉のごとく疏食を喰らひ、水を飲、肘を枕とし、樂其中に有といふ心を以て足る事を知りて今日を送り、邪見放逸の志なく一切の諸人を兄弟のごとくに思ひて、滿たるは及ばざるの理を辨へ、何事によらず中庸を用ひ候こそ、誠に心の明らかなる所より出候行状にて、君子は必其獨を愼と申べく候、扨又赤子のこゝろと申は生れ子の心と申事に候、然るに我々母の胎内より出生いたし候砌、見事なる衣服等御着せ被レ下候得共、美しきとて悦び候念もなく、赤體襁褓に包まれ候ても汚穢と思ふ念もなく、炎暑の節も暑とも存ぜず、嚴寒の折からも寒とも思はず、母の懐に抱かれ居ながらも、我母ゆへ覺知るべきといふ念も發らず、假令火の中水の中へ投込れ候迚も命を惜

む念もなく、空腹なれば其縁に催されて泣出すのみにして、乳房を銜(くゝめ)られ候へば、充滿いたす迄乳味を飲といへども、甘き辛きの差別もなく、吞仕舞候へば眠氣來れば寐、眼覺れば起、或は琴三味線笛太鼓などの音を聞ても、始て音の聞へ候までにて面白きといふ念もなく、唯腹ふくれ居候へば機嫌よくして外に餘念は無之所、段々期月相立成長いたすに隨ひ種々の念發りて、美を好み麁を嫌らひ、善を撰惡を捨るとは申ながら、日々夜々に思ふ事爲す事貪欲の意より考へ候業ゆへ、善事惡にあらずといふことなく候へども、年々の劫に濁りこゝろ暗くなり居り、我惡舗と申事は見へ無候ゆへ、邂逅に他の人より我惡敷よし被申候得ば、いはれなき事にても申ごとく思ひて怒腹立、我越度なきよしを申開いたし候は、全我身に愛着いたし居り、我のみ善ものと心得居候ゆへの事なれば、是を我慢の人と號け候、去るに依て我身に差たる善事も是なきに、他の人より能と譽られ候へば心嬉しく歡び候は、我惡の見へざるしるしに候、元來褒らるは貶るゝの基ひにて、過たるは及ざるの道理ゆへ、古人も仁を譽るは言葉の下に科有と被申候、斯のごとく人欲の私にひかれ我を募居候に付、天の命なる事をも存じ出さず候ゆへ、大人は赤子の心を失はずとこそ被仰候得ば、生れ子に念と申ものこれなき間、念のなき處には我といふものはなく候、我なき時は此儘天が下の靈に候ゆへ、一切天命なる事を明らめ、商人は商内に打入り、奉公人は御奉公に精を出し、餘へ心を散らさずして我身に執着の念なく候はゞ、是を赤子の心とも、又は君子の行狀とも申べきや、然れども心明らか成とは聖賢のうへの御事にて、我等ごときの

愚人として及ぶべきとも存じられず候へども、狂人の真似とて髪を亂し大道を走り歩行時は、即狂人也、出家の真似とて剃髪染衣する時は、是又出家ならん、されば聖賢の道とても其真似いたす時至らば、則大人とも申べきかと存じ候

一 世に因果と申事は、我身に悪敷事の出来り候を因果とのみ心得居候へども、世の中の有様因果にはづれ候事一ッとして是なく、生因といふはたねの儀、果といふはこのみと申事にて、譬て申さば菜大根の種なども土に蒔候を因と申、程なく二葉を出し候は其縁に引るゝ處ゆへ、是因果と申、夫より葉となり大根と生じ候を果の開と申て因果連續の所に候、依之日輪の東天より出たまふは因にして、西天に入玉ふを果と申、又春毎に花の咲は因にして、頓て散るは果なり、我々迚も生るゝといふ因によつて遅速異なれ共、終に死するといふ果あり、尤無常迅速の使は時を待ず老少を撰ばざれば、若年の人たりとも死せずといふ事なく、亦百歳の形體を保つ人も稀也、然ば何をいつとも期しがたき儀は我々が命ゆへ、善因これなく候はゞ後世に至り善果の開と申事もはかり難く候へども、悪を懲し善に進みて慈悲の心を本といたし可申事と存候、勿論今日のうへ迚も御奉公に精も入らず、或は不法の勤方いたし候因是ある時は無據御暇被仰付候ゆへ、其身も難澁いたし候悪果開き候、然るを御奉公に出精いたし候因果有時は、其因縁を以て年々御褒美下し置れ、年數の功に隨ひて別宅等結構に仰付られ候ゆへ、其善果ひらけ候と申儀には有之間敷哉、さすれば善因には善果開き、悪因には悪果來り候道

理を分別被レ致候て、大學の教のごとく意誠有時は其志正しく、其こゝろ正しき時は其身修り、その身修る時は其家齊ふことと疑ひ有間鋪候へば、只々實心を以被ニ相務一候事肝要と存じ候

一　商家に於て商内神と尊敬し恵美須を祭る事、其譯も心得候て神の御心にも叶ひ候やうにいたさば速に感應も有レ之、商内も繁昌いたし家も富榮可レ申由承及候、勿論蛭子の神と申とは異にして、恵美須の神と唱へ申は岩に打乘り釣竿を垂れ、終日魚のかゝるを樂しみ飽玉ふ事なきゆへに、商ひ神と祝ひ候よし、其ごとくまづ商人の見世には則岩の上に等しく、譜代呂物は釣竿に譬へ、日毎に御買人のかかるを相待、己々が商賣に飽事なく餘念をとゞめ、一向家業に打入り候を商ひとは申候、然るを商人の家に住ながら商内の道に疎きゆへ、自然と精も入らず、或は御買人の御出之節とても尻輕にもなく、餘事に意を奪れ先様への御挨拶も身に染ず、假令賣逃し候て商内高減じたりとも、左のみ驚く氣色もなくして、只朝夕神前に向ひ商内繁昌を祈たり迚も、いかなる神か守り玉ふべきや、去るに依て「心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとても神や守らん」との御神詠も候へば、此理りを感じ日々釣を垂候心持を忘れず、商賣に打入り居候時は、神慮にも相叶ひ榮久の相續いたすべき事に候、偖又恵美須講と申儀もこの神を祭り祝ふとのやうに存知、既に其の日にも至りぬれば意を放蕩に持候ても、祝ひ日なれば苦しからざる様に心得たる族も有間鋪とも存じられず、是おほきなる僻事かと存候、先恵美須講に限らず、總じて神を祭り祝ふことは知恩報德のためと承り候、其謂は都て天地の間に顯れ出玉ふ神と奉

るは、陰陽二柱の御神の末にして、我々を守護し玉ふゆへに、商内神は商賣繁昌を守らしめ玉ふ、此御影に依て家内大勢相續いたし候に付、則冥加を存ずる爲に恵比須講と號けて御神酒供物を備へ、或は一家親類知縁を招き迎ひて饗應いたし候も、其恩徳を謝す事に候へば、いかにも心の慎み肝要といたし、人身の大切なる儀を忘れず、飲食等も程を存じ、家内規を亂さずして相睦克和ひ申べき事かと存候、然る時は神も納受ましまして、彌家内安全の基たるべきことゝ奉り候

一　鶏を飼ふは曉を知らんがため、犬を飼ふは門戸を守らせ盗賊の患を除かんが爲なり、されば人の子としては孝行を勤、人の臣としては忠義を勵むを以て人禽をわかたる所の役目とす、然るに人として忠孝の道も知らずしては、鶏の曉を告ず犬の門戸を守らざるよりもおとれるかと存られ候、勿論人は萬物の長たるゆへに敎を用ひ候間、君臣父子兄弟の道ある事を辨へ、我等ことの意味も篤々實情を離す志も發り、身も修り家も齊ふ事に候へば、人は唯道を知れる人に常より依て、其教のごとく學び候を專要に存じ候、然れども意の僻める人は善人をば窮屈と思ひむつかしきとて嫌ひ、又浮世の戯談或ひは遊興の噺などいたす、悪き人をば己が氣に叶ひたるに任せ聖賢のごとくに存じ親しみ、終に我身までも亡す事も有之ものに候ゆへ、假令己を導引人是あるとても其教の善悪邪正を辨いたし、我身の始末よろしき方に基き、意を誠にいたし人たる道に叶ひ候樣に心掛度事と存候

一　人毎に我愚なると存ずることはなく、己ほど利根發明なるものは是なきやうに存居候處、上代の

人に競れば氣根も衰へ才智も至て劣り候かと被レ存候、勿論當代とても上根上智の人も稀にはこれあるべく候へども、往昔の人は智惠も秀、根氣も勝れたる證據には、年來古鹿老猿の住馴し深山を踏み平げ、舊松古杉を伐ひらき靈物靈社を造立し、或は放逸邪見の田夫野人を教導き、今においても古跡靈地を殘し玉ふ、考ふれば豈おとりたりと申べきや、其外昔噺を始小道具器物類とても、古代を慕ひ流事見聞する處なれば、いづれ古來より傳はる事は捨がたく候、さるに依て醫藥の法なども作意を加へず、灸點等も古人よりいたし來るを用ひ候時は、過これなきよし承り及び候、然れば御先代より御定在レ之所の御掟等、淺才の分際を以て差綺ふべき筋にあらず、されば御家法之儀は御建方を亂さず、萬事先規よりの仕來りを相守り、聊我意の新法をまじへざるにおゐては、家も修り長久の榮いたすべき事と存候

一　國を治家を修るも其理は一にして、更に隔はこれなきよし、古人も御教有レ之といへども其行ふ事殆易からず、然れども身を修るを本とするよし承り及び候へば、聊も人に指揮ふ筋是あるまじく、都て人を賴にいたし候ゆへ我意を募り、或は怒りあるひは恨候得ども、只々己を愼み居候時は恨むべき人もなく怒るべき日當も是なき筈に候、されば我々ごときの下民たりとも一家の司となり候時は、己より以下の人をば一子のごとく憐み、萬事不足の思ひに任せざるやうに勞り遣し、心に悅を懷候やうに仕向候時は、仁德に伏せずといふ事是あるまじく、さすれば自然と家も修り可レ申よしに候、既に往昔仁德天皇と申奉る聖王は、一天の御主ながらも皇居は零落して雨漏といへども叡慮にもかけさせら

れず、御衣を始供御に至る迄も儉素なるを厭はせ玉はず、只々萬民を撫恵せたまふ、難有も下の貧しきを叡覧まし〳〵て三年の貢を御ゆるしあらせられしゆへ、民百姓は喜悦の眉を披らき御代も豊に國も治りければ、天も感應ありて里に生ずる處の五穀を始萬物豊作して原野に充満し、海より揚る所の魚肉は國際に山をなして、誠に八島の外までも立波もなく、大君の御恩を尊敬し奉らざるはこれなきよし承り傳へ候、是全人は一箇の小天地なれば人歡べば天も歡び、人怒れば天も怒るのためしにて、世の吉凶は人の上にあるべき事に存られ候、則天に口なし人をもつて言わしむるとの儀、豈違ふ所あるまじくや、然ば家を治る道とてもいさゝか是に替る事なく、己を約にして我より以下の人に萬事苦患の出來申さぬやうに世話いたし遣し、下の悦びを我が樂といたし候志深く候時は、自ら家も修り申へきや、斯のごとく身修り家齊ひ候時は天の冥慮に相叶ひ、自然と家業も繁榮いたし相續恙なかるべき事に候、是則五穀豊熟して萬民太平を壽ぐも同前たるべきかと存候、然時は後輩の人は身を労し心を苦しめ候儀もなく、今日を滞なく相務候事前輩の人の取計ひ宜ゆへと、其恩を存じ敬ひの心を發し疎略之儀夢々是あるまじく、上下安託て今日の御恩を存るゆへに我身も修る事と覺候間、是等の處に意得違ひ是なきやうにいたし度物に候

一　萬の事に不足など申出す時は際限のなきものにて候、いまだ時節の至らざるを待ずして己が勝手あしきより發るか、或は身分に應ぜざる望を遂せんと思ふ邪欲より起すか、いづれ是事を知らざるゆへ

と覺候、勿論足事を知れと申教は古より傳り是あるといへども、其意味を存ぜず候ゆへ自己が身贔屓に引れて、折には不足の意も發り亦は人を恨みなどいたし候へば、美しく其理を辨へて惡念を退け候樣にいたし度候、偖足る事を知るとはいかやうの六ヶ舖事かと存候處、只今日の御恩を存じ候と思ひ取候までと承り候、尤四恩を始衣食住の理り前篇にも豫認置候得共、今日の勤方とは事替り候樣に存られ候人も是あるべきや、總じて今日の行狀は天地と一體に候得共、人欲の私に引れ不足の思ひに住し、天地と我と懸隔の間をなし、今日の御恩の廣大なる事をも存出さず候ゆへ、足事を知る道理をも忘却致候、されば天地の御惠みかたを申さば、山川海陸の萬物は事繁きゆへ省略いたし候得共、まづ野さい等の品にて總に其あらましを認るに、春の陽氣兆時は蕗の薹・芹・土筆・獨活・蕨の類を始として生出次第に暖氣重り候へば、三月大根・美津菜・芹・菠薐草・蓮の若根など出候内に夏の陽氣惠み來り笋・茄子・胡瓜・淺瓜の類生出て、忽著も盛んに成、小角豆・茗荷の子・眞桑瓜など出候かと存候處、既に秋の陰氣催し西瓜・冬瓜・隱元豆・芋莖(ずいき)の類も出、漸々冷氣に至る頃初茸・松茸・椎茸・松露など生出て、彌冬の陰氣强くなり候へば菘菜・蕪菜・大根・葱の類ひ生出候を考見候に、四時之運行少しも御油斷無レ之事と存られ候、さすれば此御恩の程を思惟いたし候時は、是にて事足り申べき儀と承り候、然るに貧乏の身を富貴とならん事を願ふか、乃至不相應の望みを叶へんと思ふかの類ひ、時節の至らざるを辨ずして足事を知らざるがいたす所故、譬ば秋の旬に菫・蒲公・萓・杉菜等を好み、春の旬に桃・林檎・柹・蒲萄

などを望がごとくなれば、所謂契ふべき儀とも存られず、畢竟は天命を恐ざるの備と覺候、然れば今日の勤方迄も足事を知り、衣食住の三ッを御惠み被ㇾ下候事を難ㇾ有存じ、餘念をとゞめ日々を大切に送り候におゐては、心を穩にして君子は其位に素して行ふといふ道理にも叶ひ、願はずして天の幸をも蒙り可ㇾ申事存候

一　人としては天命と申事を知るべきよし、古人も仰置れ候へば、いかにも心掛べき儀と存じ候、勿論天命の事は筆紙にも書顯しがた　、古人も言葉の下に科有とも御戒有ㇾ之候へば、一己〳〵に於て感得いたすべきよし承りおよび候、然ども其大略を相認候間此意味を以て疾と勘辨いたされ、聊も人欲の私を以て取計ひ致されまじく、先天地わかれしより已來春夏秋冬と移り變りゆくありさまは是天命なれば、假令博學多才の人たりとも夏を寒く轉じ、冬を暖に變へ候事は出來いたすまじく候、しかれば其内に孕れたる月々日々の千變萬化は皆天命の成業にして、折にふれ時に隨ひては悦も來り悲も來り、或は不慮の災難にも逢ひ思ひ寄らざる福をも儲け、或は計られずも病患をも受、九死一生と覺悟せしも全快にも趣、或は兼て企て置て十が九ッまで手に入たると思ひしも破談におよび、又は此事成就いたしては我勝手宜しからずと存たる儀も叶ひ、其外今日の行業は皆天命にして私の力にあらず、去るに依て智惠才能是ある迄も富貴の身ともならず、假令巣鏡なりといへども貧賤にも落ず、假令金銀藏に充滿たりとも、盡る期有ㇾ之時は減却せずといふ事もなく、又一錢の手當もなく一衣の貯へ是なき迄

も、餓死したるといふ人も稀なり、或は近きまで細布にまとひ大勢に冊かれたる人も、頓て貧しき姿となり變り、此比迄賤しき匹夫と見へし人も、忽高祿に登りて人の頭をふまへたるも是有は、皆天命とも申べきや、併ながらかやうの盛衰是あるにつけ、彌我身の愼肝要と存じ候、其譯は士農工商に至るまで己に具たる勤を疎にせず、萬事正直を本として慈悲の心を專らにいたし、身の奢りを省き足る事を知り、日々天地の御育を蒙り居り候儀をありがたく存じ、今日を大切に心得暮し行候時は天の道に叶ひ候間、自然と家も齊身も脩り申べきやと存じ候、然るに我意を恣にして今日の務を怠り家業に貧も入れず、意邪にて萬事に驕を究、我身の分限を知らず、美食に倦事なくしていつも不足の思ひに住し、天地の御恵みを忘却いたし候時は、家も治らずして身にも苦患等おほかるべき事と存候、是等は皆天命を知らざる所より發り候邪疑と申ものに候、都て天命を知らざる人は天命を恐れざるゆへ、天命に背き候働いたし候に付、身を亡し家をも滅却いたさせ候間、能々思慮いたさるべく候、死生命有富貴天に有と申事も、此内を出ざる儀と覺え候

一 中庸と申は隻(かたく)よらず片よらぬとの事にて、心の愼かたを眞直にいたし候を申由、然れども只一筋に眞中を行はんと存じ候も、最早片寄の心持ゆへ臨機應變に從ひ、己が方を愼候を中庸とも大道とも申由承り候、譬て申さば往還の眞中を步まんと存じ、少しも片寄らぬやうに參候處、折節溜水など是ある時は、是非片寄て道の宜方を廻り候を中庸と申かし、されば我慢偏執の人は溜り水も厭はず飛越んと

存じ候ゆへ、思ひの外足をも穢し申事もこれあるものにて候、其外眞中のみ歩行んと存じ候時は、御大名方の御供先をも破、或は車など引掛來り候事有之ゆへ、いかやうの過を受間舗とも申されず、是皆此方の愼み是なきより出來候、既に世の人の意を推量いたすに、溜水のごとく濁りたる意の人も是あり、是に近寄ときは墨に交れば黑くなるの理りゆへ、我意までも濁る間舗とも申されず、又御大名方の御供備のごとく、律儀正統にて見識高き人も有、或は車を引出すごとく理不盡に無法なる儀をも申出す人もこれあり候間、此理を以て能々勘辨いたされべく候、何れに氣隨我儘の取計ひいたし候事は、中庸の理に叶ひがたく意の片寄居候失と存られ候ゆへ、天之災をも招き申べき事の樣に存じ候へば、何事によらず心の愼み肝要と存候

一　人は五尺の境界を以て體となし形の内へ此體を入置れ候ゆへ、則心も廣くして此身に愛執し玉ふ事も無之よし承りおよび候、譬へて申さば今日の住家のごとく我身を家に住と、又我身へ家を入置との違ひにて、先家を我體に入置時は、いかやうの不自由なる住居にても、起て半疊寐て一疊と足事を知り、寒風暑温を凌ぎ雨露に濡れざるために、天よりして我々へ御授の住家なりと御恩を存知候時は、いかにも心廣體胖かに候へ共、家に我體を入置時は手狹なるにまかせても色々の不足發り、不勝手なるにつけても他の家を羨むも同前にて、惣じて此體に泥み居候時は種々の惡念萌し、あるひは金銀貪る意も發り、或は衣服を飾る意もおこり、或は美酒厚味を好む心も發り、或は女犯の意も發り、其外

分限に應ぜざる不足抔申出す意も起り候へ共、形を離れ見候時は外に執着いたすべきものも是なく、畢竟は方寸の家を出ずして我體におぼれ居り候身贔屓ゆへの事と存じ候、然に此體を心の内へ入置とはいかやうなる心持と存候處、本我本心と申ものは天地と同體なる故に始もなく終りもなくして天地之間にてはこれを一理と號、人身にありては性といひ、靈明なる物にして水にも溺れず火にも燒ず刃物にても切れず、しかも一切の善本德本たるによつて、古人も性は善なりと被レ仰たり、最伸廣がる時は大千世界にも滿る、ゆへに聖人は其心を虚にすとも宣ひし、されば本無形無色なるものゆへに明了する事あたはずして、假りに顯れたる此依體に執着し本心を取失ひ候間、此理をあきらめて惡を退け善に歸し、己を忘れたるを則性に率ふとは申よし、是を天の道と稱へ候、ゆへに道は須臾も離れまじく、はなるべきは道にあらずとの御教にて、是則心の内へ體を理め置の道理と承り候、斯のごとき趣を外典には古への明德を明らかにするとも仰られ、内典には心の外に別の法なしとも導き是あるよしに候へば、能々會得いたすべき事と存じ候

一　つくづくと人身の大切なる事を感得いたす暇もなく候ゆへ、日々夜々の行狀おのづから不身持にて、飲食を恣にして色欲に溺れ名聞に沈み財寶に意を苦しめ、暫時も身を養ひ心を安ずる處の行ひもしらず、猛き河の流るゝごとくに空しく命の縮まるをも存ぜざるは、我ながらも愚なるかと存候得ども、たゞ今にも火災水難等に逢ひ命危く候時は、假令金銀財寶衣服の類眼の前に充滿これある迚も振

捨置、我身を退れ出候を考見候へば、強に人身の大切なる儀を存ぜざるにても是なく、併ながら其際ばかりにて平日其心掛とてはなく候へば、何卒稀に請難き人身を得たる事を存じ、我身程大切なるものは、是なきと思ひ定候においては、聊も無益に悪行の積る事は仕出し申さず、人に後指などさゝれ候儀は致さゞる筈と存候、勿論我身大切と存候時は、則人の身迄も逆ふ所なく候ゆへ、譬へ家来下人に至る迄も萬事に身を麁末にいたさゞるやうに気配り致遣し、心を労せざる様にいたわり遣はし候こそ、人身の大切なる儀をぞんじたるとや可申、然れ共一己〱に具はりたる得分と申もの有之、無智愚鈍なるもあり、又は利根発明なるも是あるゆへ、自から依怙の沙汰も出来申ものに候間、是等の用心肝要と存じ候、又は貧福とても同事にて、律儀正直なる人迚も因縁によりて天よりの備り薄く候へば、貧福相成間敷とも申されず候ゆへ、敢て是を侮り譏る事是有まじく、既に今川家の制詞にも、正路にして衰ふるを憚らずべからずとも禁是有、惣て他の人を譏るもの是ありとも我は執成いたし、或は悟もの有之候共書解き遣し候こそ、人身の大切なる儀を心得たるとも申べけれ、此理を辨へずしては、無理非道の取計ひも出来申まじきとも存じられず、畢竟は父母の御恩を以て不思議に此人身を受得たる事を難有思ひ、我體は父母より預り奉りし大切なる寶物と存じ、日夜朝暮忘却いたさゞるやうに心掛たき事と存候

一　過行し跡を振かへり見るに誠に夢のごとく、今に於てとゞまるものとては一ツもなく候得ども、

來方の行狀をおぼろ〳〵勘辨するに、我等ほど無智無才なるものはなきかと存候、斯は申せども眞實に我意より無智なりと落居いたさゞるにより、唯今にもあれ他の人より愚なる者など申され候時は忿憤りをなし候は、全我は賢きものと未心得居候と存候、然かはあれど此人身にいか程德具り是あるものや其意味をも存ぜず、又眼にはいかやうなる德の籠りたると申事も知れず、耳には何程の德を請得たるといふ事をも辨へず、又我心の在所をもしらざれば色形は猶以て相分らず、かくのごとく我一體の事すら存ぜずして何とて賢きとや申べき、是則愚なる證據かと存候、然ば此人身の始中終を存ぜざるは愚の至りなれば、何卒して考へ知らんと存じ一生涯樹下石上の思をなし、心を碎き身を勞したればとて、我々ごときの下根最劣の愚人は、水に浮る月をとらんと思ふごとくなれば、中々思ひも絕たる事と存じ候、既に幼稚より剃髮染衣の身となり、或は勤學持戒の行人となり、日夜肝膽を摧といへども此道理を明らむる人稀にして、古へより大悟高才の聖賢多からざれば、況や無學無才の我等に於てをや、假令又不思議の因緣を以て此一體の生起本末を能々存たる仁に逢奉り、此理を聞信いたす事稀に是ある迚も、己が身に非れば我智の發したると存じ候は誤りかと存られ候、さればどこまでも我は愚なる者と心得、其恩を仰尊いたし己を謙り候におゐては、今日の道にも相叶可レ申かと存じ候

一　今の世にも智惠の秀たるほど賴母舖ものはなく候得共、古への聖賢は智惠を捨て愚にかへり玉ひし由承り及び候、いかにも智惠明らかに達し候はゞ愚になり申さねば、己を押擧(たかぶり)天命にも背き申べ

も見向もせずして走りぬ、右之樣子を見たる人其後彼人に問けるは、あのごとく打擲に逢ひながら腹もたてず、莞爾として迯給ふはいかなる譯ぞと尋ければ、さればとよ打るゝうちは腹も立ども打れ仕舞ば立腹もなし、元來腹を立るゆへに打れもすれ、立腹やめは打事も止ものなりと答られけるよし、是等は眞の愚にかへられたるとや申べきか、ある歌に

愚さを知らんとてこそ學なれ　賢かれとはたが敎へけん

此歌の意を考ふれば學文は愚かに返らんがために心掛候ものと存られ候、勿論學文と申せばとて四書五經等を學ぶにも限らず、我一體を明らむるを學德の至るとも申べきと承り候

一　不束に勤仕のいとま〳〵書つゞくりし卷々、旣に本末究竟と連續いたすといへども、無學文盲の俗物ゆへ物の奧義をも認る事あたはず、只世渡る中のありふれし事のみ書記し置、倩これを閲するに皆人の知れる事ばかりゆへ、無益の隙を費せし事と僻める意よりして我ながら嘲りの志も發候得共、疾々立歸りて思ふに、都て人は知れたる事とまでは口にては言ならぶれども、又行ふ人も稀なるかと我不行跡に引競べ斯は存られ候得ば、責ては其中にも知れたる事を行はんと思ふ心の附れ候便りにもならんかと聞取、法門の端々そこはかとなく書顯し候、勿論鹽辛物を多く食する時は大かたは咽かわき、或は輿に乘じ夜深く酒など過すときは、果して翌日氣分快からずと申事は皆知れたる事に候へども、折には右の患を招き候人もあるまじきとも申されず候ゆへ、人の誹謗をもいとはず其知れたる事

を罪告來候、されば月日に關守居されば夜明れば日暮るとは知ながら、長き日にくれ遲きを待兼、今日の今の日又逢ふ事はならぬとは知りつゝ、一日を惜むこゝろなくして徒に送り、又御主君樣へ忠義を勵候得ば、天の冥慮に預り我行末とても宜とは心得ながら、左のみ忠節の勵へも是なく、又父母へは孝行をいたすべきものとは覺へながら、御兩親の仰に違はずして秀たる孝道も盡さず、又日々天地萬物の御撫育を蒙り居候とは心附ながら、一日に一度も廣大之御恩なるやと存じ出す事もすくなく、又家業は己が命を養ふ因と存じながら御買物に御出被レ下候御恩をも思はず、又おのれが分限を辨へ身に應ぜざる望を省べきとは覺悟いたしながら人の上を恨み、やゝもすれば衣食等迄も奢りをきはむる意もおこり、亦陰德を施す時はかならず陽報の來るとは承りながら善心を保つ志も薄く、天の照覽を知らずして惡念を兆し、我身に報いの來る事を恐れず、また生れしものは稚も若きも死ぬるものとは聞ながら、短命なるを見ては驚けども後の世の事心に掛ず、法の道尋ぬる志も疎きは、皆知れたる事を知らざるに異ならんか、既にある人の仰に聞て思はざるは聞ざるがごとく、思ふても行はざるは思はざるが如しと承りしも、今我身の上に思ひ出られ候、畢竟は知れたる事を知らぬ體にて過行こそ、恥かしき事かと被レ存候

獨慎俗話 終

宮崎幸麿
小西武治
校

大正四年十月九日印刷
大正四年十月十二日發行

日本經濟叢書
卷十七
非賣品

編者　瀧本誠一
發行者　佐藤卯兵衛
東京市神田區駿河臺鈴木町拾六番地
印刷者　中田福三郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所
東京神田區駿河臺鈴木町拾六番地
日本經濟叢書刊行會
電話本局三一八五番
振替口座東京二六八一〇番

理事
高木龜之丞
佐藤卯兵衛

CONTENTS

of the seventeeth volume

BIBLIOTHECA
JAPONICA
ŒCONOMIÆ POLITICÆ

VOL. XVII

TŌKIŌ
NIHON KEIZAI SŌSHO
KANKŌKWAI

1915.

BIBLIOTHECA
JAPONICA
ŒCONOMIÆ POLITICÆ

VOL. XVII

TŌKIŌ
NIHON KEIZAI SŌSHO
KANKŌKWAI

1915.